京都市内遺跡発掘調査報告　平成二十五年度

# 京都市内遺跡発掘調査報告

平成25年度

2014年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

二〇一四　京都市文化市民局

# 京都市内遺跡発掘調査報告

平成25年度

2014年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

第２面竪穴建物群全景（東から）

巻頭図版２　方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡　遺構

調査区全景

１トレンチ全景（北西から）

巻頭図版４　寺戸大塚古墳　遺構

１　９次調査１トレンチ全景（西から）

２　８次調査１トレンチ全景（西から）

３　10次調査全景（南から）

# ご　あ　い　さ　つ

京都市は，平安京建都以来，永い歴史の中で生み育てられてきた華麗かつ繊細な文化を今に伝える，世界でも有数の文化都市であります。

市内には数多くの文化財が存在し，埋蔵文化財包蔵地も市街化区域の４割を超える地域に広く分布しています。古代から近世にわたる永い歴史の中で幾層にも積み重なった遺跡は，我が国の歴史や文化を正しく理解するうえで欠かすことのできない国民共有の財産です。

本市では，先人が残した貴重な埋蔵文化財を適切に，後世に伝える責務を果たすべく，埋蔵文化財の保存と保護，更にはその活用に取り組んでおります。

この度，平成25年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成致しました。この報告書が，京都の歴史と文化財への理解を深めるために，広く御活用いただければ幸いに存じます。

結びに，各調査の実施に当たって，御理解，御協力を賜りました市民の皆様と，御指導を賜りました関係機関の皆様に深く御礼を申し上げます。

平成２６年３月

京都市文化市民局文化芸術担当局長

奥　　美　里

# 例　　言

1　本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成25年度の京都市内発掘調査報告書である。発掘調査は、京都市が公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した。なお、本書では平成25年１月から12月までに実施した発掘調査成果を報告する。また、平成24年に実施した寺戸大塚古墳の発掘調査成果もあわせて報告する。

2　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。

Ⅰ　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡（文化財保護課番号　12Ｋ612）
京都市上京区千本通下立売下る小山町908－51
2013年４月１日～４月19日　　66㎡　　西森正晃（京都市文化財保護課）

Ⅱ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（文化財保護課番号　13Ｋ296）
京都市中京区聚楽廻南町41－２
2013年９月17日～９月25日　　35㎡　　高橋　潔

Ⅲ　平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡（文化財保護課番号　12Ｋ577）
京都市上京区御前通下立売上る二丁目仲之町294
2013年５月20日～５月31日　　51㎡　　津々池惣一・奥井智子（京都市文化財保護課）

Ⅳ　平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡（文化財保護課番号　12Ｈ022）
京都市右京区西院月双町88－１
2013年１月18日～３月19日　　252㎡　　柏田有香

Ⅴ　平安京右京九条一坊十二町・西寺跡（文化財保護課番号　13Ｈ288）
京都市南区唐橋花園町９－８、９－９、９－11
2013年11月18日～12月10日　　114㎡　　東　洋一

Ⅵ　中臣遺跡・中臣十三塚（文化財保護課番号　13Ｎ363）
京都市山科区西野山中臣町71－37
2013年10月１日～10月10日　　30㎡　　東　洋一

Ⅶ　岩倉中在地遺跡（文化財保護課番号　13Ｓ281）
京都市左京区岩倉中在地町12、12－７
2013年11月６日～11月28日　　264㎡　　津々池惣一

Ⅷ　方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡
京都市東山区茶屋町地内
2013年10月１日～11月21日　　237㎡　　南　孝雄

Ⅸ　山科本願寺跡・左義長町遺跡（文化財保護課番号　13Ｓ247）
京都市山科区東野舞台町20、20－４
2013年10月28日～11月25日　　150㎡　　近藤奈央

Ⅹ　山科本願寺南殿跡

京都市科区音羽伊勢宿町26－３

2013年９月24日～10月31日　　143㎡　　布川豊治

Ⅺ　寺戸大塚古墳

京都市西京区大枝南福西町２丁目

2012年７月30日～10月５日　　240㎡　　南　孝雄・宇野隆志（京都市文化財保護課）

なお、文化財保護課番号とは、「文化財保護法」第93・94条および125条にかかる申請に対して文化財保護課が付す受理固有番号のことである。

3　本書の執筆分担は、下記のとおりである。

Ⅰ　西森正晃（京都市文化財保護課）

Ⅱ　高橋　潔

Ⅲ　津々池惣一

Ⅳ　柏田有香

Ⅴ　東　洋一

Ⅵ　東　洋一

Ⅶ　津々池惣一

Ⅷ　南　孝雄

Ⅸ　近藤奈央

Ⅹ　布川豊治

Ⅺ　南　孝雄・宇野隆志（京都市文化財保護課）

4　本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也が担当し、遺構の一部は調査担当者が行った。

5　本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

6　本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。

7　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「聚楽廻」「花園」「西京極」「中河原」「梅小路」「今熊野」「山科」「稲荷山」「勧修寺」「村松」「五条大橋」「中山」「川島」「石見」「寺戸」「粟生」「向日町」を調整したものである。

8　本書の編集は、児玉光世・山口　真が行った。

# 本　文　目　次

Ⅰ　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡

1．調査経過 …… 1

2．遺　　跡 …… 3

（1）遺跡の位置と環境 …… 3

（2）周辺の調査 …… 3

3．遺　　構 …… 6

（1）基本層序 …… 6

（2）遺構 …… 6

4．遺　　物 …… 14

（1）遺物の概要 …… 14

（2）土器類 …… 14

（3）瓦類 …… 15

（4）石製品 …… 17

5．ま と め …… 17

（1）土取穴について …… 17

（2）整地層について …… 18

Ⅱ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1．調査経過 …… 21

2．遺構・遺物 …… 23

3．ま と め …… 24

Ⅲ　平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡

1．調査経過 …… 27

2．遺　　構 …… 29

（1）平安時代前期の遺構 …… 29

（2）平安時代後期の遺構 …… 33

3．遺　　物 …… 34

（1）土器類 …… 34

（2）瓦類 …… 38

4．ま と め …… 40

Ⅳ　平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡


1．調査経過 …… 41
2．遺　　跡 …… 43
（1）遺跡の位置と環境 …… 43
（2）周辺の調査 …… 43
3．遺　　構 …… 47
（1）基本層序 …… 47
（2）第１面の遺構 …… 50
（3）第２面の遺構 …… 56
4．遺　　物 …… 70
（1）土器類 …… 70
（2）土製品 …… 75
（3）金属製品 …… 76
（4）石器 …… 76
（5）玉類 …… 77
5．ま と め …… 79
（1）遺構の変遷 …… 79
（2）造り付けカマドの構造について …… 82
6．小型鏡の分析調査 …… 84


Ⅴ　平安京右京九条一坊十二町・西寺跡


1．調査経過 …… 87
2．歴史的環境 …… 88
3．遺　　構 …… 92
4．遺　　物 …… 97
5．ま と め …… 103


Ⅵ　中臣遺跡・中臣十三塚


1．調査経過 …… 105
2．歴史的環境 …… 107
3．遺構・遺物 …… 109
4．ま と め …… 110


Ⅶ　岩倉中在地遺跡


1．調査経過 …… 113

２．歴史的環境 …… 114
３．遺　　構 …… 116
（１）基本層序 …… 116
（２）遺構 …… 116
４．遺　　物 …… 120
（１）遺物の概要 …… 120
（２）土器類 …… 120
５．ま と め …… 122

Ⅷ　方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡
１．調査経過 …… 123
２．方広寺の歴史と既往の調査 …… 125
（１）方広寺の歴史 …… 125
（２）既往の調査 …… 126
３．遺　　構 …… 128
（１）１・２区 …… 128
（２）３区 …… 138
（３）４区 …… 138
４．遺　　物 …… 141
（１）土器類 …… 141
（２）瓦類 …… 142
（３）銭貨 …… 143
５．まとめ …… 144

Ⅸ　山科本願寺跡・左義長町遺跡
１．調査経過 …… 153
２．遺　　跡 …… 155
（１）立地と歴史的環境 …… 155
（２）周辺の調査 …… 156
３．遺　　構 …… 161
（１）遺構の概要 …… 161
（２）基本層序 …… 163
（３）平安時代前期末から中期初頭の遺構 …… 164
（４）平安時代中期末から後期前半の遺構 …… 166
４．遺　　物 …… 175

（1）遺物の概要 …… 175
（2）土器類 …… 175
（3）土製品 …… 183
（4）石製品 …… 183
（5）鉄製品 …… 184
5．ま と め …… 187

X　山科本願寺南殿跡
1．調査経過 …… 191
2．位置と環境 …… 192
3．遺　　構 …… 194
（1）基本層序 …… 194
（2）遺構 …… 197
4．遺　　物 …… 199
5．ま と め …… 199

XI　寺戸大塚古墳
1．寺戸大塚古墳の概要と既往の調査 …… 201
（1）古墳の立地と現状 …… 201
（2）向日丘陵古墳群と乙訓の首長墳 …… 203
（3）既往の調査 …… 204
2．調査の目的と経過 …… 207
（1）調査目的 …… 207
（2）調査経過 …… 207
3．遺　　構 …… 210
（1）１トレンチ …… 210
（2）２トレンチ …… 216
（3）３トレンチ …… 221
（4）４トレンチ …… 223
4．遺　　物 …… 225
（1）埴輪 …… 225
（2）その他の遺物 …… 232
5．総　　括 …… 233
（1）墳丘について …… 233
（2）葺石の施工方法について …… 239

（３）埴輪列について …… 241
（４）出土埴輪の検討 …… 245
（５）課題と展望 …… 255

報告書抄録 …… 261

# 図　版　目　次

巻頭図版１　平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡　遺構　第２面竪穴建物群全景（東から）
巻頭図版２　方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡　遺構　調査区全景
巻頭図版３　寺戸大塚古墳　遺構　１トレンチ全景（北西から）
巻頭図版４　寺戸大塚古墳　遺構　１　９次調査１トレンチ全景（西から）
２　８次調査１トレンチ全景（西から）
３　10次調査全景（南から）

図版１　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡　遺構　１　第１面全景（東から）
２　第２面全景（東から）
３　溝15（東から）
図版２　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡　遺構　１　第３面全景（東から）
２　第４面全景（東から）
図版３　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡　遺構　１　第５面全景（東から）
２　第５層上面整地状況（西から）
図版４　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡　遺構　１　北壁断面（土取穴27）（南東から）
２　西壁断面（土取穴29）（北東から）
図版５　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡　遺構　土取穴27と整地層（南東から）
図版６　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡　遺物　出土土器
図版７　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡　遺物　出土瓦
図版８　平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡　遺構　１　調査区全景（西から）
２　SD４検出状況、SX１築地基底部断面（北東から）
３　SD４完掘状況
図版９　平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡　遺構　１　SK５完掘状況（北東から）
２　SK13完掘状況（北東から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 図版10 | 平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡 | 遺物 | SK５出土土器 |
| 図版11 | 平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡 | 遺物 | SK５・SK13出土土器 |
| 図版12 | 平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡 | 遺物 | SK５・SD４出土瓦類 |
| 図版13 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　第１面全景（西から）<br>２　掘立柱建物３（北西から） |
| 図版14 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　掘立柱建物１柱穴48断面（西から）<br>２　掘立柱建物２柱穴55断面（北西から）<br>３　掘立柱建物３柱穴62断面（北から）<br>４　掘立柱建物３柱穴70断面（西から）<br>５　ピット23素文鏡検出状況（南西から）<br>６　ピット23・溝16断面（西南西から） |
| 図版15 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　竪穴建物88（東から）<br>２　竪穴建物88　カマド98（南東から）<br>３　竪穴建物21（南東から） |
| 図版16 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　竪穴建物80（南西から）<br>２　竪穴建物80　カマド104（南西から）<br>３　カマド104　支柱土器断面（西から） |
| 図版17 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　竪穴建物81（北から）<br>２　竪穴建物81　カマド122（南東から） |
| 図版18 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　カマド122　床面検出状況（南から）<br>２　カマド122　支柱土器断面（北西から）<br>３　竪穴建物82（南西から） |
| 図版19 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　竪穴建物115（北西から）<br>２　竪穴建物115　カマド116（奥は土坑120、北西から） |
| 図版20 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　カマド116（北東から）<br>２　カマド116　支柱石断面（北から）<br>３　カマド116　構築石材検出状況（南西から）<br>４　土坑120（東から） |
| 図版21 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺構 | １　竪穴建物142・131（南西から）<br>２　竪穴建物131　カマド144（北から） |
| 図版22 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺物 | 出土土器 |
| 図版23 | 平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡 | 遺物 | 出土土製品・鏡・石器・玉類 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 図版24 | 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡 | 遺構 | 1 | 第１面全景（北東から） |
| | | | 2 | 断割後全景（北東から） |
| 図版25 | 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡 | 遺構 | 1 | 築地（北から） |
| | | | 2 | 側溝３瓦出土状況（北東から） |
| 図版26 | 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡 | 遺構 | 1 | 落込み２瓦出土状況（東から） |
| | | | 2 | 落込み２土器出土状況（東から） |
| 図版27 | 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡 | 遺物 | 土器類・瓦類 | |
| 図版28 | 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡 | 遺物 | 瓦類・凝灰岩 | |
| 図版29 | 中臣遺跡・中臣十三塚 | 遺構 | 1 | 調査区全景（北東から） |
| | | | 2 | 「塚」１現状（北から） |
| 図版30 | 岩倉中在地遺跡 | 遺構 | 1 | 調査区全景（西から） |
| | | | 2 | 建物（東から） |
| 図版31 | 岩倉中在地遺跡 | 遺構 | 1 | 柱列１（西から） |
| | | | 2 | 柱列２（東から） |
| | | | 3 | 溝111（西から） |
| 図版32 | 方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡 | 遺構 | １・２区全景（南東から） | |
| 図版33 | 方広寺跡・六波羅政庁跡法住寺殿跡 | 遺構 | 1 | １区壷地業１（東から） |
| | | | 2 | １区壷地業３（東から） |
| 図版34 | 方広寺跡・六波羅政庁跡法住寺殿跡 | 遺構 | 1 | ２区壷地業４（南西から） |
| | | | 2 | １区壷地業１・３（東から） |
| | | | 3 | ２区壷地業２・４（東から） |
| 図版35 | 方広寺跡・六波羅政庁跡法住寺殿跡 | 遺構 | 1 | １・２区足場柱穴列１・２（北から） |
| | | | 2 | １区柱穴６・７（東から） |
| | | | 3 | １区柱穴６半裁（北から） |
| 図版36 | 方広寺跡・六波羅政庁跡法住寺殿跡 | 遺構 | 1 | ２区基壇東辺（南東から） |
| | | | 2 | ３区大仏台座（南東から） |
| | | | 3 | ４区南壁（北から） |
| 図版37 | 方広寺跡・六波羅政庁跡法住寺殿跡 | 遺構 | 1 | １区壷地業３根石矢穴（南から） |
| | | | 2 | ２区柱穴45（南西から） |
| | | | 3 | １区土坑71・72（北から） |
| | | | 4 | ２区礫敷75（東から） |
| 図版38 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 遺構 | 1 | 調査区全景（北西から） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 2　建物１全景（北から） |
| 図版39 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 遺構 | 1　土坑17遺物出土状況（北から） |
| | | | 2　調査区南西、土坑群全景（北東から） |
| | | | 3　土坑24全景（北から） |
| 図版40 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 遺構 | 1　建物１柱穴４遺物出土状況（北東から） |
| | | | 2　建物２全景（北西から） |
| | | | 3　柱穴20遺物出土状況（北東から） |
| | | | 4　流路18遺物出土状況（北から） |
| 図版41 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 遺構 | 出土土器類 |
| 図版42 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 遺構 | 出土土器類・石製品・鉄製品 |
| 図版43 | 山科本願寺南殿跡 | 遺構 | 1　１区全景（北西から） |
| | | | 2　２区全景（北から） |
| 図版44 | 寺戸大塚古墳 | 遺構 | 1　１トレンチ全景（北西から） |
| | | | 2　１トレンチ全景（西から） |
| 図版45 | 寺戸大塚古墳 | 遺構 | 1　１トレンチ葺石・埴輪列（北西から） |
| | | | 2　１トレンチ後円部葺石・11Ｈ－１付近（南から） |
| | | | 3　１トレンチ葺石断割・11Ｈ－２付近（北西から） |
| 図版46 | 寺戸大塚古墳 | 遺構 | 1　１トレンチ葺石・埴輪列・堀切（南から） |
| | | | 2　１トレンチ北西拡張部（南西から） |
| | | | 3　１トレンチ北西拡張部堀切（南西から） |
| 図版47 | 寺戸大塚古墳 | 遺構 | 1　２トレンチ全景（西から） |
| | | | 2　２トレンチ第１段平坦面（北西から） |
| | | | 3　２トレンチ墳丘裾葺石・11Ｈ－６（北西から） |
| 図版48 | 寺戸大塚古墳 | 遺構 | 1　３トレンチ転落石検出状況（西から） |
| | | | 2　３トレンチ全景（西から） |
| | | | 3　３トレンチ11Ｈ－７（西から） |
| | | | 4　３トレンチ11Ｈ－８（西から） |
| 図版49 | 寺戸大塚古墳 | 遺構 | 1　４トレンチ墳丘裾葺石・11Ｈ－９検出状況（西から） |
| | | | 2　４トレンチ前方部墳丘裾断割状況（南西から） |
| | | | 3　２～４トレンチ全景（南から） |
| 図版50 | 寺戸大塚古墳 | 遺物 | 出土埴輪 |
| 図版51 | 寺戸大塚古墳 | 遺物 | 出土埴輪 |
| 図版52 | 寺戸大塚古墳 | 遺物 | 埴輪細部 |

# 挿　図　目　次

Ⅰ　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡
図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：200）　……　2
図３　調査前全景（西から）　……　2
図４　作業風景（北東から）　……　2
図５　北壁剥ぎ取り状況（東から）　……　2
図６　埋め戻し状況　……　2
図７　周辺調査位置図（１：2,000）　……　5
図８　断面図（１：50）　……　8
図９　断面図層名　……　9
図10　第１・２面平面図（１：100）　……　10
図11　第３・４面平面図（１：100）　……　11
図12　第５・６面平面図（１：100）　……　12
図13　土取穴27遺物出土状況（北西から）　……　13
図14　出土土器実測図（１：４）　……　15
図15　出土軒瓦拓影・実測図（１：４）　……　16
図16　碁石　……　17
Ⅱ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡
図１　調査位置図（１：2,500）　……　21
図２　応天門基壇推定位置と調査区配置図（１：500）　……　22
図３　調査前全景（南西から）　……　22
図４　作業風景（南東から）　……　22
図５　調査区全景（東から）　……　22
図６　調査区実測図（１：100）　……　23
図７　応天門跡周辺調査地点図（１：1,000）　……　24
Ⅲ　平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡
図１　調査位置図（１：2,500）　……　27
図２　調査区配置図（１：500）　……　28
図３　調査前全景（南西から）　……　28
図４　作業風景（北東から）　……　28
図５　西面築地付近の調査位置図（１：4,000）　……　28
図６　遺構平面図（１：100）　……　30

図７　北壁断面図（１：50）…… 31
図８　南壁断面図（１：50）…… 32
図９　中央部断面図（１：50）…… 33
図10　SK５出土土器実測図１（１：４）…… 35
図11　SK５出土土器実測図２（１：４）…… 36
図12　SK13出土土器実測図（１：４）…… 37
図13　SK５・SD４出土瓦拓影・実測図（１：４）…… 39
Ⅳ　平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡
図１　調査地位置図（１：5,000）…… 41
図２　調査前全景（西から）…… 42
図３　作業風景 …… 42
図４　調査区配置図（１：500）…… 42
図５　周辺主要調査位置図（１：5,000）…… 44
図６　第１面平面図（１：120）…… 48
図７　南壁断面図（１：50）…… 49
図８　掘立柱建物１実測図（１：60）…… 50
図９　掘立柱建物２実測図（１：60）…… 51
図10　掘立柱建物３実測図（１：60）…… 52
図11　掘立柱建物３土色 …… 53
図12　柱列１・２実測図（１：50）…… 54
図13　溝14・15断面図（１：20）…… 55
図14　ピット23実測図（１：５、１：20）…… 55
図15　第２面平面図（１：120）…… 57
図16　竪穴建物21実測図（１：50）…… 58
図17　竪穴建物88実測図（１：50、１：20）…… 59
図18　竪穴建物80実測図（１：50、１：20）…… 60
図19　竪穴建物81実測図（１：50、１：20、１：100）…… 62
図20　竪穴建物81土色 …… 63
図21　竪穴建物82実測図（１：50）…… 63
図22　竪穴建物115実測図（１：50）…… 64
図23　カマド116実測図（１：20）…… 65
図24　竪穴建物142実測図（１：50）…… 66
図25　竪穴建物131実測図（１：50）…… 67
図26　カマド144実測図（１：20）…… 68
図27　竪穴建物152実測図（１：50）…… 69

図28　奈良時代から平安時代土器実測図（１：４）…… 71
図29　古墳時代土器実測図１（１：４）…… 73
図30　古墳時代土器実測図２（１：４）…… 74
図31　土製品実測図（１：２）…… 75
図32　素文鏡実測図（１：１）…… 76
図33　石器実測図（１：４）…… 76
図34　玉類実測図（１：１）…… 77
図35　遺構変遷図１（１：500）…… 80
図36　遺構変遷図２（１：500）…… 81
図37　カマド116・122模式図 …… 82
図38　本資料のＸ線透過写真 …… 84
図39　同　蛍光Ｘ線分析結果 …… 85
図40　（参考）常盤仲之町遺跡出土の小型海獣葡萄鏡のＸ線透過写真 …… 85
図41　同　蛍光Ｘ線分析結果 …… 86

Ⅴ　平安京右京九条一坊十二町・西寺跡

図１　調査位置図（１：5,000）…… 87
図２　調査前風景（北西から）…… 88
図３　作業風景（北から）…… 88
図４　調査区配置図（１：400）…… 88
図５　調査地および近隣の調査（１：2,500）…… 89
図６　調査区実測図（１：100）…… 93
図７　東西断割り部実測図（１：50）…… 94
図８　落込み２平面図（１：20）…… 96
図９　出土土器実測図（１：４）…… 98
図10　出土瓦拓影・実測図（１：４）…… 101

Ⅵ　中臣遺跡・中臣十三塚

図１　調査位置図（１：2,500）…… 105
図２　調査区配置図および塚地形図（１：100）…… 106
図３　調査前全景（東から）…… 106
図４　作業風景（北東から）…… 106
図５　中臣遺跡の遺構分布図（１：10,000）…… 108
図６　調査区実測図（１：80）…… 109
図７　中臣十三塚分布図（１：3,000）…… 110
図８　「塚」１北東隅土留め状況（北東から）…… 111
図９　田丸氏宅「塚」２「３号墳」現状（東から）…… 111

図10　中臣保育園内東側「塚」４（南西から）…… 111
図11　中臣保育園内西側「塚」５（北西から）…… 111
Ⅶ　岩倉中在地遺跡
図１　調査位置図（１：2,500）…… 113
図２　調査前全景（東から）…… 114
図３　作業風景（東から）…… 114
図４　調査区配置図および隣接調査地（１：1,500）…… 114
図５　周辺遺跡図（１：20,000）…… 115
図６　調査区断面図（１：100）…… 116
図７　調査区平面図（１：100）…… 117
図８　建物、土坑４・５・８実測図（１：50）…… 118
図９　柱穴列１実測図（１：60）…… 119
図10　柱穴列２実測図（１：50）…… 119
図11　溝111実測図（１：50）…… 119
図12　出土土器実測図（１：４）…… 121
図13　出土土器 …… 121
図14　昭和46年（1971）遠景（南西から）…… 122
Ⅷ　方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡
図１　調査位置図（１：5,000）…… 123
図２　調査前全景（北東から）…… 124
図３　作業風景（北から）…… 124
図４　現地説明会風景（南西から）…… 124
図５　壷地業３遺構保護状況（北から）…… 124
図６　調査区配置図（１：1,000）…… 126
図７　今回調査区と既調査区（１：2,500）…… 127
図８　１・２区西壁断面図（１：50）…… 129
図９　２区北壁断面図（１：50）…… 130
図10　１・２区西半平面図（１：80）…… 132
図11　１・２区東半平面図（１：80）…… 133
図12　壷地業１・３断面図（１：40）…… 134
図13　壷地業３根石矢穴拓影（１：８）…… 134
図14　足場柱穴列１・２実測図（１：100）…… 135
図15　足場柱穴列柱穴６・７実測図（１：30）…… 136
図16　１・２区西壁際平面図（１：80）、土坑71・72、礫敷75実測図（１：20）…… 137
図17　柱穴45実測図（１：20）…… 138

図18　３区実測図（１：30）…… 139
図19　４区南壁断面図（１：50）…… 140
図20　４区平面図（１：50）…… 140
図21　出土土器実測図（１：４）…… 142
図22　瓦拓影・実測図（１：４）…… 143
図23　丸瓦刻印拓影（１：２）…… 143
図24　銭貨拓影（１：２）…… 143
図25　方広寺復元図と遺構配置図（１：1,500）…… 145
図26　大仏殿復元図（１：500）…… 146
図27　壷地業断面模式図 …… 147
図28　方広寺・豊国神社境内石材分布図（１：1,000）…… 148
図29　方広寺境内礎石実測図（１：30、３のみ１：40）…… 149
図30　石製磚刻印拓影（１：10）…… 150
Ⅸ　山科本願寺跡・左義長町遺跡
図１　調査区位置図（１：2,500）…… 153
図２　調査前全景（北東から）…… 154
図３　作業風景（南東から）…… 154
図４　調査区配置図（１：300）…… 154
図５　山科本願寺跡主要周辺調査位置図（１：4,000）…… 158
図６　調査区西壁断面図（１：80）…… 162
図７　調査区南壁断面図（１：80）…… 163
図８　調査区平面図〔平安時代前期末から中期初頭〕（１：150）…… 164
図９　流路18断面図（１：40）…… 165
図10　流路18断面（西から）…… 165
図11　流路18実測図（１：40）…… 165
図12　調査区平面図〔平安時代中期末から後期前半〕（１：150）…… 166
図13　建物１実測図（１：40）…… 167
図14　建物１柱穴２地下式礎石検出状況（北から）…… 168
図15　建物１柱穴４上層実測図（１：20）…… 168
図16　建物２実測図（１：40）…… 168
図17　建物２柱穴８根石検出状況（左、北東から）、同焼痕跡（右）…… 169
図18　柱穴７、土坑23・29実測図（１：40）…… 170
図19　溝33断面（東から）…… 170
図20　土坑群実測図（１：20）…… 171
図21　土坑24実測図（１：20）…… 172

図22　土坑25鉄釘出土状況（南東から）…… 173
図23　柱穴20実測図（１：20）…… 174
図24　柱穴37実測図（１：20）…… 174
図25　平安時代前期末から中期前半出土土器実測図（１：４）…… 176
図26　須恵器四耳壺（２）の線刻（１：１）…… 176
図27　平安時代中期末から後期前半出土土器実測図（１：４）…… 178
図28　フイゴの羽口（59、ほぼ１：１）…… 183
図29　フイゴの羽口（60、ほぼ１：２）…… 183
図30　出土石製品実測図（１：４）…… 184
図31　出土鉄製品実測図（１：２）…… 185
図32　建物２柱穴９出土鉄滓（76）…… 185
図33　土坑17出土鍛造鉄片（77、ほぼ２倍）…… 186
図34　土坑17出土油滴１～２㎜（77、ほぼ１：１）…… 186
図35　山科本願寺遺構推定図（１：1,000）…… 188
図36　山科本願寺関連遺構断面想定図（１：300）…… 189

Ⅹ　山科本願寺南殿跡

図１　調査位置図（１：5,000）…… 191
図２　調査区配置図（１：300）…… 192
図３　調査前全景（南から）…… 192
図４　作業風景（北東から）…… 192
図５　山科本願寺南殿復元図（１：2,500）…… 193
図６　１区遺構平面図（１：100）…… 195
図７　１区断面図（１：50）…… 196
図８　２区遺構平面図（１：100）…… 197
図９　２区断面図（１：50）…… 198
図10　周辺の調査と遺構図（１：1,500）…… 200

Ⅺ　寺戸大塚古墳

図１　調査位置図（１：15,000）…… 201
図２　寺戸大塚古墳調査区配置図（１：800）…… 202
図３　１トレンチ調査前全景（北西から）…… 208
図４　２～4トレンチ調査前全景（南から）…… 208
図５　２トレンチ重機掘削（南から）…… 208
図６　１トレンチ作業風景（北西から）…… 208
図７　文化庁視察風景、1トレンチ（西から）…… 208
図８　記者発表風景、２トレンチ（北から）…… 208

図９　１トレンチ埋戻し状況（北西から）…… 208
図10　１トレンチ埴輪抜取り後、塩ビ管設置状況（北西から）…… 208
図11　１トレンチ東壁断面図（１：50）…… 211
図12　１トレンチ平面図（１：150）…… 212
図13　後円部裾葺石・埴輪実測図（１：30）…… 213
図14　１トレンチ東半　後円部墳丘裾実測図（１：40）…… 214
図15　１トレンチ西半　後円部墳丘裾実測図（１：40）…… 215
図16　２トレンチ断面図（１：50）…… 217
図17　２トレンチ平面図（１：50）…… 218
図18　２～４トレンチ立面図（１：50）…… 219
図19　前方部葺石・埴輪実測図（１：30）…… 220
図20　３トレンチ実測図（１：50）…… 222
図21　４トレンチ実測図（１：50）…… 224
図22　11次調査出土埴輪実測図１（１：５）…… 226
図23　11次調査出土埴輪実測図２（１：５）…… 230
図24　11次調査出土円筒埴輪口縁部実測図（１：３）…… 231
図25　10次調査出土埴輪実測図（１：５）…… 232
図26　土器・瓦拓影実測図（１：２）…… 233
図27　過去の墳丘測量図（１：1,200）…… 234
図28　墳丘復元図（１：500）…… 235
図29　前方部横断面合成図（１：300）…… 236
図30　墳丘復元模式図（１：1,000）…… 237
図31　前方部前端裾立面図（１：150）…… 239
図32　墳丘構築復元図（１：1,000）…… 239
図33　１・４トレンチ葺石の岩石分布図（１：50）…… 240
図34　墳丘裾断面模式図 …… 241
図35　後円部後端における埴輪列位置図（１：500）…… 243
図36　後円部後端における埴輪列の復元（１：30）…… 244
図37　寺戸大塚古墳２・６・７次調査出土円筒埴輪（１：10）…… 246
図38　寺戸大塚古墳円筒埴輪復元模式図（１：10）…… 247
図39　外反口縁の普通円筒埴輪（１：12）…… 248
図40　受け口状突帯をもつ朝顔形埴輪（１：12）…… 250
図41　個体間で共通するハケ目パターン（１：１）…… 251
図42　東殿塚古墳出土円筒埴輪（１：12）…… 254

# 表　目　次

Ⅰ　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡
表１　大極殿関連年表 …… 4
表２　遺構概要表 …… 6
表３　遺物概要表 …… 14
Ⅱ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡
表１　遺物概要表 …… 23
表２　周辺調査一覧表 …… 25
Ⅲ　平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡
表１　西面築地付近の調査一覧表 …… 29
表２　遺構概要表 …… 29
表３　遺物概要表 …… 34
Ⅳ　平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡
表１　主要調査一覧表 …… 45
表２　遺構概要表 …… 47
表３　遺物概要表 …… 70
表４　遺物一覧表 …… 77
Ⅴ　平安京右京九条一坊十二町・西寺跡
表１　西寺関連調査一覧表 …… 90
表２　遺構概要表 …… 92
表３　遺物概要表 …… 97
Ⅶ　岩倉中在地遺跡
表１　遺構概要表 …… 118
表２　遺物概要表 …… 120
Ⅷ　方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡
表１　遺構概要表 …… 128
表２　遺物概要表 …… 141
表３　方広寺境内石材一覧表 …… 149
Ⅸ　山科本願寺跡・左義長町遺跡
表１　左義長町遺跡周辺調査一覧表 …… 157
表２　山科本願寺跡主要周辺調査一覧表 …… 159
表３　遺構概要表 …… 161
表４　遺物概要表 …… 175

表５　出土土器類観察表 …… 181
表６　出土土製品・石製品・鉄製品観察表 …… 186
Ⅹ　山科本願寺南殿跡
表１　遺構概要表 …… 194
表２　遺物概要表 …… 199
Ⅺ　寺戸大塚古墳
表１　寺戸大塚古墳調査一覧表 …… 205
表２　遺構概要表 …… 210
表３　遺物概要表 …… 225
表４　各調査検出の墳丘平坦面レベル一覧表 …… 237
表５　基底石・葺石・裏込石石材構成表 …… 240
表６　後円部後端における埴輪列検出データ一覧表 …… 244

# Ⅰ　平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡

## １．調査経過

調査地は、上京区千本通下立売下る小山町地先で平安宮跡・聚楽遺跡に該当する。ここに個人住宅新築工事が計画された。これに対し、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）は、推定大極殿院北東隅に近接し、内裏南面前に広がる大庭の一画にあたることから、試掘調査を実施した。その結果、回廊を確認することはできなかったものの、平安時代前期から後期にかけての整地層が複数存在し、良好な堆積状況が残ることを確認した。また、下層には平安時代初頭の遺物を含む落ち込みが確認され、平安宮造成に伴う旧地形の改変が想定された。届出された計画では、整地層の一部に影響が及ぶことから、文化財保護課は発掘調査の指導を行い、文化庁国庫補助事業による調査を実施することとなった。

今回の調査では、大極殿院東回廊が未確認であり、当該地が回廊北東隅に近接すると想定されることから、基壇位置の手懸かりを得ること、試掘調査で確認された複数の整地層の成立時期を明らかにすること、旧地形の状況を確認することを目的とした。

調査区は東西10ｍ、南北6.5ｍで、大極殿院北・東回廊確認のため南西隅を一部西へ広げている（拡張区）。面積は66㎡である。調査は平成25年４月１日から開始し、試掘調査で確認した複数の整地層を５面に細分して調査を進めた。また、整地層直下の落ち込みは、平安宮造成前の旧地形に

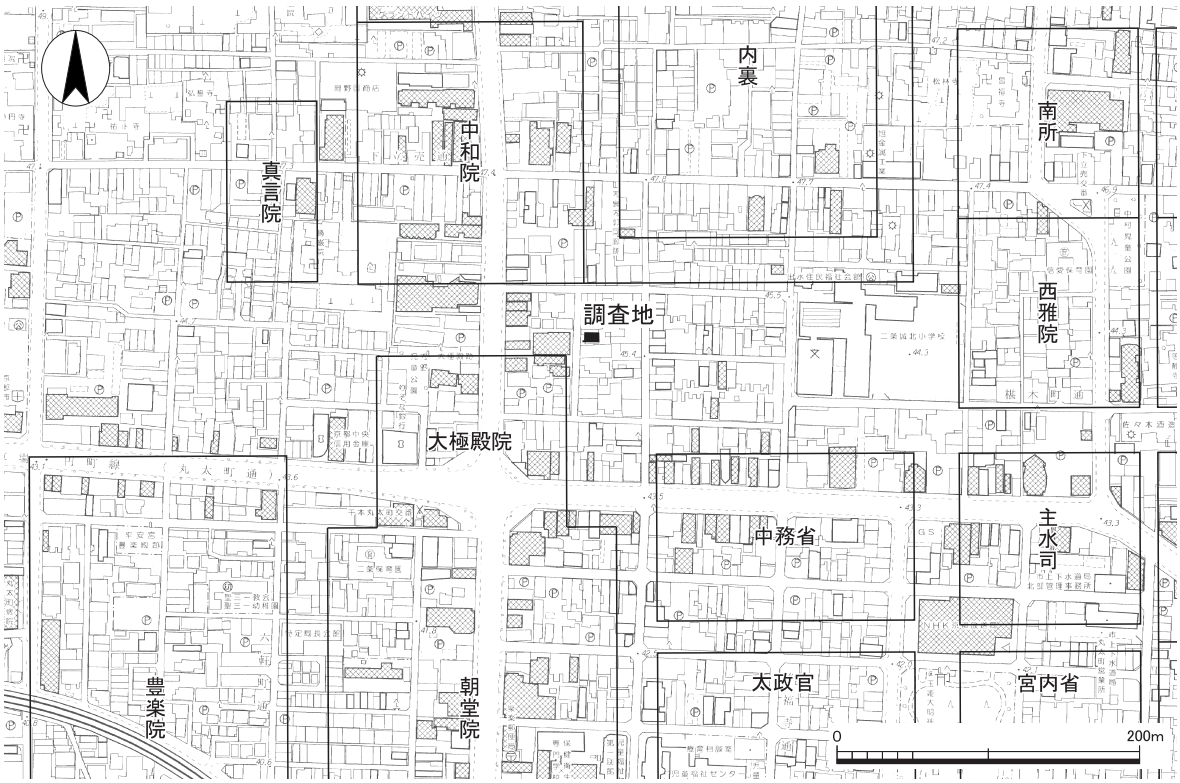



図１　調査位置図（１：5,000）

刻まれた谷を埋めた造成土であると想定していたため、掘削深度が深くなることが予想された。そのため、調査後の建築計画に影響が及ぶことが懸念されたことから、落ち込みの肩口を確認することを目的として断割調査を行ったところ、旧地形の落ち込みは平安宮造成に伴う土取穴であることが判明した。また、断面に土取穴と整地層の堆積状況が良好に残ることから剥ぎ取りを実施し、４月15日に掘削作業が終了した。その後、地盤改良を行いつつ埋め戻しを行い、４月18日に全ての作業が終了し引き渡しを行った。

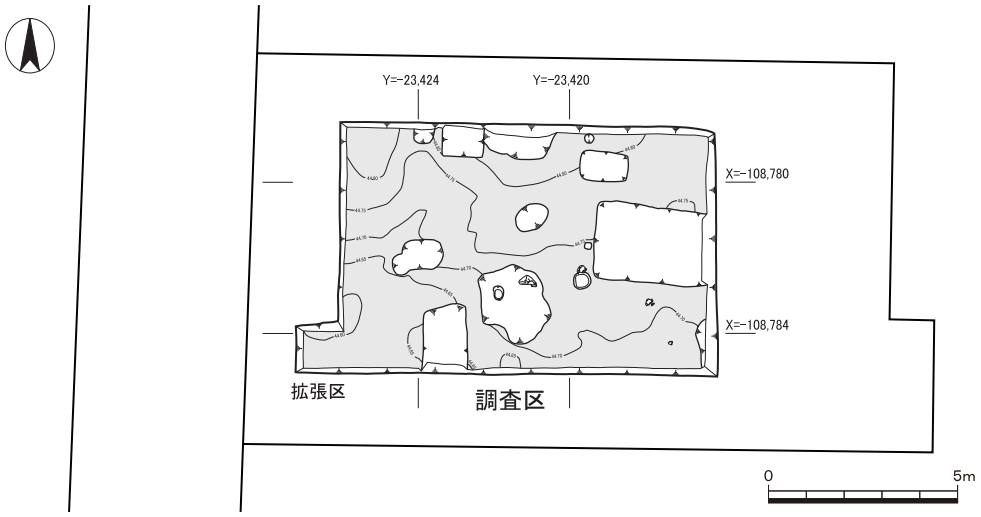



図２　調査区配置図（１：200）

図３　調査前全景（西から）

図４　作業風景（北東から）

図５　北壁剥ぎ取り状況（東から）

図６　埋め戻し状況

## ２．遺　　跡

### （１）遺跡の位置と環境

平安宮は京都盆地の中でも船岡山から派生する丘陵部に立地している。丘陵西側から南西部にかけては紙屋川が流れ、東側から南東側にかけては堀川の元となった古堀川谷が存在し、丘陵は両河川に刻まれ、舌状に張り出した安定した場所に宮域は位置している。安定した丘陵部は、遷都以前から集住を促し、調査地周辺も古墳時代の集落跡である聚楽遺跡として周知されている。一方で、丘陵部上は雨水による下刻作用の影響を強く受けるため、幾筋かの谷が刻まれ、遷都にあたって谷を埋め立てて造成したと想定されている[1)]。

大極殿は高御座が置かれ、即位儀礼、朝賀など国家の最重要儀式を執り行う場所として、宮城の中でも最も重要視された施設である。平安宮では、それまでの都城で大極殿と朝堂院を隔てていた閤門は取り払われ、朝堂院とは龍尾壇で区画されるのみとなった。大極殿は天皇控えの場である小安殿が北に位置し、北と東西を囲う回廊とは軒廊で繋がり、大極殿院を形成する。

遷都の際には内裏とともに建設が急がれたが（表１）、遷都翌年の延暦14年（795）正月は大極殿が未完成のため、朝賀が廃されている。翌15年正月には大極殿にて朝賀の儀が執り行われ、14年中には完成していたことがわかる。その後、二度の焼亡と再建を繰り返すものの、安元３年（1177）の大火（太郎焼亡）で焼失し再建されることがなかった。

大極殿は国家の正朝として、その後も度々再建が議論されたものの果たされることなく、周辺官衙も鎌倉時代頃にはほぼ廃絶し、「内野」と呼ばれた荒地となる。当地が再び開発されるのは豊臣秀吉による聚楽第築城を待たねばならない。

内裏南面前に広がる大庭は、天皇が大極殿に出御する際、内裏外郭南面に開かれた建礼門から出て大極殿院北門である昭慶門に向かう通り道であり、正月17日の射礼[2)]や、８月の駒牽などの儀式が執り行われる場としても利用された。

### （２）周辺の調査（図７）

ここでは、今回の調査成果に関連する大極殿院回廊および大庭の主要な調査成果を述べる[3)]。

大極殿院回廊は、北回廊（１・２）と東軒廊基壇（３）の南北縁が検出され、基壇幅が約12ｍ（四丈）であることがわかり、大極殿の南北心が明らかとなった。

大庭では、平安時代の整地層が各所で確認されている。中和院と大極殿院間の（４～６）にて平安時代前期の土器溜まりと整地層を、中務省北面で、平安時代前期の路面状の整地層を検出している（７～９）。中でも７では、平安宮創建期の整地層と貞観18年（876）の大極殿院焼亡に伴う整地層が検出されている。また、内裏建礼門前の（10）では、平安時代中期から鎌倉時代の整地層および路面が検出されている。

表１　大極殿関連年表

| 年代 | 西暦 | 天皇 | 出典 | 出来事 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 延暦12年 | 793 | 桓武 | 日本後紀 | １．１　朝賀 | 長岡宮大極殿 |
| 延暦13年 | 794 | | 日本紀略 | １．１　朝賀廃止。宮殿の解体開始のため | |
| | | | 類聚国史 | 10.22　平安京遷都 | |
| 延暦14年 | 795 | | 類聚国史 | １．１　大極殿が未完成のため朝賀を廃し、前殿に侍臣が歌う | |
| | | | 日本紀略 | ８．19　天皇が朝堂院に幸し、作事をみる | |
| 延暦15年 | 796 | | 類聚国史 | １．１　天皇、完成した大極殿で朝賀を受ける | 第一次大極殿 |
| 延暦16年 | 797 | | 日本後紀 | １．１　天皇、大極殿で朝賀を受ける | |
| | | | | １．17　天皇、朝堂院で騎射を観る | |
| 延暦17年 | 798 | | 日本紀略 | １．１　天皇、大極殿で朝賀を受ける | |
| | | | | １．26　朝堂院東道に兎が現れる | |
| 延暦18年 | 799 | | 日本紀略 | １．１　天皇、大極殿で朝賀を受ける | |
| | | | | １．７　豊楽院未完成のため大極殿前の竜尾道の上に仮殿を造り、蕃客を臨見する | |
| | | | | １．16　天皇、大極殿に幸して群臣・渤海使に宴する | |
| | | | | １．18　天皇、朝堂院で騎射を観る | |
| 大同３年 | 808 | 平城 | 類聚国史 | ２．24　病疫を鎮めるため大極殿で名神に祈祷する | |
| 弘仁６年 | 815 | 嵯峨 | 日本後紀 | １．21　尾張、参河など７国の役夫19800人を徴発して朝堂院を修理させる | |
| 貞観18年 | 876 | 清和<br>陽成 | 三代実録 | ４．10　子の時、大極殿、小安殿、蒼龍・白虎の両楼、延休堂、北門、北・東・西面廊百余間を焼失する。火は数日燃え続けた | |
| 貞観19年<br>元慶元年 | 877 | 陽成 | 三代実録 | ４．９　大極殿再建工事を起工する | 第二次大極殿 |
| 元慶３年 | 879 | | 三代実録 | 10．８　大極殿が完成 | |
| 元慶４年 | 880 | | 三代実録 | 12．６　地震により大極殿や京中民家など多く破損する | |
| 寛弘元年 | 1004 | 一条 | 御堂関白記 | ８．６　大極殿にて百口僧をもって仁王経の読経あり。終了後道長は諸卿ととに長保２年に雷火で焼けた豊楽院の修理を見る | |
| 長和３年 | 1014 | 三条 | 日本紀略・小右記 | ２．９　登華殿より出火し内裏を焼亡する。焼亡後、大極殿から朝所へ逃れる | |
| 康平元年 | 1058 | 後冷泉 | 扶桑略記 | ２．26　八省院、新造内裏、中和院などが焼亡。神嘉殿は遷都以来初めて焼ける | |
| 治暦４年 | 1068 | 後冷泉<br>後三条 | 百練抄 | ７　後三条天皇の即位に際し大極殿が焼失しており太政官に高御座を置いて儀式が行われた | |
| | | | | 10.10　大極殿が上棟される | 第三次大極殿 |
| 延久４年 | 1072 | 後三条<br>白河 | 扶桑略記 | ４．３　大極殿の再建 | |
| 嘉承２年 | 1107 | 鳥羽 | 中右記 | 10.21　八省院の破損を実検し，大極殿並びに廊門などの修理を諸国に課す | |
| 寛治５年 | 1091 | 堀川 | 扶桑略記 | １．12　大風により大極殿西廊23間が倒れる | |
| 永長元年 | 1096 | | 中右記 | 11.24　大地震により大極殿・法成寺などが損壊する | |
| 保元３年 | 1158 | 後白河<br>二条 | 平安遺文 | 11.11　大極殿回廊料の檜皮が八坂社領波々伯部村に課される | |
| | | | 保元三年番記録 | 12.20　今度（３次）大極殿。小安殿。八省院諸門回廊等。朱雀門。皆以修造。会昌門外左右瓦垣。任旧跡被修築。大極殿鴟尾。新以金銅鋳含。又大極殿。八省院諸門。朱雀門額等。前関白被書献。兼行所書之旧額皆撤却畢 | |
| | | | 二条院御即位記・頼業記 | 12.20　今度大極殿。小安殿。八省院。諸門回廊。青竜白虎并朱雀門。皆以修造。大極殿鴟尾。新以金銅鋳覆。会昌門外東西瓦垣。任旧跡被修築。其営造之功。誠可謂壮麗。但応天門并翔鸞栖鳳楼無修造。東西朝集堂只有礎石。尤遺恨耳。又大極殿并八省院諸門額等。前関白新被書献。兼行朝臣所書之旧額皆撤却畢。朱雀門額同被書献也。応天門依無修理不懸額。（中略）東朝集堂跡。立九丈纐纈幄。件幄縮基跡立之。今度造八省以上美麗。応天門内東西瓦垣等。百餘年来久以破壊。今度新被修築垣限。東西朝集堂未修造。 | |
| 安元３年 | 1177 | 高倉 | 玉葉 | ４．28　樋口富小路より出火し、勧学院、大極殿、八省院以下110余町が焼亡する（安元の大火、太郎焼亡） | |

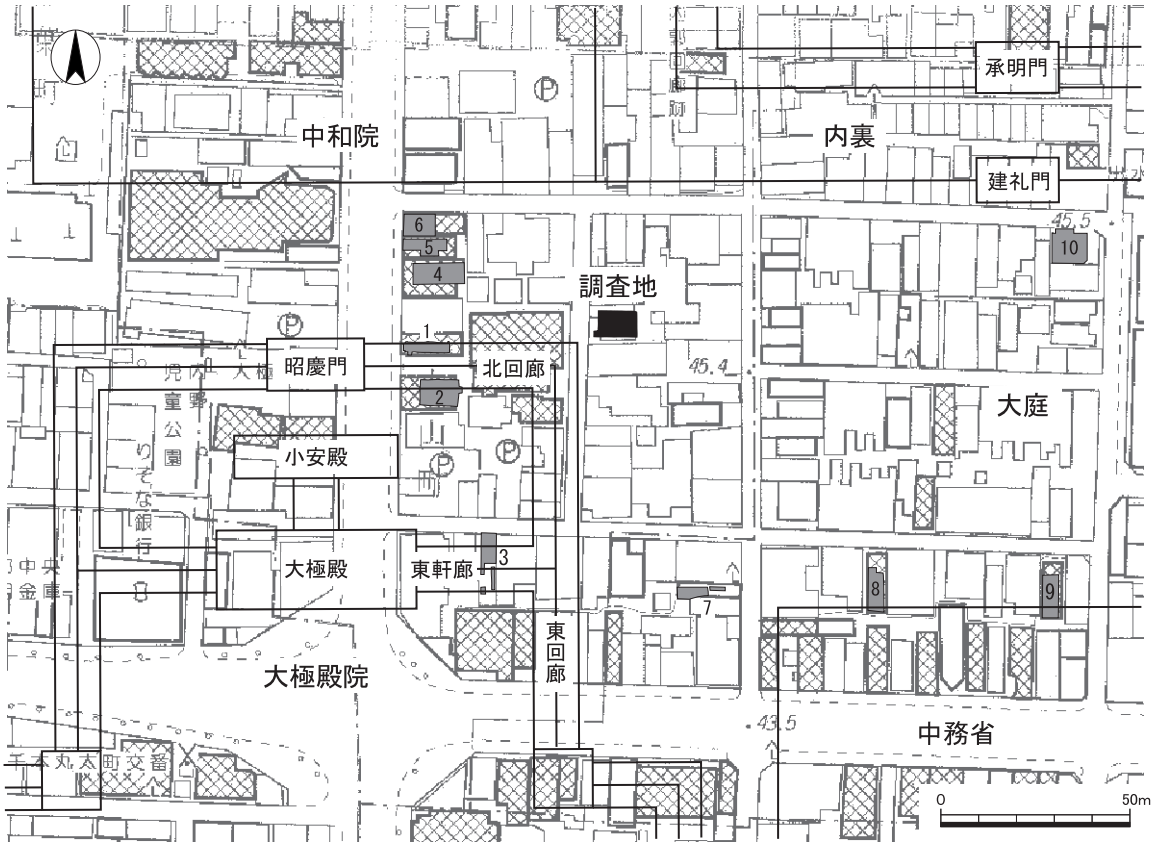



図７　周辺調査位置図（１：2,000）

# ３．遺　　構

## （１）基本層序（図８・９、図版４）

調査地は、北から南へ緩やかに下る斜面で、現地表面の比高差は約0.2ｍ（標高45.50～45.30ｍ）である。基本層序は、現代盛土、近世整地層と続き、地表下0.35～0.45ｍ以下に平安時代の整地層が複数続く。整地層は５層に大別し調査を実施したが、各層はさらに細分可能である。地表下0.7ｍ前後で締まりのないにぶい黄橙色泥砂の地山となる。検出面の標高は44.80ｍである。以下、固く締まったいわゆる聚楽土と呼ばれるにぶい黄褐色シルト、黒褐色シルト、褐色シルト、明黄褐色砂泥礫混じりと続く。

整地層は上から、厚さ0.02～0.2ｍの炭化物・焼土・瓦を含んだ褐灰色砂泥層など（第1層）、以下、厚さ0.02～0.08ｍの炭化物・焼土を多量に含む暗オリーブ色褐色泥砂など（第２層）、厚さ0.03～0.13ｍの黄褐色砂泥など（第３層）、厚さ0.02～0.10ｍのにぶい黄橙色砂泥など（第４層）と続き、最下層が厚さ0.02～0.05ｍで小礫を叩き締めた暗灰黄色泥砂となる（第５層）。第１層以外の整地層は非常に固く締まっており、上面には白色砂粒を中心とした粗砂層が覆う。第２層以下の整地層は、X=－108,780ｍおよび－108,784ｍライン付近に傾斜の変換点を見いだせる。

各層上面をそれぞれ面として調査を実施し（第１～５面）、地山上面を第６面とした。各層の成立年代は、第１面が平安時代末期（12世紀前半以降）、第２面が平安時代後期（11世紀前半）、第３面・第４面には時期差がほとんどなく平安時代中期（10世紀中頃）、第５面が平安時代初頭から前期（８世紀末から９世紀）、第６面が平安時代初頭（８世紀末）である。

## （２）遺構

**第1面（図10、図版１）**

第１面で検出したのは、近世の土坑、平安時代末期の整地層（第1層）、不定形の土坑、ピット、溝などがあるが、まとまるものではない。

表２　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 平安時代初頭 | 土取穴 | 平安宮造営に伴う土取穴 |
| 平安時代初頭～前期 | 整地層（第５層）、ピット26 | 大庭整地層 |
| 平安時代中期 | 整地層（第３・４層）、ピット16・24・25 | |
| 平安時代後期 | 整地層（第２層）、溝15・22、土坑20 | |
| 平安時代末期 | 整地層（第１層）、土坑２・11・13・17、ピット９・14 | |

**第１層**　調査区全域に広がる整地層である。炭化物や焼土、瓦片を多量に含み、北端では層厚は0.02～0.07ｍであるが、南に向かって厚みを増し、南端では0.2ｍを測る。南側では最大３層に細分される。検出面の標高は北端45.15ｍ、南端45.05ｍで比高差は少ない。第２層以下は地山の傾斜に合わせて緩やかに南に下っているため、後世の削平を一定受けているものの、整地後の地表面を平坦にする目的が想定される。出土遺物は土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などの細片が含まれている。平安京Ⅴ期古から中段階に属し[4)]、11世紀後半から12世紀前半の年代が与えられる。

**第２面（図10、図版１）**

第２面では、平安時代後期の整地層（第２層）、土坑、溝などを検出している。

**第２層**　調査区全域に広がる整地層である。第１層と同じく炭化物、焼土、瓦片、小礫を多量に含み固く締まる。調査区北半では白色砂粒を中心とした粗砂層が表面を覆う。層厚は0.02～0.08ｍで、北東隅では２層に分けられる。検出面の標高は北端で45.10ｍ、南端で44.77ｍとなる。出土遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦片などの細片である。平安京Ⅲ期中段階からⅣ期古段階に属しており、10世紀後半から11世紀前半の年代が与えられる。

**溝15**　調査区南端を西から東に流れの向きを持つ溝で、東でやや南に振れる。幅0.8～1.7ｍ、深さ0.05～0.1ｍで、埋土は灰黄色粗砂で水が流れた痕跡が認められる。遺物はほとんど含んでいない。

**土坑20**　調査区中央にあり、直径0.9～1.1ｍ、深さ0.3ｍの楕円形を呈する。埋土は焼土を含んだにぶい褐色シルトで、遺物は少ない。

**第３面・第４面（図11、図版２）**

第３・４面では、平安時代中期の整地層と少数のピットを検出した。

**第３層**　調査区全域に広がる整地層である。埋土には炭化物、焼土、礫はほとんど含まず、固く締まる。層厚は0.03～0.13ｍで、大きく上層と下層に分けられるが、断面観察により粗砂層が複数確認できるため、整地が繰り返されたことがわかる。検出面の標高は北端で44.99ｍ、南端で44.73ｍとなる。出土遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦片などあるが量は少ない。平安京Ⅲ期古段階に属するもので、10世紀中頃の年代が与えられる。

**第４層**　北東隅を除く調査区のほぼ全域に広がる整地層である。埋土は炭化物を微量に含む均質な砂泥層で、固く締まる。層厚は0.02～0.10ｍで、北半には粗砂層が上面を覆う。検出面の標高は北端で44.87ｍ、南端で44.70ｍとなる。出土遺物は土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、凝灰岩片があるが量は少ない。第３層と同じく平安京Ⅲ期古段階に属するもので、10世紀前半から中頃の年代が与えられる。

**第５面（図12、図版３）**

第５面では、全面に平安時代初頭から前期にかけての路面状の舗装が施された整地層とピットを１基検出したのみである。

**第５層**　地山直上で成立し、調査区全域に広がる整地層である。層厚は0.02～0.05ｍで、検出面

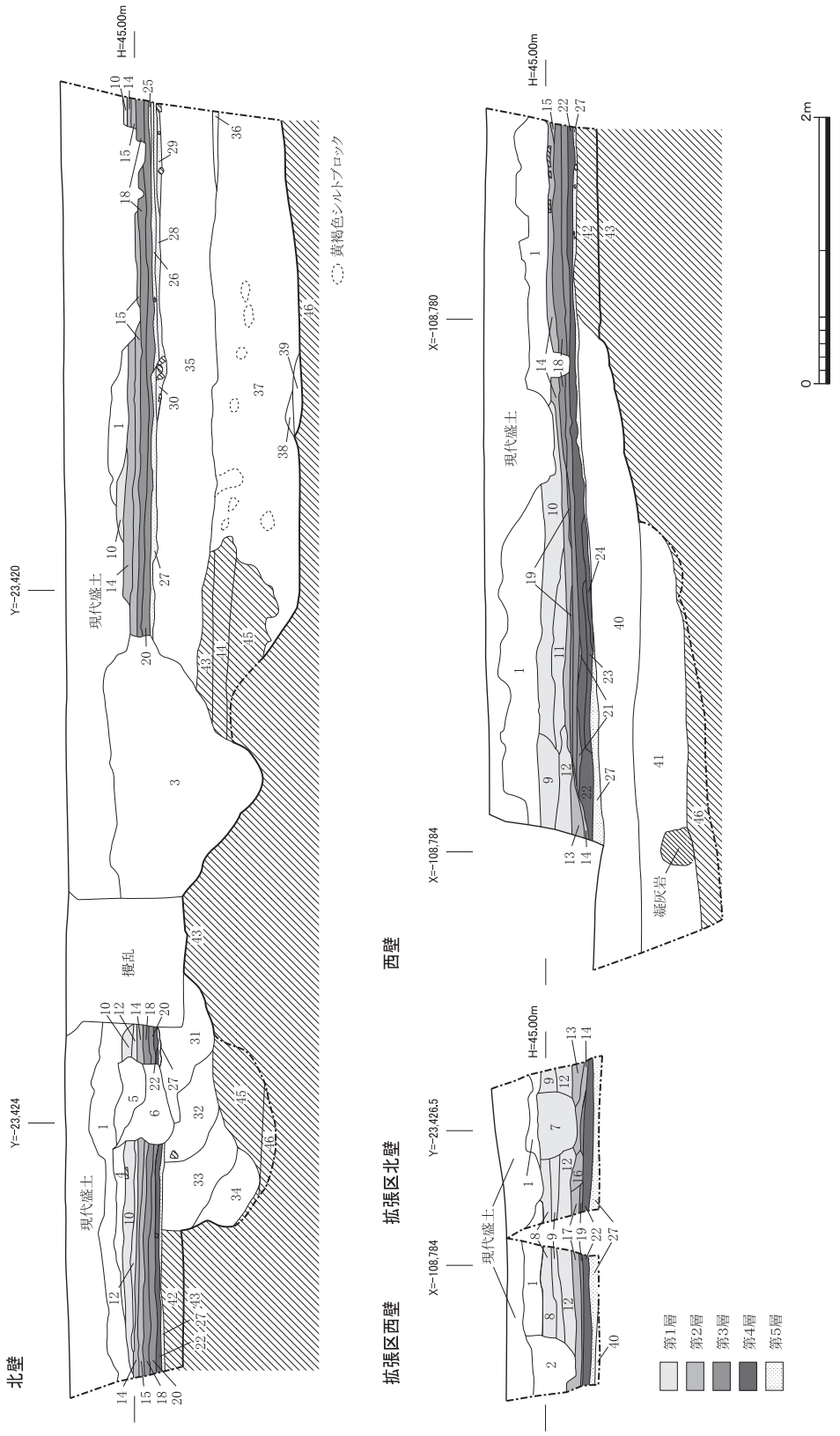
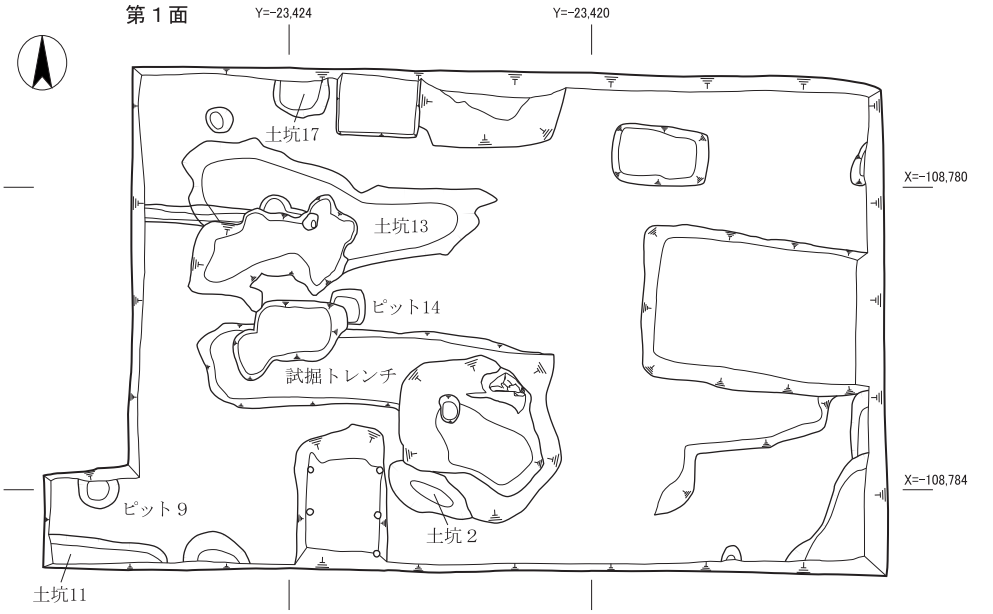

北壁
西壁
拡張区北壁
拡張区西壁
H=45.00m
Y=-23,420
Y=-23,424
Y=-23,426.5
X=-108,780
X=-108,784
現代盛土
攪乱
凝灰岩
黄褐色シルトブロック
第1層
第2層
第3層
第4層
第5層
0
2m

図８　断面図（１：50）

図9　断面図層名

1　2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥（近世整地層）
2　2.5Y4/1 黄灰色砂泥（土坑11）
3　10YR5/2 灰黄褐色砂泥、締まり無し（土坑5）
4　2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥（近世？整地層）
5　10YR8/6 黄橙色シルト
6　10YR5/3 にぶい黄橙色粗砂～細砂
（土坑17）
7　2.5Y5/4 黄褐色砂泥（ピット9）
8　10YR4/1 褐灰色砂泥、焼土少量含む
9　10YR4/1 褐灰色砂泥粗砂混じり、炭化物・焼土少量含む
10　2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、固く締まる、炭化物・焼土・瓦片多量含む
11　7.5YR4/1 褐灰色砂泥
12　10YR6/3 にぶい黄橙色粗砂～細砂
（第1層）
13　2.5Y6/2 灰黄色粗砂（溝15）
14　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、上面に薄く粗砂層あり、
固く締まる、炭化物少量・焼土多量・瓦片中量・径3cm以下の礫中量含む
15　10YR5/3 にぶい黄橙色泥砂、上面に薄く粗砂層あり、
固く締まる、炭化物・焼土微量・径2cm以下の礫少量含む
16　2.5Y4/1 黄灰色砂泥
17　10YR6/3 にぶい黄橙色粗砂、固く締まる、焼土中量含む
（第2層）
18　2.5Y5/3 黄褐色砂泥、上面に薄く粗砂層あり、炭化物少量含む
19　10YR5/3 にぶい黄橙色泥砂、固く締まる、炭化物・焼土微量含む
20　2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂粗砂混じり、さらに細分可能、
白色砂粒多量・炭化物微量に含む
21　2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂、固く締まる
（第3層）
22　10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥、上面に粗砂層あり、固く締まる、炭化物少量含む
23　10YR6/2 灰黄褐色泥砂、炭化物微量に含む
24　10YR6/2 灰黄褐色泥砂
（第4層）
25　10YR5/3 にぶい黄橙色泥砂、固く締まる、炭化物少量含む
26　10YR4/2 灰黄褐色泥砂、固く締まる、炭化物微量に含む
27　2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂、非常に固く締まる、径0.5～3cmの礫を叩き締める
28　2.5Y4/1 黄灰色砂泥、固く締まる、炭化物微量に含む
29　10YR4/2 灰黄褐色粗砂、固く締まる
30　2.5Y3/1 黒褐色砂泥、非常に固く締まる、径1～5cmの礫多量に含む
（第5層）
31　10YR3/1 黒褐色砂泥、締まり無し、径3cm以下の礫多量に含む
32　10YR6/4 にぶい黄橙色泥砂、径3cm以下の礫多量に含む
33　2.5Y3/2 黒褐色砂泥、非常に固く締まる、径3cm以下の礫多量に含む
34　10YR3/1 黒褐色砂泥、締まり無し、径3cm以下の礫中量含む
（土取穴28）
35　10YR3/1 黒褐色砂泥、締まり無し、径2～3cmの礫多量に含む
36　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
37　10YR3/1 黒褐色砂泥、締まり無し、黄褐色シルトブロック混じり
38　5Y5/2 灰オリーブ色泥砂
39　5Y5/2 灰オリーブ色砂泥、褐色シルトブロック混じり
（土取穴27）
40　10YR3/1 黒褐色砂泥、締まり無し、径2～3cmの礫多量に含む
41　10YR3/1 黒褐色砂泥、締まり無し、黄褐色シルトブロック混じり
（土取穴29）
42　10YR6/4 にぶい黄橙色泥砂、締まり無し
43　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト、固く締まる
44　10YR2/2 黒褐色シルト
45　10YR4/4 褐色シルト
46　10YR6/6 明黄褐色砂泥礫混じり
（地山）



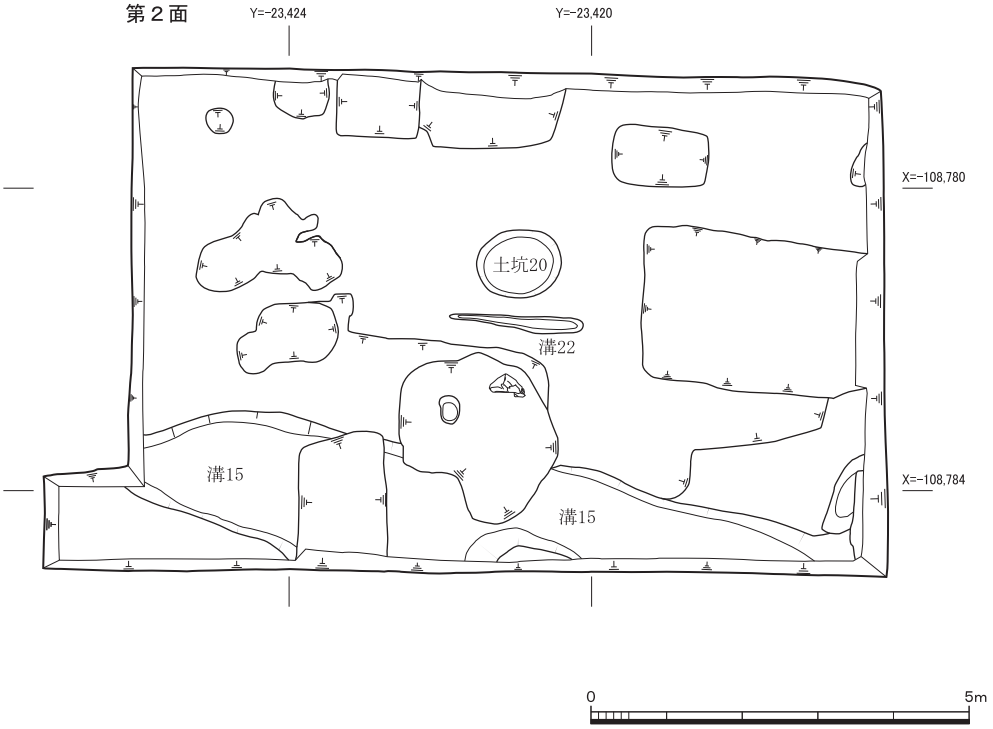




図10　第１・２面平面図（１：100）

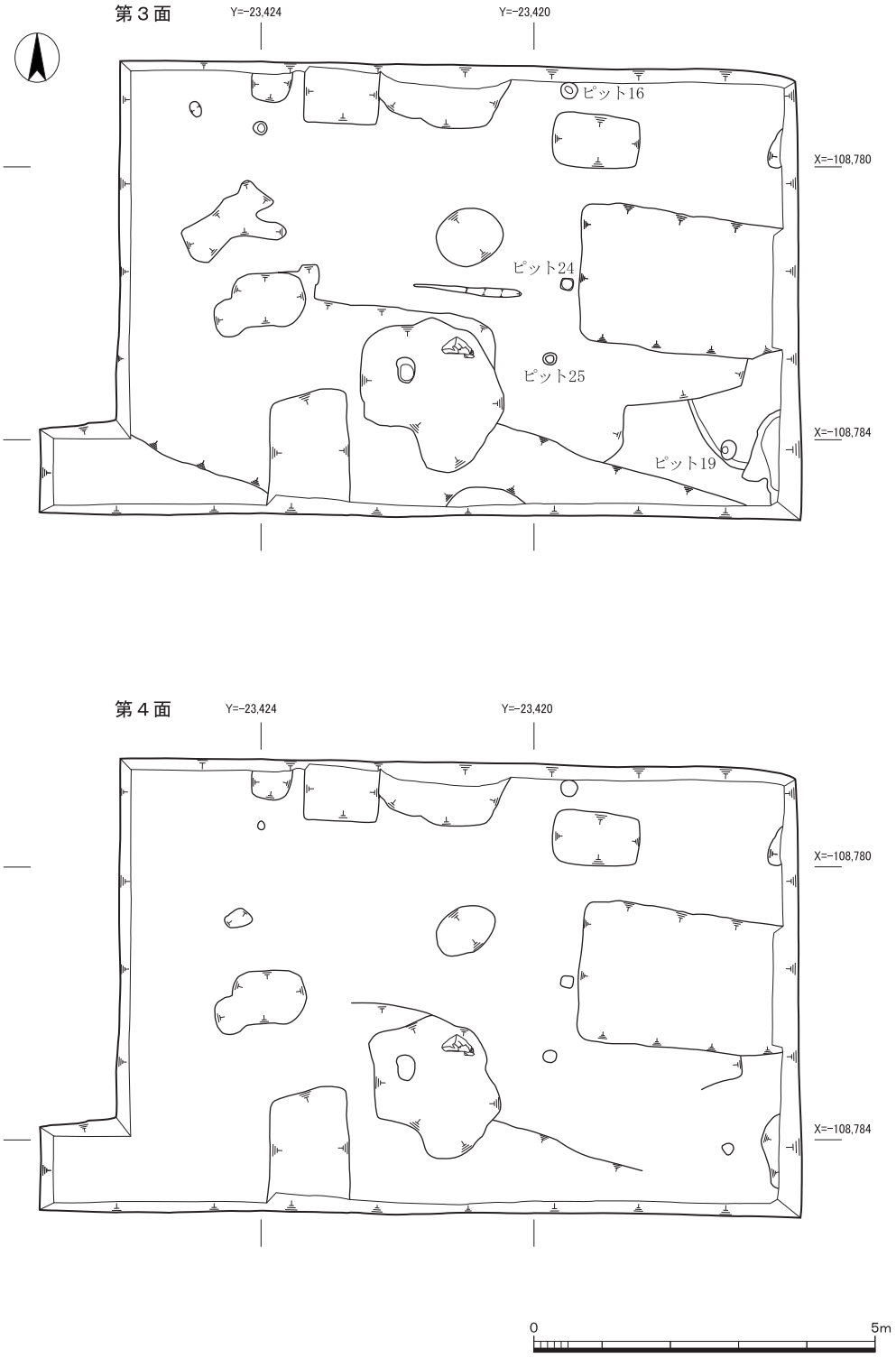
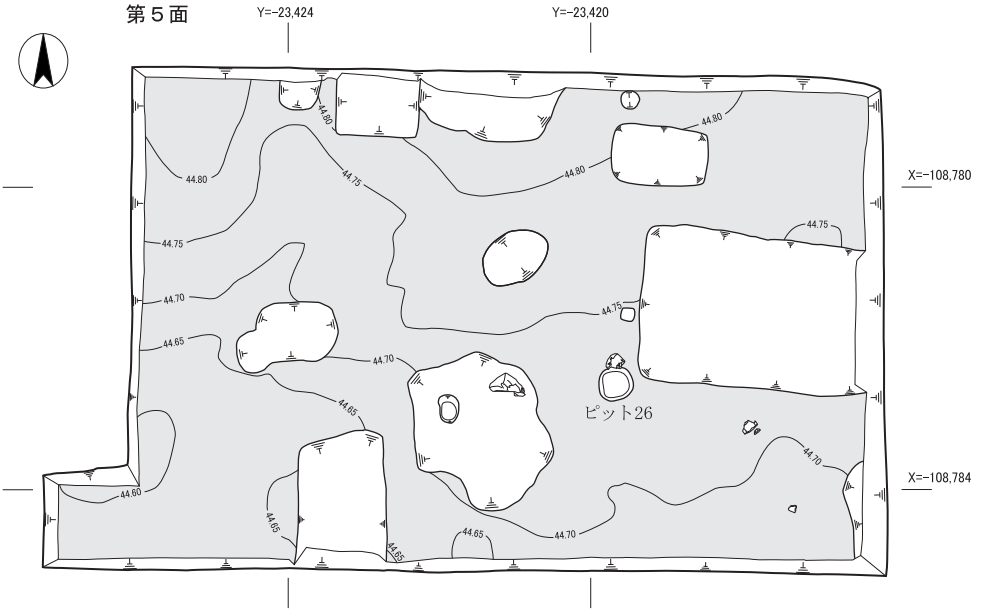



図11　第３・４面平面図（１：100）



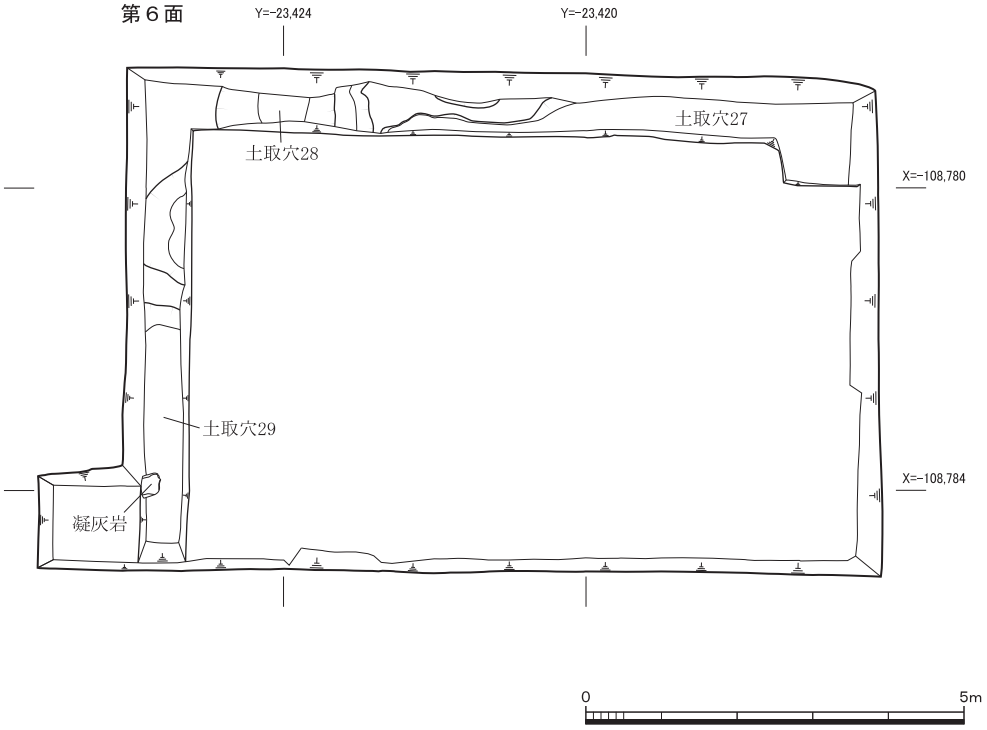




図12　第５・６面平面図（１：100）

の標高は北端で44.84ｍ、南端で44.65ｍになる。埋土には礫が多量に含まれているが、叩き締められて面が揃い、路面状の舗装が施されている。X＝－108,780ｍライン付近を境に、北側が平坦面、南側が南下がりの緩斜面となり、路面舗装に用いられる礫の粒径も変化している。北側では径１㎝未満の非常に細かい礫が使用され、南側ではやや粗く、径１～３㎝の礫が用いられる。出土遺物は凝灰岩片の他は非常に少なく、時期は特定できないが、前後の堆積状況、内裏と大極殿院に囲まれた大庭という空間の重要性から平安遷都直後の整地層と判断できる。

**第６面（図12、図版４）**

地山上面で成立する遺構で、全て土取穴である。

**土取穴27**　北壁沿いの断割で検出したもので、東西6.2ｍ以上、南北1.1ｍ以上、深さ1.1ｍの規模を持つ。西肩のみを検出し、さらに調査区外に広がる。掘形の断面は鋭く、地山の褐色シルトを抉って掘り込まれている。底は平坦であるが、礫混じりの明黄褐色砂泥のところで掘削が止まっていることから、土取穴と判断した。埋土は上下で大きく綺麗に分かれ、上層は礫を多量に含んだ黒褐色砂泥、下層は褐色シルトのブロックを多く含んだ黒褐色砂泥である。出土遺物は、少量の凝灰岩、瓦、土師器、須恵器片のほか、底に貼り付いた状態で、ほぼ完形に復元できる土師器杯、皿がまとまって出土した（図13）。全て平安京Ⅰ期中段階に収まるもので、遷都前後の８世紀末に限定できるものである。土器の廃棄年代については後述する。

図13　土取穴27遺物出土状況（北西から）

**土取穴28**　北壁沿いで検出したもので、土取穴27の西に位置する。東西2.0ｍ、南北0.6ｍ、深さ0.7ｍの規模である。東西肩を検出し、さらに調査区外に広がる。地山に礫が混じる場所で掘削を止めている。出土遺物は非常に少ない。

**土取穴29**　西壁沿いで検出した。北肩のみを確認し、南北5.0ｍ以上、東西0.5ｍ以上、深さ0.8ｍの規模である。掘形の断面は緩やかであるが、底は礫混じり層で止まる。出土遺物は土師器、須恵器、瓦片が少量出土する。平安京Ⅰ期中段階に属するものである。なお、底で凝灰岩の切石が出土している。

# ４．遺　　物

## （１）遺物の概要

遺物は整理箱にして18箱出土しているが、大半が整地層（第１・２層）に含まれていた平安時代の瓦である。土器類では平安時代に土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などがあり、江戸時代の土師器、国産施釉陶器なども出土している。他に土製品、石製品、金属製品がある。平安時代を通じて遺物の出土が認められるが、土取穴から出土した土師器を除き、細片化されて整地層内に含まれていたものであるため、図示できるものは少ない。

ここでは、一括性の高い土取穴27出土の土師器を中心に概説する。瓦については出土遺構に関連なく別項を設けた。

## （２）土器類（図14、図版６）

**土取穴27**（１～14）　土取穴27から出土した一括遺物である。瓦、凝灰岩、須恵器が少量出土しているが、大半が土師器類である。図示したものは、全て底にへばりついた状態で１箇所にまとまって出土した。土師器では椀Ａ、杯Ａ、皿Ａ、杯Ｂ蓋、高杯の杯部が出土しており、完形または破片が大きいことが特徴である。

１～２は土師器椀Ａである。外面はヘラケズリ、内面はハケメ後ナデ調整。いずれもヘラケズリは口縁端部まで施される。３は杯Ａで、口径17.2㎝、器高4.2㎝である。外面ヘラケズリ、内面はわずかにハケメが残る。４～10は皿Ａである。全て外面にヘラケズリを施す。やや小型の４以外

表３　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安時代初頭 | 土師器、須恵器、瓦、凝灰岩 | | 土師器16点、瓦１点 | | |
| 平安時代前期 | 土師器、凝灰岩 | | 緑釉陶器１点、瓦１点 | | |
| 平安時代中期 | 土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、凝灰岩 | | 瓦３点 | | |
| 平安時代後期 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦 | | 瓦９点 | | |
| 平安時代末期 | 土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、鉄製品 | | 石製品１点 | | |
| 江戸時代 | 土師器、国産施釉陶器、焼締陶器、染付、銭貨、鉄製品 | | | | |
| 合　計 | | 22箱 | 32点（３箱） | １箱 | 18箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

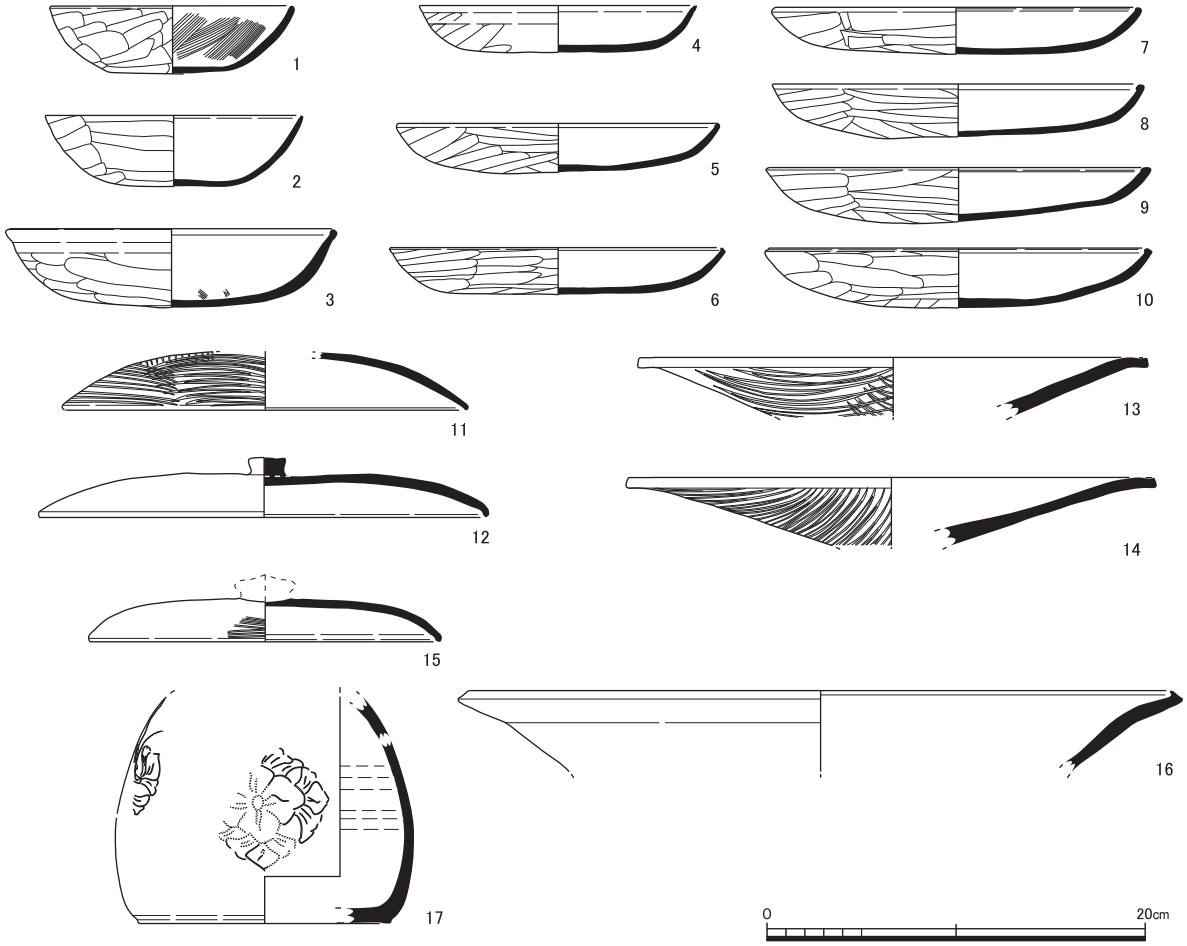



図14　出土土器実測図（１：４）

は、口径17.4㎝前後、器高2.5～3.0㎝の一群（５・６）と、口径20.0㎝前後、器高3.0㎝前後の大型の一群（７～10）の２群に分かれる。なお、10の内面には墨痕が残る。11・12は杯Ｂ蓋である。11は口径25.4㎝、12は口径28.5㎝を測る大型品である。いずれも外面にヘラミガキを施すが、12はヘラミガキの前にケズリを施す。13・14は高杯杯部である。体部から口縁部にかけて外反する。13は口径32.2㎝、14は口径33.1㎝ある。杯部外面にはヘラケズリ後にヘラミガキを施す。

**その他の土器**（15～17）　15は土師器杯Ｂ蓋で、土取穴29から出土した。口径18.6㎝で、外面にヘラミガキを施す。平安京Ⅰ期中段階に属するものである。16は土師器盤で、第４層から出土した。口径は37.0㎝で、体部から口縁部にかけてやや外反する。口縁端部は内側につまみ上げられ、内外面はナデで仕上げられる。平安京Ⅰ期中段階に属する。17は緑釉陶器の手付き瓶で、第４層最下層から出土した。底径は13.2㎝で、内外面共に薄い緑釉が掛かり、内面の一部は淡い黄色に発色している。焼成は非常に良好で、胎土は須恵質を呈する。体部下半には二種類の陰刻花文が施される。９世紀後半の年代が与えられる。尾張猿投産。

## （３）瓦類（図15、図版７）

出土遺物の大半を占める瓦であるが、軒瓦は少ない。瓦１は唐草文軒平瓦である。搬入瓦で平城

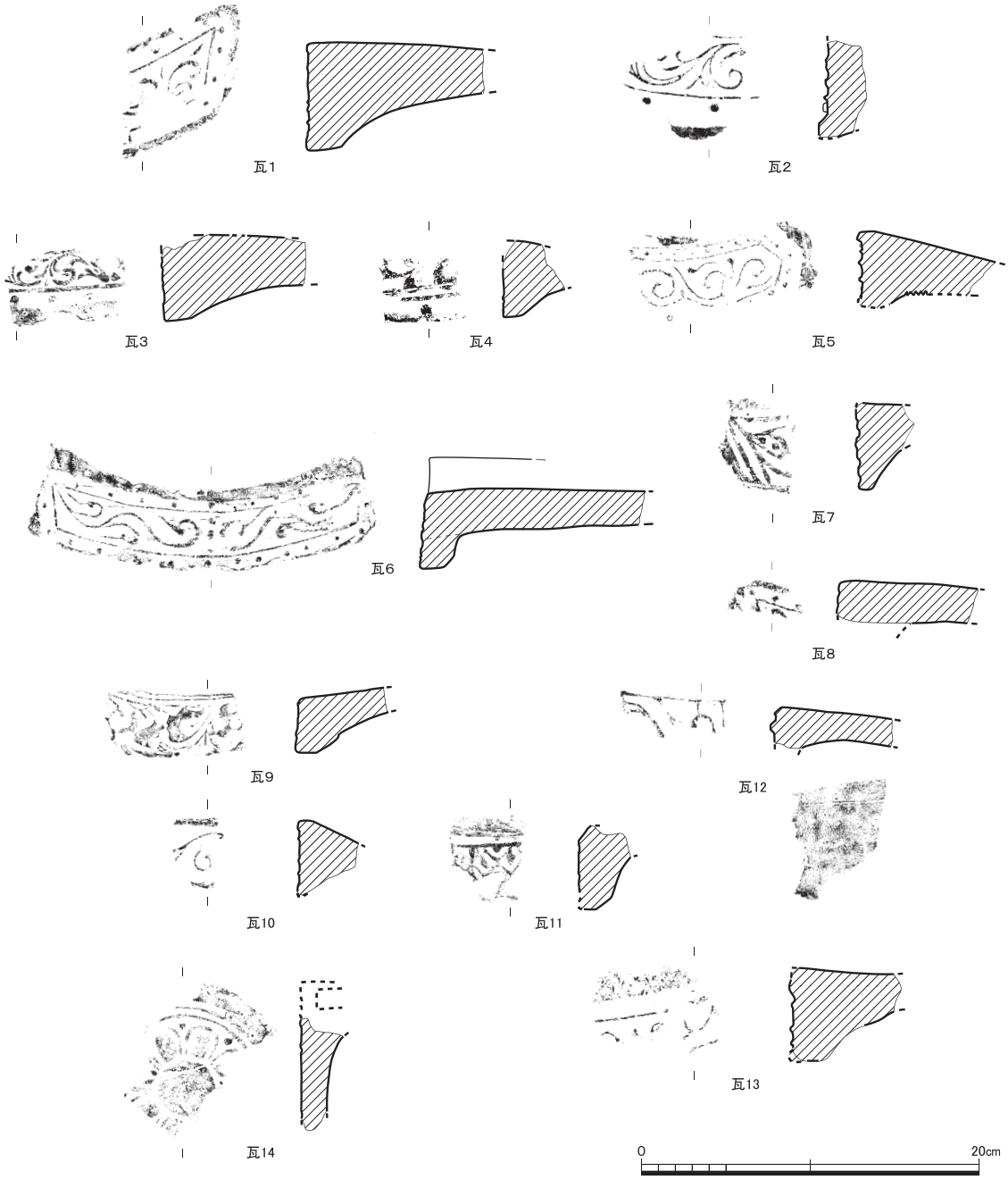



図15　出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

6726式。瓦当部貼り付け。土取穴29出土。瓦２は緑釉唐草文軒平瓦で、豊楽殿で主体を為すものである。瓦当部貼り付け。被熱を受け表面は銀化する。山城栗栖野瓦窯産。平安時代前期。第３層出土。瓦３・４は唐草文軒平瓦でいずれも瓦当部貼り付け。３は山城森ヶ東瓦窯産、４は森ヶ東瓦窯産または安井西裏瓦窯産。平安時代中期。３は第２層、４は第１層下層出土。瓦５は唐草文軒平瓦である。瓦当部は半折り曲げで顎部に粘土を補足する。平瓦部凸面には粗いタタキ痕が認められる。表採。平安時代中期から後期。丹波産。瓦６は内向唐草文軒平瓦である。瓦当部は半折り曲げ。平安時代後期。山城産。土坑２出土。瓦７は内向唐草文軒平瓦である。瓦当部貼り付け。山城国産。平安時代後期。溝15出土。瓦８は唐草文軒平瓦であるが、残りが悪いため、産地、時期不明。土坑

13出土。瓦９～12は第１層から出土した軒平瓦で、11の斜格子文を除き唐草文である。９は瓦当部折り曲げ。山城国産。平安時代後期。10は瓦当部貼り付け。平安時代後期。11は瓦当部貼り付け。平安時代後期。12は瓦当部半折り曲げ。平安時代後期。13は第３層出土の唐草文軒平瓦である。瓦当部貼り付け。顎部には粘土を補足している。山城国産。平安時代後期。14は単弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当部貼り付け。山城国産。平安時代後期。第１層出土。

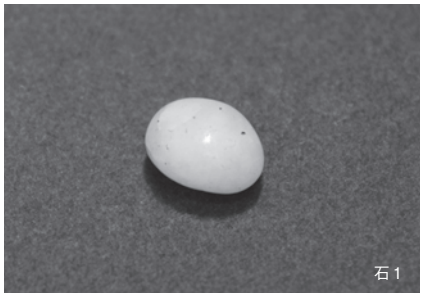


図16　碁石

### （４）石製品（図16）

石１は直径1.25㎝、幅1.0㎝、厚さ0.7㎝の楕円形を呈し、表面は丁寧に磨かれている。石材は石英。やや小振りであるが碁石であろう。第１層出土。

## ５．まとめ

今回の調査では、当初目的の一つであった大極殿院回廊の基壇などの遺構に関する手懸かりはなく、現在の推定規模を補強することができた。また、造営に伴う土取穴を平安宮内において初めて確認し、創建当初から平安時代末期までの大庭における整地層の変遷を押さえた意義は大きい。ここでは、土取穴が掘削された場所と土器の廃棄年代について述べ、整地層の変遷から明らかになったことに推測を加えてまとめとしたい。

### （１）土取穴について

平安宮跡が立地する丘陵の基盤を為す褐色シルト層は、いわゆる聚楽土と呼ばれ、近世以降、陶土や壁土などに用いるための粘土採取が盛んに行われた。調査地の東側を南北に走る土屋町通は聚楽土採取を目的とした「土屋」が集まっていたと考えられ、付近に良好な聚楽土が分布していたことを示している。

今回の調査で確認した土取の用途を確定することは困難であるが、大極殿院回廊に隣接する立地から考えると、建物の壁土または、基壇盛土用として用いられた可能性が高い。さらに推測を交えると、大極殿院を構成する建物群は、回廊を含めて全て壇上積基壇で構成されているため膨大な量の粘土が必要であったことから、基壇盛土として用いたと想定される。大極殿は内裏とともに完成が急がれており、それを囲う回廊の整備も同様と考えられ、回廊基壇に用いるために隣接地での土の採取を行ったものと考えられる。

次に、土取穴27の底からまとまって出土した土器群の廃棄年代について述べる。土取穴27の埋土は、大きく２層に分かれるものの均一な黒褐色砂泥が主体となる。黒褐色砂泥は、近辺では宮北半に広く見られる地山の一種であり、埋土が水平に堆積することから、丁寧に埋め戻されたものと

判断できる。また、底には水が溜まった痕跡は認められないことからも、掘削した後にすぐに埋め戻したことを示している。埋土上面は大庭の整地層（第５層）が覆い、内裏から大極殿へ出御する天皇が必ず通る場所という事実から、埋没年代は大極殿が完成する延暦14年（795）を大きく下らないものと判断できる。なお、掘削された年代については、平安宮造成開始が延暦12年（793）以降であり、それ以降となる。したがって、土取穴の年代は延暦12年からの数年間にほぼ限定できる。

## （２）整地層について

今回は、大庭の整地層を５面にわけて調査を実施したが、断面観察からはさらに細分可能である。第３層以下では、遺構・遺物ともに極めて少なく、天皇出御の際の通り道として、常に維持管理されていたことがわかる。

各整地層の特徴を施工順に沿って概説する。

**第５層**（８世紀末から９世紀初頭）

造営時の土取穴を埋め、礫を叩き締めて路面状の舗装を施す創建期当初の整地層。上面には、遺構・遺物は極めて少ない。X=－108,780ｍライン付近北側は、舗装が丁寧で、平坦面が広がる。

**第４層・第３層**（10世紀前半から中頃）

頻繁に整地と捲き砂が繰り返された時期である。埋土や層上面には、遺構、遺物は少ない。

**第２層**（10世紀後半から11世紀前半）

埋土に炭化物・焼土や土器・瓦片を多量に含む。南半に東西溝15をはじめ、少数であるが遺構が成立する。

**第１層**（11世紀後半から12世紀前半）

整地層にやや締まりがない。埋土に炭化物・焼土や土器・瓦片を多量に含む。北半と南半の比高差をなくし、上面は平坦化される。

以上の各整地層の特徴を踏まえた上で、第２層以下で確認した地形変換点についてと、各面の維持管理についてまとめておく。

**①地形変換点について**

先に述べたように、第２層以下の整地層はX=－108,780ｍおよび－108,784ｍライン付近に傾斜の変換点を見いだせる。特に、第５層で整地層の路面状の舗装と傾斜の変換点を明らかにしたことは、南下がりの緩斜面である大庭の中に、東西方向の平坦面を意図的に確保していたことを示している。大庭内での地形変換点は、中和院前の調査（図７－４）でも指摘されている。ここでの変換点はX=－108,770ｍライン付近で、南北で約0.3ｍの段差が確認されている。南側の整地は径0.5～1.0㎝の礫を密に敷き固めており、第５層と類似する点も多い。一方で、北側には瓦溜まりや土器廃棄土坑が掘られており、北に隣接する５・６でも同様の傾向が認められる。したがって、この南北約10ｍ間こそが、内裏建礼門を出た天皇が大極殿へと出御するために確保された通路としての平坦面であったと指摘したい。

②各面の維持管理

また、第５層は第４層が成立するまで百年以上にわたって維持されている。上面には遺物の散布や遺構はほとんどなく、貞観18年（876）の大極殿院焼亡の火災痕跡も認められないことから、管理が徹底されていたことがわかる。宮内の掃除については、『延喜式』に様々な規定がある。巻二十二民部上には、「凡毎月晦日。令諸司仕丁掃除宮中。」、巻三十六主殿寮には「毎日早朝。頭率僚下。掃除御前及宮掖所所。」、巻四十六左右衛門府には「凡八省院廻。左右相分掃除。」とあり、第５層の状況はこの規定が守られていたと見るべきであろう[5)]。第４・３層についても、整地層内にはほとんど遺物が含まれず、成立する遺構も少ないことから、掃除、捲き砂が行われ維持管理され続けている。

しかし、10世紀後半から11世紀前半に成立する第２層は、炭化物・焼土を多量に含み、整地層内に含まれる土器、瓦の出土量が増大するなど、整地状況が大きく変化する。これは、天徳４年（960）の内裏焼亡以降、歴代天皇は里内裏に居住し、内裏を不在にする期間が長くなることと対応するものと捉えられる。

11世紀後半から12世紀前半に整地される第１層では、第２層以下の地形に準じた整地と異なり、南下がりの傾斜を埋め整地層上面の平坦化が実施されている。第１層上面の標高は45.05ｍであり、これは図７－１で検出した大極殿院北回廊北縁基壇を覆う。ここの調査でもやや時代が遡るものの、平安時代後期に基壇が埋められたことがわかっている[6)]。これらの大規模な整地の契機としては、11世紀第３四半期の後三条天皇による大極殿再建、嘉承２年（1107）の鳥羽天皇による大極殿修理が挙げられるが、保元３年（1158）の信西入道による八省院修造の可能性も残る。ここでは、当該期に大規模な修造があった事実を指摘するに留めたい。

以上、調査で明らかになったことに推論を交えて述べた。大庭の発掘調査例は少ないため、整地層の状況には不明な点も多く、場所によって整備の状況が異なる可能性も十分に考えられる。今後の調査成果を待って、再度検討していきたい。

註

１）　西森正晃「平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度』　京都市文化市民局　2008年

２）　平安時代前期には射礼が行われる場所は定まっておらず、建礼門前で行われるようになるのは、９世紀後半、清和朝以降である。

３）　下記の数字は、図７　周辺調査位置図の番号と一致する。

　１　木下保明「平安宮大極殿院」『平安京跡発掘調査概報　昭和59年度』　京都市文化観光局　1985年

　２　辻　純一「平安宮大極殿院（１）」『平安京跡発掘調査概報　昭和60年度』　京都市文化観光局　1986年

　３　梅川光隆「平安宮大極殿院（２）」『平安京跡発掘調査概報　昭和60年度』　京都市文化観光局　1986年

4　梅川光隆「平安宮中和院南」『平安京跡発掘調査概報　昭和62年度』　京都市文化観光局　1988年

5　家崎孝治ほか「平安宮中和院」『平安京跡発掘調査概報　昭和59年度』　京都市文化観光局　1985年

6　梶川敏夫「中和院跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡（京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅰ）』　京都市文化観光局文化財保護課　1975年

7　鈴木久男・南　孝雄「平安宮大極殿東」『平安京跡発掘調査概報　平成３年度』　京都市文化観光局　1992年

8　前田義明「平安宮中務省（１）」『平安京跡発掘調査概報　平成３年度』　京都市文化観光局　1992年

9　吉村正親「平安宮中務省（２）」『平安京跡発掘調査概報　平成３年度』　京都市文化観光局　1992年

10　布川豊治「平安宮内裏跡・聚楽遺跡１」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成21年度』　京都市文化市民局　2010年

4）　出土土器の年代については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年に準拠する。

5）　ただし、宮内の掃除や捲き砂については、遅くとも11世紀以降は検非違使が担っている。
丹生谷哲一『検非違使－中世のけがれと権力－』　平凡社　1986年

6）　註３－１参照

# Ⅱ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

## １．調査経過

本調査は、個人住宅兼診療所の新築工事による文化庁国庫補助事業伴う発掘調査である。調査地は平安宮朝堂院の正門である応天門基壇の南東角部分に推定されている。応天門の基壇は東西約36ｍ、南北約14ｍと推定されており、現在の千本通が中央を南北に貫いている。敷地は千本通の東、東西道路とのＴ字路交差点の南東角地である。当敷地内では、1978年に敷地東側で試掘調査が行われている（表１－調査１）。また、当地周辺は古墳時代を中心とする聚楽遺跡の範囲内にも含まれている。

今回の調査では、応天門基壇跡の南東隅部の検出が予想されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市保護課」という。）の指導のもと、敷地の北西部に東西６ｍ、南北4.5ｍ、北側のみ幅２ｍで東へ４ｍ延長する形の調査区を設定した（図２）。

調査は重機掘削によって近・現代の耕作土および盛土を除去し、その後人力によって行った。その結果、地表下１ｍ（標高37.1ｍ）前後でほぼ平坦ないわゆる地山を検出し、平安時代の遺構は全く検出できなかった。写真撮影および、実測図などの記録を作成し、調査を終了した。なお、調査中の排土は敷地内に仮置きし、その土で埋戻しを行った。

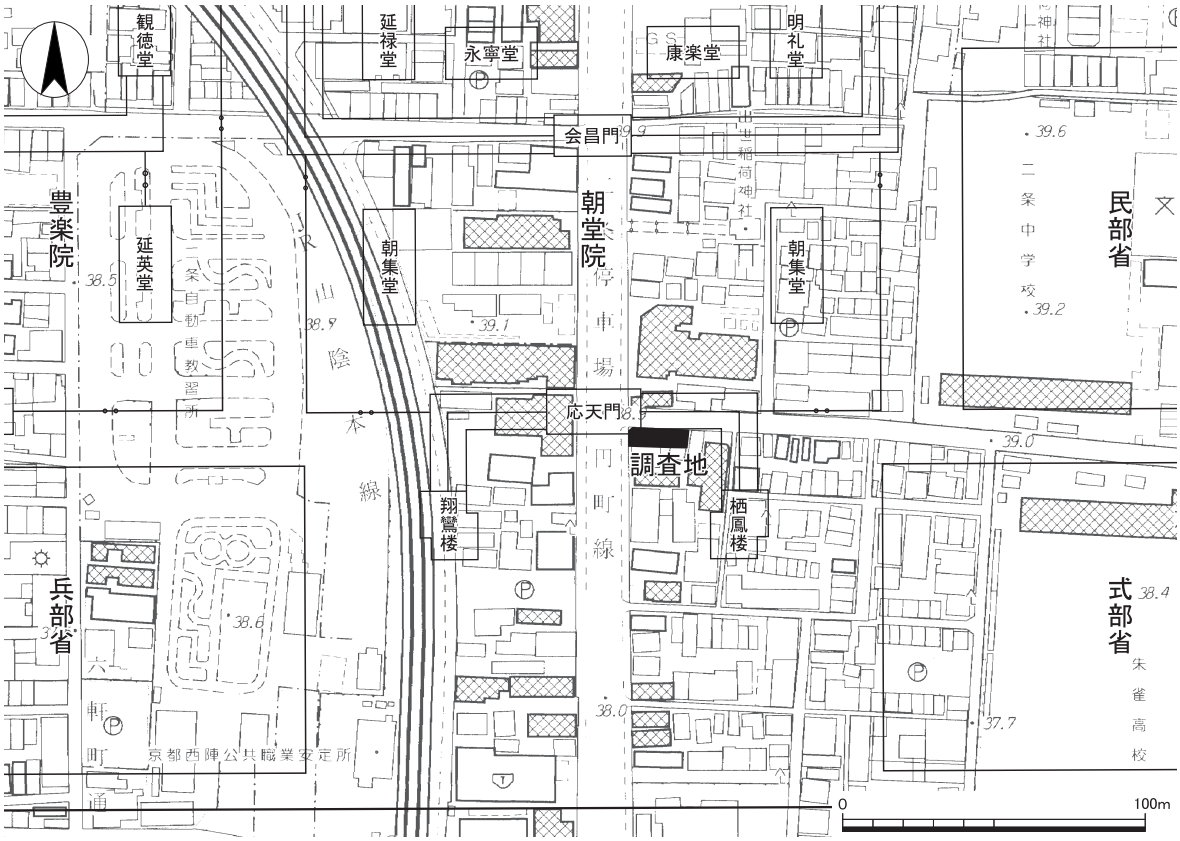



図１　調査位置図（１：2,500）

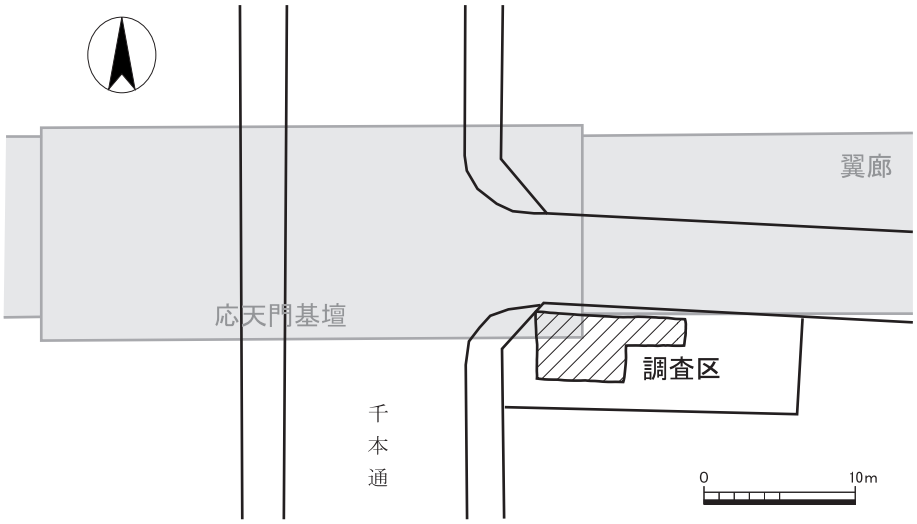



図２　応天門基壇推定位置と調査区配置図（１：500）

図３　調査前全景（南西から）

図４　作業風景（南東から）

図５　調査区全景（東から）

## 2．遺構・遺物

調査地は北側が東西道路、西側が南北道路である千本通に面する北西角地で、調査時は既往の建物が解体撤去され、現地表はほぼ道路面と等しく平坦に均された状態であった。現地表の標高は38.1ｍ前後である。

基本層序は、現代盛土が厚さ0.5ｍ前後、江戸時代以降とみられる耕作土が厚さ0.5ｍあり、これらを取り除いた直下が地山面となった。検出した地山面はほぼ平坦であり、全面同質の粗砂礫の多く混じる細砂からシルト層であるが、おおよそ北半はにぶい黄褐色、南半は青灰色を呈していた。それぞれ、上部土層などの状態に起因する酸化、あるいは還元作用による発色と考えられる。調査区平面図（図６）にその範囲を明示した。

地山面は平坦で遺構は皆無であり、今回の調査の主目的であった朝堂院正門である応天門に関する遺構は検出できなかった。

遺物は整理コンテナに１箱、いずれも江戸時代以降の耕作土などから出土した。土器類を中心に土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、ほかに瓦類があるが、いずれもごく少量で小片ばかりである。

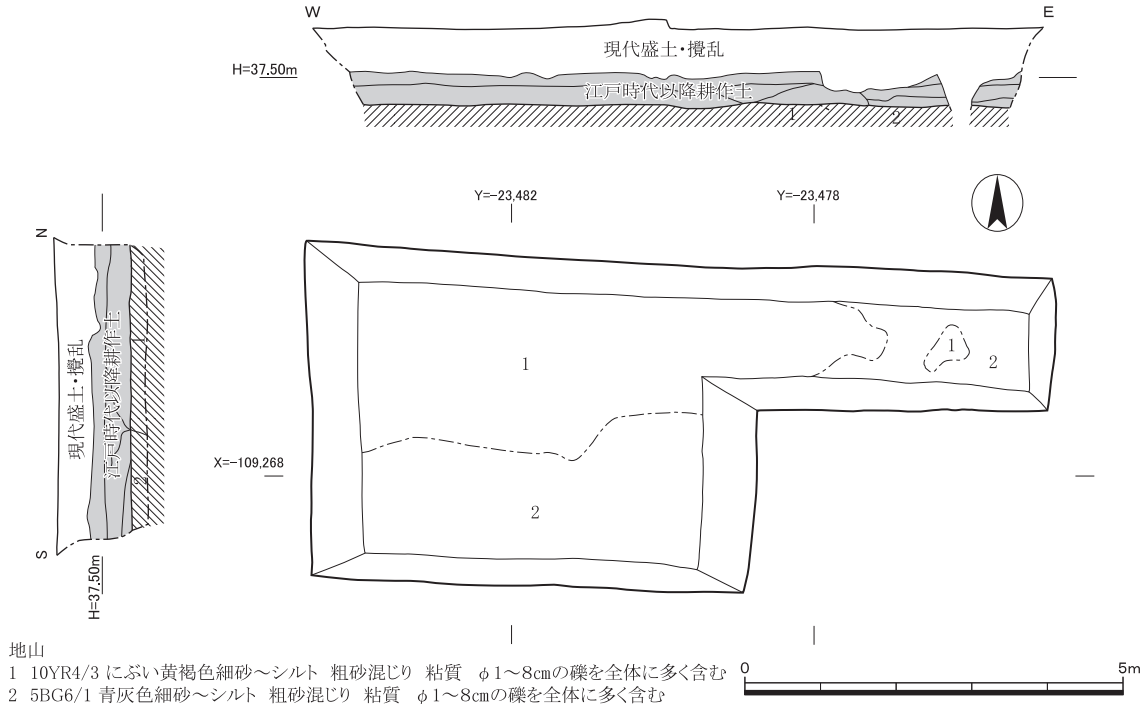



図６　調査区実測図（１：100）

表１　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 江戸時代以降 | 土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦類 | １箱 | | ０箱 | １箱 |
| 合　計 | | １箱 | ０点（０箱） | ０箱 | １箱 |

## ３．まとめ

本調査では、平安宮朝堂院の正門、応天門跡の基壇南東隅に的を絞って調査区を設定した。しかし、地表下１ｍ前後まで江戸時代以降の土層が及んでおり、その直下で細砂からシルト（混粗砂礫）の地山を検出したにとどまった。また、古墳時代の聚楽遺跡に関連する遺構・遺物も全く検出できなかった。

応天門基壇推定地を中心として図示した範囲（図７）において、これまでに行われた調査を表１にまとめた。発掘調査は本調査をあわせて５件、試掘調査７件、立会調査17件、合計29件ある。これらのうち、推定される応天門基壇跡に対する調査は、これまで本調査のほかに発掘調査２件（調査３・９）、立会調査１件（調査13）が行われている。基壇跡の西辺で実施した調査３では、推定基壇の外縁で小礫を多く含む土坑を７基検出したが、平安時代から中世と時期が明確ではない。また、調査９では地山面で平安時代の土坑を検出したが基壇との関連は明らかではない。これらの調査では応天門基壇に関連する遺構は検出されなかった。

図７および表２に示した他の調査の成果では、調査16で平安時代の東西方向の溝を検出している。そのほかの地点では、巡回時に工事掘削が終了していて調査できなかった調査４件もあるが、本調査と同様に地表下１ｍ前後まで現代盛土・江戸時代の耕作土・遺物包含層、その直下が地山層となり、江戸時代以前の遺構や土層は確認されない事例がほとんどである。これらの調査で検出される地山層は、いずれも砂礫を主体としている。通常平安宮域における遺構成立面は、砂礫層の

図７　応天門跡周辺調査地点図（１：1,000）

表２　周辺調査一覧表

| 調査 | 調査期間 | 調査方法 | 調査内容 | 調査記号 | 文献番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1978.03.24 | 試掘 | 本調査同一敷地の東端部。土層は本調査と同じ。 | 図版23-79 | 3 |
| 2 | 1979.09.18 | 立会 | 地表下１ｍまで泥土堆積、以下地山。 | 79-294 | 1 |
| 3 | 1979.12.10～1980.01.31 | 発掘 | 地表下１ｍまで近・現代盛土、-1.5ｍまで江戸時代耕作土、以下地山。平安時代から中世の土坑17基。 | 79HK-HA004 | 15 |
| 4 | 1980.04.11 | 立会 | 掘削近現代層内にとどまる。 | 80BB-HQ001 | 2 |
| 5 | 1980.07.29 | 試掘 | 地表下1.04ｍまで現代盛土、～1.36ｍまで江戸時代耕作土か、以下地山。 | 80BB-HQ019 | 2 |
| 6 | 1982.05.12 | 立会 | 巡回時工事終了。 | 82BB-HQ012 | 4 |
| 7 | 1984.09.11 | 立会 | 巡回時工事終了。 | 84BB-HQ025 | 5 |
| 8 | 1987.06.01 | 立会 | 地表下0.35ｍで地山、これに切り込む土坑(時期不明)。 | 87BB-HQ014 | 6 |
| 9 | 1987.11.21～12.13 | 発掘・立会 | 地表下0.7ｍまで現道路整地、～0.9ｍまで江戸以降の耕作土か、以下地山。平安時代の土坑２。 | 87HK-LX | 9 |
| 10 | 1988.06.11 | 立会 | 地表下0.55ｍで江戸時代遺物包含層。 | 88BB-HQ029 | 7 |
| 11 | 1989.05.26 | 試掘 | 地表下0.75～0.84ｍで地山。 | 89BB-HQ014 | 8 |
| 12 | 1990.07.23～08.04 | 発掘 | 江戸時代の粘土採掘土坑、時期不明小土坑。 | 90HK-IT002 | 11 |
| 13 | 1991.08.23・26 | 立会 | 地表下0.45～0.75ｍ江戸時代の湿地状堆積、以下地山。 | 91BB-HQ178 | 10 |
| 14 | 1993.07.06 | 立会 | 地表下0.25ｍで炭を含む層 | 93BB-HQ117 | 12 |
| 15 | 1994.05.31 | 立会 | 地表下0.15ｍまで現代盛土。 | 94BB-HQ082 | 13 |
| 16 | 1994.07.25 | 試掘 | 地表下1ｍで平安時代の東西溝(幅2.1ｍ、深さ0.2ｍ)。 | H6-027 | 14 |
| 17 | 1995.10.11・12 | 立会 | 地表下0.34ｍで時期不明遺物包含層 | 95BB-HQ282 | 16 |
| 18 | 1995.11.29 | 立会 | 巡回時工事終了。 | 95BB-HQ341 | 16 |
| 19 | 1996.05.27・28 | 立会 | 地表下0.3ｍまで盛土。 | 96BB-HQ087 | 17 |
| 20 | 1997.01.20 | 試掘 | 地表下0.75ｍ以下地山。遺構なし | H9-004 | 18 |
| 21 | 1997.07.07～1998.03.30 | 発掘 | (17区Ａ)地表下0.9～1.1ｍ以下地山、江戸時代の土取り穴。(17区Ｂ)地表下1.1～1.2ｍ以下地山、江戸時代の土取り穴。 | 97HK-UX001 | 19 |
| 22 | 1998.03.12 | 立会 | 巡回時工事終了。 | 97BB-HQ482 | 20 |
| 23 | 2001.08.09・10 | 立会 | 地表下0.14ｍで江戸後期遺物包含層。 | 01BB-HQ154 | 21 |
| 24 | 2003.02.20、06.17・19・20、07.15 | 試掘 | 調査区３箇所。地表下1～1.3ｍ以下地山。 | H15-002 | 22 |
| 25 | 2003.05.13・14 | 立会 | 地表下0.5ｍ以下地山。 | 03BB-HQ041 | 23 |
| 26 | 2003.06.16・18・19 | 立会 | 地表下0.4ｍで近世の遺物包含層。 | 03BB-HQ090 | 23 |
| 27 | 2006.12.04 | 試掘 | 地表下1.8ｍ前後以下地山。 | H18-037 | 24 |
| 28 | 2012.09.26 | 立会 | 地表下0.25ｍまで現代盛土。 | 12BB-HQ238 | 25 |
| 29 | 本調査 | 発掘 | 地表下１ｍ前後以下地山。 | 13HK-AR001 | 本書 |

上位層として検出される黄褐色系の砂泥層であるが、当地周辺では認められなかった。また、工事掘削による深度が浅く地山層を確認できていない調査についても、地表下0.5ｍ前後まで現代盛土あるいは江戸時代の耕作土・遺物包含層などとなっており、同様の状態とみて良さそうである。

これまで、平安宮朝堂院跡はもとより、平安宮跡内の調査では現地表面直下あるいはさほど深くない位置で平安時代の遺構を検出してきている。先に示したように、当地周辺においては地表下１ｍ前後で砂礫を主体とする地山層が検出され、その直上に江戸時代の耕作土や遺物包含層が検出される。このような成果は少なくとも江戸時代以降には平安時代の遺構、つまり朝堂院や応天門に関連する遺構は、それらが成立していた黄褐色系砂泥層の地山とともに壊されて失われていることを示している。そして、それは比較的広い範囲に及んでいるとみられる。

江戸時代の絵図[1)]などによれば、当地周辺は二条城の西側に配されている御蔵奉行所屋敷や御蔵屋敷などのさらに西側の「野畠」や「田畠」と表記されている地域にあたっている。これは先に挙げた当地周辺の調査成果と一致しており、平安時代の遺構は江戸時代には土取りなどによって失われ、田畑地として利用されたと考えられる。

註

1）『寛永後万治前　洛中絵図』（中井家旧蔵・京都大学付属図書館蔵）、『寛永一四年　洛中絵図』・『寛永一八年　洛中絵図』（宮内庁書陵部蔵）など。

文献一覧（表２　周辺調査一覧表の文献番号に対応する）


1　『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和54年度　京都市文化観光局文化財保護課　1980年

2　『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査センター　1981年

3　『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1981年

4　『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度　京都市文化観光局　1983年

5　『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度　京都市文化観光局　1985年

6　『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　京都市文化観光局　1988年

7　『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度　京都市文化観光局　1989年

8　『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度　京都市文化観光局　1990年

9　家崎孝治・本　弥八郎「平安宮朝堂院」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年

10　『京都市内遺跡立会調査概報』平成３年度　京都市文化観光局　1992年

11　平田　泰「平安宮朝堂院・豊楽院跡」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年

12　『京都市内遺跡立会調査概報』平成５年度　京都市文化観光局　1994年

13　『京都市内遺跡立会調査概報』平成６年度　京都市文化観光局　1995年

14　『京都市内遺跡試掘調査概報』平成６年度　京都市文化観光局　1995年

15　堀内明博「朝堂院跡」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

16　『京都市内遺跡立会調査概報』平成７年度　京都市文化市民局　1996年

17　『京都市内遺跡立会調査概報』平成８年度　京都市文化市民局　1997年

18　『京都市内遺跡試掘調査概報』平成９年度　京都市文化市民局　1998年

19　小檜山一良・小松武彦・平田　泰・長戸満男「平安宮左馬寮－朝堂院・平安京右京一・二条二～四坊」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年

20　『京都市内遺跡立会調査概報』平成10年度　京都市文化市民局　1999年

21　『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度　京都市文化市民局　2002年

22　堀　大輔「平安宮朝堂院応天門跡・聚楽遺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成15年度　京都市文化市民局　2004年

23　『京都市内遺跡立会調査概報』平成15年度　京都市文化市民局　2004年

24　『京都市内遺跡試掘調査報告』平成18年度　京都市文化市民局　2007年

25　『京都市内遺跡詳細分布調査報告』平成24年度　京都市文化市民局　2013年

# Ⅲ　平安宮右近衛府跡・鳳瑞遺跡

## １．調査経過

調査地は、京都市上京区御前通下立売上る二丁目仲之町294である。当地は平安宮跡の西方官衙群のうち右近衛府の西端にあたり、当地西端に宮の西限である宮西面築地（＝西大宮大路東築地）推定ラインが南北に通る。また、古墳時代から奈良時代の集落跡である鳳瑞遺跡にも該当する。この地に共同住宅新築工事が予定され、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導により、発掘調査が当研究所に委託された。

これまでに、宮西面築地に関する調査は６件ある（図５、表１）。調査６では大規模な攪乱により遺構は残存していなかったが、調査１～４ではいずれも西面築地の外溝と思われる２～３条平行する南北溝（いわゆる「隍」）を検出している。調査５では推定線の東で東へ下がる落ち込みを確認している。

今回の調査地では、西面築地およびその東側に想定される内溝などの遺構の検出につとめた。調

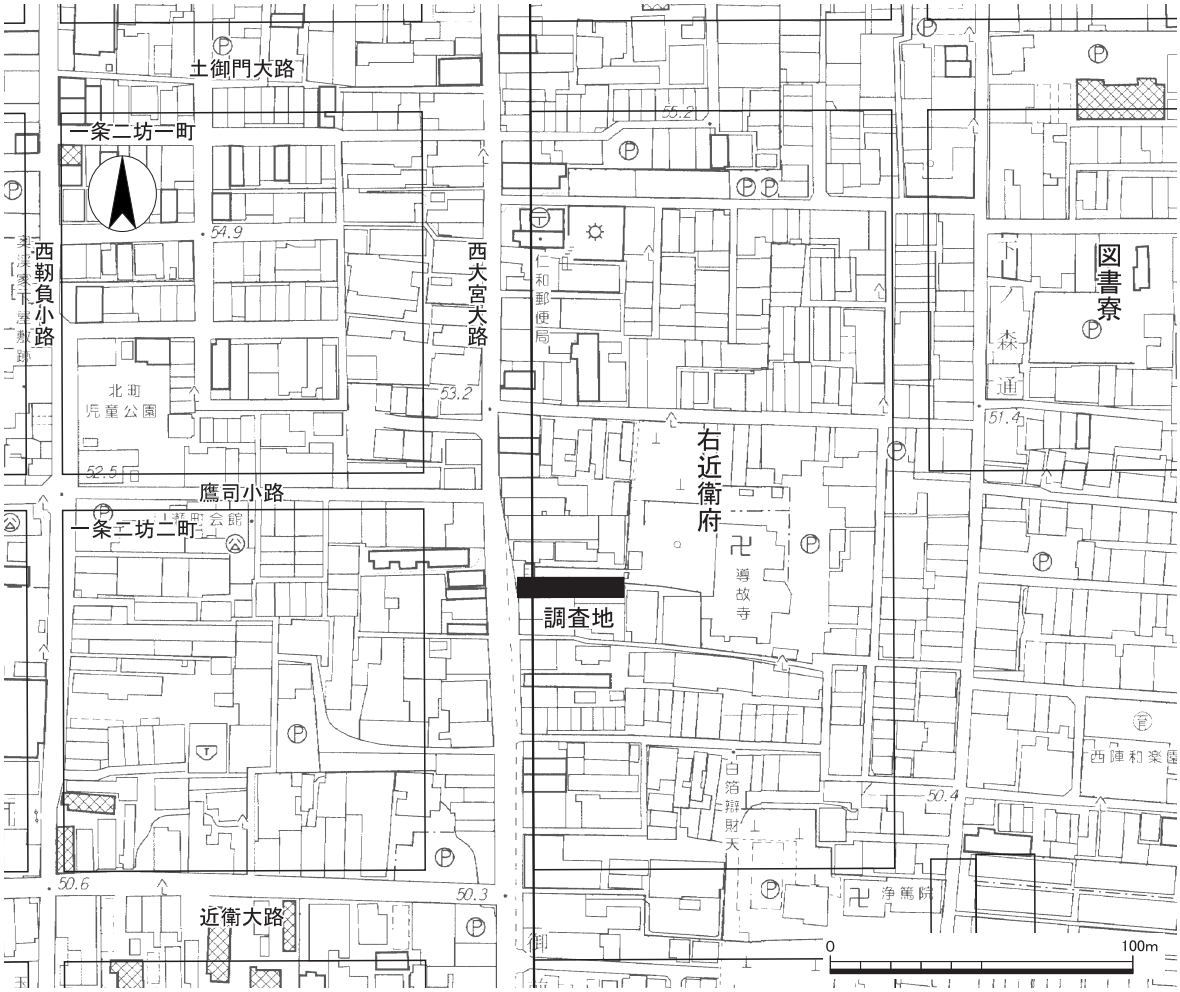



図１　調査位置図（１：2,500）

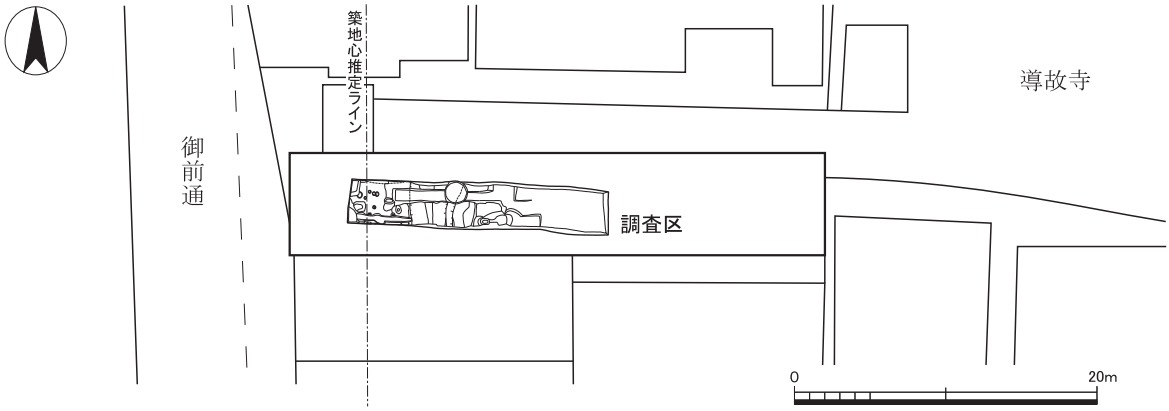



図２　調査区配置図（１：500）

図３　調査前全景（南西から）

図４　作業風景（北東から）

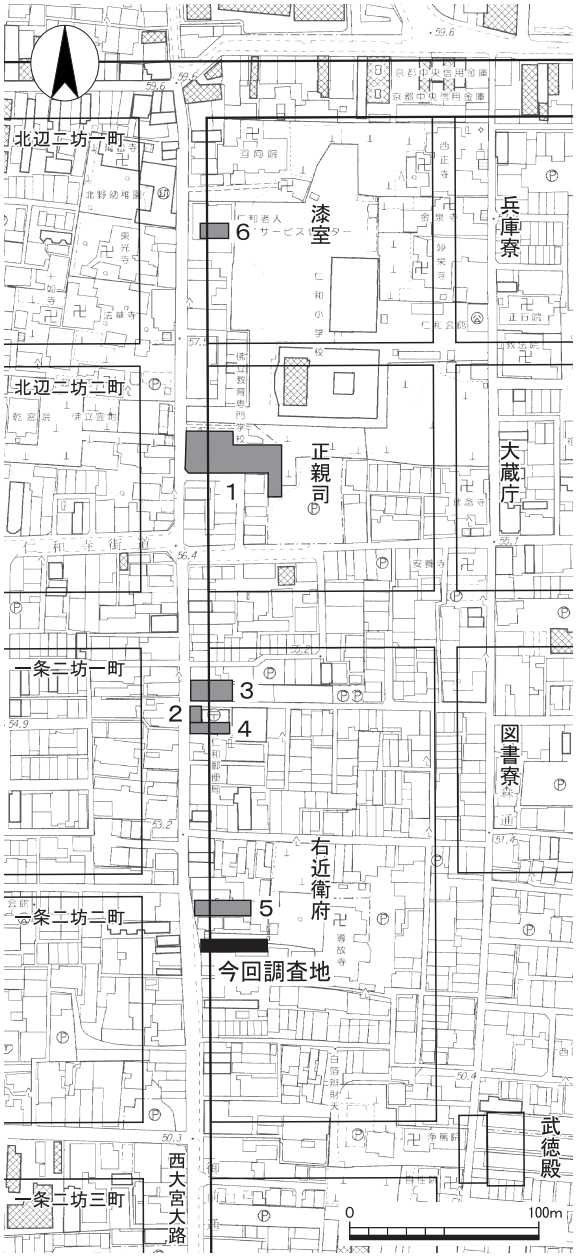



図５　西面築地付近の調査位置図（１：4,000）

査は、文化財保護課の実施した試掘調査結果を基に、東西17ｍ、南北幅３ｍの調査区を設定した。調査面積は51㎡である。５月20日から開始し、重機で遺構面直上まで掘削の後、人力による作業に切り替えて実施した。その結果、西面築地の基底部と内溝、土坑などを検出した。その後、文化財保護課と協議の上、築地の基底部を一部

表１　西面築地付近の調査一覧表

| No. | 調査年度 | 調査方法 | 所在地 | 検出遺構 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1978 | 発掘 | 上京区仁和寺街道御前東入鳳瑞町219 | 平安時代前期～後期の南北溝２条。 | 平田　泰「平安宮正親司」『本門仏立宗第二仏立会館新築に伴う発掘調査の概要』昭和53年度　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1981年 |
| 2 | 1984 | 発掘 | 上京区御前通下立売上る三丁目西上之町253-1.2 | 平安時代前期～室町時代の南北溝６条。 | 梅川光隆「平安宮西限」『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度　京都市文化観光局　1986年 |
| 3 | 1990 | 発掘 | 上京区御前通上長者町上る西上之町251 | 平安時代前期～後期の南北溝４条・土坑・柱穴。 | 辻　裕司「平安宮西限（１）」『平安京跡発掘調査概報』平成２年度　京都市文化観光局　1991年 |
| 4 | 1990 | 発掘 | 上京区御前通下立売上る三丁目西上之町255 | 平安時代前期～後期の南北溝５条・土坑・柱穴。 | 辻　裕司「平安宮西限（２）」『平安京跡発掘調査概報』平成２年度　京都市文化観光局　1991年 |
| 5 | 2000 | 立会 | 上京区御前通下立売上る二丁目仲之町285 | 平安時代前期の落込の西肩。 | 吉本健吾「平安宮右近衛府跡、鳳瑞遺跡（00ＨＱ299）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度　京都市文化市民局　2002年 |
| 6 | 2001 | 発掘 | 上京区御前通一条下る東竪町132-1（仁和小学校） | 江戸時代後期の土坑・柱穴。 | 大立目　一『平安宮漆室跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-4　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年 |

断ち割り、断面調査を行った。５月31日までに図面・写真などの記録を取り、埋め戻しを行い調査を終了した。

## ２．遺　　構

層序は、全体的に均一ではなく、削平などにより攪乱（現代層）が地山に達しているところも見られる。ただし、北壁の東半については一部現代層直下に整地土（中世の遺物包含層）が地表下0.6ｍまであり、それ以下は、遺構により削平されている部分もあるが、地山となっている。

調査の結果、平安時代前期の平安宮西面築地の基底部とみられる高まり、および平安時代後期の内溝などを検出した。以下に、その概略を記述する。

### （１）平安時代前期の遺構（第２面、図６、図版８）

**SX１**（宮西面築地基底部）　調査区の西端で検出した築地の基底部と考えられる遺構である。地山の直上に黒色系の土を盛土しているが、版築状の堆積は確認できなかった。検出規模は、北壁で調査区西端から東へ4.2ｍの範囲である。検出長は南北で7.0ｍ以上ある。層厚は0.35ｍある。

**SK５（土器溜り）**（図版９）　調査区の中央部で検出した。検出規模は、北壁で東西5.2ｍ、南壁

表２　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 平安時代前期 | ＳＫ５、ＳＫ13、ＳＸ１ | |
| 平安時代後期 | ＳＤ４ | |

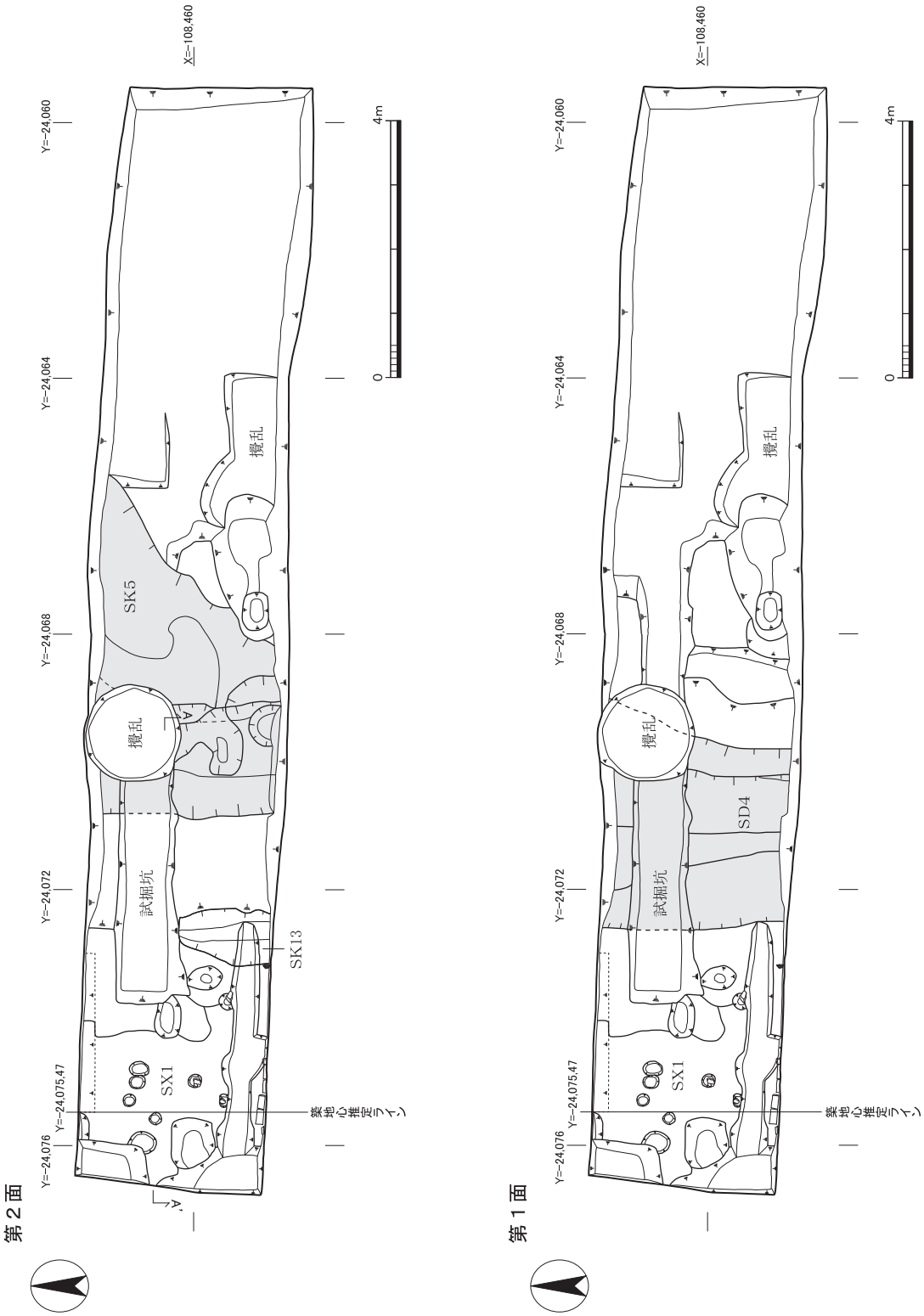



図６　遺構平面図（１：100）

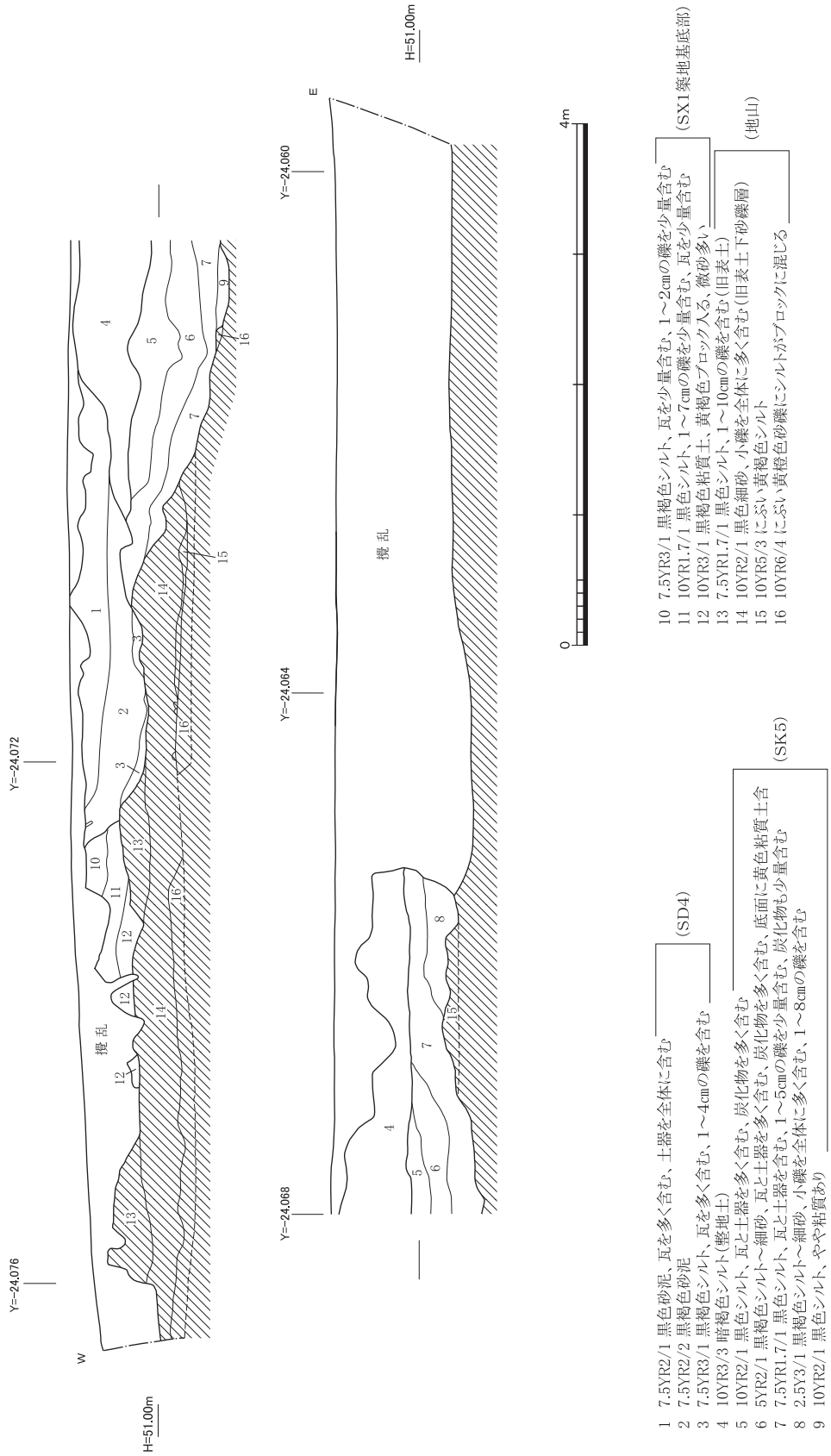
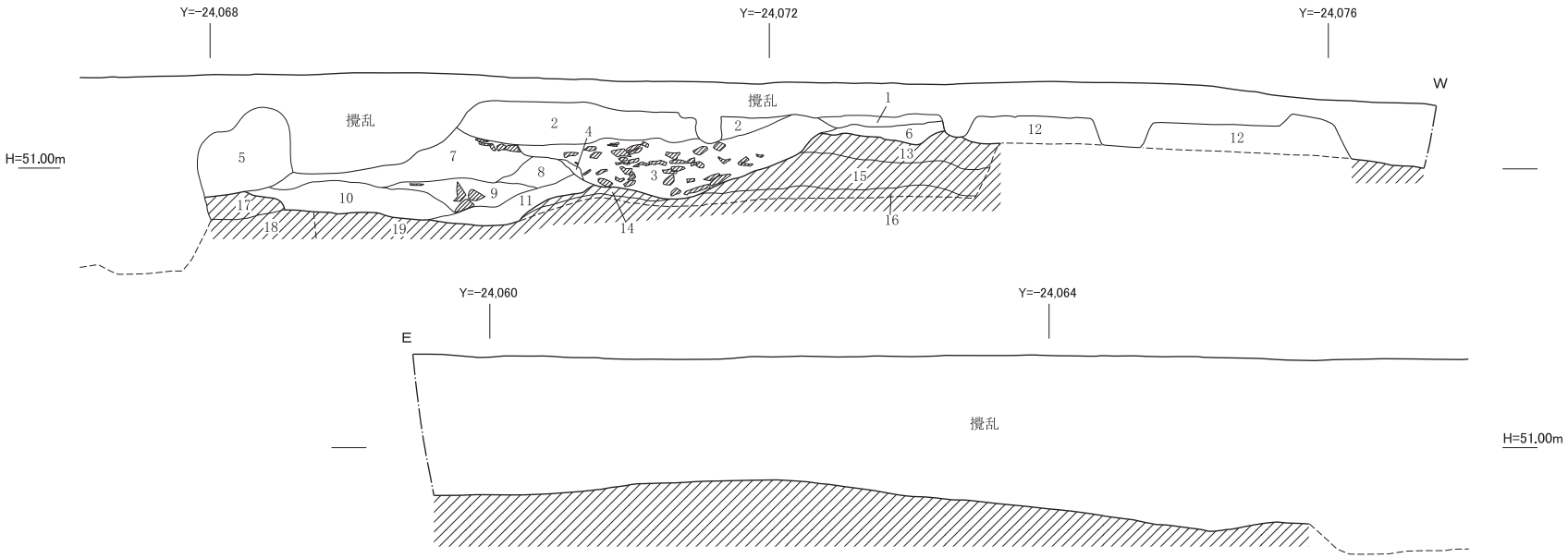

Y=-24.076
Y=-24.072
Y=-24.068
Y=-24.064
Y=-24.060
W
E
H=51.00m
H=51.00m
撹乱
撹乱
0
4m
1 7.5YR2/1 黒色砂泥、瓦を多く含む、土器を全体に含む
2 7.5YR2/2 黒褐色砂泥
3 7.5YR3/1 黒褐色シルト、瓦を多く含む、1～4cmの礫を含む
4 10YR3/3 暗褐色シルト(整地土)
5 10YR2/1 黒色シルト、瓦と土器を多く含む、炭化物を多く含む
6 5YR2/1 黒褐色シルト～細砂、瓦と土器を多く含む、炭化物を多く含む、底面に黄色粘質土含
7 7.5YR1.7/1 黒色シルト、瓦と土器を含む、1～5cmの礫を少量含む、炭化物も少量含む
8 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂、小礫を全体に多く含む、1～8cmの礫を含む
9 10YR2/1 黒色シルト、やや粘質あり
(SD4)
(SK5)
10 7.5YR3/1 黒褐色シルト、瓦を少量含む、1～2cmの礫を少量含む
11 10YR1.7/1 黒色シルト、1～7cmの礫を少量含む、瓦を少量含む
12 10YR3/1 黒褐色粘質土、黄褐色ブロック入る、微砂多い
13 7.5YR1.7/1 黒色シルト、1～10cmの礫を含む(旧表土)
14 10YR2/1 黒色細砂、小礫を全体に多く含む(旧表土下砂礫層)
15 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
16 10YR6/4 にぶい黄橙色砂礫にシルトがブロックに混じる
(SX1築地基底部)
(地山)

図７　北壁断面図（１：50）




1　10YR2/1 黒色シルト、やや粘質あり、1～3㎝礫を含む（近世土間関連土層）
2　10YR3/2 黒褐色シルト、瓦を含む、1～2㎝の礫を少量含む
3　7.5YR3/1 黒褐色シルト、瓦が全体につまる　（SD4）
4　10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、瓦片を少量含む
5　10YR3/2 黒褐色シルト、瓦を含む、1～2㎝の礫を少量含む（整地土）
6　10YR2/2 黒褐色シルト～細砂、瓦片と土器片を少量含む（SK13）
7　7.5YR2/1 黒色シルト、やや粘質あり、瓦と土器片を全体に含む
8　10YR2/1 黒色シルト、やや粘質あり、土器片少量　炭少量含む、小礫混じり
9　7.5YR1.7/1 黒色シルト、やや粘質あり、瓦と土器を全体に多く含む、炭を多く含む　（SK5）
10　10YR1.7/1 黒色シルト～細砂、粘質強い、瓦と土器を全体に多く含む、炭を多く含む、1～4㎝の礫を含む
11　7.5YR2/1 黒色シルト、粘質強い、土器片少量含む、1～6㎝の礫を含む
12　10YR2/1 黒色シルト～細砂、小礫微量混じり（SX1築地基底部）
13　7.5YR1.7/1 黒色シルト、1～10㎝の礫を含む（旧表土）
14　10YR2/1 黒色シルト、粘質強い、1～5㎝の礫を含む（15と同一か）
15　10YR2/1 黒色シルト～細砂、小礫を全体に多く含む（旧表土下の砂礫）
16　10YR6/4 にぶい黄橙色、砂礫にシルトがブロックに混じる　（地山）
17　10YR3/1 黒褐色砂礫、粘質強い、2～10㎝の礫が全体につまる
18　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
19　2.5Y5/4 黄褐色シルト～砂礫、全体に小礫を多く含む

0　4m

図8　南壁断面図（1：50）

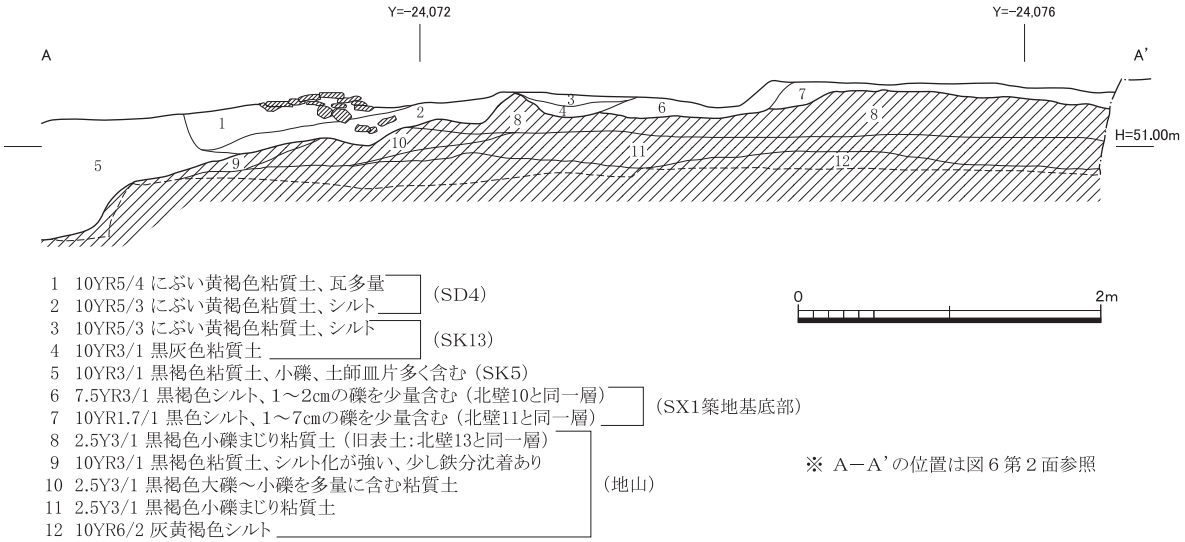



図９　中央部断面図（１：50）

で東西2.1ｍ、深さは北壁断面で0.6ｍある。埋土には多量の平安時代初頭の土器と炭化物が含まれている。西肩のラインが南北方向に揃い、溝状を呈しているが、後述する平安時代後期の内溝の可能性があるSD４からさらに２ｍ近く東に位置していることから、築地の内溝とは考えがたい。最上層（図８－７層）には平安京Ⅰ期新段階[1)]の土器が少量あるが、他は平安京Ⅰ期中段階に収まる。

**SK13（築地基底部修復痕）**（図版９）　検出規模は、東西0.9ｍ、南北1.5ｍ、深さ0.15ｍある。SX１（築地基底部）の東端付近にあり、SD４に東肩の一部を削平されている。何らかの原因で生じた窪地を整地した痕跡と思われる。出土した遺物などから、平安時代前期、平安京Ⅰ期新段階に収まる。

## （２）平安時代後期の遺構（第１面、図６、図版８）

**SD４（内溝）**（図版８）　築地心推定ラインから東へ2.9ｍの位置で西肩を検出した南北方向の溝である。検出規模は、北壁付近で東西幅3.55ｍ、南壁付近で幅3.0ｍ、深さ0.5ｍある。調査区南壁付近には埋土の下層に多量の瓦が折り重なって堆積していたことや、その位置から築地内溝と考えられる。出土した軒瓦の型式から平安時代後期に収まる。

## ３．遺　　物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で24箱である。出土遺物の内訳は、土器が16箱で、瓦が８箱である。土器は大半が平安時代前期のもので、SK５から出土した。瓦は大半が平安時代後期のもので、SD４から出土した。また、SK５から平安時代前期のものも少量出土した。

平安時代前期の土器類には、土師器椀・杯・皿・蓋・鉢・高杯・甕、須恵器杯・蓋・壷・鉢・甕・硯、黒色土器椀・硯、緑釉陶器皿、灰釉陶器椀などがある。軒瓦は唐草文軒平瓦や蓮華文軒丸瓦がある。平安時代後期の土器類には、土師器皿などがある。軒瓦は蓮華文軒丸瓦や剣頭文・剣巴文軒平瓦などがある。その他に攪乱などから鎌倉・室町時代の土器・瓦が出土しているものの、ごく少量である。

### （１）土器類（図10～12、図版10・11）

**SK５出土土器**（図10・11、図版10・11）　土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器がある。

土師器には椀、杯、皿、蓋、鉢、高杯、甕などがある。椀Ａ（１～４）は、口径13.0～14.0㎝、器高3.1～3.9㎝ある。外面はヘラケズリを施すが、口縁部までヘラケズリの及ばないもの（３・４）もある。杯Ａ（５～８）は、口径16.0～18.0㎝、器高3.6～4.3㎝ある。口縁部まではヘラケズリが及ばないもの（５・６）もあるが、他は外面にヘラケズリを施したものである。杯Ｂ（17）は、口径23.9㎝、残存器高7.4㎝ある。外面にヘラミガキを施し、底部に低い高台を貼り付ける。皿（９～16）は、口径19.3㎝、器高2.0㎝の皿Ａ１（16）と、口径15.0～17.5㎝、器高2.0～3.0㎝の皿Ａ２（９～15）がある。大半が外面をヘラケズリするが、底部付近をヘラケズリして口縁部にナデ調整を残すもの（11・13・16）もある。11の口縁部には煤が付着している。杯Ｂ蓋（18）は、口径26.2㎝、残存器高3.1㎝ある。杯Ｂ（17）より大型のものの蓋である。蓋の天井部外面にはヘラミガキが施されている。高杯（19）は杯部のみが確認でき、口径23.3㎝、残存器高2.3㎝ある。外面にはヘラミガキを施す。甕（20）は口径16.5㎝、残存器高8.9㎝ある。体部は口縁より張り出しており、口

表３　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安時代前期 | 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類 | | 土師器21点、須恵器16点、黒色土器３点、緑釉陶器４点、灰釉陶器１点、瓦類４点 | 15箱 | ２箱 |
| 平安時代後期 | 土師器、瓦 | | 瓦７点 | | ６箱 |
| 中　世 | 土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類 | | | | １箱 |
| 合　計 | | 28箱 | 57点（４箱） | 15箱 | ９箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

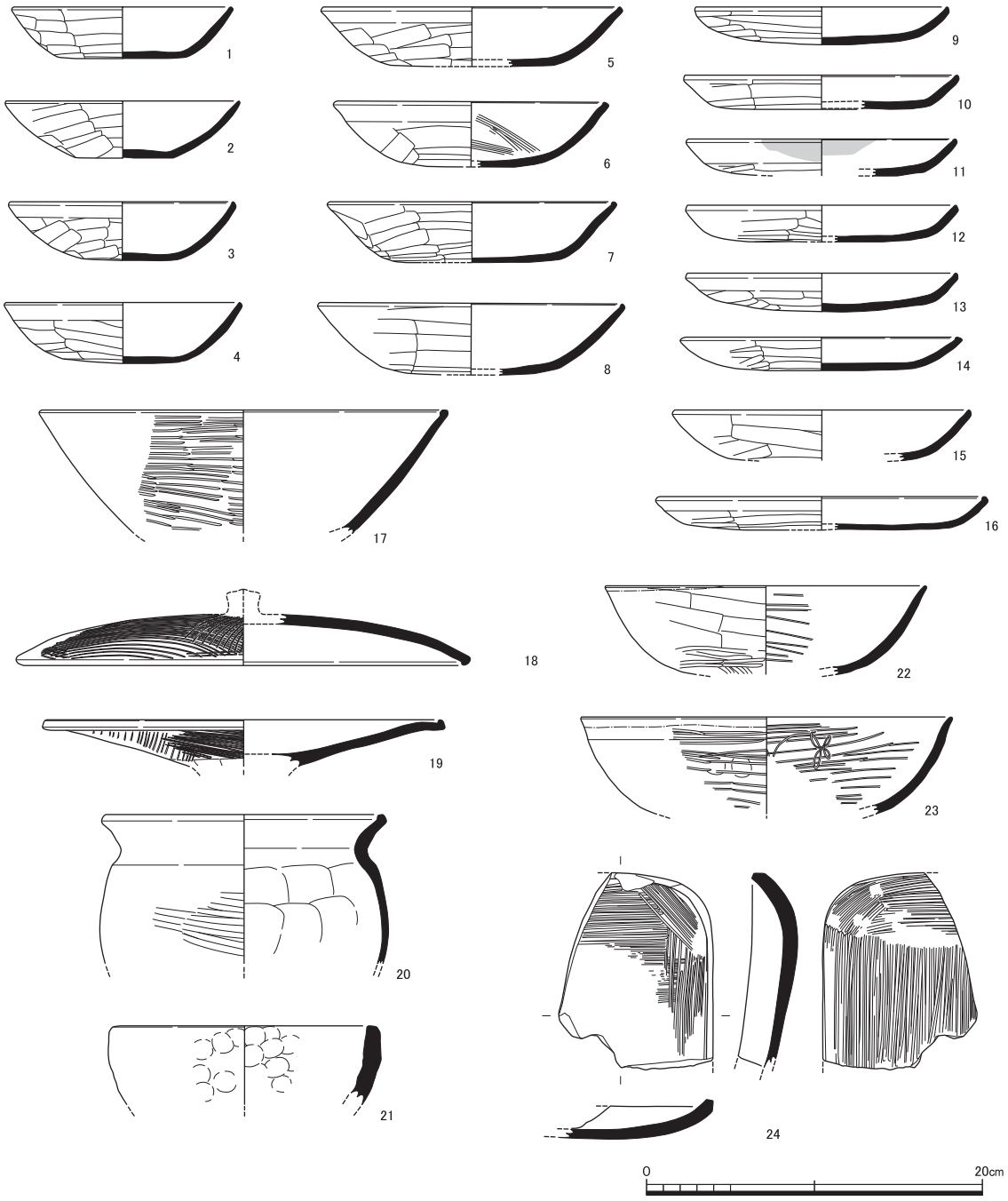



図10　SK５出土土器実測図１（１：４）

縁端部は内側上方へ上げている。内面にオサエ痕、外面ハケメを残す。製塩土器（21）は口径15.6cm、残存器高4.7cmある。白色の石粒を多く含み、指オサエ痕跡を残す粗い造りである。

黒色土器には椀（22・23）と風字硯（24）がある。椀（22）は口径19.0cm、残存器高5.3cmある。外面上半部はケズリを施し、体部下半はヘラミガキを加える。内面はヘラミガキ調整し、黒色化している。椀（23）は口径22.0cm、残存器高5.8cmある。外面はオサエ後にヘラミガキを施す。内面はヘラミガキ調整して黒色化し、さらに螺旋状の暗文を施す。風字硯（24）は海部の破片である。長辺11.8cm、短辺9.3cmある。内外面にヘラミガキを丁寧に施し、側面端部はヘラケズリで面取りをしている。内面は磨滅痕が見られる。

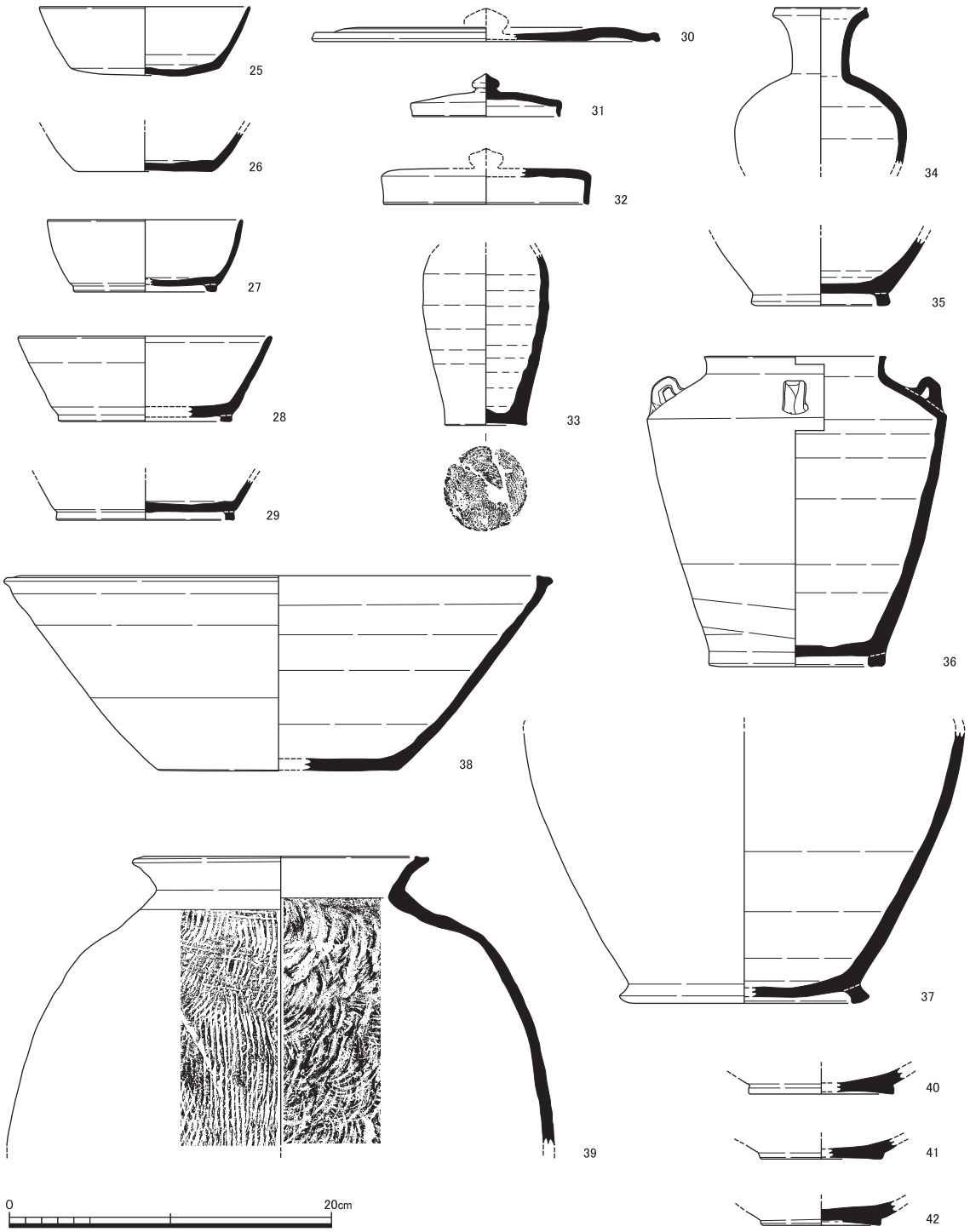



図11　SK５出土土器実測図２（１：４）

須恵器には杯、杯蓋、壷、鉢、甕がある。25・26は杯Ａである。25は口径13.0㎝、底径9.2㎝、器高4.3㎝、26は口径12㎝以上、底径8.2㎝、残存器高2.3㎝ある。ともに高台は付けず回転ナデで仕上げる。杯Ｂ（27～29）は口径12.0～15.6㎝、底径8.8～10.9㎝、器高はそれぞれ4.2㎝、4.7㎝、残存高2.2㎝ある。高台を貼り付けて、回転ナデで仕上げる。杯Ｂ蓋（30）は口径21.2㎝、残存器高0.9㎝以上ある。つまみのあるタイプで、口縁端部が屈曲する。壷蓋（31・32）は口径9.1～12.6㎝、器高2.2～2.7㎝ある。31の蓋表面には降下釉が全面に付着する。33～36は壷である。33は壷

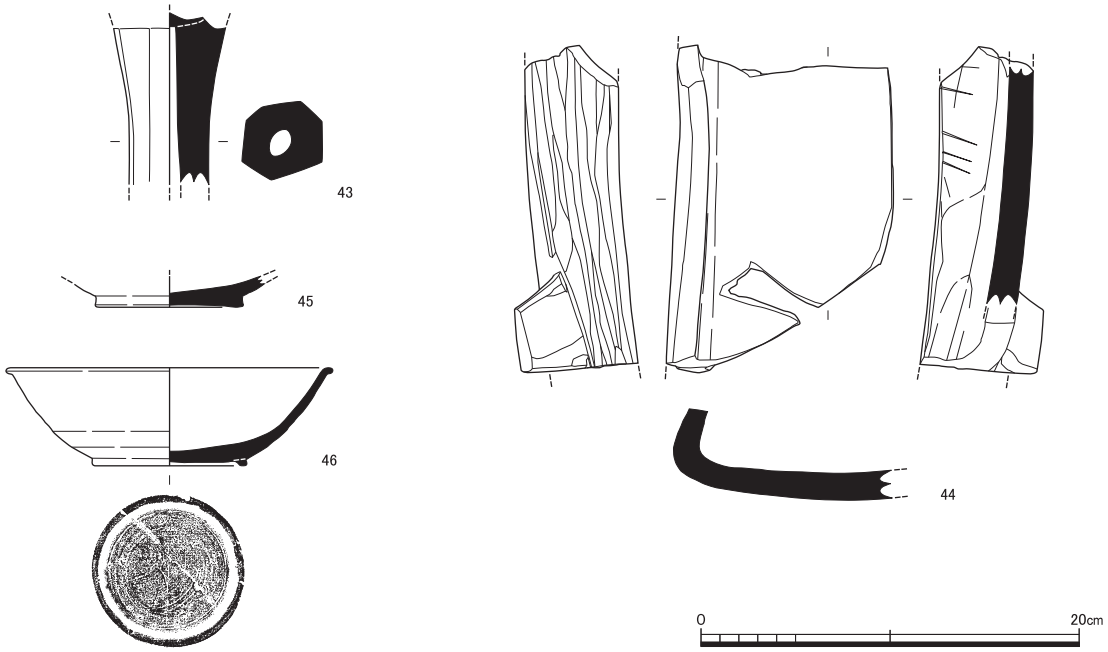



図12　SK13出土土器実測図（１：４）

Gで、口頸部を欠損する。底径は5.0㎝、残存器高は10.6㎝ある。内外面は回転ナデを施している。底部外面には糸切り痕が残る。34は壷Lで、口頸部から肩部にかけての破片である。口径5.6㎝、残存器高9.8㎝ある。内外面に回転ナデを施している。35は底部の破片である。底径8.4㎝、残存器高4.2㎝ある。内外面に回転ナデを施している。高台を貼り付けている。36は四耳壷である。口径11.5㎝、底径9.4㎝、器高19.4㎝ある。内外面にナデを施し、外面下半部はヘラケズリをする。把手と高台は貼り付ける。自然釉が内面底部や外面全体に付着する。37・38は鉢である。37は下半部で、口径27.2㎝以上、底径14.6㎝、残存器高16.8㎝ある。高台を貼り付けていることから、口縁部が「く」字状に屈曲する鉢と考えられる。内面をナデ、外面下部にケズリを施している。38は口径32.3㎝、底径15.0㎝、器高12.1㎝ある。底部は平底で、体部から口縁部は外方に大きく開いている。内面と外面の上半はナデを施し、外面下半はケズリを施している。甕（39）は口縁部から体部上部が残存する。口径16.8㎝、残存器高18.0㎝ある。肩部に以下にタタキ目を施し、内面には同心円状の当て具痕が残る。これらの遺物群は平安京Ⅰ期中段階に収まる。

緑釉陶器（40～42）は上層から出土したもので、いずれも底部のみである。口径10.0㎝以上、底径7.2～8.8㎝、残存器高1.6㎝以下である。施釉は両面に施す。42は蛇目高台で、他は平高台である。洛北産と思われる。平安京Ⅰ期新段階に収まる。

**SK13出土土器**（図12、図版11）　瓦とともに、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器などの土器も少量出土した。

土師器高杯（43）は脚部である。口径6.0㎝以上、残存器高8.0㎝ある。芯を使い成形し中空にして、断面７角形に面取りする。

灰釉陶器椀（46）は口径16.6㎝、器高5.2㎝ある。小さな角高台を貼り付け、内面には灰釉が全面に認められる。

緑釉陶器（45）は底部である。底径7.3㎝、残存器高1.6㎝ある。両面の施釉は剥離が激しく不明瞭である。平高台で洛北産と思われる。

須恵器には風字硯（44）がある。長辺17.3㎝、短辺12.0㎝、残存器高6.5㎝ある。外面底部に脚を貼り付け、ケズリを施す。側面はケズリ、他の内外面はナデで仕上げる。内面底部は使用痕があり円滑である。SK13の遺物群は平安京Ⅰ期新段階に収まる。

## （２）瓦類（図13、図版12）

瓦１・２は単弁14葉蓮華文軒丸瓦である。中房の蓮子は１＋６。蓮弁は細く、子葉はある。蓮弁外郭線が互いに接する。外区は珠文が巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下位は横ケズリ、裏面はナデを施す。瓦２は瓦当部裏面にヘラ記号あり。胎土は粗砂を含み暗灰色で、やや軟質である。西賀茂角社瓦窯NS110型式[2]に類似する。瓦１は表採、瓦２はSK５上層出土。

瓦３は唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きＣ字形が左右に分離し、中に３葉を配し、対葉花文を配する。唐草文は左右に展開し、主葉は連続して大きく反転し、支葉は巻き込む。外区は珠文が密に巡る。曲線顎、瓦当部凹面横ケズリ、側面縦ケズリ。胎土は砂粒を含み暗灰色、やや軟質。凹面と周囲は火を受けて赤色化している。平安時代前期。西賀茂角社瓦窯NS202A型式と同范である。SK５下層出土。

瓦４は唐草文軒平瓦である。唐草文は左右に展開し、主葉は緩やかに反転し、支葉は巻き込み、先端が水滴状になる。外区は珠文が密に巡る。曲線顎。瓦当部凹面および凸面横ケズリ、側面は縦ケズリ。胎土は大粒の砂粒を含み、灰色、やや軟質。火を受けて赤化している部分がある。平安時代前期。西賀茂角社瓦窯NS207型式と同范である。SK５上層出土。

瓦５は単弁蓮華文軒丸瓦である。単弁で子葉ある。三角形の間弁が連続する。瓦当部凸部横ケズリ、裏面オサエ。胎土は微砂粒をわずかに含み、暗灰色、やや硬質。平安時代後期。『木村捷三郎収集瓦図録[3]』（以下「木村図録」とする。）掲載の27と類似している。SD４下層出土。

瓦６は唐草文軒平瓦である。文様は左から右へ偏向する。主葉は連続して大きく反転し、支葉は強く巻き込む。瓦当成形は曲線顎で半折り曲げ。瓦当部凹凸面および側面は横ケズリ。平瓦部凸面に「＋」ヘラ記号あり。胎土は緻密で、淡黄灰色、やや軟質。平安時代後期。木村図録掲載の87と同文である。SD４下層出土。

瓦７は唐草文軒平瓦である。文様は左から右に偏向する。主葉は連続して穏やかに反転し、支葉は強く巻き込む。曲線顎。瓦当成形は半折り曲げ。瓦当部凹面平瓦部は布目痕がある。側面は縦ケズリ、瓦当部凸面は横ナデ。胎土は大粒の砂粒を少量含み、暗灰黄色、軟質。平安時代後期。木村図録掲載の85と同文である。SD４上層出土。

瓦８は剣頭文軒平瓦である。陽刻の剣頭文を配し、外区に珠文を配する。曲線顎。瓦当部成形は半折り曲げの可能性がある。瓦当凹面平瓦部は布目痕が残る。側面および凸面は横ケズリ。胎土は大粒の砂粒を少量含み、暗灰黄色、硬質。平安時代後期。SD４上層出土。

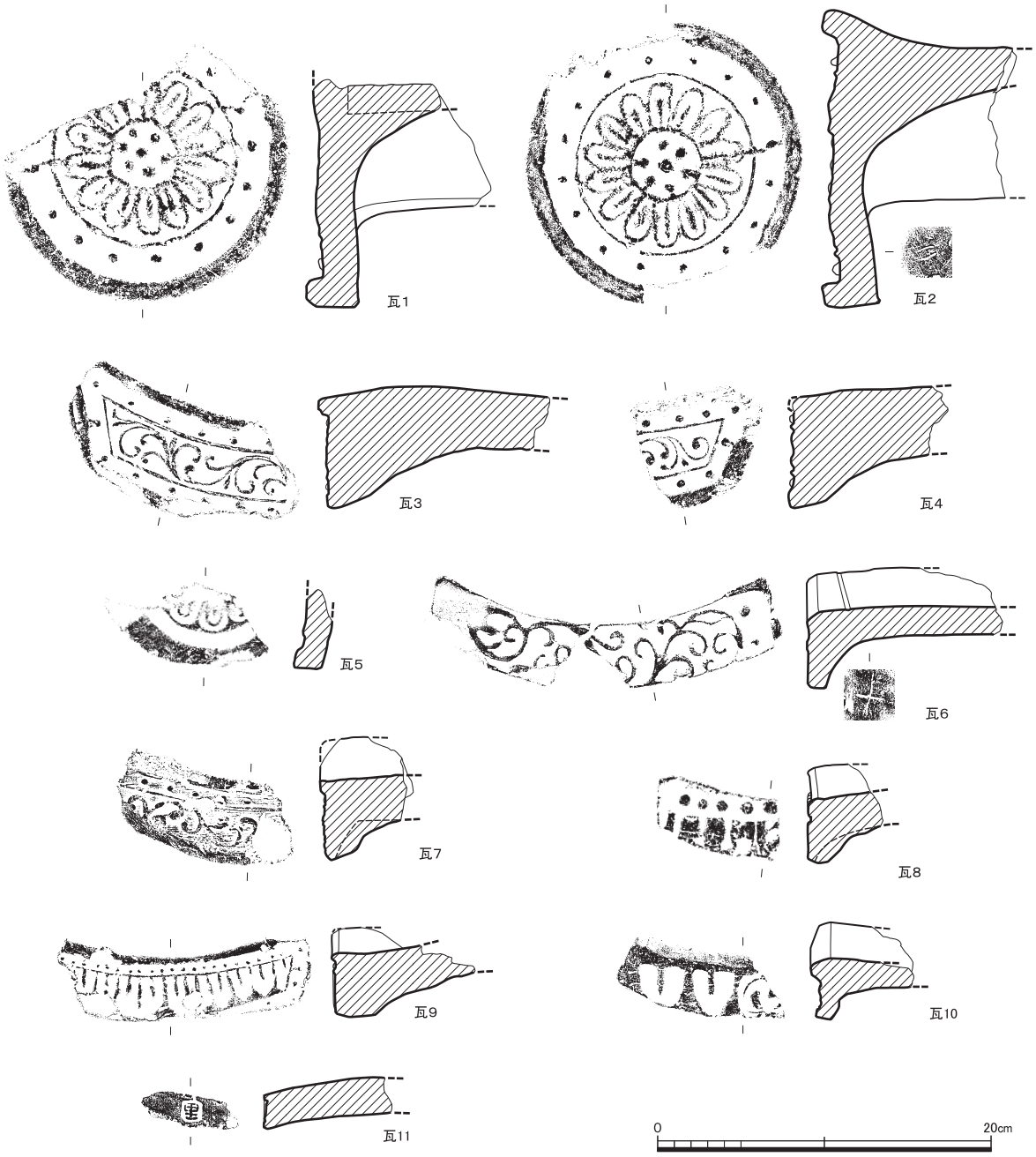



図13　SK５・SD４出土瓦拓影・実測図（１：４）

瓦９は剣頭文軒平瓦である。瓦当右端に脇区境線のため右端が裁断された剣頭文を配する。外区には珠文を巡らす。曲線顎で半折り曲げ技法か。瓦当凹面平瓦部には布目痕が残る。側面は縦ケズリ、凸面は横ケズリ。胎土は大粒の砂粒が少量含まれ、暗灰黄色、やや硬質。平安時代後期。『平安京古瓦図録[4)]』掲載の559と同文である。SD４下層出土。

瓦10は剣巴文軒平瓦。中央に右巻き二巴文を配し、左右に剣頭文を２単位配する。瓦当部成形は折り曲げ。瓦当側面は縦ケズリ、凸面は横ケズリ、裏面はオサエを施す。胎土は灰色、軟質。平安時代後期。木村図録掲載の108と類似する。遺物包含層出土。

瓦11は平瓦の端面に「里」字を刻印してある。凸面は縄目、凹面は布目が認められる。胎土は暗灰色、硬質。平安時代後期。SD４上層出土。

# 4．まとめ

今回の調査についての成果を以下に簡略に記述する。

まず今回調査の最大の成果は、西大宮大路に面する平安宮西面築地の基底部（SX１）および平安時代後期の築地内溝（SD４）を検出したことである。

次に、西面築地基底部はこの付近によく見られる旧表土（いわゆる黒ボク）の上に直接黒色系の土を盛土して造成していることが判明した。検出した盛土には明確な版築の痕跡は確認できなかった。

さらに、内溝は平安時代後期には瓦を含む埋土が堆積し、埋没した状態を示している。平安時代前期・中期の内溝については検出できておらず、平安時代後期の内溝が踏襲してその痕跡が残っていない可能性も考えられる。

最後に、SK５については、西肩の検出ラインがあたかも南北方向の溝の西肩であるかのような様相を示している。今回確認したSK５の特徴としては、堆積状況には水流の痕跡が見られないこと、出土遺物が平安時代初頭のものが大半を占めること、出土遺物の組成が土師器椀・皿・杯の他、土師器甕や須恵器甕・壺など煮炊きや貯蔵用の器種が多いことなどがあげられる。今回の調査地の北10ｍ地点での2000年度立会調査（表１－５）においても、築地芯推定ラインから5.5ｍ（今回調査では5.7ｍ）東の地点で、SK５に類似した落ち込みが検出されている。埋土の色調も類似しており、平安時代前期の土器群の出土が報告されており、官衙群の造営などに伴う土器などの廃棄処理土坑と考えられている。今回のSK５も溝ではなく同様の土坑である可能性が高いと思われる。また、この他にも宮内では、左兵衛府・侍従所跡の調査などに同様の類例がみられる[5)]。

今回の調査で明確にし得なかった諸点については、今後の調査にゆだねたい。なお、鳳瑞遺跡については、今回の調査では遺構、遺物ともに確認していない。

註）

１）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

２）　『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告　第４輯　財団法人古代学協会　1978年

３）　『木村捷三郎収集瓦図録』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

４）　『平安京古瓦図録』　雄山閣　1977年

５）　平尾政幸「平安宮左兵衛府・侍従所跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成21年度　京都市文化市民局　2010年

# Ⅳ　平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡

## 1．調査経過

この調査は、京都市右京区西院月双町88－1で実施した個人住宅建設に伴うものである。調査地は、葛野大路一本東の南北道路と万寿寺通との交差点から北に約50ｍのところに位置する。平安京の条坊では右京六条四坊八町跡にあたり、敷地西側の南北道路は、平安京の山小路を踏襲している。また調査地は、弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡にも含まれる。北隣接地で2006年度に実施した発掘調査では、古墳時代中・後期と奈良時代の竪穴建物、奈良時代の掘立柱建物など多数の遺構を検出している。今回の調査でも当該期の遺構の検出が見込まれたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導により、調査を実施することとなった。

調査は平成25年１月21日から３月19日まで実施した。調査区は文化財保護課の指導に従い、南北10ｍ、東西25ｍに設定した。重機で0.8～1.0ｍまで掘り下げたところで古墳時代から中世の遺構を検出したため、人力掘削に切り替えて調査を行った。遺構はすべて同一面で検出したが、掘立柱建物を中心とした奈良時代末から平安時代の遺構を第１面、竪穴建物を中心とした古墳時代か

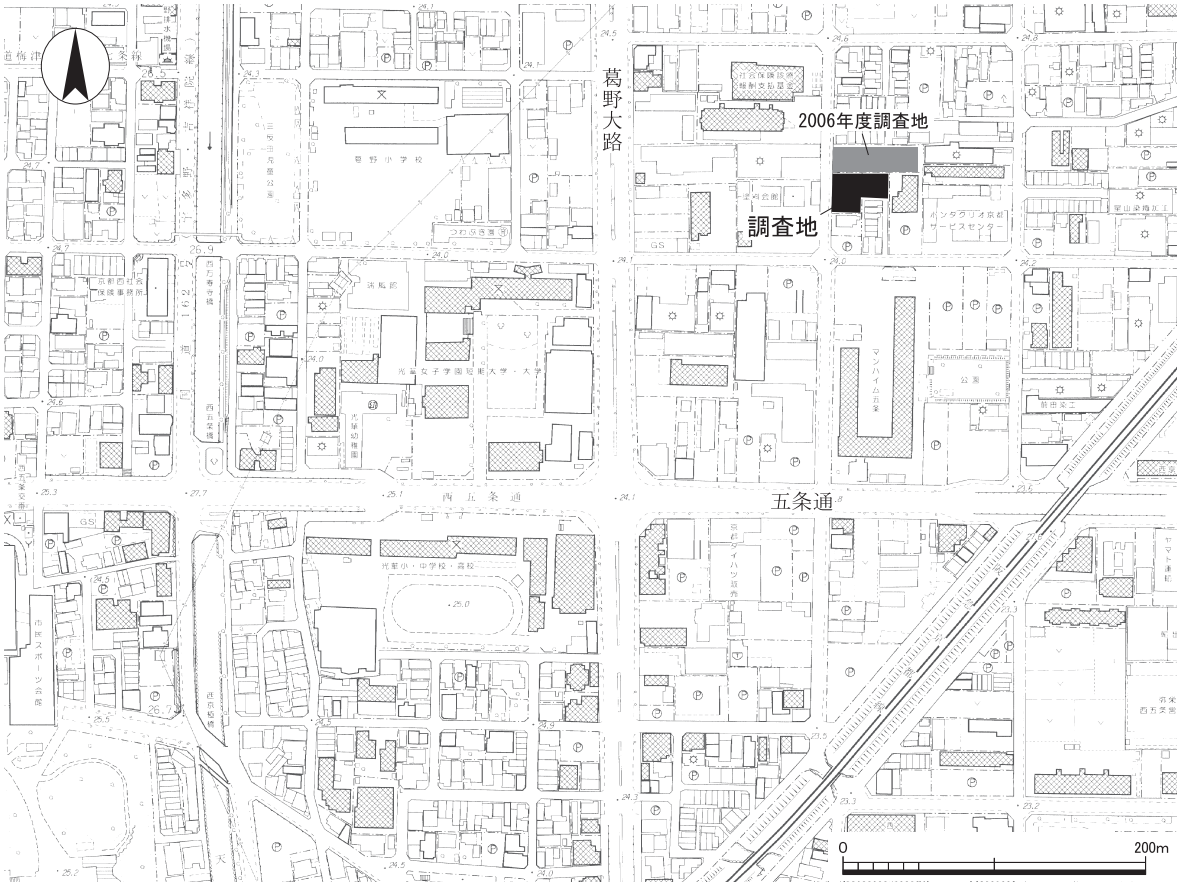



図１　調査地位置図（１：5,000）

図２　調査前全景（西から）

図３　作業風景

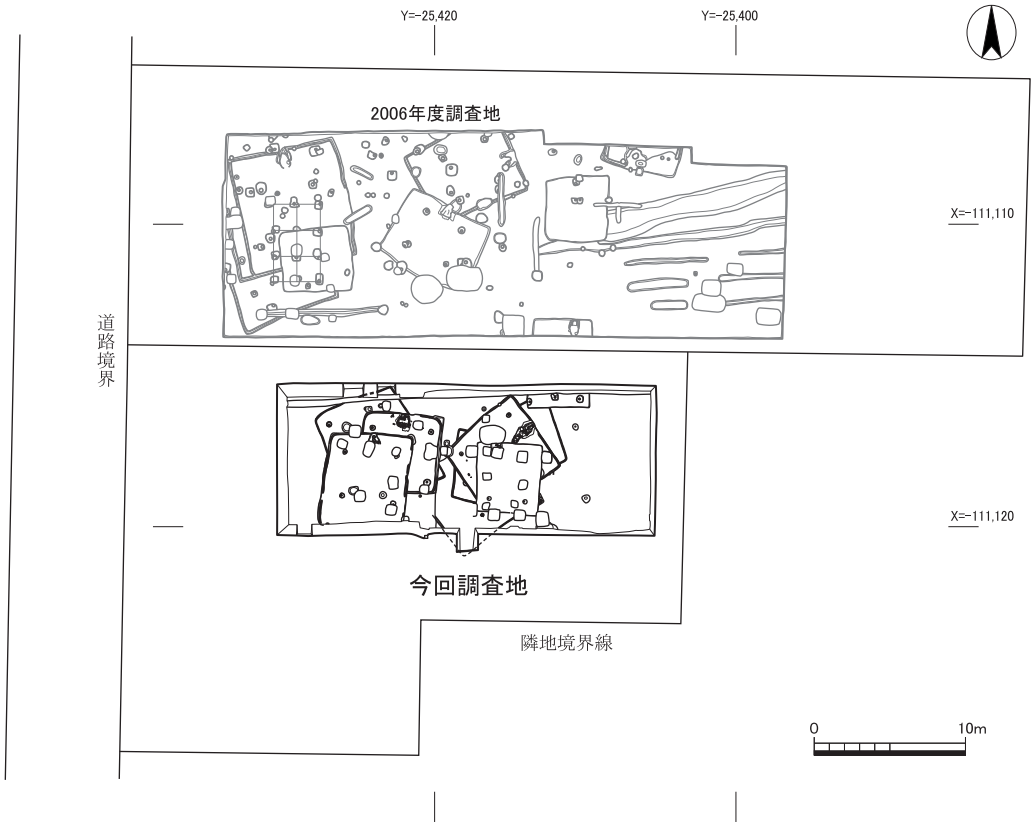



図４　調査区配置図（１：500）

ら奈良時代半ばの遺構を第２面として調査を実施した。なお、それ以外の時期の遺構として室町時代と弥生時代の土坑を１基ずつ検出したが、前者については第１面で、後者については第２面に含めた。第１面では調査中、掘立柱建物の規模を確定するため、文化財保護課の指導により調査区の拡張を行い、最終的な調査面積は252㎡となった。各面ともに図面作成、写真撮影などの記録作業を行い、調査を終了した。

## ２．遺　　跡

### （１）遺跡の位置と環境

西京極遺跡は、京都盆地の中央西寄り、京都市右京区西院一帯に広がる弥生時代から奈良時代の集落遺跡である。桂川の支流である旧御室川と天神川にはさまれた扇状地の先端に立地し、大きくは桂川左岸に営まれた集落遺跡の一つとみることができる。南北最大約700ｍ、東西最大約650ｍの範囲が遺跡として認定されている。西京極遺跡の広い範囲で基盤層となり、厚い所では２ｍを超える均質なシルト～細砂の堆積は、周辺の河川氾濫によって堆積し形成されたものであるが、堆積の時期については、遺跡内で最も古い時期の遺構が縄文時代後期のものであること、遺跡東で縄文時代中期の遺物が出土する旧河川が検出されている[1)]ことなどから、縄文時代中期頃までにゆるやかに堆積したものと考えられる。それ以後は微高地として地盤が比較的安定したと推測され、平安京遷都まで長期にわたり集落が形成されている。しかしながら、遺跡内の調査では弥生時代から奈良時代の遺物が出土する旧流路や後背湿地なども検出されており、集落の中心域が時期によって移動することや遺構密度に差があることから、安定したとは言え、気象条件などによる河道変動や微地形の変化が集落形成以後も長らく継続していたと推測される。

### （２）周辺の調査

西京極遺跡では、今回の調査を含めてこれまでに発掘調査が13件実施されている。すべての発掘調査地点と主要な遺構を検出した試掘・立会調査地点について図５と表１にまとめた。

縄文時代の遺構・遺物は調査４・８・11で検出され、遺跡中央部西半に集中している。時期は後期から晩期のものであるが、遺構としては土坑などが少数あるのみで、竪穴建物などは見つかっていない。

弥生時代前期の遺構・遺物は確認されていない。中期の遺構・遺物は調査２・６・７・９、試掘１、立会４・11などで検出されている。調査７では中期前半に遡る方形周溝墓が２基と中期後半のものを１基検出している。調査６では遺跡内では唯一となる中期の円形竪穴建物を３棟検出している。調査９でも竪穴建物は確認されていないものの、中期前半から後半の土器類が多量に出土している。また、遺跡南端で実施された試掘１、立会４・11では溝や南に下がる落ち込みから多量の中期の土器が出土しており、中期の集落の中心は遺跡南半にあったと考えられる。続く後期から庄内式並行期（古墳時代初頭）はこの遺跡の盛期であり、遺跡全域で遺構・遺物を検出している。先述の調査７では当該期の方形周溝墓が２基、調査５でも方形周溝墓２基とそれを削平して成立する竪穴建物３棟が確認されている。その他にも竪穴建物が調査６では６棟、調査９では８棟、調査10では11棟、調査11では12棟と多数検出されている。調査９の竪穴建物では鍛造による鉄器生産が行われており、近畿中心部では最古級の鉄器生産遺跡として注目される。

古墳時代前期（布留式期）の遺構・遺物の出土は遺跡北西部に偏る。調査12、試掘２、立会14

図５　周辺主要調査位置図（１：5,000）

で当該時期のものと考えられる竪穴建物を検出しているほか、立会１では河川状遺構から土器が多量に出土している。中・後期には再び遺跡全域で遺構が検出されるようになる。調査４・７・８・９・10・11で竪穴建物、調査７・10では掘立柱建物が検出されている。また、調査５では後期の溝から希少な水晶製三輪玉が出土し、立会２では滑石製子持勾玉が出土している。調査６・８・11などでも滑石製臼玉や勾玉、碧玉製管玉、玉未成品、玉砥石などが出土しており、集落内で玉類の生産を行っていた可能性がある。

飛鳥時代の遺構は調査５で総柱建物が１棟検出されている。奈良時代は西京極遺跡のもう一つ

表１　主要調査一覧表

| №. | 条坊:平安京右京 | 所在地:右京区 | 調査年 | 調査機関 | 概要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 五条四坊十三町・六条四坊十六町 | 西院月双町 | 1977 | 京都市埋文研 | 1トレンチ(北側)で中世の溝状遺構・土坑、2トレンチ(南側)で時期不明の自然流路を検出。 | 1 |
| 2 | 六条四坊七町 | 西院月双町110-1他 | 1978 | 京都市埋文研 | 弥生中期の溝、土坑、流路などを検出。 | 2 |
| 3 | 六条四坊二町 | 西院清水町155 | 1989 | 京都市埋文研 | 弥生後期の竪穴建物5棟、平安の樋口小路南側溝を検出。 | 3 |
| 4 | 六条四坊九町 | 西院月双町36他 | 1990 | (財)京都文化財団 | 縄文の土坑、弥生～古墳の溝、古墳後期の竪穴建物3棟、五条大路の南側溝と路面などを検出。 | 4 |
| 5 | 五条四坊十二町 | 西院月双町3 | 1994 | 京都市埋文研 | 弥生後期の方形周溝墓2基・竪穴建物6棟、古墳後期の溝、飛鳥の総柱建物1棟、奈良の掘立柱建物3棟、平安前期の溝などを検出。古墳後期の溝から水晶製三輪玉が出土。 | 5 |
| 6 | 六条四坊七町 | 西院月双町119 | 2005 | 古代学協会 | 弥生中期の竪穴建物3棟・溝、弥生後期～古墳前期の竪穴建物6棟、平安の柱穴など検出。弥生土器・石器、古墳の玉類(勾玉・管玉・臼玉)など多量出土。 | 6 |
| 7 | 五条三坊十四町 | 西院日照町112 | 2006 | 京都市埋文研 | 弥生中期～後期の方形周溝墓6基、古墳後期の掘立柱建物1棟、平安前期の掘立柱建物4棟・井戸などを検出。 | 7 |
| 8 | 六条四坊八町 | 西院月双町82 | 2006 | 京都市埋文研 | 古墳中期の竪穴建物4棟、古墳後期の竪穴建物5棟、奈良の総柱建物1棟・竪穴建物3棟、平安の掘立柱建物1棟など検出。 | 8 |
| 9 | 六条四坊二町 | 西院清水町156-1 | 2006～2007 | 京都市埋文研 | 弥生後期の竪穴建物8棟、古墳の竪穴建物3棟、奈良の掘立柱建物3棟・井戸、平安の柱列など検出。弥生土器・石器・ガラス玉・鉱滓など多量出土。 | 9 |
| 10 | 五条四坊六町 | 西院安塚町100 | 2008 | 京都市埋文研 | 弥生後期～古墳前期の竪穴建物11棟・溝、古墳中期～後期の竪穴建物7棟・掘立柱建物3棟、奈良～平安の溝・柱穴など検出。 | 10 |
| 11 | 五条四坊十二町 | 西院月双町9 | 2008～2009 | 古代文化調査会 | 弥生後期～古墳前期の竪穴建物12棟、古墳中期～後期の竪穴建物26棟、奈良～平安の掘立柱建物15棟など検出。縄文後期の土器、古墳の竈形土器・臼玉・管玉など出土。 | 11 |
| 12 | 五条四坊十五町 | 西院東貝川町59-1 | 2011 | イビソク | 古墳前期の竪穴建物3棟、古墳後期の溝、奈良～平安前期の溝など検出。 | 12 |
| 試1 | 六条四坊三町 | 西院六反田町2 | 1987 | 京都市埋文研 | 弥生土器含む溝検出。 | 試1 |
| 試2 | 五条四坊十五町 | 西院東貝川町59-3 | 1988 | 京都市埋文研 | 弥生～古墳の竪穴建物2棟・土坑・溝を検出。 | 試2 |
| 試3 | 六条四坊二町 | 西院清水町161 | 1997 | 京都市センター | 古墳後期の遺物を含む流路・土坑を検出。 | 試3 |
| 試4 | 六条三坊十四・十五町 | 西院久保田町6-7他 | 2000 | 京都市センター | 古墳後期の南北溝1条を検出。 | 試4 |
| 立1 | 五条四坊十五町 | 葛野大路通り | 1978～1979 | 京都市埋文研 | 幅約30mの河川状遺構から古墳前期の土器が多量出土。 | 立1 |
| 立2 | 五条四坊十四町 | 葛野大路通り | 1978～1979 | 京都市埋文研 | GL-1.73mの暗灰色泥土層から滑石製の子持勾玉が出土。 | 立1 |
| 立3 | 六条四坊二町 | 西院久保田町 | 1978～1979 | 京都市埋文研 | 溝状遺構から弥生中期～後期の土器が多量出土。 | 立1 |
| 立4 | 六条四坊三町 | 西院六反田町1 | 1979～1980 | 京都市埋文研 | 幅1.5mの東西溝から弥生中期の土器が多量出土。南に下がる落込みから弥生中期の土器が出土。 | 立2 |
| 立5 | 六条四坊一町 | 西院清水町126-2、78-2 | 1989 | 京都市埋文研 | 古墳後期の土坑検出。 | 立3 |
| 立6 | 五条四坊十一町 | 西院安塚町73 | 1989 | 京都市埋文研 | 平安の土坑検出。 | 立3 |
| 立7 | 五条四坊五町 | 西院月双町27 | 1989 | 京都市埋文研 | 弥生後期の竪穴建物状の落込み検出。 | 立3 |
| 立8 | 五条四坊三町 | 西院日照町72、69-2 | 1989 | 京都市埋文研 | 竪穴建物状の落込み検出。 | 立3 |
| 立9 | 五条四坊十二町 | 西院月双町2 | 1996 | 京都市埋文研 | 弥生の土坑検出。 | 立4 |
| 立10 | 六条四坊八町 | 西院月双町86 | 2001 | 京都市埋文研 | 古墳中期のピット1基、奈良のピット1基を検出。 | 立5 |
| 立11 | 六条四坊三町 | 西院六反田町4-1他 | 2004～2005 | 京都市埋文研 | 弥生中期の土坑・溝状遺構、弥生後期～古墳前期の溝を検出。弥生土器・石器多量出土。 | 立6 |
| 立12 | 五条四坊十二町 | 西院月双町9 | 2010 | 京都市埋文研 | 調査10の補足調査。調査10で検出された竪穴建物の延長部分や平安の柱穴などを検出。 | 立7 |
| 立13 | 六条四坊二町 | 西院清水町167 | 2011 | 京都市埋文研 | 弥生後期の竪穴建物2棟、平安の土坑、六条坊門小路と菖蒲小路の路面などを検出。 | 立8 |
| 立14 | 五条四坊十一町 | 西院安塚町71 | 2013 | 京都市埋文研 | | 立9 |

の盛期である。調査５・８・９・10・11で掘立柱建物や総柱建物、柱穴が多数検出され、調査９で検出された井戸からは墨書土器や大型の円面硯などが出土している。さらに遺跡の西に「郡村」という地名が遺存している[2)]ことなどから、奈良時代の山城国葛野郡衙の有力な候補地となっている[3)]。

平安時代になると、遺跡全域が平安京右京域に組み込まれる。調査３・４、立会13で道路側溝や路面が検出されている。また調査７・９・11などでは平安時代前期の掘立柱建物や柱列が確認されているほか、柱穴や溝などは遺跡全域で検出しているが、中期以降の遺構・遺物はほとんど検出されておらず、それ以後は中近世の耕作溝や土取り穴などが散見されるのみであることから、宅地としての利用がなくなり、耕作地化したと考えられる。

文献（表１　主要調査一覧表）

１「21　平安京右京五条四坊十三町、六条四坊十六町」『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和52年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

２「22　平安京右京六条四坊七町」『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和52年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

３　上村和直・西大條哲「26　平安京右京六条四坊・西京極遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要　平成元年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年

４『平安京右京六条四坊九町・五条大路』京都文化博物館調査研究報告　第８集　京都府京都文化博物館　1991年

５　伊藤潔「14　平安京右京五条四坊」『京都市埋蔵文化財調査概要　平成５年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

６「平安京右京六条四坊七町跡」『平安京跡研究調査報告第23集　平安京右京内５遺跡』財団法人古代学協会

７　木下保明・西森正晃『平安京右京五条三坊十四町跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

８　柏田有香『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

９　柏田有香『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年

10　西森正晃・柏田有香『平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008年

11　家崎幸治『平安京右京五条四坊十二町・西京極遺跡』古代文化調査会　2010年

12　内田真一郎・持田　透『平安京右京五条四坊十五町跡・西京極遺跡』（株）イビソク　2012年

試１『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局　1988年

試２『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年

試３　長谷川行孝「Ⅳ　平安京右京六条四坊二町跡　№11」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成９年度』京都市文化市民局　1998年

試４『京都市内遺跡試掘調査概報　平成12年度』京都市文化市民局　2001年

立１「Ⅱ平安京跡　１平安京右京広域・西京極遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和53年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

立２　鈴木広司「右京六条四坊跡立会調査（№350）」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和54年度』京都市文化観光局文化財保護課　1980年

立３　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局　1990年
立４　『京都市内遺跡立会調査概報　平成８年度』京都市文化市民局　1997年
立５　吉本健吾・堀内寛昭「６　平安京右京六条四坊八町、西京極遺跡（01HR207）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』京都市文化市民局　2002年
立６　吉本健吾「２　平安京右京六条四坊三町・西京極遺跡」『京都市内遺跡立会調査報告　平成17年度』京都市文化市民局　2006年
立７　吉本健吾「３　平安京右京五条四坊十二町跡・西京極遺跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成22年度』京都市文化市民局　2011年
立８　鈴木久史・吉本健吾「平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成23年度』京都市文化市民局　2012年
立９　布川豊治・辻裕司「平安京右京五条四坊十一町跡・西京極遺跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成25年度』京都市文化市民局　2014年

# ３．遺　　構

## （１）基本層序（図７）

調査地は、調査前まで駐車場として使用され、アスファルト舗装されていた。駐車場はY＝－25,420ラインで東西に分かれ、間にコンクリート擁壁が通る。調査前の東側の現状標高は約24.2ｍ、西側は約23.9ｍであった。

東側駐車場部分では、駐車場の盛土を0.45～0.7ｍ掘り下げると、土壌化した現代耕作土とその床土が0.15～0.3ｍ堆積する（３～５層）。それを除去すると、にぶい黄褐色シルトの基盤層となる（32層）。西側駐車場部分では、駐車場盛土の砕石を0.55～0.9ｍ掘り下げると、上部がグライ化した現代耕作土の床土が0.05～0.1ｍ堆積する（６・７層）。それらを除去すると暗褐色極細砂～細砂の基盤層となる（33層）。遺構は全て基盤層上面で検出したが、掘立柱建物を中心とした奈良時代末から平安時代の遺構を第１面、竪穴建物を中心とした古墳時代から奈良時代半ばの遺構を第２

表２　遺構概要表

| 時　代 | 遺　　構 | 備　考 |
|---|---|---|
| 弥生時代 | 土坑154 | |
| 古墳時代 | 竪穴建物80・81・82・115・131・142・152・153 | |
| 奈良時代 | 竪穴建物21・88 | |
| | 掘立柱建物２・３、溝15・16、ピット23 | |
| 平安時代 | 掘立柱建物１、柱列１・２、溝14 | |
| 室町時代 | 土坑26 | |

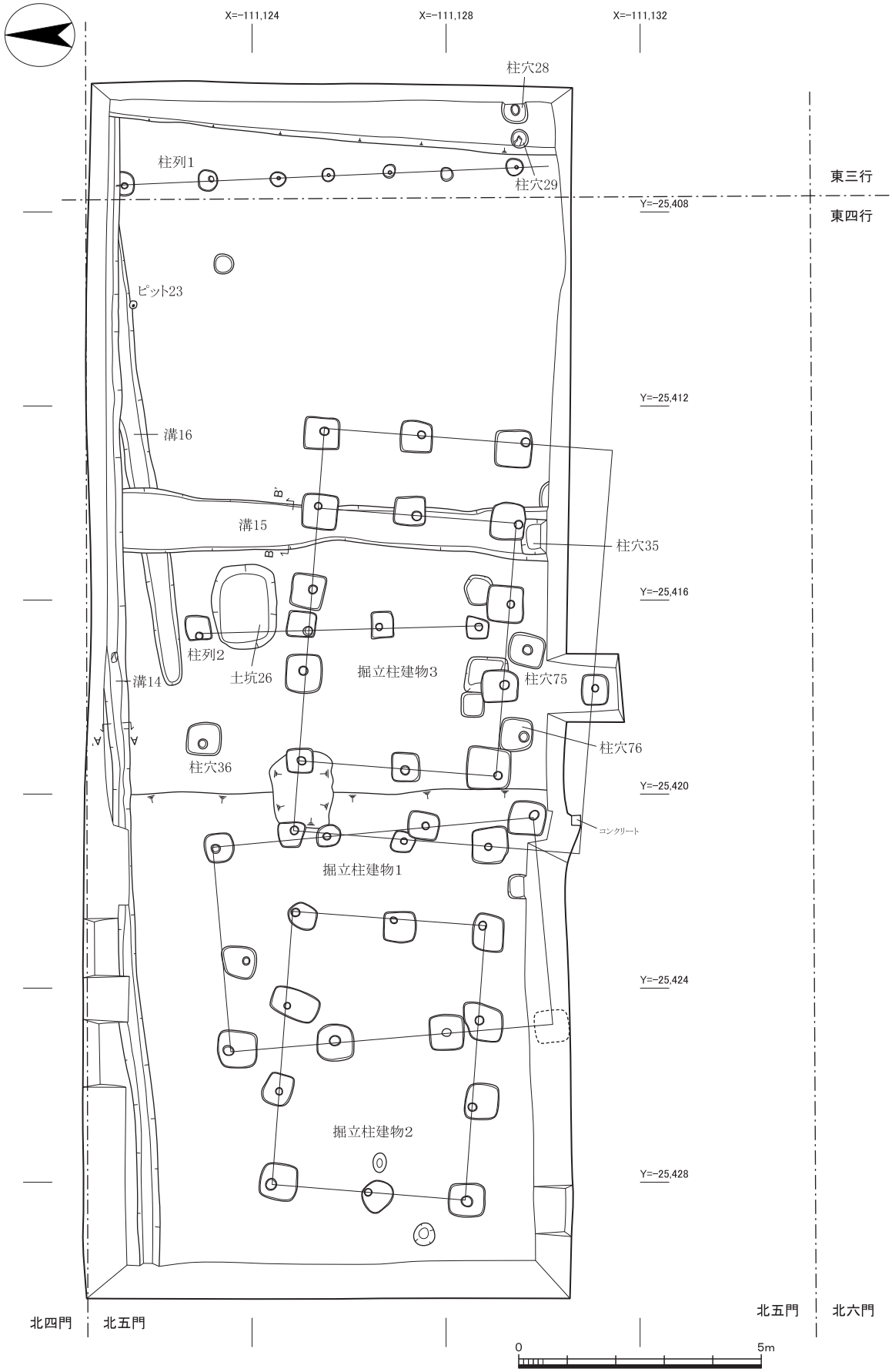



図６　第１面平面図（１：120）

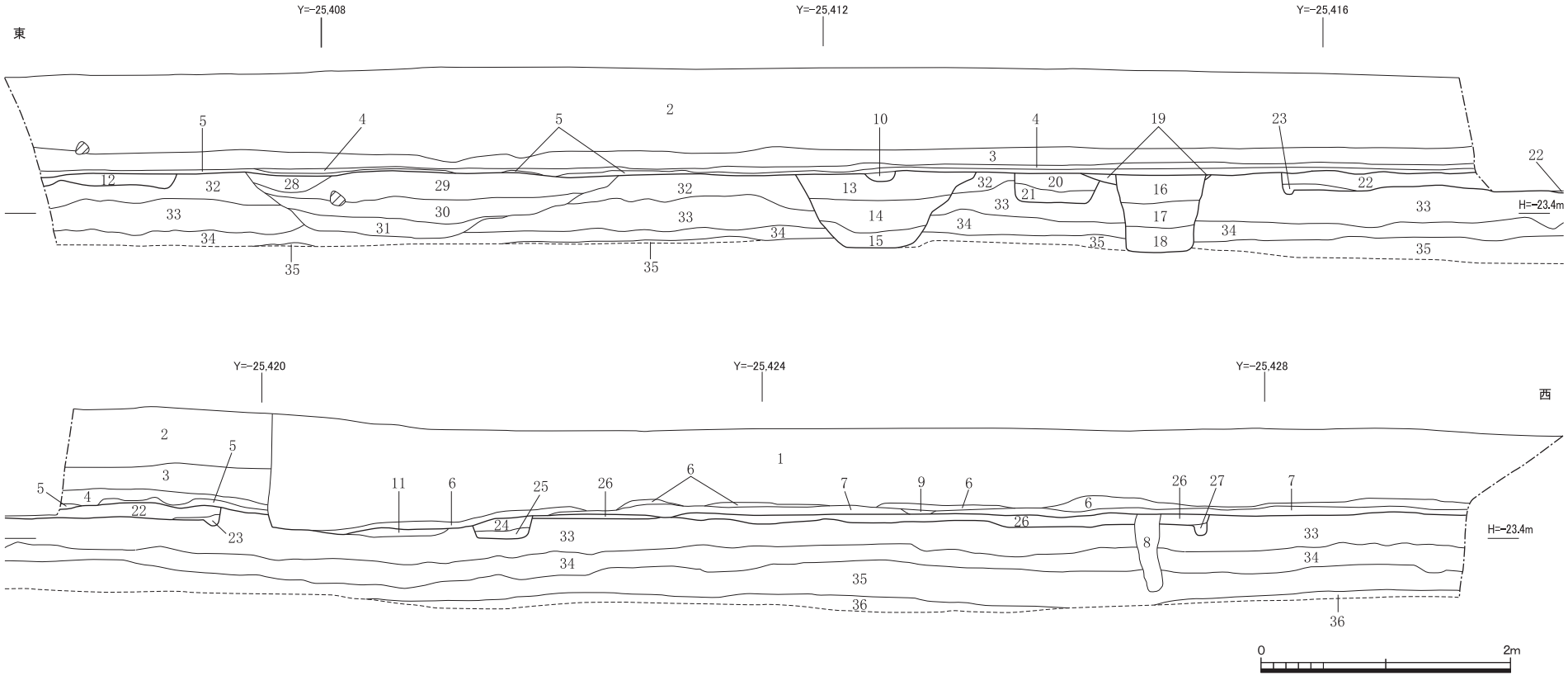


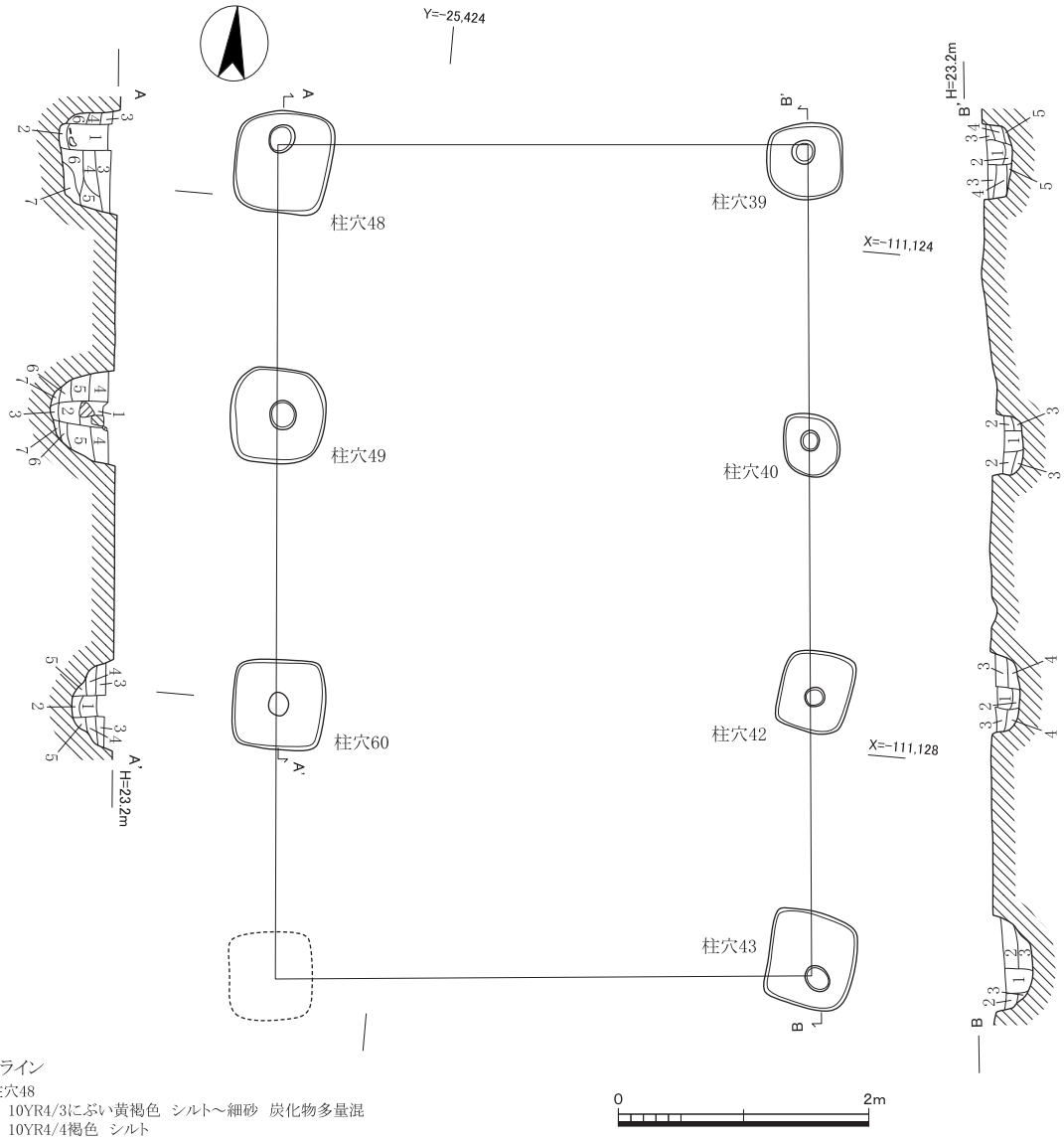

図7　南壁断面図（1：50）

1　砕石
2　現代盛土
3　10YR4/1褐灰色　シルト～細砂（現代耕作土）
4　2.5Y5/2暗灰黄色　シルト～細砂　鉄分多量混（耕作床土）
5　10YR6/2灰黄褐色　シルト～細砂　鉄分多量混（耕作床土）
6　5GY5/1オリーブ灰色　シルト～細砂　グライ化（耕作床土）
7　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂（耕作床土）
8　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂（木の根）
9　10YR5/2灰黄褐色　細砂（耕作溝）
10　2.5Y5/3黄褐色　シルト～細砂（耕作溝）
11　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂　土器混
12　10YR5/2灰黄褐色　シルト～細砂　粗砂混　鉄分多量混（土坑13）
13　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂　炭化物少量混（土坑154）
14　10YR4/4褐色　シルト～細砂　やや粘質　土器少量混（土坑154）
15　10YR4/4褐色　シルト　粘質（土坑154）
16　10YR4/4褐色　極細砂～細砂（柱穴35）
17　10YR3/3暗褐色　極細砂～細砂（柱穴35）
18　10YR4/4褐色　シルト　やや粘質（柱穴35）
19　2.5Y5/3黄褐色　極細砂～細砂　炭化物少量混（溝15）
20　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト～細砂　炭化物少量混
21　10YR4/4褐色　シルト～細砂　焼土少量混
22　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト～細砂（竪穴建物131）
23　10YR3/4暗褐色　極細砂～細砂に22層のブロック混（竪穴建物131壁溝）
24　10YR4/4褐色　シルト～細砂
25　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
26　10YR2/3黒褐色　極細砂～細砂に10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロック多量混（竪穴建物80）
27　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂（竪穴建物80壁溝）
28　2.5Y5/3黄褐色　シルト～細砂　炭化物少量混（落込み）
29　10YR5/2灰黄褐色　シルト～細砂　φ5～10cmの礫混（落込み）
30　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂　やや粘質（落込み）
31　10YR4/4褐色　シルト　粘質（落込み）
32　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト　やや粘質（基盤層）
33　10YR3/3暗褐色　極細砂～細砂（基盤層）
34　10YR4/4褐色　シルト～細砂　粘質（基盤層）
35　2.5Y5/6黄褐色　シルト　粘質（基盤層）
36　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　粘質（基盤層）

面として調査を実施した。遺構検出総数は171基である。なお、この遺跡を形成する基盤層は層厚0.1～0.3ｍの単位で砂粒の粒径が変化する（33～36層）が、層界は明瞭でなく河川活動による自然堆積層と考えられる。

## （２）第１面の遺構（図６、図版13）

**掘立柱建物１**（図８、図版14）　調査区西半で検出した。梁行１間、桁行３間の南北棟建物である。方位は北に対して約５度西に振れる。柱間は梁行が約4.2ｍ、桁行が2.1～2.4ｍである。柱掘



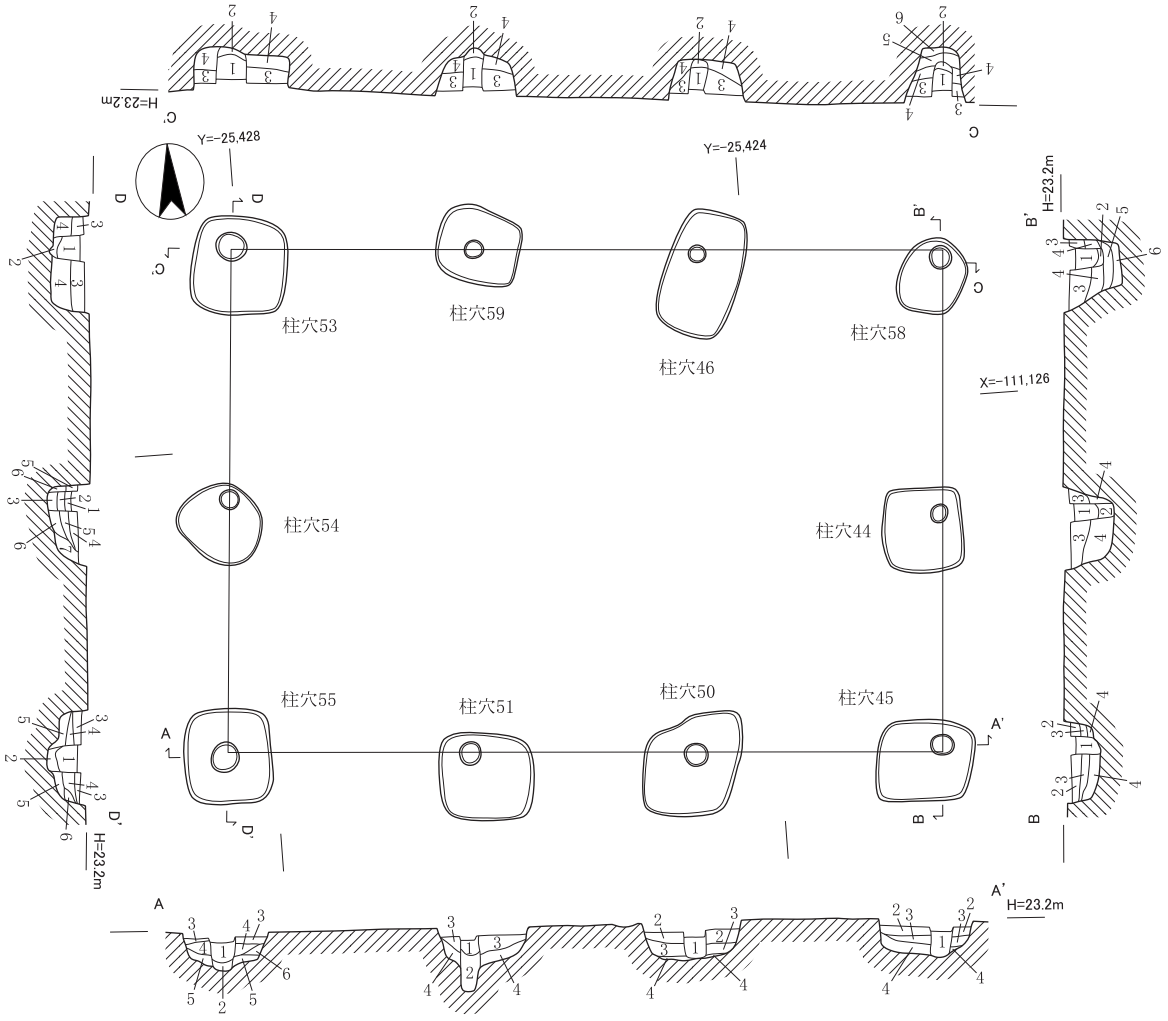

Aライン
柱穴48
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂　炭化物多量混
2　10YR4/4褐色　シルト
3　10YR5/2灰黄褐色　シルト～細砂
4　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
5　10YR2/3黒褐色　シルト～細砂
6　10YR3/3暗褐色　シルト～細砂
7　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
柱穴49
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
2　10YR4/4褐色　シルト～細砂
3　10YR4/4褐色　シルト
4　10YR4/2灰黄褐色　シルト～細砂
5　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
6　10YR3/3暗褐色　シルト～細砂
7　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト～細砂
柱穴60
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
2　10YR4/4褐色　シルト～細砂　粘質
3　10YR5/2灰黄褐色　シルト～細砂
4　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
5　10YR3/3暗褐色　シルト～細砂

Bライン
柱穴39
1　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
2　10YR4/4褐色　シルト～細砂　粘質
3　10YR5/2灰黄褐色　シルト～細砂
4　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
5　10YR3/3暗褐色　シルト～細砂
柱穴41
1　10YR3/3暗褐色　シルト～細砂　粘質
2　10YR3/4暗褐色　シルト～細砂
3　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
柱穴42
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
2　10YR4/4褐色　シルト～細砂　粘質
3　2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト～細砂
4　10YR3/3暗褐色　シルト～細砂
柱穴43
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト
2　10YR3/3暗褐色　シルト～細砂
3　10YR2/3黒褐色　シルト～細砂

図８　掘立柱建物１実測図（１：60）

形は隅丸方形で径0.5～0.75ｍ、深さは検出面から0.2～0.45ｍある。柱痕跡の径は0.15～0.2ｍある。建物を構成する柱掘形から平安時代前期の土器片が出土した。

**掘立柱建物２**（図９、図版14） 調査区西半で検出した。梁行２間、桁行３間の東西棟建物で掘立柱建物３と柱筋をそろえて東西に並ぶ。方位は北に対して約４度東に振れる。柱間は梁行が約2.0ｍ、桁行が約1.85ｍである。柱掘形は隅丸方形もしくは不整円形で、径0.5～1.0ｍ、深さは検出




A→Dライン
柱穴55
1 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/4褐色 シルト
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂
5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
6 10YR2/3黒褐色 シルト～細砂
柱穴51
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物混
2 10YR4/4褐色 シルト
3 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂
4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
柱穴50
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂
3 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
柱穴45
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂
3 10YR4/4褐色 シルト～細砂
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
柱穴44
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂 粘質
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
柱穴58
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 粘質
3 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト～細砂
6 10YR4/4褐色 シルト～細砂 粘質
柱穴46
1 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粘質
3 10YR4/4褐色 シルト～細砂
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
柱穴59
1 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粘質
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
柱穴53
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土混
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂 粘質
3 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂
4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
柱穴54
1 10YR5/2灰黄褐色 シルト
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト
3 10YR4/4褐色 シルト
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
6 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
7 10YR2/3黒褐色 シルト～細砂

図９ 掘立柱建物２実測図（１：60）

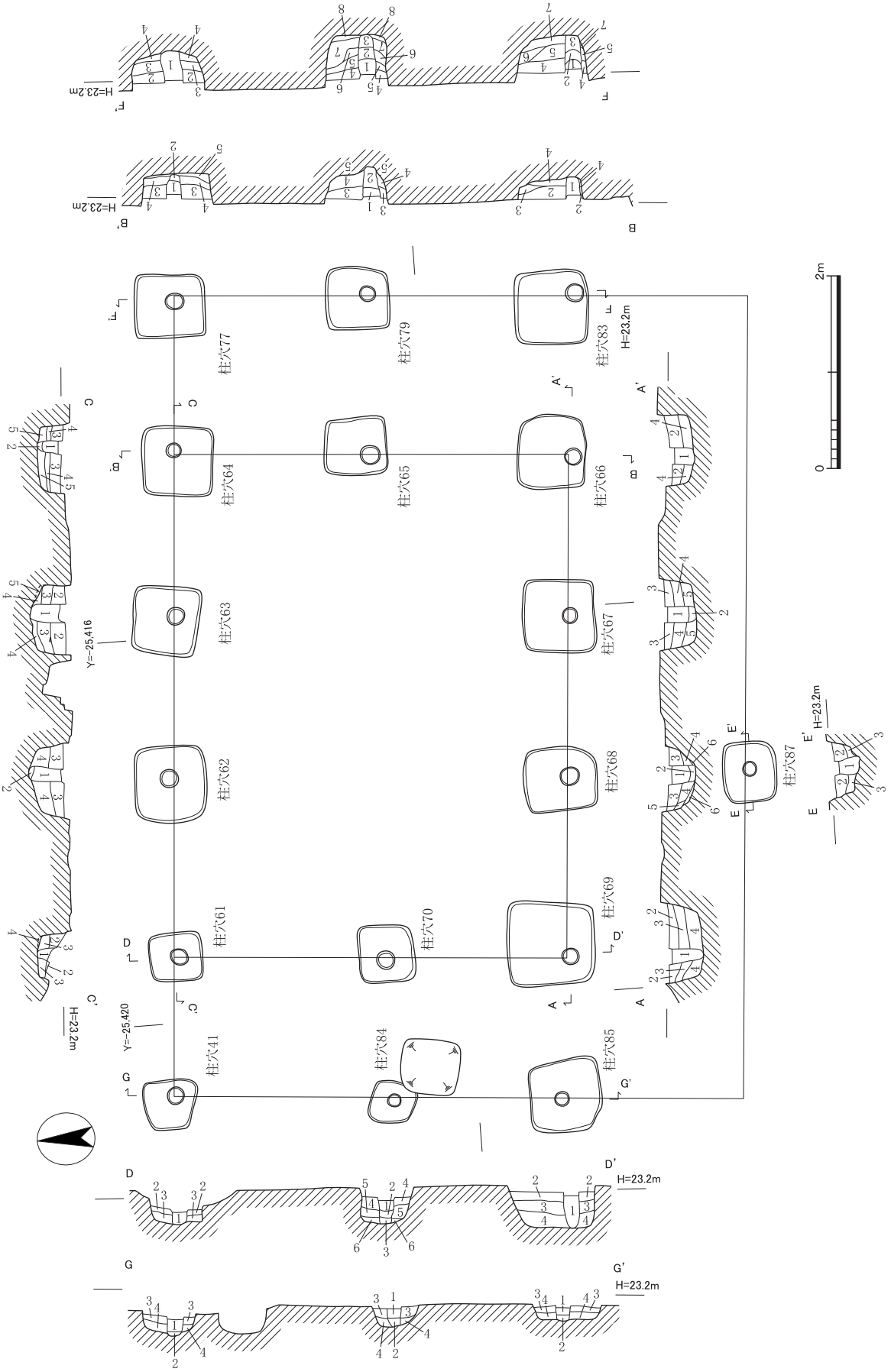



図10　掘立柱建物３実測図（１：60）

A→Dライン

柱穴69
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂

柱穴68
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物混
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂
3 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
5 10YR2/3黒褐色 シルト～細砂
6 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂

柱穴67
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂 粘質
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
5 10YR2/3黒褐色 シルト～細砂

柱穴66
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂

柱穴65
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂
3 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂

柱穴64
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂 粘質
3 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂

柱穴63
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂
2 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト～細砂
3 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂 やや粘質
4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
5 10YR2/3黒褐色 シルト～細砂(基盤層)

柱穴62
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粘質
3 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト～細砂
4 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂 やや粘質

柱穴61
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粘質
4 10YR2/3黒褐色 シルト～細砂(基盤層)

柱穴70
1 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR4/4褐色 シルト～細砂
4 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂
5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
6 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂

E→Gライン

柱穴87
1 10YR2/3黒褐色 シルト～細砂
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂

柱穴83
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂
3 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 やや粘質
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂
5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物混
6 10YR5/2灰黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
7 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 粘質

柱穴79
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂 炭化物微量混
2 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 やや粘質
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粘質
4 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂
5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
6 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
7 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
8 10YR4/4褐色 シルト～細砂

柱穴77
1 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR4/4褐色 シルト～細砂
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 やや粘質

柱穴41
1 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物少量混
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂 粘質 炭化物少量混
3 10YR4/4褐色 シルト
4 10YR3/4暗褐色 シルト やや粘質

柱穴84
1 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
2 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粘質
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂

柱穴85
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/6褐色 細砂
3 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂

図11 掘立柱建物３土色

面から0.3～0.45ｍある。柱痕跡は掘形の中心より北に寄った位置にあるものが多く、径は0.1～0.2ｍ、深さは0.2～0.5ｍある。柱掘形から奈良時代末頃の土器片が出土した。

**掘立柱建物３**（図10・11、図版13・14） 調査区東半で検出した。掘立柱建物２の東に柱筋をそろえて並ぶ。梁行２間、桁行３間の東西棟に東西と南に庇がつく三面庇建物である。方位は北に対して約４度東に振れる。身舎の柱間は梁行が約2.0ｍ、桁行が約1.75ｍである。身舎の柱掘形は隅丸方形で、径0.5～0.95ｍ、深さは検出面から0.3～0.4ｍある。柱痕跡は掘形の中心より南に寄った位置にあるものが多く、径は0.15～0.2ｍ、深さは0.3～0.4ｍある。庇の出は東が約1.65ｍ、西が約1.45ｍ、南が約1.85ｍある。庇の柱掘形は隅丸方形で、径0.45～0.75ｍ、深さは0.2～0.55ｍある。柱痕跡の径は0.1～0.15ｍある。身舎の柱掘形から奈良時代末の土器片が出土した。

**柱列１**（図12） 調査区東端で検出した南北方向の柱列である。柱間６間、約８ｍ分を検出した。方位は北に対して約３度西に振れる。柱間は1.0～1.8ｍある。柱掘形は円形で、径0.25～0.45ｍ、深さは検出面から0.05～0.2ｍある。柱痕跡の径は0.05～0.1ｍある。柱掘形から平安時代前期の土器片が出土した。六条四坊八町の東三行と東四行の境界推定ラインに沿うことから（図６）、宅地境の柵の可能性がある。

**柱列２**（図12） 調査区中央部で検出した南北方向の柱列である。柱間３間、約６ｍ分を検出した。方位は北に対して約２度西に振れる。柱間は1.5～2.2ｍある。柱掘形は方形で、径0.4～0.6ｍ、深さは検出面から約0.3ｍある。柱痕跡の径は0.15～0.2ｍある。柱掘形から平安時代前期のものと考えられる土器小片が出土した。

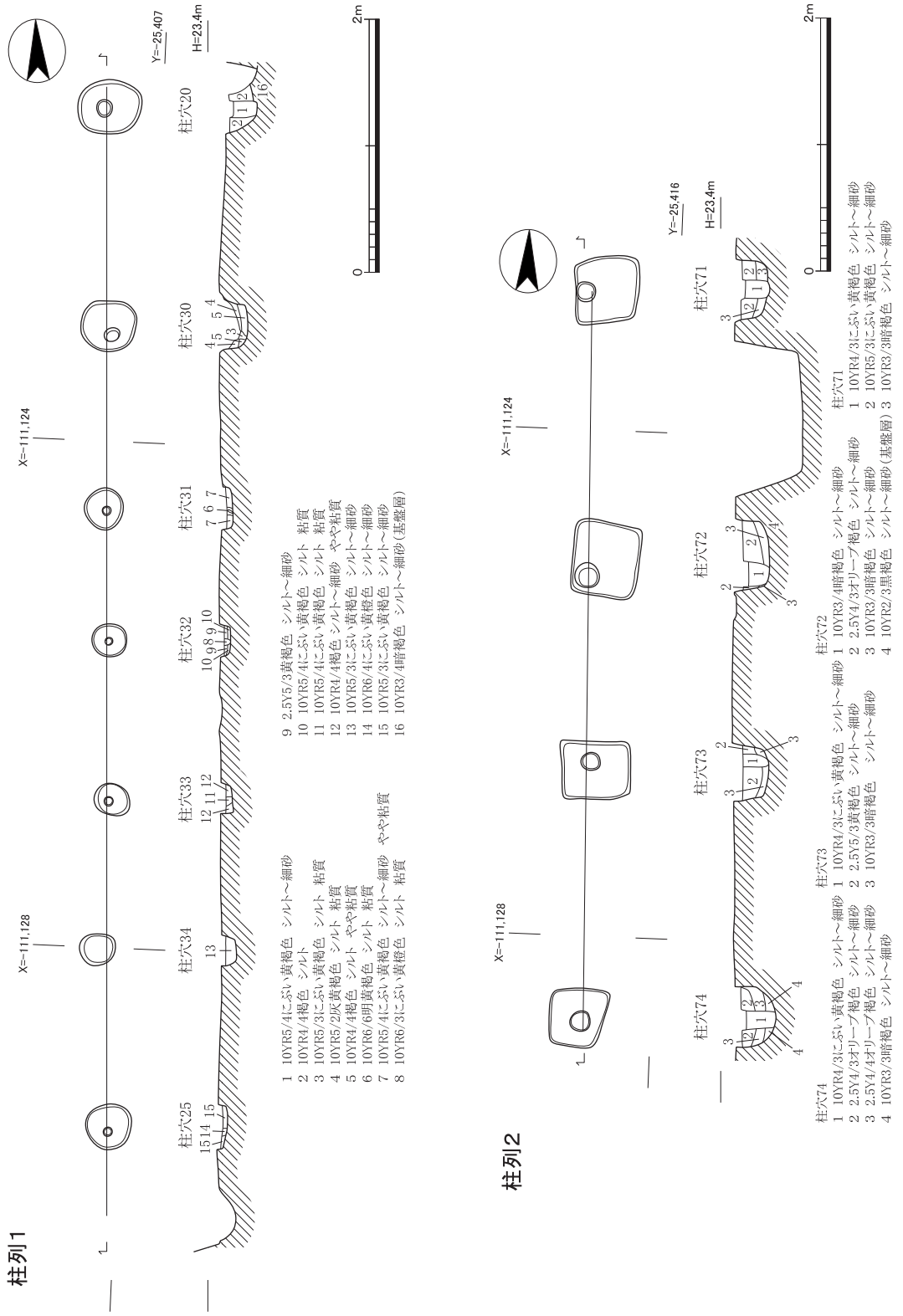
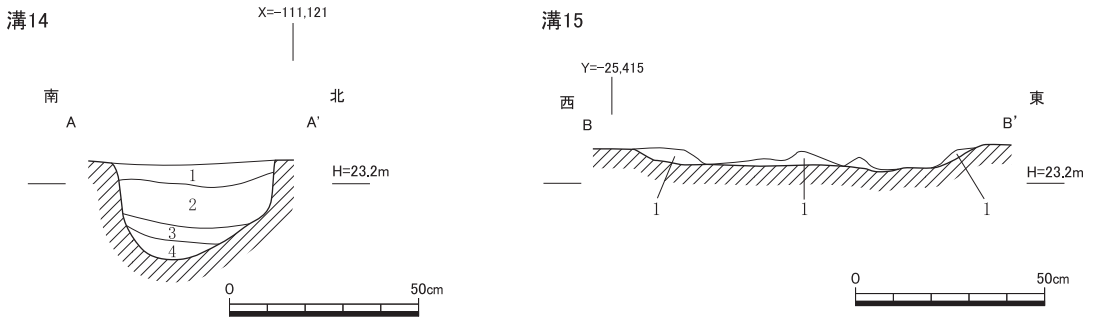



図12　柱列１・２実測図（１：50）

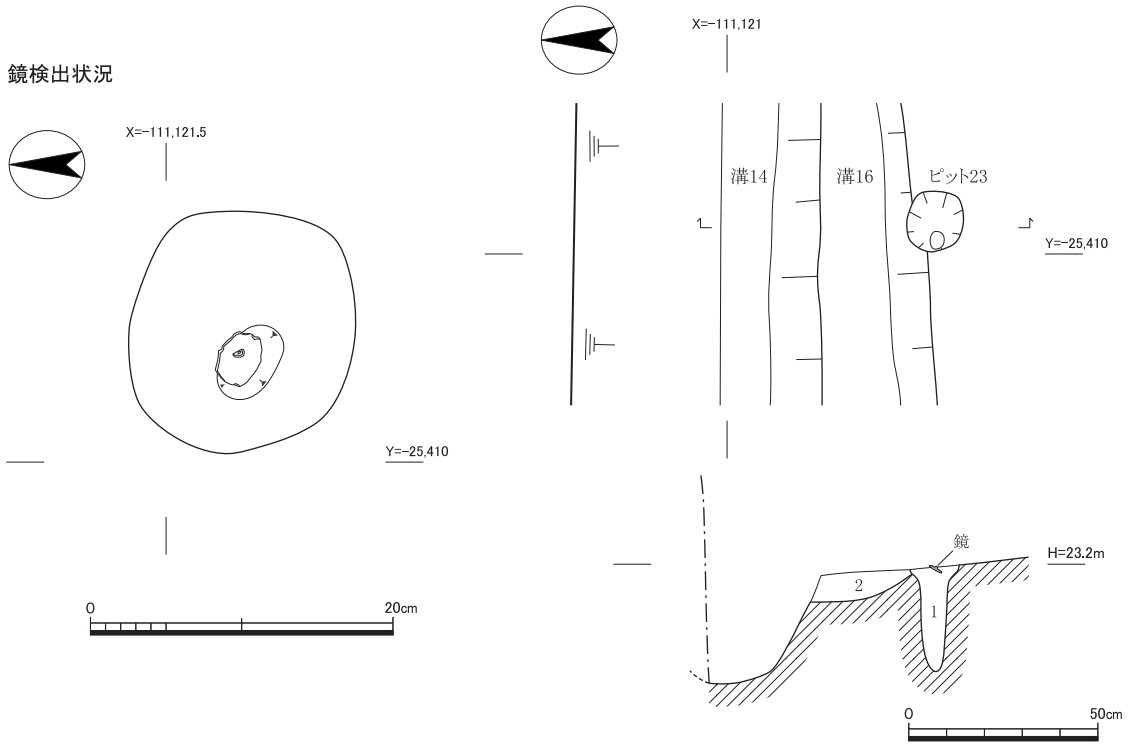
**溝14**（図13）　調査区北端で検出した東西方向の溝である。東西約24ｍ分を検出した。主軸方位は西に対して約３度南に振れる。幅は0.35～0.5ｍある。断面形状は逆台形状を呈し、深さは検出面から0.23～0.3ｍある。底面の標高は東端で23.02ｍ、西端では22.9ｍで西がわずかに低い。埋




1 10YR5/2灰黄褐色 シルト～細砂
2 10YR5/2灰黄褐色 シルト～細砂 粗砂、
φ1～20cmの礫少量混 鉄分多量含
3 10YR6/2灰黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂 粘質

1 10YR6/1褐灰色 シルト～細砂

図13 溝14・15断面図（1：20）




1 10YR4/4褐色 シルト～細砂 粘質(ピット23)
2 2.5Y5/3黄褐色 シルト～細砂 鉄分混(溝16)

図14 ピット23実測図（1：5、1：20）

土は下層に溝機能時のものと考えられる粘質のシルト～細砂層が約0.2ｍ堆積する（3・4層）。それより上は固く締まるシルト～細砂層で埋まる（1・2層）。埋土下層からは平安時代前期から中期の遺物が出土した。最上層（1層）からは鎌倉時代の遺物が出土した。六条四坊八町の北四門と北五門の境界推定ラインに沿うことから、宅地境の溝と考えられる。

**溝15**（図13） 調査区中央東寄りで検出した南北方向の溝である。北端は溝14に切り込まれている。南北約8.7ｍ分を検出した。主軸方位は北に対して約2度東に振れる。幅は0.7～1.3ｍ、深さは検出面から0.05～0.1ｍある。底面の標高は23.23～23.24ｍでほぼ一定である。埋土から奈良時代後半の遺物が出土した。

**溝16**（図14、図版14）　調査区北東部で検出した東西方向の溝である。溝14・15に切り込まれる。東西約９ｍ分を検出した。主軸方位は西に対して約８度南に振れる。幅は0.4～0.5ｍ、深さは東端で検出面から約0.1ｍあり、西に向かって次第に浅くなり調査区中央付近で消滅する。埋土から奈良時代後半の遺物が出土した。

**ピット23**（図14、図版14）　調査区北東部で検出した円形ピットである。検出面での直径は約0.16ｍある。深さは約0.27ｍあり、断面形が釘状に先細りであることから、杭を抜き取った痕跡である可能性が考えられる。埋土最上部から青銅製の小型素文鏡が出土した。溝16に接し、一連の遺構である可能性がある。

**土坑26**（図６）　調査区中央で検出した。平面形は隅丸長方形で長径約1.7ｍ、短径約1.3ｍ、深さは約0.35ｍある。埋土から15～16世紀の土器が少量出土した。

## （３）第２面の遺構（図15、巻頭図版１）

**竪穴建物21**（図16、図版15）　調査区北東で検出した。平面形は方形で、溝14・16、ピット23に切り込まれ、北側は調査区外へ延びる。一辺の長さは東西4.0ｍ、南北は1.0ｍ以上、検出面から床面までの深さは約0.15ｍある。方位はほぼ正方位を向く。床面上で柱穴91～93の３基の柱穴を検出した。平面形は柱穴91・93が円形、柱穴92は隅丸方形を呈し、径0.35～0.45ｍ、深さは0.3～0.6ｍある。柱痕跡の径は約0.1ｍある。柱穴92の掘形埋土上から扁平で表面が平滑な砂岩系の石材が出土した。また、埋土からは８世紀半ばから後半頃の遺物が少量出土した。なお、この竪穴建物21は、検出位置、規模、床面標高などから見て、2006年に北隣接地で実施した調査（図５・表１－８）で検出した竪穴建物83の南端部分であると考えられる。2006年調査では北壁際でカマドを検出している。このカマドは白鳳期の平瓦を両袖の壁に貼り付け、その内側に溝をめぐらせる特異な構造で、移動式カマドを内側溝に据え付けて使用したものではないかと考えられる。竪穴建物83の床面からは外面にベンガラが塗布された須恵器杯蓋など、８世紀前半代の遺物が出土している。

**竪穴建物88**（図17、図版15）　調査区東半で検出した。平面形は方形で一辺の長さは東西約4.3ｍ、南北約4.7ｍ、床面までの深さは約0.05ｍある。方位はほぼ正方位を向く。床面上で主柱穴と考えられる柱穴96・97を検出した。掘形は円形で、径0.25～0.28ｍ、深さは約0.1ｍある。柱痕跡の径は0.05～0.1ｍある。壁溝は認められなかった。建物埋土からは７世紀半ばから８世紀初頭頃のものと考えられる土器片が出土している。

北壁際ではカマド98を検出した。攪乱を受けるが、検出長は東西約0.75ｍ、南北約0.65ｍある。建物床面より一段掘り下げて構築されており、検出面からカマド床面までの深さは約0.1ｍある。掘形は断面方形で、2006年調査の竪穴建物83のカマドと同様、移動式カマドを据え付けたものである可能性がある。床面南半には焼土が堆積する（図17下４層）。床面中央で径約0.1ｍ、深さ約0.05ｍの小ピットを検出した。支柱を据えた痕跡と考えられる。

**竪穴建物80**（図18、図版16）　調査区西半で検出した。平面形は長方形で、北辺の長さは約5.4ｍ、西辺の長さは約6.1ｍと推測される。検出面から床面までの深さは0.05～0.1ｍある。方位は北

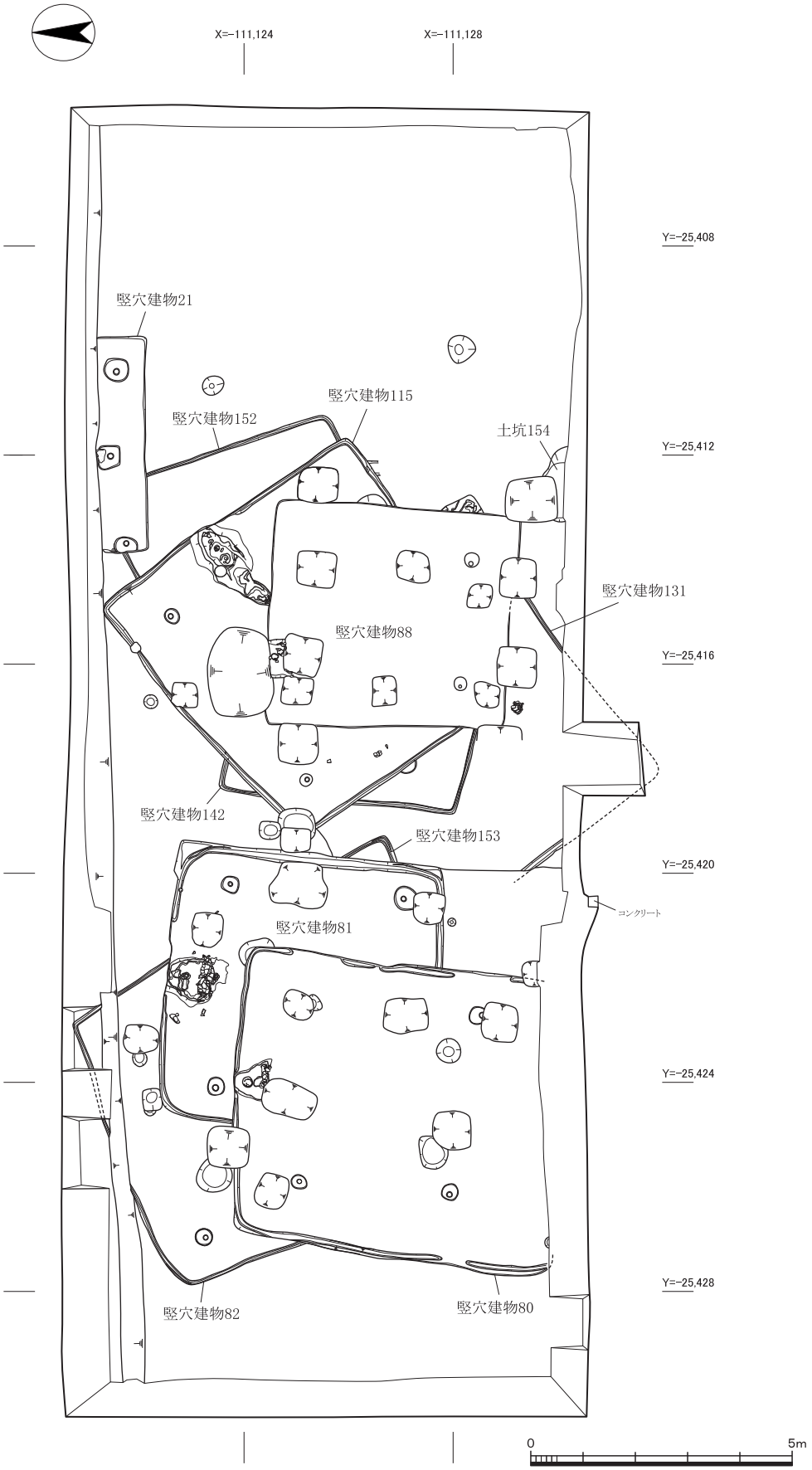
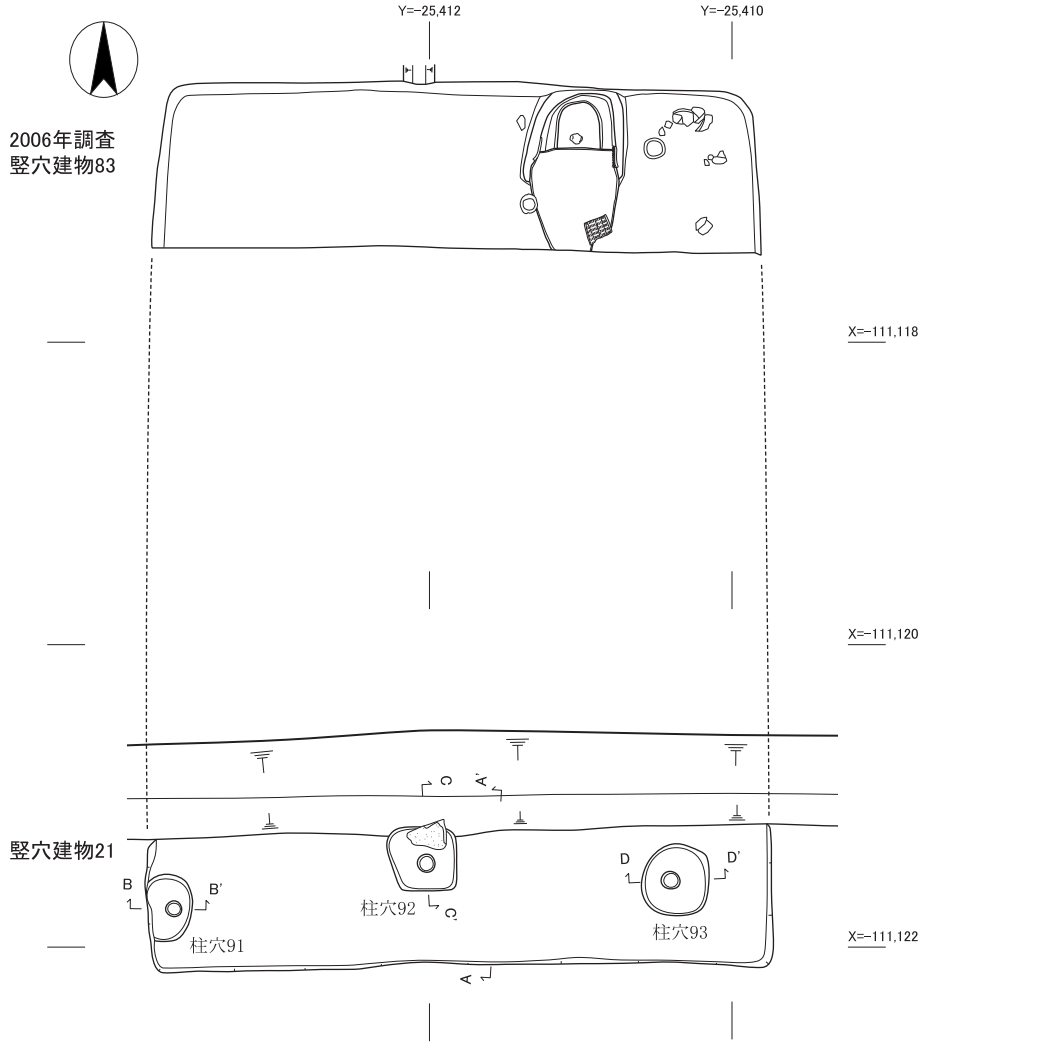
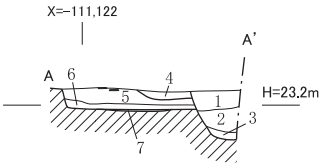
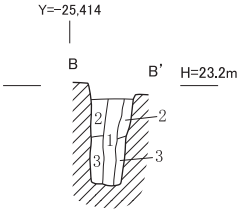



図15　第２面平面図（１：120）

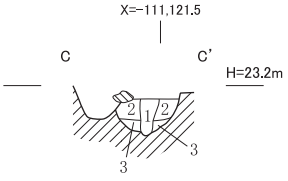


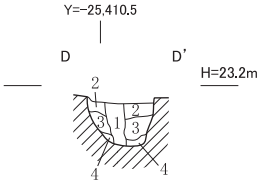

Aライン
1 10YR5/2灰黄褐色 シルト～細砂 粗砂混(溝14)
2 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト～細砂(溝14)
3 10YR6/2灰黄褐色 シルト 粘質(溝14)
4 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト～細砂 粗砂混(溝16)
5 2.5Y6/2灰黄色 シルト～細砂
6 2.5Y5/3黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
7 2.5Y5/6黄褐色 シルト～細砂 鉄分多量混 固く締まる(床面土)




Bライン
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
3 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粘質




Cライン
1 10YR4/4褐色 シルト 粘質
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト
3 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト やや粘質




Dライン
1 10YR4/4褐色 シルト 粘質
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
4 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 やや粘質

図16 竪穴建物21実測図（1：50）

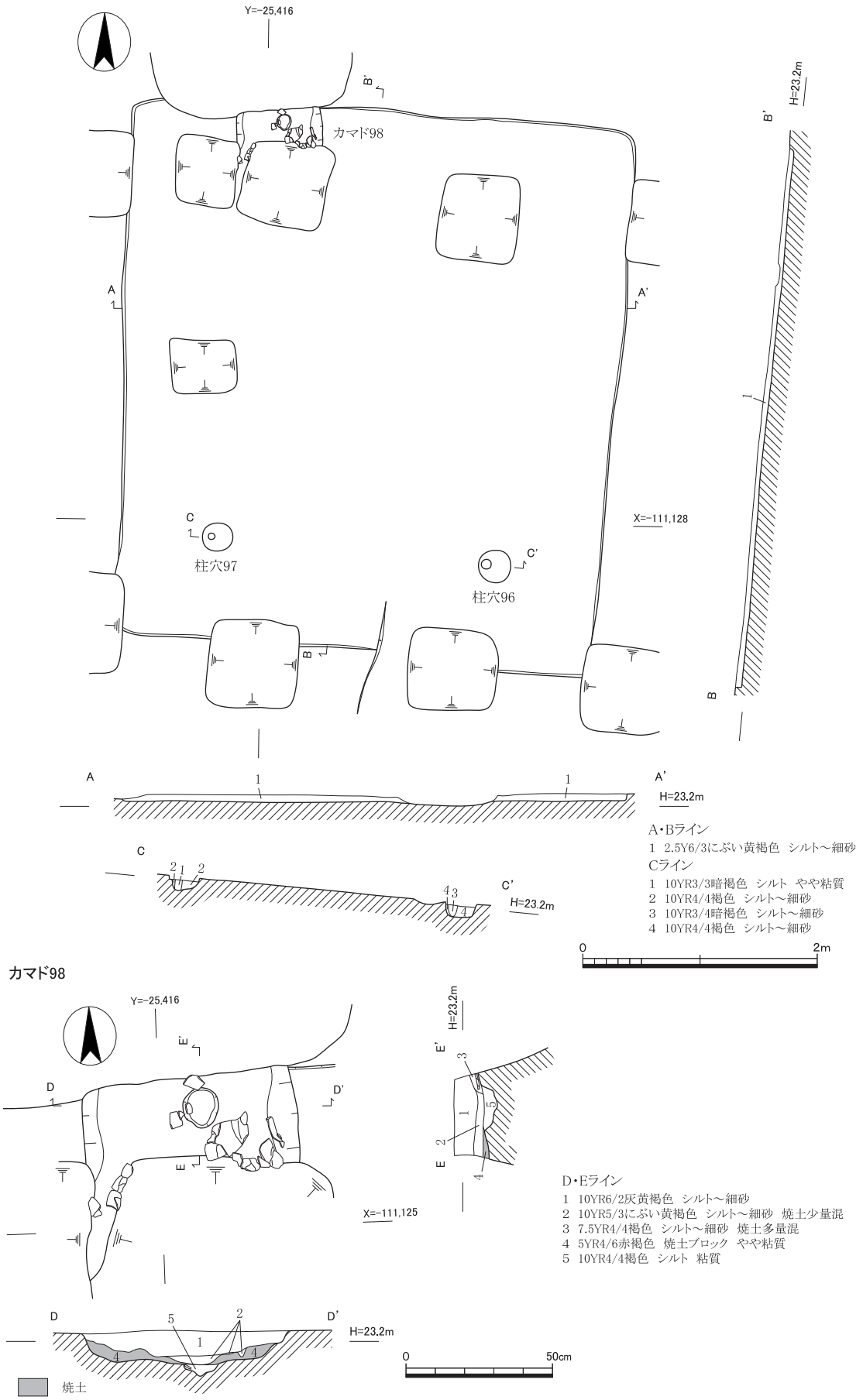
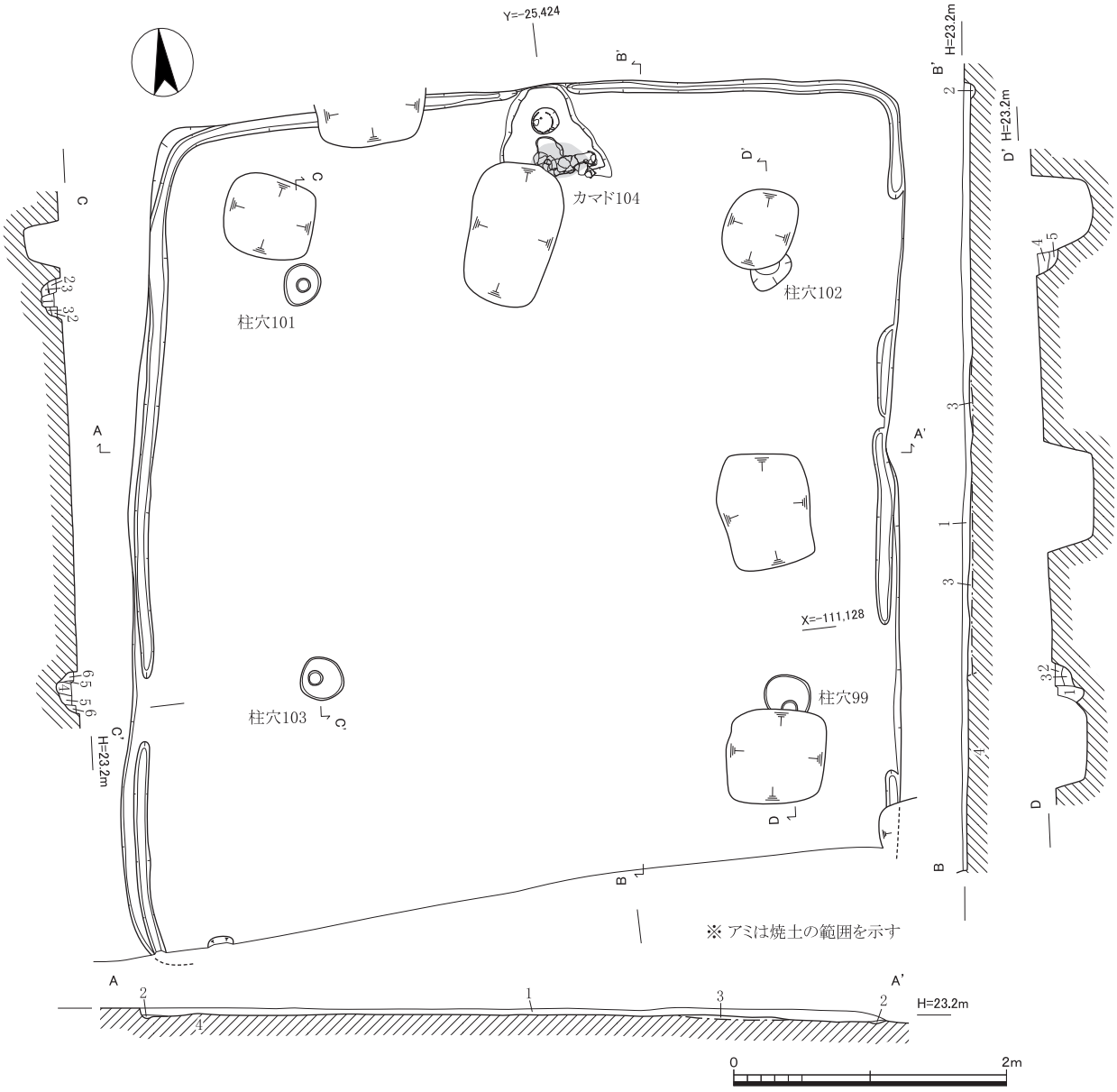
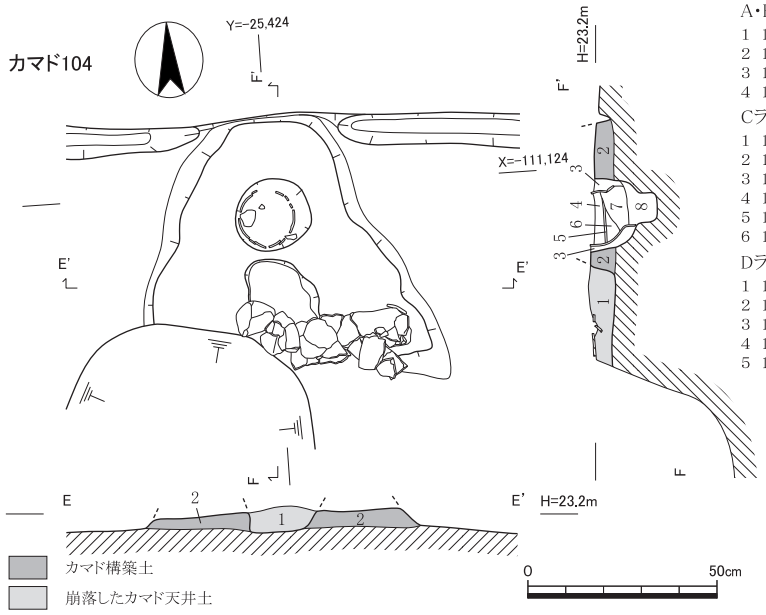



図17　竪穴建物88実測図（1：50、1：20）




A・Bライン
1 10YR5/2灰黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
3 10YR4/4褐色 シルト～細砂(下層竪穴埋土)
4 10YR3/3暗褐色 細砂(基盤層)

Cライン
1 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂
2 10YR4/4褐色 シルト～細砂
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂
5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
6 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂

Dライン
1 10YR4/4褐色 極細砂～細砂
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR3/4暗褐色 細砂に2層のブロック混
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物多量混
5 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 炭化物少量混

E・Fライン
1 10YR5/2灰黄褐色
シルト～細砂 炭化物・焼土多量混(カマド天井土)
2 10YR5/4にぶい黄褐色
シルト 焼土多量混 固く締まる(カマド構築土)
3 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂(甕据え付け)
4 2.5YR4/6赤褐色 シルト 焼け灰層
5 10YR8/1灰白色 シルト 灰層
6 2.5YR4/6赤褐色 シルト 焼け灰層
7 10YR5/6黄褐色 シルト
8 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 炭化物・焼土混

図18 竪穴建物80実測図（1：50、1：20）

に対して約８度東に振れる。壁溝が途切れながらめぐる。幅0.05～0.15ｍ、深さは0.02～0.5ｍある。床面上では主柱穴と考えられる柱穴99・101・102・103を検出した。掘形は円形で、径0.25～0.3ｍ、深さは約0.15ｍある。柱痕跡の径は約0.1ｍある。

北壁際ではカマド104を検出した。造り付けカマドの基底部のみが残存したもので、平面形は馬蹄形を呈する。基底部の最大幅は約0.75ｍ、長さは約0.7ｍ、残存高は約0.15ｍある。焚口部付近では土師器長胴甕がカマド主軸と直交するように横倒しになって出土した。崩落した天井土（図18Ｅ・Ｆライン１層）直上で出土しており、天井構築材として使用されていた可能性がある。また、カマド中央では、口縁部を下に向けて埋められた土師器甕が出土した。カマドにかける土器の支柱と考えられる。支柱の甕内部は焼けた灰と灰層が互層になって詰まる（Ｅ・Ｆライン４～６層、図版16－３）。また、カマド天井土からタイル状土製品（図31－47）が出土した。構築材として使用されていた可能性が高い。

**竪穴建物81**（図19・20、図版17・18）　調査区西半で検出した。竪穴建物80に削平される。平面形は隅丸方形で、一辺の長さは約5.0ｍある。検出面から床面までの深さは0.1～0.2ｍある。方位は北に対して約４度東に振れる。壁溝はカマド部分をのぞいて全周し、幅0.05～0.2ｍ、深さは約0.05ｍある。床面上では主柱穴と考えられる柱穴126・128・129・130を検出した。掘形は円形または隅丸方形で径0.3～0.45ｍ、深さは0.15～0.2ｍある。柱痕跡の径は0.05～0.1ｍある。

北壁際ではカマド122を検出した。造り付けカマドの基底部で、平面形は馬蹄形を呈する。基底部の最大幅は約0.95ｍ、長さ約1.1ｍ、残存高は最大で約0.15ｍある。土師器高杯を逆さにして埋め、カマドの支柱としている。支柱の高杯を据えた後、焼土ブロックが混じる土でカマドの床を貼る（Ｅ・Ｆライン４層）。床表面は被熱により赤変し、固く締まる。その上を崩落したカマド天井土が覆う（２・３層）。焚口部の崩落した天井土中からは２個体の土師器長胴甕がカマド主軸と直交する向きで横倒しになって出土した。東側の甕はほぼ完形、西側の甕は体部下半のみで、底部が東側甕の口縁部に差し込まれた状態で出土した。カマド天井構築の際の芯材として転用されたものと考えられる。また、西側のカマド袖部構築土中からはフォルンフェルスの板状石材が立った状態で出土した。石材は長さ約28㎝、幅約10.5㎝、厚さ約５㎝あり、基部が約７㎝床面に刺さった状態で出土した。石材の一方の先端を床面に突き刺してカマド袖の芯材としたものと考えられる。

この竪穴建物は、全体に厚さ約0.05ｍの貼床を行っており、貼床掘り下げ後、床下で土坑161～165・167・168とピット166を検出した。土坑161・162は建物の壁際に沿うように掘られており、幅0.3～0.7ｍ、深さは0.05～0.15ｍある。土坑163はカマド122の下層に位置し、深さは約0.2ｍある。埋土は10YR4/4褐色シルト～細砂に炭化物・焼土が混じる。土坑161～163は出土位置から見て、竪穴建物に伴うものと考えられる。土坑164・165・167・168は深さ0.3～0.7ｍで埋土はいずれも10YR4/4褐色シルト～細砂である。ピット166は径約0.35ｍ、深さ約0.35ｍあり、埋土は10YR4/4褐色シルト～細砂である。これらは竪穴建物に伴うものか、竪穴建物構築以前の遺構であるか不明である。

**竪穴建物82**（図21、図版18）　調査区西半で検出した。竪穴建物80・81に削平される。平面形

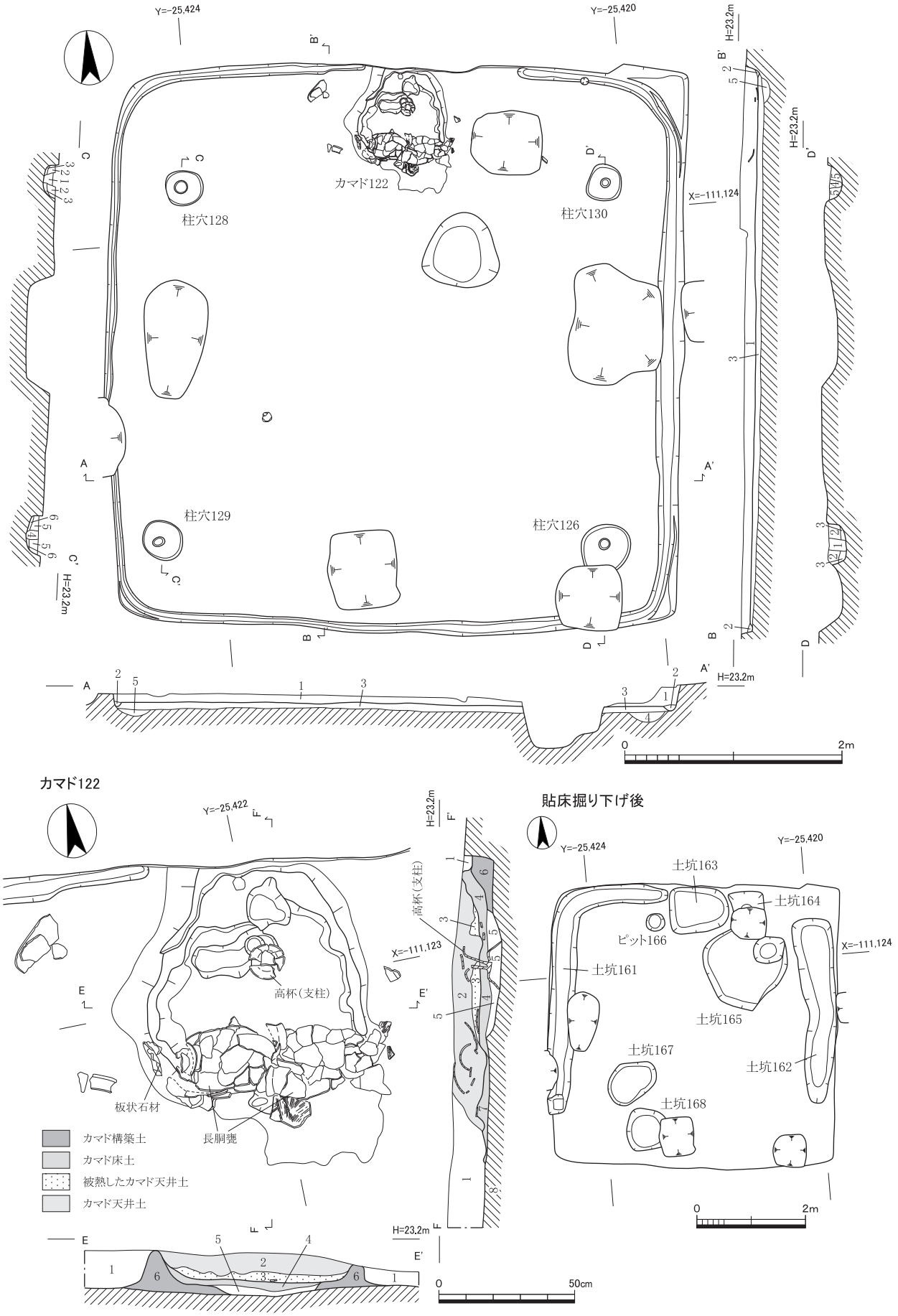



図19　竪穴建物81実測図（1：50、1：20、1：100）

A・Bライン
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
3 10YR3/4暗褐色 極細砂～細砂 焼土少量混(貼床)
4 10YR3/3暗褐色 細砂と10YR2/2黒褐色 細砂 炭化物微量混(土坑162)
5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂(土坑161)

Cライン
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂 やや粘質
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粘質
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂
5 10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂～細砂
6 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質

Dライン
1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR4/4褐色 シルト～細砂 やや粘質
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂
5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂

E・Fライン(カマド122)
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混(竪穴建物埋土)
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
炭化物・焼土少量混(崩れたカマド天井土)
3 2.5YR4/6赤褐色 シルト 表面被熱により変色 (崩落したカマド天井土)
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂 焼土ブロック混(カマド床土)
5 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 焼土少量混 固く締まる(高坏据え付け土)
6 7.5YR4/4褐色 シルト 固く締まる 被熱により変色(カマド構築土)
7 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト
表面被熱により2.5YR5/6明赤褐色に変色(被熱したカマド床土)
8 10YR3/3暗褐色 極細砂～細砂(基盤層)

図20 竪穴建物81土色

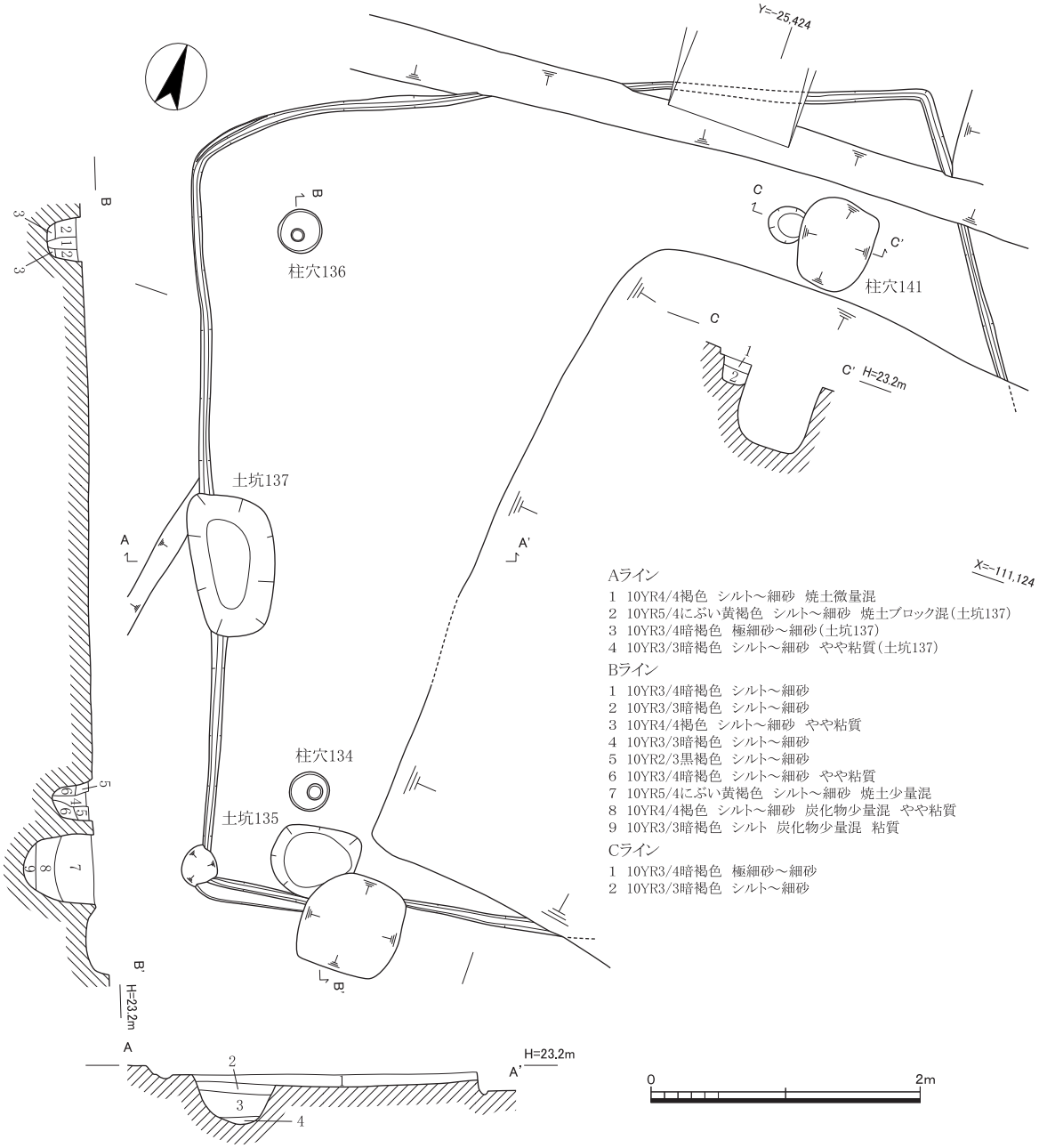
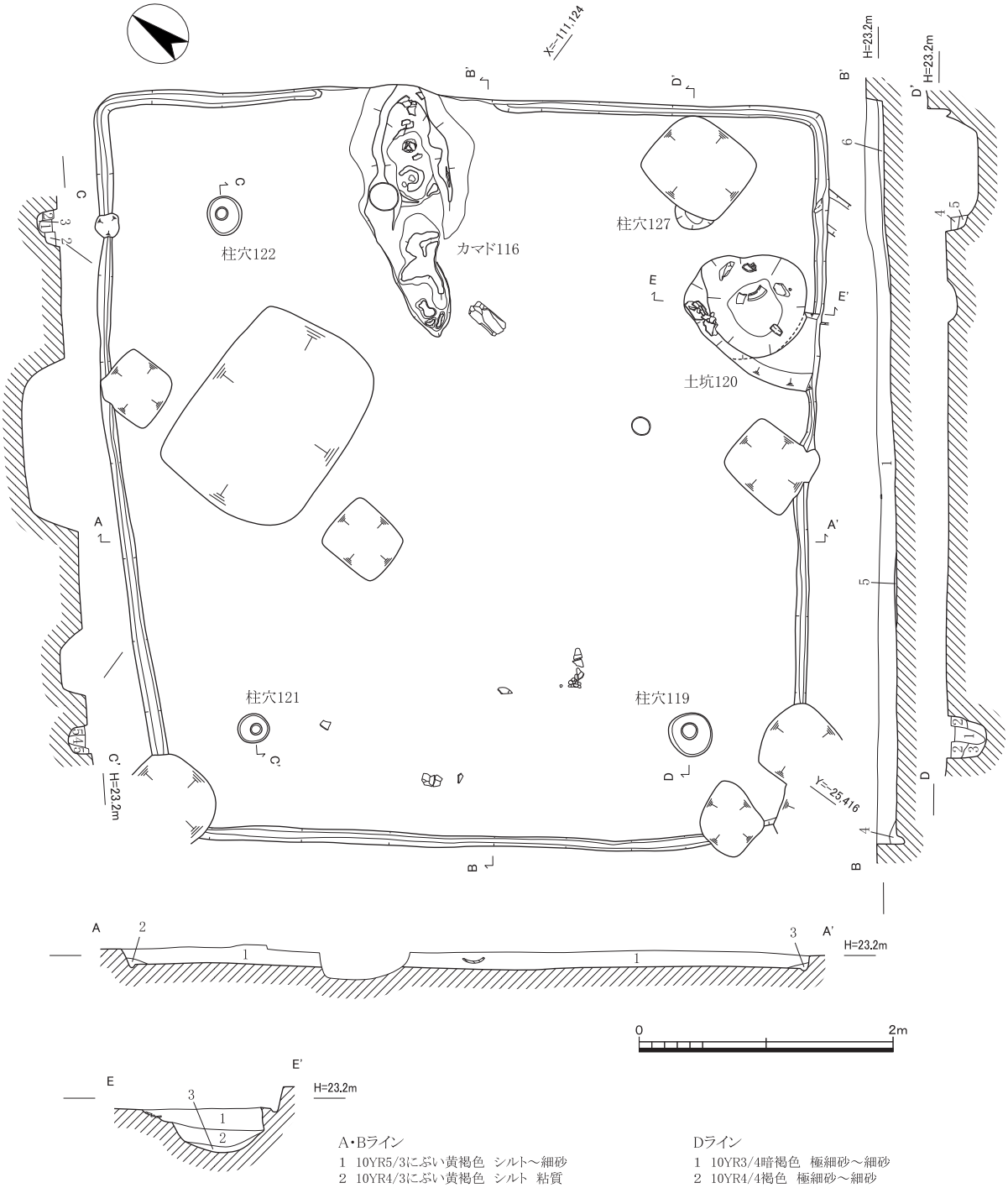



図21 竪穴建物82実測図 (1 : 50)







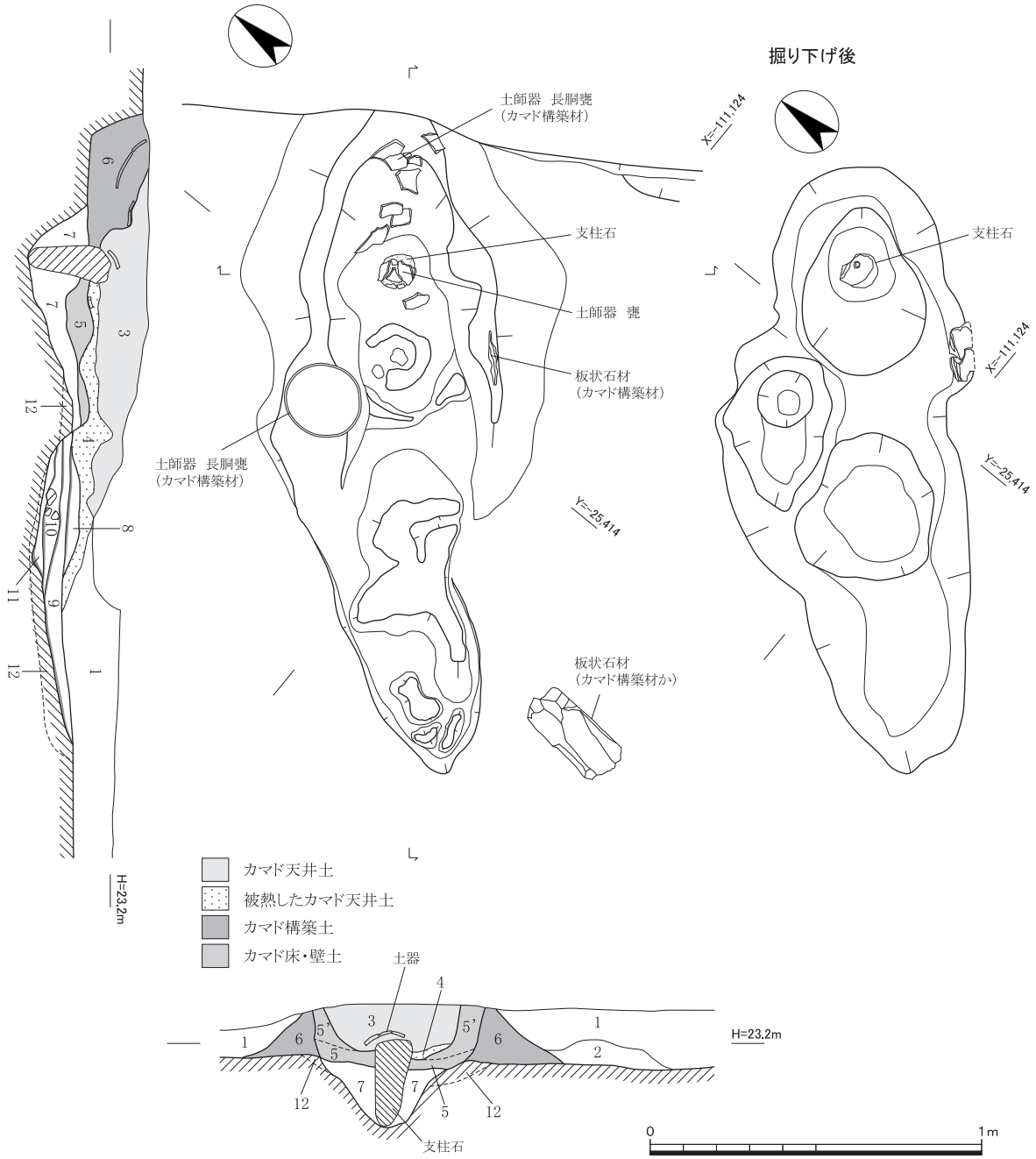
A・Bライン
1 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粘質
3 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粘質
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂 やや粘質
5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 固く締まる 鉄分多量含
6 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 焼土少量混

Cライン
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂 やや粘質
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂
3 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト やや粘質
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂
5 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂

Dライン
1 10YR3/4暗褐色 極細砂～細砂
2 10YR4/4褐色 極細砂～細砂
3 10YR3/3暗褐色 細砂
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
5 10YR4/4褐色 極細砂～細砂

Eライン
1 10YR4/4褐色 シルト～細砂
2 10YR3/4暗褐色 極細砂～細砂 炭化物少量混
3 10YR6/3にぶい黄橙色 シルト 粘質

図22 竪穴建物115実測図（1：50）

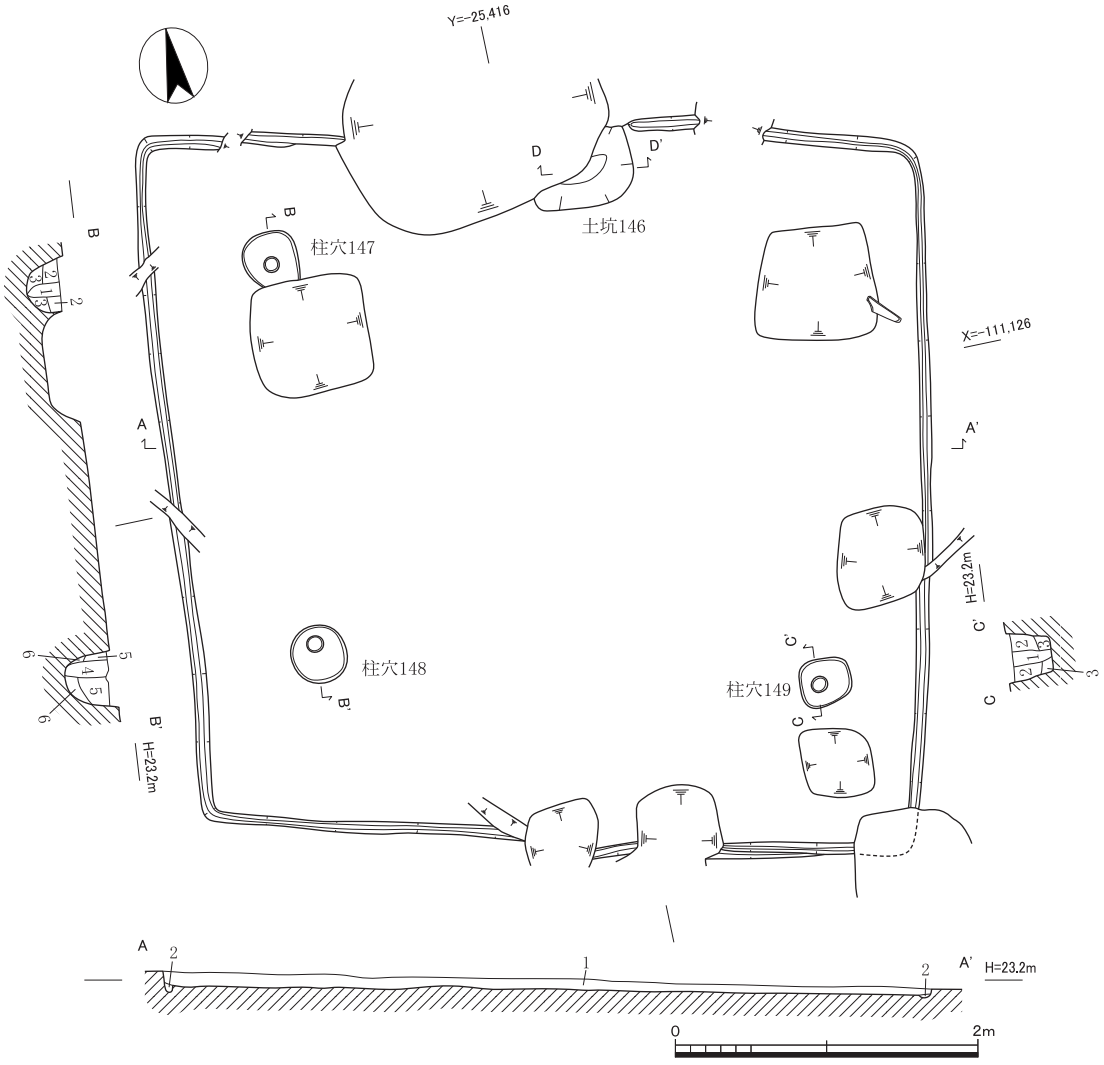


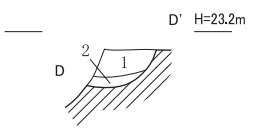

1 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂(竪穴建物埋土)
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 灰・炭化物少量混
3 10YR5/2灰黄褐色 シルト～細砂 固く締まる(崩落したカマド天井土)
4 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂に5YR5/6明赤褐色シルトの焼土ブロック多量混(被熱したカマド天井土)
5 10YR4/1褐灰色 シルト 灰・炭化物多量、焼土中量混(床面構築土)
5’ 5層と同じ 被熱で2.5Y4/6赤褐色に変色
6 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 炭化物・焼土少量混 土器多量混(カマド構築土)
7 2.5Y4/6赤褐色 シルト 焼土ブロック多量混(支柱埋土)
8 10YR6/2にぶい黄橙色 シルト 炭化物・焼土・灰混 最下層炭堆積
9 10YR7/2にぶい黄橙色 シルト 灰多量、焼土の小ブロック中量混 最下層炭堆積
10 10YR7/2にぶい黄橙色 シルト 灰、焼土の大ブロック多量混 最下層炭堆積
11 10YR7/2にぶい黄橙色 シルト 灰、焼土の小ブロック多量混 最下層炭堆積
12 10YR4/4褐色 シルト～細砂(基盤層)

図23 カマド116実測図（1：20）

は方形で一辺の長さは約5.5ｍある。検出面から床面までの深さは0.05～0.1ｍある。方位は北に対して約20度西に振れる。壁溝は全周する。幅0.05～0.1ｍ、深さは約0.05ｍある。床面上で主柱穴と考えられる柱穴134・136・141を検出した。掘形は円形で径0.25～0.3ｍ、深さは0.2～0.3ｍある。柱痕跡の径は約0.1ｍある。床面上では他に、南隅で土坑135を、西壁際で土坑137を検出した。貯蔵穴などの可能性がある。土坑135は不整円形で長径約0.6ｍ、短径約0.5ｍ、深さは約0.6ｍある。土坑136は隅丸方形で長径約1.1ｍ、短径約0.6ｍ、深さは約0.3ｍある。

**竪穴建物153**（図15）　調査区中央部で検出した。竪穴建物80・81・82に削平され、コーナー部が１箇所のみ残存する。平面形は方形と考えられ、検出面から床面までの深さは約0.05ｍある。壁溝は幅0.05～0.1ｍ、深さは約0.05ｍある。




Aライン
1　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト～細砂　炭化物・焼土少量混
2　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂

Bライン
1　10YR4/3にぶい黄褐色　極細砂～細砂
2　10YR4/4褐色　シルト～細砂
3　10YR3/3暗褐色　極細砂～細砂
4　10YR4/4褐色　極細砂～細砂
5　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂
6　10YR3/4暗褐色　シルト　やや粘質

Cライン
1　10YR4/4褐色　極細砂～細砂
2　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト～細砂
3　10YR4/4褐色　シルト　やや粘質

Dライン
1　10YR4/4褐色　シルト～細砂
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂　やや粘質

図24　竪穴建物142実測図（１：50）

**竪穴建物115**（図22・23、図版19・20）　調査区東半で検出した。竪穴建物88に削平される。平面形は方形で一辺の長さは5.0～5.8ｍある。検出面から床面までの深さは0.1～0.15ｍある。方位は北に対して約50度東に振れる。壁溝はカマド部分を除いてほぼ全周する。幅0.05～0.1ｍ、深さは約0.05ｍある。床面上では主柱穴と考えられる柱穴119・121・122・127を検出した。掘形は円形で径0.25～0.35ｍ、深さは0.15～0.3ｍある。柱痕跡の径は0.08～0.12ｍある。南東壁際では貯蔵穴と考えられる土坑120を検出した。南肩を掘りすぎてしまったが、平面形は歪な円形と考えられ、径約0.9ｍ、深さは約0.35ｍある。埋土から土師器甕・甑把手、須恵器杯蓋・壷などが出土した。

北東壁際ではカマド116を検出した。造り付けカマドの基底部で、平面形は馬蹄形を呈する。基底部最大幅は約0.9ｍ、長さ約1.2ｍ、残存高は最大で約0.2ｍある。カマドの支柱には棒状の砂岩

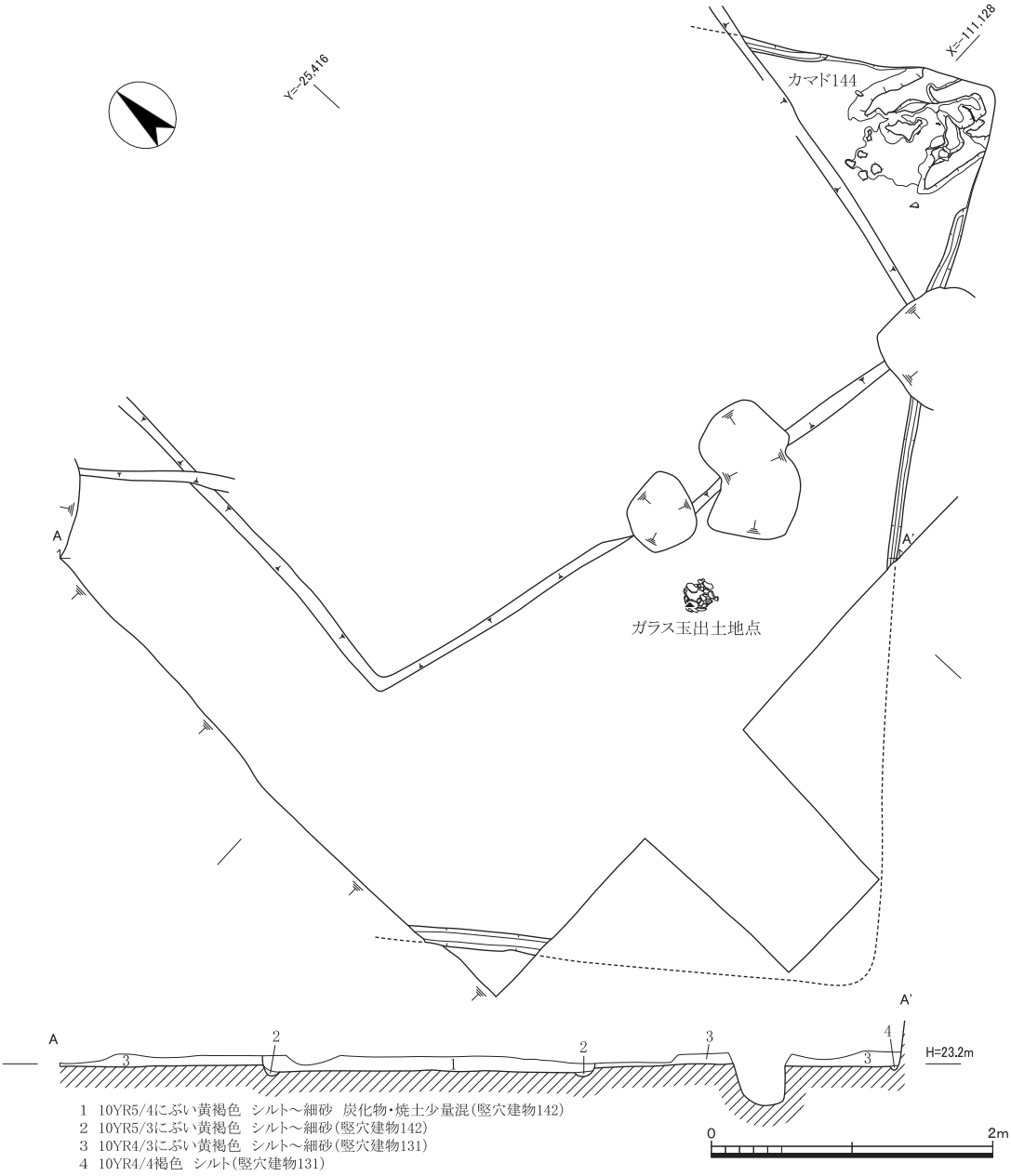
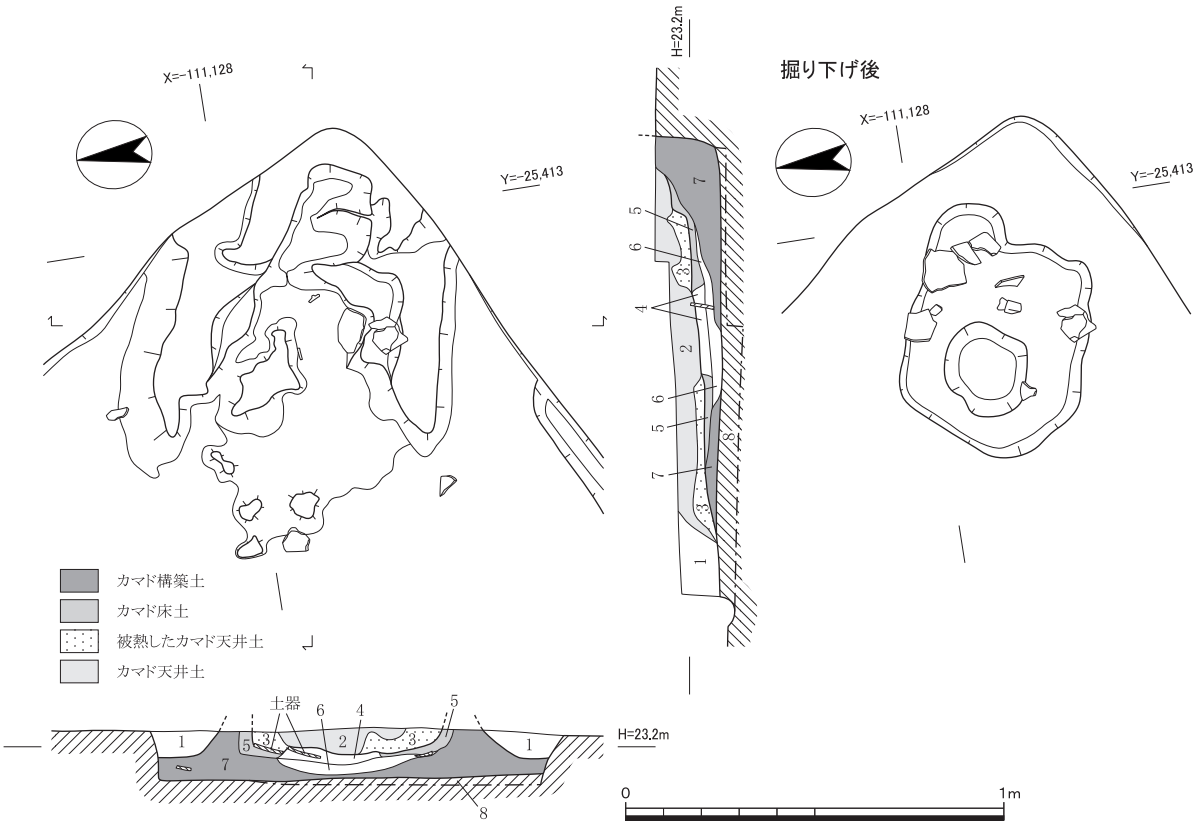



図25　竪穴建物131実測図（１：50）

を用い、約0.15ｍ掘り下げて据えた後、灰や焼土ブロックを混ぜた土でカマドの床を貼る（図23－5層）。支柱の石材の上には土師器甕が被せられていた。しかし、カマドにかけた甕底が接すると考えられる支柱石材の頂部が被熱により円形に剥離する（図版20－２）ため、被せられた土師器甕は後から載せられたものと考えられる。カマドの床表面は被熱により赤変し（５'層）、固く締まる。その上を崩落したカマド天井土が覆う（３・４層）。カマド西袖部の構築土中からは土師器長胴甕の体部下半が正置の状態で出土した。甕内部にはカマド構築土と同じにぶい黄褐色シルトが詰まり固く締まることから、カマド袖の芯材として転用されたものと考えられる。カマド奥の構築材中からも土師器長胴甕の破片が出土しており、同様に芯材として使用された可能性がある。また、東袖部の構築土中では立った状態のホルンフェルスの板状石材を検出した（図版20－３）。石材は長さ約33㎝、幅約12㎝、厚さ約５㎝あり、基部が約８㎝床面に刺さった状態で出土した。石材の一方の先端を床面に突き刺してカマド袖の芯材としたものと考えられる。カマド116の南側床面上でも同じフォルンフェルスの板状石材が出土しており（図23)、同様にカマドの構築材として用いられたものである可能性が高い。カマドの焚口部は建物床面から一段掘り下げられており、カマドから掻き出したと考えられる炭と灰の堆積を４層確認した（８～11層)。




1　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト～細砂(竪穴建物131埋土)
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂　焼土少量混(崩落したカマド天井土)
3　5YR4/6赤褐色　シルト～細砂　(被熱したカマド天井土)
4　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト(支柱埋土か)
5　5YR4/4にぶい赤褐色　シルト(被熱したカマド床土)
6　5YR3/6暗赤褐色　シルト　焼土ブロック多量混(カマド床下入れ土)
7　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト(カマド構築土)
8　10YR3/3暗褐色　極細砂～細砂(基盤層)

図26　カマド144実測図（１：20）

**竪穴建物142**（図24、図版21）　調査区東半で検出した。竪穴建物88・115に削平される。平面形はやや歪な方形で、一辺の長さは4.5～5.1ｍある。検出面から床面までの深さは0.05～0.1ｍある。方位は北に対して約12度東に振れる。壁溝はほぼ全周する。幅0.05～0.1ｍ、深さは0.02～0.08ｍある。床面上で主柱穴と考えられる柱穴147・148・149を検出した。平面形は円形もしくは隅丸方形で径0.3～0.4ｍ、深さは0.25～0.3ｍある。柱痕跡の径は約0.1ｍある。北壁際では貯蔵穴の可能性がある土坑146を検出した。平面形は隅丸方形で長径約0.7ｍ、短径約0.5ｍ、深さは約0.25ｍある。カマドや炉などの施設は確認できなかった。

**竪穴建物131**（図25・26、図版21）　調査区東半で検出した。竪穴建物80・81・88・115・142に削平される。平面形は方形で、一辺の長さは6.4ｍ前後と推測される。検出面から床面までの深さは0.05～0.1ｍある。方位は北に対して約30度西に振れる。壁溝は幅0.05～0.15ｍ、深さは約0.05ｍある。床面直上で土師器の甕が出土した。また、埋土からガラス小玉が１点出土した。

建物東コーナー部でカマド144を検出した。造り付けカマドの基底部で、平面形は馬蹄形を呈する。基底部の最大幅は約0.85ｍ、長さ約1.0ｍ、残存高は最大で約0.15ｍある。燃焼部床面下を東西約0.6ｍ、南北約0.5ｍの範囲に渡って掘り下げ、焼土ブロックが多量に混じる土で埋めている（図26－６層）。脱湿を意図したものと考えられる。その上に床を貼る（５層）。床は被熱で赤変するが、中央に直径約0.2ｍの円形に焼けていない箇所があり（４層）、支柱を据えていた痕跡の可能性がある。それらを崩落したカマド天井土が覆う（２・３層）。燃焼部床面付近から滑石製の勾玉模造品が出土した。

**竪穴建物152**（図27）　調査区東半で検出した。竪穴建物88・115・142・131に削平され、建物東側の一部のみ残存する。平面形は方形で、一辺の長さは約4.5ｍと推測される。検出面から床面までの深さは約0.1ｍある。方位は北に対して約18度西に振れる。壁溝は幅0.05～0.1ｍ、深さは約0.05ｍある。

**土坑154**（図15）　調査区東半の南壁際で検出した。検出長は東西約0.45ｍ、南北約1.4ｍで、深さは約0.６ｍある。埋土は図７－13～15層で、埋土中から今調査では唯一となる弥生時代後期の土器片が出土した。

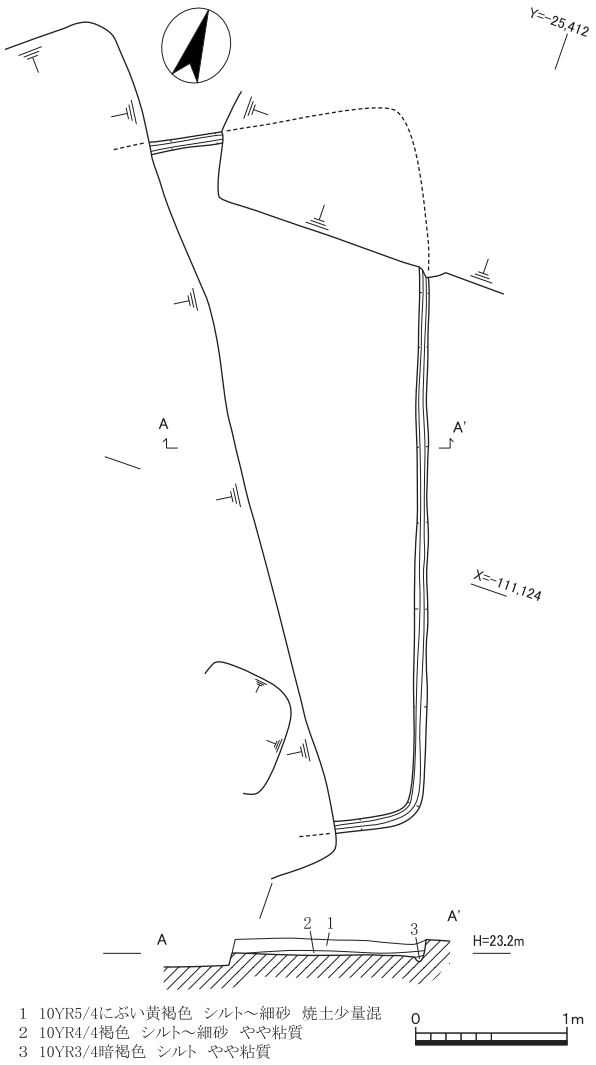



図27　竪穴建物152実測図（１：50）

# 4．遺　　物

今回の調査では整理箱にして32箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、石製品がある。全体の９割以上を土器・陶磁器類が占め、それ以外は微量である。遺物の帰属時期は弥生時代から室町時代までのものがある。古墳時代の遺物が約７割を占め、次いで奈良時代のものが多い。その他の時期の遺物は微量で、弥生土器に関しては土坑152から後期の甕が出土したのみである。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種別に概要を述べる。なお、土器類の個別の詳細については表４にまとめた。

## （1）土器類

**掘立柱建物１**（図28）　掘立柱建物１を構成する柱穴掘形から土師器椀・皿・甕、須恵器杯蓋・皿蓋・甕、製塩土器などが出土した。

１は土師器皿である。外面下半はヘラケズリする。平安京Ⅰ期新段階[4)]に位置付けられる。２は土師器甕の口縁部である。端部は上方につまみあげる。内面はヨコハケメが残る。３は須恵器杯Ｂ蓋[5)]、４は杯Ａもしくは杯Ｂの口縁部である。５は壷の口縁部である。端部は玉縁状になる。

**掘立柱建物２**（図28）　掘立柱建物２を構成する柱穴掘形から土師器椀・皿・甕、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壷Ａ蓋・壷破片・甕などが出土した。土師器皿はすべて暗文をもつものである。８世紀後葉から末葉に属する一群と考えられる。また柱穴45の柱痕跡からは須恵器杯Ｈが出土している。

図化できたのは３点である。６は土師器椀、７は須恵器杯Ａ、８は須恵器壷の高台部である。

**掘立柱建物３**（図28）　掘立柱建物３を構成する柱穴掘形から土師器椀・皿・杯・高杯・盤・

表３　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 弥生時代 | 弥生土器 | | | | 23箱 |
| 古墳時代 | 土師器、須恵器、土製品、石器、玉類 | | 土師器14点、須恵器９点、土製品３点、石器２点、石製勾玉１点、臼玉１点、ガラス玉１点 | １箱 | |
| 奈良時代 | 土師器、須恵器、金属製品、石器 | | 土師器６点、須恵器９点、素文鏡１点、石器２点 | | ７箱 |
| 平安時代 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品 | | 土師器２点、須恵器６点 | | |
| 鎌倉時代～室町時代 | 土師器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器 | | | | １箱 |
| 合　計 | | 37箱 | 57点（５箱） | １箱 | 31箱 |

※コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より５箱多くなっている。

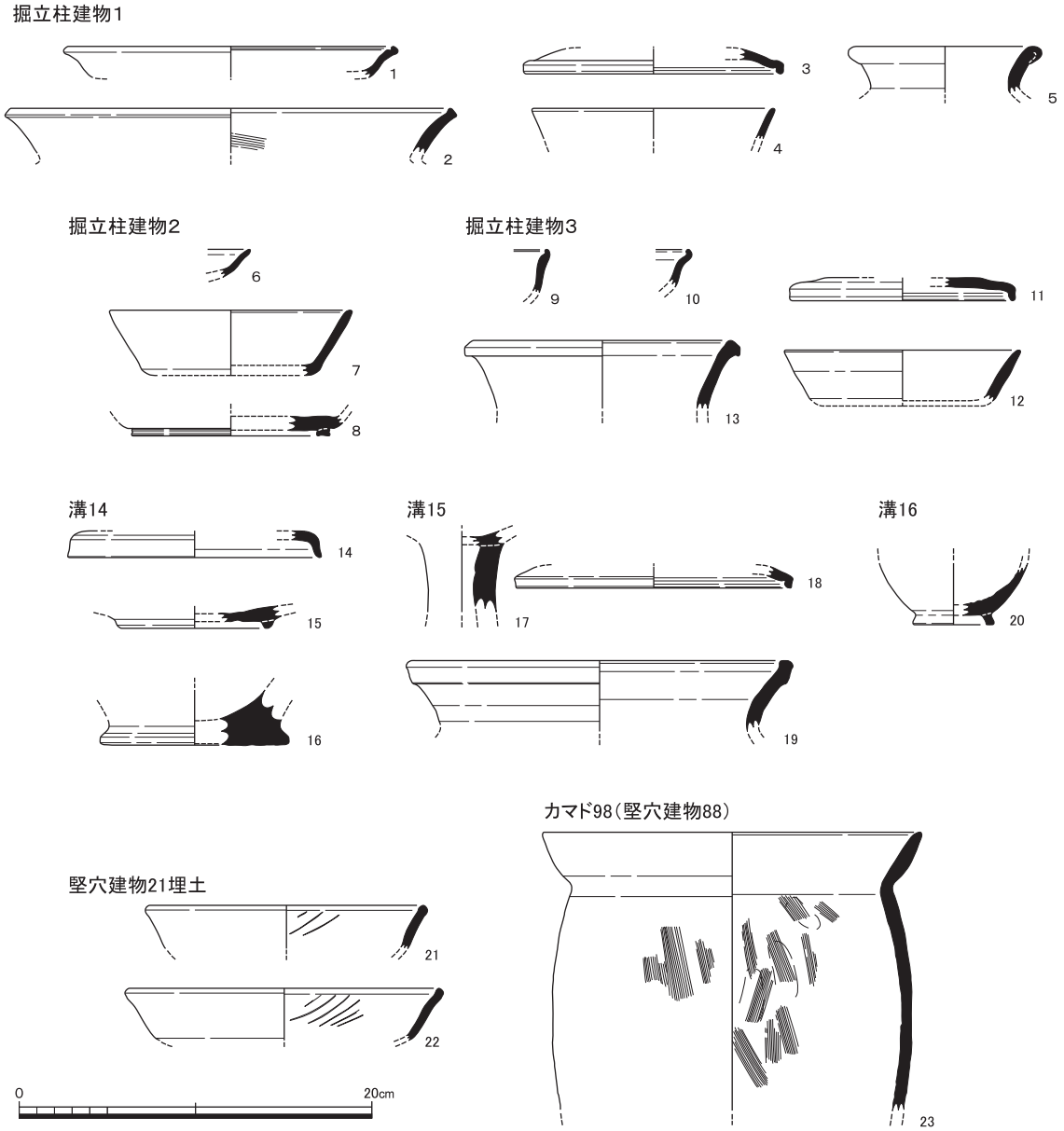



図28　奈良時代から平安時代土器実測図（1：4）

甕、須恵器杯A・杯B・杯H・杯蓋・皿蓋・壷・甕、製塩土器などが出土した。8世紀後葉から末葉に属する一群と考えられる。

9・10は土師器杯Aである。小片のため暗文の有無は確認できなかった。11～13は須恵器で、11は杯B蓋、12は杯A、13は甕口縁部である。

**溝14**（図28）　溝埋土下層からは土師器皿・甕、須恵器杯H・杯A・杯B・器台・鉢・壷、緑釉陶器片、灰釉陶器皿などが出土した。上層からは土師器皿・甕、焼締陶器常滑産甕、輸入陶磁器青磁・白磁片、平瓦、砥石などが出土した。下層は平安京Ⅰ期新段階からⅢ期古段階、上層は京都Ⅵ期古段階頃までの資料を含む。

14は須恵器壷蓋、15は緑釉陶器系の須恵器皿で貼り付け高台である。16は須恵器鉢で、外面の一部に自然釉が付着する。

**溝15**（図28）　埋土から土師器皿、須恵器杯・杯Ｂ蓋・高杯・壷・甕などが出土した。８世紀中葉から後葉頃のものと考えられる。

17～19はすべて須恵器で、17は高杯、18は杯Ｂ蓋、19は甕口縁部である。

**溝16**（図28）　埋土から土師器皿、須恵器杯Ｈ蓋・壷・甕が出土した。８世紀中葉頃のものと考えられる。図化できたのは１点のみである。

20は須恵器壷Ｌで体部は球形を呈し、外面に自然釉が付着する。

**竪穴建物21**（図21）　埋土上層からは土師器皿・杯・甕、須恵器壷・甕が出土した。下層からは土師器杯・甕、須恵器杯Ｈ・杯Ａ・壷・甕が出土した。床面直上からは土師器と須恵器の小片と石皿が出土した。埋土から出土した土師器皿はすべて暗文をもつものである。

21・22は土師器杯Ａである。21は下層、22は上層から出土した。いずれも内面に放射状の暗文が施される。８世紀中葉頃のものと考えられる。

**カマド98**（図21）　竪穴建物88内のカマド98からは土師器甕、須恵器杯Ｈが出土した。23は土師器甕である。口縁部はヨコナデ、体部は外面タテハケメ、内面はナデのちタテハケメで仕上げる。

竪穴建物88埋土からは土師器甕、須恵器杯Ｈ・甕が出土している。須恵器杯Ｈは小片であるがＴＫ217型式[6]に属するものと考えられる。

**竪穴建物80**（図29）　埋土から土師器高杯・甕・壷、須恵器杯蓋・杯身・甕が出土した。須恵器杯蓋・杯身はＴＫ10～ＴＫ43型式の６世紀中頃から後半に位置付けられるものである。

24は埋土上層から出土した土師器高杯の脚部である。短くハの字状に開く。外面は板ナデする。内面には布目が着き、一部その上から指オサエする。25は埋土上層から出土した須恵器杯身である。ＴＫ43型式に属する資料である。

**カマド104**（図29、図版22）　竪穴建物80内のカマド104からは土師器甕・長胴甕、タイル状土製品、石器などが出土した。

26はカマドの支柱として使用されていた土師器甕である。口縁部はヨコナデするが粘土紐接合痕が残る。体部外面は二次焼成を受け調整は不明である。内面はヨコハケメで仕上げる。27・28はカマドの天井構築材として使用されていたと考えられる土師器長胴甕である。いずれも口縁部は内弯して立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。体部外面はタテハケメ、内面はヘラケズリする。

**竪穴建物115**（図29、図版22）　埋土から土師器長胴甕・甑、須恵器杯蓋・杯身・甕が出土した。床面直上からは土師器甕・鍋・甑が出土した。

29は埋土下層から出土した土師器甕である。全体的に磨滅が著しい。口縁部はヨコナデするが粘土紐接合痕が明瞭に残る。30は埋土下層から出土した須恵器杯蓋である。完形品で天井部は３/４までヘラケズリする。ＴＫ10型式に属するものである。31は埋土上層から出土した須恵器杯身である。二次焼成を受ける。ＴＫ43型式に属するものである。

**土坑120**（図29）　竪穴建物115の貯蔵穴と考えられる土坑120からは土師器甕・甑把手、須恵器杯蓋・壷、石材（チャート・砂岩）が出土した。

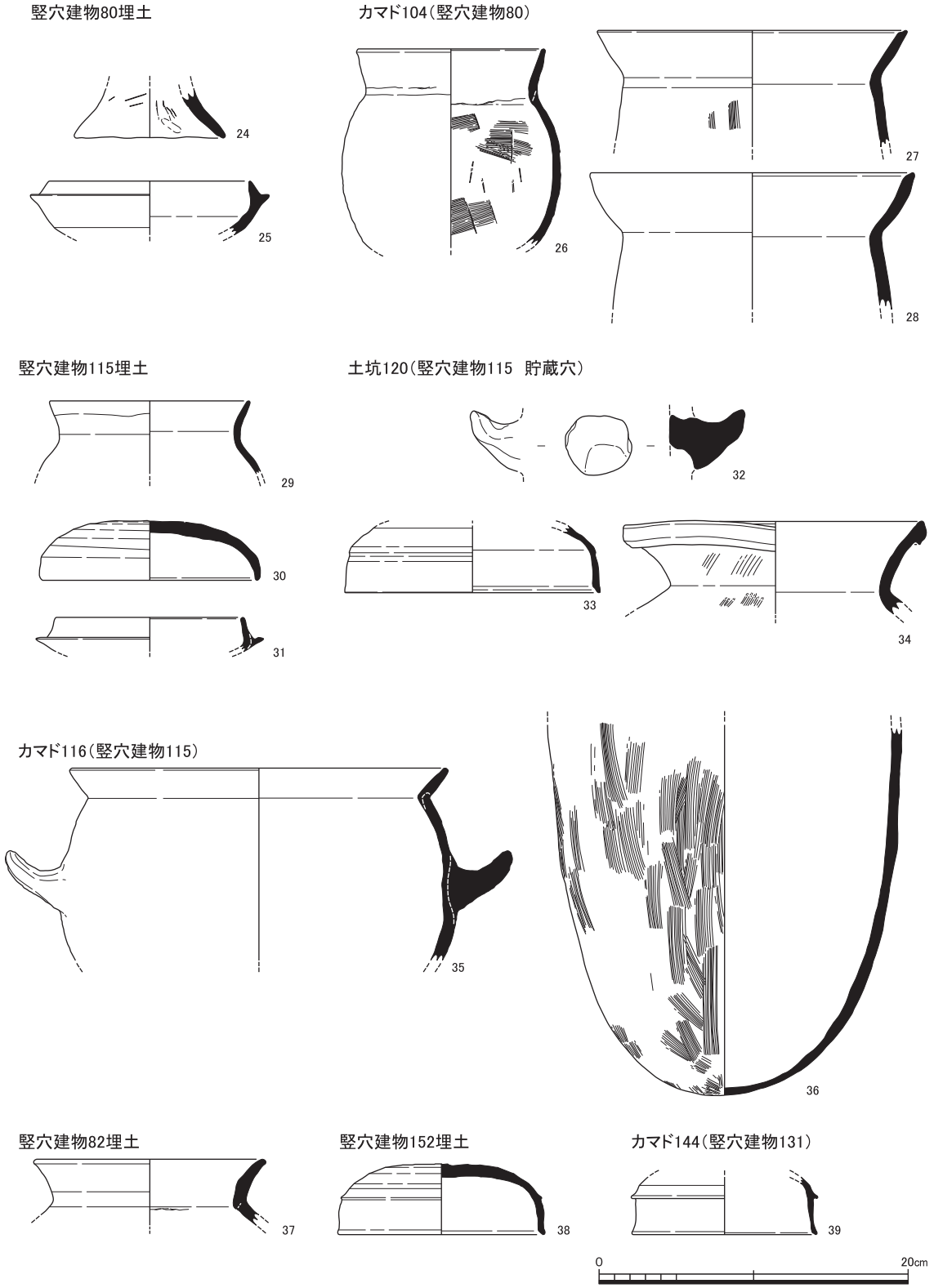



図29　古墳時代土器実測図１（１：４）

32は土師器甑の把手と考えられる。33は須恵器杯蓋である。天井部は２/３までヘラケズリする。ＴＫ10型式に位置付けられるものである。34は須恵器甕である。口縁部外面にはハケメが残る。体部外面はタタキ、内面は同心円の当て具痕が認められる。

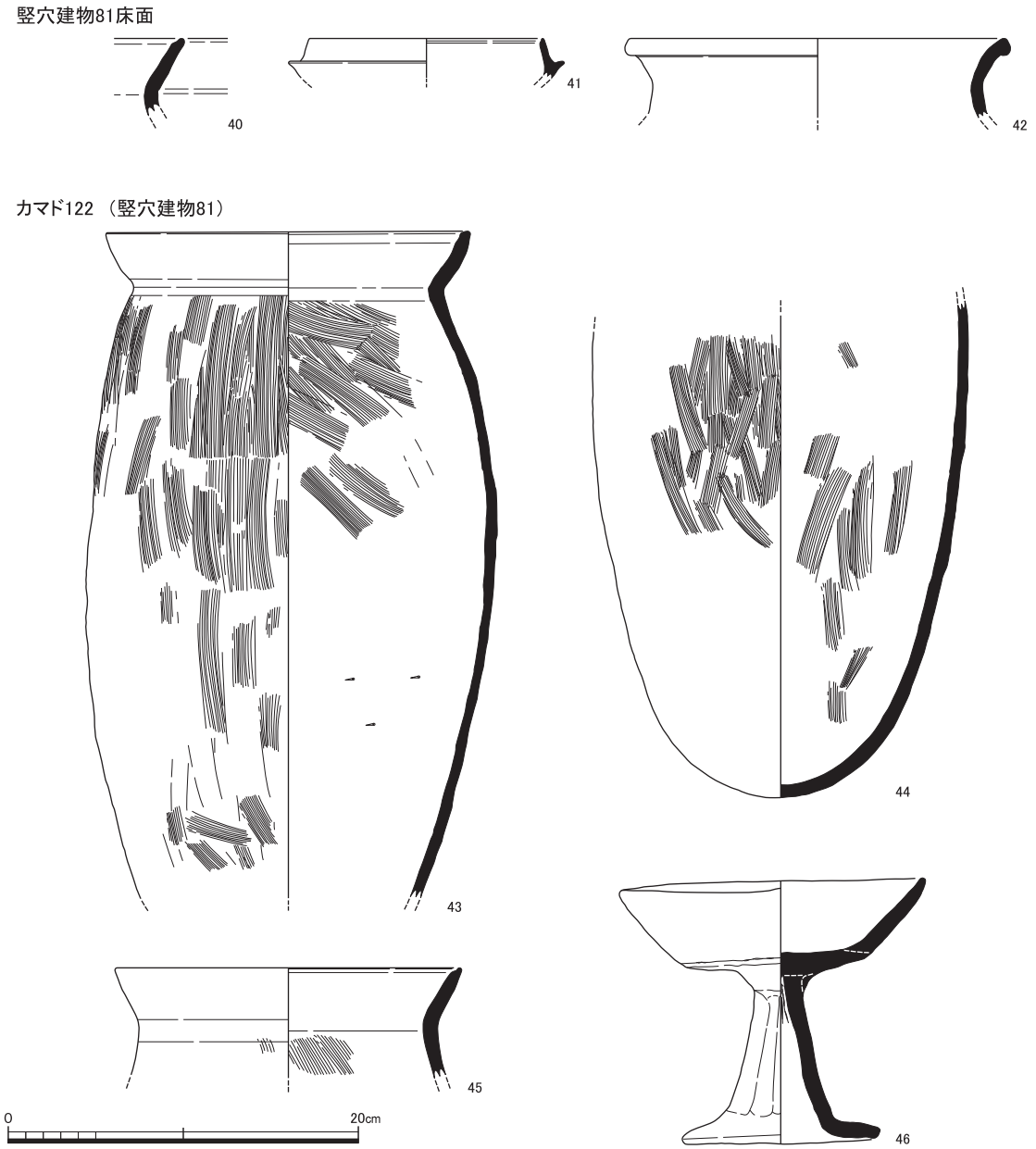



図30　古墳時代土器実測図２（１：４）

**カマド116**（図29、図版22）　竪穴建物115内のカマド116からは土師器長胴甕・鍋、須恵器杯蓋・甕が出土した。

35は土師器の把手付鍋である。二次焼成を受けて磨滅が著しい。36はカマド袖構築材として使用されていた土師器長胴甕である。体部下半のみ出土した。外面タテハケメ、内面はナデで仕上げる。外面には煤が付着する。

**竪穴建物82**（図29）　埋土から土師器甕、須恵器杯身・甕が出土した。

37は土師器甕の口縁部である。ヨコナデするが粘土紐接合痕跡が明瞭に残る。

**竪穴建物152**（図29）　埋土から土師器甕、須恵器杯蓋・甕が出土した。

38は須恵器杯蓋である。天井部は４/５までヘラケズリする。ＴＫ47型式に位置付けられる。

**カマド144**（図29）　竪穴建物131内のカマド144からは土師器甕・高杯、須恵器杯蓋・杯身、滑

石製勾玉が出土した。

39はカマド構築土から出土した須恵器杯蓋である。ＴＫ23型式に属すると考えられる。

**竪穴建物81**（図30）　埋土から土師器甕、須恵器杯蓋・甕、土錘などが出土した。床面直上からは土師器長胴甕、須恵器杯身・甕が出土した。

40～42はすべて床面直上から出土した土器である。40は土師器長胴甕の口縁部で、端部は内傾する面をもつ。内面ヨコナデ、外面はタテハケメをナデで消す。41は須恵器杯身である。ＴＫ10型式に属するものと考えられる。42は須恵器甕の口縁部である。端部は玉縁状になる。外面にはカキメが認められる。

**カマド122**（図30、図版22）　竪穴建物81内のカマド122からは土師器長胴甕・高杯、須恵器甕・壷が出土した。

43・44はカマド天井構築材に使用されていた土師器長胴甕である。43の口縁部は内弯して立ち上がる。体部外面はタテハケメ、内面上半はナナメハケメ、下半はケズリのちハケメで仕上げる。外面下半2/3まで煤が付着する。44は長胴甕下半部のみである。内外面ともにタテハケメで仕上げる。二次焼成を受け磨滅が著しい。底部には煤が付着する。45も土師器長胴甕の口縁部である。口縁部は直線的に立ち上がる。体部は内外面ともタテハケメで仕上げる。46はカマドの支柱として使用されていた土師器高杯である。脚部と杯底部、杯口縁部はすべて別作りで、接合により成形する。杯口縁部は赤色系の粘土、杯底部には白色系の粘土を使用するため接合痕が明瞭である。杯口縁部はヨコナデ、杯底部はナデで仕上げる。脚部外面は板ナデする。内面は未調整で粘土収縮痕が残る。脚底部は強くヨコナデする。

## （２）土製品（図31、図版23）

47は竪穴建物80内のカマド104から出土したタイル状土製品である。土師質で、平面形は6.1㎝×5.9㎝のほぼ正方形、厚さは2.5㎝ある。重量は139.46ｇある。小口面の１面を除き、ほかのすべての面に板の当たりが確認でき、また赤色系と白色系の粘土が縞状に混じり、空洞が目立つことから型作りと考えられる。48・49は土師質の土錘である。48は遺構検出中に出土した。長さ5.8㎝、

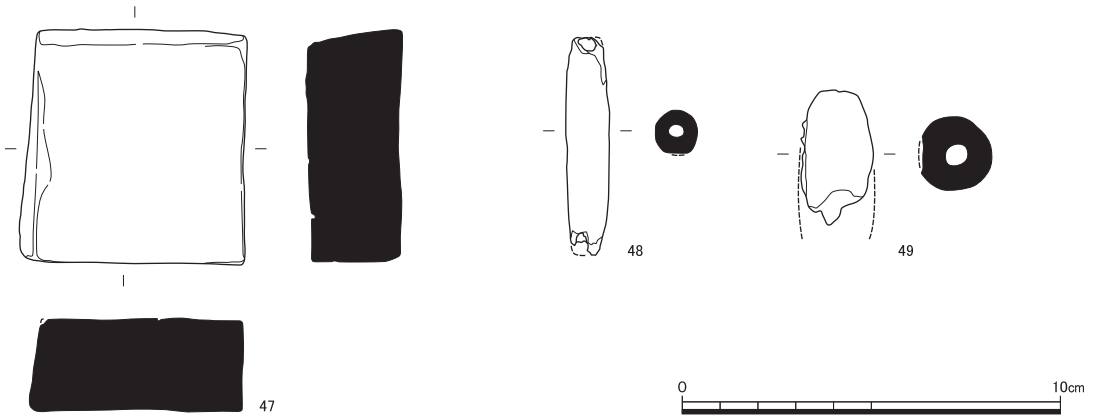



図31　土製品実測図（１：２）

最大径、1.1㎝、重量は6.77ｇある。49は竪穴建物81埋土上層から出土した。残存長3.6㎝、最大径1.9㎝、重量は8.62ｇある。

## （３）金属製品（図32、図版23）

金１はピット23から出土した青銅製の小型素文鏡である。一部を除いて縁を欠くが、面径は約4.5㎝と推測され、厚みは1.5～2.0㎜ある。鏡面はわずかに反りを持つ。鈕は板状で基部の幅約6.0㎜、厚み約2.5㎜、高さは約5.0㎜ある。鈕孔径は約1.5㎜ある。

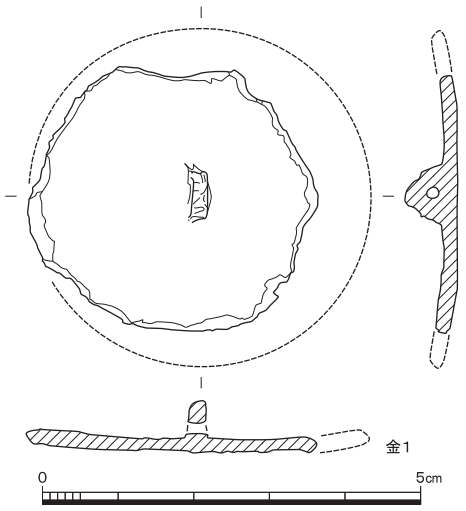


図32　素文鏡実測図（１：１）

## （４）石器（図33、図版23）

石１は竪穴建物142の床面直上から出土した。敲石と考えられる。粘板岩系の石材で、長さ24.9㎝、幅6.4㎝、厚さは4.3㎝ある。両端部に敲打痕が認められる。石２は竪穴建物21の床面直上から出土した。石材砂岩で、残存長9.5㎝、幅5.5㎝、厚さは3.4㎝ある。断面は三角形で、うち２面がわずかに凹状になり表面が平滑であることから敲石の持ち手部分の可能性がある。石３は竪穴建物80内のカマド104から出土した。花崗岩系の石材で、二次焼成を受けて破損が著しいが、残存面に擦痕が認められることから石皿の一部と考えられる。石４は竪穴建物21の柱穴92上面から出土した。扁平な砂岩系の石材で、残存長21.7㎝、幅19.5㎝、最大厚は6.1㎝ある。上面が平滑で、平滑面がわずかに凸状にふくらむ。石皿もしくは柱を据えた礎石の可能性がある。

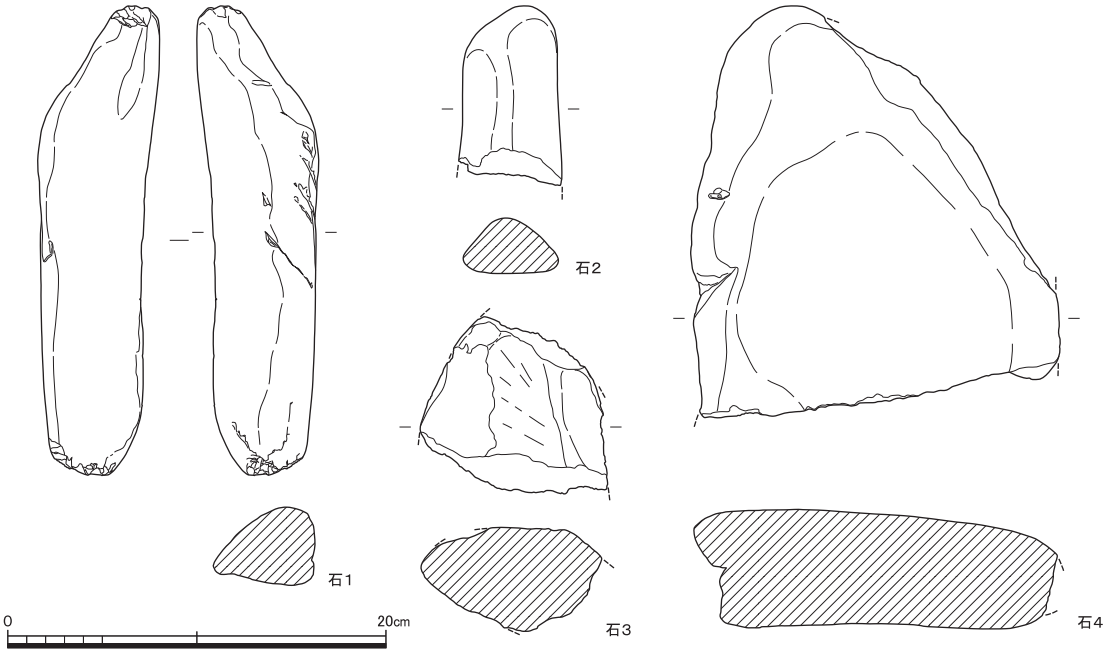


図33　石器実測図（１：４）

## （５）玉類（図34、図版23）

玉１は竪穴建物131内のカマド144の燃焼部から出土した滑石製の勾玉模造品である。頭部のみ残存する。扁平で厚みは約4.0㎜ある。孔径は約1.5㎜ある。重量は1.589ｇある。玉２は竪穴建物88埋土から出土した滑石製臼玉である。径約4.0㎜、厚さ約2.0㎜、孔径は約2.0㎜ある。重量は0.042ｇある。玉３は竪穴建物131埋土から出土したガラス製小玉である。色調は透明青緑色で重量0.025ｇ、比重2.27でアルカリガラスと考えられる。径約2.5㎜、厚さ約2.0㎜、孔径は約0.5㎜ある。

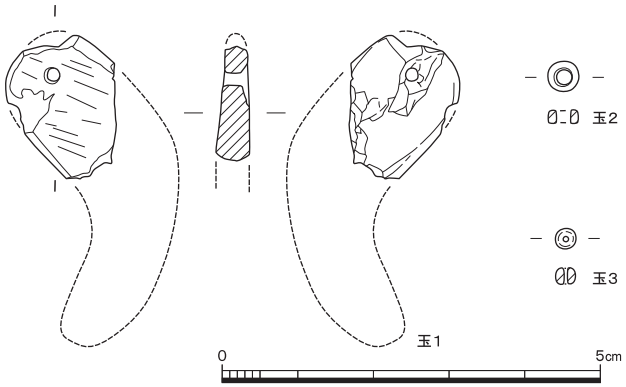


図34　玉類実測図（１：１）

表４　遺物一覧表

| No. | 器種 | 器形 | 出土遺構 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 残存率(%) | 色調　胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器 | 皿 | 掘立柱建物1 | (18.4) | (1.8) | | 5 | 7.5YR7/6橙色 | 柱穴39掘形出土 |
| 2 | 土師器 | 甕 | 掘立柱建物1 | (24.8) | (2.4) | | 5 | 外面7.5YR7/4にぶい橙色　内面5YR7/4にぶい橙色<br>φ0.5～1㎜の石英・長石含む　クサリレキ含む | 柱穴39掘形出土 |
| 3 | 須恵器 | 蓋 | 掘立柱建物1 | (14.4) | (1.4) | | 5 | 2.5Y7/1灰白色 | 柱穴39掘形出土 |
| 4 | 須恵器 | 杯 | 掘立柱建物1 | (13.6) | (1.7) | | 口縁部破片 | N6/0灰色 | 柱穴43掘形出土 |
| 5 | 須恵器 | 壷 | 掘立柱建物1 | (10.0) | 2.5 | | 口縁10 | N5/0灰色　断面N7/0灰白色 | 柱穴48掘形出土 |
| 6 | 土師器 | 皿C | 掘立柱建物2 | 不明 | 不明 | | 5 | 5YR6/6橙色　φ1㎜以下の長石・石英少量含む<br>クサリレキ含む | 柱穴45掘形出土 |
| 7 | 須恵器 | 杯A | 掘立柱建物2 | (13.6) | 3.7 | | 5 | N7/0灰白色 | 柱穴44掘形出土 |
| 8 | 須恵器 | 壷 | 掘立柱建物2 | | (1.2) | (11.0) | 底部20 | 7.5YR7/1明褐灰色　黒色粒多量含む | 柱穴50掘形出土 |
| 9 | 土師器 | 皿 | 掘立柱建物3 | 不明 | | | 破片 | 7.5YR8/4浅黄橙色　クサリレキ含む | 柱穴64掘形出土 |
| 10 | 土師器 | 皿 | 掘立柱建物3 | 不明 | 不明 | | 破片 | 5YR6/6橙色 | 柱穴64掘形出土 |
| 11 | 須恵器 | 蓋 | 掘立柱建物3 | (12.4) | (1.3) | | 25 | 外面2.5Y7/1灰白色　内面N7/灰白色 | 柱穴77掘形出土 |
| 12 | 須恵器 | 杯A | 掘立柱建物3 | | (2.8) | | 5 | 外面5Y6/1灰色　内面N7/灰白色 | 柱穴68掘形出土 |
| 13 | 須恵器 | 壷 | 掘立柱建物3 | (14.4) | (3.8) | | 5 | N5/0灰色 | 柱穴64掘形出土 |
| 14 | 須恵器 | 蓋 | 溝14 | (14.2) | (1.5) | | 5 | N6/0灰色 | |
| 15 | 須恵器 | 皿 | 溝14 | | (1.3) | (8.4) | 10 | 外面N6/0灰色　内面N7/0灰白色<br>φ0.5～4㎜の砂粒多量含む | |
| 16 | 須恵器 | 鉢 | 溝14 | | (3.2) | (10.2) | 10 | N7/0灰白色 | |
| 17 | 須恵器 | 高杯 | 溝15 | 不明 | 不明 | | 5 | N6/0灰色 | |
| 18 | 須恵器 | 蓋 | 溝15 | (15.5) | (1.2) | | 5 | N6/0灰色 | |
| 19 | 須恵器 | 甕 | 溝15 | (21.3) | (3.6) | | 口縁10 | N5/0灰色　断面2.5YR5/1赤灰色<br>φ0.5～1㎜の黒色粒・白色粒多量含む | |
| 20 | 須恵器 | 壷 | 溝16 | | (3.5) | (4.4) | 10 | 外面N5/0灰色　内面N7/0灰白色 | |

| No. | 器種 | 器形 | 出土遺構 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 残存率(%) | 色調 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 土師器 | 杯 | 竪穴建物21埋土 | (15.5) | (2.4) | | 5 | 5YR6/6橙色 | |
| 22 | 土師器 | 杯 | 竪穴建物21埋土 | (17.6) | (2.9) | | | 5YR6/6橙色 | |
| 23 | 土師器 | 甕 | カマド98 | (21.4) | (15.8) | | 15 | 7.5YR5/3にぶい褐色 φ1～3mmの石英・長石多量含む φ1～3mmのチャート少量含む | 竪穴建物88のカマド |
| 24 | 土師器 | 高杯脚 | 竪穴建物80埋土 | | (3.2) | (9.8) | 10 | 7.5YR8/4浅黄橙色 φ0.5～3mmのチャート少量含む クサリレキ含む | |
| 25 | 須恵器 | 蓋杯 | 竪穴建物80埋土 | (13.0) | (3.5) | | 30 | N6/0灰色 φ1mm以下の黒色粒・白色粒多量含む | |
| 26 | 土師器 | 甕 | カマド104支柱 | 12.0 | (13.0) | | 60 | 外面10YR6/2灰黄褐色と5YR6/4にぶい黄橙色 内面10YR6/3にぶい黄橙色と10YR7/2にぶい黄橙色 φ1～6mmの石英・長石多量、チャート少量含む | 竪穴建物80のカマド |
| 27 | 土師器 | 長胴甕 | カマド104 | (19.8) | (7.6) | | 5 | 10YR6/6明黄褐色 φ1～3mmの石英・長石多量含む φ1～3mmのチャート少量含む | 竪穴建物80のカマド |
| 28 | 土師器 | 甕 | カマド104 | (20.8) | (8.9) | | 10 | 外面10YR7/3にぶい黄橙色 内面10YR7/3灰白色 φ1～3mmの石英・長石多量含む | 竪穴建物80のカマド |
| 29 | 土師器 | 甕 | 竪穴建物115埋土 | (2.8) | (4.6) | | 10 | 7.5YR6/4にぶい橙色 φ0.5～3mmの石英・チャート含む クサリレキ少量含む | |
| 30 | 須恵器 | 蓋 | 竪穴建物115埋土 | 13.9 | 3.8 | | 100 | 外面5YR5/3にぶい赤褐色～7.5YR5/1褐灰色 内面5YR6/3にぶい橙色 φ0.5～2mmの白色粒含む | |
| 31 | 須恵器 | 杯身 | 竪穴建物115埋土 | (12.0) | (2.2) | | 5 | 2.5Y7/2灰黄色 底部2.5Y6/1黄灰色 φ1mm以下の白色粒多量含む | |
| 32 | 土師器 | | 土坑120 | | | | 5 | 7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ少量含む | 竪穴建物115の貯蔵穴 |
| 33 | 須恵器 | 蓋 | 土坑120 | (16.5) | (4.4) | | 25 | N8/0灰白色 | 竪穴建物115の貯蔵穴 |
| 34 | 須恵器 | 壷 | 土坑120 | 19.2 | (5.7) | | 6 | N6/0灰色 | 竪穴建物115の貯蔵穴 |
| 35 | 土師器 | 鍋 | カマド116 | (24.2) | (12.4) | | 40 | 外面7.5YR7/6橙色 内面10YR8/3浅黄橙色 φ1～4mmの石英・長石・チャート含む クサリレキ多量含む | 竪穴建物115のカマド |
| 36 | 土師器 | 甕 | カマド116構築土 | 不明 | (23.8) | | 40 | 外面10YR6/2灰黄褐色 内面2.5YR7/1灰白色 φ1～5mmの石英・長石多量含む φ1～5mmチャート少量含む | 竪穴建物115のカマド |
| 37 | 土師器 | 壷 | 竪穴建物82埋土 | (14.5) | (3.6) | | 10 | 7.5YR7/3にぶい橙色 φ1～3mmの石英・長石・チャート多量含む | |
| 38 | 須恵器 | 蓋 | 竪穴建物152埋土 | (13.1) | (4.6) | | 40 | N6/0灰色 φ1～5mmの黒色粒・白色粒少量含む | |
| 39 | 須恵器 | 甕 | カマド144構築土 | (11.8) | (3.7) | | 10 | 5Y7/1灰白色 | 竪穴建物131のカマド |
| 40 | 土師器 | 甕 | 竪穴建物81床面 | | | | 5 | 7.5YR7/3にぶい橙色 φ0.5～1mmの石英・長石・チャート多量含む クサリレキ多量含む | |
| 41 | 須恵器 | 蓋杯 | 竪穴建物81床面 | (13.3) | (2.3) | | 5 | N7/0灰白色 | |
| 42 | 須恵器 | 甕 | 竪穴建物81床面 | (21.4) | (4.3) | | 10 | 外面N7/0灰白色 内面N5/0灰白色 断面2.5YR3/1暗赤灰色 φ1～4mmの石英・長石多量含む | |
| 43 | 土師器 | 甕 | カマド122構築土 | 20.6 | (38.2) | | 70 | 外面10YR6/2灰黄褐色 一部5YR6/6橙色 内面10YR5/2灰黄褐色 φ1～5mmの石英・長石多量含む | 竪穴建物81のカマド |
| 44 | 土師器 | 甕 | カマド122構築土 | 不明 | (28.4) | | 50 | 7.5YR6/3黄橙色 外面下半7.5YR6/8橙色 φ1～5mmの石英・長石多量含む φ1～5mmのチャート少量含む | 竪穴建物81のカマド |
| 45 | 土師器 | 甕 | カマド122 | (19.5) | (6.1) | | 5 | 外面10YR7/4にぶい黄橙色 内面7.5YR7/4にぶい黄橙色 φ1～2mmの石英・長石・チャート少量含む クサリレキ少量含む | 竪穴建物81のカマド |
| 46 | 土師器 | 高杯 | カマド122支柱 | 17.2 | 15.2 | | 100 | 7.5YR7/6橙色 杯底部7.5YR6/2灰白色 φ1～4mmの石英・長石・チャート多量含む クサリレキ少量含む | 竪穴建物81のカマド |
| 47 | 土製品 | タイル状土製品 | カマド104 | | | | | 7.5YR8/1灰白色と7.5YR6/4にぶい橙色混じる | 竪穴建物80のカマド |
| 48 | 土製品 | 土錘 | 遺構検出中 | 1.0 | 5.8 | | 90 | 10YR7/4にぶい黄橙色 | |
| 49 | 土製品 | 土錘 | 竪穴建物81埋土 | 2.0 | 3.6 | | 40 | 7.5YR7/6橙色 φ1～3mmの石英・チャート含む | |

# 5．まとめ

## （1）遺構の変遷（図35・36）

今回の調査では、竪穴建物10棟、掘立柱建物３棟の他、柱列や素文鏡埋納ピットなど多数の遺構を良好な状態で検出できたことが大きな成果である。まとめとして、今調査の北隣接地で実施された2006年調査の成果と合わせて、出土遺物、重複関係から遺構の変遷を整理し、その性格についても考察を加えたい。

**Ⅰ期**　調査地付近においてはじめて集落が形成される時期である。2006年調査で４棟、今調査で２棟の竪穴建物が検出されている。この時期の竪穴建物では造り付けカマドは確認できず、建物中央に炉と考えられる土坑を持つものもある（2006－竪穴201・243）。平面形は歪な方形を呈するものが多い。規模は一辺５ｍ前後である。時期を判別できる遺物は少ないが、須恵器がほとんど出土しないこと、この一群の建物が、続くⅡ期のＴＫ23・ＴＫ47型式（５世後葉）の須恵器を伴う竪穴建物に切り込まれることなどから５世紀中葉頃に構築されたものと考えられる。

**Ⅱ期**　2006年調査では竪穴150、今調査では竪穴82・131が構築された時期である。竪穴150・82は大きく削平を受け、カマドの有無は不明であるが、竪穴131では建物隅でカマド144が検出された。西京極遺跡では竪穴建物のコーナー部でカマドが確認されたのは初めてであるが、出現期のカマドは住居隅部に配置され、その後中央へ移り変わるという例が山背や摂津地域で確認されており[7)]、同様の傾向といえる。カマド144からはTK23型式の須恵器が出土しており、西京極遺跡でのカマドの導入時期は５世紀後葉頃と考えられる。

**Ⅲ期**　2006年調査では竪穴149・147、今調査では竪穴81・142が構築された時期である。このうち竪穴149は一辺の長さが８ｍ以上ある大型の建物で、拡張も行っている。また床面上で完形の須恵器高杯が３個体出土し、壁溝の3箇所から製塩土器が出土するなど、他の建物からは出土しない遺物が出土しており、集落の中心的建物であった可能性が高い。竪穴149からはTK47～MT15型式、他の３棟からはMT15～TK10型式の須恵器が出土しており、竪穴149が5世紀末頃に作られ、その後、周辺に他の竪穴が構築されたと考えられる。竪穴142をのぞく３棟は壁面中央で造り付けカマドを検出している。

**Ⅳ期**　2006年調査では竪穴144・146、今調査では竪穴80・115が構築される時期である。すべての竪穴建物で壁面中央に取り付く造り付けカマドを検出した。時期は竪穴80・115埋土からTK10～ＴＫ43型式の須恵器が出土し、竪穴115の貯蔵穴と考えられる土坑120からTK10型式の須恵器が出土しており、６世紀中葉から後葉に位置づけられる。

**Ⅴ期**　2006年調査で総柱建物170と竪穴83、今調査では竪穴21（竪穴83と同一）・88が構築された時期である。竪穴88からはTK217型式の須恵器が出土しており、構築が７世紀半ばまで遡る可能性があるが、７世紀代の遺物の出土は両調査を通して少なく、Ⅳ期とⅤ期の間に集落の中心が一度移動した可能性が考えられる。このⅤ期では、総柱建物と竪穴建物いずれも方位がほぼ正方位を

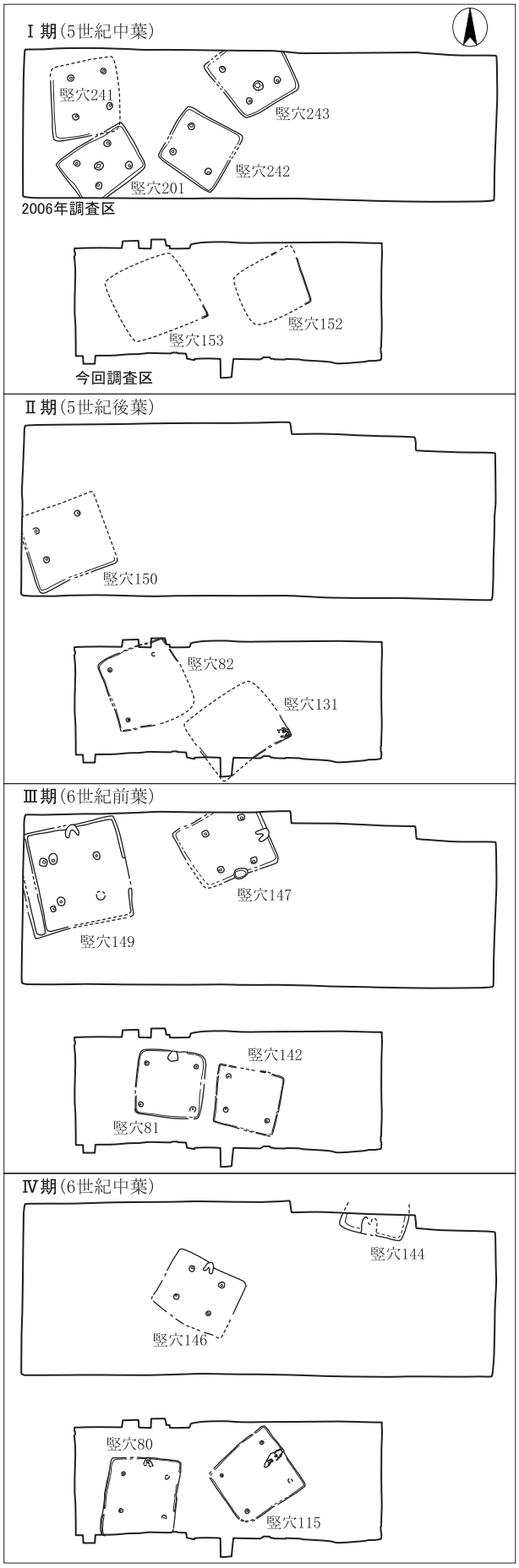



図35　遺構変遷図１（１：500）

向く。これは西京極遺跡に限定したことではなく、京都盆地の植物園北遺跡や山科盆地の中臣遺跡でも同様の傾向にあり、その要因については今後の検討課題である。

**Ⅵ期**　2006年調査では竪穴145・148、今調査では溝15・16、ピット23を検出した。この時期で特筆すべきは、溝15に削平される溝16に伴う杭跡と考えられるピット23から小型素文鏡が出土したことである。素文鏡は杭を抜き取った跡に納められたと思われる状態で出土している。素文鏡は、小型海獣葡萄鏡の内区だけを独立させてつくられた小型鏡を模し、鏡の形状をしているだけの祭祀用の青銅製品とされる[8]。元となる小型海獣葡萄鏡も祭祀用の鏡とされ、特に川や道路側溝などの水の祭祀に関連した場所から他の祭祀遺物と伴に出土する例が多いようである[9]。京都市内では、広隆寺旧境内に接する常盤仲之町遺跡の溝から小型海獣葡萄鏡の出土例がある[10]。全国的に見ても小型海獣葡萄鏡、小型素文鏡ともに出土例は多くないが、平城京では複数個体が出土している。今回出土した素文鏡の埋納年代は、関連する溝16が８世紀後葉の遺物が出土する溝15に削平され、鏡が出土したピット23が８世紀中葉に埋まった竪穴建物21を削平することから、８世紀の第三四半世紀頃と推定され、平城京などでの出土時期と合致する。京と同様の祭祀が行われていたとすれば、次のⅦ期に先立ち、すでにこの段階から、西京極遺跡が地方官衙的な性格を有していた可能性がある。

**Ⅶ期**　今調査では東西に柱筋をそろえて並ぶ掘立柱建物２・３を検出した。2006年調査で検出した掘立柱建物５は、平安時代前期の建物と報告したが[11]、本調査の掘立柱建物

２・３と比較して、方位の振れが北に対して東に約４度とほぼ等しく、柱穴の規模も類似する。また、柱痕跡が掘形の中心から片寄る点なども共通している。さらに、出土遺物についても再検討し、柱穴掘形から出土した土師器皿Ａ（註９報告書図25－１）や須恵器壷Ｅ（図25－２）は奈良時代後半から末の特徴を持ち、灰釉陶器や緑釉陶器などの器種は出土していないことを確認した。これらのことから掘立柱建物５は掘立柱建物２・３と同時期の奈良時代末の建物と判断した。これにより、建物５と建物２・３がＬ字状に整然と並ぶことになる。さらにそのうち建物５は東に庇が付き、建物３は東西と南に庇が付く三面庇建物である。一般的に奈良時代の集落遺跡で検出される掘立柱建物は平面規模、柱穴ともに小さく柱間も一定でないものが多い。一方、今回検出した建物群は、「中心的な建物には、庇が付く格の高い平面をもつものが多い」、「柱間寸法や平面形が一致する同一規模の建物も見られる」といった官衙の建物の傾向とされる[12]特徴を持つ。第２章第２節でも触れたように、西京極遺跡はこれまでの調査で出土した建物配置や出土遺物、地名などから山城国葛野郡衙の有力な候補地となっているが、本調査の成果によりその可能性がさらに高まったと言えよう。

**Ⅷ期**　2006年調査では柱列６、今調査では掘立柱建物１、柱列１・２、溝14を検出した。平安時代の遺構群である。Ⅶ期の遺構群とは反対に、Ⅷ期の遺構の主軸方位は北に対して西に振れる。溝14、柱列１は平安京の町割である四行八門制の推定区画ラインに沿い、宅地境の遺構と考えられる。平安京の西端に近い当地においても、９世紀前半段階に

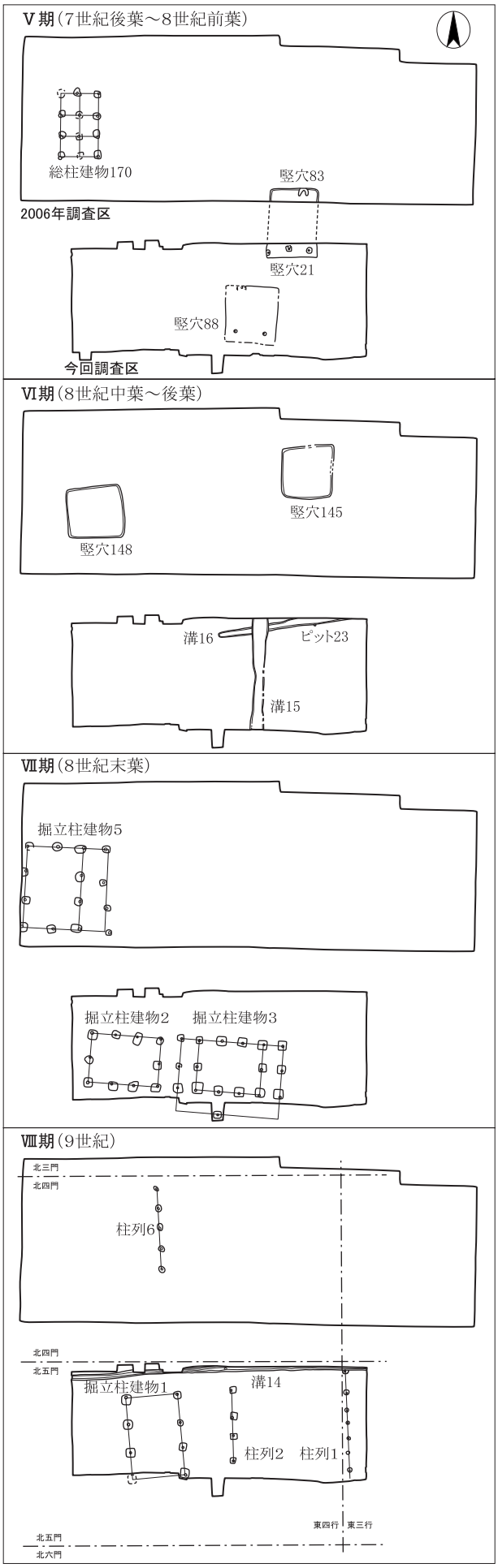



図36　遺構変遷図２（１：500）

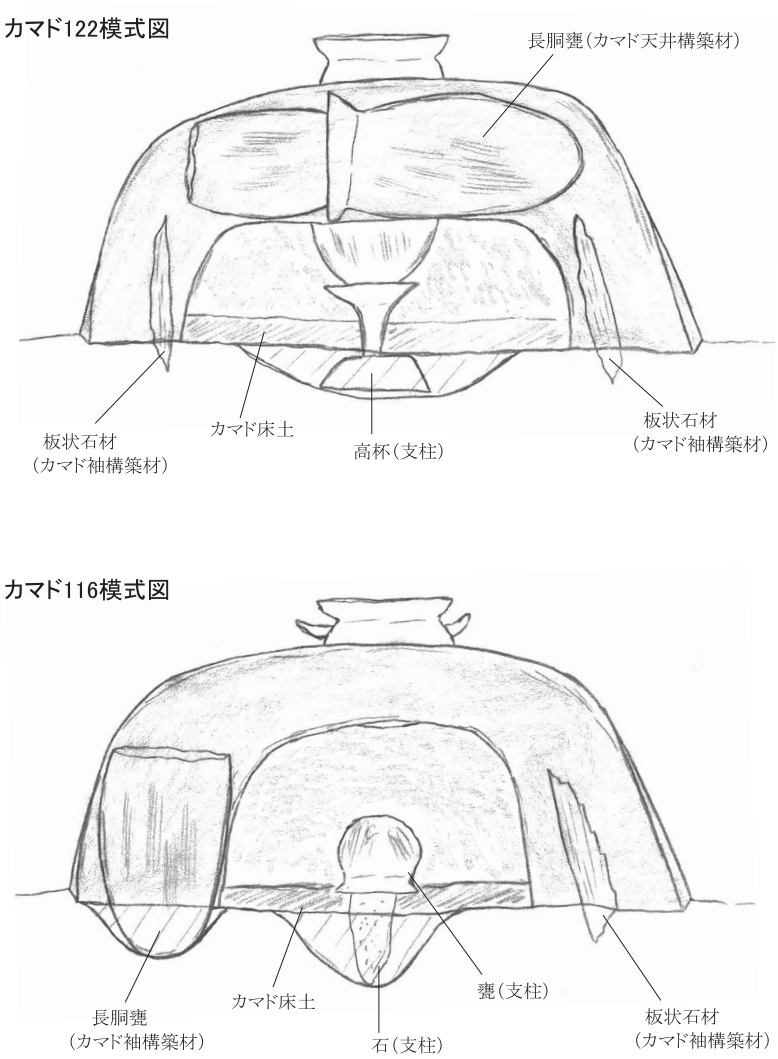
は町割が行われ、宅地班給が行われていたことがわかる。溝14の埋土から出土した遺物は９世紀前半から10世紀半ば頃までのものが主体であるが、最上層からは13世紀初頭頃の遺物が出土しており、鎌倉時代の初め頃まではかろうじて区画が維持されていた可能性がある。

## （２）造り付けカマドの構造について

今回の調査では、竪穴建物10棟のうち竪穴建物80・81・115・131の４棟で造り付けカマドを検出した。中でも竪穴建物81のカマド122と竪穴建物115のカマド116は遺存状態が良好であったため、その構築方法について復元を試みたい。

まず、カマド122であるが、馬蹄形のカマド中央をやや掘り窪め、支柱とする土師器高杯を逆さにして埋める。その後、焼土ブロックを混ぜた土でカマド床を貼る。焼土ブロックを混ぜるのは湿気を嫌うためと考えられる。カマド本体は、袖部は板状石材を地面に突き刺して芯材とし、それに粘土を巻きつけて構築する。検出時に、カマドの焚口を塞ぐ形で２個体の土師器長胴甕が横倒しになって出土した。カマド廃絶後に祭祀的意図をもって据えられた可能性も考えられたが、断面観察の結果、崩落した天井土と一体となっており、また西側の甕は意図的に甕上半が打ち欠かれ、底部を東側の甕に差し込み、組み合わせたような状況であった。関東地方などで、カマドの袖や焚口の天井架構材として土器が転用された例や、石材が用いられた例があることから[13]、このカマド122の土師器長胴甕も天井構築材として転用したものと判断した。出土時には土圧で割れていたが、中に土は詰まっておらず、空洞のまま埋め込まれたと考えられる。

次にカマド116であるが、




※ 文化庁文化財部記念物課編『発掘調査の手引き－集落遺跡発掘編－』
2010年の図152 カマド構築材に転用された土器（武蔵国府関連遺構）を参考にした

図37　カマド116・122模式図

支柱には棒状の砂岩を用い、それを立てて埋めたのち、カマド122と同様に焼土ブロックを混ぜた土で床を貼る。支柱石には、後から土師器甕を逆さにして被せる。これは高さ調整などの意図があると考えられる。カマド本体は、東袖部はカマド122と同様に板状石材を地面に突き刺して芯材とする。西袖部は土師器長胴甕の下半部を正置に埋めて芯材とする。こちらはカマドの基底であり重量が必要なため内部にも土を詰める。

上記をもとに２つのカマドの模式図を作成した（図37）。なお、模式図は作成しなかったが、出土状況から竪穴建物80のカマド104も天井部に土師器長胴甕を転用したものと考えられる。いずれも土師器長胴甕や板状石材を芯材に用いることで、構築作業を省力化するとともに、カマドの規模を大きくすることができたと考えられる。さらに、内部が空洞の土師器甕を天井に埋め込むことで、天井部分を軽くし、崩落を防ぐ働きも期待されたと推測される。また、火を受ける支柱には熱に強い砂石を用い、芯材には熱には弱いが板状に加工しやすいフォルンフェルスを用いるという石材の選択を行うなど、造り付けカマドとしては一定の到達点に達した技術により構築されたと考えられる。関東で見つかっている土器転用カマドは８世紀以降のものが主体であり、西京極遺跡の出土例が先駆的なものになる可能性がある。今後の調査でも、カマドが検出された場合には入念な調査観察を行うことが責務である。

註

１）　堀内明博ほか『平安京跡研究調査報告第20輯　平安京右京六条三坊』　財団法人古代学協会　2004年

２）　足利健亮「律令時代における郡家の歴史地理学的研究 - 遺趾の探求と復元の試み - 」『歴史地理学紀要５』　1963年

３）　網　伸也・柏田有香「京都府花園遺跡・西京極遺跡」『日本古代の郡衙遺跡』　雄山閣　2009年

４）　平安時代の土師器皿の編年は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年に準拠する。

５）　奈良時代の土器の形式分類は奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ』　2005年に準拠する。

６）　古墳時代の須恵器の型式名については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年に準拠する。

７）　高野陽子・岩井俊平「出現期の竈について」『京都府遺跡調査報告書第33冊　佐山遺跡』　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2003年

８）　杉山　洋『日本の美術２　№393　古代の鏡』　至文堂　1999年

９）　前掲註８に同じ

10）　高橋　潔・加納敬二ほか『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010－15　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

11）　柏田有香『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006－14　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

12）　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編「第Ⅳ章　官衙の調査」『発掘調査のてびき　各種遺跡調査編』　文化庁文化財部記念物課　2013年

13）　文化庁文化財部記念物課編「第Ⅴ章　遺構の発掘　第3節　竪穴建物」『発掘調査のてびき　－集落遺跡発掘編－』　文化庁文化財部記念物課　2010年

# 6．小型鏡の分析調査

東京文化財研究所　保存修復科学センター
北野信彦・犬塚将英

## 1　はじめに

本調査のピット23からは、奈良時代後期頃の郡衛跡関連と考えられる小型鏡が１点出土している。今回、この資料の分析調査を実施したので、その結果を報告する。

## 2　調査方法

① Ｘ線透過写真撮影

本資料の構造と劣化状態の確認をするために、東京文化財研究所　保存修復科学センター設置の（株）エクスロン社製MG325型Ｘ線透過写真撮影装置を用いてＸ線透過写真撮影を行った。撮影条件は、管電圧＝100kV、管電流＝3mA、照射時間＝30秒、照射距離＝150㎝である。

② 無機元素の定性分析

本資料の材質分析をするために、東京文化財研究所　保存修復科学センター設置の（株）堀場製作所MESA-500型蛍光Ｘ線分析装置を用いて無機元素の定性分析を行った。設定条件は、分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、Ｘ線管ターゲットはRh、Ｘ線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μＡおよび20μＡ、検出強度は200,0～250,0cps、定量補正法はスタンダードレスFPである。

## 3　調査結果

本資料は直径約4.5㎝、厚さ２㎜程度の薄い小型鏡である。本資料の目視観察では、繊細な穿孔を伴う半円形の紐を有する一方、図様は不明瞭であり、鋳造後の調整や鏡面の研磨が施された形跡がない。

本調査では、まず本資料のＸ線透過写真撮影を行った。調査の結果、この鏡面の中央には目視観察でも確認される穿孔を有する紐が所在し、その周囲にはわずかな凹凸はあるものの明確な文様は認められず、鏡縁部も存在しない。また、鋳造の湯沸きに伴うと考えられる気泡も多数確認された（図38）。そのため、これは文様を付けることが省略された素文鏡であると理解した。さらに、図様表面に著しい劣化による薄離現象は観察されなかったことから、鋳放しの鏡であると考えられる。

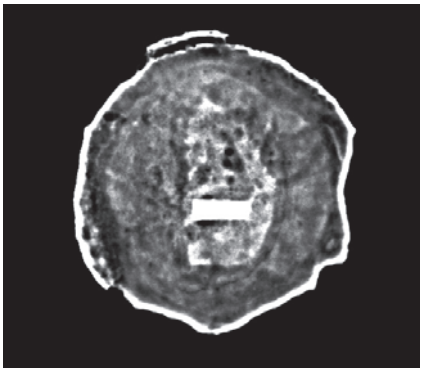


図38　本資料のＸ線透過写真

次に本資料の材質分析を行った。調査の結果、本資料からは無機元素の主成分として銅（Cu）、鉛（Pb）の強いピークとともに、ヒ素（As）が確認された（図39）。その一方で、本来ならば青銅鏡であれば確認されるべきスズ（Sn）や、錫鉱石の不純物として含まれるアンチモン（Sb）のピークは確認されなかった。

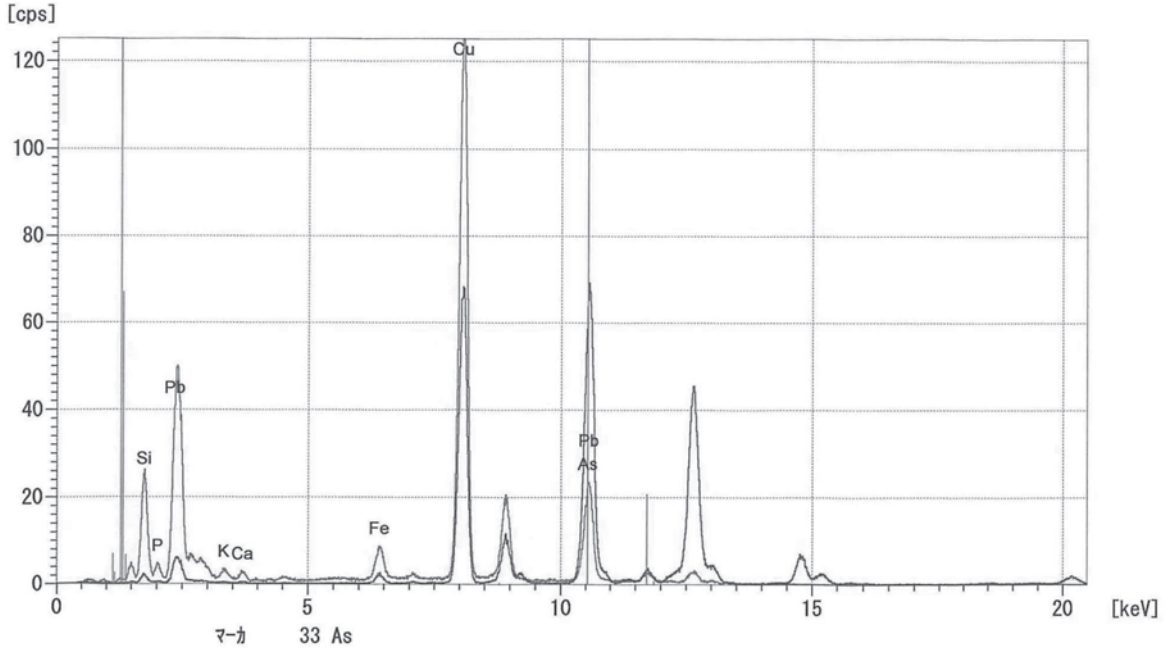



図39　同　蛍光X線分析結果

## 4　考察

以上、本調査では西京極遺跡から出土した小型鏡についての分析調査を行った。調査の結果、まずX線透過写真観察からは、本資料は、文様が省略された素文の小型鏡であると理解した。

これまで、7世紀中頃～8世紀頃の遺跡からは、海獣葡萄鏡の内区の部分のみを鋳造した小型の鏡、7面（奈良県下5面、京都市中1面、石川県下1面）の出土報告例がある。これらは、踏み返し鋳造が何回も行われたために図様自体は不明瞭な資料群であり、水との関連性が指摘される祭祀遺跡から出土している。そのため、これらは実用鏡ではなく、祭祀鏡として使用されたと考えられている。本資料が出土した西京極遺跡から比較的近い広隆寺旧境内に所在する常盤仲之町遺跡からも7～8世紀代の小型鏡が1面出土している。そして、平城京右京八条一坊、西一坊坊間大路西側溝では、文様の省略された小型素文鏡が数面出土しており、小型海獣葡萄鏡の発展形態であると考えられている。本資料も、当初は基本的にはこれらと同形態の小型鏡であると想定された。

ところで上記、7面の小型海獣葡萄鏡は、飛鳥池跡に代表される藤原京期の青銅器で、原材料である錫鉱石由来のアンチモンを含んでいる。このような青銅を「アンチモン青銅」と呼称して、藤原京期の指標資料と認識されている。筆者らの分析調査においても、常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群からすでに出土した小型海獣葡萄鏡は、微量のアンチモンが含まれていたため、同一の資料群であると考えられた（図40・41）。

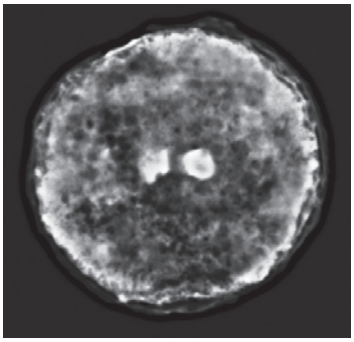


図40　（参考）常盤仲之町遺跡出土の小型海獣葡萄鏡のX線透過写真

その一方で、これらよりはやや年代的に下る奈良時代から平安時代前期頃（7世紀末ないし8世紀初頭）の出土青銅器は、原材料で

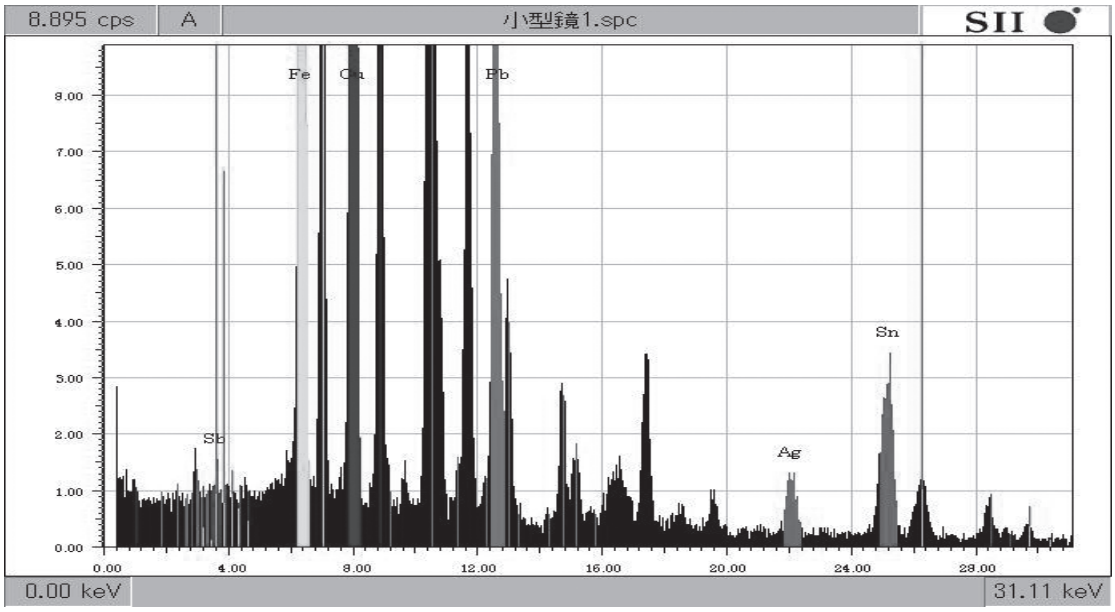



図41　同　蛍光X線分析結果

ある長門国長登銅山から調達された銅鉱石を原材料とするため、この鉱石に含まれるヒ素（As）を含むことが特徴の一つとされている。その点では、本資料には微量のヒ素が含まれており、こちらに近い組成を持つものと考えられる。

いずれにしても、本資料が出土した西京極遺跡は、広隆寺境内にも近い桂川沿いに所在しており、古代においては京都盆地内では早くから秦氏などの渡来系氏族の根拠地として開けた地域である。その意味では、藤原期の祭祀遺跡からの出土例が多い踏み返し鋳造に拠る内区のみの小型海獣葡萄鏡や、その発展形態で組成自体は奈良時代の青銅器の特徴を有する小型素文鏡が周辺地域から2面出土したことは、古代における本遺跡周辺地域の祭祀的性格を考える上で示唆的な考古学的成果であるといえよう。

（参考試料）

杉山　洋「奈良時代の金属器生産－銅器生産遺跡を通してみた考古学的素描」『仏教芸術』190　毎日新聞社　1990年　p.47－72

久野雄一郎「長登銅山跡出土からみた金属学的調査報告（その２）」『長登銅山跡Ⅱ』　美東町教育委員会　1993年

「鏡を作る　海獣葡萄鏡を中心として」『飛鳥資料館図録』第34冊　奈良文化財研究所　1999年

久保智康「中世・近世の鏡」『日本の美術』No.394　至文堂　1999年

成瀬正和「正倉院銅製品の製作地等に関する検討」『古代文化』　古代学協会　1999年

八木　充「奈良時代の銅の生産と流通」『日本歴史』　吉川弘文館　2000年

北野信彦・犬塚将英・吉田直人「小型海獣葡萄鏡の分析調査」『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010－15　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

# Ⅴ　平安京右京九条一坊十二町・西寺跡

## １．調査経過（図１～４）

調査地は平安京右京九条一坊十二町にあたり、九条一坊の西半８町を占める西寺の東築地および皇嘉門大路西築地推定地に該当する。西寺は東寺と共に、平安京遷都に際し平安京内の九条大路に面して建立され、平安京中央の南北大路である朱雀大路を中軸に左右対称形に配置された官寺である。しかし、主要伽藍の再建を繰り返してきた現存する東寺と異なり、西寺伽藍は講堂跡に推定されている基壇状の高まりを除いて、構築物は地上からは消滅している。

調査地に住宅の建築が計画されたので、京都市文化市民文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を行い、その指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施した。

調査は11月18日から開始した。調査区を東西14ｍ、南北12ｍの「Ｌ」字形に設けた。地表下0.45ｍまで現代盛土と近代耕作土層で、その直下の平安時代の遺構面まで、重機によって掘り下げた。遺構面を精査したところ、中央部の皇嘉門大路西築地推定線上で、皇嘉門大路西築地すなわち西寺東築地の基底部を検出した。遺構面以下には建築工事に伴う掘削が及ばず遺構が破壊されな

図１　調査位置図（１：5,000）

図２　調査前風景（北西から）

図３　作業風景（北から）

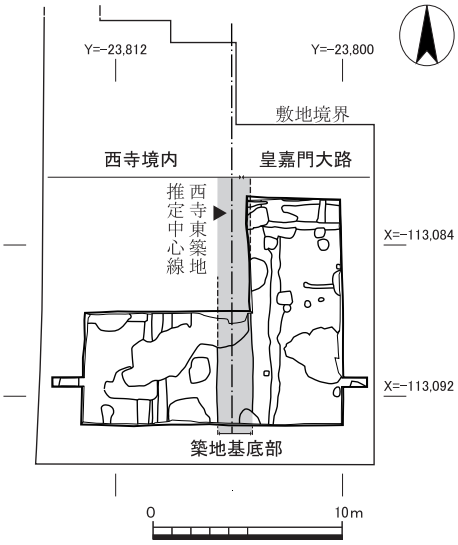



図４　調査区配置図（１：400）

いので、遺構の掘削は幅0.5ｍの東西方向の断割トレンチとして行った。後に東端と西端を調査区外へ延長した。

断割トレンチの掘削により、東築地基底部の西側（西寺境内）では築地に沿った内溝や再利用瓦を主にする瓦溜と平安時代前期の土器溜めを含む落込み２や、調査区西壁外に延長する平安時代中期の落込み１、東側（皇嘉門大路側）では犬行と３時期の南北側溝を検出した。平安時代の遺構の基盤層は砂層と礫層からなる平安時代以前の旧流路堆積層であり、弥生時代と古墳時代の土器類破片を検出した。中世の遺構は確認できなかった。

調査は調査区の平面および壁面の記録と写真撮影を実施して、終了した。12月９日から10日にかけて重機で埋め戻して現状復旧などを行い撤収した。なお、埋戻し時、建築工事に伴う掘削深よりも深く掘り下げた断割トレンチと攪乱部分については、転圧を念入りに行った。

また、地元町内会向けの現地説明会を11月30日に実施し、30名以上の参加があった。

## ２．歴史的環境（図５、表１）

東寺と並んで平安京内に建立された西寺は鎮護国家を祈祷する官寺であり、西寺の寺域は右京九条一坊九町から十六町で、東寺と同じく計８町を占めていた。史料が少ないため、西寺の創建については解明されていない点が多いが、確実な史料として９世紀末に編集された『類聚国史』の「桓武天皇延暦十六年二月甲申」（797）に「造西寺次官信濃守笠原朝臣」とあり、ほぼ平安京遷都と同時に造営が始まったとする点では一致をみている。しかし、中世に編纂された『帝王編年記』に「延暦十五年丙子。建立東西両寺以為東西両京鎮護」とあり、さらに平安時代後期に編纂された『伊呂波字類抄』の「左」項では「延暦六年」（787）に建立されたとしている。後者の年代は平安京遷都の７年前であり、桓武天皇が長岡京廃都を決意し、長岡京東宮に遷した時期と重なってい

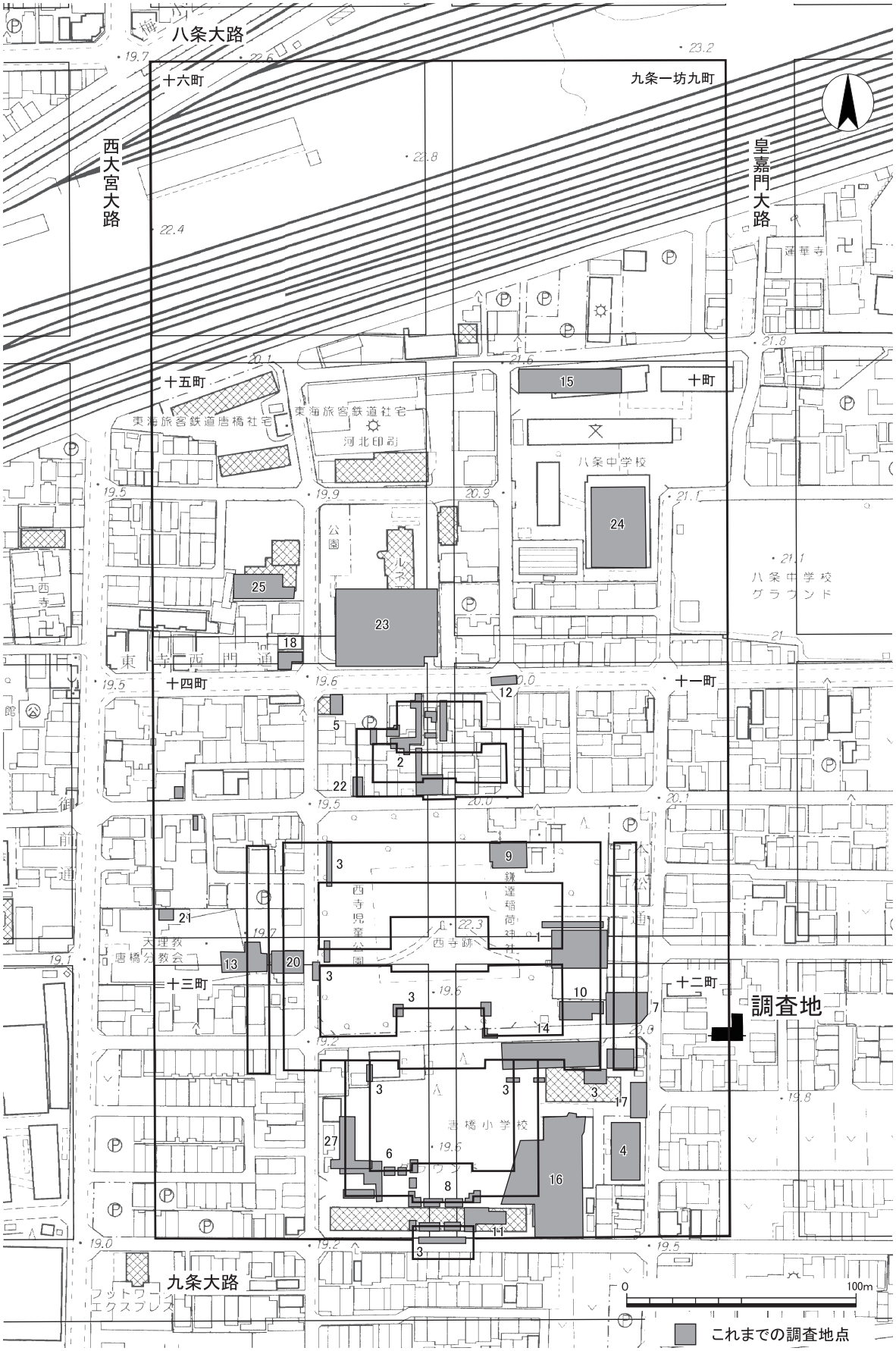



図５　調査地および近隣の調査（１：2,500）

表１　西寺関連調査一覧表

| №. | 推定地 | 調査地 | 調査年 | 調査主体 | 成　果 | 文　　献 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 東僧坊 | 唐橋西寺町（西寺児童公園） | 1959 | 奈文研 | 基壇、礎石抜き取り穴、礎石 | 『史跡西寺跡』鳥羽研1979年 |
| 2 | 食堂院 | 唐橋西寺町 | 1962 | 奈文研 | 南門と回廊の礎石・礎石抜き取り穴 | 『史跡西寺跡』鳥羽研1979年 |
| 3 | 食堂・南大門・東西僧坊・東小子房 | 唐橋西寺町（西寺児童公園・唐橋小学校・周辺道路） | 1962 | 奈文研 | 金堂基壇延石・地覆石、南大門礎石抜き取り穴、東僧坊雨落ち溝・延石、西僧坊礎石抜き取り穴、東回廊延石、東小子房 | 『史跡西寺跡』鳥羽研1979年 |
| 4 | 推定国忌堂 | 唐橋西寺町（唐橋小学校） | 1970 | 平安博物館 | 東西方向の築地遺構、大溝 | 『史跡西寺跡』鳥羽研1979年 |
| 5 | 大炊殿 | 唐橋西寺町40 | 1972 | 京都市保護課、鳥羽研 | 礎石抜き取り穴 | 『史跡西寺跡』鳥羽研1979年 |
| 6 | 中門・西回廊 | 唐橋西寺町（唐橋小学校） | 1973 | 京都市教委、鳥羽研 | 中門西縁基壇、西回廊雨落ち溝・暗渠 | 『史跡西寺跡』鳥羽研1979年 |
| 7 | 東小子房 | 唐橋西寺町64 | 1973 | 京都市保護課 | 雨落ち溝、ピット群 | 『京都市埋蔵文化財年次報告1973-Ⅱ』京都市保護課1975年 |
| 8 | 中門・東回廊・南大門 | 唐橋西寺町（唐橋小学校） | 1974 | 京都市教委、鳥羽研 | 中門延石・階段、東回廊延石 | 『史跡西寺跡』鳥羽研1979年 |
| 9 | 北僧坊 | 唐橋西寺町57（鎌達稲荷神社） | 1974 | 京都市保護課 | 礎石抜き取り穴 | 『京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅳ』京都市保護課1976年 |
| 10 | 東僧坊 | 唐橋西寺町（西寺児童公園） | 1977 | 京都市研 | 基壇西辺、礎石抜き取り穴、雨落ち溝 | 『平安京跡発掘調査概報 京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅱ』京都市研1978年 |
| 11 | 南限築地 | 唐橋西寺町65（唐橋小学校） | 1977 | 京都市研 | 柱穴、溝状遺構 | 『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市研2011年 |
| 12 | 西限築地・大炊殿・食堂院北方井戸 | 唐橋西寺町 | 1977～1978 | 京都市研 | 西限築地の凝灰岩・暗渠、大炊殿礎石抜き取り穴、井戸 | 『平安京跡発掘調査概報 京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅱ』京都市研1978年 |
| 13 | 西小子房 | 唐橋西寺町27 | 1977 | 京都市研 | 基壇、礎石抜き取り穴、溝 | 『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市研2011年 |
| 14 | 東僧坊・東回廊・金堂東軒廊 | 唐橋西寺町65（唐橋小学校） | 1978 | 京都市研 | 東僧坊礎石抜き取り穴・雨落ち溝、東回廊礎石、東軒廊基壇・延石 | 『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』京都市研1979年 |
| 15 | 西寺子院 | 唐橋門脇町35（八条中学校） | 1978～1979 | 京都市研 | 南北三間、東西十四間以上の掘立柱建物 | 『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市研2011年 |
| 16 | 東回廊・推定国忌堂西築地・門跡 | 唐橋西寺町65（唐橋小学校） | 1979 | 京都市研 | 東回廊基壇・礎石抜き取り穴・延石、築地状遺構・雨落ち溝 | 『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市研2011年 |
| 17 | 境内 | 唐橋西寺町65（唐橋小学校） | 1979 | 京都市研 | 土坑、瓦溜り | 『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市研2012年 |
| 18 | 境内 | 唐橋門脇町２ | 1980 | 京都市研 | 井戸 | 『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市センター1981年 |
| 19 | 境内 | 唐橋西寺町33-3 | 1980 | 京都市研 | 土坑、集石 | 『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市センター1981年 |
| 20 | 西僧坊 | 唐橋西寺町30 | 1980 | 京都市研 | 基壇、土坑 | 『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市センター1981年 |
| 21 | 西限築地 | 唐橋西寺町30 | 1981 | 京都市研 | 築地状遺構 | 『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市センター1981年 |
| 22 | 食堂院 | 唐橋西寺町55-2 | 1986 | 京都市研 | 西回廊基壇、礎石抜き取り穴、溝、金属製品工房か | 『平安京跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局1987年 |
| 23 | 北限築地・綱所 | 唐橋門脇町29･30･31･44の一部 | 1986 | 京都市研 | 礎石建物、築地跡、塀跡、井戸、土坑 | 『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市研1989年 |
| 24 | 西寺子院 | 唐橋門脇町35（八条中学校） | 1988 | 京都市研 | 掘立柱建物、礎石建物 | 『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市研1993年 |
| 25 | 西寺子院 | 唐橋門脇町６・７ | 1989 | 京都市研 | 柱穴、溝、土坑、井戸 | 『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市研1993年 |
| 26 | 西限築地 | 唐橋西寺町35-12 | 2007 | 京都市研 | 湿地状堆積、土坑、柱穴 | 『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局2008年 |
| 27 | 西回廊 | 唐橋西寺町65番地 | 2007 | 京都市研 | 柱穴、溝、西回廊基壇整地土 | 『平安京跡・史跡西寺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-4』京都市研2007年 |

奈文研：奈良国立文化財研究所、京都市保護課：京都市文化観光局文化財保護課、鳥羽研：鳥羽離宮跡調査研究所、
京都市教委：京都市教育委員会、京都市研：財団法人京都市埋蔵文化財研究所、京都市センター：京都市埋蔵文化財調査センター

る。この記事を巡っては数々の論争があるが、赤松俊秀は「平安時代後期にはすでに成立していた伝説であるから、全然無視することは許されない」（赤松俊秀「東寺の歴史」）とされている。

造営過程も不詳な点が多い。しかし、「弘仁四年春正月」（813）には「東西二寺始行坐夏」と記されており、この９世紀初頭の記事以降、様々な行事が西寺で行われた記録が残ることから、金堂などの伽藍が整備されてきた様子が窺えよう。また、『日本略紀』の天長九年（832）には「西寺講堂供養御願新造仏。荘厳法物一十五種便即施入」とあり、講堂が建立されたことが記され、やや遅れて『日本三代実録』元慶六年（882）に「充西寺塔料」とあることから９世紀末には主要伽藍が、ほぼ整備されたと考えて良い。

次に焼亡・廃絶の時期については、『日本紀略』の「正歴元年」（990）に「西寺焼亡」とあり、この時期を境に西寺衰退が顕著になるとされている。また、鎌倉時代に入った天福元年（1233）に「塔焼了」と『名月記』にあり、この時既に「本自荒廃之寺」であったと藤原定家は述べている。

調査地は図５にあるように西寺東築地に該当し、西寺東門推定地より約10ｍ南に位置する。東築地部分では今回が初めての調査となるが、塔を除く西寺中心伽藍は比較的調査が進んでいる。発掘調査からも９世紀末には南大門・中門・金堂・講堂・回廊・僧坊・食堂などの主要伽藍が整備されていたことが窺える。表１は周辺調査の概要表である。なお、西寺跡に先行する遺跡として唐橋遺跡が知られており、境内下層に弥生時代からは古墳時代の多くの流路が検出されている。

参考文献

杉山信三「東寺と西寺」『平安京提要』角川書店、1994年。

岡田荘司『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会、1994年。

追塩千尋「西寺の沿革とその特質」『北海学園大学人文論集・第23・24号』北海学園大学人文学会、2003年。

川勝政太郎「創建期の東寺及び西寺」『史迹と美術185号』1948年。

赤松俊秀「東寺の歴史」『京都寺史考』法蔵館、1972年。

たなかしげひさ「にし寺興亡の研究（一～五）」『史迹と美術363～366号・368号』1966年。

柏田有香『平安京跡・史跡西寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007－4、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2007年。

## ３．遺　　構（図６～８、図版24～26）

調査区の基本層序は地表から下に厚さ0.2～0.4ｍが現代盛土層である。その下に黒褐色砂泥の均一な近代の耕作土が調査区全面に厚さ0.1～02ｍで水平堆積する。その下が平安時代の遺構面である。

遺構は、皇嘉門大路西築地＝西寺東築地推定線上で、南北帯状に基盤層（西寺創建を遡る旧流路堆積層）を削り出して形成された築地基底部を検出した。築地基底部両側の部分は、0.15～0.2ｍの厚さの遺物包含層が全面に覆っていた。その下に基盤層を掘り込んで、皇嘉門大路側では西側溝と犬行、西寺境内側では内溝、その西側で２基の落込みなどを検出した。また、基盤層は、弥生時代と古墳時代の土器片を含む旧流路堆積層である。

以下、遺構の記述は築地基底部、築地東の皇嘉門大路側、築地西の西寺境内側の順に記述する。

**築地基底部**（図版24）　幅約1.95ｍの帯状に南北5.80ｍ分を検出した。検出した築地基底部の中心は、推定線とほぼ一致している。基底部の東側は基盤層を約0.2ｍ掘り下げて、幅約１ｍの犬行部を形成していた。西側は基盤層を約0.30ｍ掘り下げ、基底部に近接して内溝を形成していた。

**皇嘉門大路側**

**上層堆積層１**（遺物包含層）　犬行と３時期の西側溝や路面の上に堆積する遺物包含層である。堆積土は平行な縞模様を呈していた。当初、築地基底部の東側約１ｍ地点に、築地基底部と並行して砂礫層が約0.5ｍ幅で帯状に見えており、雨落ち溝の可能性を認めた。しかし、これは東下がりに堆積する上層堆積層の中間層（３層）が一部露出しているものであることが明らかとなった。少なくとも上層堆積層が埋まる時期まで築地もしくは築地跡が高まりとして残存していた様相が窺える。なお、これらの層から検出した遺物は瓦のみである。

**側溝１**　調査区東側に堆積する黄褐色砂泥層（１層）の直下で検出した皇嘉門大路の最も新しい西側溝である。検出遺構を基準にすべき築地推定線より東に4.5ｍ地点から東に幅約2.3ｍ、深さ約0.2ｍの南北方向の溝である。この溝の堆積土は２層に分かれ、西肩付近は暗灰黄色粘土質シルト（４層）で上端まで埋まっているが、下層にはオリーブ褐色砂層（５層）が堆積する。瓦のみ出土。

**路面**　東拡張区東端の側溝１東端肩付近から東に厚さ0.08ｍの礫が比較的多いにぶい黄褐色泥

表２　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 平安時代以前 | 旧流路 | |
| 平安時代前期<br>（９世紀代） | 築地基底部、犬行、側溝３、内溝、落込み２ | |
| 平安時代中期<br>（10～11世紀前半） | 側溝１・２、落込み１、上層堆積層１・２ | |
| 平安時代中期以降 | 集石、溝 | |

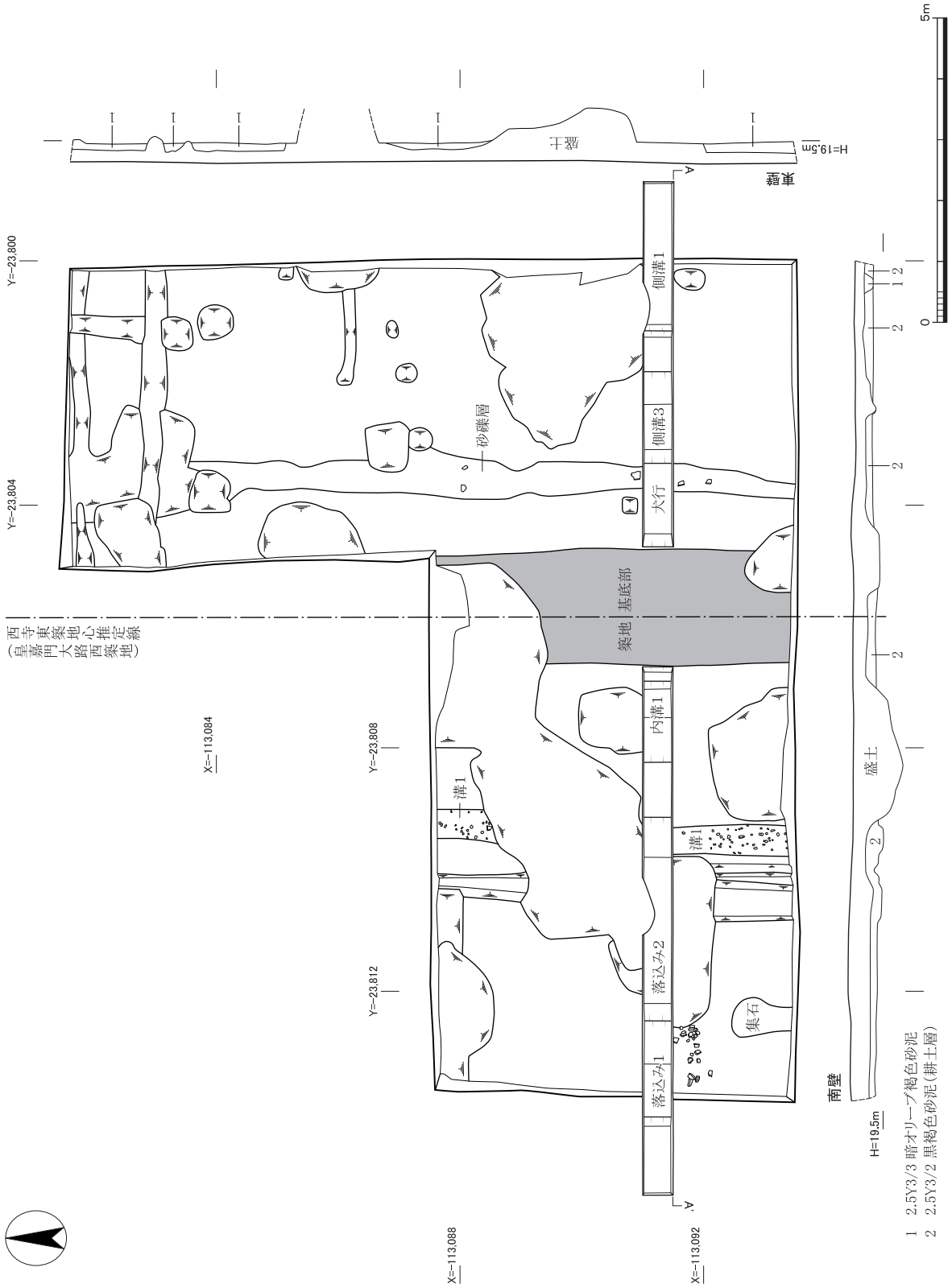



図６　調査区実測図（１：100）

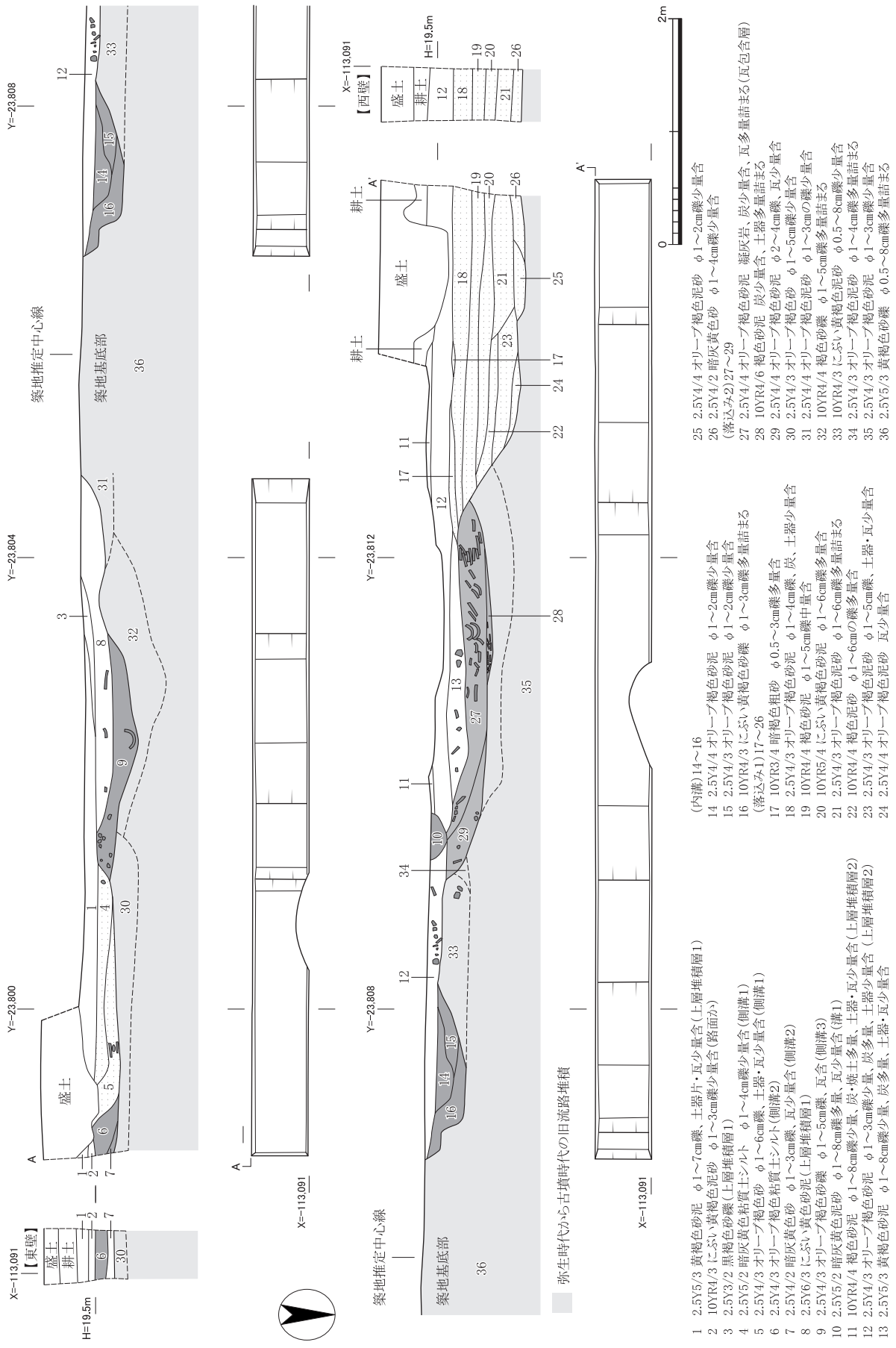



図７　東西断割り部実測図（１：50）

砂層（２層）を検出している。この層が側溝１東肩から発生しているので、側溝１に伴う皇嘉門大路路面と考える。

**側溝２**　東拡張区で検出した皇嘉門大路西側溝である。東肩は拡張区東端外に延長する。西肩も側溝１に掘り込まれているため側溝幅は不明である。厚さ約0.2ｍのオリーブ褐色粘土質シルト（６層）で埋まり、その上に路面層（２層）が覆う。なお、東肩は調査区東拡張区より更に東へ延長するが、最下層に瓦片・須恵器片と礫が混じった厚さの薄い暗灰黄色砂層（７層）が下層に堆積している。溝底が東へ上がっているので、東肩部の立ち上がりである可能性がある。

**犬行**　築地東端を掘り込んだ底から、東に約1ｍのやや凹む平坦部がある。次に述べる側溝３と築地東端の間に設けられた犬行部と考えられる。

**側溝３**（図版25）　犬行東端に形成される最も古い皇嘉門大路西側溝である。東端は側溝１の西肩によって掘り込まれているため正確な幅は不明であるが、東西2.1ｍ以上の幅が考えられる。溝内にはオリーブ褐色砂礫（９層）が堆積し、底から大きな破片の丸瓦を検出している。

**旧流路**（基盤層）　平安時代の遺構の基盤層は、弥生時代の土器片を含む砂・砂礫層から成る流路堆積層（30～32層）によって形成されている。流路の範囲は断割部と攪乱壁から観察できた範囲において築地東側全面に及んでいる。深さは不明である。

**西寺境内側**

**上層堆積層２**（遺物包含層）　西寺境内側では、主に内溝１とその西に２基の落込みを検出した。これらの遺構直上は厚さ平均0．15ｍのオリーブ褐色砂泥（12層）の遺物包含層で覆われる。この層から10世紀末から11世紀初頭（平安京Ⅲ期新段階）の土師器皿などを検出している。また、この堆積層西半部分には、部分的にスサ入り焼土片や緑釉陶器蓋などの土器片を含んだ厚さ0.05ｍの褐色砂泥（11層）が被さっていた。

**内溝**　築地西脇を直接掘り込んでおり、幅1.5ｍ、深さ0.35ｍを測る。埋土は３層に分かれ、築地脇から最下層にかけてにぶい黄褐色砂礫（16層）が堆積する。その上に２層のオリーブ褐色泥砂（14・15層）が堆積していた。遺物は検出していない。

**落込み１**　落込み１は築地推定線より西８ｍから始まり約３ｍ西の拡張部西端外に伸びる。深さは西端部で約0.6ｍを測る。堆積土は泥が混じった砂・礫を主体とし、多くは薄く水平に堆積する（18～26層）。落込みを整地するための整地土と考えているが、あまり締まりがない。最上層には流水によって押し流されて堆積したと考えられる小礫混じりの暗褐色粗砂（17層）が薄く堆積しており、一時期の面をなしていたことが窺える。遺物は瓦の他に９世紀から10世紀にかけての土師器皿小片・灰釉陶器皿などを検出している。また、最下層は緩やかな一段落ちになり、底に平瓦片がへばり付いていた。この最下層には均一なオリーブ褐色泥砂と暗灰黄色砂（25・26層）が堆積していたことから、泥水が溜まって埋まったと考えている。

**落込み２**（瓦溜・土器溜、図８、図版26）　築地推定線より西3.3ｍから西で検出した、東西幅約3.5ｍ、深さ0.3ｍの落込みである。西肩は落込み１の東肩によって掘り込まれており、落込み１より古い。上層はオリーブ褐色砂泥（27層）で、焼け瓦や凝灰岩の塊を含んだ瓦溜となっていた。ま

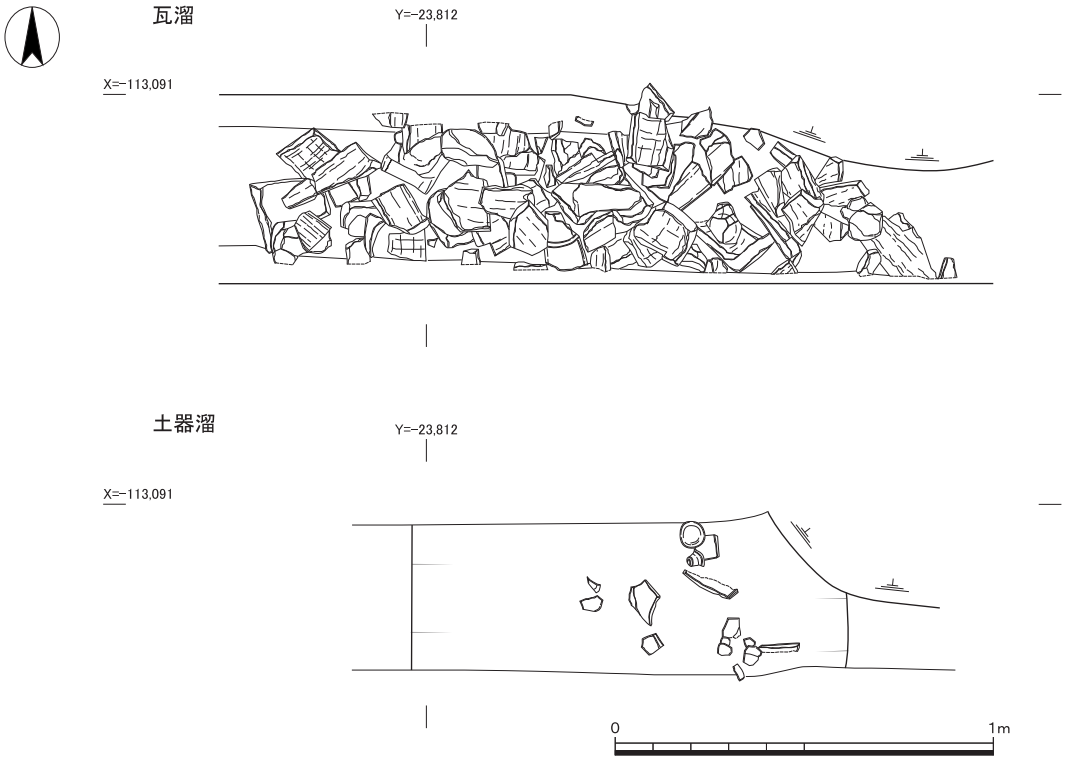



図８　落込み２平面図（１：20）

た、瓦溜直下には、褐色砂泥（28層）の東西幅0.6ｍ、深さ0.07ｍの範囲で、９世紀初頭（平安京Ⅰ期中段階・新段階）の土器溜が形成されていた。瓦溜・土器溜には炭が多く混入しており、瓦溜から出土した僅少の土器類片からは時代差が窺えなかった。また、土器溜からは瓦が１点も検出していない。

なお、落込み２直上に瓦片が混じる黄褐色砂泥（13層）がレンズ状に堆積しているが、この堆積は落込み２に破棄された瓦などが凹んで落込み２の上に堆積した可能性があると考えている。

**集石**　調査区南西部の遺構検出面で、南北１ｍ、東西0.6ｍを測る平面楕円形の集石遺構を検出したが、性格は不明である。

**溝１**　築地西側に堆積している遺物包含層を掘り込んで成立している南北溝である。幅0.4ｍ、深さ0.15ｍを測る。堆積土は暗灰黄色泥砂で部分的に礫が多い部分が見られる。直上にこの溝を踏襲したと考える近代の耕作土に伴う南北溝が切られていた。耕作溝の可能性もあるが時期不明。切り合いからは最も新しい遺構である。

**旧流路**（基盤層）　内溝と落込み２の間に掘り残された旧流路堆積層である。堆積土は暗灰色砂泥（33・34層）である。５世紀末頃のほぼ完形の土師器壺を検出した。

## ４．遺　　物（図９・10、図版27・28）

出土遺物の大多数を瓦類が占め、その内の90％以上が落込み２内の瓦溜から出土した。瓦溜には赤く変色した焼け瓦が約５％（33点）含まれている。また、軒瓦類も全て瓦溜から出土した。平城宮式・長岡宮式の再利用瓦と西寺所用軒瓦類に分類できる。長岡宮式軒丸瓦だけが瓦当部と丸瓦部が接合しており、他は瓦当部破片である。なお、１点だけ平安時代前期の緑釉丸瓦片が出土している。しかし、あげ土から出土したので、遺構に伴うかどうかは不明である。

土器類は整理箱４箱分である。平安時代前期（平安京Ⅰ期中段階[1)]）から中期前後（平安京Ⅲ期新段階からⅣ期古段階）を下限とする土師器が主体で、後期（11世紀後半）以降の遺物は１点も検出していない。また、皇嘉門大路側からの出土は僅少で、須恵器の瓶子破片などが出土したに過ぎない。しかし、西寺境内側からは土師器皿・杯・甕、須恵器瓶子・杯、灰釉陶器皿・緑釉陶器皿・蓋、白色系の壺蓋などが出土している。落込み１からは平安時代前期から中期（９～10世紀）にかけての土師器皿と灰釉陶器皿が出土したが量は少ない。落込み２の瓦溜直下に土器溜からは、平安時代前期（９世紀初頭、平安京Ⅰ期中段階）の一括土器類が出土している。器種は多様で土師器皿・杯・椀などの供膳具の他に甕などの煮炊具や瓶子・燈明皿などがある。しかし、完形の燈明皿を除いて全て破片であり、復元できるものは少ない。

築地基底部西端から調査区全面に広がる遺構上面を覆う堆積層から10世紀後半から11世紀前半代の土師器皿・緑釉陶器椀を検出した。また、上層堆積層からは、緑釉製の蓋破片が出土した。

なお、平安時代以前の旧流路堆積層から検出した弥生時代と古墳時代の土器が少量であるが存在する。また、落込み２瓦溜からは西寺建物の基壇に使用されていたと考える凝灰岩の小片が多く出土している。

**落込み２土器溜出土土器**（図９－１～13、図版27）　１～11は土師器、12・13は須恵器である。土師器の特徴から９世紀初頭（平安京Ⅰ期中段階から新段階）に位置づけられる。１～３は皿、４・５は杯、６は杯蓋、７は杯Ｂ、８～10は甕、11は壺蓋である。

１は口径8.5㎝、高さ1.7㎝を測る。胎土は密で、白みがかった橙色。口縁部を横ナデでやや外反

表３　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安時代以前 | 弥生土器、土師器、瓦 | 少量 | 弥生土器１点、土師器１点、軒丸瓦５点 | ０箱 | ０箱 |
| 平安時代 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、凝灰岩 | 22箱 | 土師器12点、須恵器２点、緑釉陶器２点、灰釉陶器１点、白色土器１点、軒丸瓦３点、軒平瓦２点、緑釉瓦１点、刻印瓦４点、凝灰岩１点 | １箱 | 19箱 |
| 合　計 | | 22箱 | 36点（２箱） | １箱 | 19箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より３箱多くなっている。

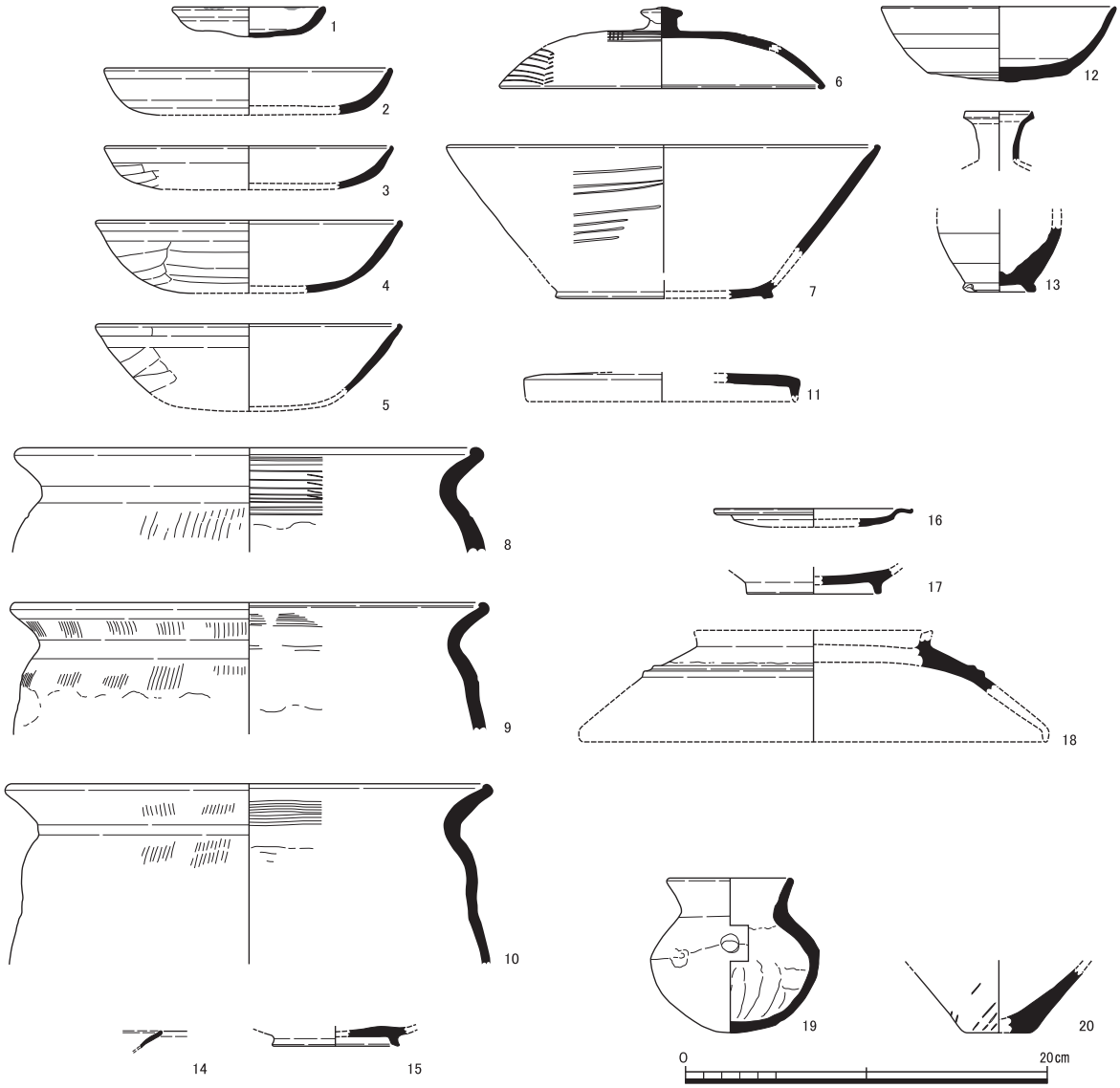



図９　出土土器実測図（１：４）

させて成形している。ケズリの痕跡はない。口縁の片側に３箇所煤が付着している。歪で粗雑、燈明皿などの特定用途か、地方産の可能性がある。同時代の類型が北野廃寺などの寺院跡で出土している。２は復元口径16.0㎝、高さ2.6㎝。胴部外面にケズリの痕跡があるが器表が荒れているため明瞭ではない。胎土は密で、にぶい橙色である。３は復元口径16.0㎝の皿である。胴部外面にケズリの痕跡が残る。胎土は密で、灰白色。４は復元口径17.0㎝、高さ4.0㎝である。内面ナデ、外面ケズリの痕跡がよく残る。焼成は良く、赤みがかった橙色である。５は復元口径17.0㎝である。内面ナデ、外面ケズリの痕跡がよく残る。焼成は良くにぶい橙色。６は宝珠摘みの付く杯蓋で復元口径18.0㎝、高さ4.5㎝である。端部と摘み部が同一箇所から出土したので復元して図示した。外面にミガキを施している。焼成は良く、赤みがかった橙色である。７は輪高台付の杯Ｂである。焼成は良くにぶい橙色。復元口径24.0㎝、高さ7.0㎝で、高台径は12.0㎝である。口縁部と高台部が同一箇所から出土したので復元して図示した。胴部外面に粗いミガキを施している。８は復元口径26.0㎝を測る。淺黄橙色である。胎土は精良で焼成も良い。口縁端部を内側に折り返して丸い突起

を造る。胴部に縦のハケメを施す。口縁部上面に横方向のハケメを施す。９は復元口径26.5㎝。10は復元口径27.0㎝。９・10は胎土焼成とも、８とほぼ同じであるが、口縁部下面にも縦方向のハケメが残る。11は白色系壷蓋である。上面にケズリの痕跡が残る。

12は杯Ａである。復元口径13.0㎝、高さ4.2㎝を測る。胎土は精良であるが、焼は甘く、淡灰色である。平底であるが逆時計回りのヘラ起こしの痕跡が底中心に向かって円錐状に盛り上がる。口縁端部はやや外反気味に造る。９世紀初頭の須恵器である。13は須恵器瓶子である。口縁部口径3.9㎝。高台径4.0㎝である。同一箇所から出土したので復元して図示した。胎土は密で焼成も良い。色調は灰色である。内面器具による水挽きの痕跡が明瞭に残る。輪高台に作り、貼り付けた痕跡が接合部に残る。

**落込み１出土土器**（図９－14・15）　14は土師器皿、15は灰釉陶器皿である。

14は土師器皿である。小片であるが復元口径が12.5㎝である。端部はやや外反させ端部を摘み上げて収める。器厚は薄く作り手捏ねで、胴部にケズリの痕跡はない。10世紀前半代（平安京Ⅲ期）の土師器と考えている。

15は灰釉陶器である。胴部が欠落しているが皿であろう。焼成はよく胎土はやや荒く黄灰色。自然釉が高台裏まで掛かるが、内面には掛からない。径7.2㎝の貼り付け輪高台で外反する高台端部外側を一段突出させ畳付としている。足の断面形が猿投窯に類似する。９～10世紀にかけての東海系製品で、落込み２出土遺物より新しい。

**上層堆積層２出土土器**（図９－16・17）　16は土師器皿、17は緑釉陶器椀である。

16は端部を水平に外反させ先端を摘み上げて作る。胎土は精良で褐色掛かった淡橙色。手捏ねで作るため、多少の歪みがあるが復元口径は約11.0㎝、高さ1.1㎝である。10世紀末から11世紀初頭（平安京Ⅲ期新段階からⅣ期古段階）にかけての時期であろう。正歴元年の火災後に該当する。

17は胎土が密で、灰白色。焼は硬い。釉は高台裏まで掛かり、オリーブ灰色で、表面がかせている。内面底にラフな陰刻花文を施すが図化できない。やや内彎する貼り付け輪高台で、体部にＶ字状の溝を入れて高台を貼り付けている。10世紀代の美濃産であろう。

**築地西焼土層出土土器**（図９－18、図版27）　18は緑釉陶器蓋である。輪高台状の取っ手を上面に付ける。体部上面に２本の近接した凸帯文を巡らす。釉はややかせているが淡いオリーブ黄色で、裏表に掛かる。胎土は精良で浅黄橙色である。緑釉製の経筒蓋などに類例があり、10～11世紀にかけての近江産である可能性が高い。

**旧流路出土土器**（図９－19・20、図版27）　19は古墳時代後期（５世紀末）の丸底の土師器小壷である。高さ8.6㎝、口径７㎝を測る。口縁を横にした状態でほぼ完品の状態で検出した。縦方向に均した手捏ねの痕跡が内面底部に顕著で、器壁が厚い。色調は褐色がかった橙色で、胎土に長石・石英・雲母を含む。器表は荒れているが、焼成はよい。胴部に径１㎝の円形の穴が穿たれている。器表面の酸化した赤みが穴内面に及んでいないので、焼成後に開けられた可能性がある。須恵器の𤮋を模したものであろう。

20は弥生土器壷底部である。径3.5㎝の平底である。色調は淡赤橙色で、胎土に長石・石英を含

む。器表は荒れているが、右上がりの凹線の痕跡がある。畿内第Ⅴ様式。

**落込み２瓦溜出土瓦**（図10－21～34、図版27・28）

21は平城宮式軒丸瓦の再利用瓦である。焼成は甘く淡灰色。周縁部端を丸く収め、匙形に内彎する周縁に線鋸歯文を巡らす。外区に連珠文と太い圏線を内側と外側に巡らせる。中突部は不明である。

22は平城宮式軒丸瓦（平6225式）の再利用瓦で、複弁蓮華文軒丸瓦である。胎土は精良で灰クリーム色。焼成はやや甘い。表面は暗灰色。匙状に外傾する周縁部内側に不鮮明な凸鋸歯文を巡らす。外区には二重の鋭い凸圏線が巡る。中房は１＋９の蓮子で構成されている。瓦当裏部と丸瓦凹面との接合部に多量の粘土を補填して接合した際の指痕が残る。

23・24は同笵の長岡宮式軒丸瓦で再利用瓦である。胎土は密で淡灰色。焼成はやや甘い。外縁端は笵が深く入り丸く収める。崩れた単弁蓮華文で中房に１＋５の配置が連子を配する。外区に二重の圏線で区画された20個の珠文を巡らせる。長岡京左京東院から出土しており、7833ＨⅡ型式あるいは、7194Ａｂ型式として分類されている。外区の珠文と内側圏線が笵傷で接合している箇所が長岡京東院出土瓦と一致しており同笵瓦と断定できる。これらの瓦は製作過程を良好に追える好資料で、製作手法は上向けた笵に瓦当粘土を打ち込み、瓦当裏の丸瓦接合部をヘラ状の器具を使って深く溝状に削り込む。そこに丸瓦先端部を立てて差し込んで、立てたまま丸瓦部凸面先端部と瓦当部裏に接合粘土を厚く塗りつけ、撫で上げて接合する。その後瓦当部顎を横削りで調整する。この技法は一般的な軒丸瓦製作技法である印籠作りであるが、かなり乾燥の進んだ丸瓦部を瓦当部に接合している。いずれの瓦も瓦当裏溝部と丸瓦先端部との間に間隙があり、両部が馴染んでいないことを窺わせる。接合面に剥離箇所が多いのが特徴で、丸瓦部の凹面布目・凸面縄叩き目が剥離部に鮮明に残存する。瓦当部作成と丸瓦接合とは、瓦当笵を付けたまま上から丸瓦部を接合するので、連続する作業であったと考える。

25は24と同一類と考えられる。瓦当部だけが剥離した状態で出土した。この軒丸瓦も剥離跡から同じ技法で製作されたものと考えられる。大量生産向きであるが、瓦当部が外れやすい欠点を持っており、そのため瓦当裏と丸瓦先端部とに普通より粘土を厚く塗りつけて接合している。工期をせかされていた長岡京期の軒丸瓦の特徴かもしれない。この軒丸瓦は玉縁部が欠落しているが丸瓦胴部全長25.7㎝を測る。上記の瓦も長さが同じである可能性が高い。長さが寺院の瓦としてはやや短く、『長岡京左京東院跡の調査研究正殿地区[2)]』では、これらの小型瓦を檜皮葺建物の棟瓦として考えられている。

26～28は西寺所用瓦と考えられている複弁蓮華文軒丸瓦である。珠文と圏線が巡る。間弁の先端が複弁の花弁両脇に接続して圏線様をなしている。大阪府枚方市牧野坂瓦窯の製品。胎土は長石・石英が多く混じり粗い。表面暗灰色、内部は灰色。『平安京古瓦図録[3)]』の「19・21」に酷似する。平安時代前期。

29は小片のため確証はできないが、唐草文の右端先端部が鋭く上がっていることから西寺所用瓦の可能性が高い。胎土は砂を多く含み淡灰色である。焼成は硬い。大阪府枚方市牧野坂瓦窯の製

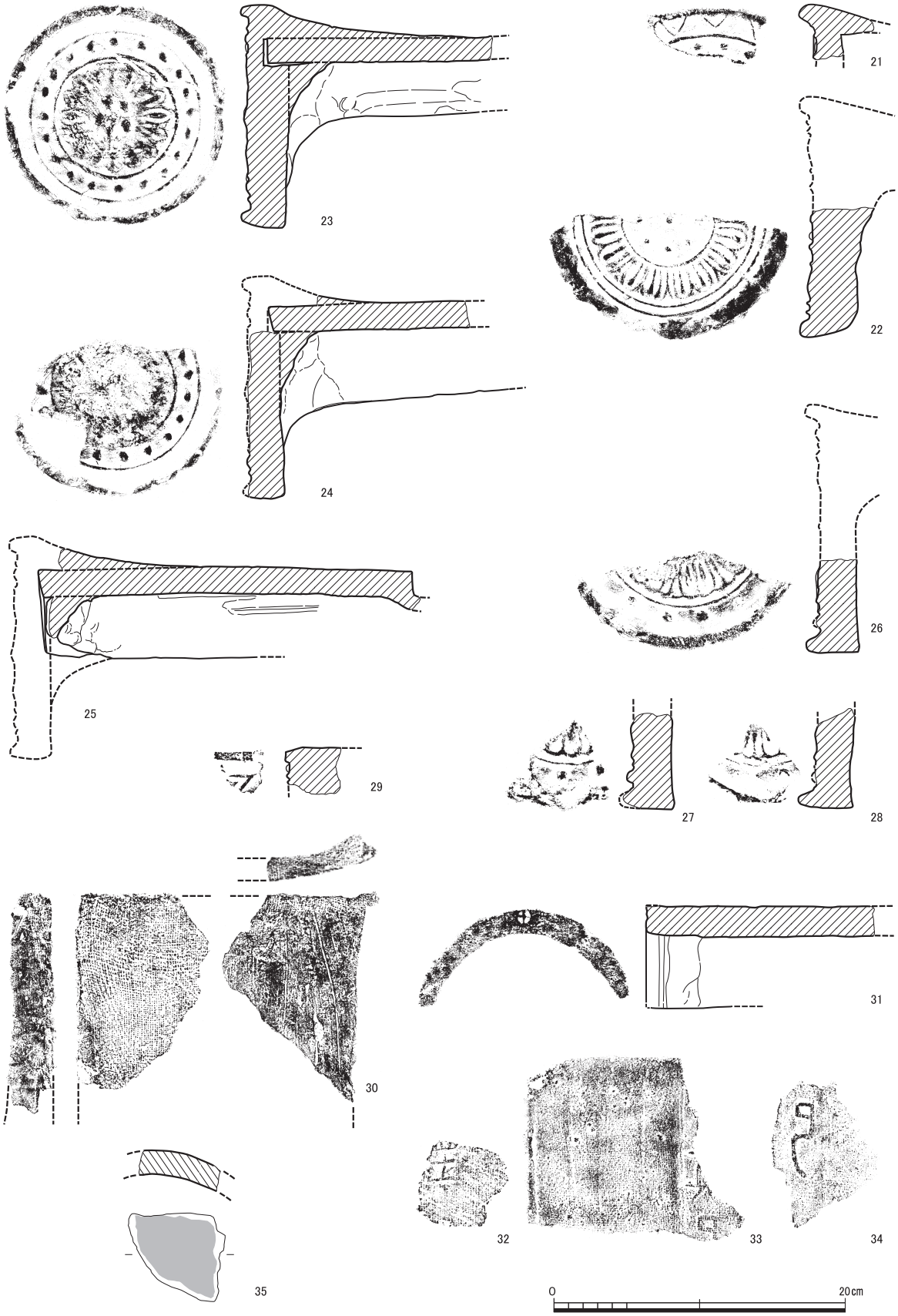



図10　出土瓦拓影・実測図（1：4）

品か。『平安京古瓦図録』の「299」に類似し、平安時代前期。

30は布目が凸面・側面・尻面にも及んでいる軒平瓦の平瓦部である。焼成はやや軟らかく、内面淡灰色。外面は炭素が吸着して黒い。軒平瓦凸面押圧技法によるものである。

31は幅14.3㎝、高さ６㎝の丸瓦で、丸瓦端面上端部に径0.9㎝の陰刻○印の中に陽刻で＋印がある。凸面は横ナデ調整。凹面は布目である。凹面頭部端に削りを入れ端面にしている。焼成は甘く、胎土は淡灰色である。表面は炭素が吸着し黒い。同じ印を押した丸瓦は３個体出土している。この印を持つ他の２個体には胴部凸面に頭に対して平行な横方向のナデによる複数の砂引きが凸面の両端部にまで及んでいる。筒を割る前の成形過程のロクロ回転によって付着したものと思われる。この３個体は焼成・胎土ともに同一であることから同じ窯で焼成された可能性が高い。この印は西賀茂角社西郡・鎮守庵瓦窯で出土しているが、径が大きく１㎝以上ある。

32～34は平瓦刻印瓦である。平瓦凹面陽刻で、布目が刻印内に残存することから、凸型台成形台に彫られたものが左右逆字で転写されたものと思われる。いずれも西寺境内から出土している。

32の２字の内、上は西と読める。下は『平安京古瓦図録』「723」の解説では「土の異字体」とされているが、むしろ『木村捷三郎収集瓦図録』[4]の西寺跡収集「382～384」にある「西寺」と打たれた「寺」の左右逆字部分の「寸」部分と酷似している。「寺」の略字体か、磨消して意味がわからず刻印した可能性がある。厚さ1.6㎝。凹面布目、凸面に離れ砂と縦方向の縄叩き目が残る。胎土は粗く長石などが混じり淡灰色。焼成は硬い。同印は昭和61年度調査の西寺北側築地を検出したマンション建設地からも出土している。33は『平安京古瓦図録』「722」の解説では「真弓」と読む。厚さ２㎝。凹面布目、凸面に離れ砂と縦方向の縄叩き目が残る。胎土は粗く長石・石英などが多く混じり淡灰色。表面は炭素が吸着して黒い。焼成はやや甘く坂瓦窯製の軒丸瓦と酷似している。34は33の下の字である「弓」と同じで、上に「真」の印があったものと思われる。胎土は33に較べ長石が少なく、小粒である。凸面を欠落しているため厚さは不明である。

**緑釉丸瓦**（図１－35、図版27）　厚さ1.6㎝、凸面に濃い緑釉が掛かる緑釉丸瓦である。凹面は布目。胎土はやや粗くクリームがかった淡灰色である。落込み２を掘り込んだ攪乱壁から出土した。

**凝灰岩**（図版28－36）　落込み２瓦溜から出土した二上山産凝灰岩である。灰白色であるが灰色の粒を多く含む。西寺の基壇などに用いられたものであろう。20片以上出土しているが多くは小片である。表面の加工痕が失われているので写真として収録した。残存縦約７㎝、横約５㎝、厚さ約４㎝を測る。

参考文献

『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会、1987年。
植山　茂「東寺の瓦、西寺の瓦」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会、1993年。
中島信親「『離宮系』長岡宮式軒瓦の変遷について」『考古論集（川越哲志先生退官記念）』2004年。
山口　均「長岡京造営論ノート・長岡宮式軒瓦の再検討」『立命館大学考古学論集Ⅱ』2003年
古閑正浩「長岡京の造瓦組織と造営過程」『考古学雑誌・第95巻第２号』日本考古学会、2011年。

## 5．まとめ

今回の調査で、皇嘉門大路に面した西寺東築地を検出できたことは大きな成果である。検出した築地基底部が、復元されている皇嘉門大路築地推定線とほぼ一致して検出できたことは、平安京条坊設定の正確さが窺える。また、未発掘の西大宮大路に面した西寺西築地の位置も西寺伽藍が左右対称形で平安京条坊に規制されている限りにおいては、ほぼ確定することとなる。

今回の調査で検出した西寺築地基底部底辺幅は約2.1ｍで、７尺となる。『延喜式』左右京職京程による大路築地幅は「六尺」＝1.8ｍであるが、当研究所が2012年以来行っている東寺の「史跡教王護国寺境内史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業に伴う埋蔵文化財調査[5)]」では、創建当時の東寺東築地基底部幅が７尺であることが判明しており、東寺・西寺の築地幅は大路築地幅より１尺広かった可能性もある。また、東寺東築地基底部と長岡宮の南面築地基底部は、共に地山を削り出しており、今回検出した西寺築地基底部の作り方に共通性が見いだせる。今回の調査地では、西寺造営当初には削り出された築地基底部が少なくとも0.20ｍ以上の高さを持っていた可能性が高い。築地部分だけ掘り残して、西寺境内・皇嘉門大路の両側を削り平坦に均していた可能性がある。

瓦は平城宮式、長岡宮式の再利用瓦と、平安京造営後の西寺所用瓦・緑釉瓦が出土している。平安時代中期以降の瓦は検出していない。また、落込み２の瓦溜の瓦に火を受け酸化し赤色化した瓦が含まれていた。『日本紀略』正歴元年（990）条に西寺が「焼亡」したことを伝える記事があり、この火災に伴って落込み２の瓦は一括破棄された可能性がある。しかし、共伴して出土した土器は９世紀初頭の様相を帯びており、瓦も焼け瓦が含まれているが、平安時代前期以前のものである。また、この落込み２西肩を切る落込み１からは10世紀代の遺物を検出している。これらのことから、西寺は焼亡が文献で追える990年以前の９世紀代にも一度焼亡している可能性が指摘できる。また、築地西を全面に覆う上層堆積層（遺物包含層）からは1000年前後の土師器皿が出土しており、時期的に正歴元年の火災後に行われた整地層の可能性がある。さらに、この上面に部分的ではあるが焼けた壁土を含む層があり、平安時代中期の緑釉陶器蓋を検出している。今回の調査では11世紀半ば以降の遺物を検出しておらず、中世には廃絶していた可能性が高い。

今回出土した瓦は平城宮・長岡宮の再利用瓦が大半を占め、平安京造営に際して最初から西寺造営が計画されていたことを示唆している。特に長岡京東院出土瓦と同笵瓦は長岡京東院から西寺の造営に際して運ばれたと考えられるが、これまでの西寺の発掘調査では出土していない。但し、平安京造営に際して計画されただけで、運ばれた瓦が使われず破棄されたとの憶測も生じるが、焼け瓦が多く含まれていることから早い段階で西寺造営が始まり、正歴元年以前に一度罹災したものと考える。西寺造営の記事が長期にわたるのも火災が原因であった可能性も残る。

今回の調査は遺構の保存を前提にしたものであり、一部の遺構を除いて掘り下げを行っていないので、不明な点も多く残った。今回の調査の残る問題点として、１点だけ出土した緑釉瓦の遺構帰属関係がある。緑釉瓦は平安時代前期では凝灰岩で化粧した基壇を有する瓦葺建物だけに使用

されたと考えられ、使用が確実な平安宮と東寺・西寺の他には神泉苑・羅城門に葺かれていたと推測されている。しかし、凝灰岩破片を伴う落込み２の瓦溜から確実に出土したことを論証できない以上、西寺の緑釉瓦生産が平安京造営時か、西寺造営が盛んになった嵯峨天皇の弘仁朝まで降るのかは不明なままとなった。また、落込み２土器溜の一括遺物が９世紀初頭（平安京Ⅰ期中段階から新段階）であり、平安京土師器編年案では810年を遡らない。その直上に破棄してあった焼瓦を含む瓦の破棄年代は、落込み２を切る落込み１が埋まった年代が10世紀代以降であり、それ以前に破棄されたことは確実である。落込み２の年代が、記録が少ない９世紀代に一度焼亡した建物の瓦などを破棄した土坑であるとすれば、『日本略紀』の天長九年（832）に「西寺講堂供養御願新造仏。荘厳法物一十五種便即施入」とあり、この時に講堂自体が再建されたと考えることも可能であろう。落込み２の時期よりやや降るが、荘厳物を「施入」し、「新造仏」を「供養」した時であると考えればあまり矛盾しない。また、平安時代後期に編纂された『伊呂波字類抄』にある西寺建立延暦六年（787）説も長岡京廃都を決意して長岡京東院出土瓦と同笵瓦を検出したことからも興味深いが、西寺所用瓦の生産開始時期と共に今後の課題として残された。

最後に、土器類は平尾政幸氏、瓦類は上村和直氏の御教授をえた。

註

１）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

２）　岩本　崇「長岡京東院の瓦屋とその評価」『長岡京左京東院跡の調査研究正殿地区』　古代学研究所　2002年

３）　平安博物館編『平安京古瓦図録』　雄山閣出版株式会社　1977年

４）　『木村捷三郎収集瓦図録』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

５）　この調査は未報告である。東寺東築地についての成果は、京都市考古資料館の第245回文化財講座資料「東寺・西寺・羅城門」を参照のこと。

# Ⅵ　中臣遺跡・中臣十三塚

## 1．調査経過

今回の調査は、中臣遺跡の第87次調査である。調査地は山科川と旧安祥寺川に挟まれた台地に展開する広範な中臣遺跡の中で、台地西側に古墳時代後期（６世紀後葉から７世紀前葉）に築造されたとされる「中臣十三塚」古墳群内に位置する。今回の調査地は、多くが消滅したとされる中臣十三塚の中でも、今日まで墳丘状の高まりが残存する数少ないものの一つである方形区画の北側に位置する。この墳丘状高まりは、昭和30年代に実施された宅地造成のための区画整備の際に作成されたと考えられる「地籍図」に、区画内に「塚」と明記されている。この方形状の高まりを以下「塚」１とする。この「塚」１の北側に接して新たな住宅が建設されることになったので、京都市文化市民文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という。）の指導のもと、公

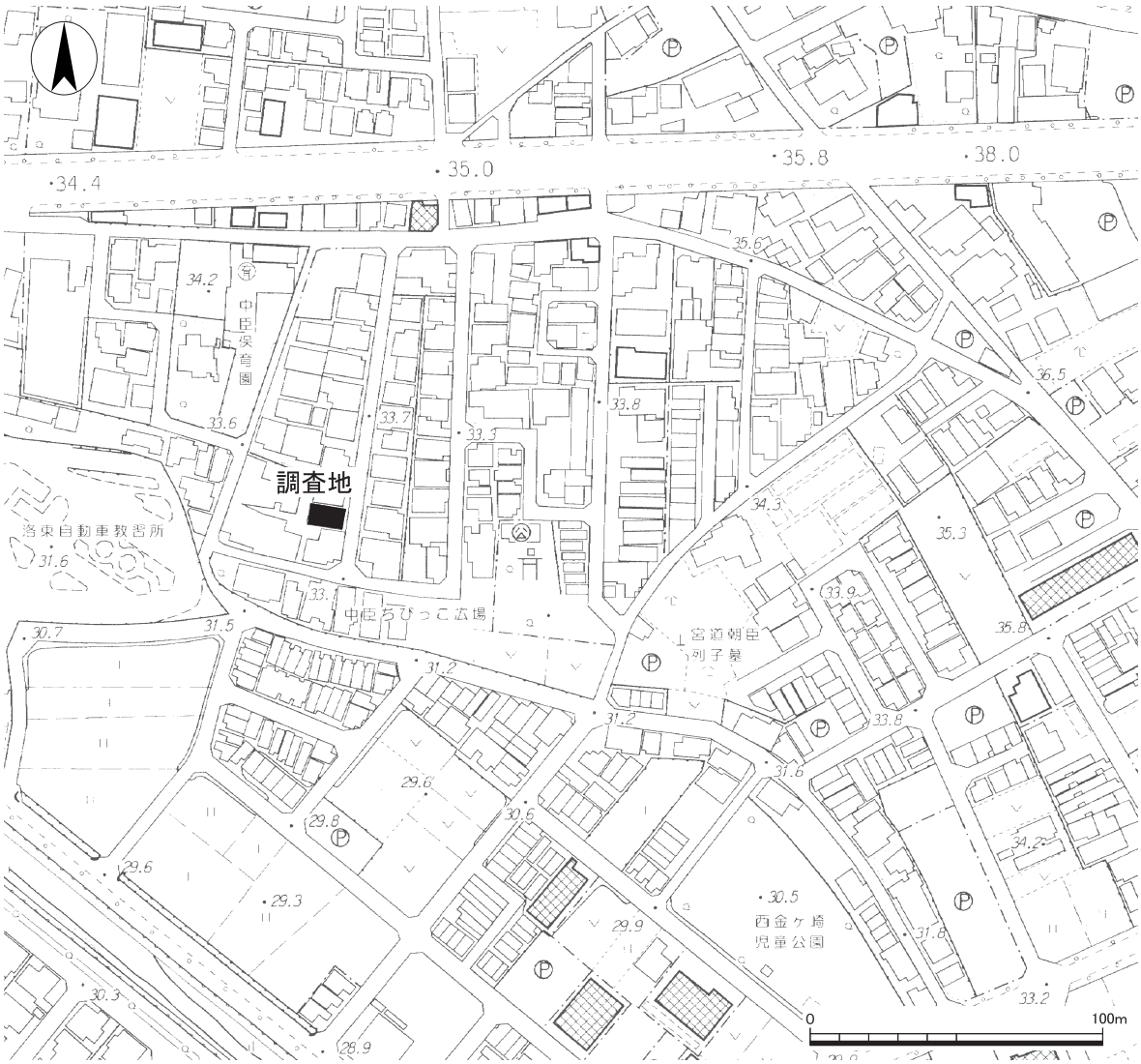



図１　調査位置図（１：2,500）

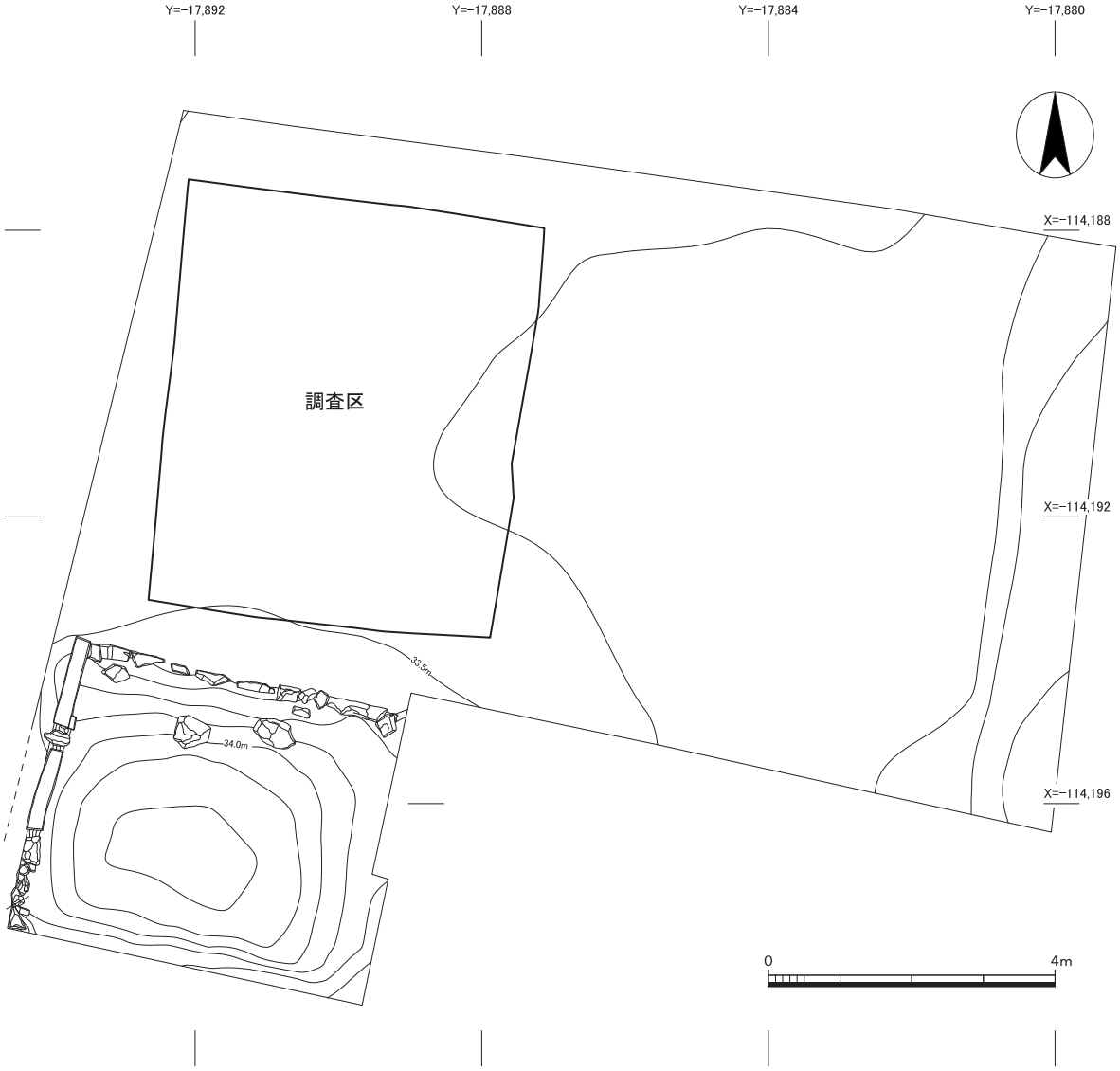



図２　調査区配置図および塚地形図（１：100）

図３　調査前全景（東から）

図４　作業風景（北東から）

益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施した。「塚」１の北側に周溝などの古墳に関する遺構の検出が期待されたので、「塚」１の北側に南北６ｍ、東西５ｍの調査区を設けた。また、調査に並行して「塚」１を含めた現状の地形測量を実施した。

調査は10月２日から開始し、調査地と調査地南側の「塚」１の地形測量を行った後、地表下約0.3ｍの地山面まで重機掘削を行った。人力で遺構検出を行い、現代攪乱などを掘削した。調査区の平面および壁面の実測図作成と写真撮影を実施した。文化財保護課の臨検を受けた上、10月10日に埋め戻して、全ての作業を終了した。

なお、調査中に近隣から「塚」についての聞き取り調査を実施したところ、新たな知見が得られた。

## ２．歴史的環境（図５）

古墳時代から飛鳥時代にかけての中臣遺跡は、山科川と旧安祥寺川に挟まれた合流地点の台地上に形成された「Ｕ」字形に分布する「居住地」と、栗栖野丘陵裾部に形成される「墓域」に大別される。この台地裾部に展開する古墳群に関しては、山科川東側に形成される木棺直葬と推定される方墳からなる「墓域Ⅰ」と、旧安祥寺川東側に形成される円墳からなる「墓域Ⅱ」の中臣十三塚とに截然とわかれる。また、時代も前者の方墳群が横穴式石室導入以前の５世紀中葉から後葉であるのに対し、後者の円墳群は横穴式石室導入後の６世紀後葉から７世紀前葉と推定されており、古墳群は東側と西側では時期差があるとされている[1)]。

『京都府山科町誌』（京都府山科町役場、1930年）には、中臣十三塚に藤原家の祖である中臣鎌足が最初に葬られた場所である伝承が地元に残っていることが記されている。また、調査地である「中臣町」の由来を鎌足が葬られた「十三塚」に求めているが、詳細は不明である。

古来山科（山階）の地は、中臣鎌足が７世紀前半代に住んだ「山階陶原館」や奈良・興福寺の前身である「山階寺」などが存在したことが文献史料などに記されており、中臣氏発祥の地とされている。他方、山科盆地における「一宮」は、大宅廃寺裏山に位置する岩屋神社（342年創建）とする説が有力である。岩屋神社は、京都では数少ない物部氏の祖とされる天忍穂耳命・栲幡千々姫命・饒速日命を祭神主としており、中臣氏と物部氏との相克を物語っている可能性がある。また、中臣十三塚に現存する宮道古墳は、平安時代前期から中期の醍醐天皇の祖母である宮道列子墓とも伝えられる。古墳造築の時期と齟齬があるが、列子を出した宮道氏は宇治郡大領として勢力があり、中世以降も武家として存続した蜷川氏の本姓である。『宮道朝臣蜷川氏系譜・家系図』などによれば物部守屋の末孫となる宮道氏から蜷川氏が出たとする。岩屋神社も宮道氏との関わりが『山科家礼記』（文明十一年（1479）二月十八日条）などに窺える。さらに、宮道氏と婚姻関係にあった大宅氏も、９世紀初めに作成された『新撰姓氏録』では物部系であるとされ、山科にも嘗ては物部氏の影響力があった可能性がある。

しかし、古代史で興味深い物部氏と中臣氏との関係なども含めて、古代の山階は依然として不明な点が多いのが実情である。

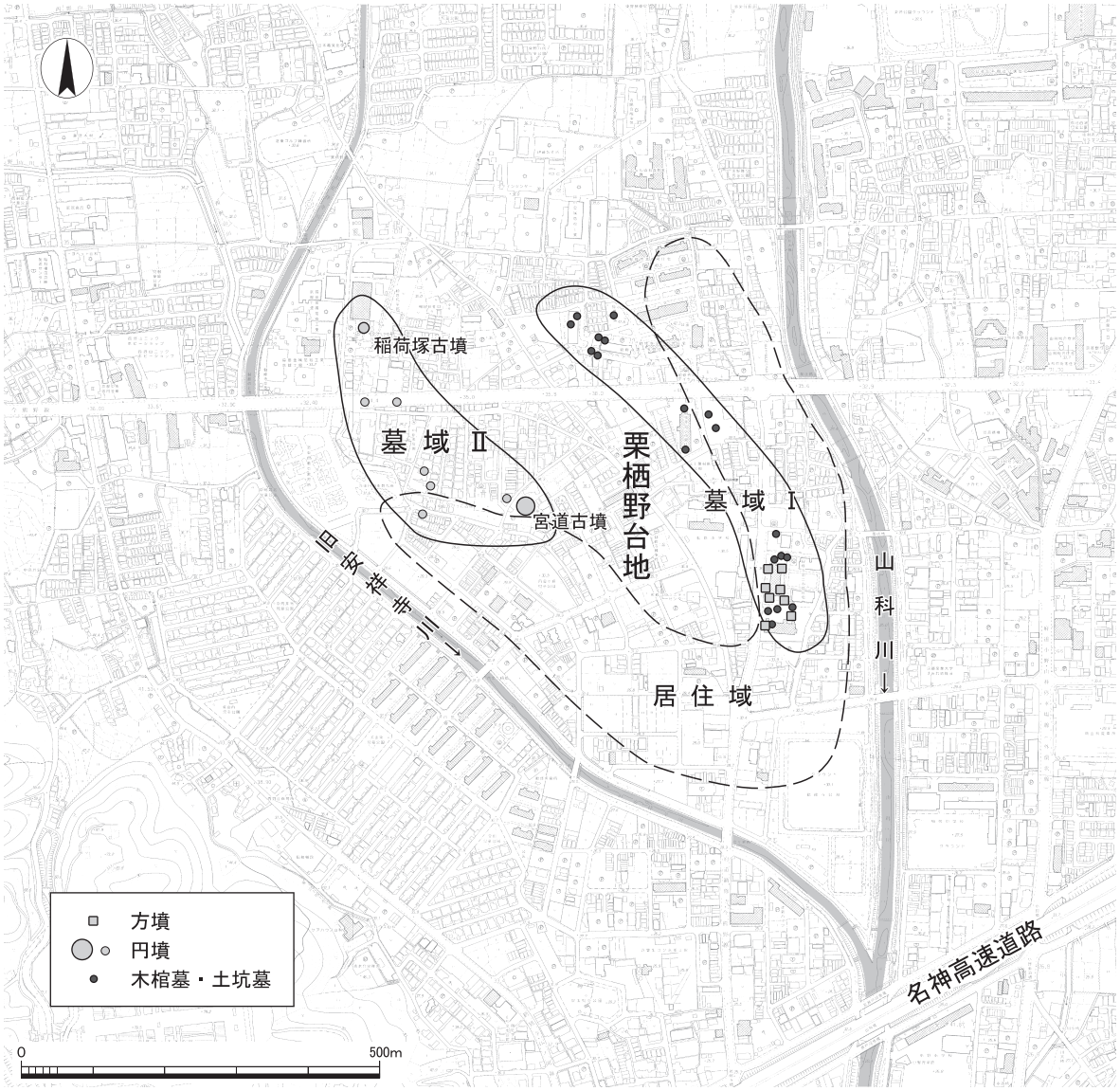



図５　中臣遺跡の遺構分布図（１：10,000）

参考文献

蜷川　新『物部氏及宮道氏史蹟』1922年。

『京都府山科町誌』京都府山科町役場、1930年。

佐伯有清『新撰姓氏録の研究・本文篇』吉川弘文館、1962年。

『中臣遺跡の概要』中臣遺跡調査団、1974年。

『京都市の地名』平凡社、1979年。

佐貫伍一郎『山科郷ヶ竹鼻村史』、1986年。

## ３．遺構・遺物（図６、図版29）

調査区の基本層序は、地山層（黄褐色粘土・礫）まで地表下0.3～04ｍの現代盛土のみである。東南部には、一部近代の耕作土（暗褐色砂泥）が0.1～0.2ｍの厚さで残存する。

地山の黄褐色粘土の下には、礫が厚く堆積していた。特に北東部では下層の礫層が盛り上がり、上層の粘土層が薄くなる傾向がある。

調査で検出した遺構は皆無である。検出して掘り下げたものはすべて現代の攪乱である。

また、遺物も近代を遡る遺物は全く皆無であった。

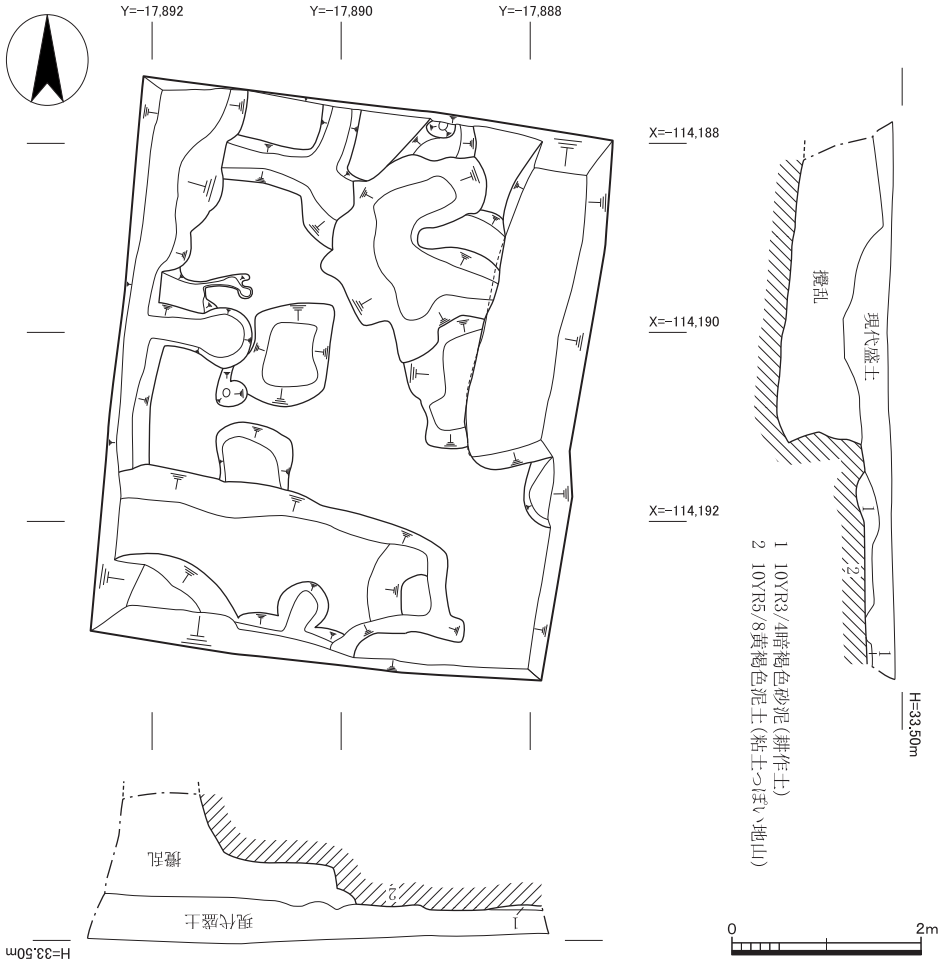



図６　調査区実測図（１：80）

## 4．まとめ

今回の調査では遺構・遺物とも皆無であり、「塚」１に関連する周溝などの痕跡を見いだすことはできなかった。しかし、今回実施した「塚」１の地形測量と近隣住民の聞き取り調査によって得られた知見に基づいて、周辺にかつて存在した「塚」について、その可能性を探ってみたい。

**「塚」１**（図８、図版29）　地形測量図（図２）に示したように、「塚」の現状は東西５ｍ、南北4.5ｍの方形で、高さ0.7ｍである。四方は宅地に囲まれており、座標北に対してやや東に振れている。この傾きは、当地一帯に昭和30年代に行われた区画整理による宅地割と一致する。「塚」の北辺は東西方向に並べられた石列、西辺は高さ約0.5ｍのコンクリート製の土留めと小さめの石、東辺はコンクリート製の塀、南辺は南側宅地の造成によって区画されている。現在この区画は財務省の管轄となっており、昭和30年代の区画整理後に作成された「地籍図」に「塚」と明記されている。近隣の方の話[2)]によれば、以前には当地南隣の宅地の中央に古墳があり、頂上に一石露出していたが、区画整理の際に壊して西の現在の位置に移動されたという。今回の調査で古墳に関する遺構・遺物が皆無であったことは、この「塚」が本来の場所から移動されたことを裏付けている。ただし、今回の調査のみでは、当地に存在した古墳関連の遺構が既に失われていたことを完全に否定できたわけではなく、ここでは「塚」が移築されてきたものである可能性を指摘するに留めたい。

**「塚」２**　この「塚」は高橋美久仁氏が昭和45年の踏査時に「３号墳」とされたもので、以下の

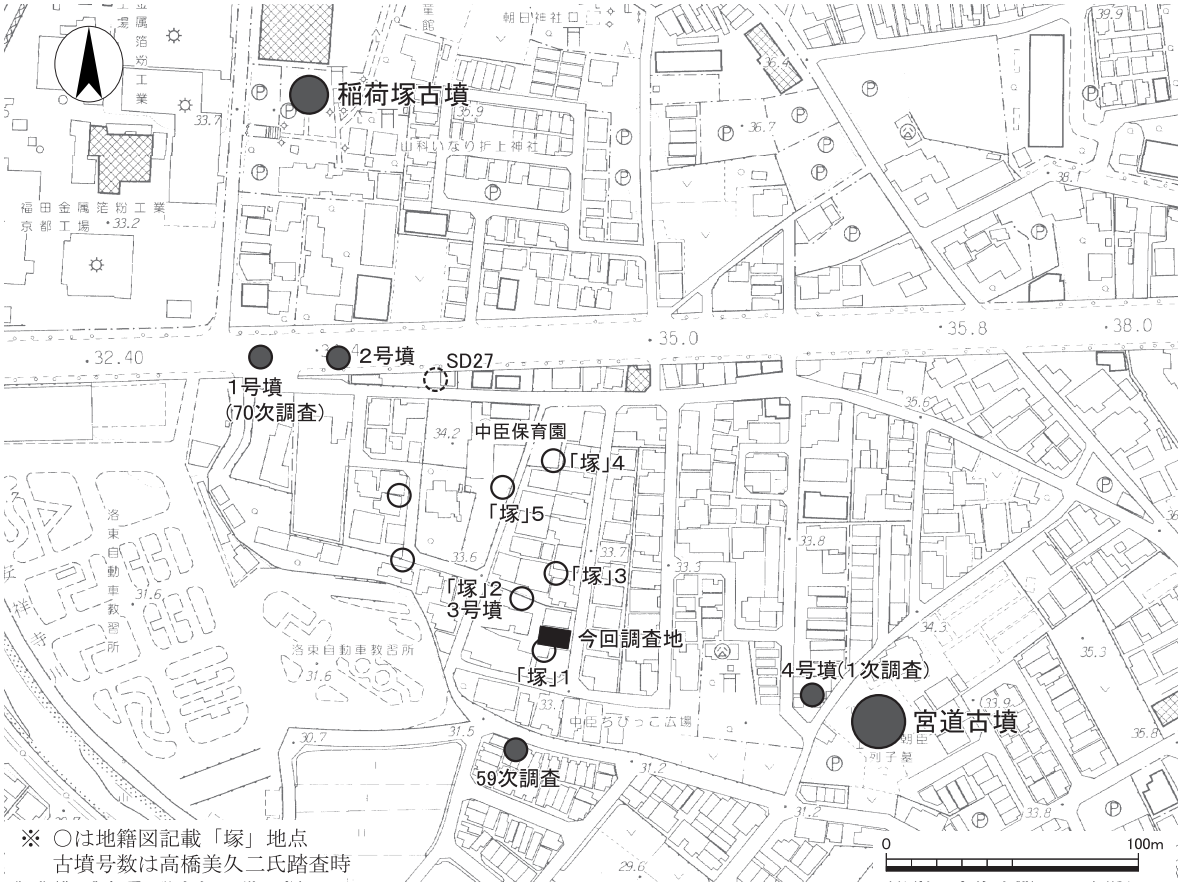



図７　中臣十三塚分布図（１：3,000）

ように記載されている[3)]。

「３号墳は現在民家の敷地となり、墳丘の中央で地籍が異なって南北に二分されている。北側の民家では、墳丘の高まりを利用して植木鉢の置場とされ、南側の民家では庭園の一部となっている。墳丘は現在径約７～８ｍ、高さ1.5ｍを測る。遺物が出土し、墳丘が著しく変形されているにもかかわらず、石材などが露出していないことから、木棺直葬などの石材を伴わない主体部であったと推測される。」

この「塚」の南半部では、戦時中に防空壕を掘った際に「塚」から岩がたくさん出たという証言があり[4)]、現状は南側頂部から東が大きく凹み、チャート石材が露出している（図９）。また、橘女子大学考古学研究会の1976年踏査時に「数個の石列がみられる」と簡単な墳丘図と石列断面図を添えて報告[5)]されており、石室を伴う古墳であった可能性がある。

「塚」３　調査地の北側の駐車場において、40～50年前に石組みや遺物が掘り出されたという証言があり、「塚」があった可能性がある。前出の「地籍図」には駐車場の西端に「塚」の表記されており、これに当たる可能性があろう。

「塚」４・５　調査地の北にある現・中臣保育園敷地には前出「地籍図」に「塚」と記載される個所が２個所ある[6)]（「塚」４・５）。「塚」４は保育園の東端にあり、小規模にチャートなどの石列で方形に囲まれた範囲で、墳丘は失われている（図10）。「塚」５は西の敷地境にあたり、樹木が植えられているが墳丘や石の露出などは認められない（図11）。

図８　「塚」１北東隅土留め状況（北東から）

図９　田丸氏宅「塚」２「３号墳」現状（東から）

図10　中臣保育園内東側「塚」４（南西から）

図11　中臣保育園内西側「塚」５（北西から）

以上のほかに「地籍図」には２つの「塚」の記載地点があるが、現在では確認できない。

**現存の古墳**　現存する古墳は、折上神社境内にある「稲荷塚古墳」と中臣神社東の「宮道古墳」がある。いずれも現状は円墳であるが、後世に手が加えられており本来の形状は不明である。6世紀後半ごろと考えられている。

**発掘調査による古墳**　発掘調査では４基の古墳が調査されている。「１号墳」は以前より墳丘の高まりと石室石材が露出していたが、中臣遺跡第70次調査により南に開口する横穴式石室基底部が比較的良好に遺存していたことが明らかとなった[7)]。「２号墳」の位置には同調査では古墳の痕跡は確認されず、南東に周溝（SD27）を検出した[8)]。４号墳は第１次調査で検出された、小型石室を主体部とする、円形の周溝を伴う古墳である[9)]。そして第59次調査でも、円形の周溝と中央に横穴式石室の石の抜き取り痕を検出した[10)]。

これまでに中臣十三塚の範囲内で実際に確認された古墳は、現状保存されている「折上神社内稲荷塚古墳」と「宮道古墳」、発掘調査で実際に調査した４基を合わせて、６基である。これらは古墳時代後期、６世紀後半から７世紀初頭に位置付けられる。「地籍図」には７箇所「塚」の表記があり、今回「塚」１～３については近隣の方々から、証言をいただいた。これらを合計すると13基となり、奇しくも中世以降に付けられた名称である「十三塚」と一致する。ただし、今回の調査地の南に隣接する「塚」１は後世に移動させられたものである可能性があり、今回情報を得られなかった西側の「塚」2つについては道路や宅地などの敷設のため地上から消滅している。また、第１次調査の「４号墳」や第59次調査の古墳、第70次調査の古墳周溝（SD27）のように既に壊され埋没していた古墳が調査によって新たに見つかる可能性がある。今後更に注目していく必要があろう。

最後に、調査中に貴重な情報をお寄せいただいた田丸富佐雄氏、鈴木艶子氏、桝谷氏、木田氏に感謝する。

註

1）『平安京以前・古墳が造られた時代』京都市文化財ブックス第26集　京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　2012年

2）調査地南の鈴木艶子氏、西隣の田丸富佐雄氏からお話を伺った。

3）高橋美久仁「東山区中臣十三塚群集墳採集の須恵器」『京都考古』９　京都考古刊行会　1974年

4）調査地西隣の田丸富佐雄氏からお話を伺った。

5）『山科分布調査概報　復刻版　第１次～第５次』 京都橘大学考古学研究同好会　2008年

6）写真は、いずれも文化財保護課の宇野隆志氏より提供を受けた。

7）高橋　潔・平方幸雄「中臣遺跡第70－２次調査」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年

8）平方幸雄「中臣遺跡第70－４次調査」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

9）京都府立洛東高等学校郷土研究クラブ『中臣遺跡』 1971年

10）菅田　薫・辻　純一「中臣遺跡第59次調査」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年

# Ⅶ　岩倉中在地遺跡

## １．調査経過

調査地は、京都市左京区岩倉中在地町12、12－７に位置する。当地は岩倉中在地遺跡の範囲にあたり、縄文時代、奈良時代から鎌倉時代の遺物散布地として、京都市遺跡地図に登録されている。この地に住宅新築工事が予定されたことから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を実施、その所見により発掘調査を実施することになった。

今回の調査では、文化財保護課が行った試掘調査で柱穴群が検出されたことから、関連する遺構の検出につとめた。なお、調査地の隣接における調査事例[1)]では、遺構は検出できていないが本調査の参考資料として活用した（図４）。

調査は、調査区を東西22ｍ、南北12ｍに設定し、264㎡の範囲で調査を行うこととなった。11月７日から調査を開始し、重機で遺構面まで掘削し、以後人力による作業に切り替えた。その後、図面・写真などの記録を取り、重機による埋戻しを行い、調査を終了した。

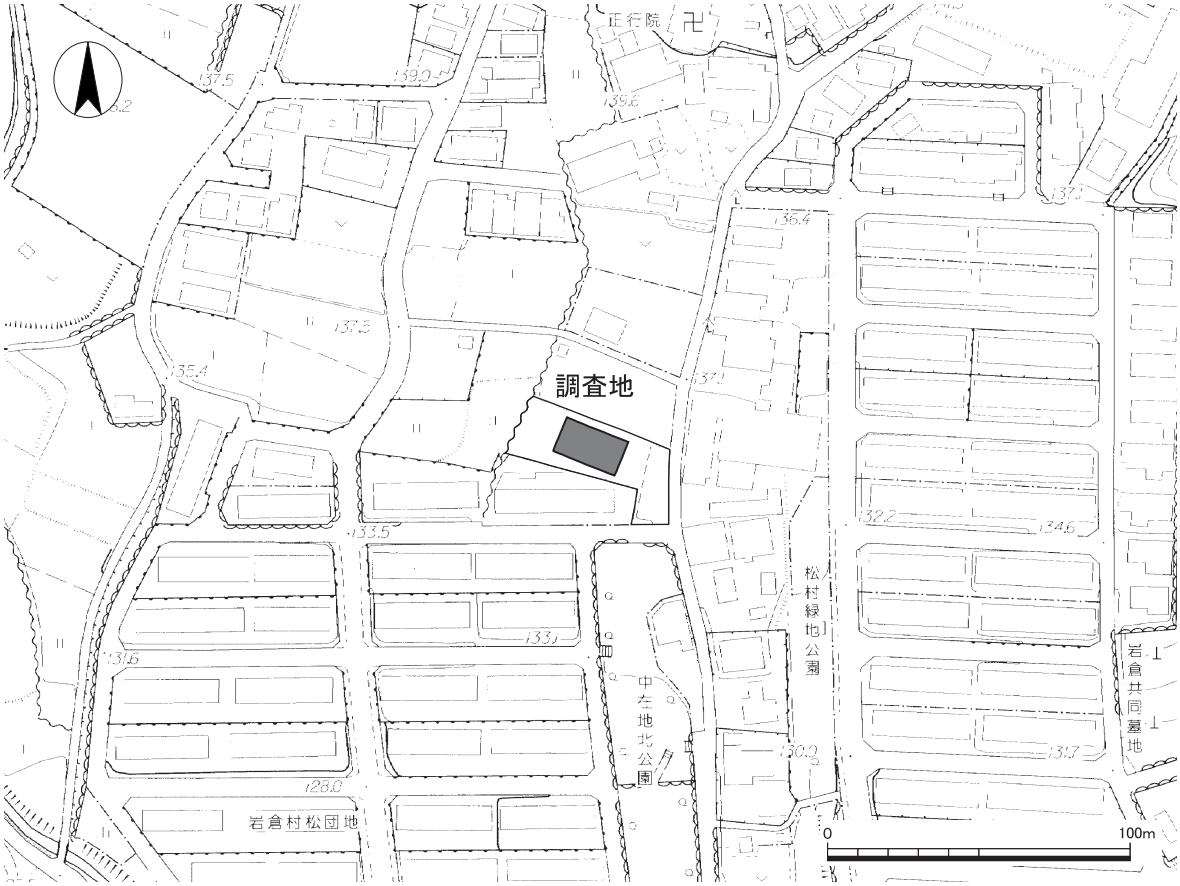



図１　調査位置図（１：2,500）

## ２．歴史的環境（図５）

調査地の所在する岩倉の地名は、神が降臨するに際して依代である磐座に由来するとされている[2)]。現在の山住神社の御神体とされる巨岩がその磐座という。地名の成立した時期は不明であるが、古くより人々の営みが窺える。周辺の遺跡としては弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡として岩倉忠在地遺跡がある。古墳時代には幡枝古墳群などが築造され、７世紀前半頃まで続く。奈良時代には岩倉下在地一帯では条里遺構が見られるようになる[3)]。この頃から岩倉幡枝古窯跡群などで須恵器や瓦の生産が始まり、平安時代を通じて生産された。また、平安時代には、大雲寺や普賢寺、解脱寺などの寺院が築造されたといわれている。室町時代には小倉山城、岩倉上蔵城、岩倉長谷城などが築かれ、戦国時代の戦乱に巻き込まれる。江戸時代には隠棲の地として知られていた。後水尾天皇の長谷や幡枝の山荘など貴人の山荘が相次いで建てられた。幕末の維新の立役者とされる、岩倉具視が隠棲の地としていたことは有名である。

図２　調査前全景（東から）

図３　作業風景（東から）

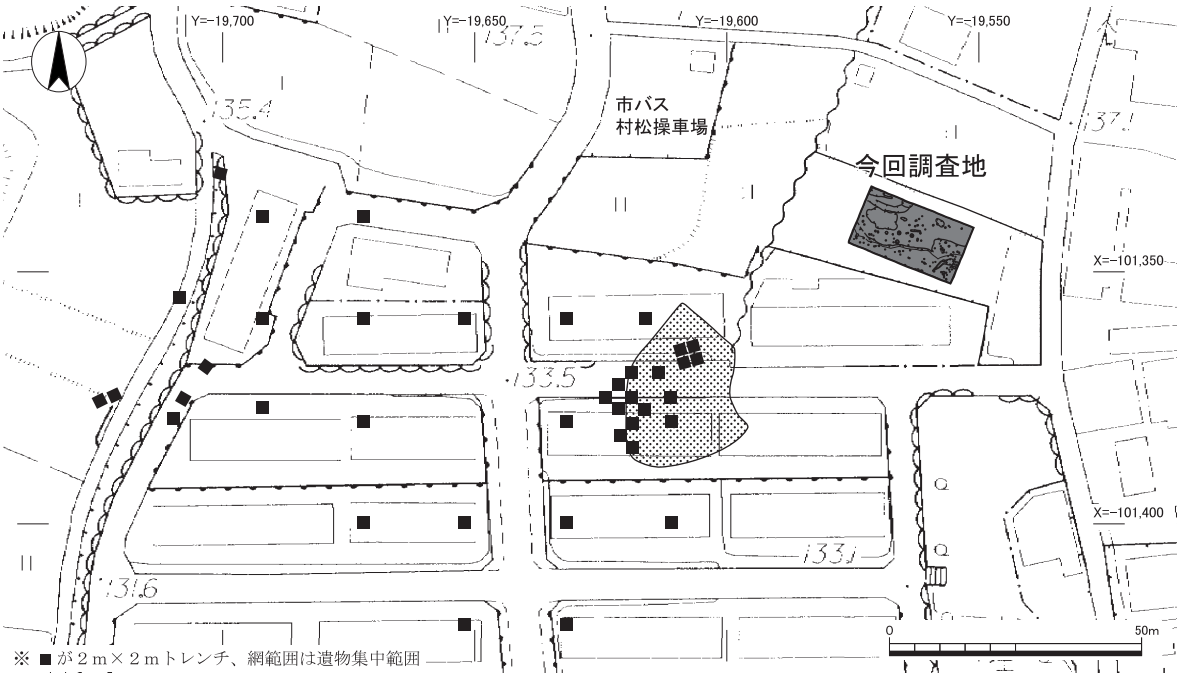



図４　調査区配置図および隣接調査地（１：1,500）

明治22年(1889)作製の「陸軍陸地測量部地図」に「京都市遺跡地図 第8版」に掲載の遺跡範囲・番号を転載した。

図５　周辺遺跡図（１：20,000）

# 3．遺　　構

## （1）基本層序（図6）

調査地の基本層序は、対象地が現耕作地であり耕作土および床土が地表下0.3ｍ前後まである。その下は調査地北側では地山層、南側では南下がりの傾斜地を雛壇状に造成した際の整地層が最深部で地表下0.6ｍまであり、その底面に厚さ0.05ｍまでの薄い砂礫層が堆積する。それ以下は地山層となっている。

調査の結果、地山上面で平安時代の建物や土坑、鎌倉時代の溝や柱列などを検出した。以下に、その概略を記述する。

## （2）遺構（図7、図版30）

### 平安時代の遺構

**建物**（図8、図版30）　調査区中央付近で検出した東西3間×南北2間の東西棟掘立柱建物である。中央の棟方向にも柱穴が認められる。径0.2ｍ前後の小規模な円形の柱穴で構成される。深さは0.1～0.3ｍある。柱間は東西が西から1.5ｍ、1.4ｍ、2.4ｍで、南北が北から1.5ｍ、2.0ｍと不規則である。柱掘形は不明瞭なものが多い。

**土坑4・5・8**（図8）　建物の北西隅付近と建物内の北東寄りと西端で検出した円形に近い土坑群である。径は0.7ｍ前後で、残存する深さは0.1ｍ前後である。埋土は土坑4が淡褐色で、他は黒褐色で炭を含む。土師器、白色土器、黒色土器などの土器が少量出土している。出土した土器片から平安時代中期と思われる。検出した位置から建物に伴う土坑群であると考えられる。

**柱列1**（図9、図版31）　建物の北側で検出した東西方向の柱列である。柱列は西から柱穴46－49－65－56で構成される。柱穴の規模は径

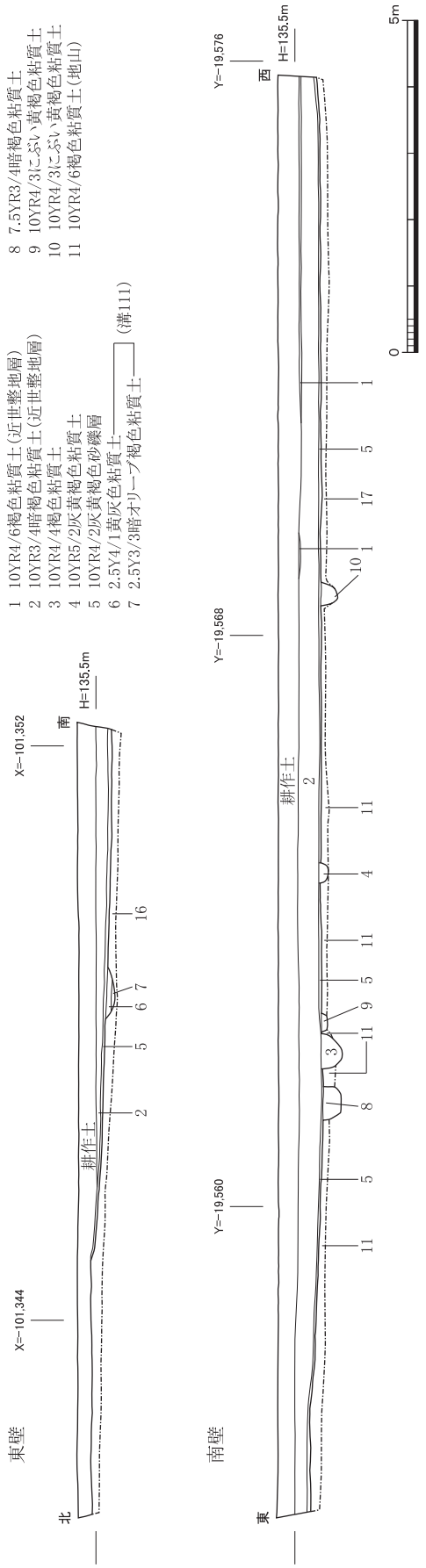



図6　調査区断面図（1：100）

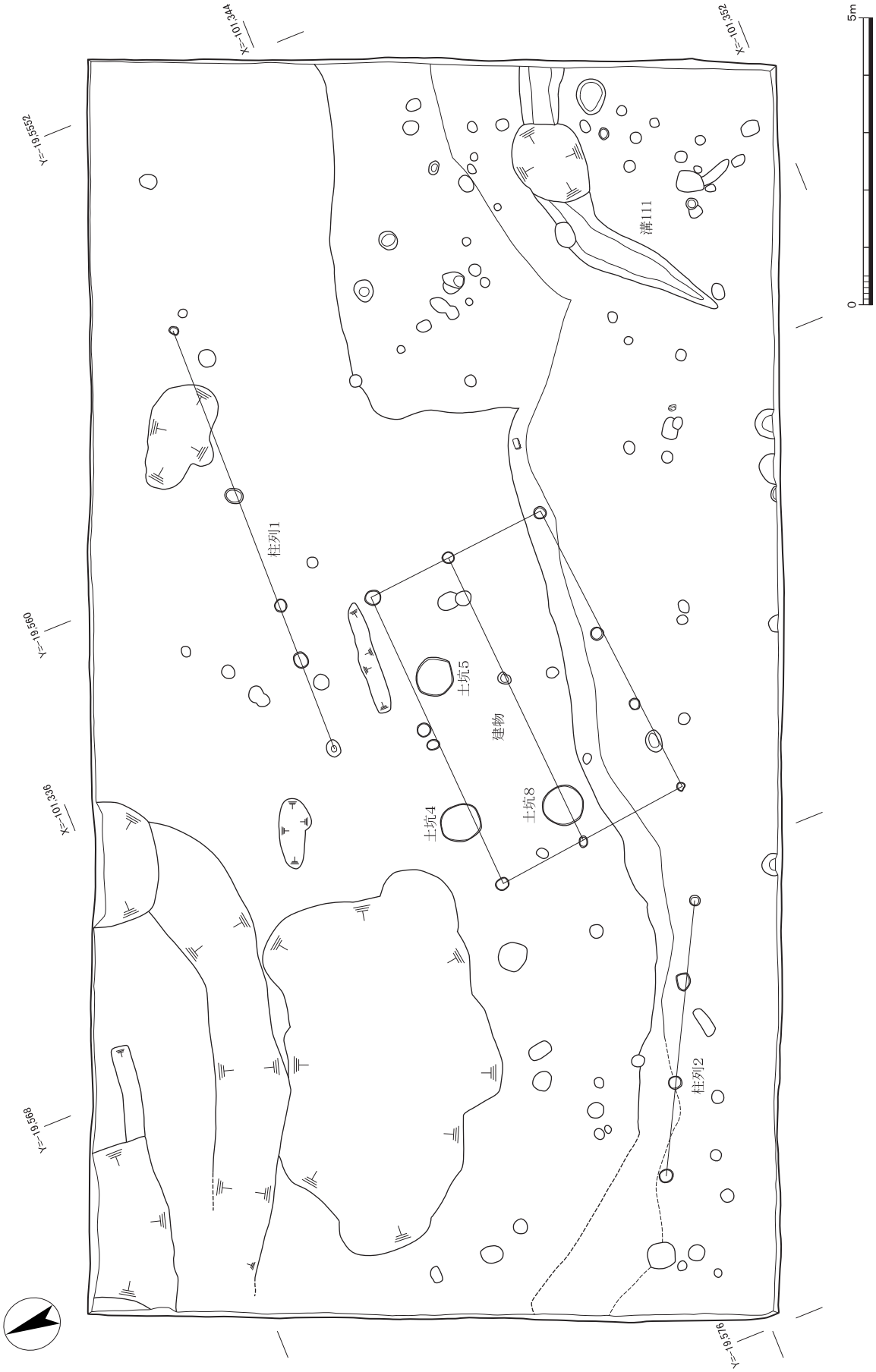
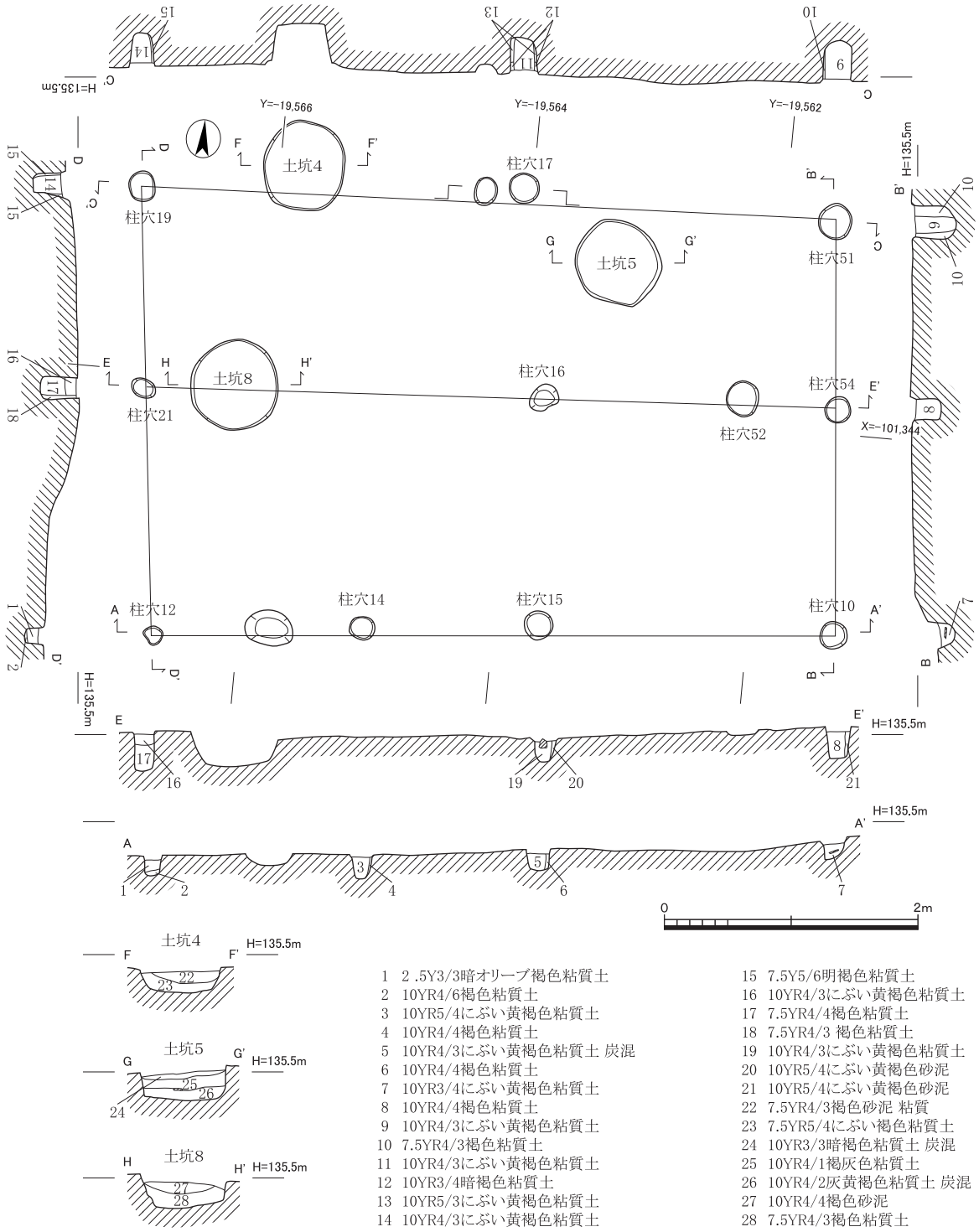



図７　調査区平面図（１：100）

表１　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 平安時代 | 建物、柱列１、土坑４・５・８ | |
| 鎌倉時代 | 溝111、柱列２ | |




1　2 .5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
2　10YR4/6褐色粘質土
3　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
4　10YR4/4褐色粘質土
5　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 炭混
6　10YR4/4褐色粘質土
7　10YR3/4にぶい黄褐色粘質土
8　10YR4/4褐色粘質土
9　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
10　7.5YR4/3褐色粘質土
11　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
12　10YR3/4暗褐色粘質土
13　10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
14　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
15　7.5Y5/6明褐色粘質土
16　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
17　7.5YR4/4褐色粘質土
18　7.5YR4/3 褐色粘質土
19　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
20　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
21　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
22　7.5YR4/3褐色砂泥 粘質
23　7.5YR5/4にぶい褐色粘質土
24　10YR3/3暗褐色粘質土 炭混
25　10YR4/1褐灰色粘質土
26　10YR4/2灰黄褐色粘質土 炭混
27　10YR4/4褐色砂泥
28　7.5YR4/3褐色粘質土

図８　建物、土坑４・５・８実測図（１：50）

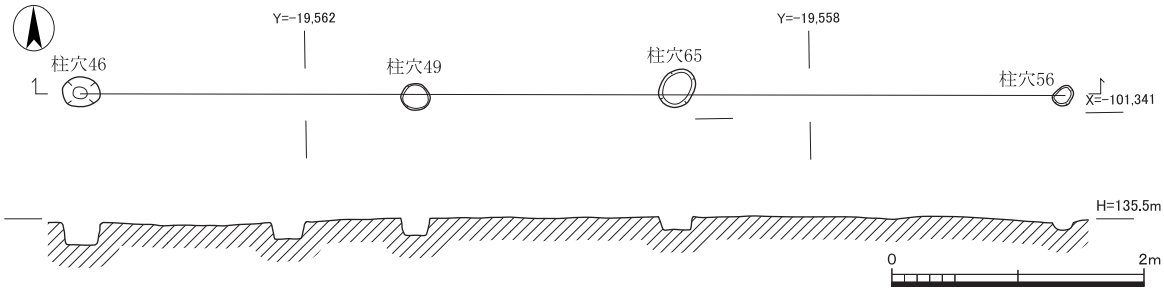



図９　柱穴列１実測図（１：60）

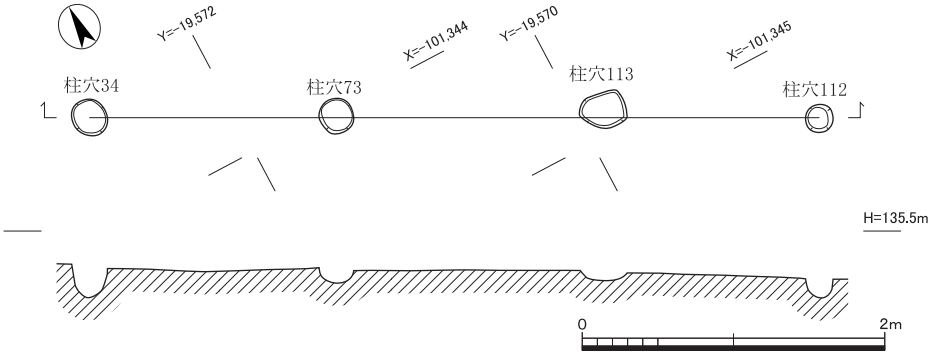



図10　柱穴列２実測図（１：50）

0.2ｍ前後、深さ0.15ｍ前後ある。柱間は西から2.5ｍ、2.0ｍ、3.0ｍと不揃いである。柱列は建物の傾きと方位が近いことから同時期に設けられたと考えられる。

**鎌倉時代の遺構**

**溝111**（図11、図版31）　調査区東端で検出した。検出長は約６ｍで南西方向に屈曲する。深さは東端部で0.2ｍあるが南西端で途切れる。溝は調査区外の東に延びる。出土土器から鎌倉時代前期の溝と推定される。

**柱列２**（図10、図版31）　調査区南西部で検出した。検出長は５.1ｍで、方位は座標軸に対し東で35°南に振れる。柱列は西から柱穴34－73－113－112で構成される。柱穴の規模は径0.2ｍ前後で、深さ0.15ｍ前後である。柱間は西から、1.8ｍ、1.8ｍ、1.5ｍと不揃いである。遺物は出土してないが、溝111と方位や埋土が類似することなどから鎌倉時代と思われる。

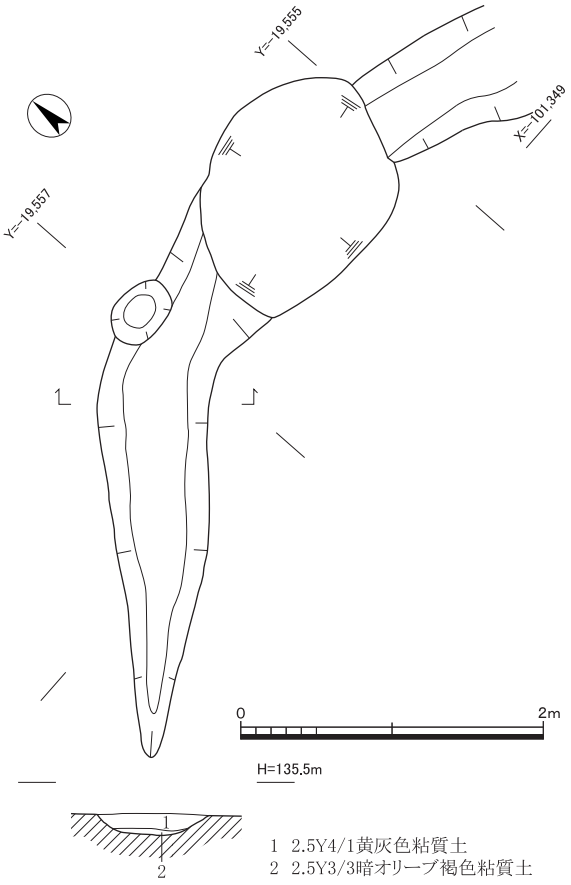



図11　溝111実測図（１：50）

# ４．遺　　物

## （１）遺物の概要

遺物はコンテナ３箱ある。ほとんどが土器類で、瓦類は微量である。土器類は大半が平安時代前期から中期のもので、整地土層からの出土である。

平安時代前期から中期のものには、土師器皿、須恵器壷・甕・杯、黒色土器椀、緑釉陶器皿、灰釉陶器椀などがある。

鎌倉時代前期のものには、土師器皿、焼締陶器甕、白磁椀などがある。

## （２）土器類（図12）

**土坑８出土土器**　１は土師器皿である。口径10.9㎝、高さ1.2㎝ある。器厚0.2㎝内外と薄く、口縁部は外反し、端部は上方につまみあげている。平安京Ⅲ期新段階に収まる[4)]。

**土坑４出土土器**　２は土師器皿である。口径11.9㎝、高さ1.1㎝ある。器厚0.2㎝内外で薄く、口縁部は外反し、端部は上方につまみあげている。平安京Ⅲ期新段階に収まる。３は土師器甕である。口径23.6㎝、高さ4.2㎝以上で、口縁部は外反し、端部は内側に丸く収める。

**土坑５出土土器**　４は黒色土器椀である。底径6.0㎝、高さ1.3㎝以上である。底面外面には簡易な断面三角形の高台を貼り付ける。内面は黒色化してミガキを施している。５は白色土器椀である。口径5.6㎝、高さ2.0㎝以上で、底部外面は削り出し平高台。高台外面には径2.8㎝の円形の凹みがある。焼成は軟質で、胎土は密で、色調は黄灰色である。６は白色土器皿である。底径7.8㎝、高さ1.8㎝以上で、底部外面は削り出し輪高台。焼成は緩く、胎土は密で、色調は淡黄灰色である。

**溝111出土土器**　７～９はいずれも中型の土師器皿である。口径は11.5～12.0㎝、高さ1.7～2.0㎝ある。口縁部は内湾し、外面に１～２段のナデを施す。平安京Ⅴ期新段階に収まる。10は白磁の椀である。底径は5.9㎝、高さ2.5㎝以上である。高台内側を除いて、全面に施釉する。細く高い高台を削り出す。華南系である。

表２　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安時代 | 土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦 | ２箱 | 土師器３点、黒色土器１点、白色土器２点 | ０箱 | ２箱 |
| 鎌倉時代 | 土師器、焼締陶器、白磁 | １箱 | 土師器３点、白磁１点 | ０箱 | １箱 |
| 合　計 | | ４箱 | 10点（１箱） | ０箱 | ３箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

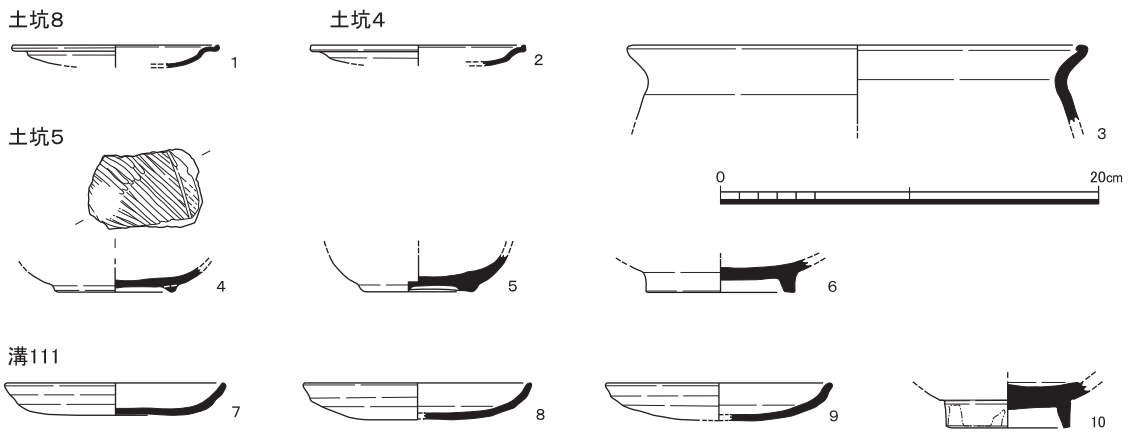



図12　出土土器実測図（1：4）

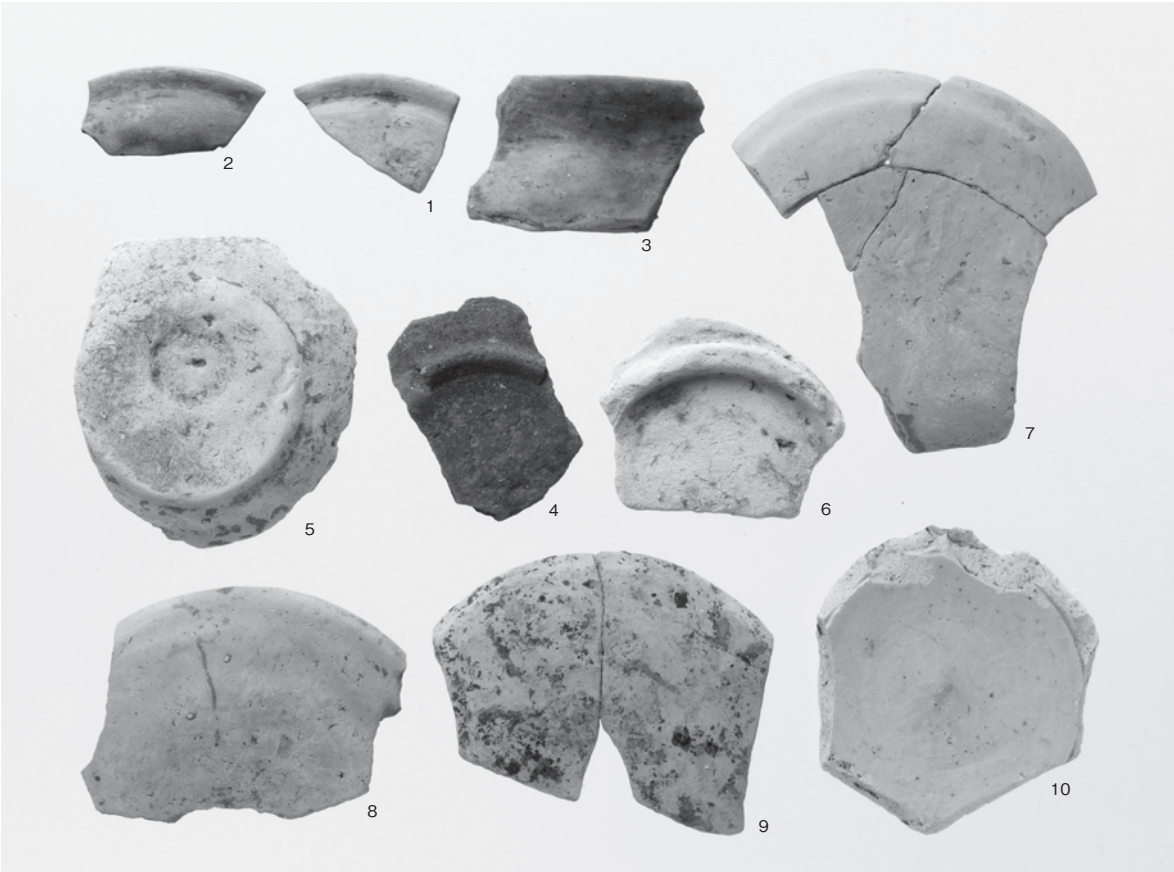



図13　出土土器

## 5．まとめ

今回の調査により、これまで遺物散布地としてのみ登録されていた岩倉中在地遺跡で、平安時代から鎌倉時代の遺構が検出できた。これは当遺跡の内容・性格を知る上で大きな成果となった。

また、検出した建物の配置や調査地の地形から、遺跡はさらに南側や東側に広がる可能性がある。

今回、平安時代の遺構の検出によって、周辺一帯は平安時代から開発されていたことが明らかになった。調査地の村松地区からは大原や鞍馬方面に至る小径（間道）も通じていることからも、古代から交通の要衝であったと考えられる。

なお、今回の調査・整理に際して中村　治氏（大阪府立大学）より中在地町村松周辺の歴史、民俗、旧景観などについて多岐にわたって御教示をいただいた。

註

1）　江谷　寛『京都市左京区岩倉中在地発掘調査報告』　京都市住宅供給公社　1972年

2）　上田正昭「神々の世界」『京都の歴史１』　学芸書林　1970年

3）　小浜　成「岩倉盆地における条里制」『岩倉古窯跡群』　京都大学考古学研究会　1992年

4）　出土土器の年代観については小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年に準拠した。

図14　昭和46年（1971）遠景（南西から）

# Ⅶ　方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡

## １．調査経過

今回の調査は、方広寺大仏殿跡の遺存状況を知るための確認調査である。調査地は、北半が京都下労働基準監督署の跡地、南側は京都身障者職業相談所の跡地で、現在は財務省が管理する更地となっている。方広寺は豊臣秀吉が創建した寺院で、大仏殿跡の発掘調査は2000年と2002年に行われており今回が第３次調査となる。これまでの調査では大仏殿の基壇南辺、礎石据付の壷地業、大仏の台座などを検出し、大仏殿が遺跡として良好な状態で遺存していることが確認されていた。今回の調査地は大仏殿の南東部に位置する。また、遺跡地図では調査地は六波羅政庁跡にも含まれている。

調査区は、既存建物の基礎などによる影響が少ない地点を選び、１～４区の４箇所を設定した。１区と２区は南北に接しているが、旧京都下労働基準監督署と旧京都身障者職業相談所の境界であったフェンスが残されており、これを挟んで北側を１区、南側を２区とした。大仏殿の礎石の位

図１　調査位置図（１：5,000）

置と基壇東辺を検出する事を目的として設定した。３区は、調査地と調査地西側の大仏殿跡緑地の境界に存在する花崗岩巨石の性格を明らかにするために設定した。この巨石は、2004年に大仏殿緑地整備の際、フェンスのコンクリート基礎の設置工事に伴って発見されたもので、石の東端部が今回調査地側に伸びていた[1)]。その出土位置から大仏台座を構成するものと推定されていた。４区は、２区において大仏殿基壇東辺を検出したため、これの南側延長部を確認することを目的として、調査中に新たに設定した。

調査の結果、１・２区では大仏殿礎石据付の壷地業を４基、基壇東辺、大仏殿造営時の足場柱穴列２条を検出し、基壇東辺は慶長年間の再建期に拡張されていたことが明らかとなった。３区の巨石は、検出位置と設置状況から大仏の台座を構成する石列の１つである事が明らかとなった。４区では、既存建物の基礎などにより遺構の遺存状況は良くなかったが、大仏殿基壇東辺の痕跡を確認した。また、１・２区の西壁際では、基壇構築状況を確認するため一部掘り下げた結果、下層において室町時代の遺構を検出した。

これらの検出遺構は実測図・写真による記録を行っているが、壷地業についてはオルソ測量をおこなった。記録作業終了後は砂による遺構の保護養生を行った後に埋め戻しを行い、調査を終了した。

また、調査成果を公表するため10月31日に広報発表を行い、11月２日には現地説明会を開催し約1000名の参加者を得た。

図２　調査前全景（北東から）

図３　作業風景（北から）

図４　現地説明会風景（南西から）

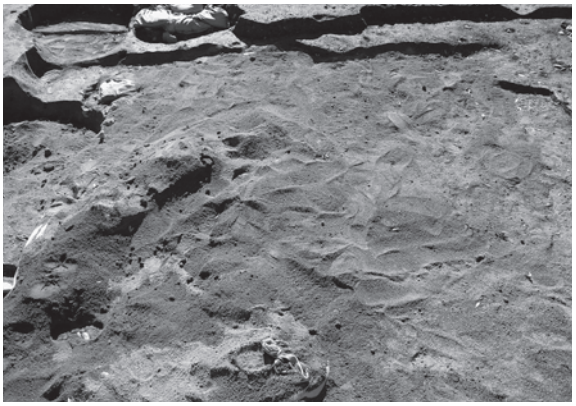


図５　壷地業３遺構保護状況（北から）

なお、近年の研究では、方広寺の名称は江戸時代になってから使用されたもので、当初は単に「大仏」「大仏殿」と呼ばれていたことが指摘されている。その妥当性については肯首しつつ、以下においては、安土・桃山時代から江戸時代までを含めて「方広寺」の名称を用いる。[2)]

## 2．方広寺の歴史と既往の調査

### （1）方広寺の歴史

方広寺は、文禄５年（1596）に豊臣秀吉によって創建された寺院である。方広寺には、東大寺大仏殿を凌ぐ巨大な大仏殿が建築されたが、その後、数奇な運命をたどり、往時をしのぶものとしては現在、伽藍中枢部の３面を巡る石塁、梵鐘、豊国神社の階段となっている正面の門跡などにすぎない。

秀吉による方広寺の造営は、天正14年（1586）に東福寺周辺で造営が計画されたが、実際には天正16年（1588）に東山西麓の蓮華王院北側で開始される。天正16年に石塁の構築、天正19年に立柱が開始され、文禄２年（1593）に上棟が行われる。巨大な大仏殿の用材は、大名に命じて全国から集められた。当初大仏は、鋳造仏の予定であったが、天正19年頃に工期短縮のためか計画が変更され、明の技術者を招聘して漆喰仏で造立される。完成した大仏は西面する高さ６丈（18ｍ）の金漆塗の坐像であったとされる。[3)]

方広寺は文禄５年（1596）頃にはほぼ完成し、落慶法要の計画も成されたようであるが、文禄５年９月５日近畿一円を大地震が襲う。この地震で、大仏殿の建物にはさほどの被害は出なかったものの、大仏は大破し秀吉により撤去が命じられる。この後一時、信濃国の善光寺の阿弥陀仏が本尊として迎えられることがあるものの、大仏殿に本尊が不在のまま、慶長３年（1598）８月秀吉は伏見城にて死去する。

秀吉の後を継いだ豊臣秀頼は方広寺の整備工事に着手する。地震で崩れた築地を回廊へ作り直し、蓮華王院との一体化などの工事を行うと共に、大仏殿内において、鋳造による大仏の造立を始める。しかし、この鋳造作業中の失火が原因で、慶長７年（1602）大仏殿は全焼する。慶長13年から秀頼は大仏殿と大仏の再建に着手し、慶長19年（1614）にほぼ完成する。しかし、大仏の開眼供養が翌月に迫った慶長19年7月、新たに鋳造された梵鐘の銘文が徳川家康を呪詛するものとして政治問題化する。これを契機に大阪の陣が勃発、慶長20年に豊臣氏は滅亡する。豊臣氏滅亡後も大仏殿は存続し、多くの『洛中洛外図』にも描かれるように洛東の名所となるが、寛文２年（1662）の地震で大仏が破損、江戸幕府の命により大仏は鋳つぶされ貨幣に改鋳されてしまう。残された大仏殿も寛政10年（1798）に落雷により全焼する。以後、妙法院によって再建が計画されることはあったものの、東山の地に同規模の大仏殿が姿を現すことはなかった。

## （2）既往の調査（図６・７）

これまでに行われた方広寺跡関連の発掘調査は、調査契機などから大きく３つの地点に分けることができる。史跡方広寺石塁の整備に伴う調査、京都国立博物館の整備に伴う調査、大仏殿基壇の確認のための調査に分かれる。以下ではこの順にこれまでの調査成果について述べる。

**史跡方広寺石塁**　現在、方広寺の周辺に残る石塁は南・北・西面の３面が存在する。その石塁の長さは西面が259ｍ、北面が120ｍ、南面は30ｍである。石塁は石垣の様に石を積む部分もあるが、基本的には高さ３ｍを超える巨石を並べて構築されている。方広寺は、東山から鴨川に至る東から西へ下がる傾斜地に位置している。このため広大な境内の平坦面を確保するために大規模な造成工事が行われた。石塁はこの造成に伴い構築されたものである。

発掘調査は1982～1984年に石塁修復工事に伴い実施された[4)]。発掘調査によって、石塁の構築は造成のための土盛りが行われた後に行われたこと、石塁背面の裏込の礫層は1.5～3.0ｍの厚さがあ

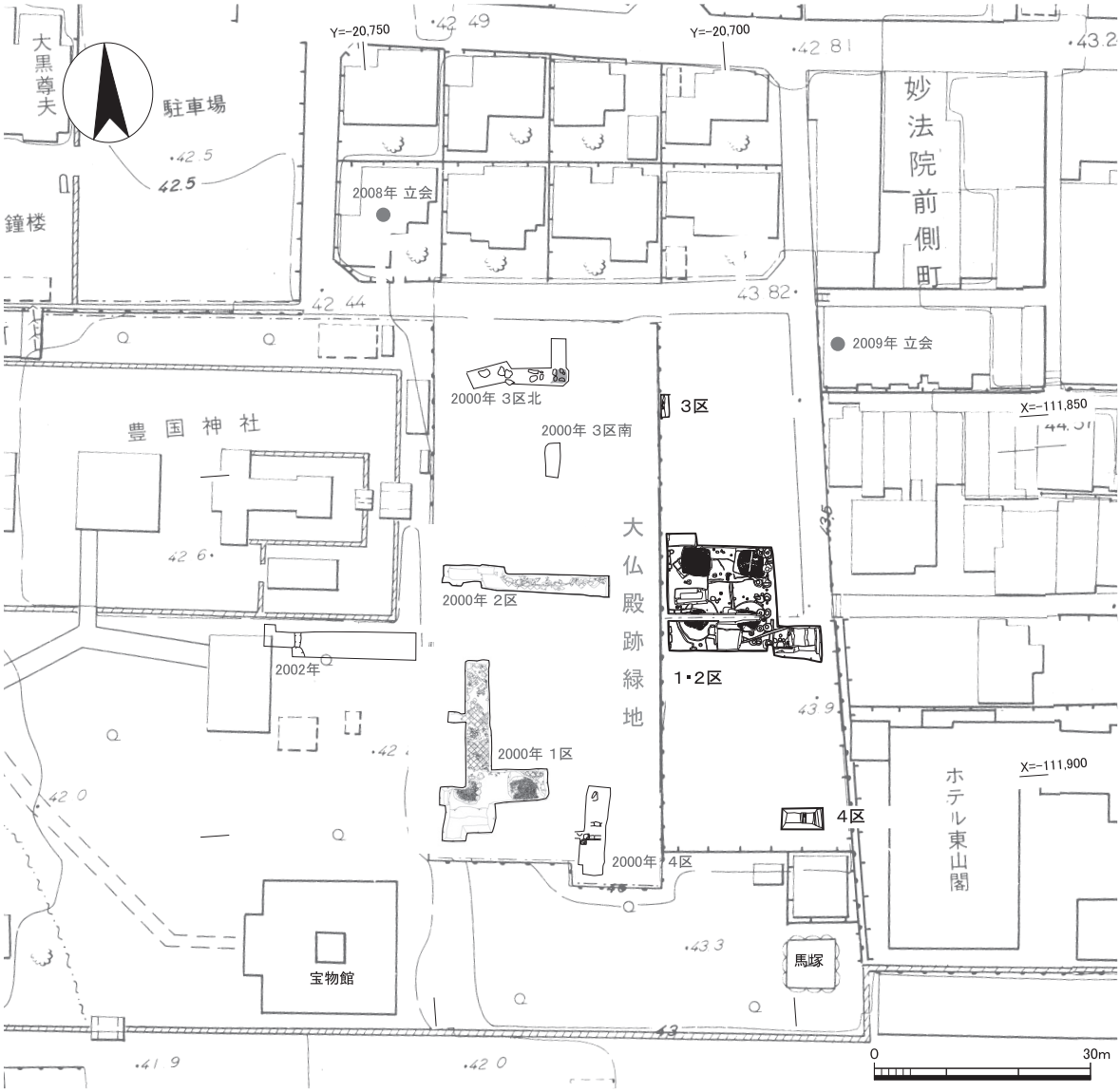



図６　調査区配置図（１：1,000）

り、この中に石仏や石塔などが含まれている事などが確認されている。

**京都国立博物館構内**　平成知新館の建設や整備に伴って1994～2010年の間に12次に渡る発掘調査が行われている[5)]。なお、図２の各調査区の表記は、１次調査１区を１－１区というように表現している。これらの調査では弥生時代から江戸時代までの様々な遺構・遺物が検出されているが、方広寺に関連する主な成果を以下に述べる。1998年に行われた３次調査の１区では方広寺南門とこれに取りつく回廊、大型品の鋳造遺構を検出した。南門は八脚門、回廊は複廊である。また、３次調査１・２区では、現存する南面石塁の東側延長部を検出し、合わせて128ｍの距離を持つことが判明した。また、石塁は秀吉の天正期に構築されたことも確認されている。３次調査１・４区と４

図７　今回調査区と既調査区（１：2,500）

次調査10区では蓮華王院南大門から方広寺南門に至る南北方向の路面を検出している。路面は天正期と秀頼の慶長期のそれぞれを確認している。

**大仏殿基壇**　2000・2002年に発掘調査が行われ、2008年に基壇北西部で立会調査が実施されている。2000年の発掘調査では、基壇南辺の地覆石・束石と階段東側耳石、大仏台座、礎石据え付けの壷地業などが検出された[6)]。基壇南辺は慶長期のものとその約２m背後で天正期の地覆石も検出され、慶長期に基壇南辺が拡張されている事が確認された。また、基壇上面では花崗岩製の磚が敷かれた状態で検出された。この調査によって、大仏殿が遺跡として地中に残されていることが初めて確認された。2002年には大仏殿基壇西辺の検出を目的として、発掘調査が実施された[7)]。この調査では、明治時代の豊国神社の造営によって基壇は失われていたが、基壇西辺の化粧石の抜き取り痕、もしくは雨落ち溝とみられる南北溝を検出する事ができた。2008年の住宅建設に伴う立会調査では、大仏殿基壇は後世の削平によって失われており、室町時代の遺構を検出した[8)]。また、2010年には、大仏殿基壇東側の隣接地で住宅の建設に伴い立会調査が実施され、方広寺造営に伴う整地層が検出された[9)]。

## ３．遺　　構

今回の調査の目的が、方広寺跡の遺存状況の確認であったことから、ほとんどの遺構は検出に留め完掘はしていない。１～４区では、それぞれにおいて方広寺に関連する遺構を検出した。主な遺構として、１・２区では大仏殿礎石据付のための壷地業４基・基壇東辺・足場柱穴列、３区では大仏台座、４区では大仏殿基壇地覆石の据付痕跡などがある。また、１・２区西壁際と２区北東部では方広寺造営以前の室町時代の遺構も検出している。以下では、天正年間の創建期方広寺に関連する遺構を天正期あるいは天正期方広寺、慶長年間の再建期に関連する遺構を慶長期あるいは慶長期方広寺として述べる。

### （１）１・２区（図８～11、巻頭図版２、図版32）

**基本層序**　調査地の現状はほぼ平坦である。調査周辺の地形をみると、東山から鴨川にむかって東から西へと下降しており、現在の平坦な地形は大仏殿造営以降のものとみられる。以下では、１・２区の西壁断面の中央部付近を例として基本層序を述べる。

表１　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 鎌倉時代 | 柱穴45 | |
| 室町時代 | 土坑71・72、礫敷75 | |
| 安土桃山時代<br>～江戸時代 | 基壇、壷地業１～４、足場柱穴列１・２、溝65、<br>基壇地覆石掘形、大仏台座 | |

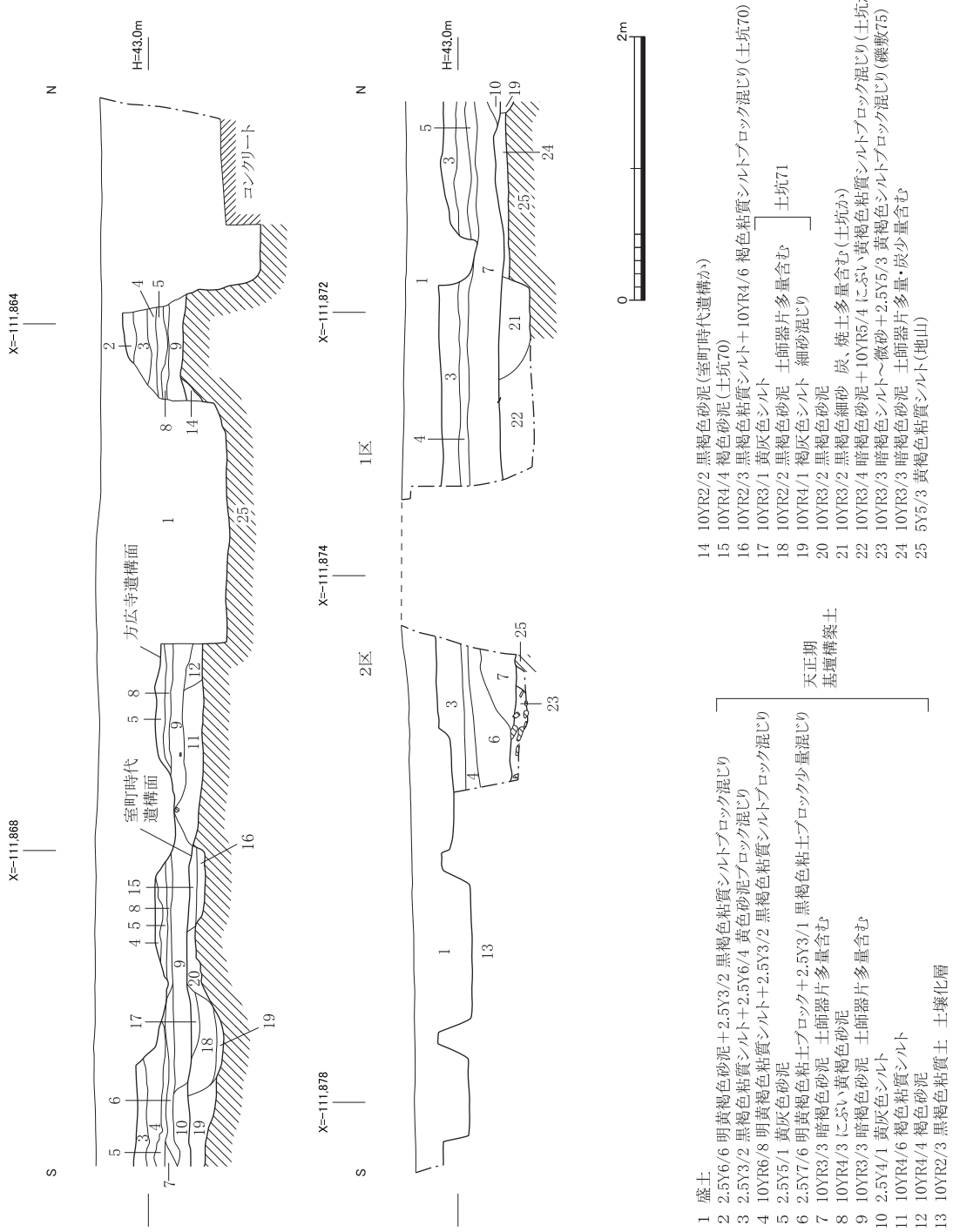
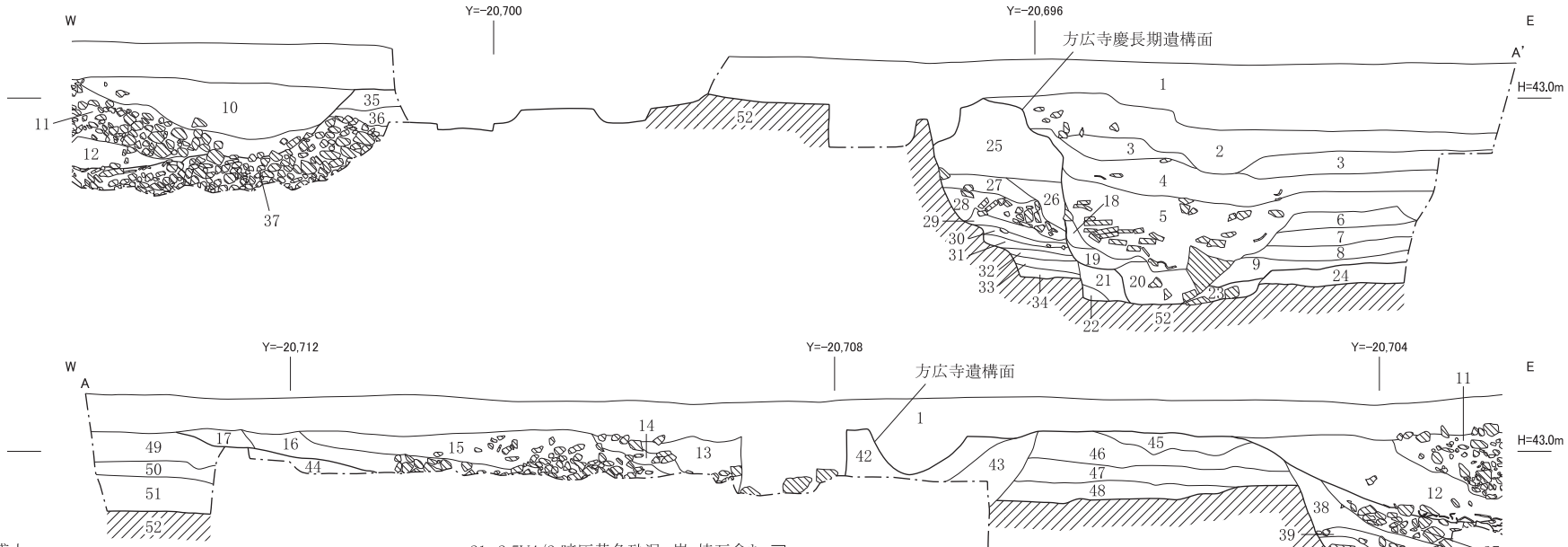



図８　１・２区西壁断面図（１：50）




1 盛土
2 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 φ5cm礫少量含む
3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 φ5cm礫少量含む
4 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト
＋2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥混じり φ5cm礫少量含む
5 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 φ5～10cm礫・焼土・炭多量含む(近代溝)
6 2.5Y6/4 にぶい黄褐色砂泥 焼瓦含む
7 10YR2/2 黒褐色砂泥 炭含む
8 2.5YR3/3 暗赤褐色砂泥 φ3cm礫含む
9 10YR2/1 黒色砂泥 炭多量含む
10 2.5Y7/4 浅黄色粘土
＋2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥ブロック混じり
11 2.5Y7/4 浅黄色粘土 φ3～10cm礫含む
12 2.5Y7/4 浅黄色粘土
＋2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥ブロック混じり
壷地業4 礎石抜取り
13 2.5Y7/6 明黄褐色粘土
14 2.5Y6/3 にぶい黄色砂泥 φ10cm礫含む
15 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 φ10cm礫含む
16 2.5Y7/6 明黄褐色粘土
＋2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土ブロック混じり
φ10cm礫含む
17 2.5Y5/2 灰黄褐色砂泥
壷地業2 礎石抜取り
18 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 φ3cm礫含む
19 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 φ1cm礫含む
20 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭含む
慶長期基壇 化粧石の抜取り (溝65)
21 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭・焼瓦含む
22 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 φ3cm礫含む
23 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
φ10～20cm花崗岩割石含む
慶長期基壇 化粧石掘形
24 2.5Y5/6 灰黄色砂泥 φ3cm礫含む(慶長期整地層)
25 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 φ3cm礫含む
26 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 φ2～10cm礫含む
27 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭・焼瓦・焼土多量含む
28 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
＋2.5Y6/2 灰黄色細砂ブロック混じり
炭・焼瓦・焼土含む
29 2.5Y4/1 黄灰色砂泥
30 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
31 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
32 2.54Y5/3 黄褐色砂泥
33 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
34 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
慶長期 基壇構築土
35 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
＋2.5Y7/2 灰黄色砂泥ブロック混じり
36 2.5Y5/4 黄褐色砂泥
37 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 φ5～15cm礫多量含む
38 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
＋2.5Y7/4 浅黄色粘土ブロック混じり
39 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
＋2.5Y7/4 浅黄色粘土ブロック混じり
壷地業4
40 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
41 φ10～15cm礫層
壷地業4
42 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土＋2.5Y4/1黄灰色砂泥ブロック混じり
43 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
壷地業2
44 2.5Y3/2 黒褐色砂泥＋2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロック混じり
45 10YR3/1 黒褐色砂泥＋2.5Y4/1 灰黄色砂泥ブロック混じり
46 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 土師器片多量含む
47 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 土師器片多量含む
48 10YR3/2 黒褐色砂泥 土師器片多量含む
49 2.5Y7/6 明黄褐色粘土＋2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック混じり
50 2.5Y7/6 明黄褐色粘土＋2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック少量混じり
51 10YR3/2 黒褐色細砂 土師器片含む
天正期 基壇構築土
52 2.5Y5/3 黄褐色シルト(地山)

図9 2区北壁断面図（1：50）

現代の盛土直下は大仏殿基壇構築土である。基壇構築土の厚さは最大0.6ｍを測る。この構築土には、平安時代後期から室町時代の土器類が含まれており、方広寺造営に際して周辺を削平しながら造成したことが窺える。今回調査地の東側で行われた2000年の調査では、大仏殿内に敷かれていた花崗岩製の磚敷が基壇上面で検出されていたが、今回の調査ではこれは存在しなかった。これによって、基壇が一定の削平を受けていることがわかる。基壇構築土の下層は室町時代の遺構面となる。室町時代の遺構は主として黒褐色砂泥を主とする土層から成立している。これより下が黒褐色粘質シルトの地山層となる。なお、地山面標高は１・２区西端では42.6ｍ前後、１・２区東端では大仏殿の遺構検出面が地山となっており43.0ｍ前後である。方広寺造営以前の旧地形が東から西へ下降していたことがわかる。

**安土桃山時代から江戸時代の遺構**

**壷地業１**（図10・12、図版33・34）　１区北西部で検出した。中央部が現代の攪乱を受けていたため、この壷地業１のみ遺構検出面から全体を約0.3ｍ掘り下げ検出作業を行った。東西4.0ｍ、南北4.0ｍを測り、平面形は正方形を呈する。掘形の北辺と西辺に沿って、長軸が0.3～0.6ｍの石列を検出している。石は加工の施されていない自然石で、チャートが多くを占め花崗岩も少数含まれる。この石列の内外では全体に礫面を検出している。礫の大きさは５～10㎝を測る。礫面の標高は42.5ｍ前後である。石列は掘形の東辺と南辺では検出していない。これは礫の検出状況と関連するとみられる。攪乱の影響が比較的浅い南東部では、高い位置で礫面を検出している。そのため検出面の下に石列が存在する可能性が高く、石列は掘形に沿って４周に並べられていると思われる。礫面は、後述する４区では一定の厚さを持っていることが確認されており、上方に据えられる礎石の沈下を防ぐためのものと考えられる。また、掘形の四周に沿って並べられる石列は、礎石などの加重により礫が横方向に移動することを防ぐためのものと考えられる。

**壷地業２**（図10、図版34）　１区南西部から２区北西部に渡って検出した。北西部と南東部は攪乱により失われているが、掘形の平面形は径６ｍを測る不正形な円形である。掘形の中央には礎石の抜き取り痕がある。抜き取り痕は南北2.8ｍ、東西4.9ｍを測り、深さは東側では0.4ｍ以上、西側に向かって浅くなっており、礎石は西方へ抜かれたことがわかる。

**壷地業３**（図11・12、図版33・34・37）　１区北東部で検出した。掘形は東西2.2ｍ、南北２ｍ以上を測り、平面形は方形を呈する。掘形の中央部には礎石の抜き取り痕跡がある。抜き取り痕跡内には、長軸が60㎝前後と長軸が30㎝前後を測る花崗岩の割り石を検出している。割り石は東西に３石あり、そのうちの中央の石には矢穴が残る（図13）。60㎝前後の割石は、2000年調査の１区でも壷地業の掘形に沿って検出されており、この割り石は礎石を直接受ける根石と考えられる。また、30㎝前後の割り石は根石を安定させるための石と思われる。いずれも礎石の抜き取りの際に元位置からは移動している。また、抜き取り跡からは小片のため図示していないが19世紀代の陶磁器類が出土している。抜き取り穴の周辺では東西・南北3.6ｍの範囲で礫面を検出した。礫の大きさは５～10㎝を測る。この礫面の検出高は42.8ｍ前後であり、壷地業１の礫面よりも0.3ｍ高い。壷地業４で後述するが、壷地業内では何層にも礫面が施されており、壷地業２で検出した礫面は、

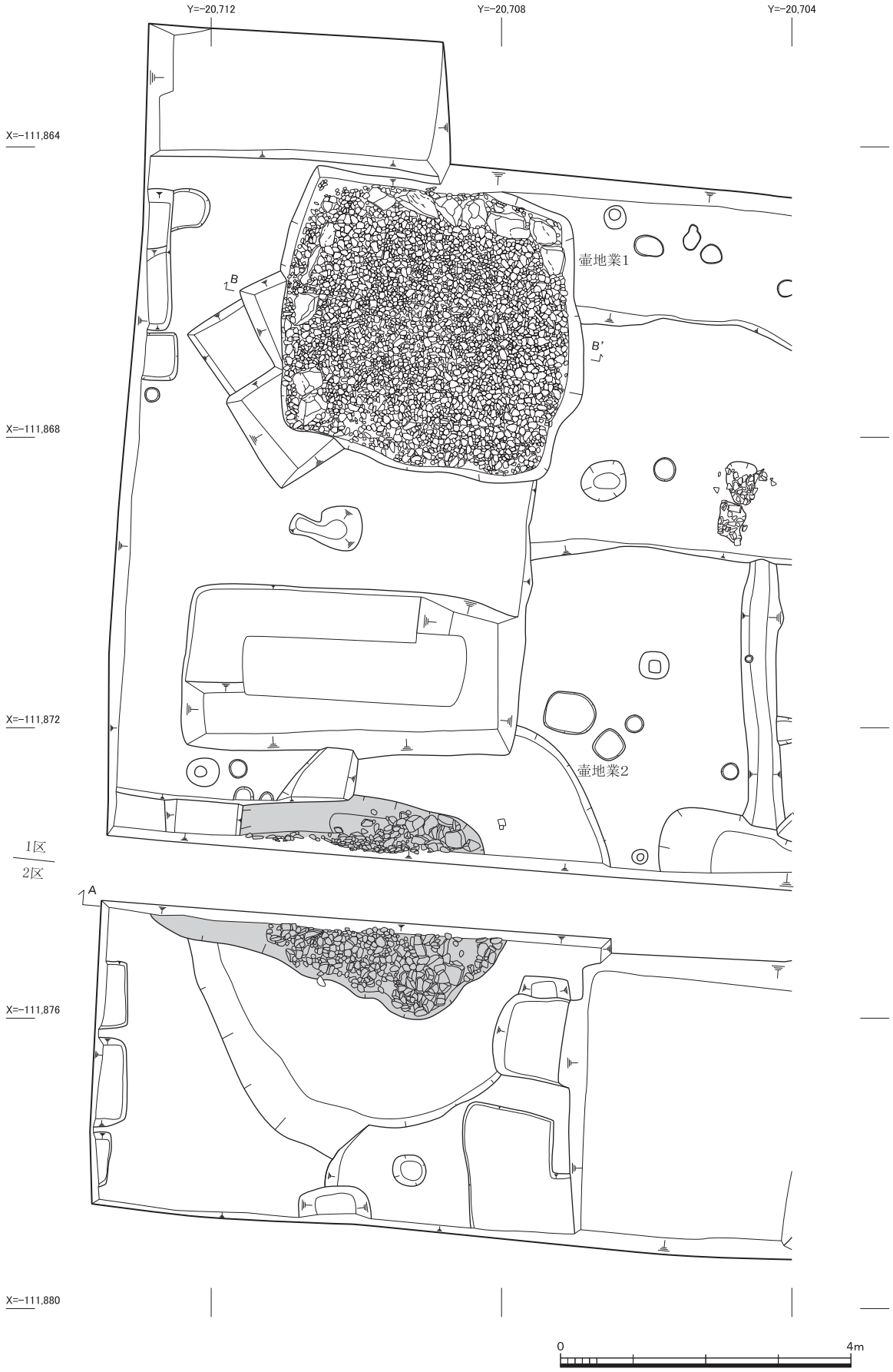



図10　1・2区西半平面図（1：80）

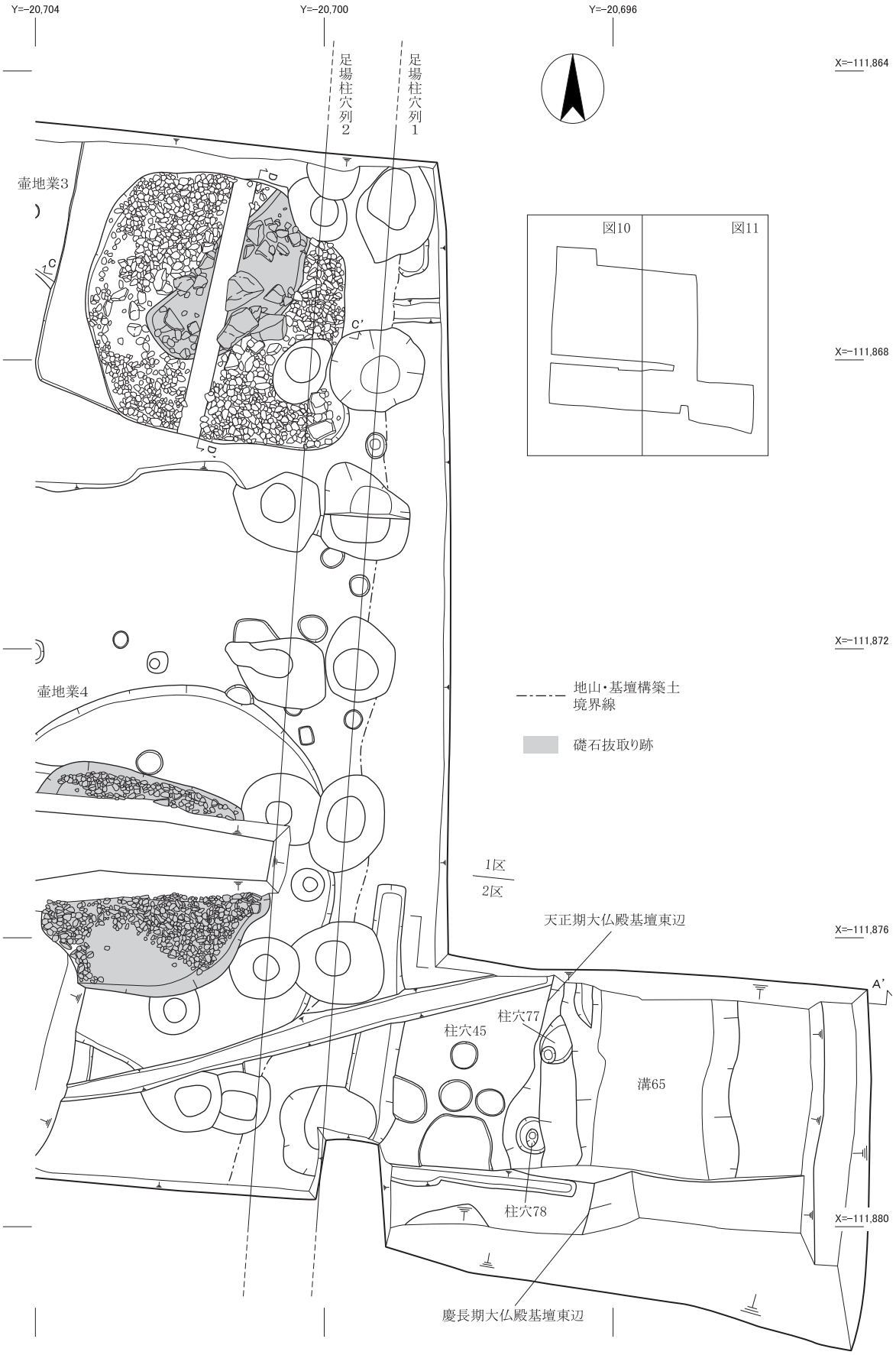
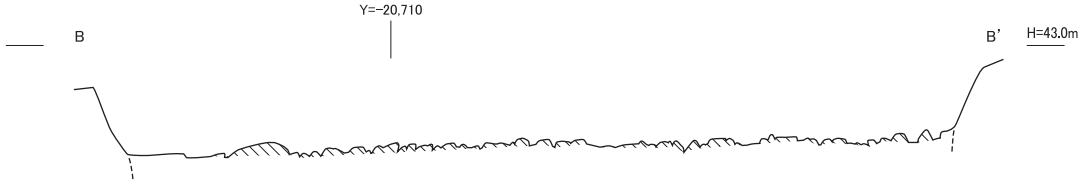
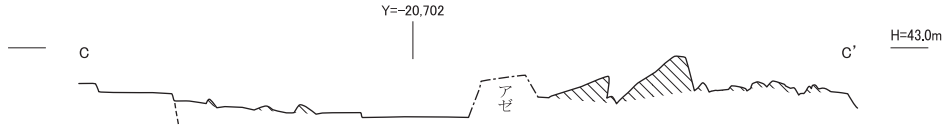



図11　１・２区東半平面図（１：80）

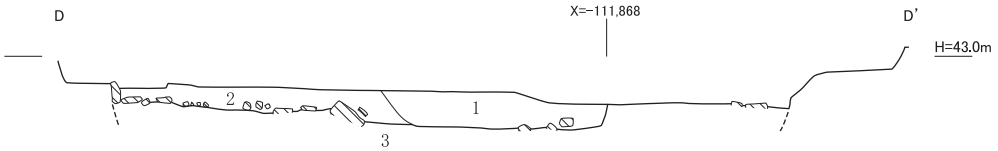
壷地業1東西断面図




壷地業3東西断面図




壷地業3南北断面図




1 2.5Y5/6 黄褐色粘土+2.5Y3/1 黒褐色シルトブロック(礎石抜取り穴)
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト+2.5Y5/6 黄褐色粘土ブロック混じり
3 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂 シルト混じり(礫面)

※断面ラインは図10・11を参照

図12　壷地業１・３断面図（１：40）

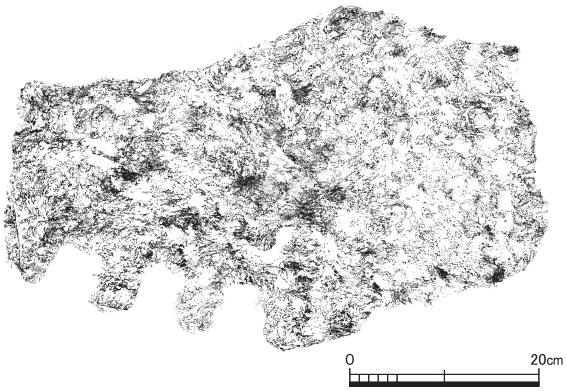



図13　壷地業３根石矢穴拓影（１：８）

壷地業１の礫面よりも工程としては後に施されたものであると思われる。

**壷地業４**（図11、図版34）　１区南東部から２区北東部に渡って検出した。南西部は攪乱により失われているが、掘形の平面形は径5.2ｍを測る不正形な円形である。南西部の攪乱付近を一部掘り下げ、掘形断面を確認したところ深さ1.1ｍを測る。今回調査で掘形の深さのわかる唯一つの壷地業である。掘形の中央には礎石の抜き取り痕がある。抜き取り痕は南北3.0ｍ、東西3.2ｍ西側を測り、深さは最大0.7ｍを測るが、西側に向かって浅くなっており、礎石は西方へ抜かれたことがわかる。抜き取り跡は、地業に使用されたと思われる礫によって埋め戻されていた。抜き取り穴の底面では壷地業に伴う礫面を検出した。礫の大きさは５～10㎝を測る。この礫面は厚さ約0.3ｍを測る礫層で、断面観察では更に下層にも厚さ0.3ｍの礫層の存在を確認した。

**溝65**　２区北東部で検出した、大仏殿基壇東辺の慶長期基壇化粧石の抜き取り痕跡である。溝

は幅1.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。

**基壇**（図版36）　２区北東部で天正期と慶長期２時期の大仏殿基壇東辺を検出した。いずれの時期も基壇化粧石は抜き取られている。

慶長期の基壇東辺は天正期の基壇化粧石を抜いた後、基壇構築土（図９－25～34層）を積み上げて基壇規模を拡張している。慶長期の構築土の最大幅は0.9ｍを測り、上層（図９－25層）、中層（図９－26～28層）、下層（図９－29～34層）の大きく３つに分かれる。上層は比較的精良な灰黄色砂泥、中層は焼土・焼瓦を多く含む黄褐色を主とする砂泥、下層は精良な黄灰色・黄褐色砂泥である。慶長期基壇構築土の上・中・下層を構成する個々の層位の層厚は、上層から下層にいくに従い薄くなる。溝65の最下層（図９－20層）付近に地覆石が設置されていたと思われる。

天正期の基壇東辺は地山の削り出し成形である。上述したように基壇の化粧石は抜き取られ、慶長期の基壇構築土で埋め戻されている。天正期地覆石の設置面と推定される部分（図９－34層下面）からの基壇の残存高は約1.3ｍを測り、慶長期の基壇地覆石の抜き取り跡である溝65底面からの基壇の残存高は約1.5ｍを測る。また、天正期地覆石の設置面推定部から慶長期地覆石抜取り跡までの東西距離は0.8～0.9ｍを測る。

**足場柱穴列１**（図14・15、図版35）　１区北西部から２区北西部で、南北方向に６間分を検出した。壷地業３・４の上面から掘り込まれている。柱間は約2.0ｍである。柱掘形の平面形は不整形な楕円形を呈し、径1.0～1.2ｍを測る。深さは、掘形底面まで掘り下げた柱穴５は0.9ｍ、柱穴６では1.2ｍを測る。方位は北に対して東へ約４度振れる。埋土からは大仏瓦の小片が出土するが、焼

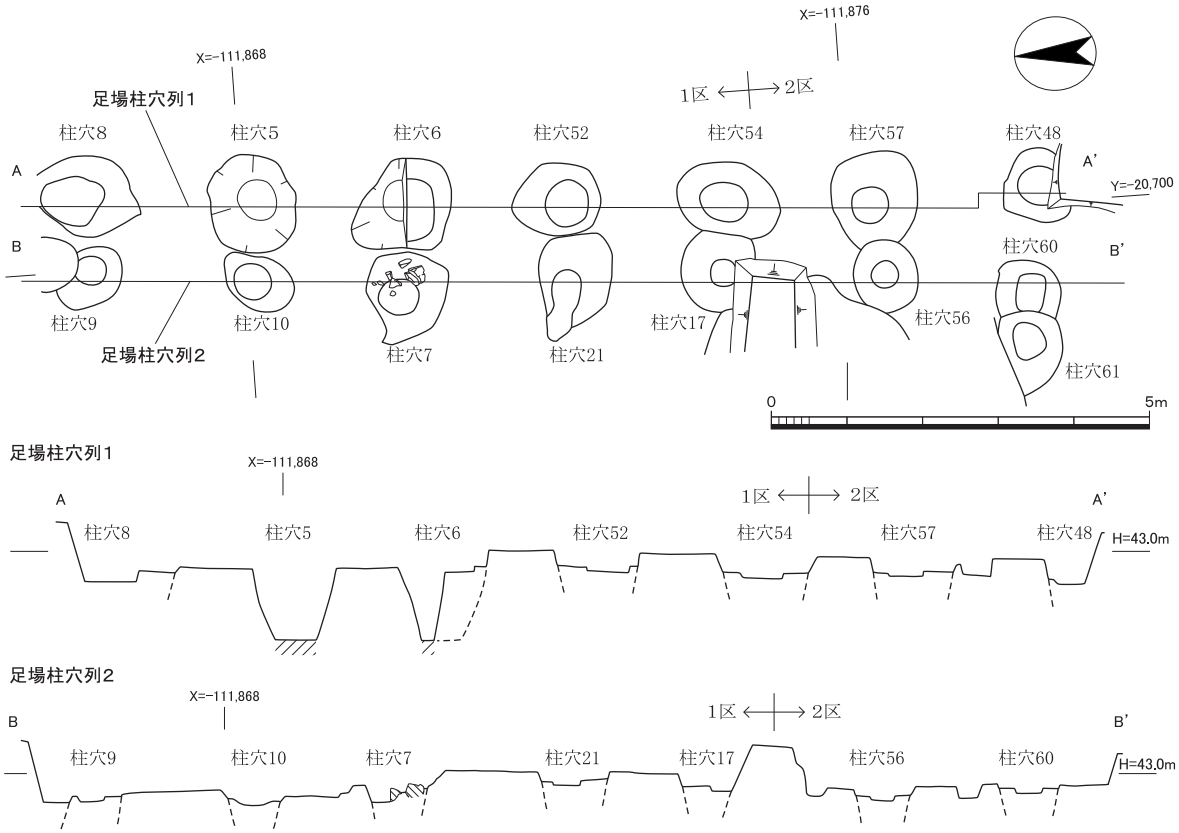
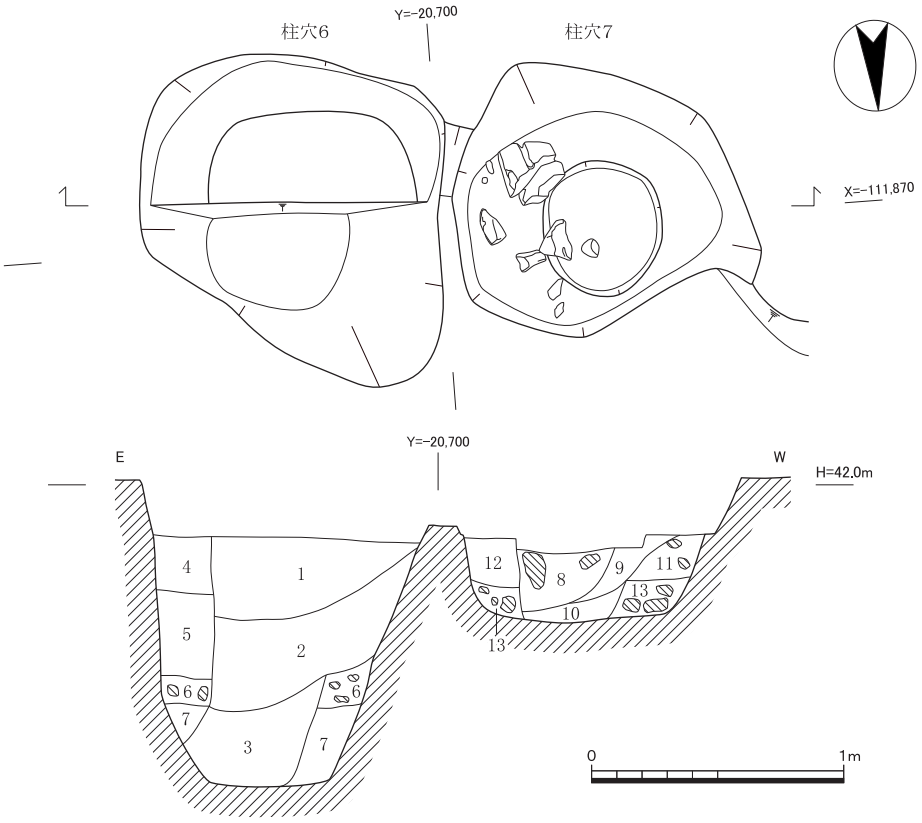



図14　足場柱穴列１・２実測図（１：100）




1 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト＋10YR7/8 黄橙色粘土ブロック＋10YR8/8 黄橙色細砂混じり 瓦片含む
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト＋10YR7/8 黄橙色粘土ブロック混じり 瓦片含む
3 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト＋10YR7/8 黄橙色粘土ブロック混じり φ3cm礫少量含む
4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト＋10YR7/8 黄橙色粘土ブロック＋10YR8/8 黄橙色細砂多量混じり
5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト＋10YR7/8 黄橙色粘土ブロック＋10YR8/8 黄橙色細砂混じり
6 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト＋10YR7/8 黄橙色粘土ブロック＋10YR8/8 黄橙色細砂混じり φ5cm礫含む
7 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト＋10YR7/8 黄橙色粘土ブロック混じり
8 10YR4/4 褐色シルト＋10YR3/2 黒褐色粘土ブロック混じり φ10～15cm礫含む
9 10YR4/4 褐色シルト＋10YR3/2 黒褐色粘土ブロック＋10YR4/4褐色細砂多量混じり
10 10YR4/4 褐色シルト＋10YR3/2 黒褐色粘土ブロック混じり
11 10YR4/2 にぶい黄褐色粘土 礫含む φ5cm礫含む
12 10YR5/6 黄褐色中砂＋10YR6/1 褐灰色シルトブロック少量混じり
13 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土＋10YR5/6 黄褐色粘土ブロック少量混じり φ5～10cm礫含む

図15 足場柱穴列柱穴６・７実測図（１：30）

土・炭は含まれない。

**足場柱穴列２**（図14・15、図版35） 足場柱穴列１に平行して西側で、南北方向に６間分を検出した。壷地業３・４の上面から掘りこまれている。柱間は足場柱穴列２と同じで約2.0ｍを測る。柱掘形の平面形は不整形な楕円形を呈し、径1.0～1.2ｍを測る。深さは、掘形底面まで掘り下げた柱穴７は0.6ｍを測り、足場柱穴列１の柱穴５・６よりも浅い。方位は北に対して東へ約４度振れる。埋土からは、足場柱穴列１同様に大仏瓦の小片が出土するが、焼土・炭は含まれない。

足場柱穴列１・２は、各々の柱穴が並列して存在すること、埋土が近似していることから同時並存したものと考えられる。掘削時期は壷地業３・４の構築後で、焼土や焼瓦が埋土に含まれない事から、慶長７年（1602）の火災以前の可能性が高い。検出位置は、大仏殿東側柱列の壷地業３・４と基壇の間に位置しており、主軸方位も方広寺の方位と一致する。以上のことから、足場柱穴列１・２は天正年間の大仏殿建設時の足場柱穴列と考えられる。柱掘形の深さが足場柱穴列２よりも足場柱穴列１のほうが深いことから、足場柱穴列２は足場柱穴列１の添え柱列で、２条の柱列は

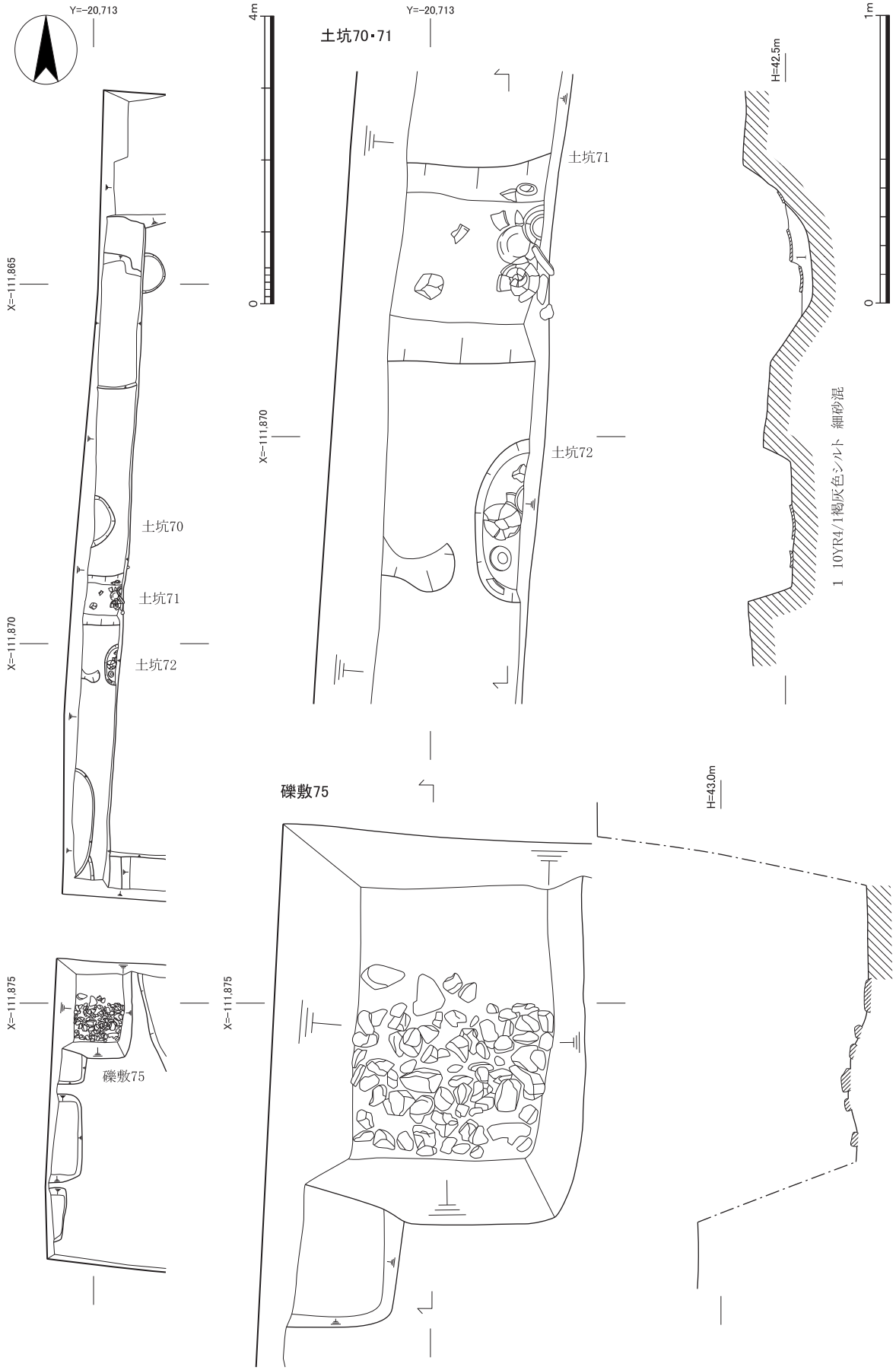



図16　1・2区西壁際平面図（1：80）、土坑71・72、礫敷75実測図（1：20）

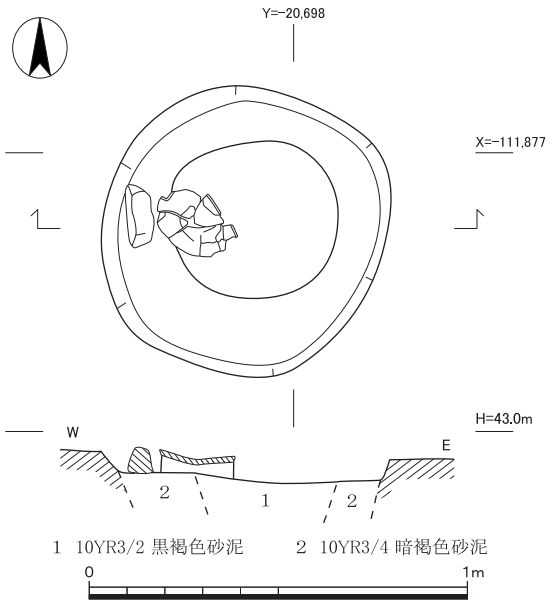


図17　柱穴45実測図（1：20）

１対で１つの足場として成立していたと考えられる。また、柱穴60の南側では同規模の柱穴61を検出しており、必要に応じて更に補助的な柱穴が設けられたものと思われる。

**柱穴77・78**　２区北東部、天正期の基壇東辺で検出した柱穴。径2.5ｍ、深さ0.2ｍを測り、平面形は円形を呈する。それぞれの柱穴からの掘形内からは、焼瓦の小片が出土している。慶長期の基壇構築土の下層で検出した。慶長年間の再建工事に伴う足場の柱穴の可能性がある。

**室町時代の遺構**

**柱穴45**（図17、図版37）　２区北東部の地山面で検出した柱穴。径0.75ｍ、深さ0.05ｍ以上を測り、平面形は円形を呈する。柱抜き取り痕跡からは土師器皿が出土した。

**土坑70**（図16）　１区西壁際で行った断ち割りによって検出した室町時代の土坑。南北0.8ｍ、東西0.2ｍ以上、深さ0.15ｍを測る。京都Ⅷ期の土師器皿の小片が出土している。

**土坑71**（図16、図版37）　１区西壁際で行った断ち割りによって検出した室町時代の土坑。東西0.5ｍ以上、南北0.7ｍ、深さ0.3ｍを測る。京都Ⅷ期の土師器皿が正位置で重なって出土した。

**土坑72**（図16、図版37）　１区西壁際で行った断ち割りによって検出した室町時代の土坑。東西0.15ｍ以上、南北0.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。京都Ⅷ期の土師器皿が正位置で重なって出土した。

**礫敷75**（図16、図版37）　２区西壁際で行った断ち割りによって検出した、方広寺造営以前と思われる礫敷。東西0.7ｍ以上、南北0.6ｍ以上を測る。礫の大きさは５～15㎝を測る。検出を部分的に留めており、遺物の出土もないことから、遺構の性格や年代については不明である。

## （２）３区（図18、図版36）

**大仏台座**　調査地西側の大仏殿跡緑地のフェンス設置工事の際に発見された花崗岩の巨石である。石の保護のためにフェンスのブロック製基礎が窓状に刳りぬかれている。石の大きさは長さ1.1ｍ以上、幅0.9ｍ以上、高さ0.6ｍ以上を測る。石は北西方向に続いている。石には加工の痕跡は認められない。石の南側では裏込の礫を検出した。2000年の調査では台座南辺が検出され、江戸時代の史料と併せて台座の規模が復元されており[10)]、この石は台座北東部を構成する１石とみられる。

## （３）４区（図19・20、図版36）

**基本層序**　調査区のほとんどが攪乱をうけており、層序は南壁でしか確認できなかった。盛土直下は東半が近代以降の盛土、西半が方広寺の遺構面となる。南壁西半は大仏殿基壇の位置にあたるが、大きく削平を受けており断面でも基壇の高まりはわずかしか確認できなかった。南壁中央の溝

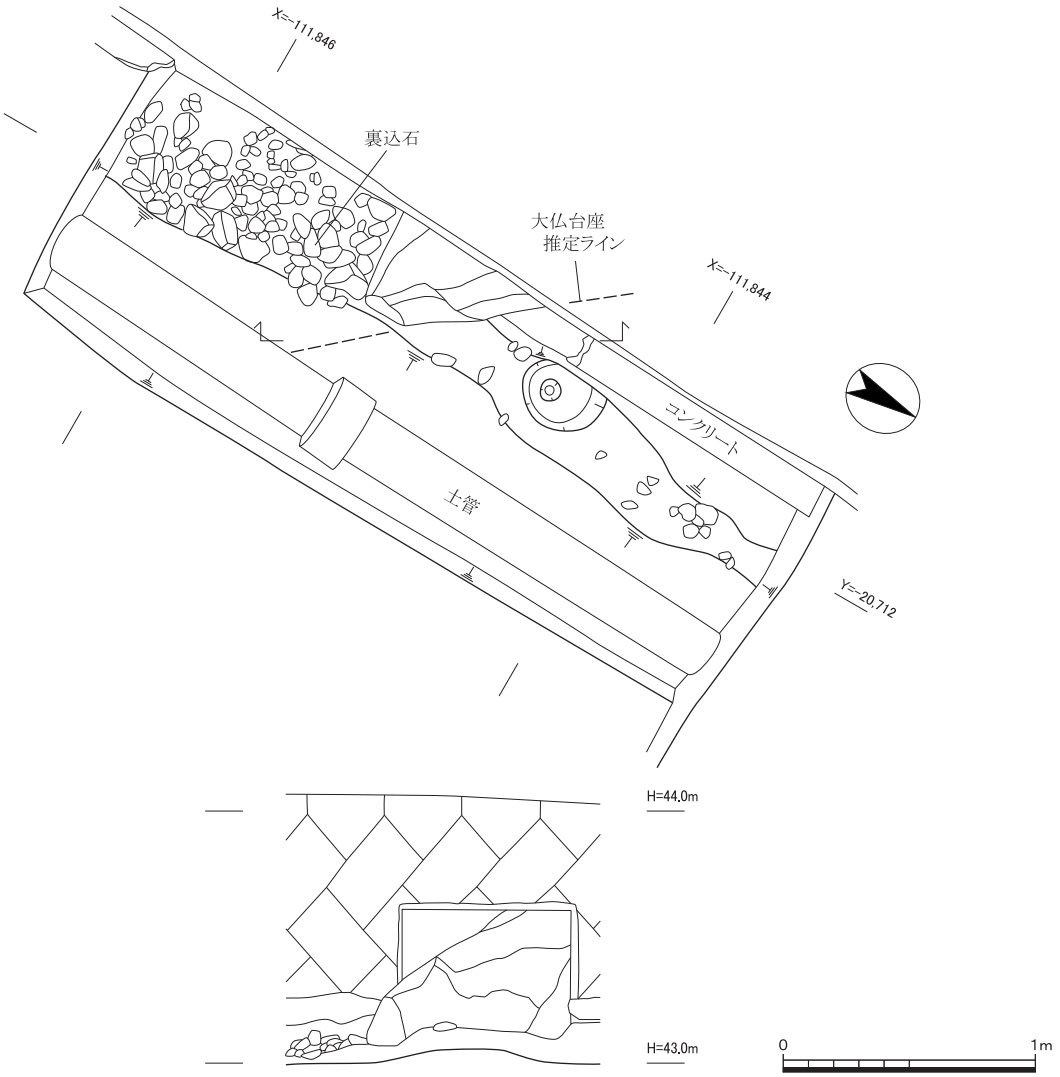
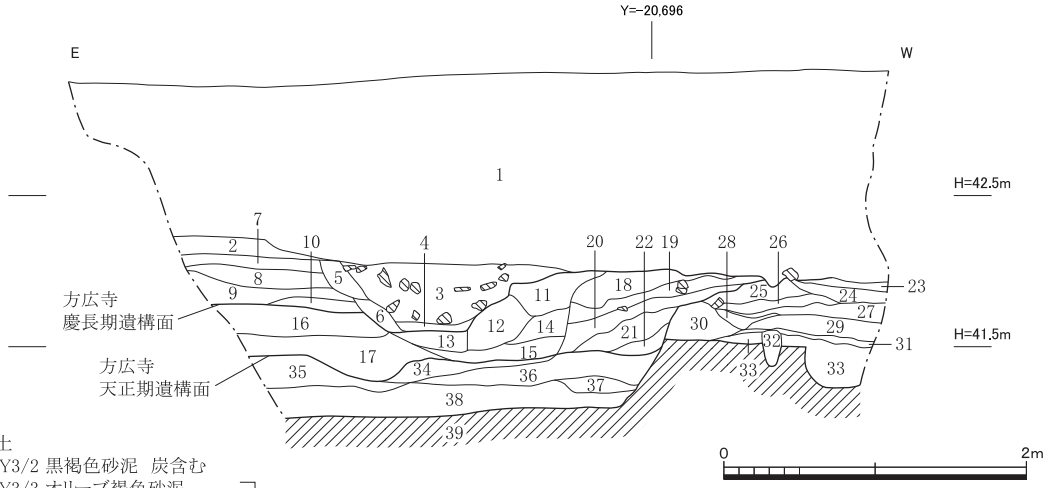



図18　３区実測図（１：30）

状の堆積は（図19－３～６層）、その検出位置から慶長期基壇化粧石の抜き取り痕跡とみられる。天正期の基壇化粧石の抜き取り痕とみられるものに（図19－18～22層）がある。４区南壁の位置は、天正期基壇の南外側に位置する可能性もあるが（図26）、堆積状況などからここでは天正期基壇化粧石の抜き取り痕跡とみておきたい。天正期の基壇方広寺造営に伴う整地土および基壇構築土の厚さは、天正期・慶長期を合わせて0.5～0.7ｍを測る。整地土および基壇構築土の下が地山となる。地山の検出高は、最も高い地点で41.5ｍである。４区から北へ約25ｍ離れた２区の南東部では、地山の標高は43.0ｍ前後である。調査地の旧地形が南へ向かって下がっていることがわかる。

**基壇地覆石根石**　４区東西中央で検出した。その検出位置と層位から基壇地覆石の根石とみられる。石は花崗岩の割り石で、大きさは５～25㎝を測る。石の東西は攪乱により失われているために周囲の状態は不明である。しかし南壁断面の状況と併せてみると、石は、慶長期の基壇化粧石抜取り跡の下層、化粧石掘形埋土（図９－13層）に含まれており、基壇地覆石の根石であることがわかる。




1 盛土
2 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭含む
3 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂泥
φ5～8cm礫多量含む
4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
5 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
6 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 中砂混じり
慶長期基壇化粧石抜取り痕
7 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
8 2.5Y5/4 黄褐色砂泥＋2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
9 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
10 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 炭少量含む
11 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 シルト少量混じり
12 10YR2/1 黒色砂泥 炭含む
＋2.5Y4/4オリーブ 褐色砂泥混じり
13 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 シルト混じり
花崗岩割石φ10～30cm含む
14 5Y4/2 灰オリーブ砂泥
15 5Y4/3 暗オリーブ砂泥
慶長期
基壇掘形埋土
16 10YR4/4 褐色砂泥
17 10YR6/8 明黄褐色粘質土 φ2～3cm礫少量含む
慶長期
整地土
18 2.5Y5/4 黄褐色砂泥
＋2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土ブロック混じり
19 2.5Y6/8 明黄褐色砂泥
20 5Y4/2 灰オリーブ砂泥
21 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
＋5Y6/4 オリーブ黄色シルトブロック混じり
22 2.5Y5/6 黄褐色砂泥
＋2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥混じり
天正期基壇化粧石の
抜取り痕
23 10YR5/6 黄褐色砂泥 固く締まる
24 10YR4/6 褐色砂泥
＋10YR3/4 暗褐色砂泥ブロック混じり
25 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥
26 10YR4/6 褐色砂泥
27 10YR5/8 黄褐色砂泥
＋10YR4/1 灰褐色粘質土少量混じり
28 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
29 2.5Y5/3 黄褐色泥砂 φ3～4cm礫少量含む
30 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
＋10YR4/4 褐色砂泥混じり
31 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥
32 10YR5/2 灰黄褐色砂泥(杭跡か)
33 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 φ2cm礫少量含む
天正期
基壇構築土
34 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
35 10YR4/6 褐色砂泥
36 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
37 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
38 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥＋10YR3/1黒褐色砂泥
＋10YR5/8 黄褐色粘質土ブロック多量混じり
天正期
整地土
39 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥(地山)

図19 4区南壁断面図（1：50）

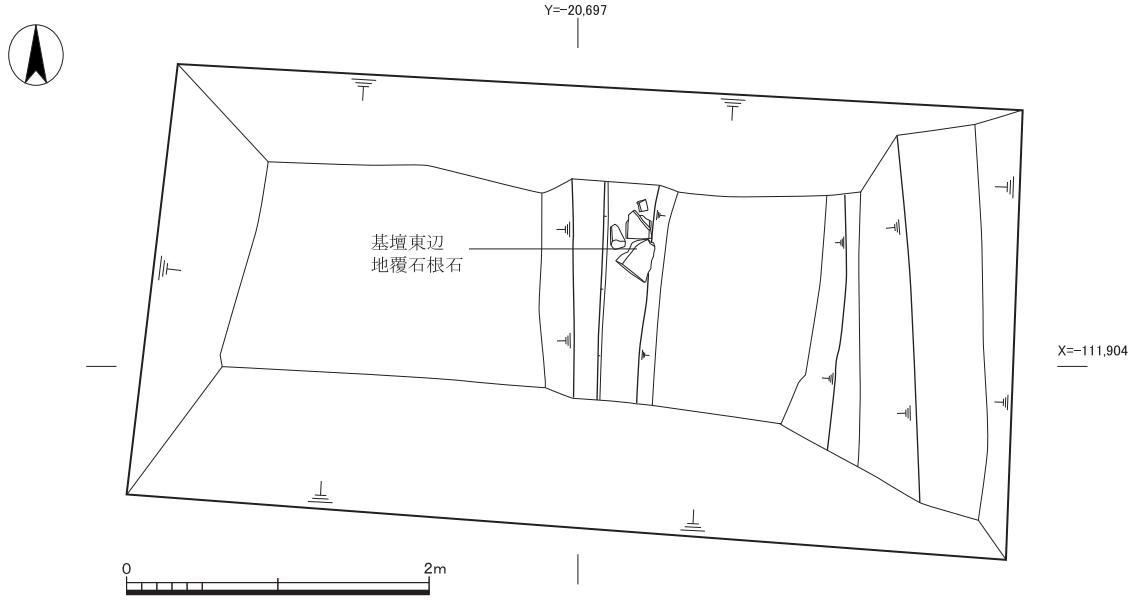



図20 4区平面図（1：50）

## 4．遺　　物

遺物は主に土器類と瓦類が出土している。土器類は時期的には、室町時代と江戸時代末から明治時代が多く、方広寺の時期のものはほとんど出土していない。瓦は方広寺所用瓦がほとんどである。なお、土師器皿の時期の表記は、平安京・京都Ⅰ期～ⅩⅣ期の編年案を準用する[11)]。

### （1）土器類（図21）

**土坑71**　1～23は1区の土坑71から出土した土師器皿である。土坑71からは土師器皿以外の遺物の出土はない。1～5は赤色系皿である。6～23は白色系皿である。6～17はヘソ皿。18～23は皿で、口径は11.0～13.0cmを測る。以上の土師器皿の時期は京都Ⅷ期古段階である。

**土坑72**　24～30は1区の土坑72から出土した土師器皿である。土坑72からも土師器皿以外の遺物の出土はない。24～30は白色系皿である。24～26はヘソ皿。27～30は皿で口径は11.4～12.0cmを測る。以上の土師器の時期は京都Ⅷ期古段階である。

**柱穴45**　31は柱穴45から出土した赤色系土師器皿である。口径は11.2cmを測る。時期は京都Ⅶ期である。

**基壇構築土**　32～35は1・2区の大仏殿基壇構築土から出土した土器である。ほとんどが基壇上面から出土したものであるが、35は2区の大仏殿基壇東辺の慶長期構築土（図9－25層）からの出土である。32は褐釉陶器の水注の注口部である。33は常滑焼の甕口縁部である。34は須恵器甕の口縁部である。35は信楽焼の擂鉢で、擂目は5条1単位である。以上、基壇構築土出土土器の時期は32～34が室町時代、35は17世紀初頭の江戸時代である。

**壷地業4礎石抜取り穴**　36～47は1・2区の壷地業4の礎石抜取り穴から出土した陶磁器類である。36～40は染付である。36は合子で、外面底部に「楽」の文字がある。37～39は椀である。40は皿で、内面に山水を素朴なタッチで描く。41～43は施釉陶器である。41は取手付の蓋で、外

表2　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 鎌倉時代 | 土師器 | | 土師器1点 | | |
| 室町時代 | 土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶器 | | 土師器30点、須恵器1点、焼締陶器1点、輸入陶器1点 | | |
| 安土桃山時代～江戸時代 | 染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦、銭貨 | | 染付5点、施釉陶器3点、陶器4点、焼締陶器1点、瓦9点、銭貨1点 | | |
| 明治時代以降 | 銭貨 | | | | |
| 合　計 | | 39箱 | 57点（2箱） | 0箱 | 37箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

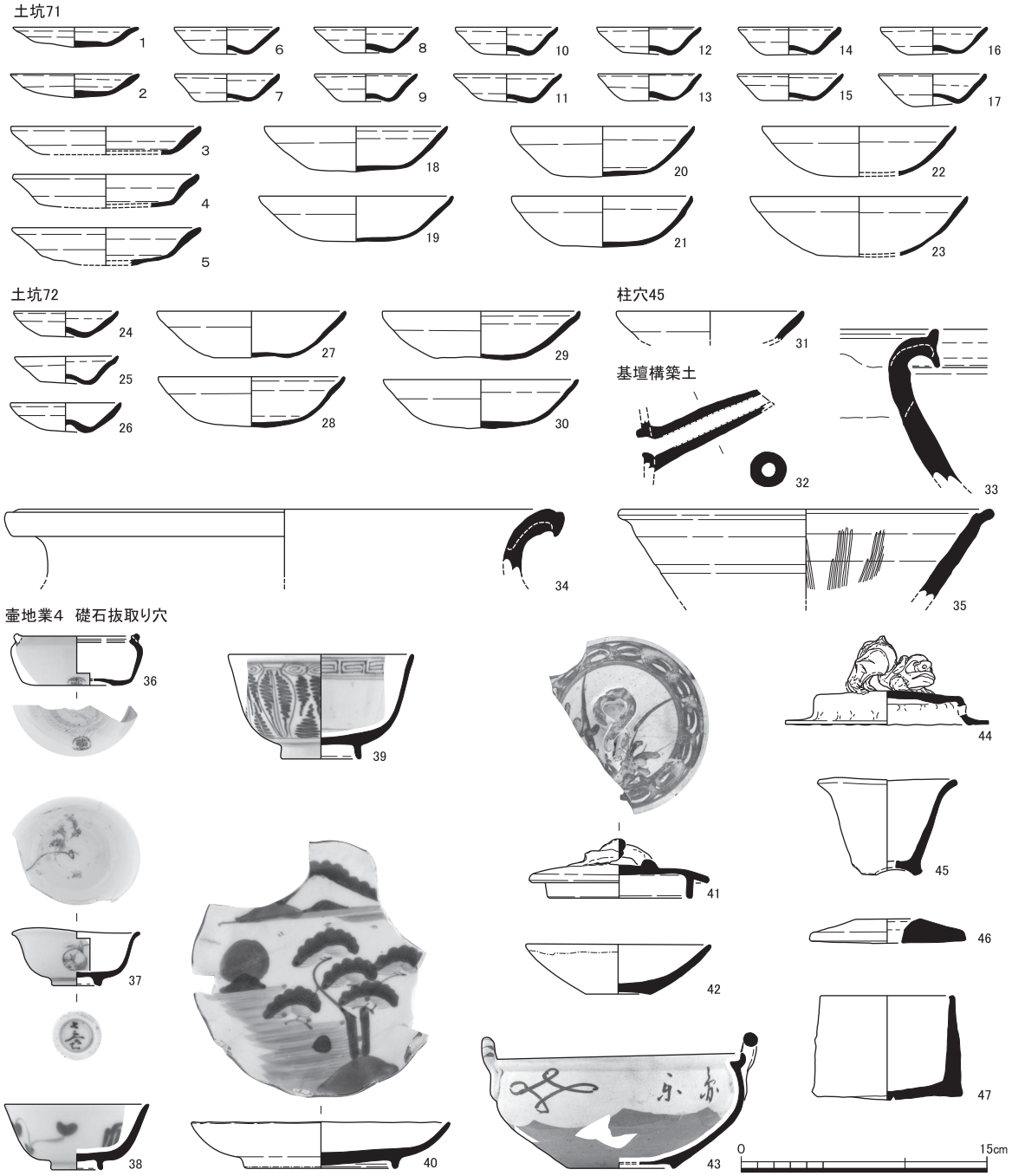



図21　出土土器実測図（1：4）

面天井部に草花文を描く。42はやや深めの皿で、内面と外面口縁部付近に緑釉を施釉する。43は土鍋である。44～47は陶器である。44は獅子形の取手の付く蓋。45は小型の植木鉢で底部は穿孔されている。46はサヤ鉢の蓋、47はサヤ鉢である。以上の壷地業４礎石抜取り穴から出土した陶磁器類の時期は、18世紀中ごろから後半も江戸時代末から明治時代の初頭である。

## （２）瓦類（図22・23）

瓦類は、図地した瓦類は２区の大仏殿基壇東側の近代以降の土層から出土した。瓦の多くに被熱痕跡が認められる。

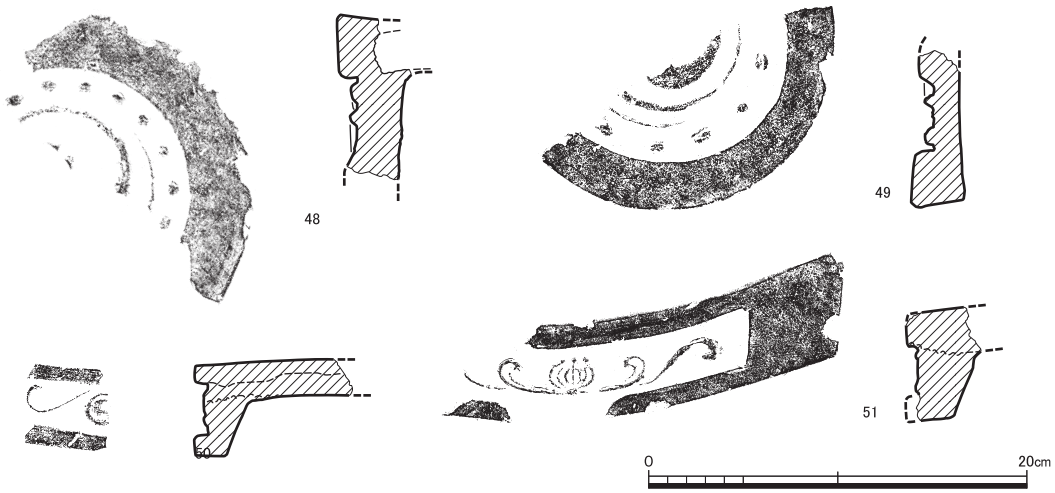



図22　瓦拓影・実測図（１：４）

48・49は大型巴文軒丸瓦。巴文は、右巻きで尾は離れる。珠文は、48が密であるのに対し49は疎らである。瓦当部成形は、瓦当部裏面上端で丸瓦に粘土を補足して接合する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、側面は縦ナデを施す。50・51は均整唐草文軒平瓦。中心に宝珠文を配置し唐草文が左右に展開する。瓦当部成形は粘土貼付けによる。瓦当周縁上端と下端は面取り、顎部凸面と裏面は横ナデを施す。

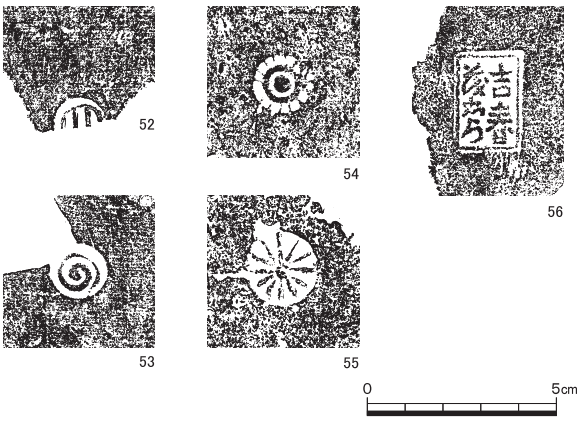



図23　丸瓦刻印拓影（１：２）

52～56は刻印瓦である。52～55は記号、56は「吉春藤□門」の文字である。刻印はすべて丸瓦の凸面に押印されている。

## （３）銭貨（図24）

銭貨はすべて１・２区の近代以降の土層から出土した。57は寛永通寶である。

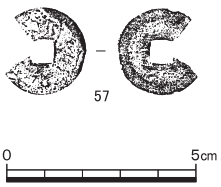



図24　銭貨拓影（１：２）

## 5．まとめ

今回の調査では、方広寺大仏殿に関連する遺構として基壇東辺、礎石据付壷地業、大仏台座などを検出した。大仏殿基壇は、2000年の調査で基壇南辺が慶長期に拡張されていることが確認されており、今回の調査でも基壇東辺が慶長期に拡張していることが明らかとなり、基壇の四辺が拡張されている可能性が高まった。方広寺大仏殿の指図などは江戸時代に作成されたものが数種残されているが、いずれも慶長期の再建後のものであり、今回の成果は、創建期の方広寺大仏殿を復元する上で貴重な成果となった。

方広寺の平面形態については、発掘調査成果・文献史料・絵図を総合的に検討して2010年に復元図（以下、［2010年復元図］とする。）が公表されている[12]。［2010年復元図］は次の３点を復元の前提条件としている。

１．方広寺の全施設はすべて同一の造営方位をしている。

２．造営方位は西面石塁の方位を基準とし、北に対して東へ４度13分52秒傾く。

３．大仏殿と回廊の基本平面プラン図は、発掘調査成果や現存石塁などと最も整合性が高い江戸時代の「大仏惣指図」（京都府総合資料館蔵）とする。

今回の調査成果と［2010年復元図］を合わせてみると、復元が妥当なものである事がわかる（図25）。２・４区の２箇所で大仏殿基壇東辺の基壇化粧石抜き取り痕跡を確認したことによって、2010年復元図で提示されていた造営方位が適正な事が証明された。以下では、この復元図を基に、今回の成果と問題点について述べる。

**大仏殿基壇について**　大仏殿基壇東辺は、慶長期の再建に際して天正期の基壇東辺に約0.9ｍの幅で土を積み足して、東側に拡張していることを確認した。2000年の調査は慶長期の基壇南辺地覆石とその約２ｍ背後で天正期の地覆石を検出している。慶長期の基壇東辺の拡張は、基壇化粧石の抜取り痕跡から１ｍ前後であったと思われる。この場合、基壇の拡張規模が正面と側面とで違いがあることになる。

慶長期に基壇規模が拡張されたのは、天正期と慶長期の建物デザインが変更された事に関連すると思われる。天正期と慶長期の大仏殿を復元した既往研究によれば[14]、天正期の大仏殿は、鎌倉時代の重源によって再建された大仏様の東大寺大仏殿をモデルとしている。この外観上の最も大きな特徴は、大仏殿の上下２重の屋根の内、上重の屋根（大屋根）の軒先が下重の屋根（腰屋根）の軒先よりも外側に出ることである。一方、慶長期の大仏殿は、上重の屋根は下重の屋根（裳階）よりも逓減して浅くなっている。大仏殿の屋根は、天正期と慶長期の上重と下重の軒の出の関係が逆転する。天正期の大仏殿は、側柱が上重の屋根まで通るため、長い柱材を用意する必要がある。慶長期の大仏殿では、用材確保の困難性から、側柱が下重の屋根（裳階）までで止まる屋根デザインに変更されたのであろう。慶長期の基壇の拡張は、この屋根デザイン変更により軒の出が大きくなったため、基壇規模を拡張した可能性がある。基壇の拡張規模が東西側（奥行）よりも南北側（横幅）の方が大きいのは、両側の裳階の軒の出を大きくすることで、大仏殿の西側正面からの見

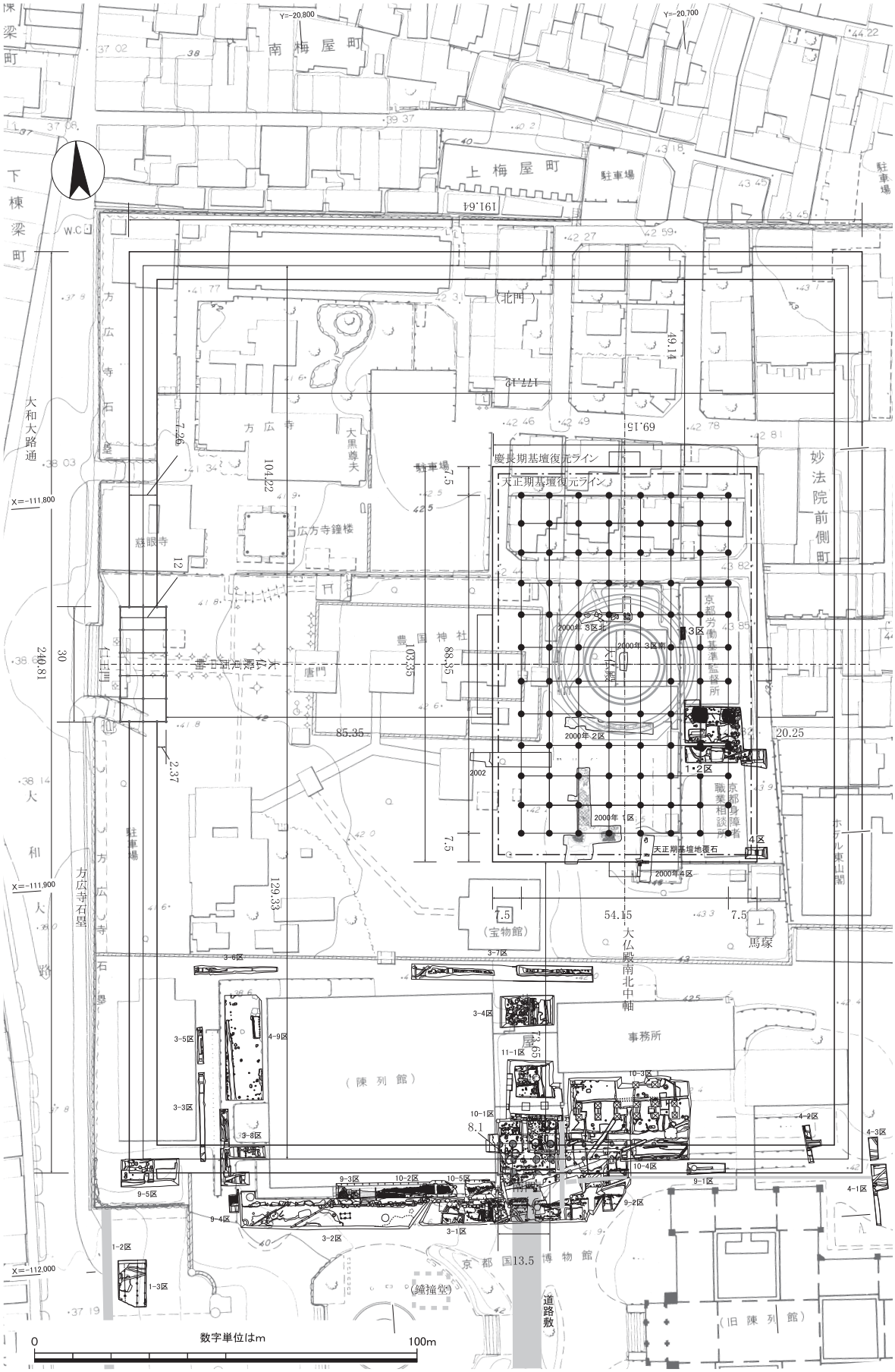



図25　方広寺復元図と遺構配置図（1：1,500）

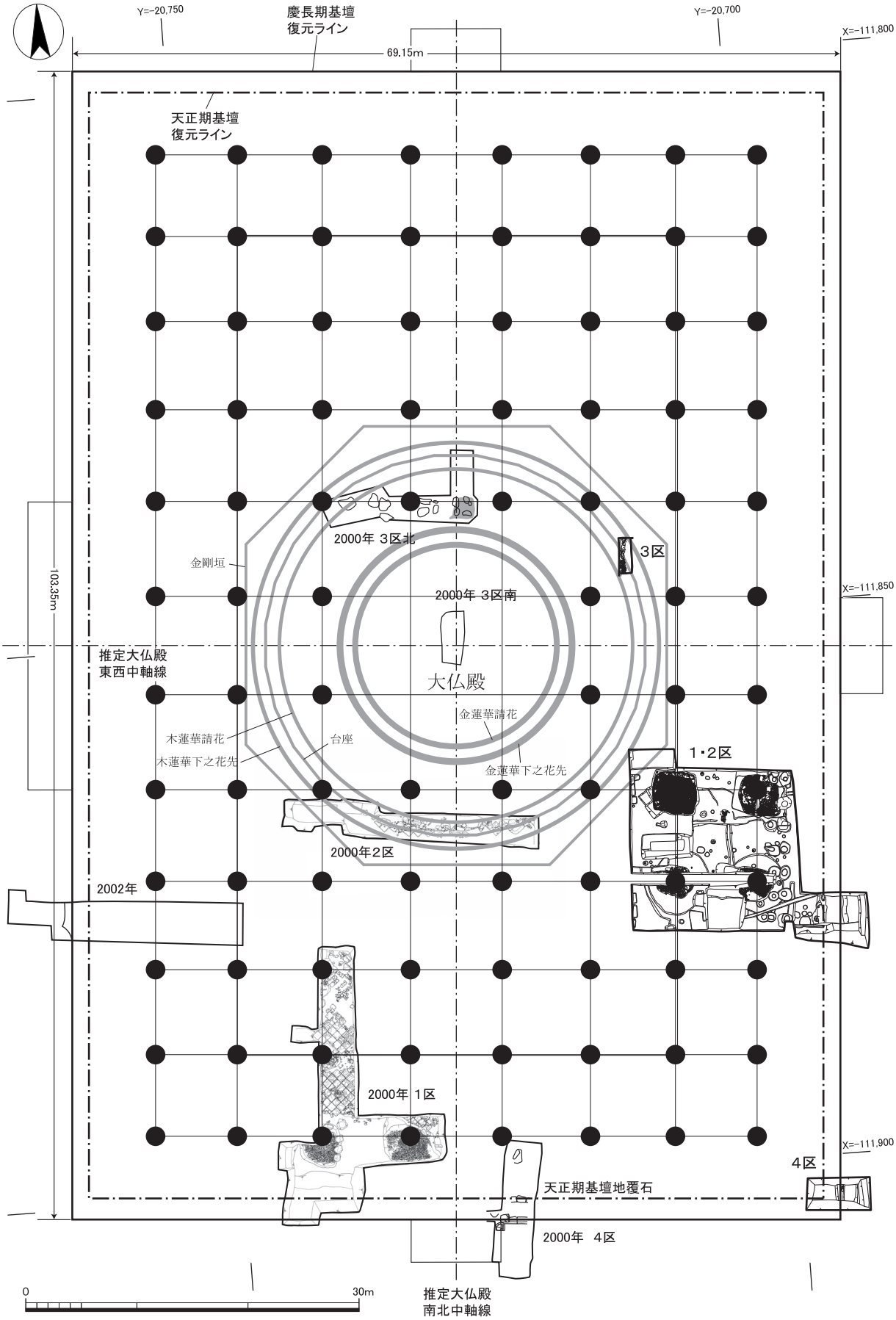



図26　大仏殿復元図（1：500）

栄えを良くするためである可能性が考えられる。今後、建築学的な検討も加え大仏殿の姿を復元していく必要があろう。

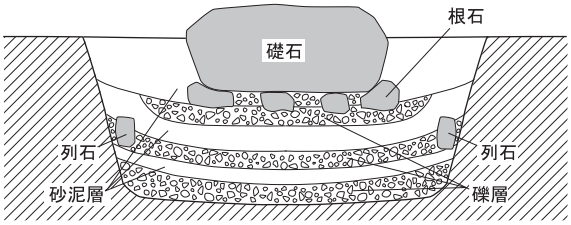


図27　壷地業断面模式図

普請に伴う足場穴は、天正期と考えられる足場柱穴列１・２を検出した。径１ｍの掘形を持ち、２条の柱列がセットとなって足場を組んでいたと考えらえられる。これによって構築される足場は、巨大な大仏殿の建設作業を支える大規模なものが想定される。また、慶長期の足場穴の可能性があるものに２区の柱穴77・78があるが、柱穴の規模が大きく異なっている。天正期の大仏殿は、上重の屋根が下重の屋根よりも大きく、側柱は上重の屋根まで通る柱であった。大規模な足場は、その上に滑車などを据え、長い側柱材を立てるための装置としても利用された可能性もある。[15)]

壷地業の構築方法（図27）　大仏殿の壷地業を４基検出した。壷地業は2000年の調査でも検出されていたが、基壇上面に石製磚が敷かれた状態で検出されたため、天正期と慶長期の掘り直しがあったか否かについては不明であった。今回の調査では、基壇上面が後世に削平を受けていたため、壷地業の平面形が明らかとなり、慶長期の掘り直しは存在しないことが確認でき、天正期と慶長期では礎石の位置に変動はないことが明らかとなった。

４基の壷地業の検出状況はそれぞれ若干異なっている。壷地業１は遺構面から0.5ｍ下で礫面、壷地業２・４は礎石抜取り穴と土、壷地業３は遺構面より少し下で礫面・根石と礎石抜取り穴である。また、掘形底面まで断面観察が行えたのは、攪乱によりその南西部が失われていた壷地業４のみである。以下では、それぞれの成果を合わせて壷地業の構築方法について述べる。

１．平面形は方形（壷地業１・３）または円形（壷地業２・４）で、大きさが４～６ｍ、深さが1.1ｍ以上の掘形を掘る。

掘形の深さは、壷地業４で検出面から1.1ｍを測るが、基壇上面はある程度の削平を受けており本来はこれよりも深い。2000年調査2区の壷地業の検出面標高は約43.7ｍ、今回の壷地業の検出面標高は約43.0ｍである。単純計算では約0.7ｍが削平されていることになり、壷地業掘形の本来の深さは約1.8ｍとなる。

２．掘形内を礫層と砂泥層を交互に埋めて行く。礫層は上中下の合計３層あり、厚さはそれぞれ0.3～0.5ｍを測る。

壷地業４の断面では、礎石抜き取りに際して上層礫は失われており、遺構面から0.4～0.7ｍ下の中層礫（図９－37層）と遺構面から0.7～1.1ｍ下の下層礫（図９－41層）しか存在しない。ただし、壷地業３では礎石抜取り穴の周辺に礫面が存在する。この礫面は遺構面とほぼ同じ高さで検出しており、掘形内での範囲も狭いことなどから、中層礫の上方に存在する別の礫層であることがわかる。壷地業１で検出した礫面は、遺構面から約0.5ｍ下にあることから、中層礫に相当すると考えられる。壷地業４の礎石抜取り穴の埋土に含まれる礫は（図９－11層）、この上層礫が礎石抜取り後に再び埋め戻されたものの可能性がある。

３．礫上層に根石、礎石を順に据え、さらにその周辺を土で埋め戻していく。

土木工法としての壷地業は古代から存在するが、このように大規模で入念な仕事は例をみない。施工に際しては、既存の技術を発展・応用した綿密な計画を窺う事ができる。[16)]

**方広寺・豊国神社境内の石材**（図28・29、表３） 大仏殿の礎石は、江戸時代の終わりから明治時代の初めに抜き取られていることが、今回の調査で確認された。これまでの調査でも礎石は検出していない。方広寺寺地の大部分が、政府に収公される頃に抜かれたものと思われる。ただし、現在の方広寺・豊国神社境内には、天正・慶長期の方広寺に使用されていたとみられる礎石などの石材が残されている。天正・慶長期の方広寺を復元する上で貴重な資料と思われるので以下に紹

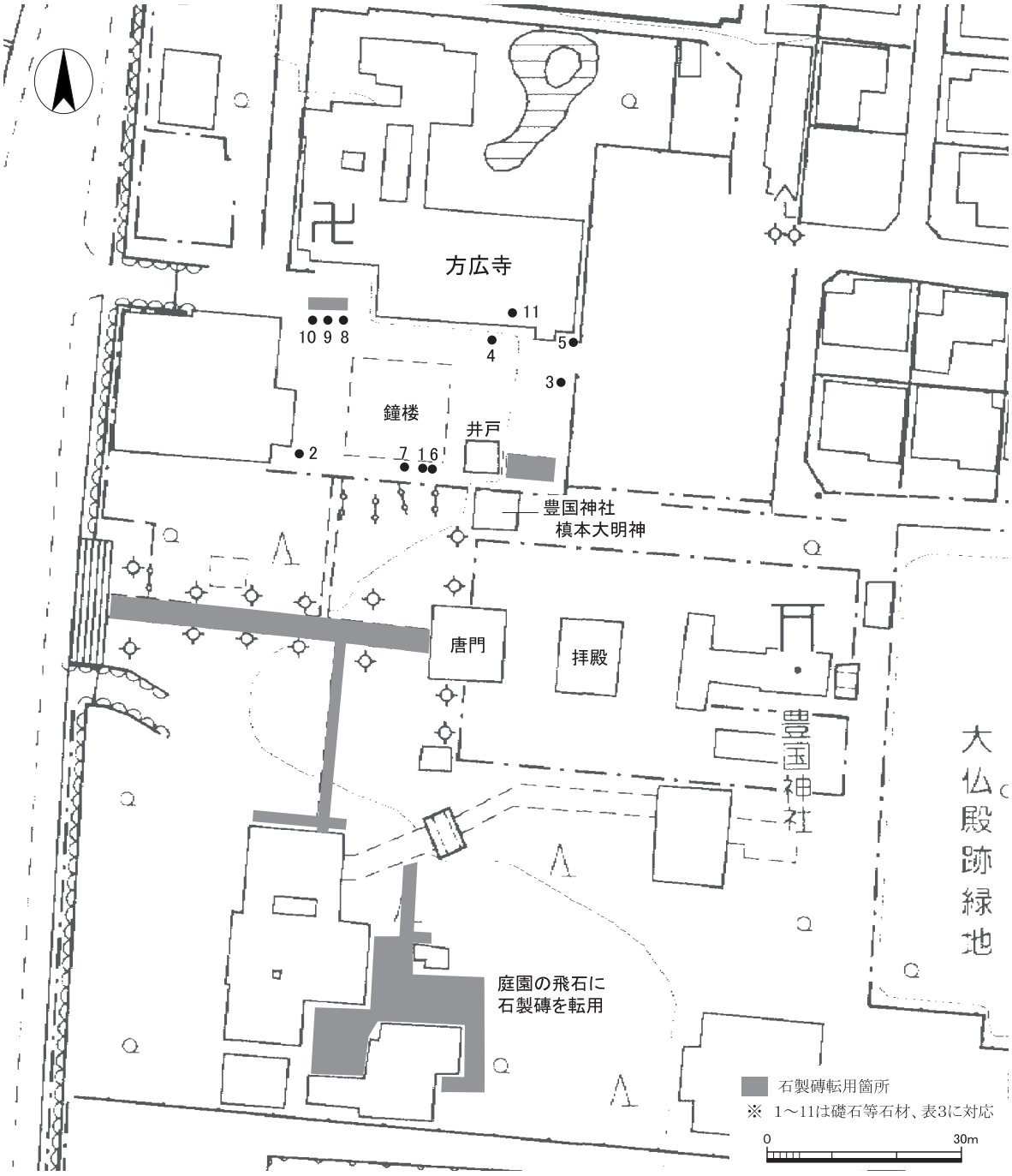



図28　方広寺・豊国神社境内石材分布図（１：1,000）

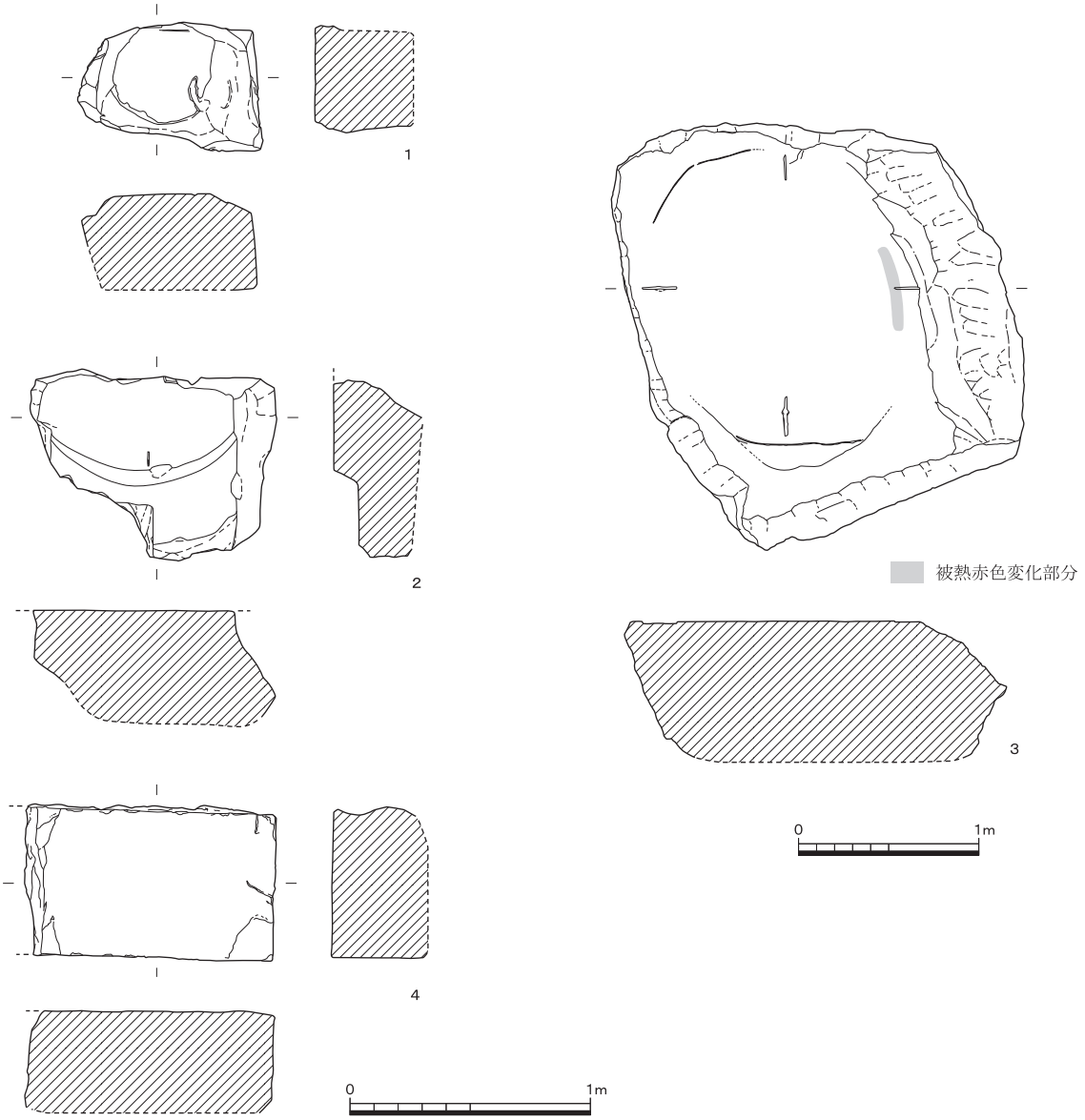



図29　方広寺境内礎石実測図（１：30、３のみ１：40）

介する。

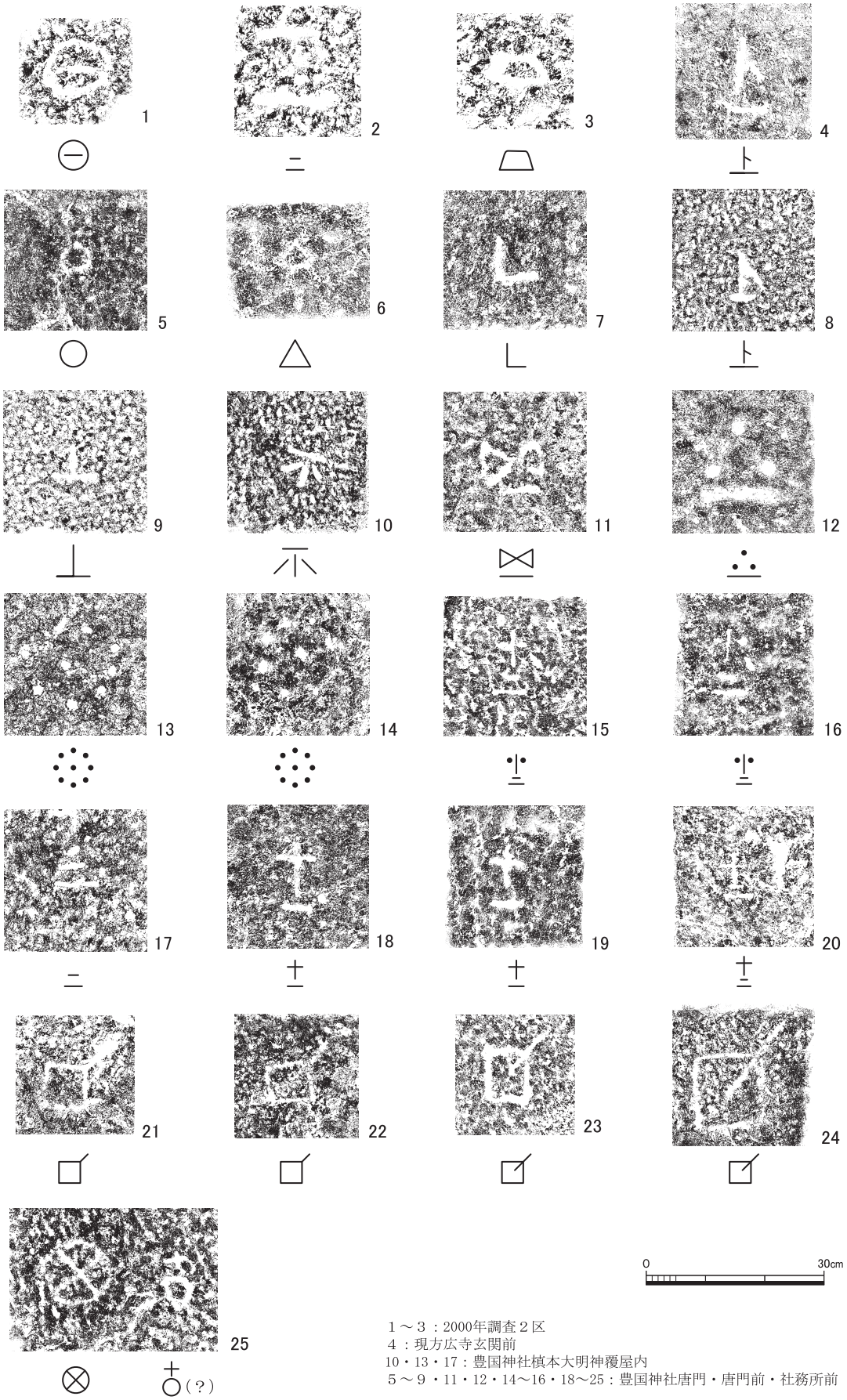
現在の方広寺境内には、９基の礎石と２基の基壇化粧石を確認する事ができる。礎石には、大きさの違いや、柱座の有無などで数種類に分けられる。図28の１～４は、これらの中で形態が良くわかるものを実測したものである。５～11については表３を参照されたい。

１は柱座を持たない小型の礎石である。大きさや形状から回廊の礎石と思われる。同規模の礎石は境内に複数のこされている。２は柱座を持つ中型の礎石である。柱座があり、やや大きい

表３　方広寺境内石材一覧表

| 番号 | 種類 | 縦(cm) | 横(cm) | 厚さ(cm) | 石材 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 回廊礎石 | 70 | 50 | (40) | 花崗岩 | |
| 2 | 礎石 | 75 | 100 | (40) | 花崗岩 | 柱座あり |
| 3 | 大仏殿礎石 | 240 | 175 | (80) | 花崗岩 | |
| 4 | 地覆石 | 60 | 100 | (40) | 花崗岩 | |
| 5 | 大仏殿礎石 | 170 | 210 | 80 | 花崗岩 | 半裁 |
| 6 | 回廊礎石 | 60 | 52 | 44 | 花崗岩 | |
| 7 | 回廊礎石 | 78 | 54 | 32 | 花崗岩 | |
| 8 | 回廊礎石 | 58 | 58 | 34 | 花崗岩 | |
| 9 | 礎石 | 60 | 20 | 30 | 花崗岩 | 柱座あり、半裁 |
| 10 | 回廊礎石 | 50 | 50 | 40 | 花崗岩 | |
| 11 | 羽目石か | 92 | 49 | 30 | 花崗岩 | |

（ ）数字は推定




1～3：2000年調査２区
4：現方広寺玄関前
10・13・17：豊国神社槙本大明神覆屋内
5～9・11・12・14～16・18～25：豊国神社唐門・唐門前・社務所前

図30　石製磚刻印拓影（1：10）

ことから回廊の門などの礎石の可能性がある。４は長方形の石材である。大きさや形状が2000年の調査で検出された慶長期の基壇地覆石に似ており、地覆石の破損したものと考えられる。３は大型の礎石で大仏殿の礎石と思われる。平滑な上面の４箇所に長さ約20㎝、幅約５㎜の溝が刻まれている。同様の溝は現在の東大寺大仏殿の礎石にも存在し、柱を据える際の位置を合わせるためのものとみられる。顕著な柱座は作られていないが、上面の周縁近くに低い高まりが曲線を描いている部分が認められ、柱座の可能性もある。これらの石材はいずれも花崗岩である。

大仏殿内に花崗岩の石製磚が敷かれていたことは、2000年の調査で確認されている。現在、方広寺・豊国神社境内参道などの敷石として多数が再利用されている。これらの石製磚は大きさに若干の大小はあるが、概ね一辺60㎝の方形で、厚さは15～20㎝を測る。石製磚には刻印が刻まれているものがある。2000年調査２区で確認した刻印のある石製磚は３点、現在方広寺・豊国神社で再利用されているものに22点あり、合わせて25点で、刻印の種類は20種となる。刻印には「○」などの記号、「十二」などの数字、「九曜星」などの家紋と思われるものがある。石製品の刻印としては、石垣に刻まれたものがよく知られており、大阪城など天下普請の城郭では各大名家の施工範囲を表すものと考えられている。天正期の方広寺の造営でも、各大名家に材木や人夫などを負担させており、天下普請の石垣の刻印と同様の可能性もあり、石製磚を作成した石工の納品の印とも考えられる。これらの石製磚が天正期のものか、豊臣家単独で行った慶長期のものか、あるいは両時期のものが含まれているのかは不明であり、今後の検討が必要である[17)]。

今回の調査によって、史料に既往の発掘調査成果を反映させ作成された［2010年復元図］の精度が高いことが証明された。ただし、大仏殿の基壇規模については確定したわけではない。2002年の調査で検出されている基壇西辺推定ライン付近で検出された南北溝は、その位置から基壇に関連する溝であると考えられるが、推定基壇西辺ラインよりもやや西へずれる。今後の発掘調査によって、大仏殿基壇の南階段や東階段などの規模が確定し、より正確な方広寺大仏殿の基壇規模が明らかになることを期待したい。

註

１）　発見の経緯については京都市文化財保護課　馬瀬智光・堀　大輔の両氏から御教示を得た。

２）　河内将芳『秀吉の大仏造立』 法蔵館　2008年。同書には方広寺大仏殿の造営過程やその意義について述べられている。

３）　平岡定海「方廣寺の成立とその性格」『大手前女子大学論集』第二十号1986年

４）　八賀　晋『史跡方広寺石塁修復工事報告』 京都国立博物館　1982年

５）　京都国立博物館構内の発掘調査報告書は、以下の３冊がある。

(a) １～10次調査：山本雅和・網　伸也・田中利津子『京都国立博物館構内発掘調査報告書　－法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23集　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009年

(b) 11次調査：網　伸也・長宗繁一『法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所

調査報告第2009－８　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年

(c) 12次調査：高橋　潔『法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第2010－10　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年

6）　近藤知子・田中利津子「方広寺大仏殿跡」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

7）　田中利津子「方広寺大仏殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成14年度　京都市文化市民局　2005年

8）　吉崎　伸「法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡（06ＲＴ409）」『京都市内遺跡立会調査報告』平成18年度　京都市文化市民局　2007年

9）　網　伸也「法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡（09ＲＴ100）」『京都市内遺跡詳細調査分布報告』平成21年度　京都市文化市民局　2010年

10）　註５（ｂ）に同じ。

11）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

12）　註５（a）に同じ。

13）　［2010年復元図］については作成者の長宗繁一氏よりご教示を受けた。作成に際しては以下の指図類が参考にされている。

(a)「大仏惣指図」『中井家旧蔵絵図』［３］京都府総合資料館中井家文書517東大寺（方広寺）大仏殿指図万治年間（1658～1661）貼絵図14

(b)「京大仏」 監修太田博太郎　校注内藤　晶『注釈　愚子見記』 井上書院　1988年

(c)「洛陽大仏殿」 国立歴史民俗博物館『古図に見る日本建築』 至文堂　1989年

14）　内藤　晶・中村利則「ミヤコの変貌－聚楽第と大仏殿－」『近世風俗図譜　第九巻　祭礼（二）』小学館 1982年　天正期の大仏殿の姿を伝える史料は少ないが、『匠明』、『文禄二年十月十四日　大仏殿後造営目録』や慶長９年（1604）の秀吉７回忌の様子を描いた『豊国祭礼図』がある。

15）　『愚子見記』には、高さ約50ｍの高層建造物である大仏殿は、資材の引き上げ作業や立柱などに、巨大な土山を築きその上に滑車を据えて行ったことが記されている。土山の位置は大仏殿建設予定地の中央付近と考えられるが、建物の外郭となる側柱の立ち上げには、土山の上の滑車は機能しなかった可能性がある。足場穴の機能については、京都造形大学教授の中村利則氏から御教示を受けた。

16）　大仏殿の造営は、豊臣政権下で多くの寺社の建造物の建設に携わった高野山僧の木食応其が指揮している。

17）　礎石の実測および石製磚の拓本の採取に際しては、方広寺の木ノ下寂俊氏、豊国神社の大島大直氏からご配慮を得た。豊国神社の茶室庭園の石製磚にも複数の刻印が存在する事を確認しているが、今回の報告には豊国神社の茶室庭園の石敷は含まれていない。また、大島氏によると、妙法院の境内にも石製磚は再利用されており、今回紹介したものとは異なる刻印が存在するとのことである。

# Ⅸ　山科本願寺跡・左義長町遺跡

## 1．調査経過

今回の調査は宅地造成に伴う国庫補助事業として行った山科本願寺跡19次調査である。調査地は、山科本願寺跡の内寺内を囲っていた土塁推定地の南西角付近に位置する。敷地周辺に土塁や濠跡は現存しないが、絵図や地形などから推定されている土塁位置の西側で、1984年の下水道工事に伴って行われた立会調査の際に室町時代の南北方向の濠跡が確認されている。今夏の調査地はその東側に当たる。また、調査地を含む北側一帯には、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡である左義長町遺跡が広がっており、竪穴建物や土坑などの遺構が発見されている。

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調

図１　調査区位置図（１：2,500）

図２　調査前全景（北東から）

図３　作業風景（南東から）

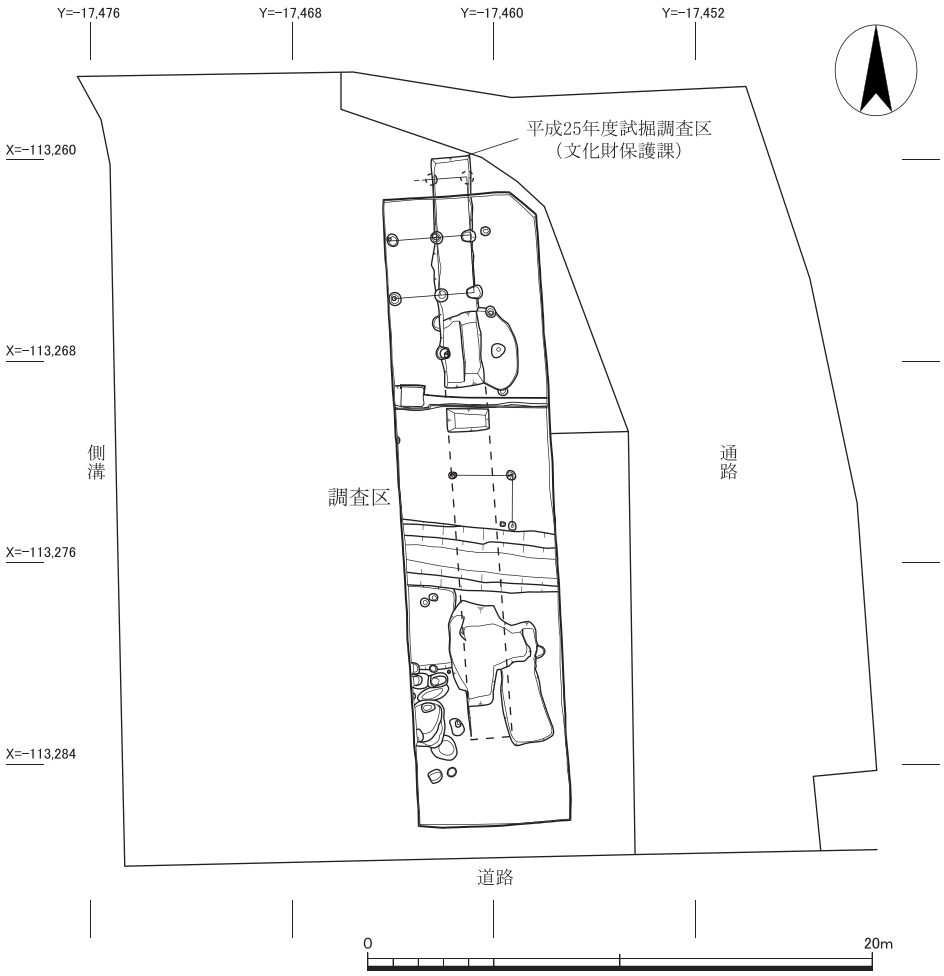



図４　調査区配置図（１：300）

査を実施したところ、建物跡および溝とみられる遺構が検出され、時期は不明ながらも遺構が良好に遺存していることが判明した。このため、文化財保護課の指導により、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、平成25年10月28日から11月25日まで調査を実施した。

調査区は敷地の中央東寄りに、東西６ｍ、南北25ｍを設定した。通路を確保するために、計画した調査区北東角の掘削を行わなかったため、調査面積は149.5㎡である。調査はアスファルト舗装の撤去作業を行ったのち、重機掘削を行った。調査の結果、平安時代前期末から中期初頭の流路

跡、平安時代中期末の建物跡や溝、土坑群などを検出し、平安時代の集落跡が広がっていることが明らかとなった。実測図および写真による記録作成ののち、調査を終了した。重機による埋め戻しを行い、調査区北半のアスファルト舗装を復旧して撤収した。

## 2．遺　　跡

### （1）立地と歴史的環境

山科盆地は三方を山に囲まれ、扇状地中央に南流する河川を有する点で、京都盆地と似た地形である。盆地中央を流れる四ノ宮川、音羽川は、安祥寺川と合流して山科川となり、北東から南西向きの流れを南へと変える。山科川は、盆地が狭くなる勧修寺で盆地西端を流れる旧安祥寺川とさらに合流し、木幡で宇治川へ、そして淀川へと流れ込む。盆地の大部分は扇状地で、北東から南西へと緩やかな勾配で下がっていく。山科本願寺跡は扇状地上の高燥な場所に立地しているが、調査地の西側から川田一帯は、低湿地帯となっている。一方で、河川堆積物である砂礫層の保水力の無さは、水を必要とする水田には不向きな土地であったことを示している。明治時代中期作製（1880～1890年代）の仮製図や大正時代初期作製（1910年前後）の正式図[1)]を確認したところ、南北に通る西野道から西側は水田、同東側から安祥寺川や山科川の間は竹林や樹木が茂り、茶畑・果樹園が営まれている。旧地図からは、山科本願寺跡地は水田としては使われておらず、西側一帯の水田地利用とは対照をなしていたことがわかる。

山科の歴史は旧石器時代から始まり、縄文時代以降は安朱遺跡や大宅遺跡などで集落が営まれた。山科盆地最大の集落跡として中臣遺跡がある。この遺跡は河川に挟まれた台地上の好立地であったことから、その後も拠点となって室町期まで生活が営まれ続けた。古墳時代になると、盆地中央に後期古墳、北端の山裾に須恵器窯が造られ、奈良時代になると大宅廃寺などの古代寺院が盆地縁辺部に造営された。平安時代の遺跡は前段階から続くところが多いが、盆地の広さからみると相対的に遺跡数は少ない。中世以降は、鎌倉時代の安朱遺跡、室町時代の山科本願寺が遺跡として、四手井城跡は文献上で確認されている[2)]。

中世に「東野」と「西野」と呼ばれる調査地周辺の土地は、古くは「野村」と呼ばれていたという[3)]。平安時代末期に後白河法皇が山科新御所を営んだことに端を発し、荘園支配の本所は院となった。鎌倉時代に入って、のちに山科家を名乗る冷泉教成に伝領され、山科小野庄となる。山科家はこれを理由に山科一帯の領家的立場を主張するも、南北朝に至って醍醐寺三宝院が当庄内の一部に地頭職を得た。この出来事以降、山科家の山科小野東庄と、醍醐寺領有の野村・西山を中心とする山科小野西庄とに分かれる。小野西庄の権益が山科家に回復したのは、山科本願寺が築かれたのちの文明18年（1495）になってからである。元来、山科の地は山科七郷と呼ばれる農民集団が、自治的に運営する土地であった。一般的な農民として耕作に従事するとともに、領主であった山科家が朝廷と密接であったため、朝廷警護に京の町へ繰り出す武装農民でもあったとされる。この山科

七郷の一つ野村の地を本願寺に提供したのも、上層農民であった海老名五郎左衛門（法名：浄乗）とされている。彼は後に山科本願寺跡地西側に西宗寺を建立した。このように、複雑な地権と自治的意識の高い土地柄、そして一向宗門徒の増加した山科は、陸・水運の便利性も加わって、山科本願寺造立の候補地となり、選定されたと考えられる。山科の中でも、特に西野東側の土地は耕作地とならないところであったことも、山科本願寺が造営された一因と考えることができる。

山科本願寺は、山科郷野村に文明10年（1478）、本願寺八世宗祖の蓮如上人によって造営が開始された浄土真宗の寺院である。文明15年（1483）までには、主要な堂塔が完成していたとされる。寺内は本堂など主要伽藍のある「御本寺」、宗主一族や有力坊主衆が居住していたとされる「内寺内」、門徒やその家族が住まう「外寺内」の３つの郭から構成されていた。各郭は自然地形や河川を利用して、土塁や濠が築かれており、防御性を兼ね備えた寺内町に造り上げられていった。本願寺の経済基盤を支える町として発展していった内寺内の繁栄振りについては、当時の公家の日記に「荘厳さながら仏国のごとし」と記述されている[4)]。しかし、52年後の天文元年（1532）８月に、管領細川晴元が率いる法華宗や近江守護職六角定頼の連合軍によって総攻撃され、寺内町は焼失した。その後、本願寺は大坂で移転を繰り返し、最終的に京都七条の地へ落ち着く。天正14年（1586）に豊臣秀吉により、山科本願寺跡地20石を寄付され、寺領が回復した。慶長年間（1596～1614）に堂舎を建築しようとしたが、すでに農民の芝地としての利用が進み生活に支障を来たすという理由の訴えを受けて、帰還することを諦めたという。

本願寺は、江戸時代の間も山科本願寺跡地を所有し続けていたが、明治２年（1868）に西野村の人々が「古屋敷」と呼ばれていた御本寺跡地の開墾を願い出て、初めて耕作地となったとされる。このように、山科本願寺跡地は長い間手付かずであったが、一方でその周辺の中世から近世の皇室や氏族、寺院の領有が続いた地域は、東海道などの街道沿い以外は京の近郊農業地となった。戦後の経済発展に伴って開発が急速に進み、現在は水田の多くが宅地化している。

## （２）周辺の調査

調査地周辺では、発掘・試掘・立会調査を含めて多くの成果が上がっている（図１・５、表１・２）。今回の調査地が含まれる左義長町遺跡と山科本願寺跡の主要な調査成果を分けて述べる。

左義長町遺跡の範囲内で行われた調査は11例あり、その大半は立会調査である。最大の成果は、町名をとって遺跡の範囲指定を行う契機となった1984年に行われた下水道工事に伴う立会調査（図５－７）である。山科本願寺期の遺構の下層で、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構が遺存していることを確認した。竪穴建物や土坑が検出され、畿内第Ⅴ様式から庄内式土器併行期の土器が出土している。この調査によって、部分的に古い時期の遺跡が残っており、調査の対象として意識されるようになった。図１－11地点では、古墳時代とみられる土師器片が出土した。また、図１－10のNo.10地点では、黄褐色砂泥の地山相当層を切り込む時期不明の流路の東肩が検出されている。

山科本願寺の遺構は、今回の調査地北側一帯と国道１号線北側一帯で行った発掘調査でまと

まって検出されている。図５－13～17では、遺存していた土塁と御本寺南西角付近の様子が明らかとなった。特に13地点（以下図５参照）では、土塁の基底部や濠、内部に焼締陶器甕が据えられた建物跡、溝、井戸などが検出され、建物跡と濠が近接していたことから、土塁が築かれていない部分があり、出入口である可能性が考えられた。この部分の濠幅12ｍ、深さ４ｍ（西濠では幅５ｍ、深さ1.5ｍ）と規模が大きいのは、土塁の代わりに濠で防御性を高めるためと考えられている。また、天文法華の乱に相当する時期の焼土層が確認されており、その時に焼けたことが判明した。また、土塁が鉤型に遺存していた14地点では、南西への落ち込み部分を埋め立てた整地層（２時期分）や、土塁の構造（砂礫と粘土層を交互に積む）が判明し、南と西で築造方法が異なることも明らかとなった。その他、倉庫と見られる建物跡、炉跡、石組井戸、溝、暗渠を検出し、銅製品や鉄製品が多数出土したことから、御本寺内にも貯蔵施設や生産に関わる遺構の存在が明らかとなった。15地点では、暗渠や土塁の続きと、焼失後に濠が溜池（オチリ池）として改修されたことが分かっている。24地点では、御本寺南端を限る落込みが確認された。17地点では、御本寺内の堀が短期間に何度も造り直されて、最終的には埋めて建物が立てられたという変遷が追えた調査となった。これは、御本寺に内寺内を取り込んでいった様子をあらわしていると考えられている。

数年前まで最も良く土塁が残っていた国道１号線北側の近年の調査（図５－３・19～23・27～29）では、この辺り一帯が御本寺の中枢部であったことが明らかとなっている。27・28地点では、御本寺の西を限る土塁の構造が判明し、土塁基底部は幅約8.5ｍ、濠は幅10～11ｍと推定されてい

表１　左義長町遺跡周辺調査一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 調査方法 | 調査機関 | 調査年度 | 主な遺構 | 備考 | 文　献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 山科本願寺跡 | 立会 | 市埋文 | Ｓ60 | 検出できず。 | — | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』1986年 |
| 2 | 山科本願寺跡 | 立会 | 市埋文 | Ｓ56 | 盛土のみ。 | — | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和56年度』1982年 |
| 3 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市保護課 | Ｈ８ | GL-0.5ｍで焼土および中世～近世の土器・瓦を含む整地層。 | No.64 | 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成８年度』1997年 |
| 4 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市埋文 | H10 | GL-0.68ｍまで耕作土。 | RT196 | 『京都市内遺跡立会調査報告 平成10年度』1999年 |
| 5 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 試掘 | 市保護課 | H18 | 敷地中央より東側で、山科本願寺跡の溝・柱穴などを検出。発掘調査に移行。 | 05S640 | 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』2007年 |
| 6 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市埋文 | Ｈ２ | GL-0.78ｍ、室町の土坑。 | — | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成２年度』1991年 |
| 7 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市埋文 | H10 | GL-0.3ｍ以下、暗褐色粘土の地山。 | RT313 | 『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』1999年 |
| 8 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市埋文 | H22 | GL-0.75ｍ、時期不明の包含層（土師器）。 | RT195 | 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』2011年 |
| 9 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市埋文 | Ｈ８ | GL-0.3ｍで中世の包含層（土師器、陶器）。<br>GL-0.44ｍで東西方向の溝（時期不明）を検出。<br>GL-0.7ｍ以下、暗褐色砂泥の無遺物層。 | RT222 | 『京都市内遺跡立会調査概報 平成８年度』1997年 |
| 10 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市埋文 | Ｈ９ | No.10：GL-0.7ｍで黄褐色砂泥の地山を切って流路の東肩を検出。 | RT402 | 『京都市内遺跡立会調査報告 平成10年度』1999年 |
| 11 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市埋文 | Ｈ９ | GL-0.68ｍで東西溝、古墳らしき土師器出土。 | RT228 | 『京都市内遺跡立会調査概報 平成９年度』1998年 |
| 12 | 山科本願寺跡・左義長町遺跡 | 立会 | 市埋文 | H23 | GL-0.82ｍまで現代盛土。 | RT125 | 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』2012年 |
| 13 | 山科本願寺跡 | 立会 | 市埋文 | H19 | No.１：BM-1.24ｍで褐色砂泥を検出。<br>遺構、遺物は検出できず。 | RT073 | 『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』2008年 |
| 14 | 山科本願寺跡 | 試掘 | 市保護課 | H18 | GL-1.6ｍ以下、河川の氾濫堆積を検出。<br>外堀や土塁の端部は確認できず。 | 06S464 | 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』2007年 |

※ 調査機関の「市埋文」は財団法人京都市埋蔵文化財研究所、「市保護課」は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課。
備考の記号は調査No.である。

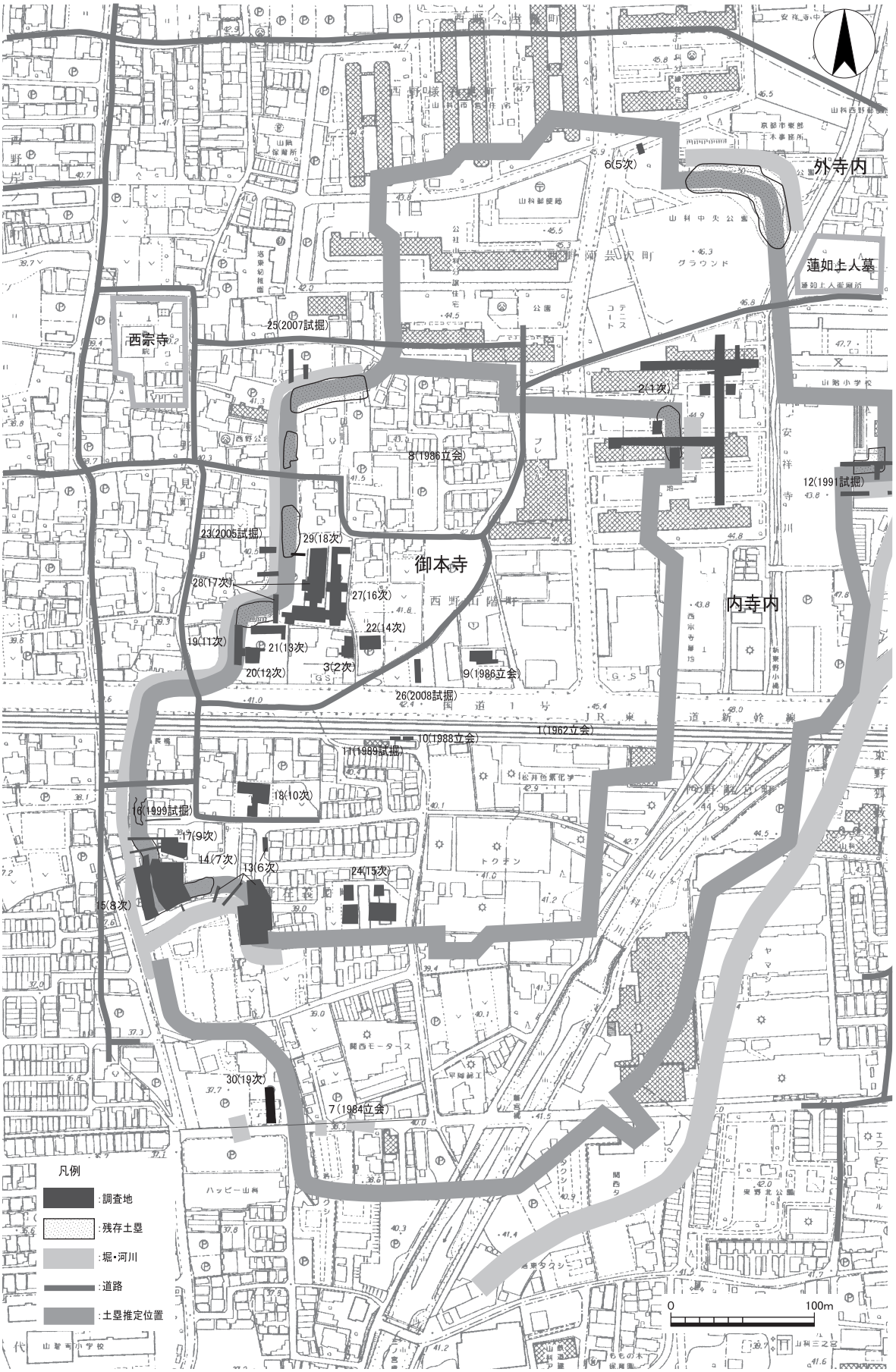



図５　山科本願寺跡主要周辺調査位置図（１：4,000）

表２　山科本願寺跡主要周辺調査一覧表

| No. | 調査名・次数 | 所在地：山科区 | 調査期間 | 方法 | 概　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 新幹線立会 | 西野左義長町・山階町・離宮町 | 1962.8.9～11.11 | 立会 | 南北方向の石組溝、暗渠、南北方向の土塁 | 1 |
| 2 | 山科寺内町遺跡第1次 | 西野阿芸沢町・山階町・離宮町 | 1973.5.21～8.4 | 発掘 | 建物・鍛冶場、石垣、柵、南北方向の堀・土塁 | 2 |
| 3 | 山科寺内町遺跡第2次 | 西野山階町 | 1974.10.9.～11.3 | 発掘 | 石組溝、石室、庭園の一部 | 2 |
| 4 | 76RT-YG001第3次 | 西野今屋敷町９（安祥寺中学校） | 1976.11.17～11.30 | 発掘 | 旧耕土 | 3 |
| 5 | 76RT-YG002第4次 | 西野大手洗町20（山階小学校） | 1977.2.14～3.5 | 発掘 | 整地層 | 4 |
| 6 | 76RT-JN001第5次 | 西野阿芸沢町（山科中央公園） | 1978.10.30～11.13 | 発掘 | 撹乱 | 5 |
| 7 | 83RT-SW061 | 西野左義長町・東野舞台町ほか | 1984.3.6～11.17 | 立会 | 東西および南北方向の堀、土坑群 | 6 |
| 8 | 85RT-SW054 | 西野大手洗町・今屋敷町ほか | 1986.4.1.～1987.5.16 | 立会 | 南北方向の堀と土塁、土坑 | 7 |
| 9 | 86BB-RT010 | 西野山階町12 | 1987.1.27～1.30 | 立会 | 東西方向の石組溝 | 8 |
| 10 | 88BB-RT005 | 西野山階町29 | 1988.5.30～6.2 | 立会 | 東西方向の石組溝 | 9 |
| 11 | 89BB-RT021 | 西野山階町29 | 1989.10.2～10.14 | 試掘 | 東西方向の石組溝 | 10 |
| 12 | 91RT-AH001 | 西野大手洗町20（山階小学校） | 1991.8.2～10.18 | 試掘 | 土塁と堀の屈曲部 | 11 |
| 13 | 96RT-HG001第6次 | 西野左義長町16ほか | 1997.4.20～7.10 | 発掘 | 東西および南北方向の堀、東西方向の土塁、暗渠、建物、井戸 | 12 |
| 14 | 97RT-HG002第7次 | 西野左義長町23 | 1997.7.16～9.18 | 発掘 | 鉤型に曲がる土塁と堀、建物、井戸、鍛冶場 | 13 |
| 15 | 98RT-HG003第8次 | 西野左義長町23-1、23-4 | 1998.8.17～11.9 | 発掘 | 南北方向の堀と土塁、暗渠 | 14 |
| 16 | センターNo.60 | 西野左義長町19-1ほか | 1999.10.28 | 試掘 | 南北方向の土塁を測量 | 15 |
| 17 | 00RT-HG004第9次 | 西野左義長町19-1ほか | 2000.5.10～6.30 | 発掘 | 建物、溝、暗渠、土塁基底部 | 16 |
| 18 | 04RT-HG006第10次 | 西野左義長町13-2 | 2005.1.17～3.18 | 発掘 | 東西および南北方向の堀、塀、柵 | 17 |
| 19 | 04RT-HG007第11次 | 西野山階町30 | 2005.3.1～3.15 | 発掘 | 土塁基底部の構築状況を調査 | 17 |
| 20 | 05RT-HG008第12次 | 西野山階町30 | 2005.5.11～5.25 | 発掘 | 土塁内側斜面と暗渠を検出 | 18 |
| 21 | 05RT-HG009第13次 | 西野山階町30 | 2005.5.30～7.2 | 発掘 | 土塁屈曲部、泉状遺構、炉、土取穴、暗渠を検出 | 17 |
| 22 | 05RT-HG010第14次 | 西野山階町28-5、28-6 | 2005.11.11～12.16 | 発掘 | 焼成土坑、庭園遺構、柱列を検出<br>多量の輸入陶磁器、ガラス玉出土 | 17 |
| 23 | 05S208 | 西野広見町31-1ほか | 2005.9.20 | 試掘 | 御本寺西側を限る堀の西肩口を検出 | 19 |
| 24 | 第15次 | 西野左義長町25-4ほか | 2006.7.31～9.15 | 発掘 | 御本寺南側を限る堀状の落ち込み、土坑、井戸、溝、柱穴を検出 | 20 |
| 25 | 07S274、275 | 西野広見町5-7、5-10 | 2007.9.25 | 試掘 | 御本寺北側を限る堀の北肩を検出 | 21 |
| 26 | 08S103 | 西野山階町11-5ほか | 2008.9.1 | 試掘 | GL-0.4mで整地層を確認 | 22 |
| 27 | 10RT-HG012第16次 | 西野山階町30-1ほか | 2011.1.11～3.11 | 発掘 | 整地面、焼土の堆積、通路状遺構を検出 | 23 |
| 28 | 11RT-HG013第17次 | 西野山階町30-1ほか | 2011.7.21～9.30 | 発掘 | 整地面、石組溝、土塁などを検出 | 23 |
| 29 | 12RT-HG014第18次 | 西野山階町30-1ほか | 2012.7.17～10.4 | 発掘 | 石組井戸、風呂関連遺構群、塀状遺構、土塁などを検出 | 24 |
| 30 | 13RT-HG016第19次 | 東野舞台町20、20-4 | 2013.10.28～11.25 | 発掘 | 中世の盛土または整地土、平安時代中期の建物、溝、土坑などを検出 | 本報告 |

る。27・29地点では、調査区東から北にかけて0.05～0.1ｍの高まりが確認されている。29地点南では、井戸などの関連する遺構を伴った石風呂遺構、28地点では東西方向の通路状遺構、３・22・21地点では庭園遺構や泉状遺構などが検出された。21地点では、輸入陶磁器、ガラス製品、蒔絵片、堆黒片など日常雑器ではない遺物が出土していることから、会所的な役割を持つ建物「御亭」が想定されている。これらの成果から、高まり部分から東側に堂舎が立ち並び、その西側から南西にかけての範囲は宗主一族の居住空間および本願寺実務空間にあたると想定された。一方で、21地点の南北方向に造られた遮蔽物の東側では未製品とみられるガラス玉の出土したことから、御本寺の中心部でもガラス生産が行われていたことを示す事例とされている。山科本願寺の往時の姿を偲ぶことが可能になってきた部分も多いが、建物配置など不明な点もあり、寺内の空間利用の検討が今後さらに必要となろう。

文献一覧（表２の文献番号と一致）


1　杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道　1965年

2　岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集　1985年

3　「山科本願寺跡１」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

4　「山科本願寺跡２」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

5　「山科本願寺跡」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

6　平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年

7　百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年』京都市文化観光局　1988年

8　百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989年

9　久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年

10　久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局　1990年

11　本弥八郎「山科本願寺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

12　永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡１」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年

13　近藤知子「山科本願寺跡２」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年

14　吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成10年度』京都市文化市民局　2000年

15　長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』京都市文化市民局　2000年

16　吉崎　伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成12年度』京都市文化市民局　2001年
17　小檜山一良・清藤玲子・柏田有香「山科本願寺跡（１）（２）（３）（４）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局　2006年
18　柏田有香『山科本願寺跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年
19　長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局　2006年
20　未報告（古代文化調査会による調査）京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課のご教示による。
21　家原圭太「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成19年度』京都市文化市民局　2008年
22　堀　大輔「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成20年度』京都市文化市民局　2009年
23　柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成23年度』京都市文化市民局　2012年
24　柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年

# ３．遺　　構

## （１）遺構の概要（表３）

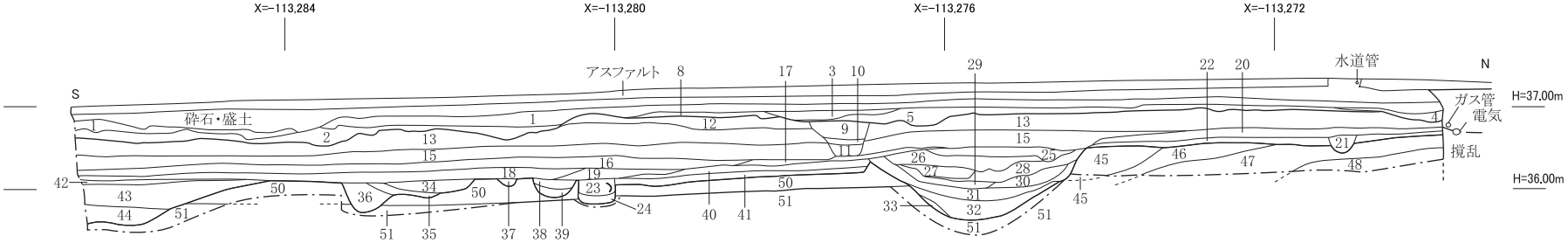
調査区全面で平安時代の建物跡や溝、土坑などを地山相当層上面で検出した。その地山相当層は調査区の北部が高く、中央付近から南へ下がる。遺構の時期は平安時代前期末から中期初頭、平安時代中期末から平安時代後期前半の大きく２時期にわかれる。平安時代前期末から中期初頭の遺構には流路（流路18）があり、調査区南半で検出した。平安時代中期末から後期前半の遺構は遺跡の主体を占め、調査区北半の地山相当層が高く残存していた部分に建物跡（建物１・２）、中央付近に東西方向の溝（溝33）、一段低くなった調査区南に土坑群（土坑12・13・17・19など）が広がっていた。

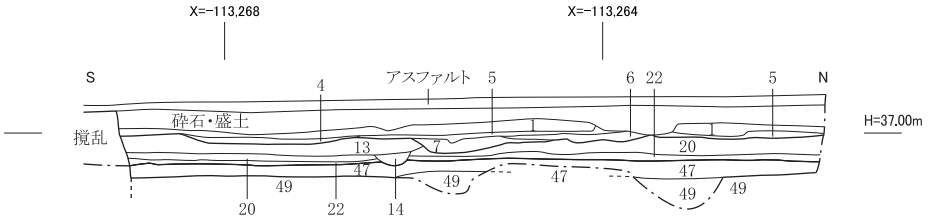
調査区南端では、平安時代前期末から中期初頭の流路18上面を覆う平安時代中期前半の遺物包含層を確認した。その上面に平安時代中期末の土坑（土坑29など）や平安時代後期前半の柱穴が成立していた。調査区北半では建物跡の他に、柱穴（柱穴37・39など）を数基確認しているが、建物として復元できなかった。

なお、山科本願寺期の遺構は検出していないが、中世の盛土または整地層とした西壁第13・15・16・18層（南壁第４～７層、西壁北半では20層）が、山科本願寺建造に伴う整地層の可能性がある。

表３　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 平安時代前期末～中期初頭 | 流路18 | |
| 平安時代中期末～後期前半 | 建物１・２、柱穴７・20・36・37・39、溝33、土坑12・13・17・19・23～25・29・30 | 柱穴20・37は他の遺構より時期が新しい |



1　7.5Y4/1 灰色粘質土〔現代:耕土〕
2　5Y5/3 灰オリーブ色微砂〔現代:床土〕
3　10Y4/1 灰色シルト〔現代:耕作溝〕
4　10Y4/2 オリーブ灰色砂質土〔現代:床土〕
5　7.5Y4/2 灰オリーブ色砂質土〔現代:床土〕
6　5Y4/3 暗オリーブ色粘質土、シルト質〔現代:床土〕
7　2.5Y5/3 黄褐色砂質土　径1～2cmの灰色シルトブロック含〔現代:耕作溝〕
8　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土〔現代:耕土〕
9　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト〔中世:耕作溝？〕
10　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト　径1～5cmの5Y5/1 灰色シルトブロック含〔中世:耕作溝？〕
11　5Y4/2 灰オリーブ色シルト　径2～5cmの礫含〔中世:耕作溝？〕
12　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
13　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土、シルト質　径0.5cmの土師・径1～2cmの礫少量含
14　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
15　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土　径0.5～5cmの礫少量含
16　5Y5/2 灰オリーブ色砂質土　径2～5cmの礫少量含
17　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土　径1～2cmの2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土(鉄分粒)多量含、径1～5cmの礫含
18　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　径1cmの土師・炭含、径1～5cmの礫少量含
19　7.5Y5/1 灰色粘質土　径0.5～5cmの礫多量含
20　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、シルト質　径1～2cmの礫少量含
〔中世:盛土または整地層〕
21　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土
22　2.5Y5/3 黄褐色砂質土　径1～2cmの礫含、径0.5～1cmの土師少量含〔中世:耕土または遺物包含層〕
23　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土　径1cmの土師・径1～5cmの礫少量含〔平安時代:柱穴20〕
24　5Y5/4 オリーブ色砂質土、シルト質　径1cm以下の炭少量含〔平安時代:柱穴20〕
25　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土　径2～3cmの2.5Y8/2 灰白色シルトブロック多量含、径1～2cmの礫少量含
26　10YR4/4 褐色砂質土混礫(径1～5cm)　径10～15cmの礫少量含
27　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　径5～10cmの礫少量含
28　2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
29　5Y4/3 暗オリーブ色粘質土　径1～2cmの10YR4/6 褐色粘質土(鉄分粒)多量含
30　10YR4/2 灰黄褐色粘質土混細砂　径1～5cmの礫少量含
31　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土混10YR4/6褐色粘質土
32　5Y5/1 灰色粘土混礫(径1～3cm)
33　2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土
〔平安時代:溝33〕
34　5Y5/1 灰色粘質土　径1cm以下の土師・炭・径1～2cmの礫少量含〔平安時代:土坑17〕
35　5Y5/3 灰オリーブ色粘質土　径0.5～1cmの炭少量含〔平安時代:土坑17〕
36　7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト　径0.5～1cmの炭・焼土粒少量含〔平安時代:土坑17〕
37　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土
38　5Y5/2 灰オリーブ色シルト　径1cmの土師少量含〔平安時代:土坑13〕
39　7.5Y5/1 灰色粘質土、シルト質　径0.5cm以下の炭・焼土粒少量含〔平安時代:土坑13〕
40　10YR4/4 褐色砂質土　径1～5cmの礫少量含〔平安時代:土坑19〕
41　5Y4/2 灰オリーブ色砂質土　径0.5cm以下の焼土粒・土師少量含〔平安時代:土坑19〕
42　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土混礫(径1～5cm)、シルト質〔平安時代:遺物包含層〕
43　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト〔平安時代:流路18〕
44　5Y6/1 灰色粗砂礫(径0.5～10cm)〔平安時代:流路18〕
45　5Y4/2 灰オリーブ色砂質土混礫(径1～10cm)、シルト質
46　7.5Y5/3 灰オリーブ色シルト混粗砂　径0.5～5cmの礫含
47　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土混礫(径1～5cm)
48　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土混粗砂礫(径1～10cm)
49　5Y4/3 暗オリーブ褐色粘質土混細砂礫(径1～5cm)
50　7.5Y4/2 灰オリーブ色砂質土、シルト質
51　5Y4/4 暗オリーブ褐色粘質土
〔地山相当層〕

図6　調査区西壁断面図（1：80）

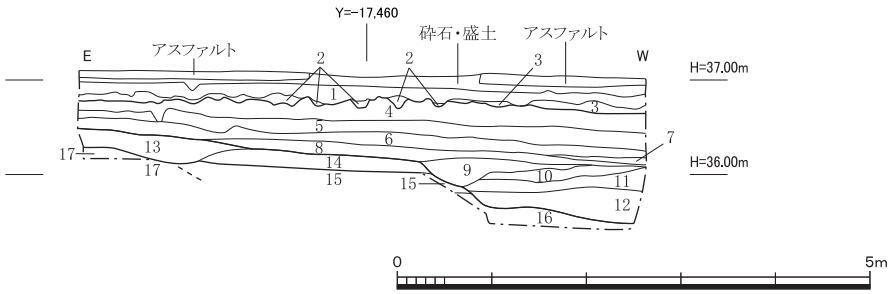
## （2）基本層序（図６・７）

調査地は近年まで駐車場として使用されていたため、厚さ0.05～0.1ｍのアスファルト舗装が行われており、その直下は0.1～0.3ｍの砕石が敷かれ、部分的に盛土が互層に入っていた。調査区の北と南では層序が異なるため、調査区西壁（図６）のＸ＝－113,268付近、調査区南壁（図７）のＹ＝－17,460付近を例として記述する。

調査区西壁北端の基本層序は、地表下0.3～0.4ｍまでが灰色粘質土の現代耕土（第１層）、0.45ｍまでがオリーブ灰色砂質土の現代床土（第４層）、0.5ｍまでがオリーブ褐色粘質土などの中世の盛土または整地層（第13・20層）、0.65ｍまでが黄褐色砂質土の中世耕土または遺物包含層（第22層）、それより下がオリーブ褐色粘質土混礫などの地山相当層（第47・49層）である。

調査区南壁の基本層序は、地表下0.1～0.3ｍまでが灰色粘質土の現代耕土（第１層）、0.3ｍまでが暗褐色砂質土の現代の床土（第２層）、0.7ｍまでがオリーブ褐色粘質土や暗灰黄色砂質土などの中世盛土または整地層（第４～６層）、0.85ｍまでが暗灰黄色砂質土混礫の平安時代中期前半遺物包含層（第８層）、これより下が灰オリーブ色微砂などの地山相当層（第14・15層）である。

地山相当層は調査区中央付近で大きく変わる。調査区北はシルトや粘質土に礫や粗砂が混ざり込んだ南下がりの層が堆積している（図６第45～48層）が、調査区南ではシルト質の砂質土と粘質土（同第50・51）が平行に堆積していた。また、調査区南東角付近ではシルト層（図９第９層）と粘質土混礫層（図７第13・14層）、細砂層（同第17層）が堆積する状態を確認した。このように調査区全面にわたって、平安時代よりも古い時期の旧河川による氾濫堆積が認められ、その方向は北東から南西方向であったことがわかった。東西溝33は前述の北から南へと傾斜した粗砂礫層（同第45～48層）が途切れ、自然による段差があったところに位置していた。




1　7.5Y4/1 灰色粘質土〔現代：耕土〕
2　10YR3/3 暗褐色砂質土〔現代：床土および耕作溝〕
3　5Y5/3 灰オリーブ色微砂〔現代：床土〕
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、シルト質　径1～2㎝の礫少量含
5　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土　径0.5～5㎝の礫少量含
6　5Y5/2 灰オリーブ色砂質土　径2～5㎝の礫少量含
7　5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　径1㎝の土師・炭含、径1～5㎝の礫少量含
〔中世：盛土または整地層〕
8　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土混礫（径1～5㎝）、シルト質〔平安時代：遺物包含層〕
9　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、粘性あり　径1～5㎝の礫含
10　2. 5Y5/1 黄灰色粘質土　径1～3㎝の礫少量含
11　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
12　5Y6/1 灰色粗砂礫（径0.5～10㎝）
〔平安時代：流路18〕
13　2.5Y5/4 黄褐色粘質土混礫（径1～10㎝）
14　5Y4/2 灰オリーブ色微砂　径1～2㎝の7.5YR3/3 暗褐色微砂ブロック（鉄分粒）多量含
15　7.5Y4/2 灰オリーブ色砂質土、シルト質
16　5Y4/4 暗オリーブ褐色粘質土
17　10YR2/3 黒褐色細砂　径1～3㎝の礫と互層、径10㎝の7.5Y4/3 暗オリーブ色シルトブロック少量含
〔地山相当層〕

図７　調査区南壁断面図（１：80）

調査区北端の遺構検出面は、西壁第47層（図６）の地山相当層上面で、標高36.70ｍ付である。調査区北から９ｍ付近より南へ緩やかに下がり始め、同16ｍ付近（東西溝33検出付近）で36.10ｍまで下がってほぼ平坦となり、南端で36.05ｍを測る。平安時代中期末の遺構は北の高い位置に建物、南の低い位置に製鉄関連の遺構、中央にこれらを区画する東西溝を配置していた。前述した地山相当層が変化する部分と、北から南へ下がる自然地形の勾配を効率的に利用して、生活空間を構築していたことがわかった。

## （３）平安時代前期末から中期初頭の遺構（図８）

**流路18**（図８～11、図版40）　調査区南端で検出した北東から南西方向の流路である。最大幅3.2ｍ、最深0.6ｍ、東および南西は調査区外へと延び、6.8ｍ以上である。断面形状は逆台形を呈し、北岸は比較的緩やかに立ち上がるが、南岸は急な傾斜で１～２段の段ができていた。調査区内の溝底には高低差がほとんどなく、流路方向に並行した数条の溝状窪みを確認した。また、南肩の図９第８層は、地山相当層（第10・11層）に似ている。このことから、肩口の地山相当層が崩れて、再堆積し、肩口として形成されたものとみられる。埋土は１～６層までは灰黄褐色系の砂質土やシルトで、滞水あるいは流れが緩やかな時の堆積層とみられる。一方、最下層の７層は暗灰黄色シルト混礫や粗砂礫である。溝底の窪みは、最下層に堆積した粗砂礫層以前のもので、当初は流れが急激であったことがわかる。流れの推定方向は、北東から南西である。この粗砂礫層の上面標高は、東で35.55ｍ、西で35.80ｍ、と東が低く西が高い。この上の堆積層はシルト質の暗灰黄色粘質土であり、流れ方向とは逆に堰き止める状態に近い底面高となったことが、滞水する要因になったとみられる。土器が投棄された時期は、第３層上面から第２層が堆積するまでである。土器が流路心より南から２個体分

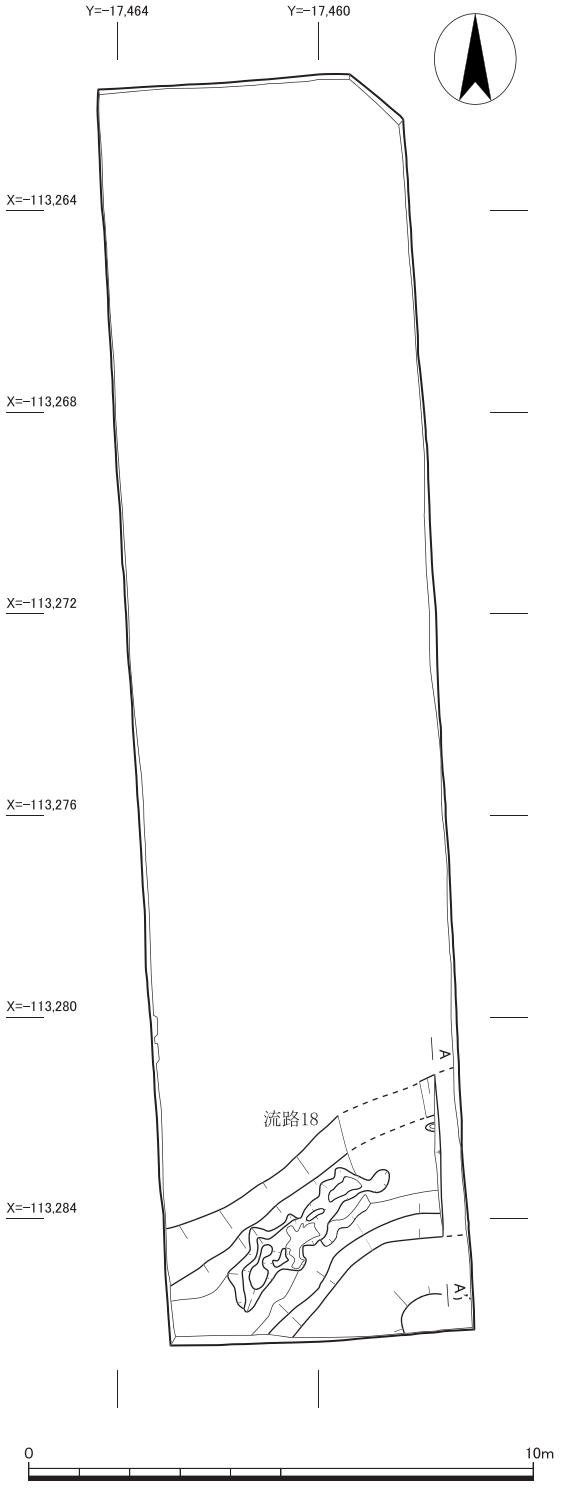
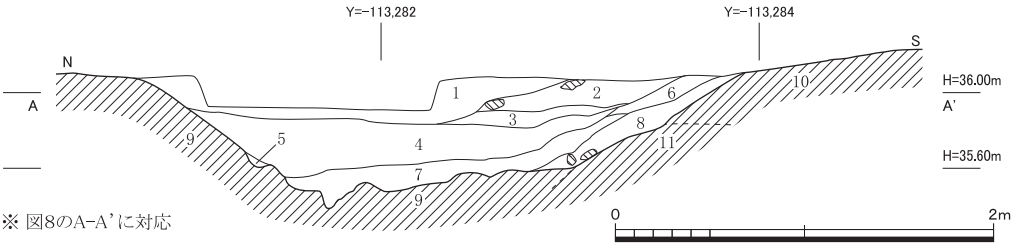



図８　調査区平面図〔平安時代前期末から中期初頭〕（１：150）




※ 図8のA-A'に対応

1　2.5Y5/1 黄灰色砂質土、シルト質　径0.5cm以下の炭少量含
2　10YR4/2 灰黄褐色砂質土、シルト質　径1～10cmの礫含
3　7.5YR4/1 褐灰色粘質土　径2～5cmの礫少量含
4　2.5Y4/1 暗灰黄色粘質土、シルト質　径0.5cm以下の炭少量含
5　2.5Y5/3 黄褐色シルト
6　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト　径1～3cmの礫含
7　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混礫(径1～5cm)
8　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土混礫(径1～10cm)、粘性あり
9　2.5Y6/6 明黄褐色シルト　径1cm以下の
10YR3/3 暗褐色砂質土(鉄分粒)多量含
10　7.5YR3/2 黒褐色粘質土混礫(径1～5cm)
11　10YR2/3 黒褐色粘質土混礫(径2cm以下)
〔地山相当層〕

図９　流路18断面図（１：40）

がまとまって出土していること（図11）、調査区南東隅の地山相当層が流路肩より0.3ｍ程度高いことなど、南側に生活空間が想定される。また、土器片は磨滅しておらず、出土位置でも流水による移動はほとんどなく、埋土の堆積状況からも流れが弱かったことが明らかである。図11の４・７層からは土師器片などが少量出土した。時期は平安時代前期末から中期初頭であろう。図１－10地点No.10では、時期不明の流路肩口

図10　流路18断面（西から）

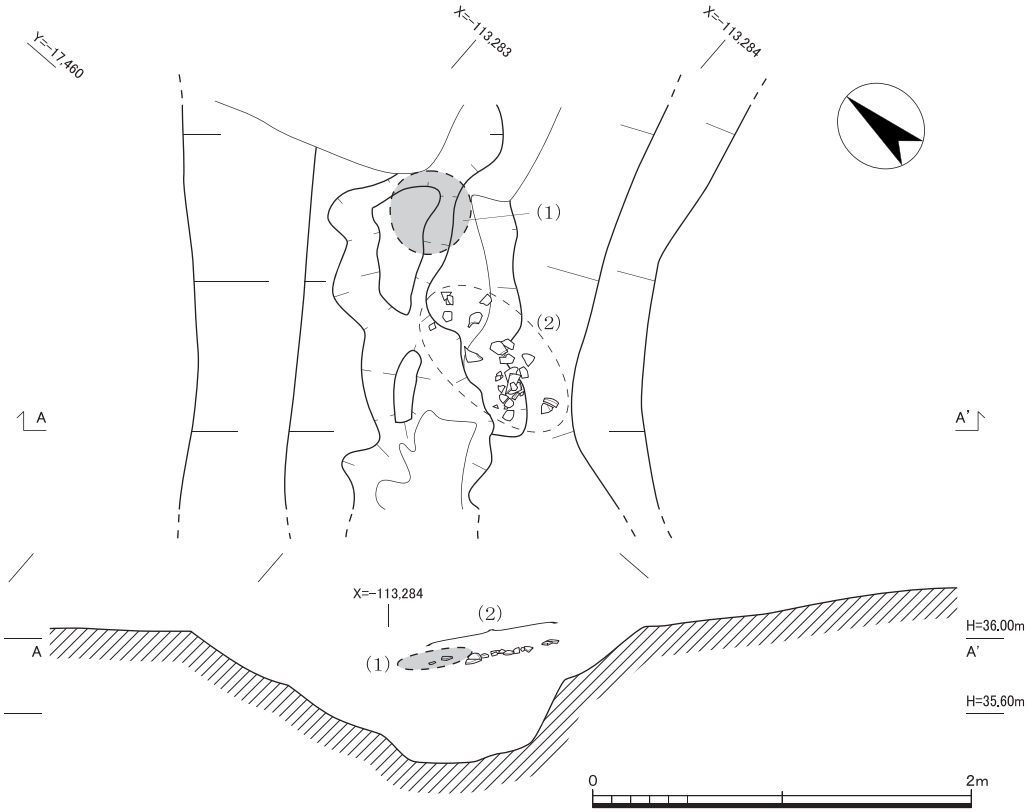



図11　流路18実測図（１：40）

が確認されており、この流路18も含めて東を流れる山科川に関係するものの可能性がある。

## （４）平安時代中期末から後期前半の遺構（図12）

平安時代中期末の遺構は、調査区北半で建物や柱穴、土坑、調査区中央付近で建物跡や溝、調査区南半で柱穴や土坑を検出した。時期差が認められた平安時代後期前半の遺構は、調査区北と南西で柱穴を確認した。

**建物１**（図12・13、図版38）　調査区北半で検出した。平成25年度試掘調査で検出された柱穴２基（今回の調査区北側）と柱間がそろうことから、同じ建物を構成する柱穴と考えられる。東西２間以上、南北２間以上の東面に庇の付く南北棟とみられる掘立柱建物を想定した。建物の主軸は、正方位より約４°西へ振れている。身舎と考えられる部分の梁行は1.8ｍで６尺、桁行は2.25ｍで7.5尺である。東側の庇の出は、東西約1.3ｍで約４尺と短い。柱穴の直径は0.45～0.50ｍ、東列の柱穴５・34は楕円形で、東西0.45ｍ、南北0.55ｍである。深さは南北方向の列ごとで異なっており、東列で0.18～0.2ｍ、東から２列目で0.5～0.76ｍ、同３列目で0.30～0.32ｍを測る。身舎の東側柱になる２列目は深く、その他の柱穴は浅い。　また、柱穴１では根石に使用されていたとみられる石を２個、柱穴２では地下式礎石を検出した。柱穴１の石は縦横10～12㎝、厚さ約12㎝、柱穴２の石は長さ30㎝、幅20㎝、厚さ８㎝を測る。柱穴埋土はにぶい黄褐色粘質土などである。明確に柱当りを確認できたのは、柱穴２・３であったが、共に上層で柱痕を覆った土を確認しており、また他の柱穴でも柱痕を確認していないことから、建物廃絶時に柱が抜き取られたと考えられる。柱穴４（図15、図版40）からは完形の土師器皿（８）が出土し、その上に載せられていたような状態で鉄鏃（75）、土

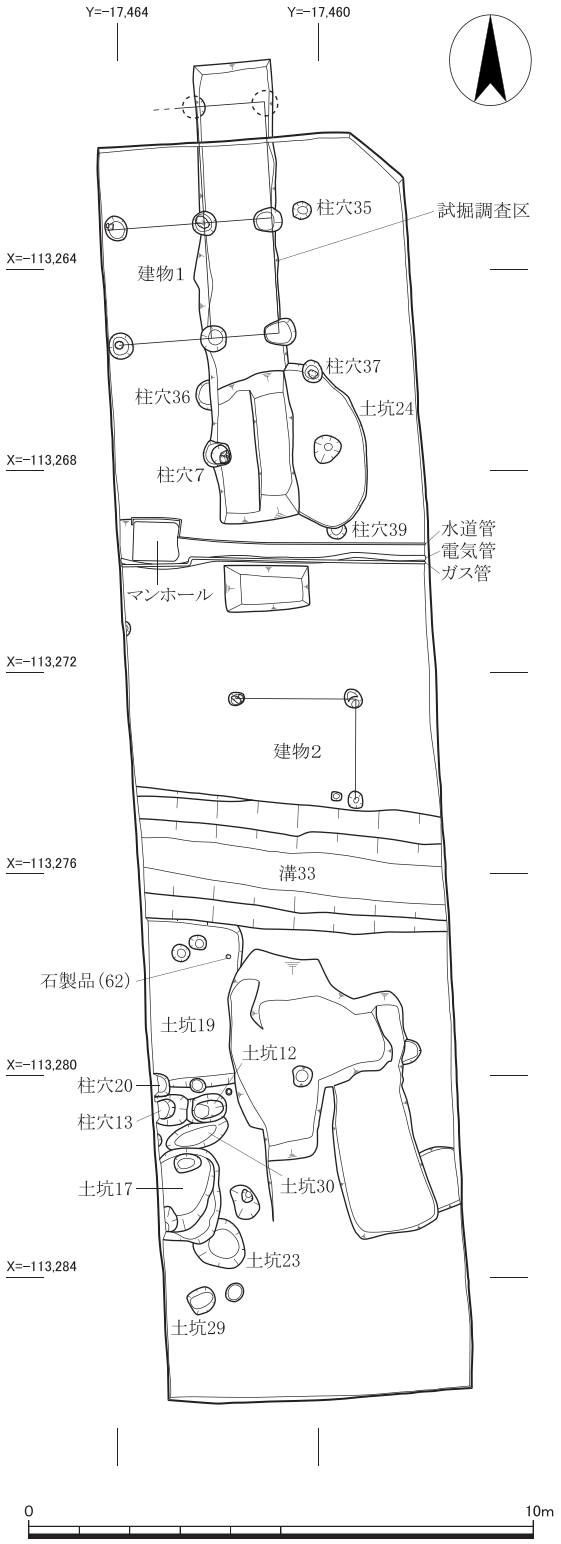
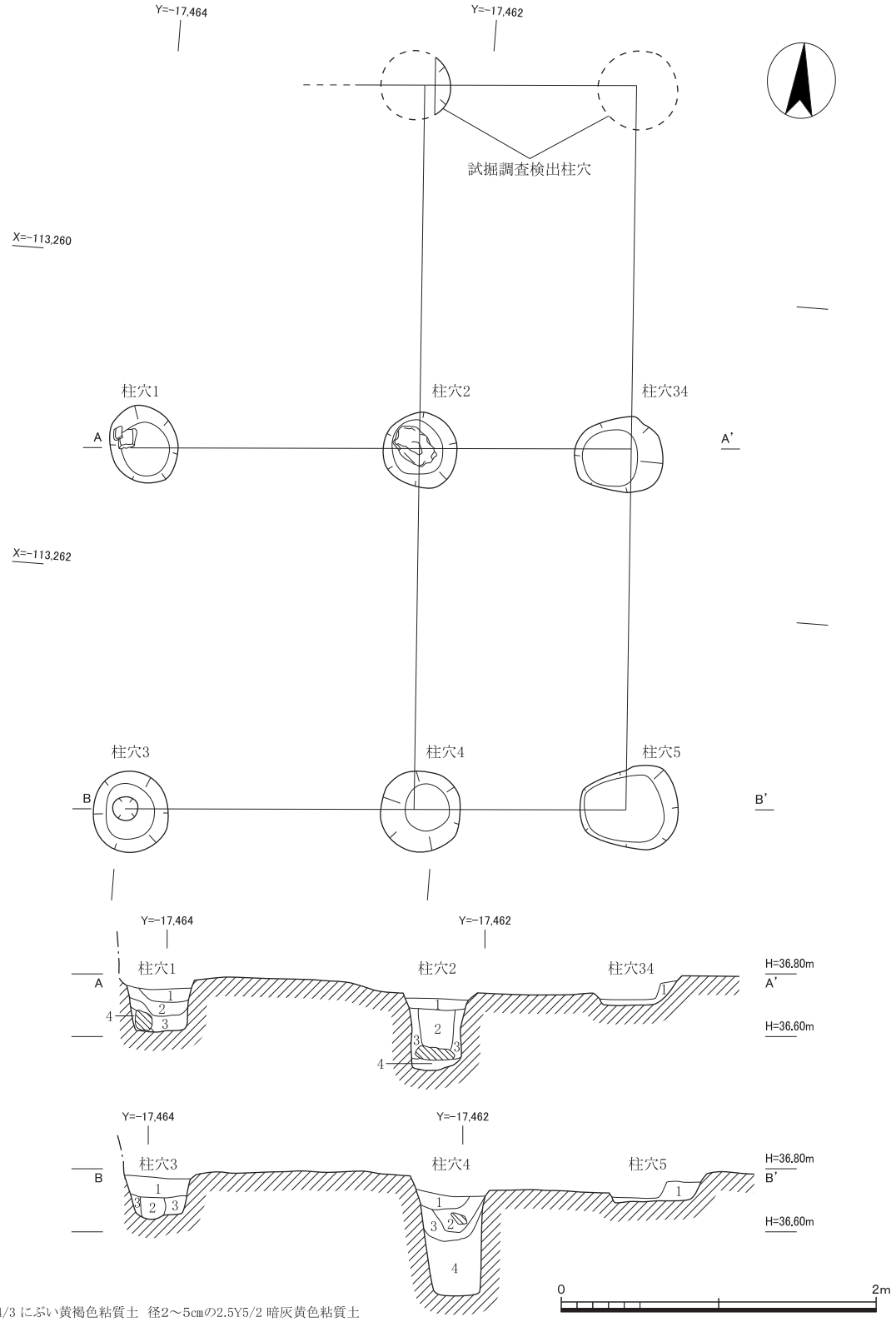



図12　調査区平面図〔平安時代中期末から後期前半〕（１：150）




〔柱穴1〕
1　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　径2～5cmの2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロック多量含　径0.5～1cmの土師少量含
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　径0.5cmの土師少量含
3　7.5YR4/2 灰褐色粘質土　径2～10cmの礫多量含、径0.5cmの焼土粒少量含
4　2.5Y3/3 暗褐色粘質土　径1～3cmの礫少量含
〔柱穴2〕
1　2.5Y5/4 暗灰黄色粘質土　径0.5～1cmの土師・径3～5cmの礫少量含
2　10YR3/3 暗褐色粘質土　径2～5cmの2.5Y5/2暗灰黄色粘質土ブロック含　径0.5～1cmの土師少量含
3　5Y4/3 暗オリーブ色粘質土　径0.5～1cmの土師・径5～10cmの礫少量含
4　2.5Y3/3 暗褐色粘質土　径1～3cmの礫少量含
〔柱穴34〕
1　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土　径1～2cmの礫少量含
〔柱穴3〕
1　10YR3/3 暗褐色粘質土　径2～5cmの礫・径1～2cmの土師少量含
2　7.5YR4/6 褐色粘質土　径0.5cmの土師少量含
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、粘性あり　径0.5cmの土師少量含
〔柱穴4〕
1　7.5Y4/2 灰オリーブ色粘質土混2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土　径1～2cmの土師・炭少量含
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　径0.5～1cmの土師・径5～10cmの礫少量含
3　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　径1～2cmの礫少量含
4　10YR3/3 暗褐色砂質土、シルト質　径1cm以下の焼土粒・土師少量含
〔柱穴5〕
1　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土混礫(径1～10cm)

図13　建物１実測図（１：40）

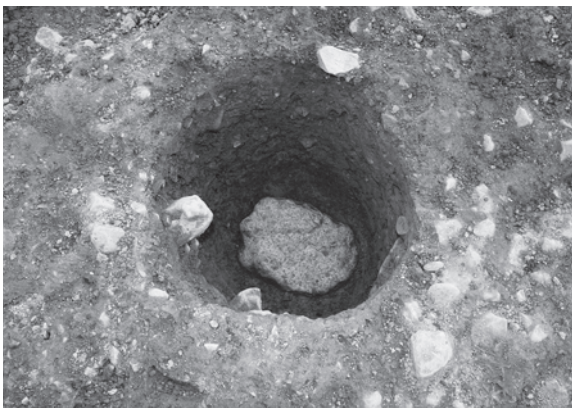


図14　建物１柱穴２地下式礎石検出状況（北から）

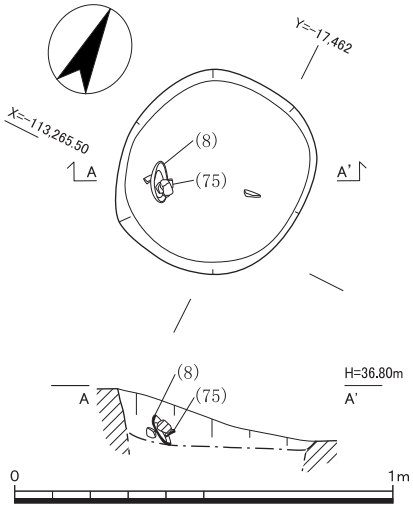



図15　建物１柱穴４上層実測図（１：20）

師器皿下からは鉄製紡錘車が出土した。その他に黒色土器椀や白磁皿などが出土している。柱穴１～３・５・34からは土師器皿、灰釉陶器椀、焼土粒、鉄滓などが少量出土した。時期は11世紀後半とみられる。

**建物２**（図12・16・17、図版40）　調査区中央で検出した。柵の可能性もあったが、東西・南北１間の掘立柱建物と想定した。柱穴は３基（柱穴８～10）のみの検出であるため、展開する方向は

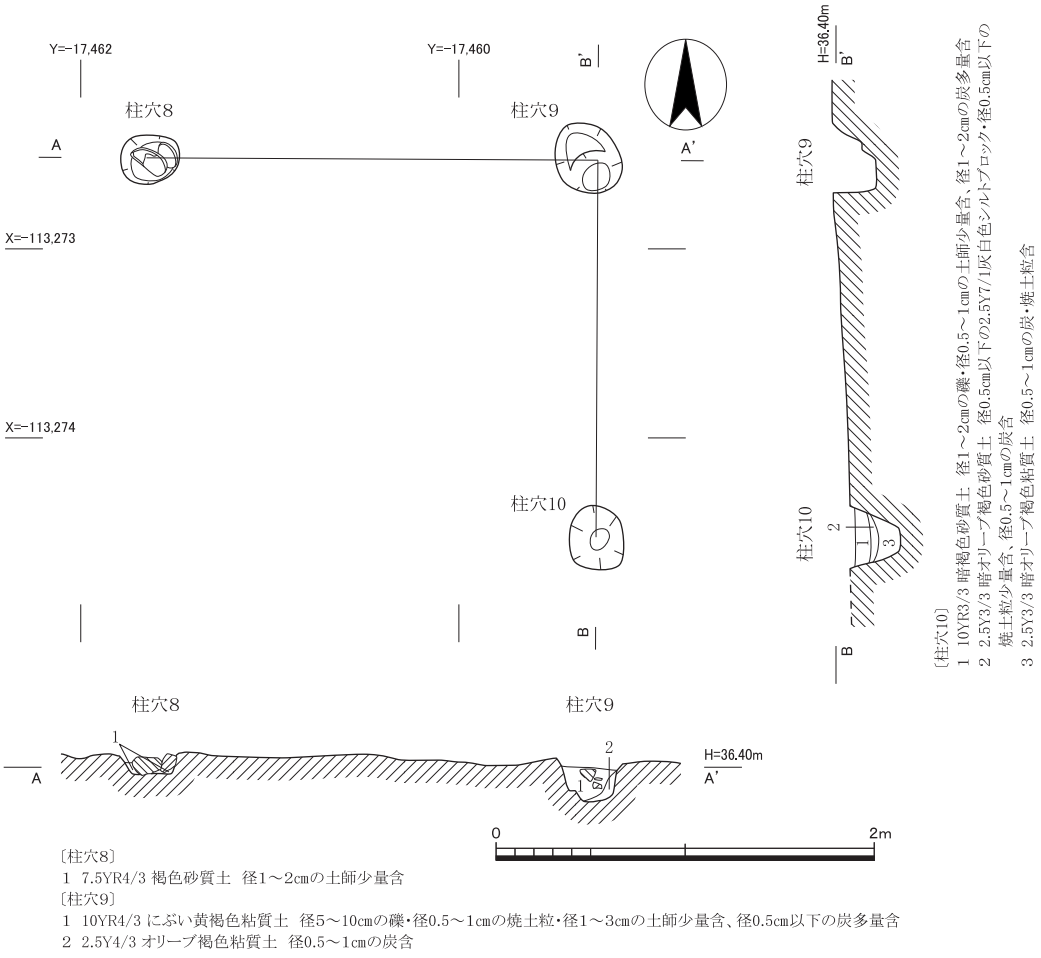



図16　建物２実測図（１：40）

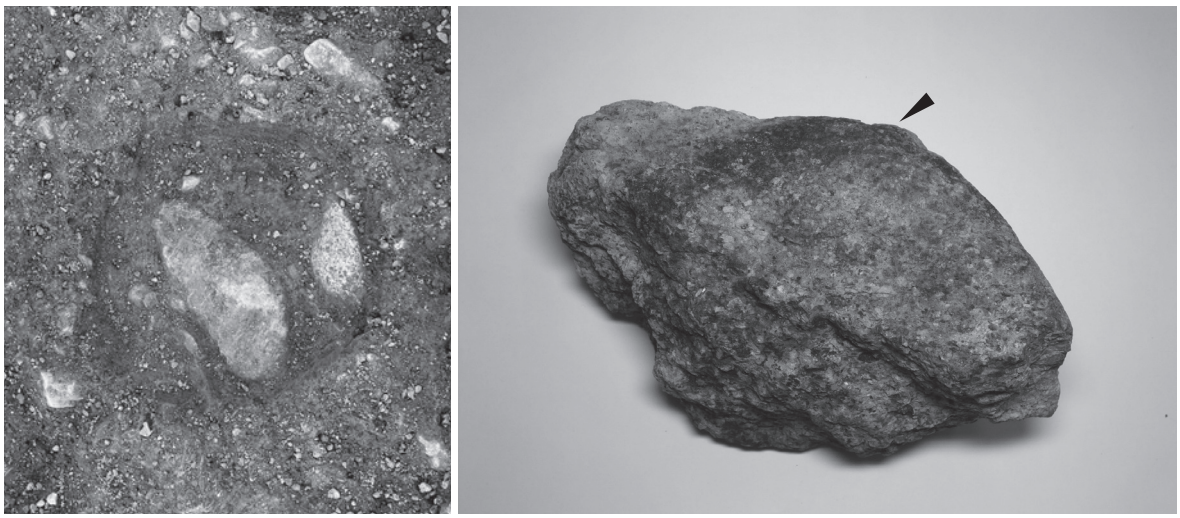


図17　建物２柱穴８根石検出状況（左、南東から）、同焼痕跡（右）

不明である。柱間は東西2.4ｍの８尺、南北2.0ｍの約７尺である。建物の軸は、現状で正方位である。柱穴の直径は0.25～0.35ｍ、深さ0.1～0.27ｍを測る。埋土は褐色砂質土などであるが、柱穴９・10の第１層には炭が多量に含まれていた。柱穴８のみ根石が残存していたが、２個の根石の内、西側のものについては、全面赤色に焼けた石が使用されていた（図17）。上面には半円形の焦げた痕跡があり（同矢印部分）、円内側（手前）は外側より白色化が進んでいる。焼けた根石は長さ20㎝、幅10㎝、厚さ９㎝、焼けていない石は長さ14㎝、幅８㎝、厚さ10㎝である。出土遺物には、土師器片、黒色土器片、灰釉陶器片、フイゴの羽口、鉄釘、鉄滓などがある。時期は11世紀後半である。

**柱穴７**（図12・18）　調査区北半の建物１南で検出した。東西0.56ｍ、南北0.48ｍ、深さは根石が据えられていた東半で0.48ｍ、西半で0.1ｍである。根石は縦横約15㎝、厚さ約６㎝と、この北側に二廻り程小さな石を下に差し込んでいた。埋土は上層でにぶい黄褐色砂質土、根石下層でオリーブ褐色砂質土であった。出土遺物は土師器皿、フイゴの羽口、鉄滓がある。時期は11世紀後半とみられる。

**柱穴36**（図12）　調査区北半の柱穴７北で検出した。東半は試掘調査時に壊されたため不明であるが、直径0.6ｍ程度の円形で、深さ0.1ｍを測る。埋土は焼土粒や炭を少量含むにぶい黄褐色粘質土である。土師器皿などが出土した。時期は11世紀後半である。

**柱穴39**（図12）　調査区北半の土坑24南で、北半上部が壊された状態で検出した。直径0.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土などである。柱当りは検出できなかったが、断面観察から、柱材を抜いた痕跡が確認できた。出土遺物には、土師器皿・杯、瓦質土器椀などがある。11世紀後半である。

**溝33**（図12・19）　調査区中央付近で検出した東西方向の溝である。東・西は調査区外へ延びる。幅2.6ｍ、長さ６ｍ以上、深さ0.8ｍを測り、断面は「Ｖ」字状を呈する。埋土は褐色砂質土混礫や暗灰黄色粘質土などである。最下層に礫層が堆積していることから、掘削当初は水流が強かったようである。遺物は上層から瓦質土器椀片など、下層から土師器片などが出土した。時期は北側

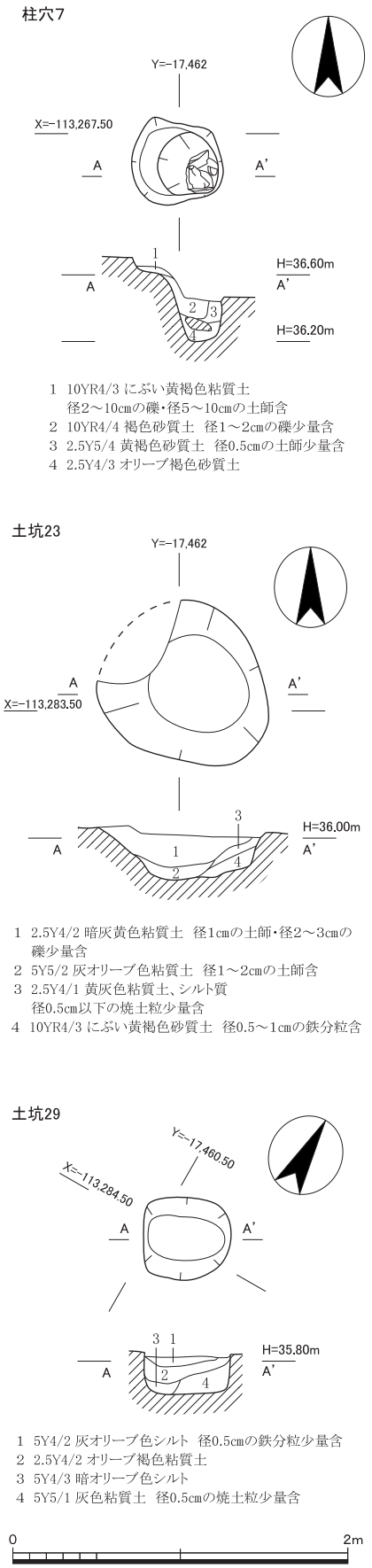



図18　柱穴７、土坑23・29実測図（１：40）

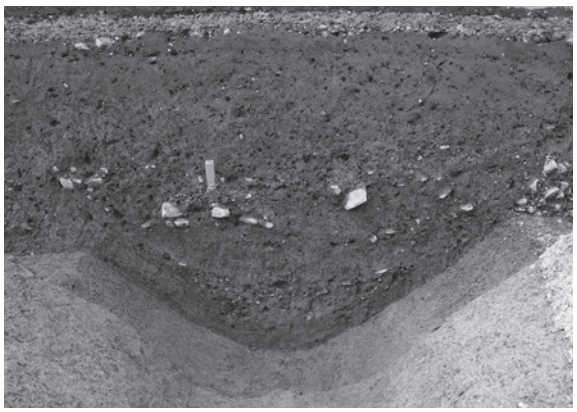


図19　溝33断面（東から）

に造られた建物と同じとみられ、11世紀後半には掘削されており、12世紀以降に埋められたと考えられる。

**土坑12**（図12・20、図版39）　調査区南西で検出した。東西0.68ｍ、南北0.55ｍ、深さ0.2ｍで、平面形態は楕円形を呈する。埋土は炭や鉄分粒などを含む暗灰黄色粘質土などである。土坑底は西に少し深くなっていた。土師器片、フイゴの羽口、鉄滓が出土した。時期は11世紀後半とみられる。

**土坑13**（図12・20、図版39）　調査区南西の土坑12西側に並んで検出した。西端は調査区外である。東西0.6ｍ以上、南北0.62ｍの隅丸方形に近い形状である。埋土は粘性のある黄褐色シルトで、鉄分粒や炭を含む。土坑底の深い部分は西側に偏る。遺物は土師器片が少量出土した。形状が土坑12と似ており、土坑17の北に並んだ状態で検出したことから、一連の遺構と考えられる。11世紀後半とみられる。

**土坑17**（図12・20、図版39）　調査区中央南西で検出した。隅丸方形に近い平面を呈する。西端は調査区外のため東西は1.2ｍ以上、南北1.9ｍ、深さ0.43ｍである。埋土は暗灰黄色粘質土などで、炭や焼土粒、鉄分粒、鉄滓を多く含む。断面観察から、底面の南側が一段高く、北側に向かって低くなり、北端と西の一部が窪地状に深

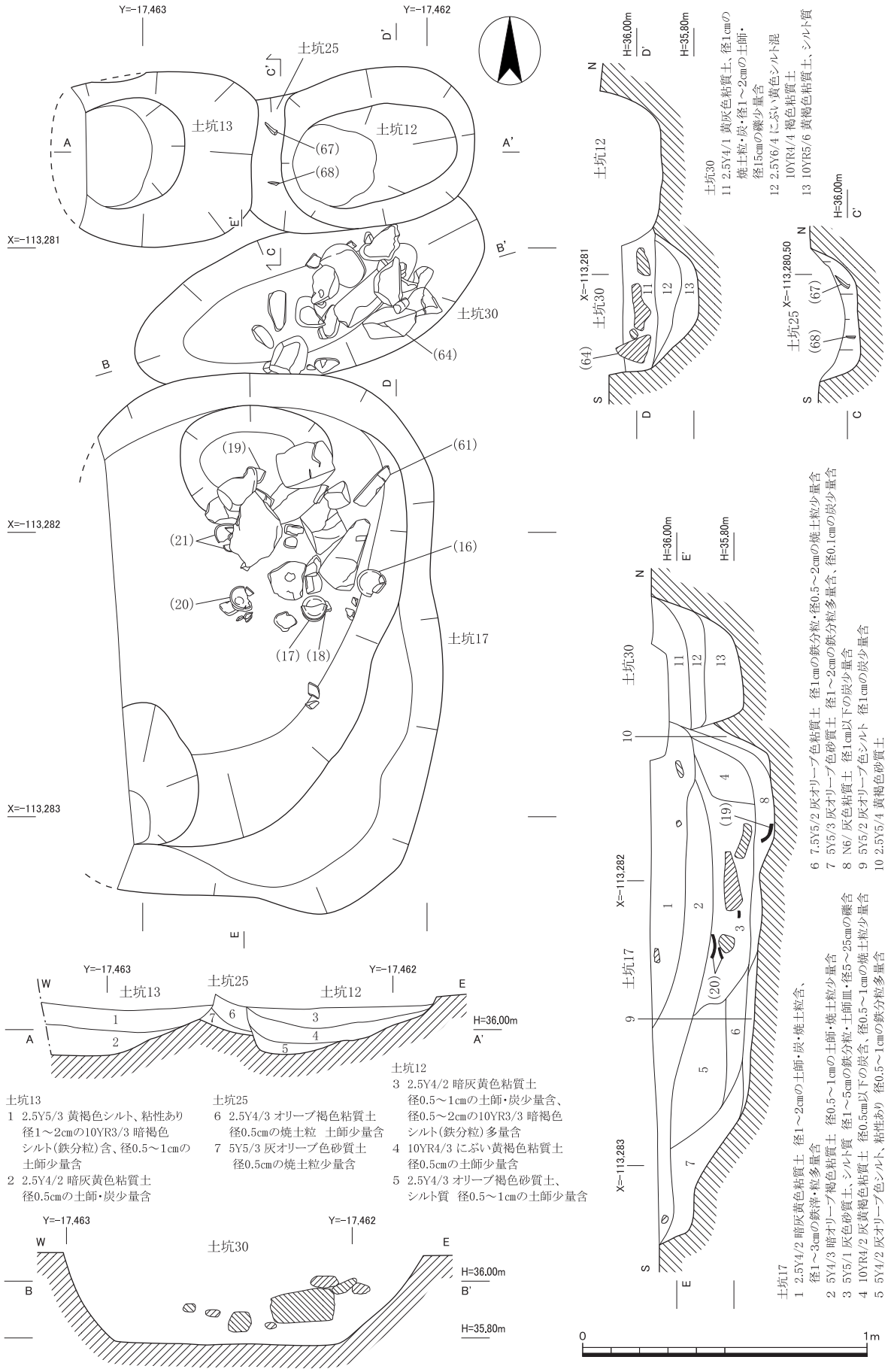



図20　土坑群実測図（1：20）

図21　土坑24実測図（1：20）

くなっていたことがわかった。土坑内北寄りに、焼け石を含む礫や完形の土師器皿、台付土師器皿の台部分のみを投棄していた。埋土からは、鉄滓だけではなく、鍛造鉄片やフイゴの羽口片も出土した。時期は11世紀後半である。

**土坑19**（図12）　調査区中央西端で、溝33に北肩を壊された状態で検出した。西端は調査区外、東端は攪乱によって壊されていた。東西1.8ｍ以上、南北3.3ｍ、深さ0.19ｍである。埋土は２層で、上層は自然の鉄分粒で褐色化した砂質土であったが、下層は少量の焼土粒や遺物を包含する灰オリーブ色砂質土であった。土坑北で２基、土坑南肩で１基の柱穴を確認しおり、この土坑に伴うものとみられる。住居ではなく、屋根付きの作業場と考えられる。土師器皿、灰釉陶器椀、フイゴの羽口、鉄滓が出土した。時期は11世紀後半である。

**土坑23**（図12）　調査区南西の土坑17南東角に壊された状態で検出した。不整形を呈し、直径１ｍ内外、深さ0.3ｍの土坑である。埋土は暗灰黄色粘質土などである。東半が埋まった後、再度掘り直しを行った痕跡が認められた。遺物は土師器および黒色土器の破片が出土した。11世紀後半とみられる。

**土坑24**（図12・21、図版39）　調査区北半の建物１南東で検出した。西側は平成25年度試掘調査の際に、断面で遺物包含層として確認されていた。楕円形を呈していたとみられ、東西1.5ｍ以上、南北3.4ｍ、深さ0.2ｍである。埋土は径１～10㎝の礫を含むオリーブ褐色粘質土である。土坑の底面形状は平坦に近かった。完形に近い遺物の集中地点は北半に偏っており、土師器皿を中心に、灰釉陶器椀や瓦質土器椀、白磁椀、石皿などが出土した。破片になった遺物や焼土粒は、土坑内全体に広がっていた。時期は11世紀後半である。

**土坑25**（図12・20、図版39）　調査区南西の土坑12・13との間で検出した。楕円形であったとみられる。土坑12・13と関連する遺構と考えられ、同時期に掘削された可能性がある。現状で東西0.35ｍ、南北0.49ｍ、深さ0.11～0.15ｍで、底面は西が高く東に下がる。埋土はオリーブ褐色粘質土と灰オリーブ色砂質土である。底面近くから、鉄釘が２本、東側に頭をそろえ、底面傾斜に合わせた東下がりの状態で出土した。土坑12・13を繋ぐ何らかの施設に使用された木材の留め具として使用されていたとみられる。土師器皿が出土した。時期は11世紀後半である。

**土坑29**（図12）　調査区南西の流路18上面、土坑23南西で検出した。東西0.52ｍ、南北0.5ｍの隅丸方形を呈する。深さは0.24ｍを測る。埋土は灰オリーブ色シルトなどである。断面形態は箱形で、柱痕とみられる層（３層）があることから、柱材は廃絶時に抜かれたようであり、柱穴とみられる。土師器杯が出土した。時期は11世紀後半である。

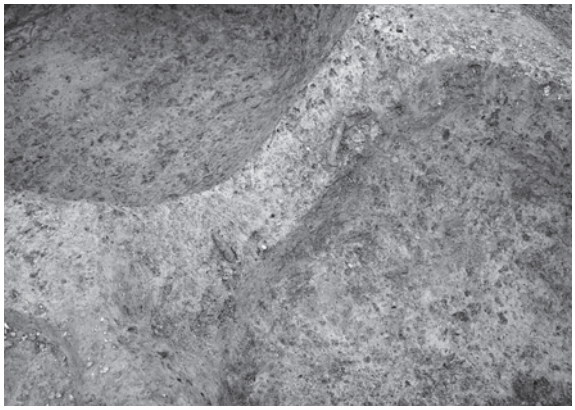
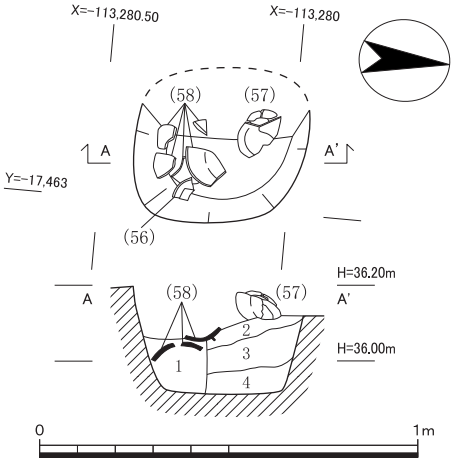


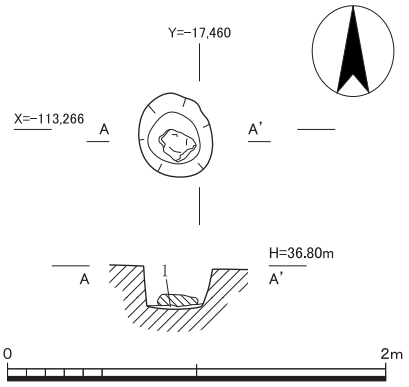
図22　土坑25鉄釘出土状況（南東から）

**土坑30**（図12・20、図版39）　調査区南西の土坑12・13南、土坑17北で検出した。南西から北東方向に長い楕円形を呈する。長軸1.3ｍ、南




1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 径1㎝の土師少量含
2 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
3 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 径1㎝の土師・径1～5㎝の礫少量含
4 5Y5/4 オリーブ色砂質土、シルト質 径1㎝以下の炭少量含

図23 柱穴20実測図（1：20）




1 2.5YR4/4 オリーブ褐色粘質土

図24 柱穴37実測図（1：20）

北0.52ｍ、深さ0.3ｍである。中央東寄りの窪みに、礫を多量に投棄していた。礫の中には、非常に良く焼けたものの他に、数個の加工痕が残る花崗岩が含まれていた。これらの花崗岩は、北に位置する比叡山または東の醍醐山から搬入されたとみられる。長さ10㎝を超える鉄滓が出土している。その他の遺物では、土師器皿・甕、フイゴの羽口が出土した。時期は11世紀後半である。

**柱穴20**（図12・23、図版40） 調査区南半西壁際で検出した。遺構の半分が調査区外であるが、直径約0.45ｍになるとみられる。深さ0.28ｍを測る。埋土は灰黄色粘質土などである。埋土から完形に近い土師器皿や瓦質土器椀が出土した。遺物の出土状況から、柱材を抜いた後に遺物が埋められた可能性がある。時期は12世紀前半である。

**柱穴37**（図12・24） 調査区北半の土坑24北肩で検出した。土坑24を壊して造られていた。直径0.4～0.45ｍ、深さ0.23ｍ、底部付近に長さ18㎝、幅14㎝、厚さ６㎝の根石を据える。埋土は褐色砂質土で、柱当りは確認できなかった。根石下層の埋土はオリーブ褐色粘質土である。土師器片などが出土した。時期は土坑24との切り合いから、11世紀末以降とみられる。

# ４．遺　　物

## （１）遺物の概要

遺物は遺物整理箱に10箱出土した。土器類は土師器が大半を占め、その他に緑釉陶器や灰釉陶器、瓦質土器などがあり、平安時代前期末から中期前半と同中期末の大きく２時期に分けることができる。

平安時代前期末から中期初頭の土器は、調査区南端で検出した流路やこれを覆う遺物包含層から出土した。流路からは平安時代前期末から中期初頭とみられる各１個体分の土師器甕や須恵器壷、流路上面からは平安時代中期前半の緑釉陶器などが出土している。平安時代中期末の土器は、調査区北・南で検出した土坑内から完形に近い土器がまとまって出土した。調査区南半の土坑を中心に、鉄釘や形状不明な鉄製品類、鉄滓が多く出土した。土坑埋土の一部を水洗選別したところ、鍛造鉄片が含まれていることがわかった。また、土坑からは鞴の羽口片や砥石、焼け石も出土した。砥石の中には、焼け面を持つものも含まれ、炉などの台石や支柱として再利用していた可能性がある。これらは製鉄に関連する遺物とみられる。平安時代後期の土器は、調査区南西で検出した柱穴内から少量ではあるが、完形に近いものが出土した。

その他の時期の土器として、江戸時代の染付磁器片が１片出土した。上層からの混入とみられる。また、瓦類はどの時期のものも、全く出土していない。

## （２）土器類

**平安時代前期末から中期前半の土器**（図25、図版41、表５）　１は土師器甕である。調査区南端の流路18から出土した。頸部で「く」字に外反し、口縁端部を摘み上げる。体部内面は工具による

表４　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安時代前期末～中期前半 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、鉄製品 | １箱 | 土師器３点、須恵器１点、緑釉陶器２点、灰釉陶器１点、鉄製品１点 | | |
| 平安時代中期末 | 土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、瓦質土器、輸入磁器、土製品、石製品、鉄製品 | ９箱 | 土師器37点、須恵器２点、灰釉陶器４点、黒色土器１点、瓦質土器２点、輸入磁器２点、土製品２点、石製品４点、鉄製品10点、鉄片類一括１点 | | |
| 平安時代後期前半 | 土師器、瓦質土器 | 少量 | 土師器２点、瓦質土器１点 | | |
| 江戸時代 | 肥前染付磁器 | 少量 | | | |
| 合　計 | | 10箱 | 77点（５箱） | ０箱 | ９箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

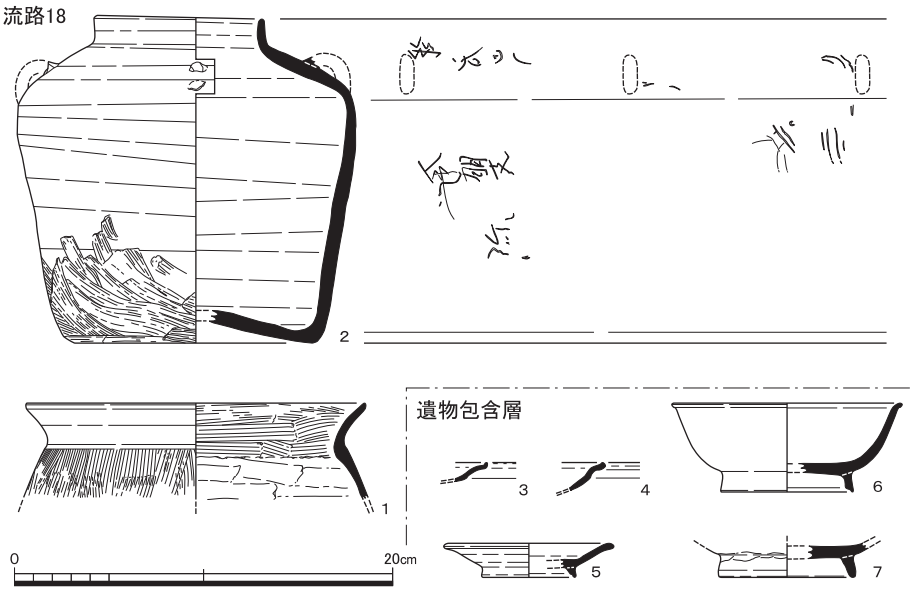



図25　平安時代前期末から中期前半出土土器実測図（１：４）

ヨコナデに近いケズリ調整、口縁部内面はハケ調整後口縁端部のみナデ調整を加える。体部外面はハケで調整し、口縁部外面をユビナデして頸部のハケメ痕を消す。接合しなかったが、体部下半の破片があり、ほぼ１個体分が出土している。体部下半の内面調整には、同心円文が確認できる破片があることから、同心円文の当て具を使用して、調整を行っていたことがわかった。２は須恵器四耳壷である。流路18出土の土師器甕（１）の西側から出土した。肩部は丸く、頸部にむかって斜めに立ち上がり、口縁部が上方に立ち上げられて短頸となる。高さは体部径に比して低く、体部は寸胴で、底部は中央が窪む。把手部分は、肩部直上の４カ所に半環の粘土紐を縦方向に貼り付けた痕跡が残っていた。すべての把手上部は根元で割れ、下部は剥がれていた。内外面を回転ナデ調整したのち、体部下半を底部に向かってケズリ調整し、底面との境目をケズリによって面取りする。底部は糸切りとみられるが、丁寧にケズリ調整が行われているため、その痕跡は確認できない。頸部から体部中程に、細い尖端を持つ工具で文字や記号を線刻していた。頸部は「□各（記号？）」（図26ａ）、体部は「□朋支」（同ｂ）と読め、「弥」（同ｃ）に似た文字も刻まれていた[5]。その他は欠損し文字のどの部位か不明なもの、２～４本の線であらわされた記号などがある。いずれも意味は不明である。胎土は長石が含まれる精良な土であった。３～７は平安時代前期遺物包

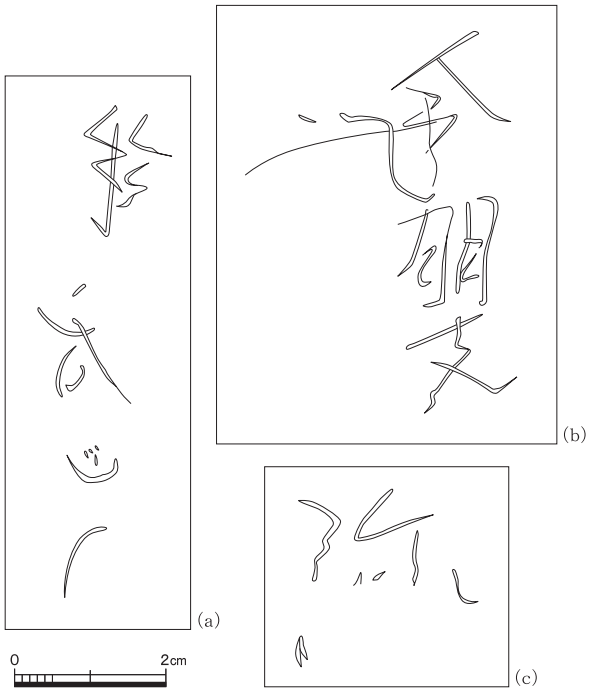



図26　須恵器四耳壷（２）の線刻（１：１）

含層から出土した。３は土師器皿である。頸部が大きく外反して、口縁端部が立ち上がる。胎土は精良である。４は土師器杯とみられる。頸部は大きく外反し、口縁端部は断面が三角形に摘み上げられている。胎土には、直径５㎜以下の砂粒が少量含まれる。５は緑釉陶器皿である。内面見込みに段を持ち、大きく外反しながら立ち上がり、口縁端部は外方へ摘み出される。口縁端部の断面形状は丸くなる。胎土は灰色を呈し、釉薬は濃緑色で、接地面から高台内面の釉薬を掻き落とす。美濃産または近江産とみられる。６は緑釉陶器椀である。底部から湾曲しながら立ち上がり、口縁端部を外方に摘み出す。胎土は精良で、灰黄色を呈し、全面に明緑色の釉薬を塗る。釉薬は所々に緑色の斑点が認められる。見込みには直径３㎜の目跡が残る。美濃または近江産である。７は灰釉陶器皿または椀の底部である。内外面を丁寧にナデ調整する。高台は貼り付けで、外面の身との境目に製作時の粘土皺が残る。時期は１・２が平安京Ⅱ期中から新段階、３～７が平安京Ⅲ期中段階とみられる[6)]。

**平安時代中期末の土器**（図27、図版41・42、表５）　８は建物１柱穴４から出土した完形の土師器皿である。頸部が大きく外反し、口縁端部を少し摘み上げる。９は柱穴36から出土した土師器杯である。器高が高く、口径15.1㎝の大型である。口縁部外面に２段の凹みナデを施し、口縁端部を外方に摘み出す。外面下部は粗いオサエ調整である。口縁端部が平安京内から出土する土器に比べて長いことから、在地産の可能性がある。10～15は柱穴39から出土した。10・11は土師器皿、12は土師器杯である。10は橙色を呈する。頸部で外方へ引き出され、口縁端部を丸く収める。口縁部の厚みが約４㎜と分厚い。外面上部の所々に整形時の粘土皺が残る。11は頸部を強くナデ調整して外反させ、口縁端部をわずかに摘み上げる。直径１㎜以下の砂粒を含む白色系の胎土である。12は底部から外反し、口縁端部を外方へわずかに摘み出す。口縁部外面に２段のナデ調整を施す。外面下部のオサエ調整は丁寧に施されている。白色を呈する、精良な胎土である。13は黒色土器椀である。内面から口縁部外面にかけて、丁寧に細かなミガキ調整を施す。口縁部外面の強いナデは、整形時に行われていた。口縁端部内面に浅い沈線を引く。胎土は精良で、色調は内外面黒色を呈する。14は樟葉産の瓦質土器椀である。緩やかに湾曲しながら立ち上がる器形である。内外面を非常に細かくミガキ調整する。口縁端部内面に浅く、細い沈線を施す。15は須恵器鉢の片口部分である。底部から緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部で上方に摘み上げる。片口部分は口縁端部を外方へ引き出す。口縁部外面にハケ状工具痕が残る。16～21は土坑17から出土した。16～18は土師器皿である。16は口縁部外面を強くなでて外反させ、口縁端部を摘み上げる。直径２㎜以下の砂粒が比較的多く含まれる胎土である。17は底部から緩やかに外反させ、口縁端部を摘み上げる。口縁部外面をナデ調整し、底部外面をオサエ調整する。直径１㎜以下の砂粒を少量含む精良な胎土で、色調は白色を呈する。18は体部を外反させながら立ちあげ、口縁端部を外方へ摘み出す。内外面を丁寧にナデ調整し、底部外面をオサエ調整するが、粘土積み上げ痕跡が明瞭に残る。19は口径15.8㎝の土師器杯である。土坑17第８層から出土した。底部から緩やかに外反させ、口縁端部を外方へ摘み出す。内面はナデ調整、口縁部外面は２段のユビナデ、外面下部はオサエ調整である。20・21は台付土師器皿の台部である。20は厚さ約７㎜ある皿底部に、「ハ」の字に広がる台部

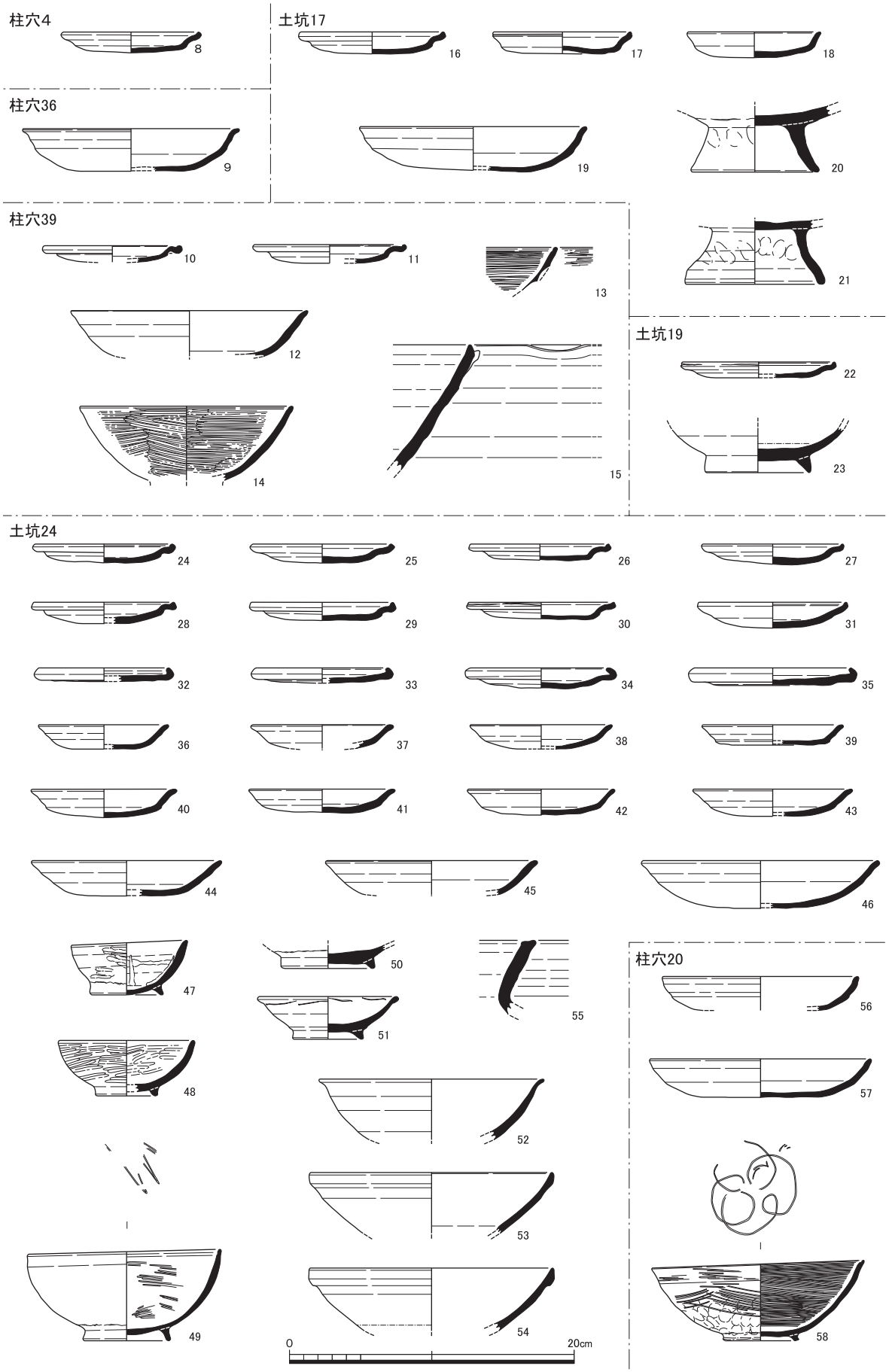



図27　平安時代中期末から後期前半出土土器実測図（1：4）

がナデよって貼り付けられたものである。外面には接合時に粘土を足しており、オサエ調整も確認できた。その他はナデ調整である。接地面には断面「レ」の字の窪みが２条平行に認められ、製作途中の工具痕とみられる。21は高台端部から中程にかけて大きく開き、高台上部に向かって窄まって上方に立ち上がる。高台上部から中程の内外面にユビオサエ痕跡が明瞭に残る。その他は丁寧にナデ調整を行う。20同様に、工具痕とみられる接地面に平行する断面「レ」字の窪みが４条確認できた。20・21のいずれも皿部分の破片が出土していない。22・23は土坑19から出土した。22は土師器皿である。頸部外面を強くなでて外反させ、口縁端部を摘み上げる。口縁端部外面に沈線状の窪みが所々に認められる。器高が約１㎝と低く、形も歪んでいる。23は灰釉陶器椀の底部である。器形は底部から湾曲しながら、立ち上がる。高台は貼り付けで、底部外面を含めて丁寧に回転ナデを施す。内面は使用のため、平滑になっている。24～55は土坑24から出土した。24～43は小型の土師器皿である。24～31は頸部外面をナデによって外反させ、口縁端部を摘み上げる器形である。28・30以外は歪んでおり、直径２㎜以下の砂粒を含む胎土である。24は直径１～２㎜の砂粒を多く含むやや粗い胎土である。頸部のナデは明瞭で、口縁部が肥厚している。25は体部下半と頸部の境が明瞭ではなく、口縁端部の立ち上がりも不明瞭である。26は調整が丁寧に行われており、内外面はナデ、外面下部はオサエである。27は体部下半と頸部との境目が曖昧で、口縁端部も丸い。底部外面には粘土接合痕が残る。28は橙色を呈する。全体的に丁寧な調整が施されている。29は外面頸部を強くなで、最終点で口縁部をなで上げたため、口縁部が大きく歪む。胎土には５㎜の長石が混じっており、口縁部の形状を著しく損なっている。底部外面に細い線状の工具痕が認められる。30は頸部外面に強いナデが施され、口縁端部外面に沈線が入る。底部に粘土接合痕が認められ、指頭圧痕の窪みがある。31は底部が他のものより丸い。底部外面に粘土接合痕が残る。32～35はコースター形を呈する。32は底部から口縁部までほぼ平らで、口縁端部を内方へ立ち上げる。全面をナデ調整し、特に底部と口縁部との境目を強くなでる。直径１㎜以下の砂粒を多く含む胎土である。33は32より口縁部を上方へ立ち上げ、口縁端部を内傾させる。直径１㎜以下の砂粒を多く含む粗い胎土である。34は頸部を強くなでて外反させ、口縁端部を内側に折り曲げる。内面から外面上部は丁寧なナデ調整、外面下部は指頭圧痕が明瞭に残るオサエ調整である。直径１㎜以下の砂粒を含むが少量のため、胎土は精良である。35は頸部を強くなでて外反させ、口縁部を上方へ立ち上げ、口縁端部を摘み上げる。全面を丁寧にナデ調整する。胎土は砂粒を含まず、精良である。36～43は底部から緩やかに外反し、口縁端部を外方に引き出す器形を呈する。36は底面にヘラ状工具の痕跡が残る。頸部外面を２段になでる。37は赤褐色系の色調を呈する。口縁端部は肥圧し、丸みを帯びる。38は口縁端部を少し長めに外方へ引き出す。頸部外面を１段ナデ調整する。39は底部外面に指頭圧痕が明瞭に残る。40は底面に三日月形の圧痕が認められ、爪跡とみられる。41は内面から外面上部を丁寧にナデ調整し、外面下部をオサエ調整する。口縁部外面は２段ナデを施す。口縁端部を長めに外方へ引き出している。42は口縁端部が丸みを帯びる。器形は底部付近が歪む。43は橙色を呈する。口縁部外面に２段ナデを施し、口縁端部内面を平滑になでる。口縁端部を長めに外方へ引き出す。直径２～３㎜の砂粒を少量含むが、精良な胎土である。44は中型で、大き

く外反する器形である。口縁部外面を２段にナデ調整している。色調は橙色を呈する。45は大型で、底部から外反させ、口縁端部をわずかに外方へ摘み出す。直径２㎜以下の砂粒を含み、やや粗い胎土である。46は大型の皿である。丸みを帯びた底部から、体部を大きく外反させながら立ち上げ、口縁端部をわずかに外方へ摘み出す。内面から口縁部外面を丁寧にナデ調整し、外面下部を指頭圧痕が明瞭なオサエ調整を施す。47・48は土師器椀である。47は丸底に「ハ」の字に開く高台を貼り付けている。口縁部を摘み上げ、口縁端部をわずかに外反させる。内外面を丁寧になでたのち、太い工具を使用して、外面を細かくミガキ調整する。内面は中程を円形および底から口縁部に向かって、暗文を描く。48は緩やかに湾曲させながら口縁部を立ち上げ、端部をわずかに摘み出す器形である。高台は貼り付けで、「ハ」の字に開く。口縁部外面を強くナデ調整したのち、内外面をミガキ調整する。49は口縁端部内面に浅い沈線を持つ樟葉型の瓦質土器椀である。丸みを帯びた底部から緩やかに立ち上がる断面半円形の器形に、「ハ」の字に開く高台を貼り付ける。口縁部外面は強いナデのため、口縁端部が外反する。内外面はナデ調整のち、ミガキ調整を全面に行う。見込みにはジグザグの暗文を描く。50は灰釉陶器皿または椀の底部である。底面を糸切りしたのち、高台を貼り付ける。底面中央が底割れしている。51は灰釉陶器皿である。底部から大きく外反させ、口縁端部を肥圧させて丸く収める。底面を糸切りして、丁寧に高台を貼り付ける。口縁部内外面に約２㎝幅の沈線状圧痕が認められ、工具痕とみられる。また、外面には爪状圧痕が数箇所に残る。見込みは使用のため、平滑になっている。内面に釉薬を塗布する。52は灰釉陶器とした椀である。湾曲させながら緩やかに外反し、口縁端部を外方へ引き出す。回転ナデ調整で、口縁部外面を強くなでる。釉薬は施されておらず、内外面の一部に自然釉が発生している。53・54は白磁椀である。体部を緩やかに外反させて立ち上げ、口縁端部外面を肥厚させる。53は54より口縁端部外面の肥厚度合が小さい。内面下部の見込みとの境目に段差を付ける。54は53より胎土が粗い。釉薬は外面中程までかけられている。55は須恵器甕の口縁部である。「く」の字に屈曲した頸部から、口縁部を外反させ、口縁端部外面を外方へ引き出す器形を呈する。口縁端部をわずかに窪ませる。口縁端部の出っ張りが磨滅しており、使用痕とみられる。９は平安京Ⅳ期中段階、８・10～55の時期は平安京Ⅳ期新段階を中心とする。土坑24出土遺物は良好な一括資料である。

**平安時代後期前半の土器**（図27、図版41、表５）　56～58は調査区南西の柱穴20から出土した。56・57は土師器皿である。56は底部から湾曲させながら口縁部を立ち上げ、口縁端部をわずかに外方へ摘み出す。頸部外面のナデ調整は強い。57は外反させながら口縁部を立ち上げ、口縁端部をわずかに外方へ摘み出す器形である。口縁部外面を２段になでる。色調は橙色系で、１～10㎜の白色粘土粒を少量含む精良な胎土である。58は瓦質土器椀である。外反しながら立ち上がり、口縁部を外面の強いナデ調整によってわずかに外反させる。低い高台を貼り付けるが、接地面を強くなでるため、外側へバリ状の張り出しができている。内面は密なミガキ調整、外面上部はナデのち粗いミガキ、外面下部はオサエ調整である。見込みには連結輪状の暗文を施す。内面の口縁端部直下に細い沈線を施す。大和型である。56～58の時期は平安京Ⅴ期中段階である。

## 表５　出土土器類観察表

| 番号 | 遺構 | 種類 | 器種 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 色調 | 胎土 | 調整、その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 流路18 | 土師器 | 甕 | 17.9 | (5.1) | — | 10YR7/3にぶい黄橙色 | 精良 | 口縁部内面：横方向のハケメ、内面下部：ケズリ、口縁部外面：ナデ、外面下部：縦方向のハケメ |
| 2 | 流路18 | 須恵器 | 四耳壷 | 8.7 | 17.3 | 12.55 | N5/0灰色 | 良 | 内外面：回転ナデ、外面下部・底面：ヘラケズリ、頸部外面から体部にかけて文字や記号の線刻あり |
| 3 | 包含層 | 土師器 | 皿 | — | (1.0) | — | 7.5YR8/4浅黄橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、外面下部：オサエ |
| 4 | 包含層 | 土師器 | 杯 | — | (1.6) | — | 10YR7/3にぶい黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、外面下部：オサエ |
| 5 | 包含層 | 緑釉陶器 | 皿 | (8.4) | 1.8 | (4.8) | 素地:N5/0灰色<br>釉:10YR3/2オリーブ黒色 | 精良 | 内外面：回転ナデ、貼り付け高台、全面に釉薬を掛けたのち高台内は掻き落とす |
| 6 | 包含層 | 緑釉陶器 | 椀 | (11.9) | 6.9 | (6.9) | 素地:2.5Y6/2灰黄色<br>釉:10YR6/2オリーブ灰色 | 精良 | 内外面：回転ナデ、貼り付け高台、内面に胎土目付着 |
| 7 | 包含層 | 灰釉陶器 | 皿または椀 | — | (1.8) | (6.9) | 2.5Y7/1灰白色 | 精良 | 内外面：回転ナデ、貼り付け高台 |
| 8 | 柱穴４ | 土師器 | 皿 | 9.5 | 1.5 | — | 10YR8/3浅黄橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 9 | 柱穴36 | 土師器 | 杯 | (15.1) | 3.0 | — | 2.5Y5/2暗灰黄色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 10 | 柱穴39 | 土師器 | 皿 | (9.4) | (1.2) | — | 5YR7/6橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 11 | 柱穴39 | 土師器 | 皿 | (10.5) | (1.3) | — | 2.5Y8/3淡黄色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 12 | 柱穴39 | 土師器 | 杯 | (16.5) | (3.2) | — | 2.5Y8/3淡黄色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 13 | 柱穴39 | 黒色土器 | 椀 | — | (3.0) | — | N2/0黒色 | 精良 | 内外面：ミガキ、口縁端部内面：沈線、Ｂ類 |
| 14 | 柱穴39 | 瓦質土器 | 椀 | (14.8) | (5.2) | — | N5/0灰色<br>素地:5Y8/1灰白色 | 精良 | 内外面：ミガキ、口縁端部内面：沈線 |
| 15 | 柱穴39 | 須恵器 | 片口鉢 | (7.5) | (8.8) | — | N5/0灰色 | 良 | 内外面：回転ナデ |
| 16 | 土坑17 | 土師器 | 皿 | 10.0 | 1.55 | — | 7.5YR8/4浅黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 17 | 土坑17 | 土師器 | 皿 | 9.3 | 1.8 | — | 10YR8/2灰白色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 18 | 土坑17 | 土師器 | 皿 | 9.6 | 1.55 | — | 2.5Y8/2灰白色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 19 | 土坑17 | 土師器 | 杯 | (15.8) | 3.2 | — | 7.5YR8/6浅黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 20 | 土坑17 | 土師器 | 台付皿 | — | (4.65) | 8.8 | 7.5YR7/6橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、高台上部外面：オサエ、台部貼り付け、接地面に工具痕あり |
| 21 | 土坑17 | 土師器 | 台付皿 | — | (4.45) | 9.6 | 2.5Y7/3浅黄色 | 良 | 内外面：ユビナデ、高台上部外面：オサエ、台部貼り付け、接地面に工具痕あり |
| 22 | 土坑19 | 土師器 | 皿 | (10.7) | 1.1 | — | 10YR8/3浅黄橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 23 | 土坑19 | 灰釉陶器 | 椀 | — | (3.15) | (7.2) | 2.5Y7/1灰白色 | 精良 | 内外面：回転ナデ、底面：ナデ、貼り付け高台、内面に釉塗布・使用痕あり |
| 24 | 土坑24 | 土師器 | 皿 | 9.6 | 1.3 | — | 10YR7/3にぶい黄橙色 | やや粗 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 25 | 土坑24 | 土師器 | 皿 | 9.7 | 1.35 | — | 7.5YR8/4浅黄橙色 | やや良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 26 | 土坑24 | 土師器 | 皿 | 9.7 | 1.2 | — | 10YR8/4浅黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 27 | 土坑24 | 土師器 | 皿 | 9.9 | 1.5 | — | 7.5YR8/4浅黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 28 | 土坑24 | 土師器 | 皿 | (9.9) | 1.5 | — | 5YR7/6橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 29 | 土坑24 | 土師器 | 皿 | 9.9 | 1.3 | — | 7.5YR8/6浅黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 30 | 土坑24 | 土師器 | 皿 | 10.2 | 1.2 | — | 7.5YR8/4浅黄橙色 | やや良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |

| 番号 | 遺構 | 種類 | 器種 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 色調 | 胎土 | 調整、その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 31 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (10.3) | 1.8 | — | 7.5YR8/4 浅黄橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 32 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (9.0) | 0.95 | — | 10YR8/3 浅黄橙色 | 粗 | 内外面：ユビナデ、内外面下部：ナデ |
| 33 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (9.2) | 1.1 | — | 10YR8/4 浅黄橙色 | 粗 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 34 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | 9.75 | 1.5 | — | 7.5YR8/6 浅黄橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 35 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (10.9) | 1.25 | — | 7.5YR8/3 浅黄橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、：オサエ |
| 36 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (9.2) | 1.7 | — | 10YR8/4 浅黄橙色 | やや良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、：オサエ |
| 37 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (9.4) | (1.7) | — | 5YR7/6 橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、外面下部：オサエ |
| 38 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (9.8) | 1.7 | — | 7.5YR7/6 橙色 | やや良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 39 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (9.9) | 1.45 | — | 7.5YR8/4 浅黄橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 40 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | 9.9 | 2.0 | — | 7.5YR8/4 浅黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 41 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | 10.0 | 1.7 | — | 10YR8/4 浅黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 42 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (10.3) | 1.8 | — | 10YR6/3 にぶい黄橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 43 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (11.1) | 1.9 | — | 5YR7/6 橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 44 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (13.2) | 2.5 | — | 7.5YR8/4 浅黄橙色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 45 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (14.6) | 2.4 | — | 7.5YR7/4 にぶい橙色 | やや粗 | 内外面：ユビナデ、外面下部：オサエ |
| 46 | 土坑 24 | 土師器 | 皿 | (16.4) | (3.35) | — | 2.5Y8/2 灰白色 | 精良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 47 | 土坑 24 | 土師器 | 椀 | 8.25 | 3.8 | 4.9 | 7.5YR7/6 橙色 | 精良 | 内面：ナデのち暗文、外面：ナデのちミガキ、貼り付け高台 |
| 48 | 土坑 24 | 土師器 | 椀 | (9.4) | 3.9 | (4.0) | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | 精良 | 内外面：ミガキ、貼り付け高台 |
| 49 | 土坑 24 | 瓦質土器 | 椀 | 13.5 | 6.4 | 5.95 | 5Y4/1 灰色 | 精良 | 内外面：ナデのちミガキ、見込み：暗文、貼り付け高台、樟葉型 |
| 50 | 土坑 24 | 灰釉陶器 | 皿または椀 | — | (1.6) | 6.3 | N7/0 灰白色 | やや良 | 内外面：回転ナデ、底面：糸切り、貼り付け高台 |
| 51 | 土坑 24 | 灰釉陶器 | 皿 | (9.6) | 3.0 | (4.9) | 2.5Y7/2 灰黄色 | 精良 | 内外面：回転ナデ・釉塗布、底面：糸切り、貼り付け高台、内外面の所々に工具痕などあり |
| 52 | 土坑 24 | 灰釉陶器 | 椀 | (15.7) | (4.3) | — | 10YR7/4 にぶい黄橙色 | 精良 | 内外面：回転ナデ・自然釉付着 |
| 53 | 土坑 24 | 輸入磁器（白磁） | 椀 | (16.8) | (4.3) | — | 素地：N8/0 灰白色<br>釉：7.5Y7/1 灰白色 | 精良 | 内外面：回転ナデ・施釉 |
| 54 | 土坑 24 | 輸入磁器（白磁） | 椀 | (17.0) | (4.4) | — | 素地：N8/1 灰白色<br>釉：5Y7/1 灰白色 | 精良 | 内外面：回転ナデ・施釉 |
| 55 | 土坑 24 | 須恵器 | 甕 | — | (5.2) | — | N4/0 灰色 | 粗 | 内外面：回転ナデ |
| 56 | 柱穴 20 | 土師器 | 皿 | (13.7) | (2.35) | — | 7.5YR8/4 浅黄橙色 | やや粗 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 57 | 柱穴 20 | 土師器 | 皿 | (15.5) | 2.7 | — | 7.5YR7/4 にぶい橙色 | 良 | 内外面：ユビナデ、内面下部：ナデ、外面下部：オサエ |
| 58 | 柱穴 20 | 瓦質土器 | 椀 | 15.0 | 6.65 | 4.9 | N3/0 暗灰色 | 精良 | 内外面：ミガキ、外面下部：ユビオサエのちミガキ、口縁端部内面：沈線、見込み：暗文、貼り付け高台、大和型 |

※推定口径・推定底径・残存高は（　）を付けた。

## （３）土製品（図28・29、表６）

フイゴの羽口片は建物２柱穴９・10、柱穴20、溝33、土坑12・13・17・19・30などから出土しており、調査区周辺に散乱していたとみられる。孔の部分が残存する59・60のみ、写真を掲載した。

59は土坑17から出土した。残存長３㎝、残存幅４㎝、残存高5.8㎝を測る。孔の直径は約２㎝とみられる。羽口部分は良く焼けて赤橙色を呈し、炉側のガラス質部分が溶け出して、釉化および気泡化している。60は建物２柱穴10から出土した。残存長7.2㎝、残存幅5.4㎝、残存高8.1㎝、孔の直径は約2.8㎝である。羽口内側は橙色化し、外側は灰色化していた。先端部に炭が少量付着する。羽口外面には鉄滓の大きな塊が付着していた。

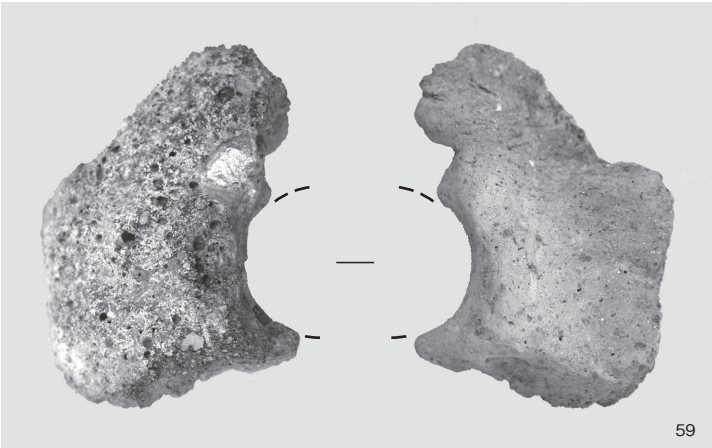



図28　フイゴの羽口（59、ほぼ１：１）

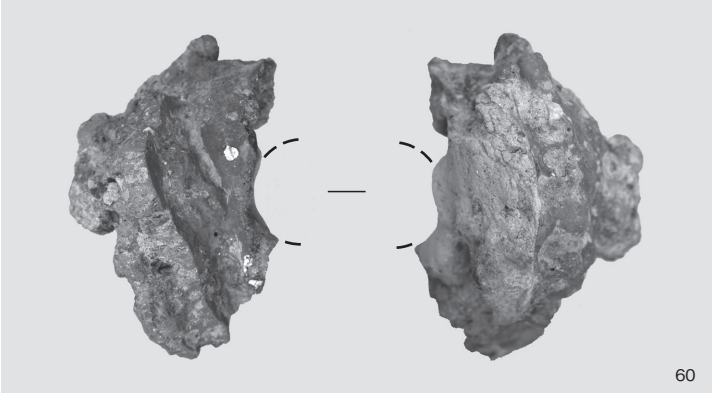



図29　フイゴの羽口（60、ほぼ１：２）

59・60の時期は、平安時代中期末とみられる。

## （４）石製品（図30、図版42、表６）

61・62は砥石である。61は表裏面および右側面の約３分の２が平滑になっており、線状の研磨痕が認められた。その他は自然面が残っており、整形は行っていない。白色を呈する変成岩とみられる。62は下面が平滑になっており、中央部分がわずかに窪む。上面は高い部分から低い部分にかけて、大きく抉れていることから、敲石としても利用していた可能性がある。右側面にも敲打痕とみられる痕跡が認められる。全体に丸くなるように、整形したとみられる。直径３㎜以下の砂粒を多量に含む黄灰色の堆積岩を使用している。63は石皿とみられる。表裏面中央が少し窪む。平滑さはほとんどない。表裏面や側面に敲打痕が認められることから、整形を行っているとみられる。上下の欠損部は、使用後に割られた可能性がある。砂岩である。64は砥石および台石である。断面が三角形を呈し、２面を砥石として利用し、もう一面には整形時の敲打痕が所々に残る。表面は非常に平滑であるが、裏面は部分的に浅く窪み、擦痕が認められる。下部は使用する際に割ったとみられるが、上部および表面左上の割れは火を受けた際に割れたとみられる。表裏面および側面には、

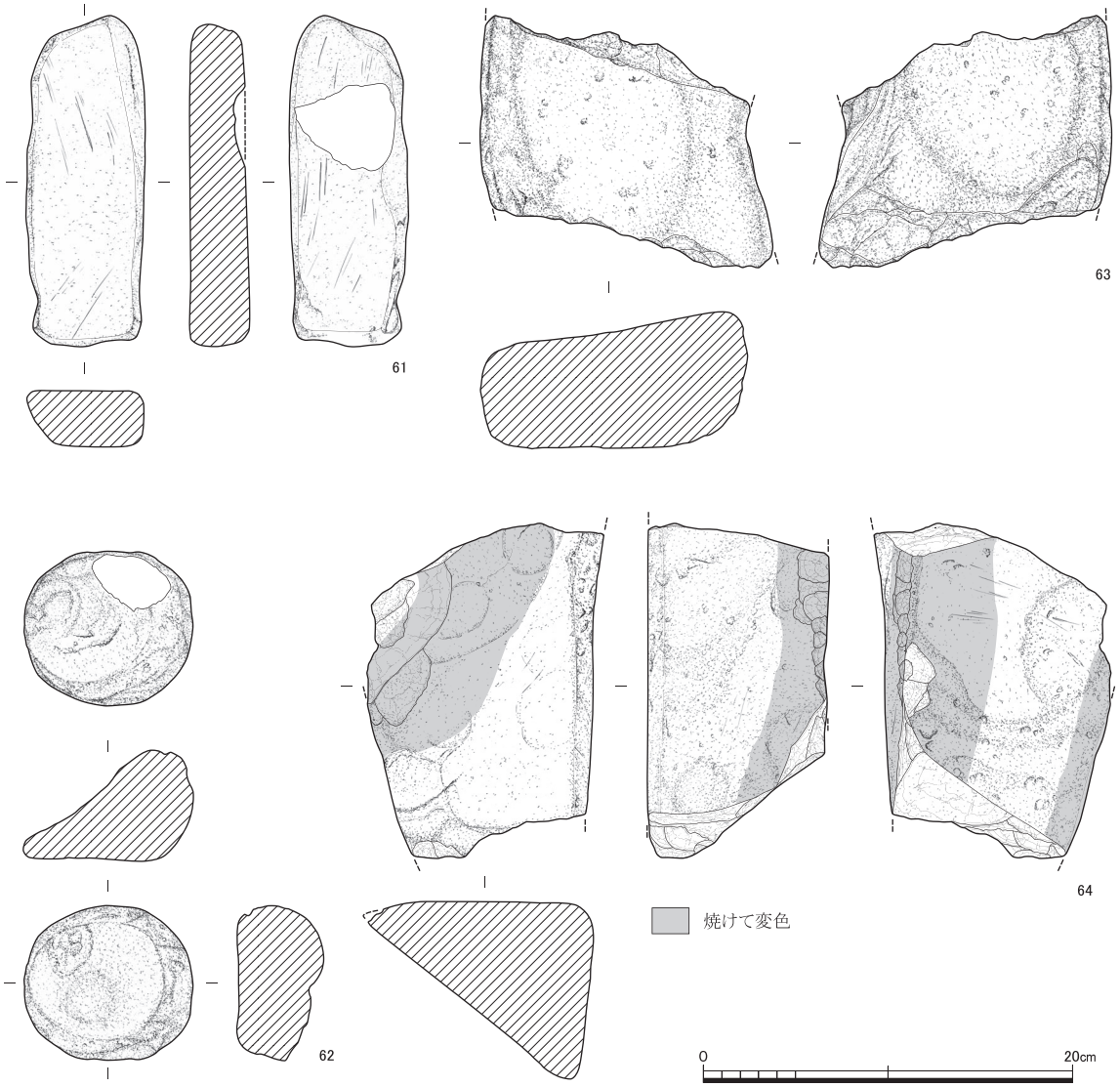



図30　出土石製品実測図（１：４）

火によって部分的に赤黒色に変色している。鉄滓などが同じ遺構から出土していることから、鍛冶を行う際の台石として使用した可能性がある。目の細かい砂岩である。61は土坑17、62は土坑19、63は土坑24、64は土坑30から出土した。いずれも時期は、平安時代中期末である。

これらの他に64と同じように、加工痕があって、道具として使用していた石製品を台石（炉の中の支柱も含む）として再利用しているものが、土坑17からも出土している。また、土坑30からは焼けた痕跡のない研磨痕を持つ花崗岩が出土している。

## （５）鉄製品（図31～34、図版42、表６）

図として掲載した以外の鉄釘は他に10点あり、土坑17・24だけでなく、建物１柱穴１、建物２柱穴８などからも出土している。また、土坑17からは鉄滓が遺物袋（10ℓ）一杯分出土した。

65～71は釘である。いずれも断面形状は方形である。65～69は片側に釘頭が出っ張り、70は頭が鋲のように丸い。71は頸部分で外側に曲げたのち、先端を巻き込んで丸くしたもので、今回した

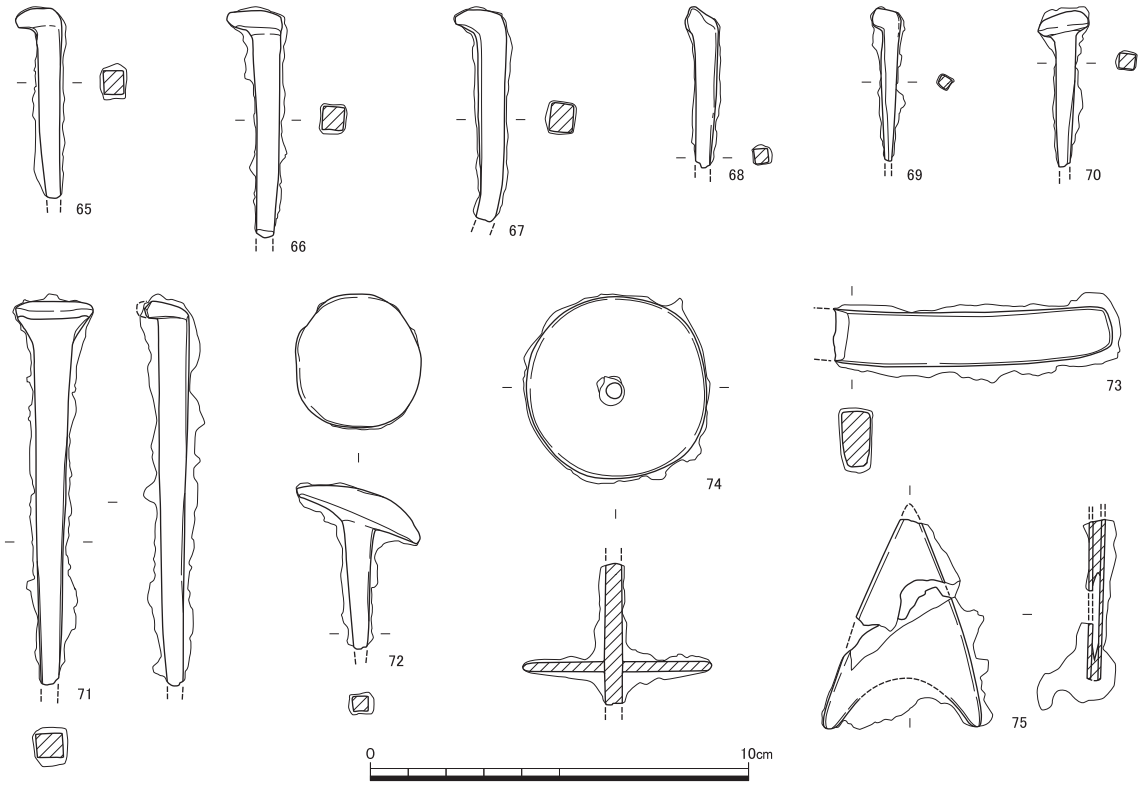



図31　出土鉄製品実測図（１：２）

釘の中で最も太くて長い。72は飾り鋲である。釘頭は直径約２㎝の円形を呈する。横からの形状は茸形で、釘断面は方形である。73は刀子とみられる。断面から柄部とみられる。平面形は長方形を呈し、わずかに湾曲している。詳細は不明である。74は紡錘車である。直径約５㎝の円盤中央に直径約４㎜の棒を差し込んだとみられる。目視およびＸ線写真[7]で確認した限りでは、接合部を溶解したような痕跡は認められなかった。棒部の両端は欠損しているため、形状は不明である。75は鏃である。基部は凹部であるが、茎が付いていたかは不明であった。Ｘ線写真には、凹部が弧を描き、突出部が見られないことから、無茎とみられる。先端は欠損しているが、長さ5.5㎝程度になるとみられる。平面形は鉄鏃編年の長三角形Ⅲ式に相当するが[8]、茎はない。この時期の鉄製鏃としては、今まで確認されていない形式の可能性がある。65は平安時代前期遺物包含層上面、66は土坑17、67・68は土坑25、69・70・72は土坑24、71は柱穴39、73は建物２柱穴10、74・75は建物１柱穴４から出土した。時期はいずれも平安時代中期後半である。76（図32）は建物２柱穴９出土の鉄滓である。椀形滓と呼ばれる炉の窪みに溜った鉄滓であるため、外面は椀状に湾曲し、内面は円形に窪む。１㎝以下の炭化材や良く焼けた土師質片が付着している。77は土坑17から出土した鍛造鉄片（図33）と油滴（図34）の一括

図32　建物２柱穴９出土鉄滓（76）

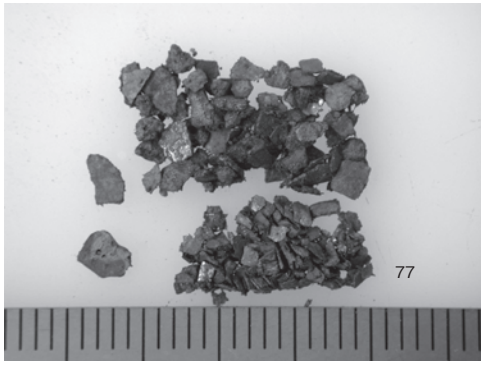



図33　土坑17出土鍛造鉄片（77、ほぼ２倍）

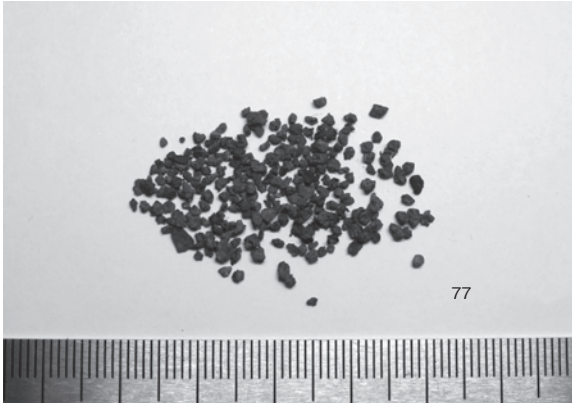



図34　土坑17出土油滴１～２㎜（77、ほぼ１：１）

である。遺物袋に半分程度（約５ℓ）の水洗選別の結果、鍛造鉄片は１㎜以下が0.095ｇ、１～２㎜が0.253ｇ、２～４㎜が0.018ｇ採取できた。また、磁石に付着する油滴とみられるものは、１㎜以下が3.780ｇ、１～２㎜が1.850ｇ、２～４㎜が3.452ｇを採取した。

表６　出土土製品・石製品・鉄製品観察表

| No. | 遺構名 | 種類 | 材質 | 寸法(cm) | 重さ(g) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 59 | 土坑17 | フイゴ羽口 | 土 | 長さ（3.0）、幅（4.0）、高さ（5.8）、穴径（2.0） | 40.891 | 炉側：ガラス質の釉化・気泡化 |
| 60 | 柱穴 10 | フイゴ羽口 | 土 | 長さ（7.2）、幅（5.4）、高さ（8.1）、穴径（2.8） | 238 | 先端部：炭付着、羽口外面：鉄滓付着 |
| 61 | 土坑 17 | 砥石 | 変成岩 | 長さ 17.9、幅 6.5、厚さ 3.0 | 644 | 表・裏・側面：研磨痕 |
| 62 | 土坑 19 | 砥石 | 堆積岩 | 長さ 9.1、幅 8.4、厚さ：4.0 | 453 | 下面：平滑、上面：窪む、敲石としても使用か |
| 63 | 土坑 24 | 石皿 | 砂岩 | 長さ 13.7、幅 15.9、厚さ 7.4 | 1,936 | 表・裏面：窪む、全面：研磨痕 |
| 64 | 土坑 30 | 砥石・台石 | 砂岩 | 長さ 18.1、幅 12.8、厚さ 9.6 | 1.942 | 表・裏面：研磨痕、側面など：敲打痕、部分的に火熱で変色 |
| 65 | 流路 18 | 釘 | 鉄 | 長さ 5.05、幅 1.3、厚さ 1.0 | 9.857 | 断面：方形、釘頭：片側に出っ張る |
| 66 | 土坑 17 | 釘 | 鉄 | 長さ 6.1、幅 1.6、厚さ 0.85 | 8.255 | 断面：方形、釘頭：片側に出っ張る |
| 67 | 土坑 25 | 釘 | 鉄 | 長さ 5.7、幅 1.5、厚さ 0.9 | 10.024 | 断面：方形、釘頭：片側に出っ張る |
| 68 | 土坑 25 | 釘 | 鉄 | 長さ 4.25、幅 0.9、厚さ 0.55 | 3.743 | 断面：方形、釘頭：片側に出っ張る |
| 69 | 土坑 24 | 釘 | 鉄 | 長さ 4.1、幅 0.9、厚さ 0.4 | 2.958 | 断面：方形、釘頭：片側に出っ張る |
| 70 | 土坑 24 | 釘 | 鉄 | 長さ 4.2、幅 1.3、厚さ 0.6 | 5.240 | 断面：方形、釘頭：丸い |
| 71 | 柱穴 39 | 釘 | 鉄 | 長さ 10.3、幅 2.1、厚さ 1.8 | 30.933 | 断面：方形、釘頭：内側に巻き込む |
| 72 | 土坑 24 | 飾鋲 | 鉄 | 長さ 3.9、幅 3.3、厚さ 3.6 | 28.276 | 断面：方形、頭部：円形 |
| 73 | 柱穴 10 | 刀子 | 鉄 | 長さ 7.6、幅 2.4、厚さ 0.9 | 30.361 | 平面：長方形、断面：二等辺三角形、刃部か |
| 74 | 柱穴４ | 紡錘車 | 鉄 | 円盤直径 5.0、同厚さ 0.25、棒直径 0.4、棒長 3.2 | 36.028 | 円盤に棒が垂直に接合 |
| 75 | 柱穴４ | 鏃 | 鉄 | 長さ 5.5、幅 4.5、厚さ 2.1 | 27.665 | 凹基、茎部の有無は不明 |
| 76 | 柱穴９ | 滓 | 鉄 | 縦 9.0、横 9.4、厚さ 4.2 | 424 | 椀形、炭など付着 |
| 77 | 土坑17 | 鍛造鉄片・油滴 | 鉄 | 1㎜以下・1～2㎜・2～4㎜を各々数gずつ | 合計 9.448 | 水洗選別で確認 |

## 5．まとめ

今回の調査地では、平安時代の遺構が良好に遺存していることが明らかとなった。先述したように、山科盆地では平安時代の遺跡確認例は少ない。これまでに検出した平安時代の遺構を列記すると、安朱遺跡で平安時代前期の墓および平安時代末期から鎌倉時代の建物・溝、中臣遺跡で平安時代前期の建物や井戸、平安時代中期の墓および平安時代末期から鎌倉時代の建物、大宅廃寺で奈良時代の堂舎が焼失後、平安時代後期に小堂が再建されている。遺物のみの確認では、大塚遺跡の平安時代前期の遺物、平安時代中期の遺物は安朱遺跡や山科本願寺跡10次の際に他の時期の遺構に混じって出土している。このように、11世紀後半の院政期開始前後にあたる遺構・遺物がまとまって出土したのは、山科盆地内では少なく、盆地内において平安時代前期と後期を繋ぐ遺構が検出できたことや当地において平安時代の遺構が遺存していたことが明らかになったのは、大きな成果である。また、平安時代前期末から中期初頭の流路18に投棄された遺物やその上層の遺物包含層から出土した遺物が磨耗していないことから、平安時代前期から中期の時期にも近辺に集落があった可能性が指摘できる。今回の調査では、左義長町遺跡の弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構および遺物は検出できなかったが、調査地北側では竪穴建物が確認されている。これらのことから、調査地一帯には比較的安定した微高地が形成されており、そこに弥生時代後期から平安時代後期前半にかけて、断続しながらも居住空間として使用され得る立地・地形であったとみられる。

検出した建物１・２や溝33の方位は、ほぼ正方位に近い方向であった。現在の都市計画図では、北東から南西方向の自然地形に沿った地割や、山科本願寺期とみられる地割以外に、東西・南北方向に通った地割も認められる。自然地形に逆らった方形や長方形区画は、従来条里に基づくものと解釈され、今回検出した遺構もこれらにほぼ沿っていることからも、条里制地割に則って造られたものとみられる。山科の条里を示す史料には『山城國山科郷古図』[9]と呼ばれる古図があり、これを基に条里研究が進み、いくつかの復元も行われている[10]。今回検出した溝33は、条里の復元および研究の一助に成り得る可能性があり、今後の調査・研究に期待したい。また、条里制の施行にはいくつかの画期があり、近畿一円では12世紀頃に画期の一つが当たるといわれ、その時期に出現するといわれている在地領主居館が、条里区画に規制されて造られていることが多い[11]。今回検出した建物跡や区画溝および区画の外に設けられた鉄製品製作工房とみられる遺構群は、領主居館の萌芽的な存在という見方もできることから、遺構の広がりに注目し、今後検討を加えていく必要があろう。

今回は、山科本願寺の南西隅、内寺内の外側と推定される地点を調査した。この場所は、1984年度に行われた立会調査で確認された内寺内外濠とみられる濠跡の東に位置している。これに対応する土塁は本調査の敷地東側の隣地に想定されており、調査区はその間に位置していた。現状では山科本願寺関係の遺構が周辺に残されていないことから、開発がそれほど進んでいないとみられる大正時代初期の地図[12]を確認した。これには、田畑の区画や山科本願寺の土塁、濠跡とみられる水路などが測量されている。この地図から、土塁やオチリ池、水路、道路、旧町境界線を抜き出して

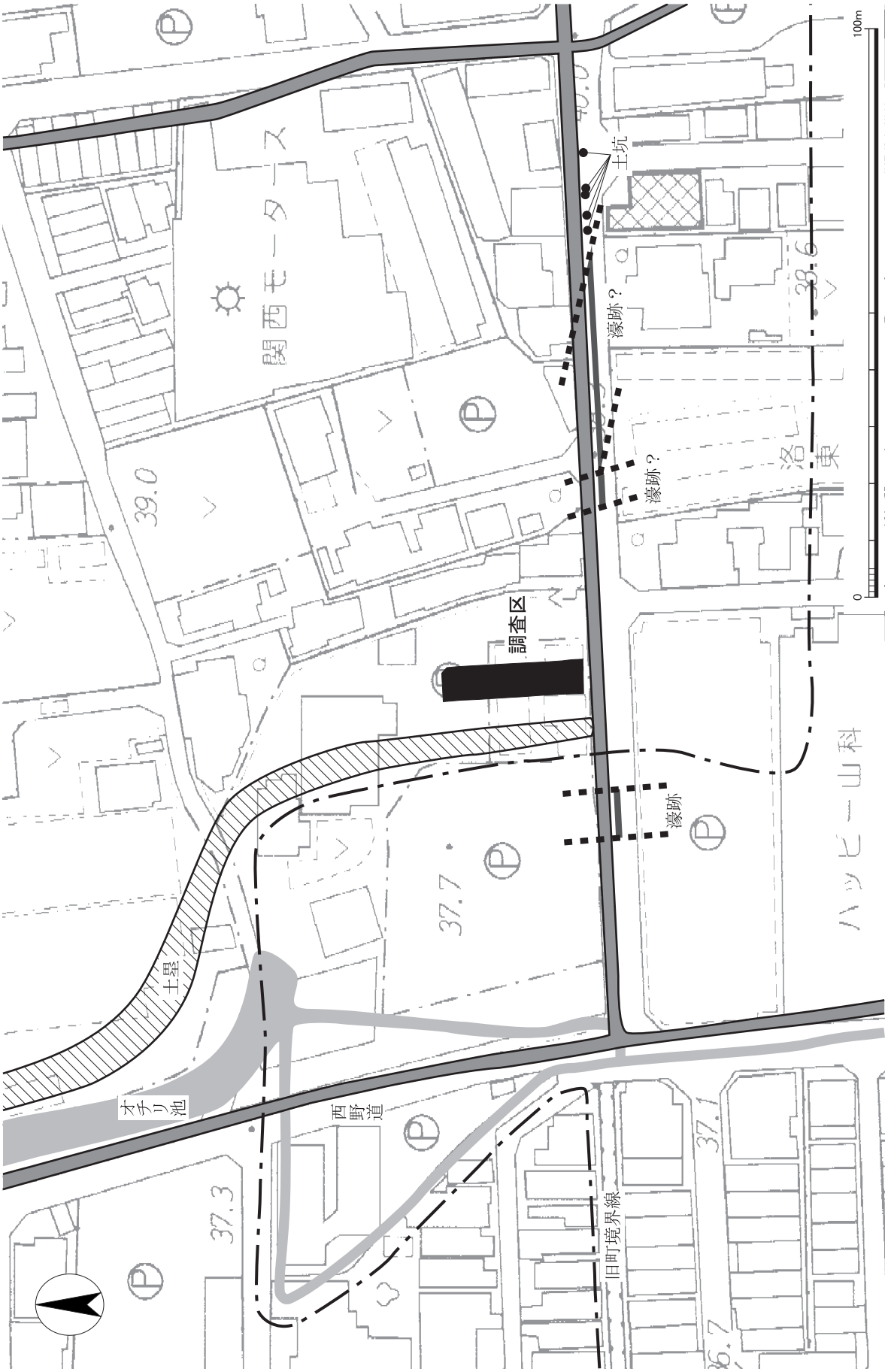



図35　山科本願寺遺構推定図（1：1,000）

トレースし、現在の地図に重ね合わせたものが図35である。西野道に沿って濠跡の名残であるオチリ池があり、その東側に土塁が平行する。一旦、東へ折れた土塁はすぐに南へ向きを変え、調査区南側の道路まで続いていた。土塁西側には旧町境界線を確認することができる。この境界線は、調査地南の東西道を超えて南側へ延び、さらに東へと向きを変えることから、土塁の軌跡を踏襲していたとみられる。図35には、1984年の調査で確認した濠跡や土坑を記入し、今回の調査区との関係を見た。その結果、1984年に検出した濠跡のすぐ東側に土塁が位置することになり、濠と土塁が今までの調査結果から想定される位置関係に収まった。したがって、今回の調査地は土塁の東側、すなわち内寺内になると考えられる。図36は図５の14地点で検出した土塁断面を利用して作成した、調査区と濠および土塁の関係を示したイメージ図である。[13)]

ここで問題となるのが、今回確認した中世の盛土または整地層（西壁第12・15・16・18・20層、南壁第４～７層）である。この層は、調査区全面で確認しており、南北方向でみるとほぼ水平に堆積し、耕作溝が確認できないことや、土が土壌化していなかったことから、耕作土ではないと考えている。図５の14地点でも、土塁の内側では大規模な整地を行っており、その深さは1.5～1.8ｍあったとされており、今回の盛土とした層もこれと同じ整地層とみられ、山科本願寺を造った際の造成土（盛土）または整地層であった可能性を考えている。ただし、整地層の上面でこの時期の遺構や遺物が検出できなかったのは、上面を削平されてしまったからだとみられる。遺存状態によっては、今後山科本願寺期の遺構が検出できる可能性もあり、特に今回の調査のように土塁など関連遺構が地上に遺存していないところほど、細心の注意をもって調査にあたることが必要であろう。この地区の山科本願寺の土塁跡が、これまでの想定よりも西へ25ｍ程度ずれる可能性が強くなった。

また、平安時代中期末の土師器皿の胎土には、砂粒の含まれないもの（図25－28など）と径２㎜以下の砂粒を含むもの（同32など）の２種類が認められた。前者は平安京内で出土する土師器皿の胎土と同じであるが、後者は平安京内出土のものとは異なる胎土を持つだけではなく、器形も口縁部の肥厚などに違いがある。後者が山科で作られた在地の土師器皿であると現時点では言えないが、類例の増加を待って検討を加えたい。

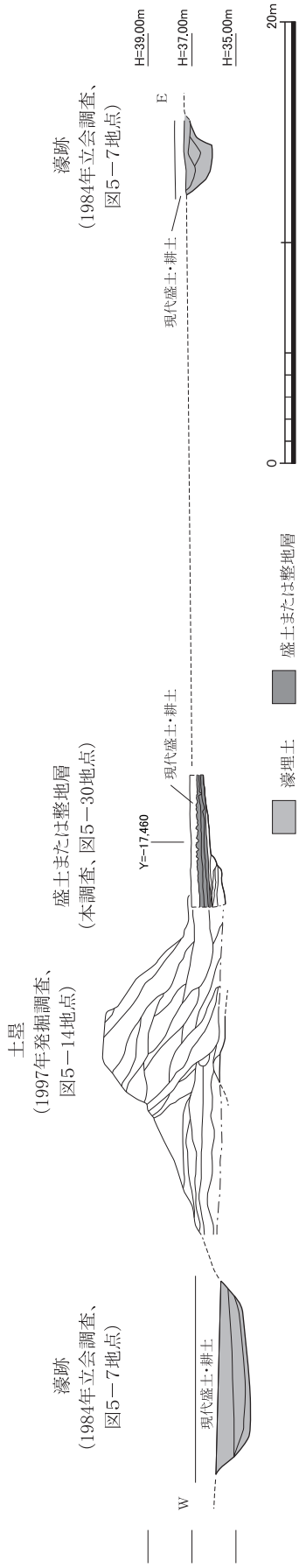



図36　山科本願寺関連遺構断面想定図（１：300）

その他、建物１柱穴４内では、祭祀を行ったとみられる遺物のセットが出土した。完形の土師器皿上に鉄鏃を置き、土師器の下には鉄製紡錘車を埋納していた。断面観察から、柱材を抜いてから行われた行為であったことが判明した。同様の例を確認することができていないが、神主らが居住していたと考えられている埼玉県氷川神社東遺跡からは、平安時代の鉄製の鏃と紡錘車、飾鋲、口琴などが出土した事例がある。鉄製品であったということに加え、特異な出土例を確認した柱穴４は、身舎南東角の柱穴であったことからも、廃絶時の祭祀が行われたと考えられる。

最後に、土坑17からは道具として使用されたとみられる石を投棄したのちに、土師器皿を正位置で据え、台付土師器皿の台部を廃棄していた。この遺構に関しては、何らかの儀式的行為を行った形跡が認められたということを指摘するに留めておく。土坑17などの内側に焼け面は確認できなかったが、周辺の土坑からもフイゴの羽口や鉄滓、鍛造鉄片が出土しており、調査区南一帯では鉄製品が作られていたことが確実となった。

註

１）　明治中期の仮製図は旧陸地測量部によって1880～1890年代に測量し発行されたもの、大正初期の正式図は1910年前後に測量し、発行されたものである。何れも原図は２万分の１である。

２）　『京都市遺跡地図台帳』第８版　京都市文化市民局　2007年を参照した。

３）　参考文献として、『皇太后の山寺－山科安祥寺の創建と古代山林寺院』　柳原出版株式会社　2007年、『戦国の寺・城・まち－山科本願寺と寺内町－』　山科本願寺・寺内町研究会　1998年、『京都市の地名』（『日本歴史地名大系』第27巻）　平凡社　1979年を主に使用した。

４）　『大日本古記録　二水記　四』　東京大学史料編纂所編　岩波書店　1997年

５）　京都産業大学文化学部の吉野秋二准教授にご教示頂いた。記して感謝申し上げます。

６）　土師器の型式編年については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年に拠る。

７）　２mA・90kv・30Secおよび２mA・70kv・30Secで撮影した。

８）　津野　仁「鉄鏃の編年」『日本古代の武器・武具と軍事』　吉川弘文館　2011年

９）　原本の存在は確認されておらず、東京大学史料編纂所に『山科地方古図』の焼付写真が所蔵されている（寺嶋雅子「『山城国山科郷古図』の成立と伝来」『中央史学』第３号　中央史学会　1980年）。「古図」原本の成立は12世紀末から13世紀中頃とされている。寺嶋氏は保安年間（12世紀前半）に成立し、大永年間（1520年代）まで追加の書き込みが行われたとしている。

10）　調査地は、『宇治市史』よれば五条十六里社里、山田邦和氏の研究によれば四条十六里枌本里とされている。何れも、縮小された地図に復元されているものを読んだため、誤読があれば、その責は筆者にある。しかし、基準点も研究者によって異なり、定説をみない。
『宇治市史』第１巻　宇治市市役所　1973年
山田邦和「太皇太后藤原順子の後山階陵」『皇太后の山寺－山科安祥寺の創建と古代山林寺院』　柳原出版株式会社　2007年

11）　広瀬和雄「領主居館の成立と展開－西日本を中心として－」『鎌倉時代の考古学』　高志書院　2006年

12）　註１に同じ。大正初期の正式図は着色され、朱書きの道路などが確認できる。

13）　報告されていた東側の濠跡の断面と平面の濠幅が合わなかった。平面図が1,000分の１で縮尺が大きいことから、こちらの方を誤測量とみなして、平面図の西肩口に断面図の西肩口を合わせて図36を作成した。

# X　山科本願寺南殿跡

## 1．調査経過

今回の調査は、住宅の新築工事に伴う文化庁国庫補助事業による埋蔵文化財発掘調査である。調査地は史跡山科本願寺南殿跡の南に位置し、外郭に比定されていることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）指導により、遺構の残存状況を確認するための発掘調査を実施することとなった。調査にあたっては文化財保護課の指導を受けながら進めた。

調査は2013年９月24日から10月31日まで実施した。調査区は、敷地の北東部に１区、南西部に２区を設定した。１区は東西約９ｍ、南北約６ｍの方形に東西約３ｍ、南北約15.5ｍの方形を合わせた形で、面積は約100㎡である。２区は東西約５ｍ、南北約６ｍの方形に東西約２ｍ、南北約７ｍの方形を合わせた形で、面積は約44㎡である。調査面積の合計は約144㎡である。

調査は、１区の現代盛土と耕作土を重機による掘削で除去した後、手作業で現代攪乱の掘削、遺構検出などの作業を行った。２区の現代盛土と砂礫層も機械掘削で除去した後、手作業で耕作層の掘り下げ、現代攪乱掘削、遺構検出などを行った。遺構面以下については現地保存されることから、一部を除き遺構の掘削は行わず、平面図・断面図の作成、断割調査、写真撮影などによって記録を作成し、終了後、埋め戻しを行った。

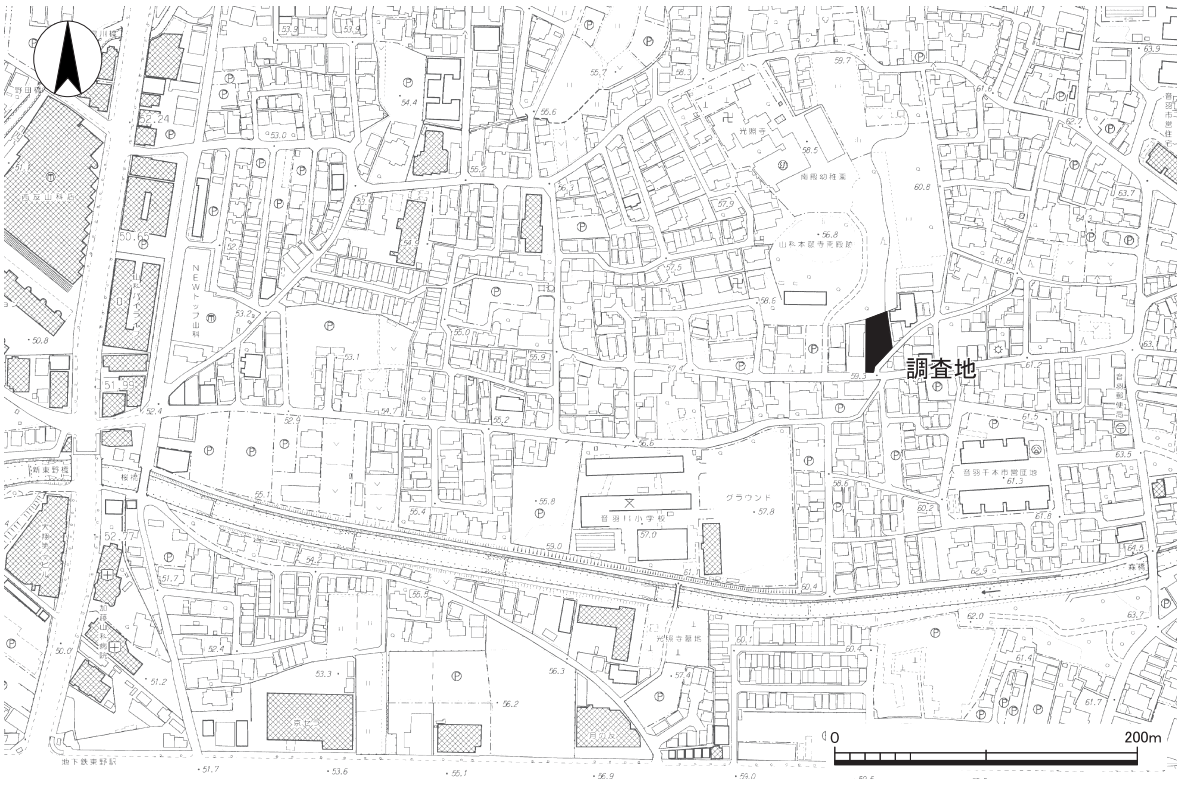



図１　調査位置図（１：5,000）

## 2．位置と環境

調査地は山科盆地の東北部に位置する。北東には四ノ宮川が北東から南西へ流れ、南には音羽川が東から西へ流れる。山科本願寺跡は、四ノ宮川と音羽川が合流する地点の西側一帯に広がる。その約１㎞東に山科本願寺南殿跡は位置する。2002年にその一部が山科本願寺土塁跡とともに史跡に指定されている。現在は北部に光照寺が建ち、境内の南側に土塁跡、濠跡、園池跡、築山、建物跡が良好に残存する。調査地は残存する内郭南辺の濠跡の南に隣接し、濠跡の南東隅より約15ｍ西にある。

山科本願寺は、浄土真宗中興の祖である蓮如が文明10年（1478）から造営を開始したものである。主要堂舎がある御本寺、有力な坊官達の屋敷がある内寺内、門徒の職人や商人などの居住区である外寺内の３つの郭からなる。それぞれの郭は、土塁と濠や自然河川により囲まれ、防御施設を持つ寺内町（環濠城塞都市）であった。その規模は、東西約800ｍ、南北約1000ｍ

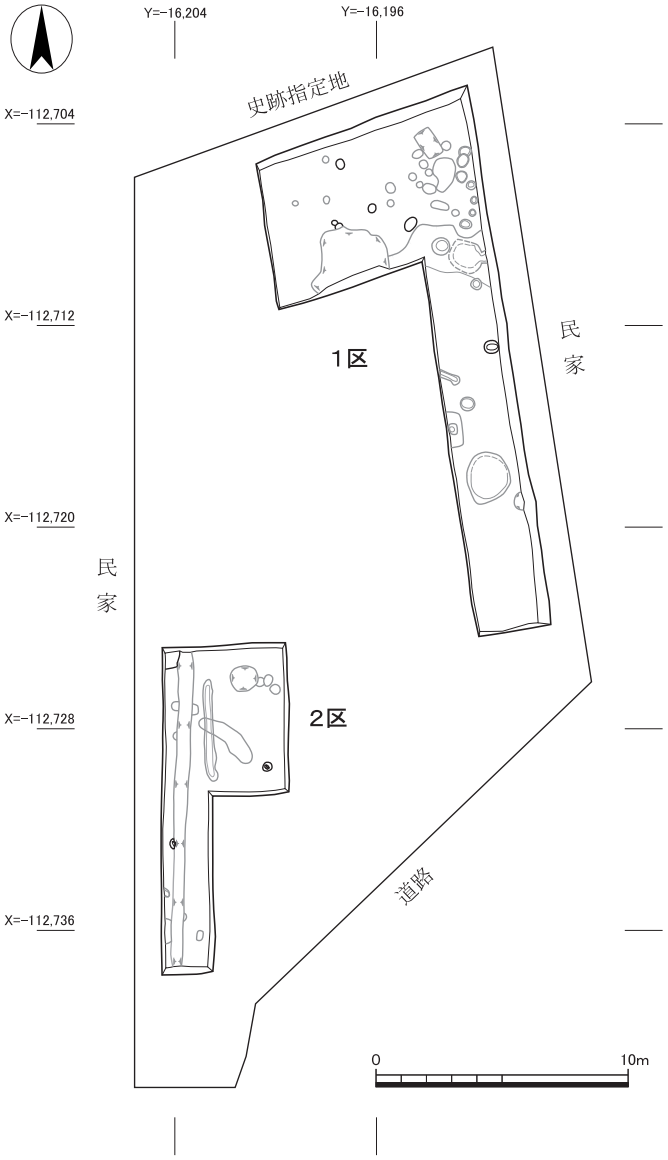



図２　調査区配置図（１：300）

図３　調査前全景（南から）

図４　作業風景（北東から）

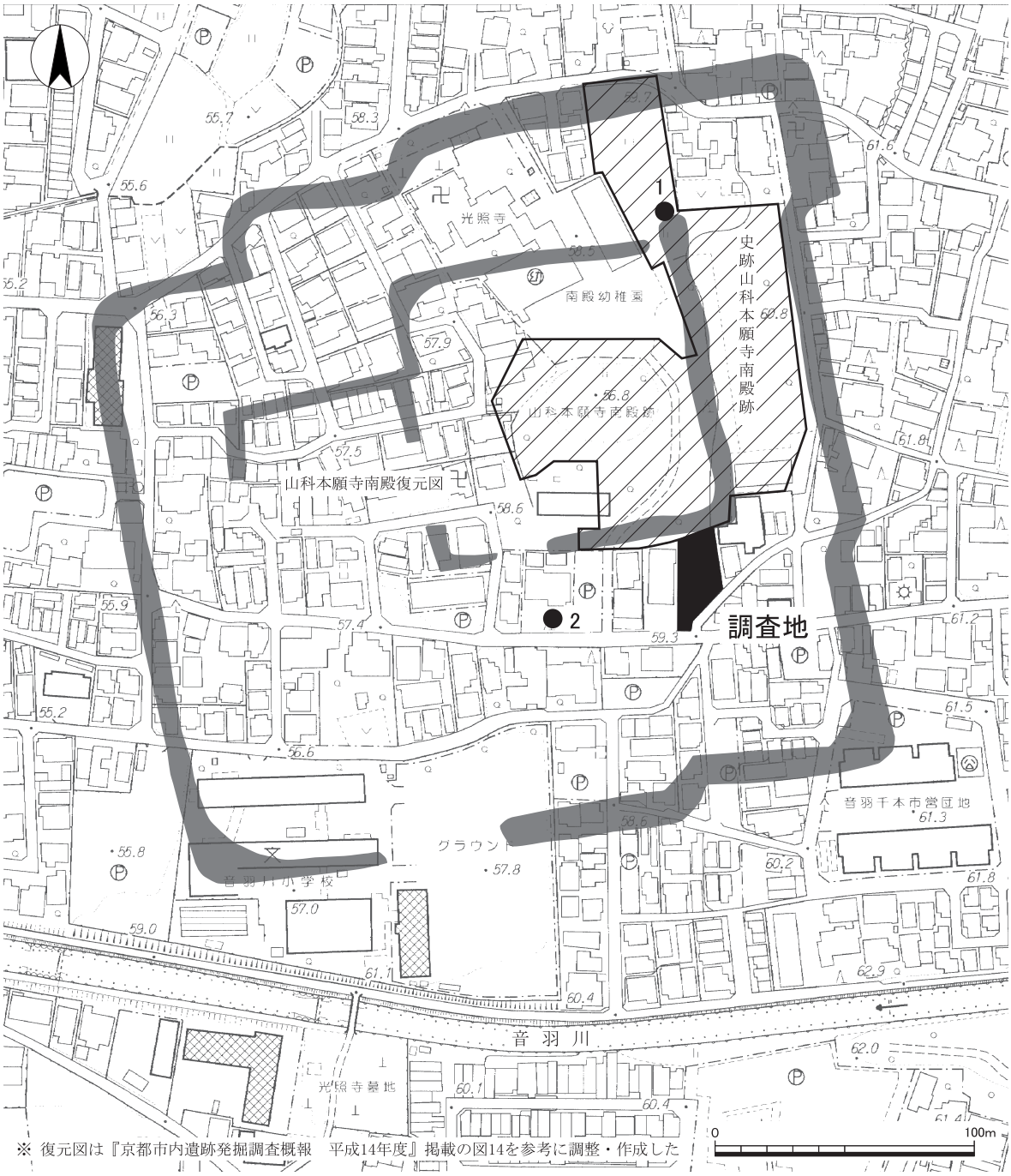



図５　山科本願寺南殿復元図（１：2,500）

であったといわれている。

山科本願寺南殿は、蓮如上人の隠居所として延徳元年（1498）につくられた。南殿は、古図「御在世山水御亭図」（光照寺蔵）によると、持仏堂・山水亭・園池などのある内郭、台所・井戸などのある西郭、これらを囲む土塁と内濠と外濠に囲まれた外郭からなり、防御的な施設を備える約270ｍ四方の規模を持っていたものと推定されている。調査地は復元図の南の外郭、内濠に隣接し、濠の南東隅に近い所である。

その後、山科本願寺と山科本願寺南殿は天文元年（1532）、六角氏と法華宗徒の連合軍に攻撃を受け、焼失した。

山科本願寺南殿の調査は、1955年に光照寺南側にある南殿庭園遺構の地形測量が奈良国立文化財研究所により実施されている。2001年の調査（図１－１）では土塁、濠、暗渠、建物跡などを検出している。2006年の調査（図１－２）では溝、建物跡などを検出している。

参考文献
『京都府史蹟勝地調査会報告』第７冊　京都府　1926年
「中世庭園文化史」『奈良国立文化財研究所学報』第６冊　奈良国立文化財研究所　1955年
出口　勲「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成14年度　京都市文化市民局　2003年
平田　泰「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成18年度　京都市文化市民局　2007年
『京都市遺跡地図台帳』【第８版】　京都市文化市民局　2007年

## ３．遺　　構

調査地現地表面の標高は、北東部で60.1ｍ前後、南西部で59.7ｍ前後であり、北東から南西へ緩やかに低くなる。遺構はいずれも現代盛土、江戸時代の耕作土を除去した地山上面で検出した。今回の調査は、遺構確認を目的としているため、遺構の検出に止めた。このため遺構は、一部を除き、掘削は行わなかった。また、遺物がほとんど出土しなかったことから、遺構の時期は遺構埋土色調などの特徴を元に、耕作土に由来すると考えられる黒色系埋土のものを江戸時代、地山に由来すると考えられる褐色系のものを室町時代後期とした。検出した遺構には、この両時期のものと考えられる遺構が混在している。なお、遺構番号は１区が１から、２区を101からとした。

### （１）基本層序

**１区**　東壁中央部で、現代盛土が厚さ約0.3ｍ、江戸時代の耕作土が厚さ約0.25ｍある。以下は地山であり、黒褐色砂泥が厚さ約0.1ｍ、暗褐色砂泥が厚さ約0.25ｍ、黒色から黒褐色が厚さ約0.3ｍ、暗褐色砂泥が厚さ約0.1ｍ、それ以下は暗褐色砂礫が堆積する。地山上面は土壌化がみられ、その標高は59.5ｍ前後である。地山面の北西部は礫を多く含む土層、北東部は砂礫層であり、調査区外に拡がる。遺構はこの地山上面で検出した。

**２区**　北壁中央部で、現代盛土が厚さ約0.25ｍ、灰黄褐色砂礫が厚さ約0.2ｍ、江戸時代の耕作土が厚さ約0.25ｍある。以下は地山であり、にぶい黄褐色砂泥が厚さ約0.15ｍ、黒褐色砂泥が厚さ

表１　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 室町時代後期 | ピット、柱穴、土坑 | |
| 江戸時代 | ピット、土坑、溝、耕作溝 | |

図６　１区遺構平面図（１：100）

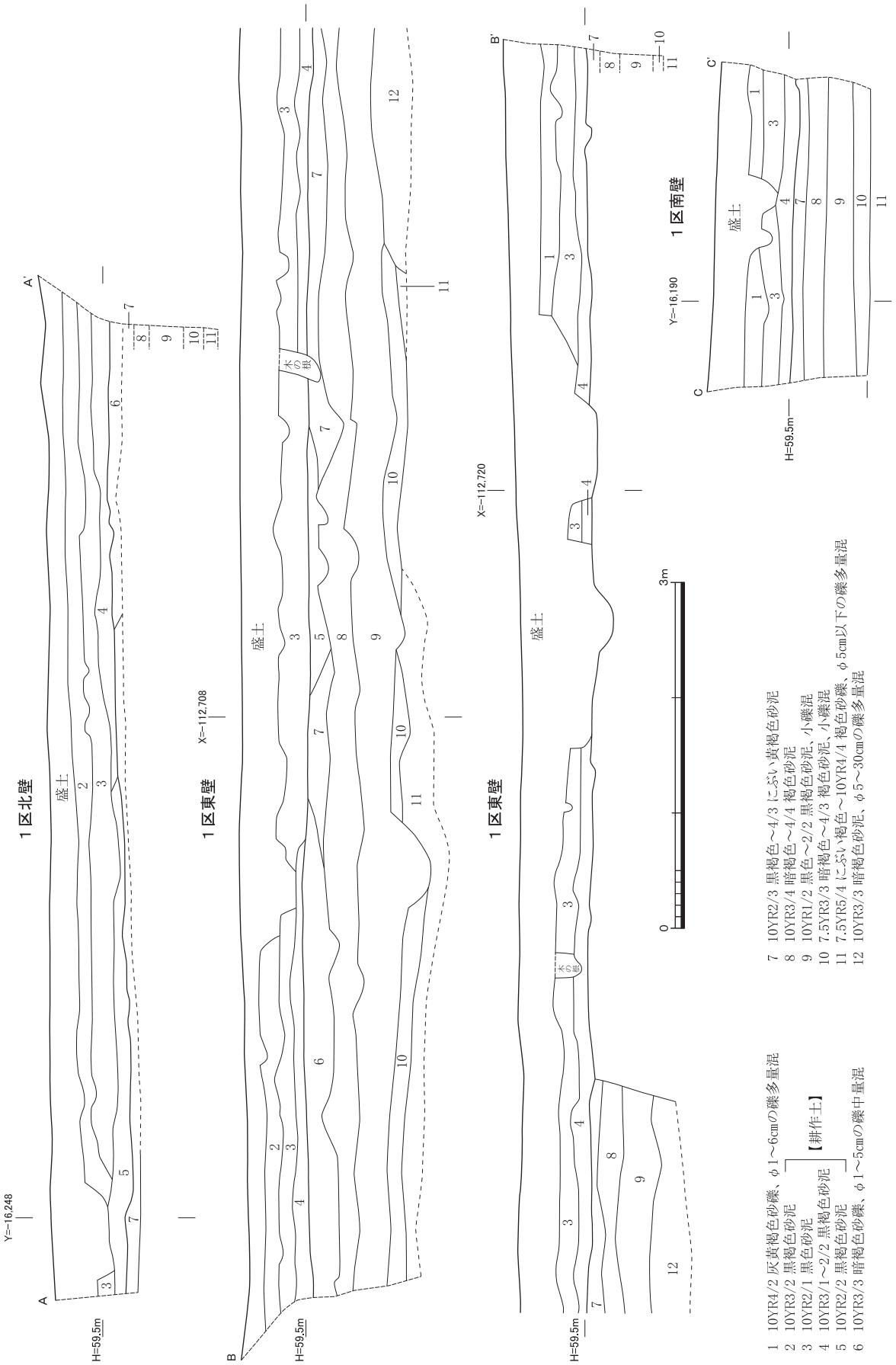

1区北壁
1区東壁
1区東壁
1区南壁
A
A'
B
B'
C
C'
Y=−16,248
X=−112,708
X=−112,720
Y=−16,190
H=59.5m
H=59.5m
H=59.5m
H=59.5m
盛土
盛土
盛土
盛土
木の根
木の根
0
3m
1 10YR4/2 灰黄褐色砂礫、φ1～6cmの礫多量混
2 10YR3/2 黒褐色砂泥
3 10YR2/1 黒色砂泥
4 10YR3/1～2/2 黒褐色砂泥
5 10YR2/2 黒褐色砂泥
6 10YR3/3 暗褐色砂礫、φ1～5cmの礫中量混
【耕作土】
7 10YR2/3 黒褐色～4/3 にぶい黄褐色砂泥
8 10YR3/4 暗褐色～4/4 褐色砂泥
9 10YR1/2 黒色～2/2 黒褐色砂泥、小礫混
10 7.5YR3/3 暗褐色～4/3 褐色砂泥、小礫混
11 7.5YR5/4 にぶい褐色～10YR4/4 褐色砂礫、φ5cm以下の礫多量混
12 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ5～30cmの礫多量混

図７　１区断面図（１：50）

0.15ｍ、暗褐色砂泥が厚さ約0.1ｍ、それ以下は褐色砂礫が堆積する。地山上面の標高は59.3ｍ前後である。遺構はこの地山上面で検出した。耕作土上層の砂礫層は、１区南端から２区全域にみられた。洪水によるものと思われる。

## （２）遺構（図版43）

**１区**　検出した遺構は、ピットや土坑などである。１区の北側で多く検出したが、ほとんどが江戸時代のものと考えられ、室町時代後期のものは数が少なく、まばらに点在し、各遺構の関連性はみられない。地山上面の北西部は礫を多く含む土層、北東部は砂礫層であり、調査区外に拡がる。

**２区**　検出した遺構は、ピット、柱穴、土坑などであり、２区全体にまばらに分布し、各遺構の関連性はみられない。室町時代後期の遺構は３基あり、根石を有する柱穴が２基ある。

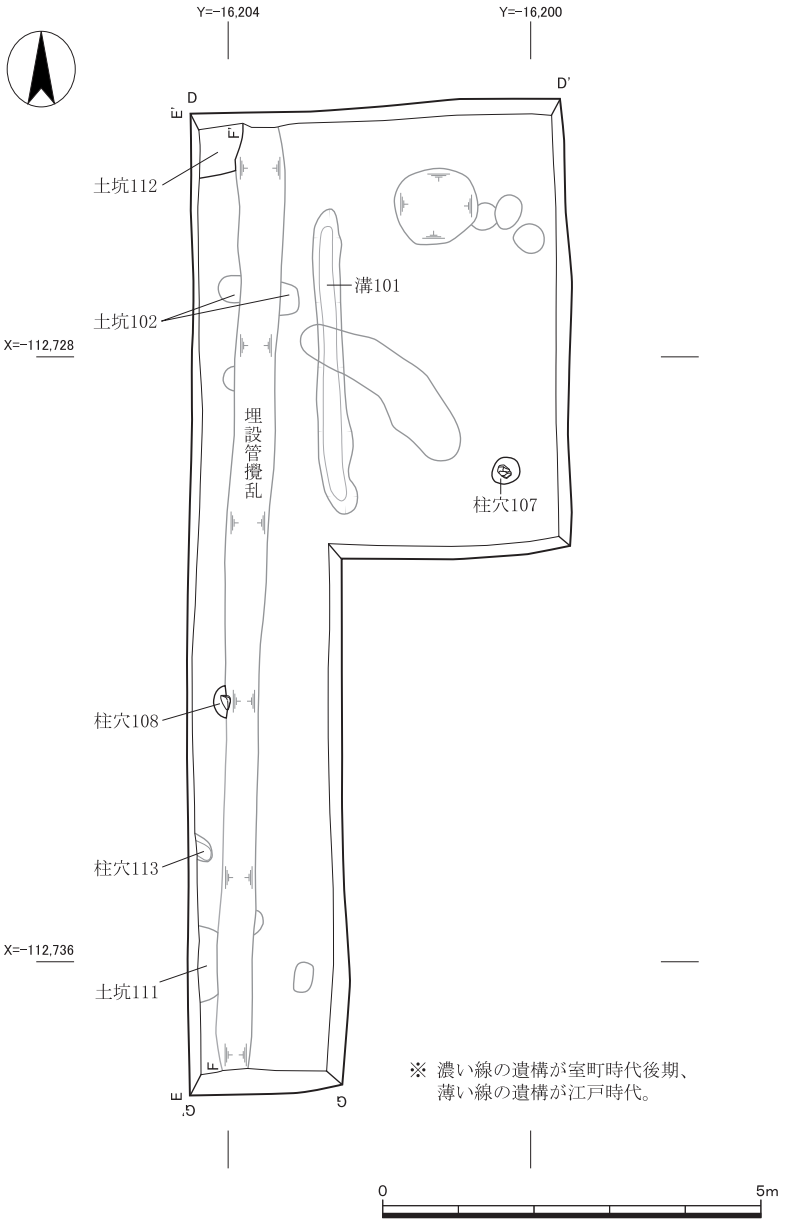



図８　２区遺構平面図（１：100）

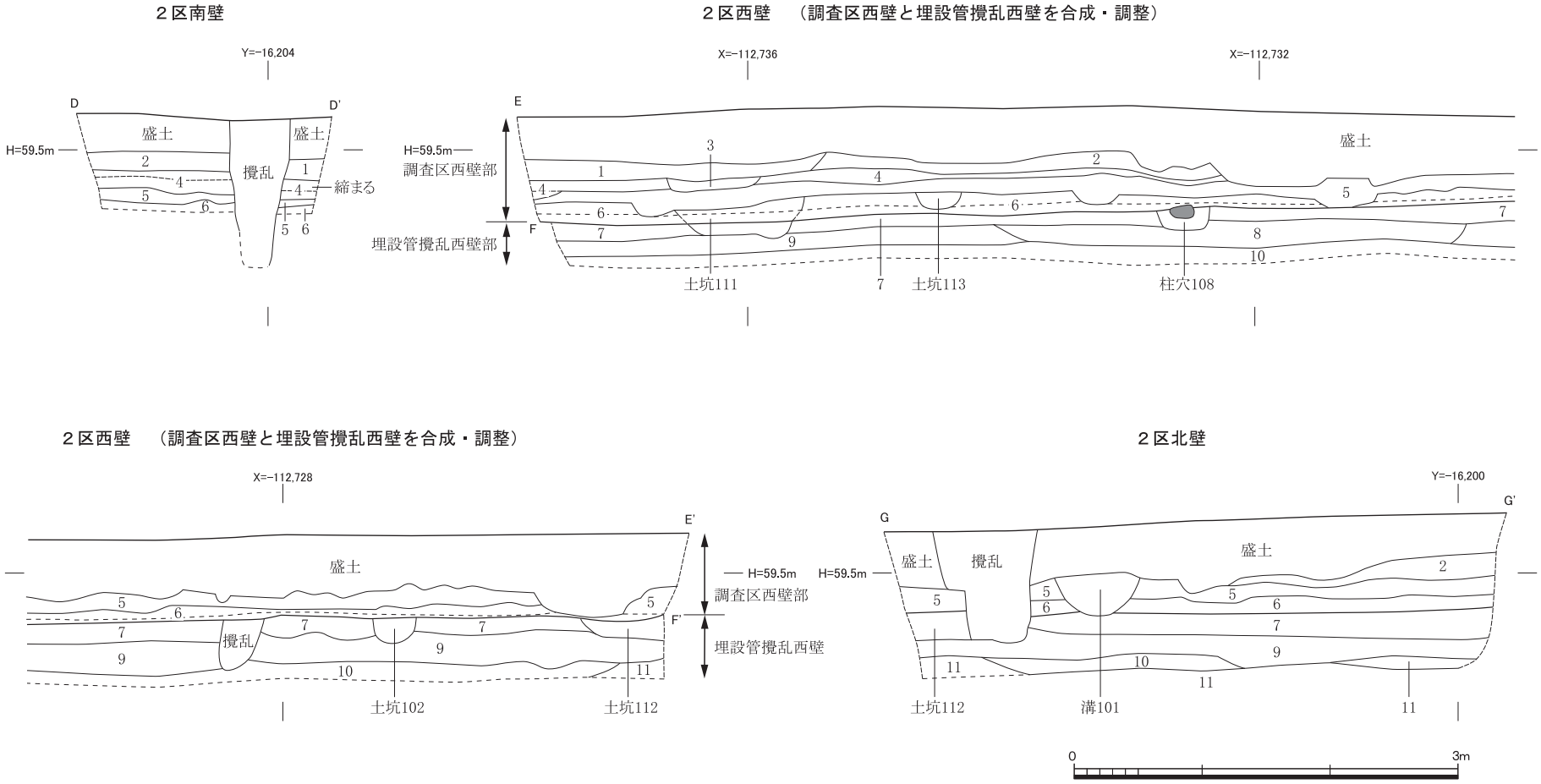



図９　２区断面図（１：50）

1　10YR3/2 黒褐色砂泥、φ7～12cmの礫少量混
2　10YR4/2 灰黄褐色～4/3 にぶい黄褐色砂礫、礫多量
3　10YR3/2 黒褐色砂泥
4　10YR2/3 黒褐色砂泥
5　10YR2/2～3/2 黒褐色砂泥　【耕作土】
6　10YR3/3 暗褐色砂泥
7　10YR3/4 暗褐色～4/3 にぶい黄褐色砂泥
8　10YR3/2 黒褐色砂泥、φ5cmの礫少量混
9　10YR3/2 黒褐色～3/3 暗褐色砂泥
10　7.5YR3/4～10YR3/4 暗褐色砂泥、φ5cmの礫少量混
11　10YR4/4 褐色砂礫、φ5cm以下の礫多量混

【溝101】　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
【土坑102】10YR3/3 暗褐色～4/4 褐色砂泥
【柱穴108】7.5YR3/3 暗褐色～10YR3/2 黒褐色砂泥
【土坑111】10YR2/2～2/3 黒褐色砂泥
【土坑112】7.5YR3/2～10YR3/2 黒褐色砂泥
【土坑113】10YR3/1～3/2 黒褐色砂泥

表２　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 縄文時代 | 縄文土器 | | | | |
| 弥生時代 | 弥生土器 | | | | |
| 平安時代 | 須恵器 | | | | |
| 室町時代 | 瓦器、平瓦 | | | | |
| 江戸時代 | 磁器、施釉陶器、焼締陶器、平瓦、桟瓦 | | | | |
| 合　計 | | ２箱 | ０点（０箱） | ０箱 | ２箱 |

## ４．遺　　物

出土した遺物は遺物整理コンテナで２箱である。大半が土器の小片であり、種類もまとまりがないため、図示はしなかった。

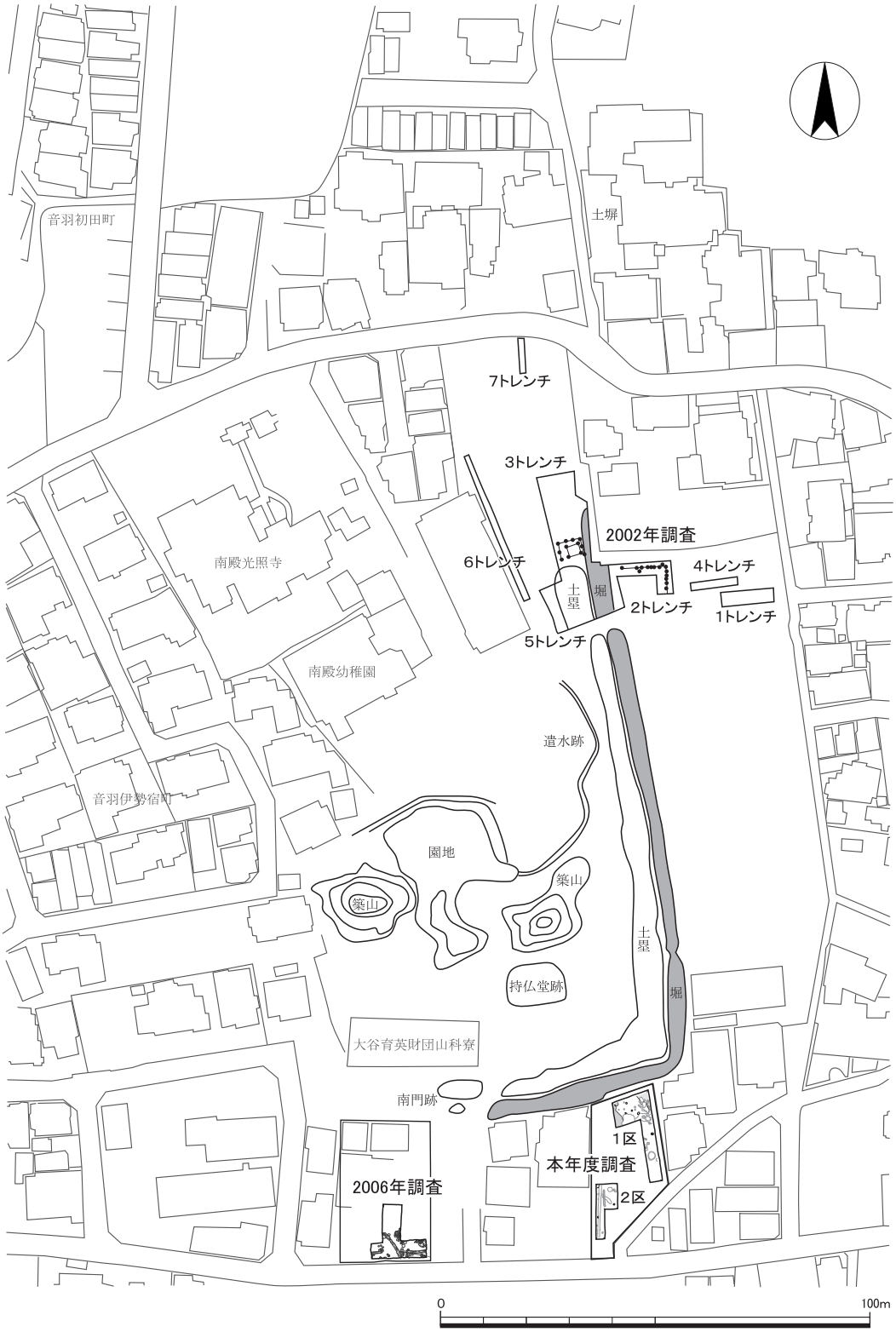
遺物の時期は、縄文時代から江戸時代に及ぶ。江戸時代の遺物には青磁の椀皿類、施釉陶器の椀皿類・擂鉢、焼締陶器の植木鉢である。瓦類は平瓦、桟瓦がある。室町時代の遺物には、瓦器鍋、瓦類の平瓦がある。平安時代の遺物には須恵器壷がある。弥生時代の遺物には弥生土器小片が数点ある。縄文時代の遺物には縄文土器鉢が１点ある。

## ５．ま と め

調査地は山科本願寺南殿南の外郭、内濠に隣接し、濠の南東隅に近い所と推定される。調査で検出した室町時代後期の遺構は山科本願寺南殿の時期と考える。検出した遺構は数が少なく、顕著な遺構は見られなかったことから、調査地では積極的な土地利用がなかったと考えられる。

検出した遺構面の上には耕作土が堆積する。この層からは江戸時代の遺物が出土したことから、江戸時代には耕作地や竹藪であった。明治時代以降は宅地になっていったと考えられる。

出土遺物には少数ながら、弥生土器と縄文土器がある。いずれも耕作土から出土し、遺構に伴わないものである。しかし、これらの遺物が出土したことは、調査地の近隣に弥生時代や縄文時代の遺跡が存在している可能性を示すものである。




※ この図は『京都市内遺跡発掘調査概報　平成14年度』掲載の図12を参考に調整・作成した

図10　周辺の調査と遺構図（1：1,500）

# Ⅺ　寺戸大塚古墳

## １．寺戸大塚古墳の概要と既往の調査

### （１）古墳の立地と現状（図１・２）

寺戸大塚古墳は京都盆地北西部、西山山塊から舌状に細長く張り出した向日丘陵の西端を通る尾根筋に立地する前方後円墳である。丘陵の西側には小畑川が南流し、丘陵西斜面には河岸段丘が形成され、現在の墳丘と小畑川の東岸との比高差は約30ｍを測る。一方、丘陵東側は、複数の開析谷が走っているため一様ではないものの、おおむね50ｍの比高差を持って比較的なだらかに傾斜する。現在、古墳からの眺望は西側の小畑川の方向に広く開けている。後世の大規模な地形改変を見込んでもなお、古墳築造当初の眺望は墳丘西側を眼下に見下ろすことができたと考えられる。

さて、寺戸大塚古墳は墳丘西半が京都市西京区大枝南福西町２丁目、東半が向日市寺戸町芝山に

図１　調査位置図（１：15,000）

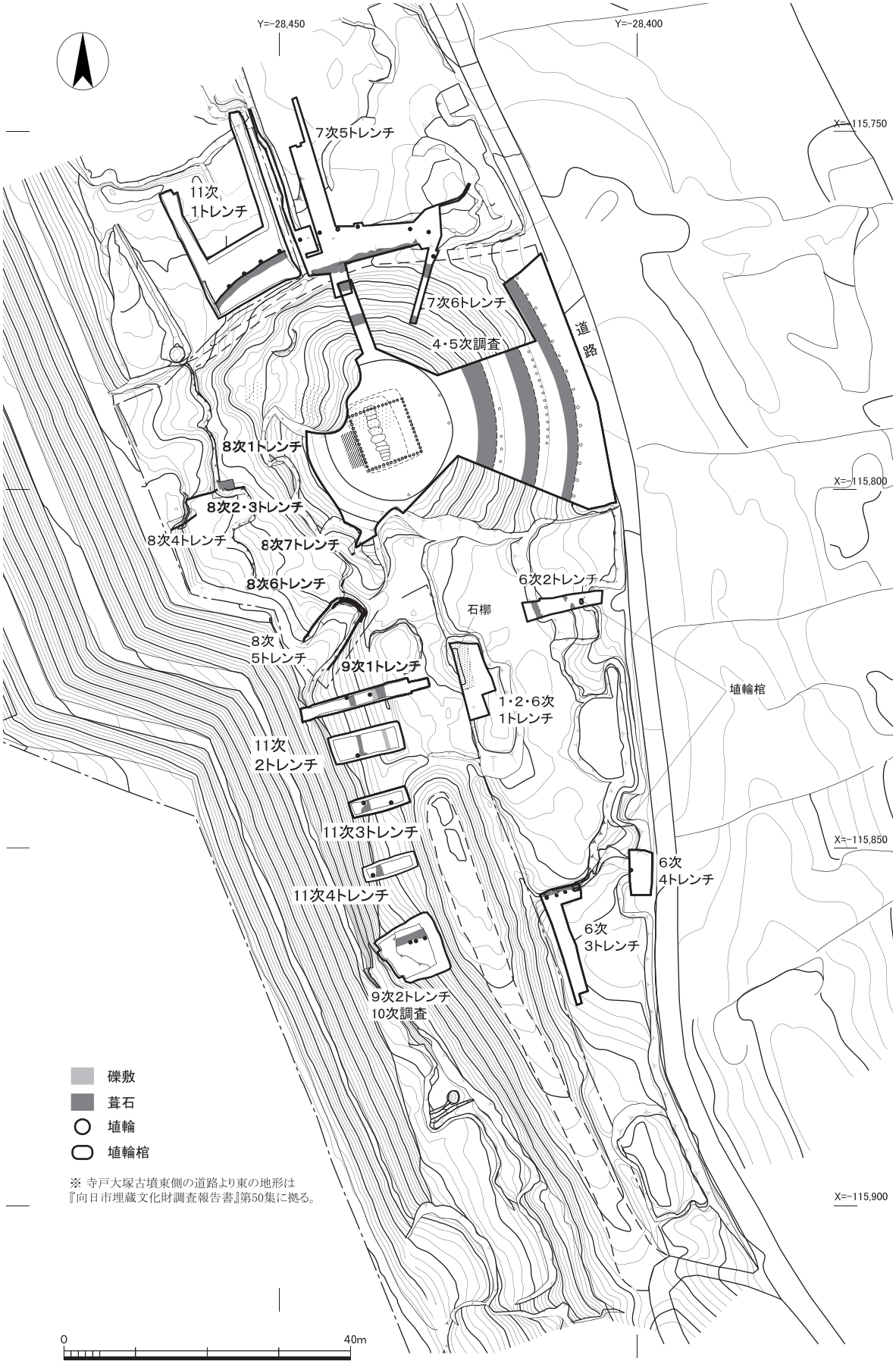



図２　寺戸大塚古墳調査区配置図（１：800）

所在し、墳丘主軸をおおむね市境として２市にまたがる。現在、墳丘西半を含めた丘陵西斜面の広い範囲は公園用地（竹林）として京都市が所有管理し、向日市側の墳丘東半のうち後円部が向日市寺戸財産区、後円部後端裾部と前方部が個人所有の竹林となっており、市境には後円部を除いて境界フェンスがめぐらされている。

墳丘測量図をみても明らかなように、墳丘各所や周辺のいたるところに攪乱が及んでおり、この古墳が前方後円墳であることを容易には認識できない。これらの攪乱は近世後期以降、乙訓地域に広く普及した筍栽培によるところが大きく、開墾時の土取りが墳丘に大きな損壊を与えたことを今なお視認することができる。一方で、後円部東半のみがかろうじて旧状をとどめているのは寺戸財産区の土地所有となっているためで、生業としての筍栽培がおこなわれなかったことに起因する。

墳丘東側には南北方向の車道が走っており、これより東には幅30～40ｍ程の開析谷が車道にほぼ平行して南北方向に分布する。一方、京都市側の墳丘西半を含む向日丘陵の西斜面は小畑川によって河岸段丘が形成されているが、昭和40年代の洛西ニュータウン建設に伴い、京都市による西斜面一帯の買収および造成ののち、丘陵西斜面裾まで宅地化が進められた結果、墳丘裾近くまで人工的な急勾配が迫っている。また、京都市側の前方部には南から北に向かって高さ２ｍほどの土手状の盛土が認められる。これはニュータウンの造成後に公園管理用道路を敷設するために施工された現代の盛土で、当初は古墳から約400ｍ北にある竹林公園まで延伸する予定であったが、古墳への影響が考慮された結果、施工中途で計画は中止されている。

このように、古墳の現状や墳丘残存状況には墳丘の場所によって大きな差異が認められ、現在に至るまでの土地所有や土地利用が色濃く反映されている。〔宇野〕

## （２）向日丘陵古墳群と乙訓の首長墳

向日丘陵の南北約２㎞の範囲には寺戸大塚古墳（全長98ｍ）のほかにも、五塚原古墳（全長91ｍ）、元稲荷古墳（全長94ｍ）、妙見山古墳（全長114ｍ）といった古墳時代前期の前方後円（方）墳が築造されている[1)]。これらは、同一丘陵の尾根筋に立地することから、桂川と西山山塊に挟まれた桂川右岸という領域にある集落を基盤として造営された歴代の首長墳と理解され、系列的な首長墳で構成された稀有な前期古墳群として「向日丘陵古墳群」と呼称される。

桂川右岸域には向日丘陵古墳群に限らず、古墳時代を通じて大小多くの古墳が築かれ、首長墳と目される一定規模を有する前方後円墳や大型円墳も含まれる。これら大規模墳は向日丘陵や桂川へ注ぎ込む各小河川に区画された小地域ごとに分布する傾向がみられる。また、筍栽培に伴う開墾をはじめとする各種開発を受け、これに伴って各種調査が行われたため、埋葬施設や副葬品の内容が判明し、築造時期の推定が可能な古墳が多い。

こうした状況もあって、都出比呂志氏は、各古墳の立地や位置関係、推定される築造順序に基づき複数の首長系譜を抽出し、時期によって各系譜に盛衰が認められること、また最大規模の前方後円墳を盟主墳とした場合、盟主墳が時期ごとに系譜間を移動していることを明らかにした[2)]。さら

に、首長系譜の消長や盟主墳の移動が、単に一地域内の首長の交替や輪番を表すのではなく、中央政権における政治的変動の影響を受けた結果と理解した。この考えに基づいた首長系譜研究は、現在全国各地で試みられており、乙訓の首長系譜論は全国的な首長系譜論のモデルとなっている。加えて、畿内中枢部の主要な大型古墳が陵墓に指定され、その詳細が不明なものが多いなかにあって、乙訓地域の首長墳群とりわけ向日丘陵古墳群は地域内の動向や位置づけのみならず、畿内に所在する前期古墳群との比較研究においても非常に重要な位置を占めている。

さらに近年、寺戸大塚古墳とならんで、乙訓地域の首長墳群を構成する向日市、長岡京市、大山崎町所在の主要な古墳でも、保存目的あるいは史跡整備のための発掘調査が実施されており、各古墳の墳丘形態や構造を中心に多くの情報が明らかにされつつある。同時に、桂川右岸域の古墳時代集落の動向も整理されており[3)]、今後、古墳とその造営基盤となった集落との関係をより鮮明に描き出す作業が必要とされる。このほか、乙訓地域の古墳を対象とした調査成果展示や図録の刊行といった普及啓発事業もおこなわれており、当地域の古墳時代に対する理解の一助となっている[4)]。〔宇野〕

## （３）既往の調査（表１）

寺戸大塚古墳の調査は、大正12年、竹林の土入れ時に偶然、前方部埋葬施設が発見されたのを契機として始まる。発見されたのは南北方向の竪穴式石槨の北端で、板石積の壁体をもつ。天井石や被覆粘土、石槨内には粘土棺床もみられ、刀剣や鉄鏃などの副葬品の一部が出土した。調査を担当されたのは京都帝国大学の梅原末治氏で、石槨の部分的な実測や遺物出土状況の記録などがおこなわれた。

その後、竹林土入れがさらに進行し、前方部竪穴式石槨南半の天井石が露出したのを受けて、昭和17年に再調査が実施された（２次調査）。竪穴式石槨全体を調査対象として石槨の詳細な規模と構造が明らかにされた。割竹形木棺に推定される棺の内外からは、銅鏡３面、玉類・石製品（管玉・紡錘車形石製品・琴柱形石製品）、銅鏃、鉄製武器（刀・剣・鏃・槍）、鉄製農工具（斧・鎌・刀子・鉋）などが出土した。

この調査では各遺構の実測図が精密に作成されており、前方部竪穴式石槨の構造や副葬品出土状況などの貴重な情報を現在に伝えている。さらに石槨の調査に加え、墳丘の形態や構造にも目を向けられ、葺石や段築、埴輪列の存在が指摘されていることも特筆すべき点である。

昭和42年度には京都府教育委員会によって、向日丘陵周辺の遺跡を対象とした分布調査が実施され、その一環として寺戸大塚古墳に対しても測量調査がおこなわれた（３次調査）。作成された50㎝コンターの墳丘測量図は、当時の墳丘の状況を知るための貴重な情報を提供している。

昭和42・43年に京都大学によって実施された４・５次調査では、「畿内に於ける前期古墳成立基盤の研究」を研究テーマに掲げた学術調査という性格から、後円部埋葬施設および後円部墳頂平坦面から東斜面にかけての広範囲に調査区が設けられた。

後円部埋葬施設である竪穴式石槨の調査では、石槨の構造や規模とともに構築過程や埋葬過程

表１　寺戸大塚古墳調査一覧表

| 調査次数 | 調査期間 | 調査主体〔調査機関〕 | 調 査 概 要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|
| １次 | 1923年１月28日 | 京都府<br>〔京都帝国大学考古学教室〕 | 前方部竪穴式石槨の調査。竹林土入れ時の発見に際し石槨北半の一部を調査。 | 1 |
| ２次 | 1942年６月初 | 京都府<br>〔京都帝国大学考古学教室〕 | 前方部竪穴式石槨の再調査。土入れに進行に伴い石室南半についても調査実施。石槨の規模や構造、副葬品の全容等が判明。 | 2 |
| ３次 | 1966年 | 京都府教育委員会 | 墳丘測量調査。50㎝ｺﾝﾀｰの墳丘測量図の作成。 | 3 |
| ４次 | 1967年７月15日<br>～９月15日 | 京都大学文学部考古学研究室 | 後円部竪穴式石槨の調査。石槨の規模や構造、副葬品目等が判明。このほか、方形埴輪列や方形壇、土器供献区画など後円部頂各施設を検出。 | 4 |
| ５次 | 1968年７月14日<br>～９月28日 | 京都大学文学部考古学研究室 | 後円部東側の墳丘調査。後円部東側の広範囲が調査され、墳丘の形態や構造、葺石・埴輪列の施工方法が判明。 | 4 |
| ６次 | 1998年６月29日<br>～10月31日 | 向日市教育委員会<br>〔財団法人向日市埋蔵文化財センター〕 | 前方部東側の墳丘調査・前方部竪穴式石槨の再々調査。各部墳丘裾、埴輪列、埴輪棺を検出、前方部石槨の詳細なデータを得た。 | 5 |
| ７次 | 1999年７月１日<br>～10月５日 | 向日市教育委員会<br>〔財団法人向日市埋蔵文化財センター〕 | 後円部後端東半の墳丘調査。墳丘構造が判明するとともに、６次調査成果と合わせて墳丘長(98m)が明らかになった。 | 6 |
| ８次 | 2007年１月22日<br>～３月20日 | 京都市文化市民局<br>〔財団法人京都市埋蔵文化財研究所〕 | 自然崩壊に伴う後円部西半の墳丘断面調査。墳丘面の残存状況、墳丘構造が断片的に判明。 | 7 |
| ９次 | 2009年２月９日<br>～３月17日 | 京都市文化市民局<br>〔財団法人京都市埋蔵文化財研究所〕 | 前方部西斜面、南西隅角の墳丘調査。西斜面の墳丘裾、墳丘構造が判明。南西隅角は後世の厚い盛土に阻まれ検出されず。 | 8 |
| 10次 | 2010年３月２日<br>～３月30日 | 京都市文化市民局<br>〔財団法人京都市埋蔵文化財研究所〕 | 前方部南西隅角の墳丘調査。前方部南端は検出されるも、西端は後世の削平により検出されず。 | 9 |
| 11次 | 2012年７月30日<br>～10月５日 | 京都市文化市民局<br>〔財団法人京都市埋蔵文化財研究所〕 | 後円部後端西半、前方部西斜面の墳丘調査。墳丘形態および構造復元のための多くの情報が得られた。 | 本書 |

文献


1　梅原末治「乙訓郡寺戸ノ大塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第４冊　京都府　1923年

2　梅原末治「乙訓郡寺戸大塚古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊　京都府教育委員会　1955年
財団法人向日市埋蔵文化財センター『寺戸大塚古墳の研究　前方部副葬品研究篇』向日丘陵古墳群調査研究報告第１冊　2001年

3　京都府教育委員会「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1968）』　1968年

4　近藤喬一・都出比呂志「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第６号　史学研究会　1971年
都出比呂志「古墳時代」『向日市史』向日市　1983年

5　向日市教育委員会「寺戸大塚古墳－第６次調査の成果－」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第49集　1999年
財団法人向日市埋蔵文化財センター『寺戸大塚古墳の研究　第６次調査報告篇』向日丘陵古墳群調査研究報告第１冊　2001年

6　向日市教育委員会「寺戸大塚古墳第７次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集　2000年

7　京都市文化市民局「寺戸大塚古墳」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度』　2008年

8　京都市文化市民局「寺戸大塚古墳」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成21年度』　2010年

9　京都市文化市民局「寺戸大塚古墳」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成22年度』　2011年


※本文中における既往調査の引用・参照については、上の１～９の文献を用いた。
　引用の際は、１次調査であれば、（梅原1923）と表記している。

を復元するデータが得られた。また、すでに盗掘を受けていたが、割竹形木棺に推定される棺内やその周辺から三角縁神獣鏡２面、玉類・石製品（勾玉・管玉・石釧）、鉄製武器（刀・剣・鏃）、鉄製農工具（斧・鎌・刀子・鑿・鉇）、埴製合子といった豊富な品目の副葬品が出土した。墳頂平坦面では埋葬施設の直上に板石で四周を区画した方形壇と、それを囲う方形埴輪列、その西側には土器供献区画が検出された。後円部東斜面では後円部が斜面と平坦面で構成される３段築成であることが確認され、各斜面に施工された葺石や各平坦面に樹立された埴輪列を含めて、墳丘の構造が明らかにされた。これらの調査成果は、本報告の刊行はみていないものの、前期古墳に関わる膨大な情報を有しており、現在の古墳研究に寄与するところ大である。

近年は古墳の保存を図るための行政的な発掘調査が向日市および京都市によって継続的に実施され、墳丘の範囲が確認されるとともに、墳丘の形態を復元する際の定点が墳丘各所で得られている（６～10次調査）。

向日市では平成10年度と平成11年度に発掘調査を実施している。平成10年度の６次調査では、筍栽培のために裏込が露出した前方部竪穴式石槨の残存状況、前方部前端および東斜面における墳丘の範囲などを確認するために発掘調査が実施された。その結果、前方部竪穴式石槨の下半部の残存が確認された。これとともに墳丘裾部における埴輪棺の出土は、古墳に樹立された円筒埴輪同一のものが棺として使用されており、ほぼ全形が復元可能になったという点で非常に重要な調査成果である。６次調査を受け継いで、後円部後端の情報を得るために実施された平成11年度の７次調査では、後円部後端における墳丘斜面や埴輪列が検出されるとともに、６次調査の前方部前端の成果と合わせて、基準点測量に基づき古墳の全長が約98ｍに及ぶことが明らかにされた。

京都市では平成18年度より継続的に調査を実施している。墳丘構築土の自然崩壊の対策として実施した８次調査（平成18年度）では主として崖面の精査と養生をおこない、それを通して墳丘の残存状況や墳丘斜面の裾部を部分的に把握することができた。範囲確認調査として実施した９・10次調査（平成20・21年度）では、前方部西斜面と前方部前端の範囲、葺石および埴輪列の施工を確認することができた。ただし、前方部南西隅角は後世に削平されていたため、前方部西斜面裾ラインを詳細に把握するには至っていない。

以上のように、長期間にわたって、かつ多様な調査原因によって調査が重ねられてきた寺戸大塚古墳であるが、後円部および前方部の埋葬施設から銅鏡をはじめとする品目、量ともに非常に豊富な副葬品が出土したことから、古墳編年における古墳時代前期の指標古墳として位置づけられている。さらに、広範囲かつ多角的な調査を通して、墳丘規模や副葬品とともに、埋葬施設の構造や葺石、埴輪列、方形壇と土器供献区画といった墳丘に設けられた各施設など、古墳を構成する諸要素の多くが判明している古墳として、古墳時代各分野の比較研究に大きく寄与している。〔宇野〕

## ２．調査の目的と経過

### （１）調査目的

近年、京都市に隣接する向日市、長岡京市、大山崎町においても、乙訓地域に所在する一定規模の古墳に対して保存目的の発掘調査が数多く実施されている。寺戸大塚古墳についても将来的な史跡指定に対して、その時機が来れば迅速に対応するため、古墳の京都市域においても基礎資料を整備しておく必要があった。

これまで京都市が実施した計３回の調査（８～10次）を通して、断片的ではあるものの、墳丘西半の残存状況や墳丘の平面形態や構造などを知るうえでの貴重のデータが得られている。しかし、これまでも主要な調査目的としていた前方部の平面形態の把握については、残存状況などの問題から十分に達成されたとは言いがたい。寺戸大塚古墳前方部の平面形態を把握することは最たる重要課題であり、向日市側の前方部の残存状況を鑑みると、京都市側の墳丘西半においてこの課題を克服すべきであると考えた。

加えて、後円部後端の墳丘残存状況や墳丘外における遺構の有無についても確認することとし、11次調査にあたる今回の範囲確認調査を平成18年度から継続的に実施してきた一連の調査の最終調査と位置づけることとした。〔宇野〕

### （２）調査経過（図３～10）

**測量基準点について**　近年、京都市における発掘調査の測量基準点の設置は、GPS測量により行っている。しかし、今回の調査では、平成10年度と平成11年度に向日市側で実施された６・７次調査と同一基準で検出遺構の記録を残す必要があることから、測量基準点は、向日市が後円部頂上に設置した４級基準点を原点とし[5)]、旧日本測地系座標数値を世界測地系数値に換算して使用した。また、京都市側で行った８～10次調査の測量基準点はGPS測量により設置しており、今回その整合性を確認するためにこの４級基準点のGPS測量を行った。その結果、GPS測量と４級基準点の値との誤差は、座標数値・標高ともに数cm以内であり、９～10次調査の測量数値も今回の測量数値と同様に扱えることを確認した。

**調査区の設定と調査の経過**　調査区は、後円部に１箇所（１トレンチ）、前方部の西斜面に３箇所（２～４トレンチ）の合計４箇所を設定した。調査前は各調査区ともに竹林であった。調査は７月30日より竹の伐採・現況地形測量を行った後、８月20日より重機による表土の掘削を開始した。表土は、竹の育成に伴う盛土が厚く堆積していた。重機掘削終了後、人力により墳丘・葺石・埴輪列などの遺構を検出し、写真撮影・図面作成などの記録作業を行った。図面作製は、平面・立面図はオルソにより行い、断面実測は手測り、１トレンチ全体の平面図作成はトータルステーションによって行っている。調査区の面積は、１トレンチが161㎡、２トレンチが40.5㎡、３トレンチが20.5㎡、４トレンチが18㎡で、合計240㎡である。

図３　１トレンチ調査前全景（北西から）

図４　２～４トレンチ調査前全景（南から）

図５　２トレンチ重機掘削（南から）

図６　１トレンチ作業風景（北西から）

図７　文化庁視察風景、1トレンチ（西から）

図８　記者発表風景、２トレンチ（北から）

図９　１トレンチ埋戻し状況（北西から）

図10　１トレンチ埴輪抜取り後、塩ビ管設置状況（北西から）

１トレンチは、調査前の地表面観察によって、後円部墳丘裾を思わせる南から北へ下がるなだらかな傾斜を確認していた。１トレンチの調査では、後円部裾の遺存状況を明らかにすること、丘陵と墳丘とを切断する堀切の有無を確認することを目的とした。調査区は、後円部裾の状況と丘陵切断部の有無を明らかにするため、平面形がＬ字形になるように設定した。

１トレンチでは調査の結果、ほぼ想定された位置で後円部裾と葺石およびその基底石、墳丘裾に巡る埴輪列を検出した。また、後円部裾から約13ｍ北側の地点で、北から南へ下がる比高差約0.4ｍの段差を検出した。この段差が堀切の北肩である可能性が考えられたため、当初設定した調査区の作業終了後に、１トレンチの北西部を長さ11ｍ、幅２ｍの規模で北側へ調査区を拡張した。その結果、ここでも後円部裾から北へ約12ｍの地点で北から南へ下がる段差を検出し、２箇所で検出した段差が堀切の北肩部であることが確定した。

２～４トレンチの調査では、前方部西斜面において墳丘裾の位置を検出し、前方部西斜面の墳丘裾ラインを明らかにすることを目的とした。３つの調査区は北から南へ２・３・４トレンチとし、それぞれを５～６ｍの間隔をおいて設定した。３次調査で京都府教育委員会により作成された墳丘測量図と現況測量図を比較検討した結果、３・４トレンチでは第１段斜面より上の墳丘は土取りによって遺存していないことを予想していた。しかし、調査の過程で一部が遺存している可能性が考えられたため、各調査区を東側へ約２ｍ拡張した。

２～４トレンチの調査の結果、それぞれの調査区で墳丘裾の葺石とその基底石、墳丘裾に樹立された埴輪を検出し、前方部墳丘裾ラインを復元するデータを得ることができた。第１段平坦面は、２トレンチでは礫敷の施された平坦面を検出し、３・４トレンチでは礫敷は失われていたが平坦面の一部を検出した。このうち３トレンチでは平坦面に樹立された埴輪を検出した。

各調査区で検出した埴輪は、１トレンチで５基、２トレンチで１基、３トレンチで２基、４トレンチで１基の計９基を数え、いずれも上部はすでに失われており下半部以下を検出した。埴輪には１トレンチから順に番号を付け、11次調査で検出した埴輪として「11H－数字」とした。当初これらの埴輪は基本的には現状保存とし、９基の埴輪の中からいくつかをサンプルとして選んで取り上げる予定であった。しかし、調査の過程で、複数の埴輪の基部が、乙訓地域特有の強酸性土壌によって土に分解されている状況が確認され、地中に埴輪を留めても保存できない可能性が考えられた。こうしたことから、検出した埴輪はすべてを取り上げることに変更した。埴輪の取り上げ後、樹立していた位置には将来的に埴輪樹立地点がわかるよう、直径20㎝、長さ40㎝の塩化ビニール製のパイプに、マジックで調査記号（12MK－TE4）・取り上げ日を記して設置した。

各調査区の記録作業終了後、葺石・礫敷などの遺構検出部分は、保護のために厚さ約20㎝の暗灰色の粗砂で覆い、この後に掘削土で埋め戻し作業を行い、10月５日に調査を終了した。

調査成果を公表するため、平成24年９月20日に記者発表を行い、９月22日には現地説明会を行った。現地説明会には約400名の見学者の参加を得た。また、調査中は多数の方々から御協力ならびに有益なご教示を受け、作業を行うことができた[6]。〔南〕

# 3．遺　　構

## （1）１トレンチ（図11～15、巻頭図版３、図版44～46）

１トレンチでは、後円部第１段斜面の裾部と葺石、墳丘裾部に樹立された埴輪列、墳丘裾から北へ約12～13ｍの地点で丘陵切断部となる堀切の北肩部を検出した。

**層序**　地表面から0.3～0.9ｍは竹林に伴う盛土である（１～６層）。この下層には、古墳築造以降の流土である黄褐色細砂を主とする層が堆積する（７・８・18・19層）。４・７層は土壌化しており、ある時期の地表面であることがわかる。これらの層は石や遺物をほとんど含まず、層厚も一定あることから竹林造成以前の耕作土の可能性がある。葺石の転落石や埴輪片は墳丘裾の限られた範囲で少量しか出土していないことから、竹林造成以前、耕作地として土地利用された際に整理された可能性が考えられる。これらの層の下層において、地山削り出しの墳丘と墳丘裾平坦面を検出した。

**第１段斜面**　検出長は、水平距離で南北最大3.9ｍ、斜距離で4.0ｍ、検出高最大1.1ｍを測る。墳丘傾斜角度は、葺石が遺存する裾部は急角度で立ち上がり、28°を測る。これより上部の傾斜は緩やかになり、8°程度となるが、土砂の流出や後世の土地利用により本来の墳丘の構築面は既に失われており、葺石喪失部分の本来の傾斜はこれよりも急角度であったと考えられる[7)]。

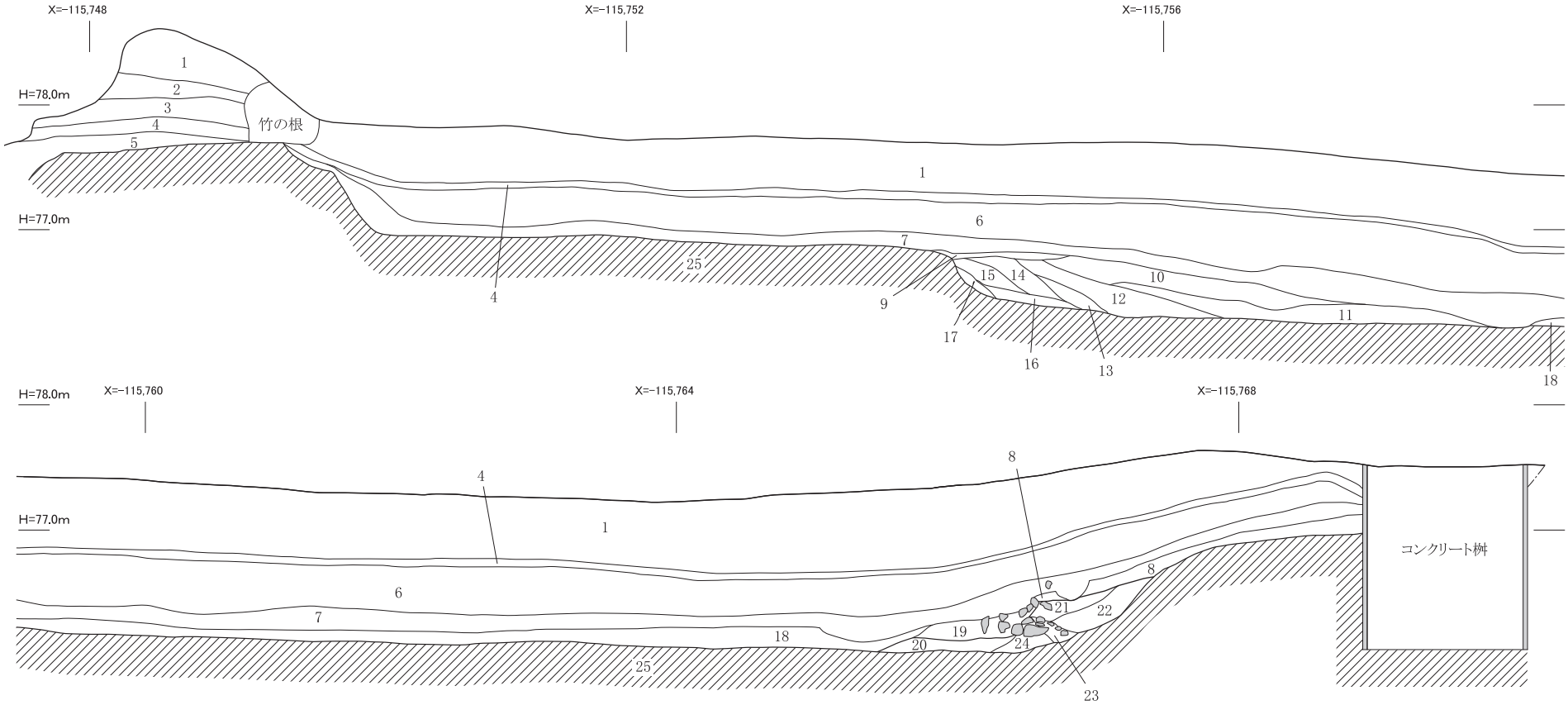
葺石は、調査区東半で第１段斜面裾部付近を検出し、これより上部はすでに失われていた。トレンチ西半では、基底石と裏込が遺存しているのみであった。南北方向の最大検出長は水平距離で1.2ｍ、検出最大高は0.55ｍを測る。

葺石の基底石は、接地面の標高は75.9～76.3ｍで東から西へ緩やかに傾斜する。基底石の大きさは長軸が15～40㎝を測り、このうち30㎝前後のものが多くを占める。石は長軸を墳丘裾に沿って横方向に並べて配置する。基底石は地山面直上に置かれているものはなく、地山と基底石の間には土を置いて傾きや高さを調整している（図13－８層）。基底石の前面には化粧土が施されている。検出状況では、基底石の底面で化粧土を検出している。しかし本来は、基底石接地面の土砂流出によって起こる葺石崩壊を防ぐため、基底石の前面下半部は化粧土で覆われていたと考えられる。

基底石より上部の葺石は、石の長軸を墳丘面に対して直交させて積む、いわゆる小口積みである。葺石の大きさは10～35㎝を測り、15～20㎝程度のものが多くを占める。葺石の下層には径４～10㎝程度の石を用いた裏込がある（図13－５・６層）。裏込の厚さは約10㎝を測る。裏込は葺石直下ではやや大きめの石を比較的多く用いており、これは葺石の安定を確保するためと考えられる。裏込と墳丘地山削り出し面の間には石をほとんど含まない明褐色細砂がある（図13－７

表２　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　考 |
|---|---|---|
| 古墳時代 | 墳丘、墳丘平坦面、葺石、埴輪列 | |




1 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂 φ0.3～5cm礫少量含
2 10YR7/6 明黄褐色細砂 φ0.3～3cm礫微量含
3 10YR6/4 にぶい黄橙色細砂 φ0.3～2cm礫少量含
4 10YR5/2 灰黄褐色に10YR5/3 にぶい黄褐色混じる細砂 φ0.3～5cm礫少量含、土壌化
5 2.5Y7/6 明黄褐色細砂 φ0.3～2cm礫微量含
6 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 φ0.3～5cm礫少量含
（竹林盛土）
7 2.5Y5/4 黄褐色細砂 φ0.3～3cm礫少量含、土壌化(旧表土)
8 2.5Y5/4 黄褐色細砂(粗砂混) φ0.3～10cm礫中量含(流土)
9 2.5Y5/4 黄褐色細砂～微砂
10 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 φ3cm礫微量含、土壌化
11 10YR5/6 黄褐色細砂 φ0.3～3cm礫中量含
12 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 φ0.3～3cm礫少量含
13 10YR4/4 褐色細砂 φ0.3～5cm礫中量含
14 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 φ3cm礫微量含、土壌化
15 2.5Y5/4 黄褐色細砂 φ0.3～2cm礫極微量含
16 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 φ0.3～5cm礫少量含
17 10YR5/6 黄褐色細砂
（堀切肩部堆積土）
18 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂～粗砂混 φ0.3～5cm礫少量含(流土)
19 7.5YR6/6 橙色細砂 φ0.3～15cm礫中量含(崩落土 転落石含)
20 10YR5/6 黄褐色細砂 φ0.5～3cm礫中量含(化粧土)
21 7.5YR5/8 明褐色細砂 φ0.3～10cm礫中量含(葺石掘形埋土)
22 7.5YR5/6明褐色細砂 φ0.3～3cm礫中量含(葺石掘形埋土)
23 10YR5/6 黄褐色細砂 φ4～10cm礫多量含(葺石裏込)
24 7.5YR5/6 明褐色細砂 φ0.5～5cm礫少量含(基底石下置き土)
25 2.5Y5/4 黄褐色細砂 φ0.3～5cm礫少量含(地山)

0 3m

図11 1トレンチ東壁断面図（1：50）

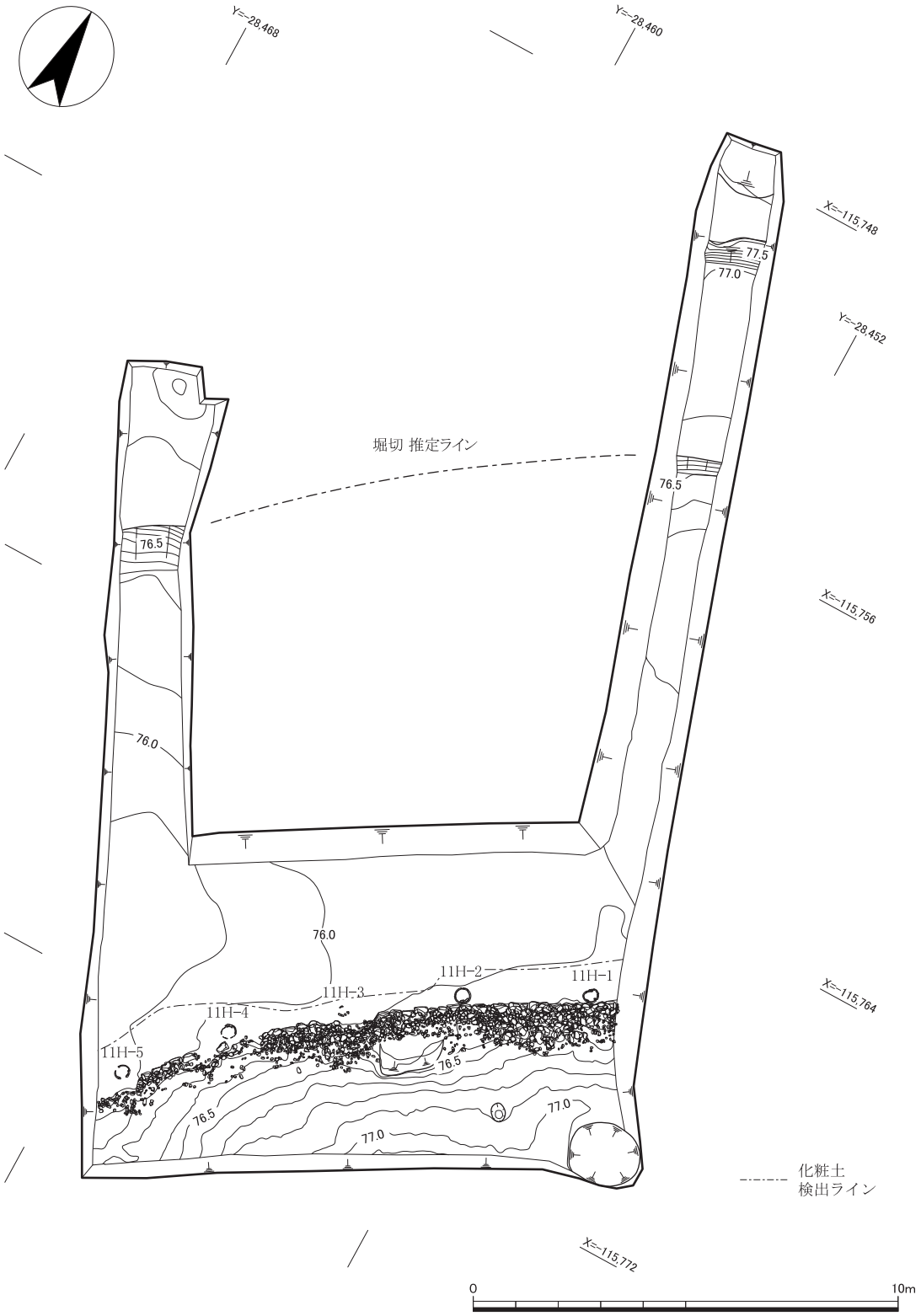



図12　1トレンチ平面図（1：150）

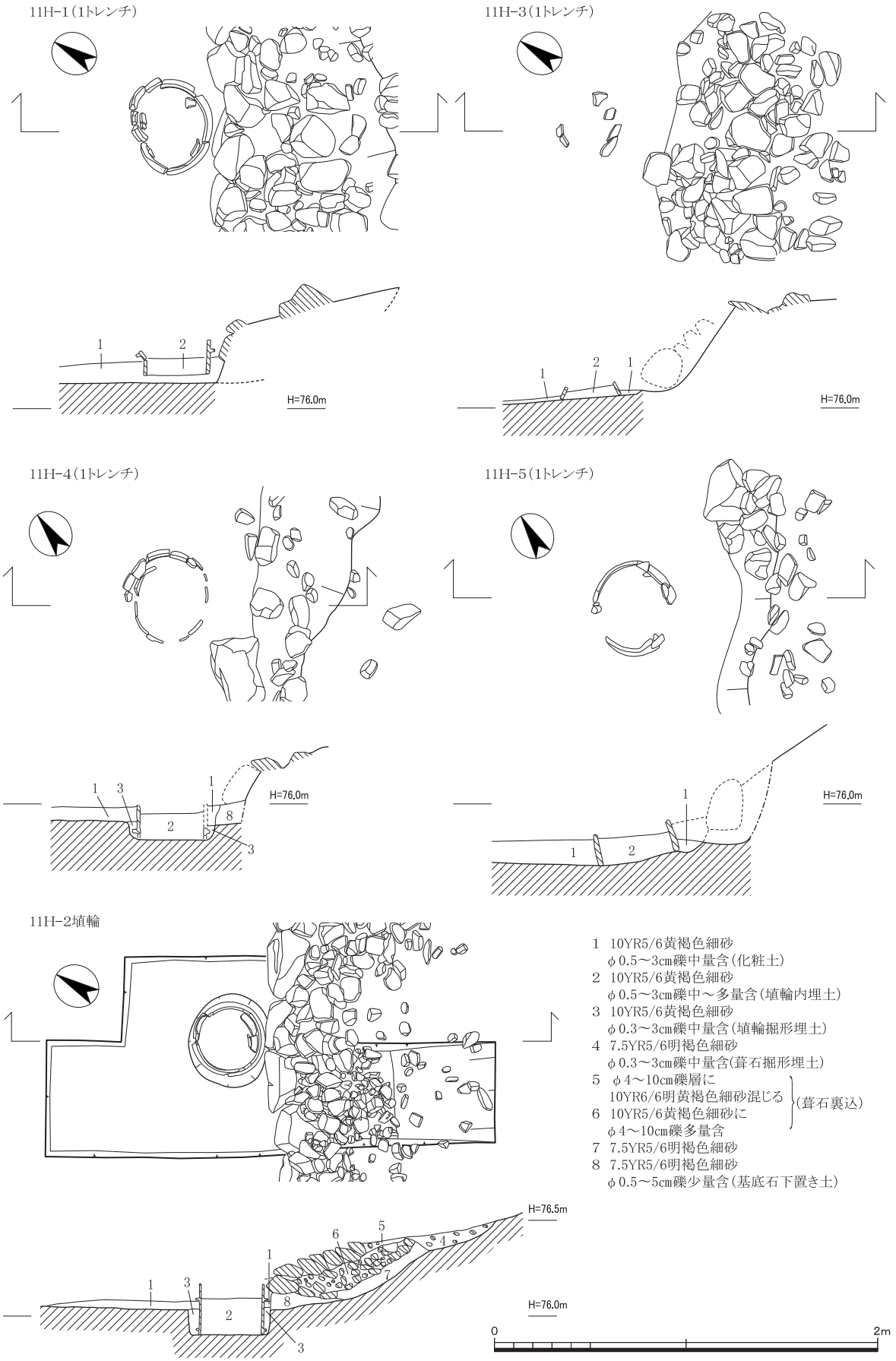



図13　後円部裾葺石・埴輪実測図（1：30）

層)。墳丘裾部の葺石は急角度で立ち上がるが、墳丘の地山掘削も、葺石の施工角度の変化に対応して裾部では急角度で掘削し、葺石施工のための掘形となっている。

葺石・基底石・裏込の石材は砂岩とチャートがある。葺石と基底石には砂岩の方が多い。

**墳丘裾平坦面**　後円部の墳丘外側では、地山を削り込むことによって造成された幅12～13ｍの平坦面を検出している。平坦面の標高は１トレンチの東壁際で76.1～76.5ｍを測り、北東から南西に向かって緩やかに傾斜する。平坦面の墳丘裾付近には化粧土が施されている（図13－１層)。化粧土は南北幅最大1.2ｍ、厚さ最大0.1ｍで検出した。化粧土はよく締まった礫混じりの黄褐色細砂である。

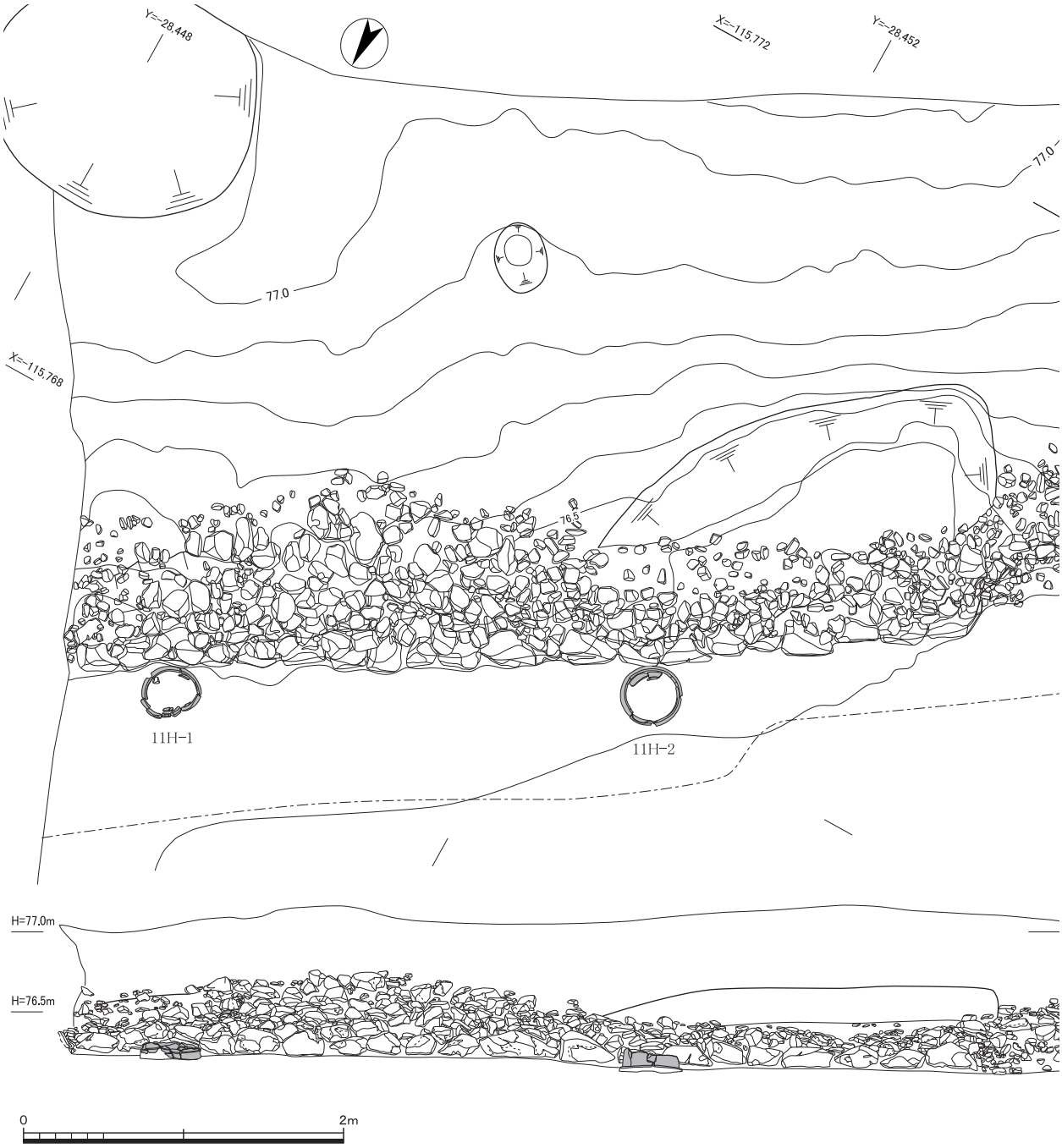



図14　１トレンチ東半　後円部墳丘裾実測図（１：40)

後円部墳丘裾から北へ約12～13ｍの地点で、丘陵切断の掘削面である比高差0.4ｍの段差を検出した。この段差は、古墳の北側から延びてくる丘陵堀切の肩部となる。堀切肩部は１トレンチの東西２箇所で検出した。１トレンチ東側での堀切北斜面裾部の検出面標高は76.1ｍを測るが、上面は近年の削平を受けており、古墳築造時の標高ではない。１トレンチ北部では地山面を標高77.5ｍで検出しており、堀切の深度は1.4ｍ以上あったことになる。

墳丘裾平坦面では埴輪列を検出した。埴輪は５基検出し、東から11H－１～５とした。各埴輪は径約35㎝、高さは５～36㎝が残存する。いずれの埴輪も基底石の近接してに樹立している。11H－２と基底石は接しているが、これは基底石が若干ずれ動いた結果と思われる。また多くの埴輪の

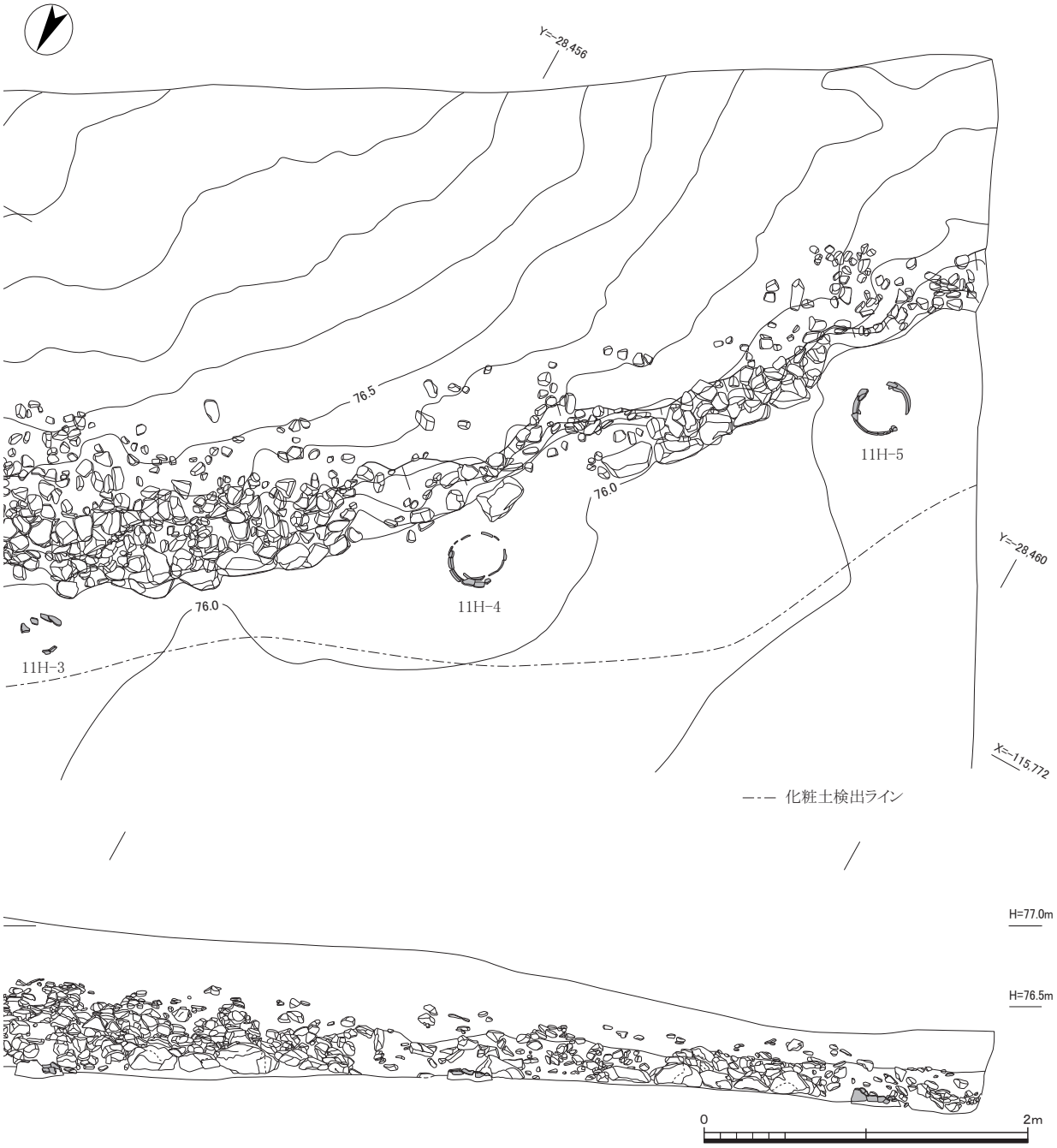



図15　１トレンチ西半　後円部墳丘裾実測図（１：40）

平面形は、墳丘側からの土圧によって東西に長い楕円形に変形している。樹立間隔は心々で11H－１・２間が3.0ｍ、11H－２・３間が2.8ｍ、11H－３・４間が2.7ｍ、11H－４・５間が2.7ｍとなる。掘形を持って樹立するものに11H－２・４があり、掘形を持たずに地山上に立てるものに11H－３・５がある。11H－１は接地面が化粧土の中位にあり、化粧土の敷設を行いながら埴輪を樹立したことがわかる。掘形内埋土と埴輪内埋土は化粧土と同質の小礫を含む黄褐色細砂を使用している（図13－２・３層）。ほとんどの埴輪は底部が欠損しており、11H－５のみ底部が残存する。〔南〕

## （２）２トレンチ（図16～19、図版47）

２トレンチでは、前方部第１段斜面とその裾部の葺石、墳丘裾平坦面に樹立された埴輪、礫敷を施す第１段平坦面、第２段斜面の裾部を検出した。

**層序**　現地表面から約1.2ｍまでは竹林に伴う盛土で、竹の根が繁茂する。（２～３層）。この下には土壌化した褐色細砂が約0.2ｍ堆積する（４層）。竹の根がなく、石や遺物をほとんど含まないこと、層厚も一定あることから竹林造成以前の耕作土の可能性がある。この下には古墳築造以降の流土が堆積する（５～12層）。１トレンチ同様に２トレンチでも葺石の転落石や埴輪片は、墳丘裾の限られた範囲で少量しか出土していない。９次調査の１トレンチでは、転落した葺石を集めて廃棄したと思われる集石土坑が地山面で検出されており、転落石はある時期に整理されたと考えられる[8)]。これらの層の下層において、地山削り出しの墳丘と墳丘裾平坦面を検出した。

**第２段斜面**　検出長は水平距離で東西最大1.5ｍ、斜距離で1.6ｍ、検出高0.7ｍ、墳丘傾斜角度は26°を測る。葺石は遺存していない。墳丘は地山の削り出しである。

**第１段平坦面**　検出面標高は76.0ｍ付近である。東西幅は0.8～1.3ｍを測る。平坦面上では礫敷を検出した（13層）。礫は径５～15㎝で、石材はチャートと砂岩があるが、チャートがその大半を占める。平坦面の西肩部では、礫敷層と地山との間には褐色細砂層（14層）が存在する。この層は墳丘削り出し面の傾斜変換点付近にあり、平坦面の幅を確保するために盛土したものと考えられる。

樹立した埴輪は検出していないが、トレンチ南壁際の礫敷直上で埴輪片が集中して出土しており、この付近に埴輪が樹立していた可能性がある。

**第１段斜面**　検出標高は74.4～75.9ｍ、検出長は水平距離で東西最大3.7ｍ、斜距離で4.0ｍ、検出高1.5ｍを測る。墳丘傾斜角度は、裾部では急角度で立ち上がり28°を測る。これより上部は傾斜が緩やかになり20°程度となる。葺石は墳丘裾部を除いて遺存していない。墳丘は地山の削り出しである。

葺石標高74.1～74.8ｍの第１段斜面裾部付近でのみ検出し、これより上部はすでに失われている。最大検出長は水平距離で1.1ｍ、検出高低差は0.7ｍを測る。

基底石は、接地面が標高74.1～74.3ｍで検出し、北から南へ緩やかに傾斜する。石材は長軸10～35㎝を測り、20㎝前後のものが多い。長軸を墳丘に対して横方向に並べて配置する。基底石は地

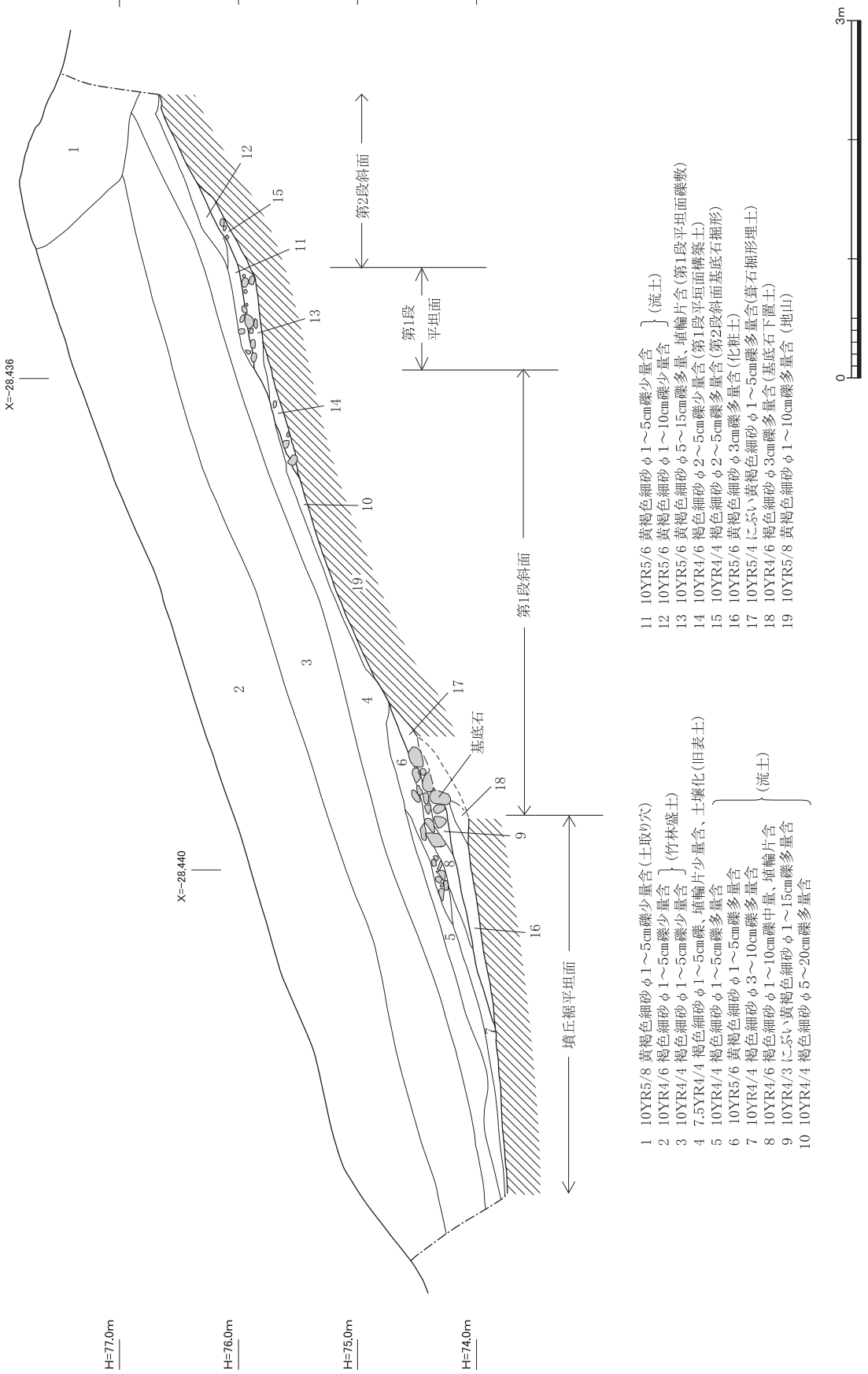



図16　2トレンチ断面図（1：50）

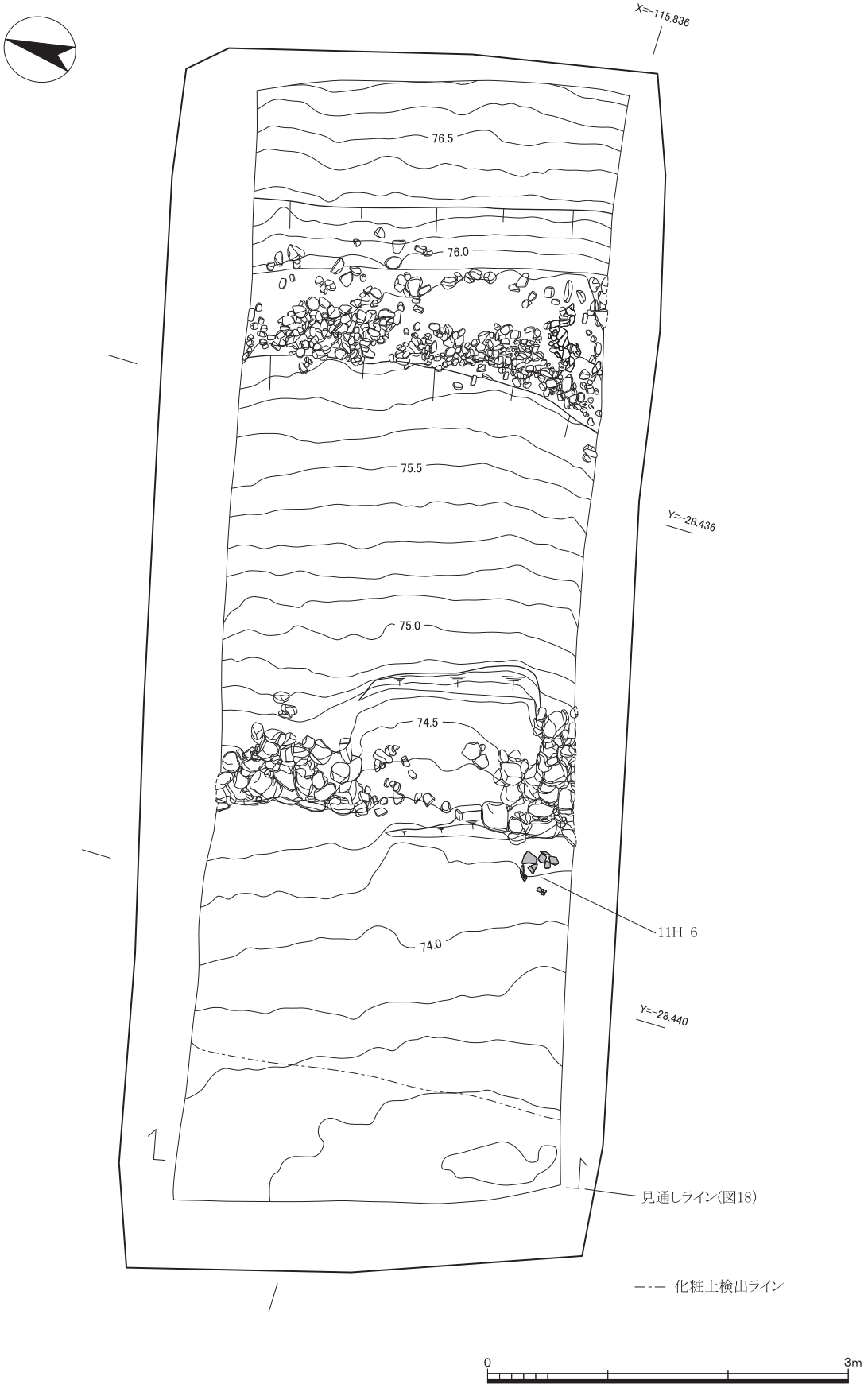



図17　2トレンチ平面図（1：50）

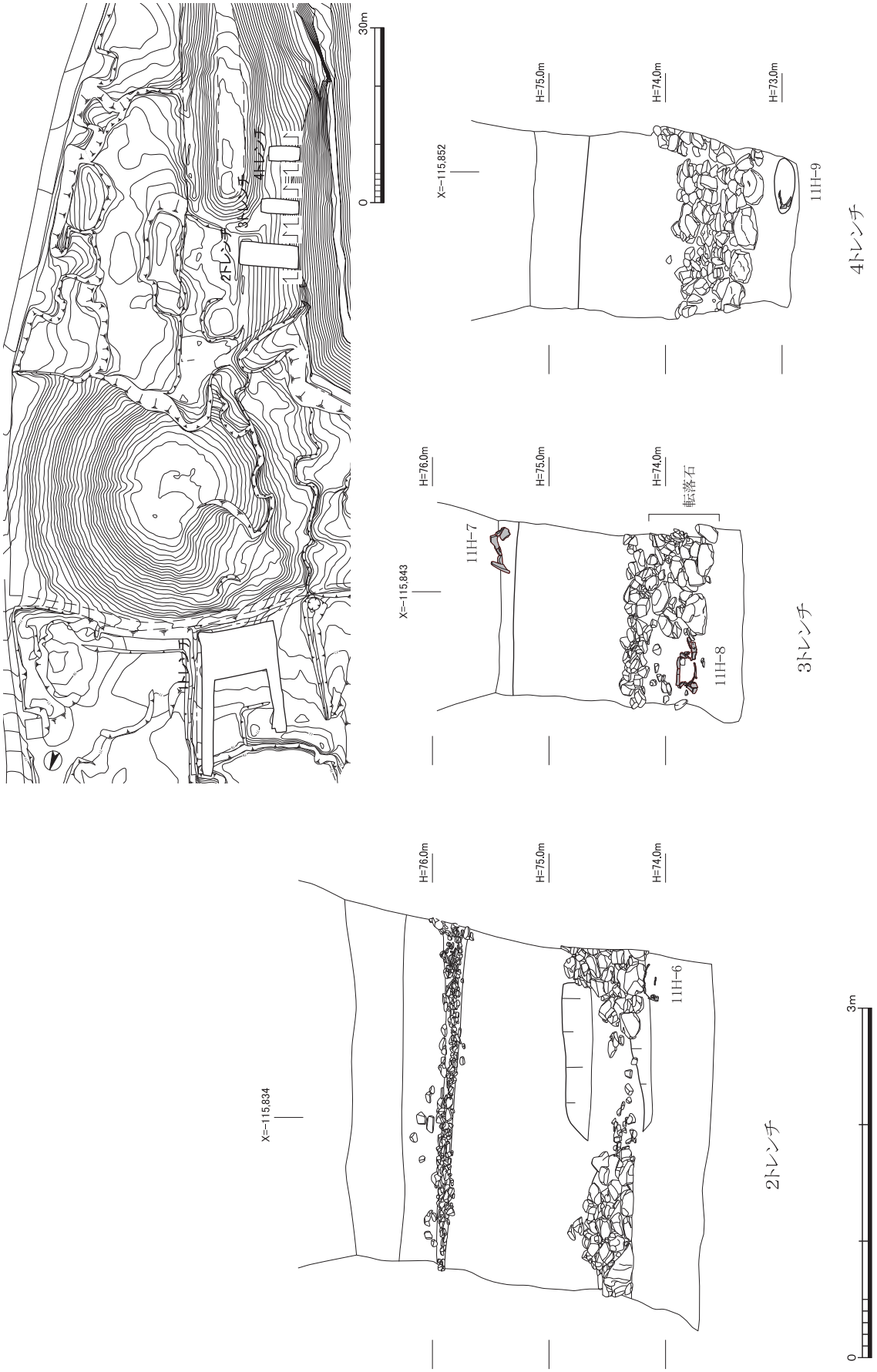



図18　２～４トレンチ立面図（１：50）

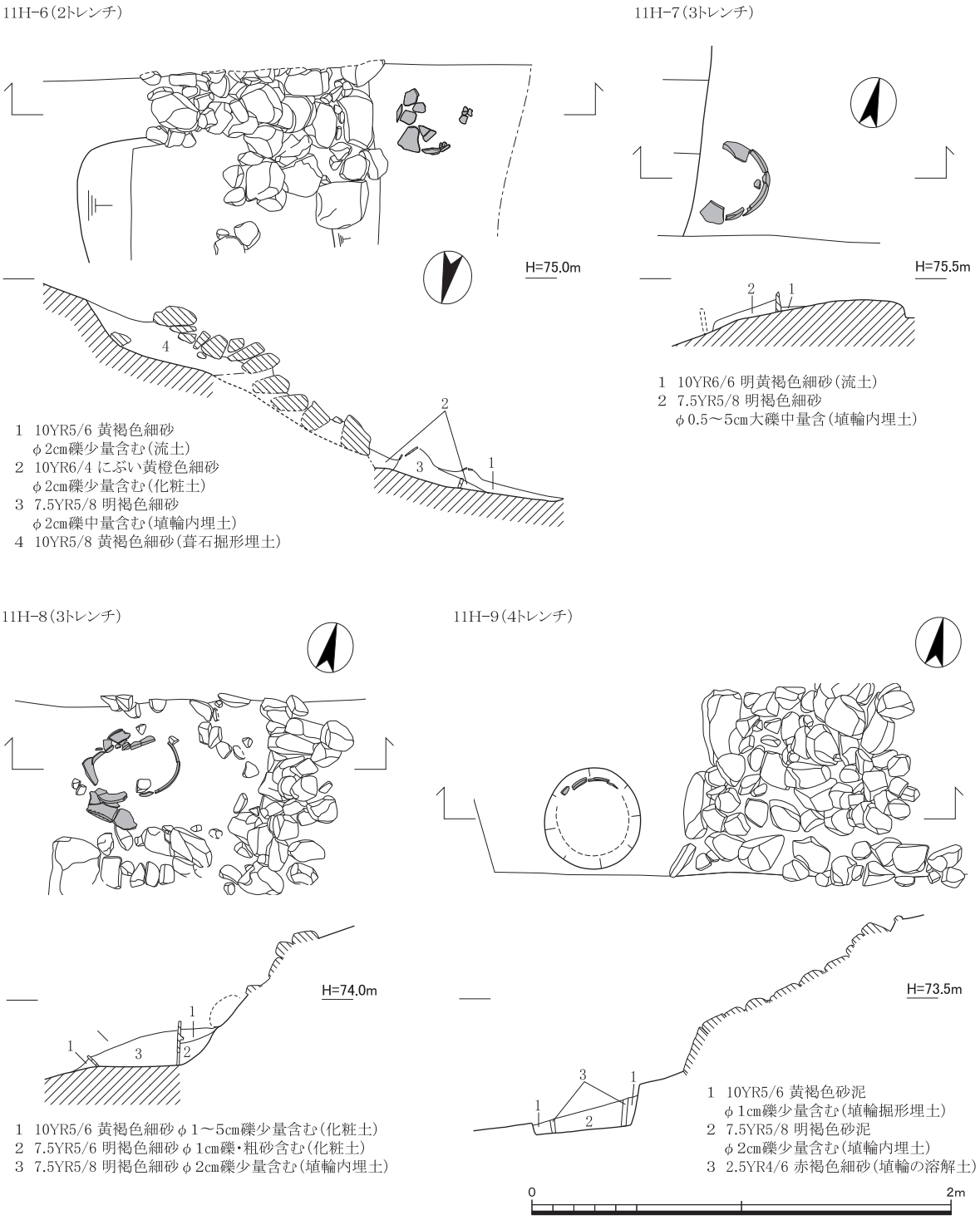



図19　前方部葺石・埴輪実測図（1：30）

山上に置かれているものはなく、地山と基底石底面の間には土を置いている（18層）。基底石の前面には化粧土が敷設され、基底石下半部を覆う（16層）。

基底石より上部の葺石は、石の大きさは10～35cmを測り、15～20cm程度のものが多くを占める。葺石の下は1トレンチの後円部と異なり、顕著な裏込は施されていない。第1段斜面裾部の地山面は急角度で掘削しており、葺石施工のための掘形となっている。

葺石と基底石の石材には砂岩とチャートがある。割合としては砂岩の方が多く、特に長軸が10

cm以上のものに砂岩が多くなる。

**墳丘裾平坦面**　墳丘の裾から西へ最大3.3ｍを検出したが、さらに調査区外へと続く。平坦面の標高はトレンチの北壁際で73.7～74.3ｍを測り、東から西へ緩やかに傾斜する。葺石の基底石の前面には化粧土が施されている（16層）。化粧土は幅約2.0ｍ、厚さ最大0.15ｍ検出した。化粧土の遺存状況は、調査区北半部で良好であった。

墳丘裾平坦面では、埴輪列を構成する埴輪の基部のみを検出した（11H－６）。埴輪は底部を欠いており、基底石から約0.1ｍと近距離に樹立されている。埴輪は据付のための掘形はなく地山面に設置し、化粧土で周囲を覆い固定する。〔南〕

## （３）３トレンチ（図18～20、図版48）

**層序**　トレンチ東端には大きな土取りの痕跡がみられるが（１層）、これは竹藪開墾に伴う土取り穴である。現地表面から大きく２層に分けられる竹藪の盛土が２トレンチと同様に1.3～1.5ｍ程堆積し（２・３層）、その下で竹藪開墾直前の旧表土が斜面の傾斜に沿って薄く堆積する（４層）。旧表土と墳丘面の間にみられる流土はトレンチ全面で認められ、このうち墳丘裾付近の流土（８層）は0.2～0.3ｍと厚く、転落石や掌大の埴輪片を比較的多く含んでいる。

墳丘面のうち、葺石や化粧土が遺存する墳丘裾付近を除けば、大半で地山が露出する（13層）。墳丘面の一部を断ち割ったところ、第１段斜面の基底石の外側に敷かれた化粧土（10層）や基底石下の置き土（11層）、葺石掘形埋土（12層）を確認することができた。

**第１段平坦面**　標高75.3～75.4ｍの範囲で幅約1.0ｍが検出された。復元される幅は約1.3ｍである。地山直上まで流土あるいは攪乱が及んでおり、礫敷は確認されなかった。

埴輪列を構成する円筒埴輪１個体がトレンチ南端で検出され、底部のみ残存する（11H－７）。埴輪は底部を欠くことなく樹立されるが、当初の樹立位置よりいくぶん外側にずれ落ちたためか、埴輪据え付けに伴う掘形はなく、地山直上に乗った状態で検出された。第１段平坦面は部分的に攪乱を受けているため、平坦面における埴輪の樹立位置は判然としないが、第１段斜面との肩部に近い位置で検出されている。２トレンチで検出された礫敷が残存していないことからも、当初の位置からはやや移動していると思われるが、これらを加味しても第１段平坦面の埴輪は、これまでの調査成果と同様に、平坦面の外側縁辺に近い位置に樹立されたものと考えられる。

**第１段斜面**　標高73.9～75.3ｍで検出され、水平距離約3.1ｍ、斜距離約3.3ｍ、高さ約1.4ｍ、角度約25°を測る。

葺石は標高約74.1～74.4ｍの範囲で墳丘面に石材を差し込むように葺かれた状況が良好に残る。原位置を保つ基底石は確認されなかったが、墳丘面の傾斜の変換点より墳丘裾の標高は約73.8～73.9ｍに推定される。葺石石材は砂岩とチャートに大きく分類でき、砂岩の方が多く含まれる。

葺石検出当初は、30～35cm大の列状に並ぶ石が原位置を保つ基底石列と思われたが、その内側で検出された10～25cmの小ぶりの石が整然と並ばないことや、過去の調査や本調査の他トレンチでも確認されている墳丘裾に樹立された埴輪列と基底石との位置関係から考えて、これらは原位

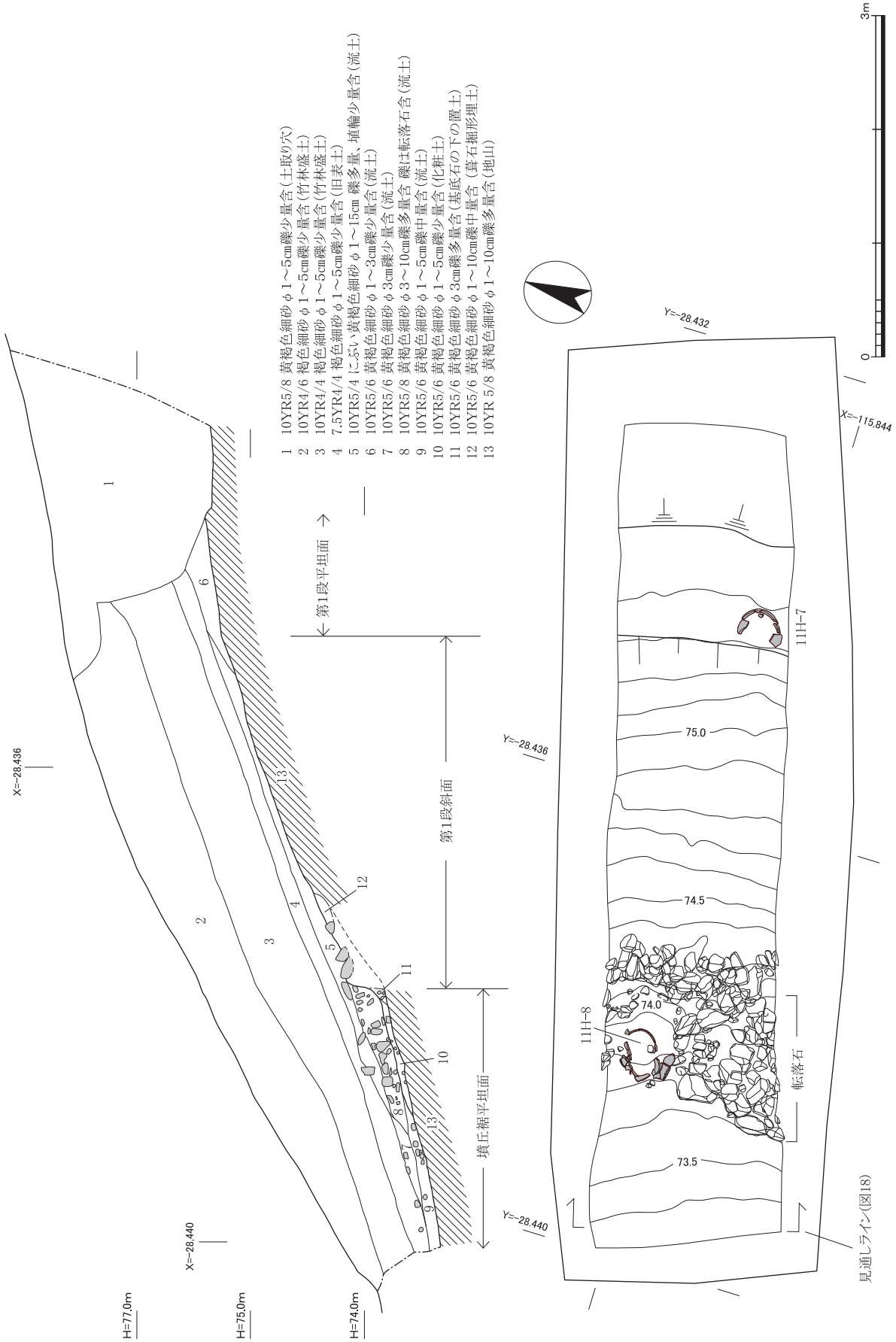



図20　3トレンチ実測図（1：50）

置をとどめておらず、墳丘の崩落に伴ってずれ落ちた石群と判断した。ただし、これらは施工当初の各石材の関連性を一定度残しているため、また葺石の崩落過程を良好に示す遺構であるため、転落石として取り上げずこの状態で記録を取って埋め戻すこととした。

**墳丘裾平坦面**　化粧土と地山で形成された平坦面は標高73.3～73.9ｍで検出され、東から西に向かって緩やかに傾斜する。調査区の北端近くでは埴輪列を構成する円筒埴輪１個体が検出されている（11H－８）。墳丘裾の基底石は遺存していないものの、墳丘裾に推定される墳丘面の傾斜変換点と埴輪中心点の距離は約0.45ｍを測り、円筒埴輪は墳丘裾のすぐ外側に樹立されていたことがわかる。埴輪据え付けのための掘形はなく、底部が欠損した埴輪で透孔のある段を底部として地山直上に据え付けて、次の突帯が埋まる程度まで化粧土（10層）で周囲を整地して樹立されていた。なお、この個体は隣接して出土した上部の破片より朝顔形埴輪と考えられる。〔宇野〕

## （４）４トレンチ（図18・19・21、図版49）

**層序**　他のトレンチと大きく異ならないが、断ち割り調査を実施した結果、墳丘裾平坦面が盛土で成形されていることが明らかになった。盛土は礫の含まない締まりある細砂で、墳丘の外側から墳丘に向かって緩やかな傾斜を持って施工され、断ち割り範囲では厚さはおおむね0.2～0.3ｍを測り、合計で５つの層に分層される（11～15層）。なお、葺石の保存を優先したため、盛土の施工範囲および地山との関係は把握できていない。

遺物は埴輪列を構成する円筒埴輪（11H－９）のほかに、流土より転落石とともに埴輪片が出土している。特に墳丘裾を中心に堆積する９層からは比較的大きな破片が出土した。また、８層からは平安時代の瓦が出土した。

**第１段平坦面**　標高74.8～75.1ｍの範囲で検出された。上層からの攪乱によって第２段斜面の裾は検出できなかったが、他のトレンチの状況と同様、平坦面の幅は1.0～1.5ｍ前後に復元される。

**第１段斜面**　標高73.3～74.8ｍで検出され、水平距離約3.2ｍ、斜距離約3.3ｍ、高さ約1.5ｍ、角度約25°を測る。

葺石は標高約73.2～74.1ｍの範囲で検出され、基底石は良好に残存していた。基底石列はトレンチの方向に直交せず、北に対してやや東に振っており、前方部西斜面の裾が墳丘主軸に対して外側に開いていく平面形を端的に示している。基底石の標高は北から南に向かってわずかに傾斜し、墳丘裾の標高はトレンチ北端で73.3ｍ、南端で73.2ｍとなる。基底石は20～35㎝大の礫で構成され、その長軸を横方向に据えており、その上部には10～20㎝程度の拳大の礫が墳丘面に差し込まれるように葺き上げられている。このうち、中央やや南寄りには、墳丘の傾斜に平行して東西方向に目地が揃う石列が確認されており、葺石を施工する際の区画石列の可能性が考えられる。

葺石石材は砂岩とチャートに大きく分類でき、砂岩の方が多く含まれる。

**墳丘裾平坦面**　盛土によって構築された平坦面は標高72.9～73.3ｍで検出され、東から西に向かって緩やかに傾斜する。他のトレンチでみられた化粧土は流出してしまったためか、４トレンチでは確認されていない。

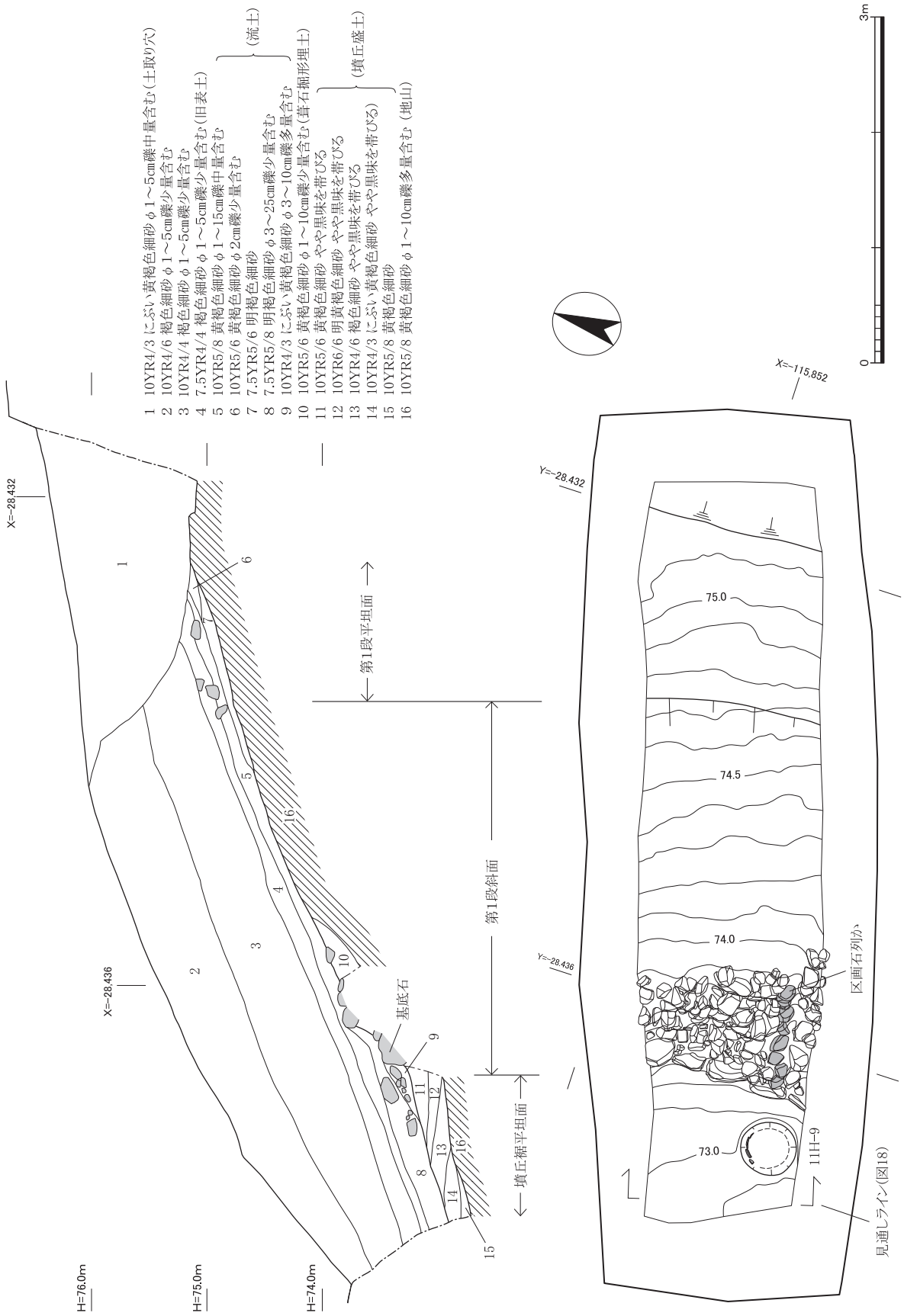



図21　4トレンチ実測図（1：50）

埴輪列を構成する円筒埴輪が１個体検出されている（11H－９）。直近の基底石に近接して、径約0.45～0.5ｍ、深さ約0.2ｍの円形の掘形を持つ。埴輪は掘形北側の一部を残すのみで、大部分は胎土が溶け出し、掘形埋土が円形に赤褐色に変色していた。個体の遺存状態は悪いが、掘形北側に残る胴部最下辺の破面の風化が認められないことから、少なくとも底部の一部が欠損した状態で樹立されていたと判断される。〔宇野〕

## ４．遺　　物

遺物は、遺物コンテナで17箱が出土した。埴輪が多くを占めるが、長岡京から平安時代の須恵器や瓦も少量出土している。

### （１）埴輪（図22～25、図版50～52）

出土した埴輪はすべて円筒埴輪であるが、上部の判明する個体が乏しいため、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪の判別が困難な個体がほとんどである。特に両者を区別して記述する必要のない場合は、円筒埴輪と表記する。

トレンチ別の出土重量は１トレンチ36.86kg〔0.21kg／㎡〕、２トレンチ27.66kg〔0.68kg／㎡〕、３トレンチ17.36kg〔0.85kg／㎡〕、４トレンチ3.78kg〔0.23kg／㎡〕である。

まず、原位置より出土した埴輪列資料（11H－１～９）から観察所見を述べた後、原位置から遊離した資料のうち、比較的大きな破片に復元された資料や報告すべき内容を備えたものを中心に包含層出土資料として報告する。これとともに、10次調査で出土した埴輪も再整理を実施したので、主要な資料について報告する。

**埴輪列資料**

１～９は原位置あるいはそれに近い位置から出土した埴輪列を構成する埴輪である。以下、１トレンチから４トレンチの順に記述する。

１（11H－１）　残存高14.0㎝の個体で、底部を欠いた状態で樹立されていた。胴部２段分が残存し、胴部の最大径は32.2㎝を測る。突帯は断面M字形を呈すが、やや小振りで突出度も低い。突帯上面には突帯間隔の設定に伴って使用された工具の圧痕が米粒状に残る（図版52－１）。

表３　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 古墳時代 | 円筒埴輪 | | 円筒埴輪13点 | | |
| 長岡京期～平安時代 | 須恵器、瓦 | | 須恵器１点、瓦１点 | | |
| 合　計 | | 27箱 | 15点（10箱） | ０箱 | 17箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。

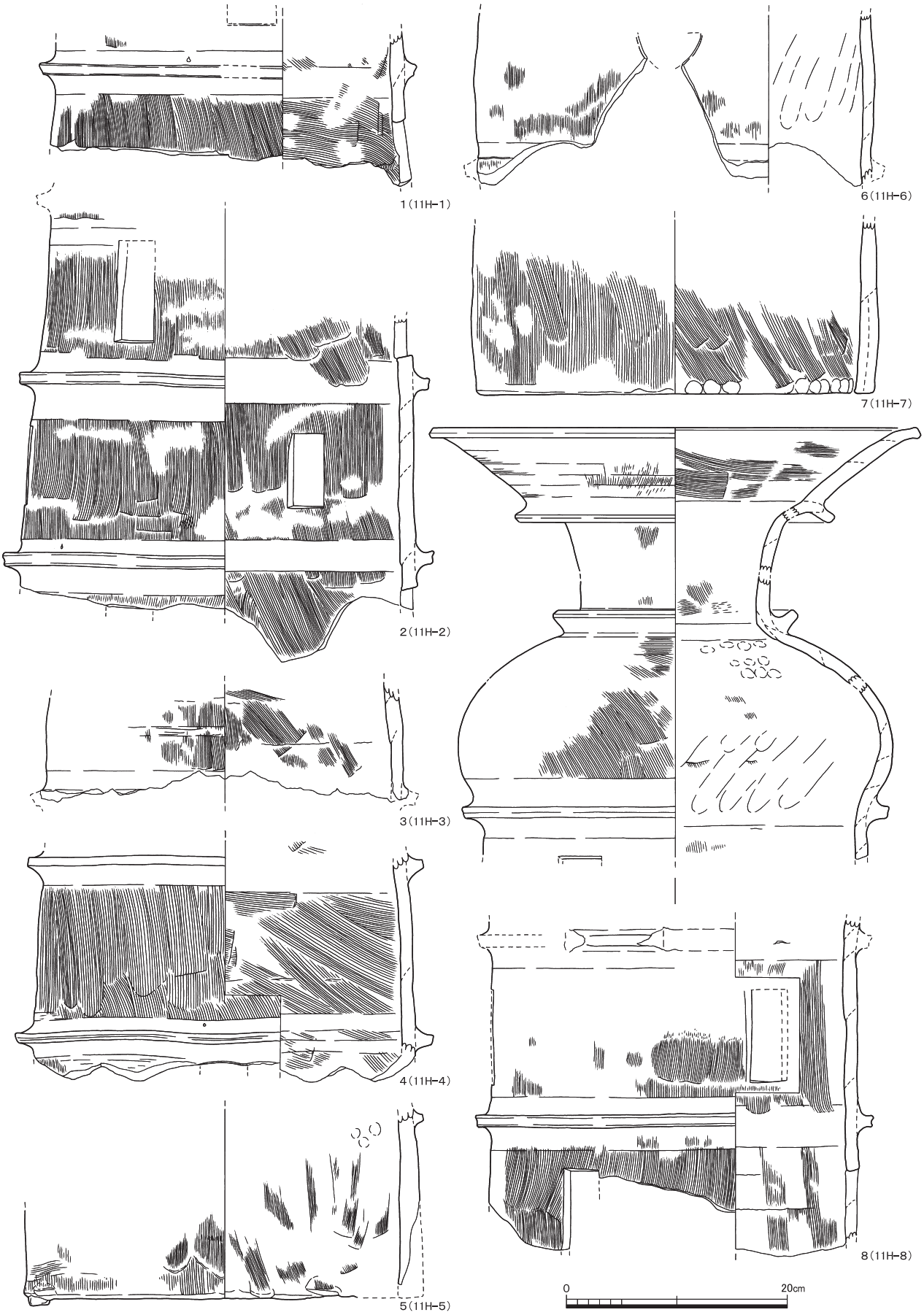



図22　11次調査出土埴輪実測図１（１：５）

残存する最下段は全周する胴部に相当し、縦長方形の透孔が２孔認められる。この２孔は対向する位置にはなく、３孔配置相当の位置にそれぞれ穿たれており、１孔分の穿孔が省略された形になっている。もしくは残存範囲に現れないような横長方形などの透孔が穿孔された可能性が挙げられる。一方、上段には方形透孔の下辺がわずかに残存している部分が１箇所確認できる。下段との関係からみれば、微妙なずれはあるものの、３孔配置の位置関係で互い違いに穿孔されていたことが復元できる。

調整は外面タテハケ、内面ヨコハケないしナナメハケが施され、ハケ目密度は７～８本/cmである。下段の透孔付近では内面調整タテハケが粘土紐接合痕にもぐっていく箇所があり（図版52－２）、段の中ほどで粘土紐の積み上げが休止されたことが想定できる。

２（11H－２）　後円部埴輪列の中で残存状態が最も良好な個体で、残存高41.0cmである。底部を欠いた状態で樹立されており、胴部３段分が残存する。胴部の最大径36.0cmを測り、上方に向かってわずかにすぼまっていく形態を呈す。突帯は突出度の大きい断面M字形で、突帯間隔は16.0～16.5cmを測る。突帯上面に残る米粒状の圧痕から器面の刺突によって突帯間隔が設定されたと判断される。

残存する最下段に方形透孔の上辺がみられ、各段に３孔の方形透孔が互い違いに穿孔されている。いずれも縦長の長方形であるが、中段は7.0×4.0cm、上段は9.0×4.0cmと段間で大きさが異なる。

調整は内外面ともにハケ目密度８本/cmのタテハケが施される。そのうち透孔中位付近には内面調整タテハケが粘土紐接合痕にもぐり込む箇所があり、段の中ほどで粘土紐積み上げがいったん休止され、器面調整が施された成形工程が想定できる。

さらに、突帯部分の内面には突帯貼り付けに伴うヨコ方向のナデが施されるが、下位のタテハケはこのナデに切られ、上位のタテハケの一部はナデを切る。つまり、内面調整は突帯貼り付けごとに施されたことを示しており、１段ごとに粘土紐積み上げ、器面調整、突帯貼り付けの順に成形された工程が復元できる。外面の一次調整タテハケが胴部中央下寄りを起点として開始されていることはこの想定を裏付けるものである。

３（11H－３）　後円部埴輪列の中で遺存状態が最も悪い個体で、残存高は9.0cm、胴部復元径は32.2cmである。下端に突帯の一部が残ることから、底部が欠損した個体と推定できる。透孔の配置などは明らかでないが、同一個体の破片に方形透孔の痕跡を残すものがある。

外面調整はタテハケを基調とし、内面にはタテないしナナメハケが施される。いずれもハケ目密度は11本/cmと細かい。

４（11H－４）　残存高が20.0cm程度、胴部１段とその上下の突帯２条が残る個体である。胴部復元径は34.0cmで、上方に向かって少しずつすぼまっていく形態を呈す。突帯の断面形態は台形を呈し、突帯間隔は16.0cmを測る。突帯の剥離面こそないが、突帯上面に棒状工具の痕跡が認められ、器面の刺突によって突帯間隔が設定されたと判断される。

この個体も底部欠損の状態で樹立されていたが、残存する最下段に方形透孔の上辺がみられ、透

孔穿孔段を基底として樹立されたことがわかる。その上段の胴部は残存率40％程度で、２孔あるいは３孔配置を仮定しても、最下段の透孔との配置関係より透孔は本来穿孔されなかったと推定される。

器面調整は外面タテハケ、内面ナナメハケで、ハケ目密度は４本/cmと粗い。外面のタテハケは胴部の中央やや下寄りでハケの起点が列状に認められる。内面調整は下段の突帯を貼り付けたのちに施されたと推定されるが、その後再び突帯の最終的な仕上げをしたためか、突帯の位置に対応する内面にはハケを切ってナデが施された箇所が部分的に観察される。なお、下段の突帯の側面にもハケ条線がわずかに残っており、突帯に対しても工具を用いた調整が最終ナデ調整の前に施されていたと推定される。

５（11H－５） 底部を欠くことなく樹立された個体である。底部の一部が溶出しているが、底部径36.0cmに復元される。底部下半は厚さが2.0～2.5ｍと厚く、粘土板で成形されたと考えられる。

基底部の底面には約２cm大の粘土塊が少なくとも２箇所に認められ、底面にめり込んでいる状況が観察される（図版52－３）。これは製作台から埴輪を容易に取り外すための措置と考えられる。ただし一方で、基底部底面にも非常に平滑な面が形成されていることから、一定の高さまで成形した段階で、固く乾燥した粘土塊を複数並べた上に個体を置いて、成形を再開させたと推定される。そのほか、基底部の内外面には器壁のズレが各所で認められ、製作台から埴輪を取り外す、あるいは持ち上げる際に付いた手や工具の痕跡と思われる。

突帯は断面台形を呈しやや小振りで、底部高は16.5cmに復元できる。

調整は、内外面ともにハケ目密度12本/cmの条線が非常に細かく浅いタテハケが施されているが、外面の基底部付近にはそれに先行するハケ目密度４本/cmの粗いタテハケがみられる。製作者が調整工具を持ち替えたのか、あるいは製作者が入れ替わったのかは定かでないが、いずれかの工程を境に調整工具が変更されている。

６（11H－６） 残存高15.0cm程度の胴部片で、胴部径は36.0cmに復元される。最下部に突帯の剥離した痕跡があることから、底部を欠いた状態で樹立されたと考えられる。主として掌大の破片２片が残存するが、検出状況による限り、中間の破片を欠いた状態で樹立されていたようである。この２片をまたぐように透孔の痕跡が残り、ともに円弧を描くが、一方には屈曲点がわずかに認められ、逆三角形を呈すると考えられる。突帯間隔が16.0cm前後を測るとすれば、上段の突帯に近接して穿たれていたことになる。

器面の磨滅が著しいが、外面にはタテハケ、内面には縦方向のナデが認められる。ハケ目密度は６～７本/cmである。なお、胴部外面の下半には器面に塗布された赤色顔料がかろうじて観察される。

７（11H－７） 底部径約36.0cm、残存高15.5cmのほぼ直立する底部片で、第１段突帯までは残存しない。基底部から約８cmの高さまでは厚さ0.8cmの薄い粘土板を２枚貼り合わせることで成形され、これより上部は粘土紐が積み上げられる。

基底部内面には内面調整前に付けられた深い指頭圧痕が複数単位みられるが（図版52－４）、こ

れは成形にあたって基底部を製作台に固定させるために強く圧着させた際の痕跡と考えられる。また、基底部底面は平滑であるが、一部には条線や枝状の圧痕がみられる。

調整は外面タテハケ、内面ナナメハケで、ハケ目密度は５本/cmである。なお、外面には赤色顔料が認められる。

８（11H－８） 接合関係はないものの、近接して出土した上部破片から朝顔形埴輪に復元される個体である。

原位置で出土した胴部は残存高29.0cm前後、胴部径33.0cm前後を測り、２段分がほぼ全周する。底部が欠損した状態で樹立されたため、残存する最下段とその上段には方形の透孔が配置されている。１段につき３孔、段間において互い違いに配置されたことが復元される。透孔の短辺は約3.5cm、長辺は約8.5cmを測る。上段の透孔の左端には割り付け線と思われる線刻が残る。

突帯は上辺がやや突出したM字形を呈し、突帯間隔は16.0cmを測る。下段の突帯剥離面には径３mmの円形刺突が認められる。

調整は内外面ともにハケ目密度は８本/cmのタテハケが施される。そのうち内面下端近くには内面調整タテハケが粘土紐接合痕にもぐっていく箇所があり、段の中ほどで粘土紐積み上げがいったん休止され、器面調整が施された工程順序が想定できる。加えて、突帯部分の内面に残る突帯貼り付けに伴う横方向のナデと内面調整タテハケとの切り合い関係から、11H－２と同様、胴部中央付近まで粘土紐を積み上げて、器面調整をおこなったのち、突帯を貼り付ける、という工程を繰り返すことで全体を成形したと復元できる。なお、胴部外面には赤色顔料が認められるが、底部が欠損する前に塗布されている。

一方、二重口縁壷に相当する上部破片は接合しないが、肩部から口縁部まで復元できる。肩部は張りのある半球形を呈し、頸部は直立気味で口縁部突帯の手前で外方に屈曲する。口縁部は外反せずにまっすぐ伸びて、端部はわずかに外側に開く。口縁部径43.0cmに復元され、口縁部長10.5cmを測る。各部の境界にめぐる頸部突帯、口縁部突帯はともに突出度が高い。

肩部から頸部にかけては、肩部の上端部外面を内傾接合によって内湾させて器面調整を施した後に、その上に粘土紐を載せるようにして頸部が成形される。頸部から口縁部は擬口縁状に成形されたのち、口縁部突帯が貼り付けられる。

透孔は肩部直下段に方形透孔が配置される。残存状況より配置は不明であるが、胴部片と同様、３孔配置と推定される。

調整は各部内外面にタテハケやヨコハケが施される。口縁部外面はタテハケの後に広範囲にヨコ方向のナデがみられる。肩部の内面には半球形に成形するためのナデや指オサエが顕著にみられる。なお、肩部の下端近くに粘土紐積み上げ休止の痕跡が認められる。

９（11H－９） 残存高7.3cm、胴部復元径36.8cmの胴部片で、下端に突帯が１条めぐる。残存状態から少なくとも底部の一部が欠損した個体と判断される。突帯は突出度が大きく、上面は強く内湾し、側面は工具によって調整されたためか条線が残る。器面調整として、外面には一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケが施される。ハケ目密度は５本/cmである。内面は磨滅が著しいが、ナデ

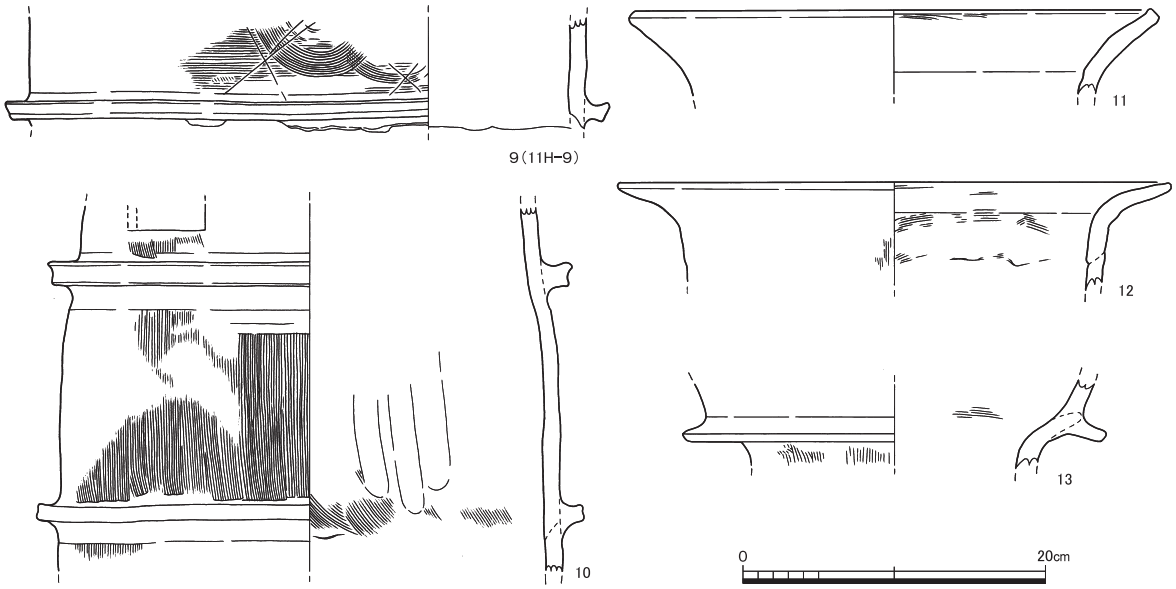



図23　11次調査出土埴輪実測図２（１：５）

が部分的にみられる。

胴部外面には線刻の幾何学文様が残る（図版52－５）。文様の全容は不明であるが、現状で円弧状と「×」で構成される文様が左右２単位みられる。円弧状の文様は各条線が重ならないが、線幅がわずかに一定でないことから、一本ずつ線刻されたと考えられる。二次調整ヨコハケの後に施文され、円弧状→「×」の施文順序が復元できる。

**包含層出土資料**

10～13は墳丘面上に堆積した流土から転落石とともに出土した埴輪である。図化できる資料は数少ないが、２トレンチからは比較的大きな破片資料が出土した。

10は２トレンチ第１段平坦面の南端からまとまって出土した破片である。当初は原位置を保っている可能性も考えたが、埴輪を取り上げる過程で精査した結果、墳丘面に樹立されていた痕跡が認められなかった。直近の埴輪列または上段平坦面の埴輪列に伴う個体とみられる。

残存高24.0㎝、胴部最大径が33.2㎝に復元される胴部片で、上方に向かってわずかにすぼまる。突帯は２条残るが、断面形態は上下で大きく異なり、下段の突帯は台形、上段は太いM字形を呈す。突帯間隔は16.0㎝。残存する最上段には方形透孔が残るが、残存率が低く、配置の詳細は明らかでない。

外面調整にはタテハケが認められる。このタテハケは下段の突帯成形に伴うナデを切る形で起点がみられるため、二次調整タテハケの可能性も考えられる。ただ、上段突帯のナデには切られており、かつ１段ごとに胴部成形、突帯貼り付け、器面調整をおこなうという、他の個体から復元される製作工程を勘案すれば、一次調整として理解しておくべきであろう。内面調整は器面の磨滅が著しいものの、ナナメハケ後タテ方向のナデが観察される。ハケ目密度は７～８本/㎝。

11は２トレンチ第１段斜面上出土の普通円筒埴輪の口縁部である。残存高5.5㎝、口縁部径34.0㎝に復元され、残存部下端からラッパ状に屈曲して開く。口縁端部は丁寧にナデ調整することに

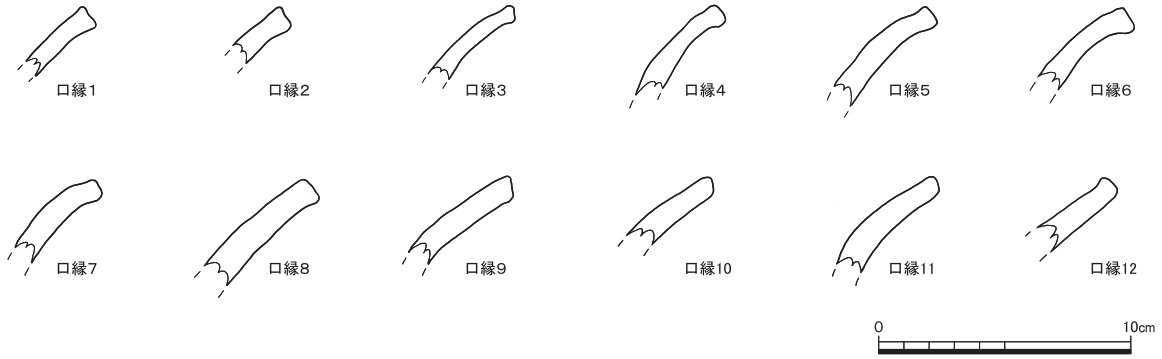



図24　11次調査出土円筒埴輪口縁部実測図（１：３）

よって断面方形を呈し、端部の内面はわずかにつまみ上げられる。器面調整は磨滅により明らかでないが、端部へのナデ調整に先行して施された内面調整ヨコハケがわずかに残る。

12は２トレンチ墳丘裾平坦面上に堆積する流土より出土した普通円筒埴輪の口縁部である。残存高7.1㎝、口縁部径36.0㎝に復元される。口縁端部に近い位置で水平方向に強く屈曲し、端部は鈍くおさめる。器面調整は磨滅が著しいが、外面タテハケ、内面ヨコハケがかろうじて観察される。

13は２トレンチ第１段斜面の重機掘削中に出土した朝顔形埴輪の頸部から口縁部にかけての破片である。残存高は5.9㎝を測り、中央には口縁部突帯がめぐる。口縁部突帯は突出度が大きく、やや下方を向く。頸部の先端を外方に屈曲させて、その端部の上面に口縁部を成形した、いわゆる擬口縁成形が断面観察される。突帯径は27.8㎝に復元できる。頸部外面にはタテハケ、口縁部内面にはヨコハケがわずかに残る。

このほか、普通円筒埴輪の口縁部に推定される破片の断面形を示しておく（図24：口縁１～12）。外反する形態を呈し、残存状態によっては朝顔形埴輪の口縁部との判別が容易ではない。ただし、現状で判別できる資料に限ってみれば、朝顔形埴輪の口縁部は端部に比較的鋭い面を形成し、その外面をつまみ出すのに対し、普通円筒埴輪の口縁部は端部がやや鈍く、ナデによって端部内面がつまみ上げられる例が多いという傾向が見受けられる。

**10次調査出土埴輪（14～17）**

14～17は平成21年度に行われた10次調査で出土した埴輪である。前方部前端の墳丘裾平坦面から出土しており、墳丘裾平坦面の埴輪列、あるいは上段平坦面の埴輪列に伴うものとみられる。出土量は遺物コンテナ５箱である。なお、10次調査で検出した原位置を保つ資料は、埴輪列としての遺構保存を優先したため取り上げていない。

14は残存高15.5㎝で、胴部径40.0㎝前後に復元される円筒埴輪胴部片である。調整は外面、内面ともにタテハケを基調としている。中央付近に突帯の剥離した痕跡があり、剥離面には一次調整タテハケとともに突帯割り付けの際の方形刺突が認められる。方形刺突は４×７㎜程度の縦長方形で、約２㎜の深さを測る。

上段の胴部外面には沈線による円弧状の線刻文様が描かれている（図版52－６）。遺物の残存状

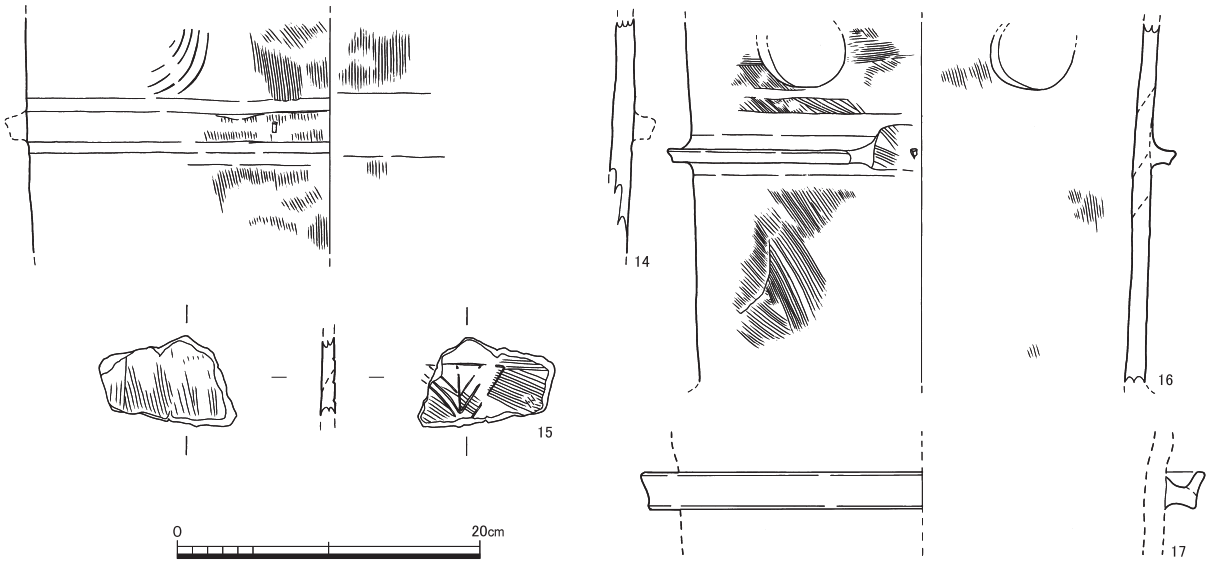



図25　10次調査出土埴輪実測図（１：５）

態が良好でないため文様の全体構成は明らかでないが、現状では５本の沈線がみられる。円弧の中心付近に透孔が穿たれるかどうかについても明らかでない。

15も外面に線刻文様が残る円筒埴輪胴部片で、残存高5.7㎝である。文様はいわゆる鋸歯文の一単位で、中軸線を対称にして線刻され、先端は下方を向く（図版52－７）。外面にはヨコハケ、内面にはタテハケが施される。

16は残存高23.5㎝で、胴部径30.0㎝前後に復元される円筒埴輪胴部片である。中央やや上寄りに突帯がめぐる。突帯はわずかに下向きの断面M字形で、突出度が大きい。突帯の剥離面には一次調整タテハケとともに突帯割り付けの刺突が残る（図版52－８）。

上段には径5.5㎝程度の円形透孔の下半が１孔認められる。ただし、左側の穿孔面は器面に対して垂直方向に通らずにやや外側に開いており、さらに、正面向かって左側の残存端部では穿孔面がわずかに屈曲している。これらは穿孔の始点あるいは終点をして示している可能性も考えられるが、この透孔が巴形などの不正円形となる可能性もある。

器面調整は外面タテハケないしナナメハケ、内面タテハケを基調としている。外面には二次調整として部分的にヨコハケが認められる。

17は断面Ｌ字形を呈する受け口状突帯で、円筒胴部から剥離した状態で出土した。朝顔形埴輪の円筒部と壷部の境界をめぐっていたと推定され、突帯径は37.2㎝を測る。やや下向きの突帯を貼り付けて、その端部上面に垂直方向に粘土を付け足して成形し、丁寧なナデで仕上げている（図版52－９）。円筒胴部との接合面には、横方向に近いナナメハケと突帯割付の際の刺突の痕跡がポジとして残る。〔宇野〕

## （２）その他の遺物（図26）

埴輪以外の遺物には長岡京から平安時代の瓦と須恵器がある。いずれも出土量は少なく、遺構に伴うものではない。

18は軒丸瓦。単弁６葉蓮華文軒丸瓦。中房は無文で蓮子は配さない。花弁は幅が広く長さは短い。文様面の彫りは全体に浅い。胎土に１㎜大の長石を少量含む。焼成は須恵質であるがやや不良である。平安時代後期。讃岐産。４トレンチ８層からの出土。周辺では調査地から南東へ約１㎞の位置にある宝菩提院廃寺から出土している[9)]。

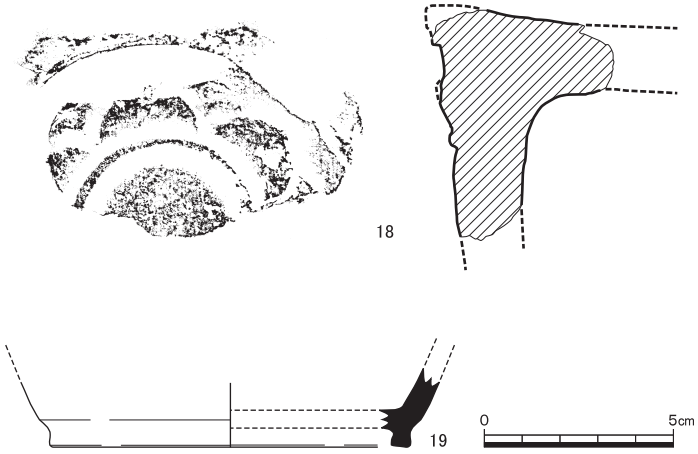


図26　土器・瓦拓影実測図（１：２）

19は須恵器杯Ｂの底部である。断面方形を呈する高台は低く、体部は開き気味に立ち上がる。胎土は精良で砂粒を含まない。１トレンチ７層からの出土。〔南〕

# ５．総　　括

## （１）墳丘について

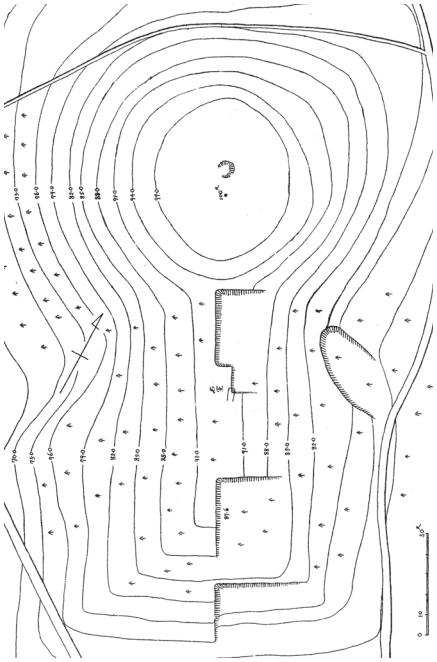
### １　墳丘形態の復元（図27～30、表４）

寺戸大塚古墳の墳丘平面形態については、「この外形あるや後円丘に対して前方部の幅が相当に長く、且つ同部の幅の前面でさまで開いてゐない形のものたることを示すものである。」（梅原1955）という２次調査報告にもあるように、後円部に対して細長く、外側に開かない形状の前方部が想定されていた。実際に、その調査時に作成された略側図や３次調査以降の墳丘測量図では、前方部がくびれ部から前端までほとんど広がらない形状に観察され、柄鏡形の前方後円墳として評価されてきた（図27）。

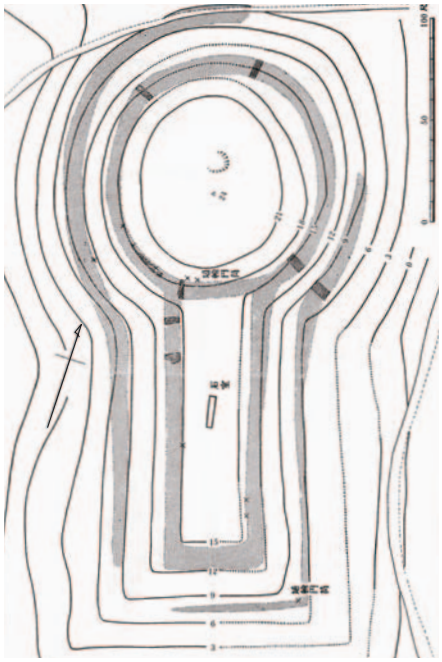
しかし、京都市が実施した９～11次調査の結果、前方部西側面の墳丘裾が墳丘主軸に対して平行でなく、外側に開いており、わずかに内湾する撥形の形態に復元できることが明らかになった。さらに11次調査４トレンチの墳丘裾で確認された盛土の存在は、墳丘成形当初より、外側に開く前方部が志向されたことをうかがわせる。

これまで柄鏡形の前方後円墳と認識されてきた寺戸大塚古墳の墳丘は、桜井茶臼山古墳（奈良県桜井市）やメスリ山古墳（奈良県桜井市）などの類型に含めて理解されていたが[10)]、調査の結果、再考を促すこととなった。また、寺戸大塚古墳のように竹林の開墾という後世の地形改変が多く見込まれる墳丘については、現状の墳丘測量図から墳丘形態を復元することは容易でなく、その測量図を扱うにあたって注意を要することが明確になった。

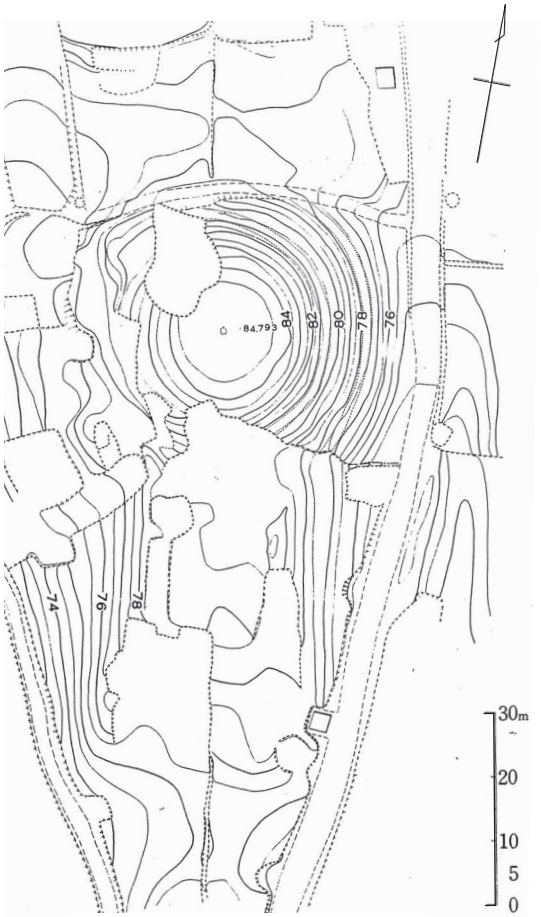
以下では調査成果を受けて、墳丘形態の復元を可能な限り試みておきたい（図28）。



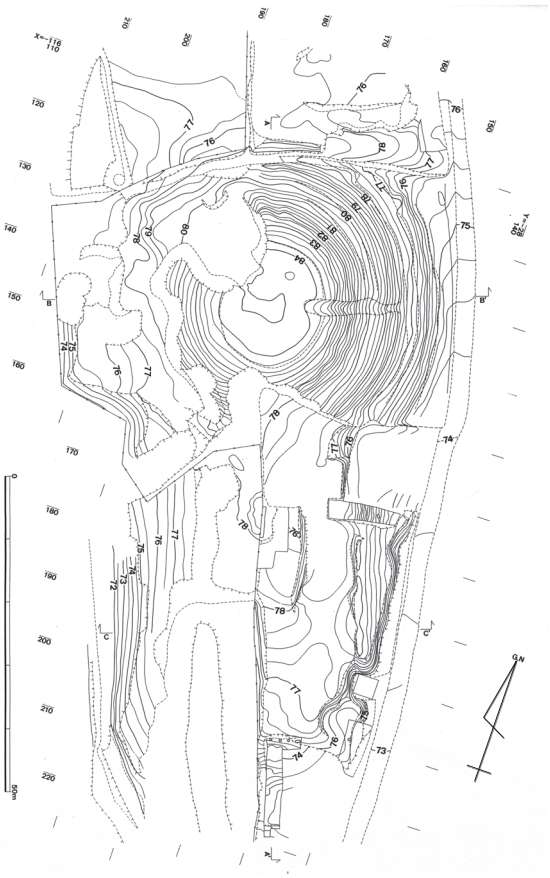
『京都府史跡勝地調査会報告』第4冊
京都府 大正12年3月



『京都府文化財調査会報告』第21冊
京都府教育委員会 1955年3月




『埋蔵文化財発掘調査概報(1968)』
京都府教育委員会 1968年



『向日市埋蔵文化財調査報告書』第49集
財団法人向日市埋蔵文化センター
向日市教育委員会 1999年

図27　過去の墳丘測量図（1：1,200）

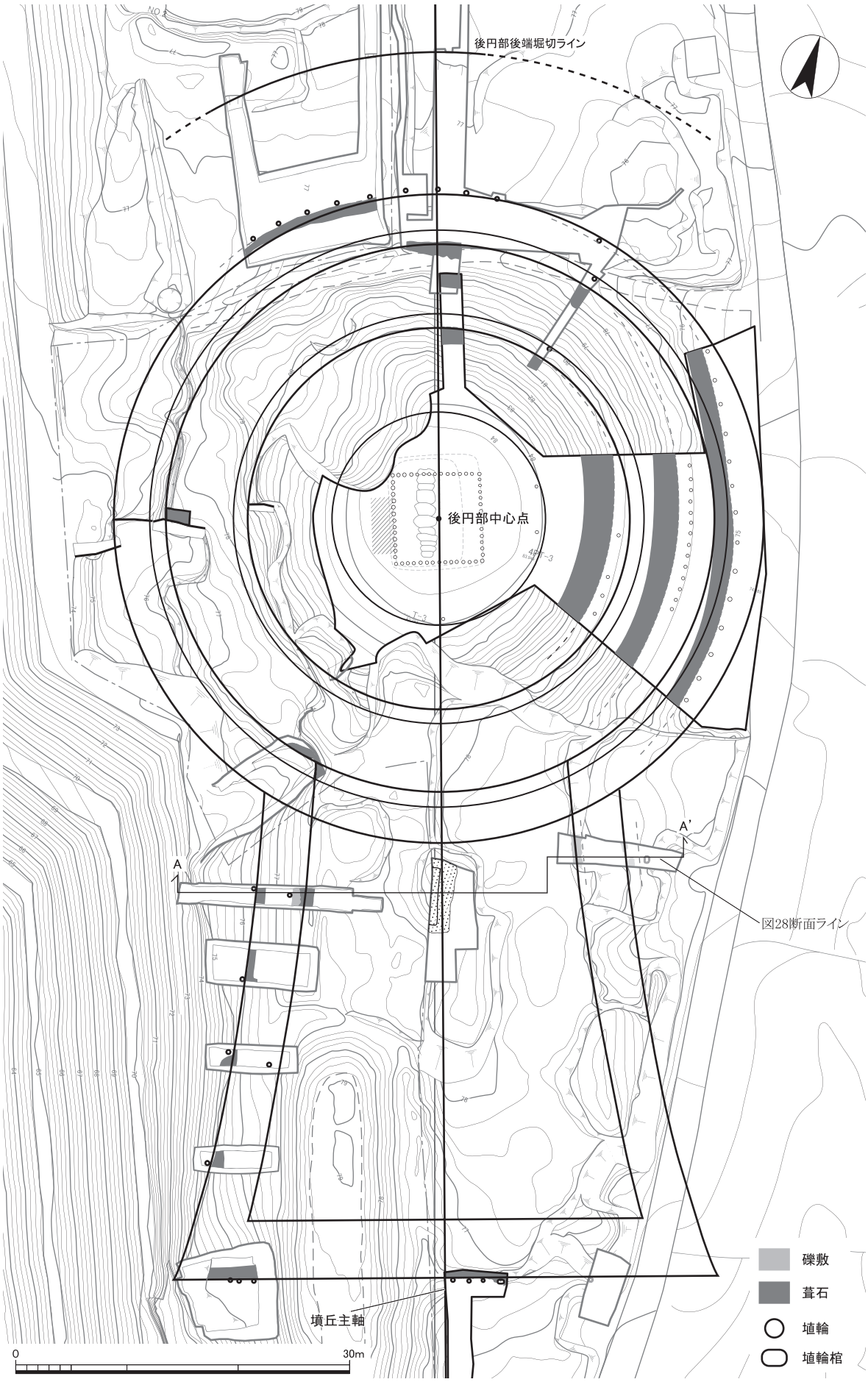



図28　墳丘復元図（1：500）

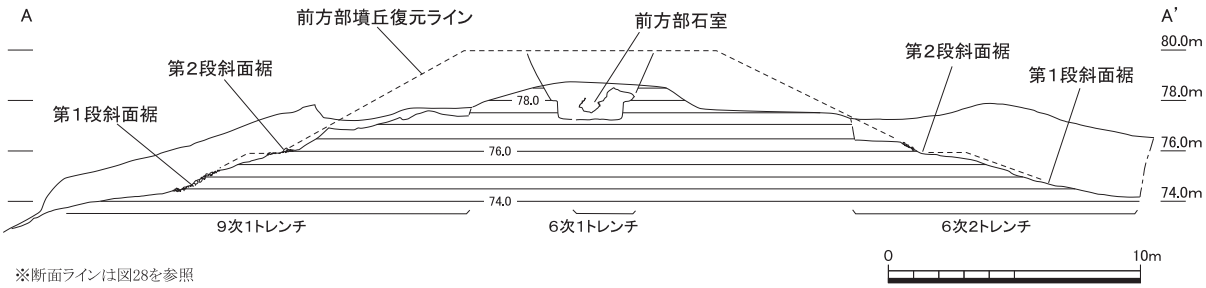



図29　前方部横断面合成図（1：300）

まず、墳丘平面形態を復元するにあたり、後円部中心点と墳丘主軸を求めることが必要とされる。後円部の中心点は本来、後円部各斜面裾部で検出された基底石の円弧より復元されることとなるが、寺戸大塚古墳の場合、墳丘東側の開析谷による地形の制約を受けて、後円部が南北に長い楕円形を呈しているため、広範囲に墳丘裾が検出されている５次調査の成果から単純に中心点を求めることは難しい。

そうしたなかで、開析谷の影響が比較的小さい墳丘の北東側、北側、西側、西くびれ部で得られている第２段斜面裾の４点が後円部中心点復元の重要な手がかりになる（７・８次調査）。この４点から導き出される中心点は後円部墳頂平坦面に設けられた方形埴輪列のほぼ中心に相当しており、これらに基づく復元の有効性を示していると考えられる。次に、６次調査と10次調査で検出された前方部前端ラインに対する垂直線を墳丘主軸として、先程想定した後円部中心点に通せば、後円部方形埴輪列の南北中心軸を縦断するとともに前方部石槨の南北軸とおおむね一致する。以上より、この後円部中心点と墳丘主軸の復元が一定妥当であるものと考えたい。墳丘主軸は北に対して18.6°西に振る。

以上の調査成果と検討に基づけば、墳丘主軸に対して左右対称に復元した場合、全長98ｍ、後円部径58ｍ、くびれ部幅32ｍ、前方部長44ｍ、前方部幅49ｍを測る後円部３段、前方部２段の前方後円墳が復元される[11)]（図28・29）。後円部は開析谷の影響を受けて東側の各斜面が短く、各斜面の裾が楕円形を描くが、西側は小畑川の段丘崖が形成されているものの墳丘近くまでは迫っていないため、東側より正円に近い円弧を描くと推測される。一方、前方部はわずかに内湾する撥形を呈すが、墳丘主軸に対して西側より東側がわずかに広い。これは後円部の状況と相反するが、前方部東斜面（６次調査２トレンチ）が地山削り出し成形であることを勘案すれば、前方部より幅広である後円部の方が墳丘成形時に開析谷による地形的制約をより多く受けたことや、旧地形である丘陵尾根筋の幅が後円部と前方部であるいは墳丘の東側と西側で異なっていたことなどによると考えられる。

さらに、墳丘立面形について復元を試みた際には、各次調査において後円部各平坦面や前方部墳丘裾・第１段平坦面の位置やレベルが点的に把握されており、これらが復元時の重要な定点となる（表４）。その一方で、後世の攪乱の影響もあって、前方部石槨を除く墳丘鞍部から前方部頂にかけての情報が皆無に近い。そこで、まず、前方部石槨直上の墳頂平坦面について、前方部石槨の標高を手がかりに復元を試みた。

表４　各調査検出の墳丘平坦面レベル一覧表

| 調査次数 | 調査区 | 後　円　部 | | | 前　方　部 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 墳丘裾平坦面 | 第１段平坦面 | 第２段平坦面 | 墳丘裾平坦面 | 第１段平坦面 |
| ６次 | ２トレンチ | — | — | — | 74.7 | 76.0 |
| | ３トレンチ | — | — | — | 73.8 | — |
| | ４トレンチ | — | — | — | 73.6 | — |
| ７次 | ５トレンチ | — | 77.1～77.2 | — | — | — |
| | ６トレンチ | 76.1～76.3 | 77.1 | 80.1 | — | — |
| ８次 | ２トレンチ | — | 76.6 | — | — | — |
| | ５トレンチ | — | 76.3 | — | — | — |
| ９次 | １トレンチ | — | — | — | 74.3 | 75.8 |
| 10次 | | — | — | — | 72.3～73.0 | — |
| 11次 | １トレンチ | 76.0～76.3 | — | — | — | — |
| | ２トレンチ | — | — | — | 74.2～74.3 | 75.7～75.9 |
| | ３トレンチ | — | — | — | 73.9 | 75.3～75.4 |
| | ４トレンチ | — | — | — | 73.2～73.4 | 74.8～75.1 |

（単位：m）

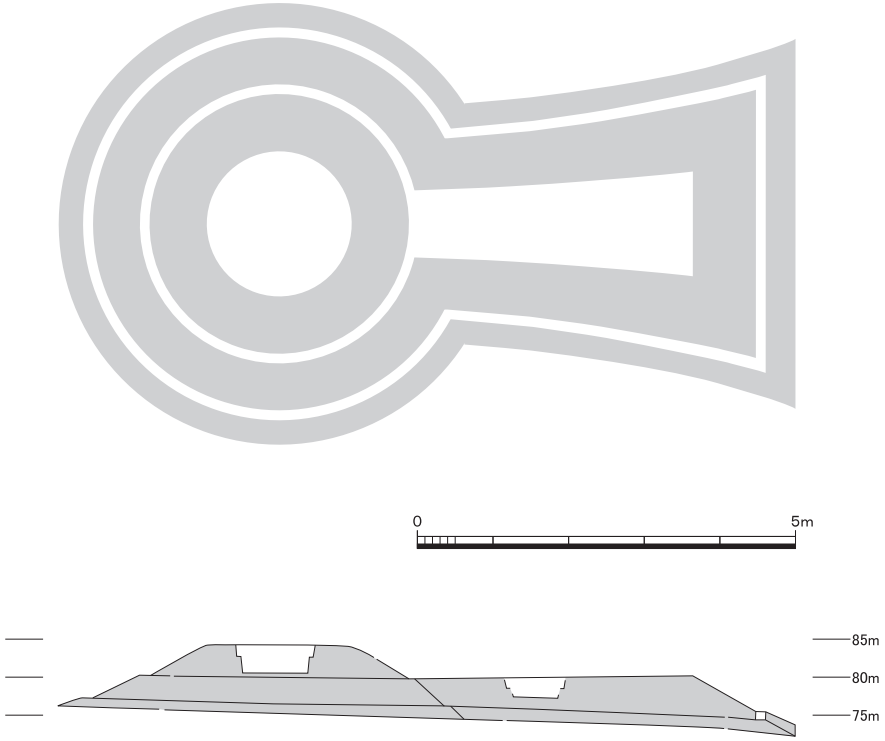



図30　墳丘復元模式図（１：1,000）

６次調査時には天井石が残されていなかったが、天井石が残存していた２次調査と６次調査の石槨実測図を照らし合わせれば、天井石下面の標高を78.6ｍと復元できる。天井石の深さについては、１次調査報告で「現地表面下約三尺ニシテ其ノ天井石ニ達ス」（梅原1923）、２次調査報告で「実は残存した一部前方丘の表面からは六尺近い下位にあることが認められて、本来割合に深位にあることが推された」（梅原1955）とそれぞれ記されている。天井石の厚さを0.3ｍとして、これら

の記述に基づけば、石槨直上の前方部頂平坦面レベルを標高79.8ｍあるいは標高80.7ｍと算出することができる。ただ、この復元値は両者の差が大きいうえに、筍栽培のために調査当時の地表面がそのまま前方部頂平坦面に相当する保証はないという問題点がある。

そこで、後円部石槨のデータも復元の参考に用いることとする。前方部の石槨規模が後円部石槨よりも小規模であることを勘案すると、一段目の墓坑の規模も後円部のそれよりも上回らない可能性が高い。後円部石槨の一段目墓坑は幅約9.1ｍ、長さ約10.6ｍ、深さ約1.6ｍを測り、後円部では二段目墓坑上面と天井石下面が対応するとの報告があるので（近藤・都出1971）、前方部石槨の一段目墓坑の深さを1.4ｍと仮定すれば、石槨直上の前方部頂平坦面レベルを標高80.0ｍ前後に復元することが可能である。前方部頂平坦面レベルが標高80.0ｍ前後であれば、後円部第２段平坦面とほぼレベルであることから、前方部頂平坦面が後円部第２段平坦面と同一の平坦面を形成していた可能性が高い。

以上の検討とこれまでの調査で得られた墳丘各平坦面のレベルを参考にして復元した墳丘平面図と墳丘西側からの立面図が図30である。第１段・第２段平坦面が後円部および前方部で同一面を形成し、前方後円形の２つの段の上に後円部３段目として円丘が載る形態となる。この墳丘の構造は、大和東南部に所在する桜井茶臼山古墳（奈良県桜井市）やメスリ山古墳（奈良県桜井市）、渋谷向山古墳（奈良県天理市）に共通するものである[12]。柄鏡形の前方後円墳である前二者とは墳丘平面形が異なることが明らかになった一方で、構造的特徴が類似するという対照的な結果となった。

立面図からは、北から南に傾斜する丘陵の尾根に墳丘が築造されたため、墳丘裾のレベルも後円部後端から前方部前端に向かって緩やかに下っていることが読み取れる。墳丘主軸近くの墳丘裾レベルは後円部後端で76.3ｍ、前方部前端で73.8ｍ、その比高差は2.5ｍを測り、第１段平坦面も墳丘裾平坦面にほぼ平行するように傾斜する。〔宇野〕

### ２　墳丘構築方法（図31・32）

５次調査と７次調査によって、寺戸大塚古墳の後円部は地山削り出しと盛土によって構築されたことが判明している。すなわち、後円部の第２段斜面の途中（７次調査８トレンチで標高79.63ｍ）まで地山削り出しで成形され、その上部から墳頂平坦面までは盛土で成形されている。盛土の厚さは約5.0ｍを測る。前方部では、11次調査４トレンチにおいて墳丘裾部に盛土が確認された。これまで、後円部、前方部とも第１段斜面を含む墳丘裾部は地山削り出しの墳丘成形しか確認されておらず、部分的に盛土成形されていたことが明らかになった点は墳丘の構築方法や平面形態を復元するうえでも重要である。

また、11次調査では墳丘構築にかかわる遺構の検出を目的として、後円部後端の墳丘外にもトレンチを設定した（11次１トレンチ）。その結果、後円部後端の墳丘裾より北に約12～13.0ｍの地点で地山の立ち上がりを確認し、その立ち上がりが後円部墳丘裾の円弧に並行するように円形にめぐることが判明した。竹林の開墾による削平のため、検出された高低差はわずか0.4ｍ程度に過ぎないが、この地山の段差は、層位的検討により墳丘構築に伴って丘陵尾根を切断した範囲を示す堀切の遺構と理解される。

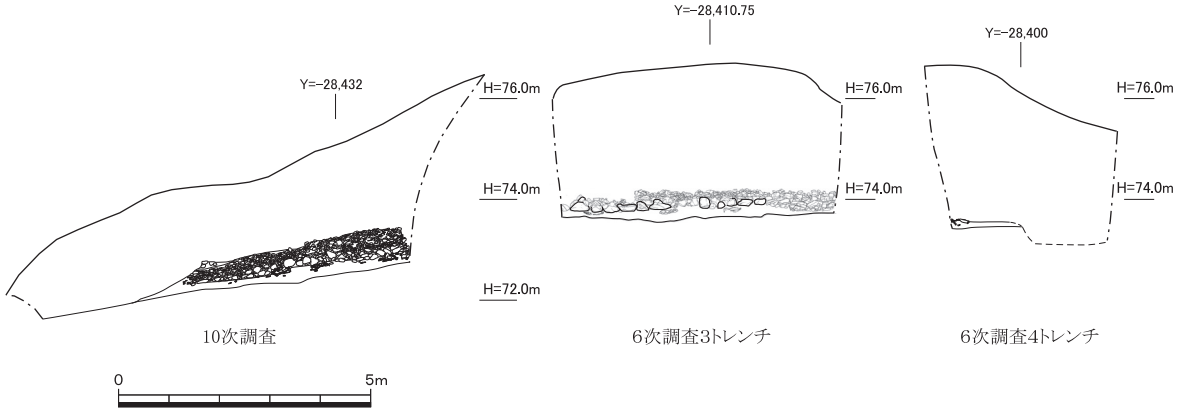



図31　前方部前端裾立面図（1：150）

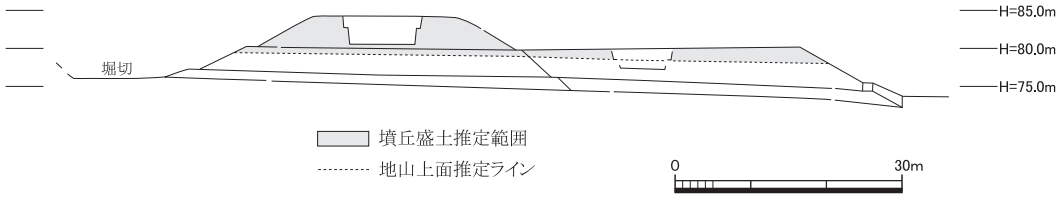



図32　墳丘構築復元図（1：1,000）

墳丘北側の旧地形については、後円部の調査で検出された地山最高レベルが標高79.63ｍであることから（７次８トレンチ）、周囲と比べて小高く隆起した尾根の頂部を後円部に選択されたことを加味する必要があるものの、少なくともそれに近似するレベルの地山が墳丘北側にも続いていたと思われる。後円部後端の墳丘裾から堀切にかけての地山レベルは標高76.1～76.3ｍを測るので、丘陵尾根を最大3.5ｍ近く掘り下げて、それを南側に盛土することで後円部を成形したと復元される。一方、前方部に設定した調査区（６次３・４トレンチ、10次）で得られた前方部前端の墳丘裾レベルは、墳丘主軸付近が最も高く、東西両方向に向かって傾斜する（図31）。墳丘成形が施工するにあたり、馬の背状の丘陵尾根を利用したことがわかる。

５次・７次調査で得られた後円部地山レベルは後円部北端で79.5ｍ、くびれ部付近で79.0ｍであり[13]、一方、前方部で確認されている地山最高レベルは前方部石槨の墓坑壁面で検出された標高78.4ｍであるので、後円部から前方部にかけてほぼ一定の傾斜を持って地山が分布していることになる（図32）。前方部の南側も後円部の北側と同様に、丘陵尾根を切断して墳丘が構築されたと推定されるので、前方部の南側にあたる丘陵尾根を切断して、前方部頂の平坦面や前端に近い側面の墳丘裾部に盛土して成形したと考えられる。〔宇野〕

## （２）葺石の施工方法について（図33、表５）

葺石は１～４の各トレンチの墳丘裾で検出した。寺戸大塚古墳の葺石の施工方法については７次調査の報告ですでに論じられており、今回の成果もそれと大きく異なるものではない。ここで再び寺戸大塚古墳の葺石施工法を述べると、今回の調査で検出された墳丘裾部を例にまとめると以

下のようになる。

１．地山の墳丘裾部を急角度で掘削する。

２．基底石を設置する。基底石は長軸を後円部裾に沿って横方向に並べる。基底石の大きさは30cm前後のものが多い。

３．基底石背面の掘形に裏込を入れる。裏込の石の大きさは５～10cmが多い。

４．葺石を積む。石の積み方は、縦長の石は長軸方向を墳丘斜面に対して直交して積むいわゆる小口積みである。葺石に使用される石の大きさは長軸が15～20cm前後のものが多い。

５．基底石の裾部は化粧土で覆う。

裏込に関しては後円部の１トレンチは一定の厚さを持って施工されていたが、前方部の２トレンチではほとんど存在しなかった。ただし前方部東斜面を調査した６次調査の２トレンチでは裏込と考えられる礫群が検出されている。施工部位によって施工方法の小異は存在するが、基本的な施工法としては共通しているとみてよい。

葺石に使用される石の大きさは、基底石、裏込の石、表面の葺石のそれぞれで異なっている。葺石に使用された石材の構成を表したものが表５である。葺石に使用される石材は主に砂岩とチャートである。各トレンチで構成比率の違いはあるが、全体で見るとチャートと砂岩の比率は概ね１：１であり、これまでに知られている寺戸大塚古墳の葺石の構成比率と大きな差はない[14]。石材の採集場所については長軸が20cmを超えるような比較的大きな石材は小畑川の河床から、10cm以下の石材は小畑川河床と高位段丘層から採取されたものである[15]。このように使用目的に即して石材の採集場所が異なっている。葺石は、基底石・裏込・表面の３つから構成要素から成立し、それ

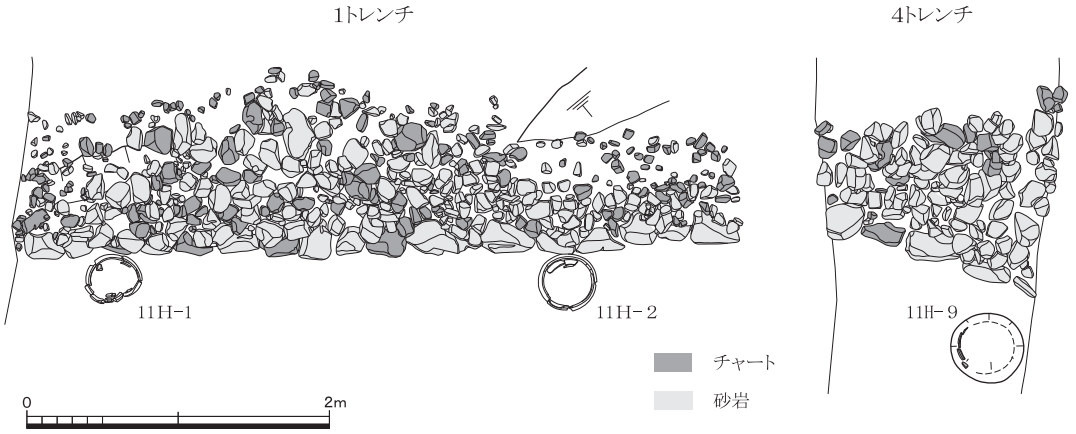



図33　１・４トレンチ葺石の岩石分布図（１：50）

表５　基底石・葺石・裏込石石材構成表

| 種類 | 長軸長 | １トレンチ | ２トレンチ | ３トレンチ | ４トレンチ | 合　計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 砂岩 | 10cm以下 | 260（27.9%） | 12（16.4%） | 41（37.6%） | 28（23.3%） | 341（27.6%） | 679　（55%） |
| | 10cm以上 | 194（20.8%） | 37（50.7%） | 53（48.6%） | 54　（45%） | 338（27.4%） | |
| チャート | 10cm以下 | 418（44.8%） | 12（16.4%） | 8　（7.3%） | 28（23.3%） | 466（37.7%） | 556　（45%） |
| | 10cm以上 | 61　（6.5%） | 12（16.4%） | 7　（6.4%） | 10　（8.3%） | 90　（7.3%） | |
| 小計 | | 933（100%） | 73（100%） | 109（100%） | 120（100%） | 1235（100%） | 1235（100%） |

ぞれ大きさによる石の使い分けがなされており、石材も採集段階から計画的に行われている。従来、指摘されているように経験を積んだ専門技術集団の関与が想定される[16]。〔南〕

## （３）埴輪列について

### １　埴輪の据え付けと樹立間隔（図34）

11次調査では、原位置を保つ円筒埴輪を計９基検出した（11H－１～９）。このうち、墳丘面が比較的良好に残存する墳丘裾平坦面に樹立された円筒埴輪では、墳丘に埴輪を据え付ける工程を明らかにすることができた。

つまり、①地山に埴輪底部径よりわずかに大きい平面円形の掘形を穿つ、②掘形に埴輪を据え付けて掘形と埴輪内を埋め戻す、③墳丘平坦面に化粧土を敷いて埴輪を固定する（11H－２・４）。なかには掘形を設けない個体もあり、地山直上に埴輪を置いたのち化粧土で固定する例（11H－３・５・６・８）や地山上に化粧土を入れる過程で埴輪を据え付けた例がある（11H－１）。最終的に埴輪は、化粧土を含めると最下段突帯付近（底部欠損の個体のうち最下段突帯の直下より欠損している個体の場合は下から２条目の突帯付近）までの15～20㎝前後が埋められたと推測される。

化粧土は、すでに流出してしまっていたために調査では基底石の下端にわずかにかかる程度の検出にとどまったが、本来、基底石の下半が埋まる程度まで施されていたと想定されることから、埴輪の固定とともに葺石の崩落を防止する土留めとしての機能も併せ持っていたと考えられる。このように考えれば、墳丘斜面への葺石の施工と平坦面への埴輪列の設置という２つの工程は、それぞれの間に大きなタイムラグのない一定の連続性・関連性を持った工程であったと理解される。

また、墳丘裾平坦面で検出した埴輪のなかには、底部が欠損した個体が含まれており（11H－１～４・６・８・９の７個体）、１トレンチでは連続して検出された５基の円筒埴輪のうち、４基の底部が欠損していた（11H－１～４）。いずれも残存する最下段に透孔が確認されることから、２段目胴部の途中から欠損していると推測される。欠損部の破面は、粘土紐どうしの接合が比較的弱い粘土紐積み上げ休止ラインにしばしば対応している。底部欠損の埴輪の存在は５～７次調査でも報告されているが、５次調査の後円部墳丘裾平坦面で検出された円筒埴輪14個体中５個体、７

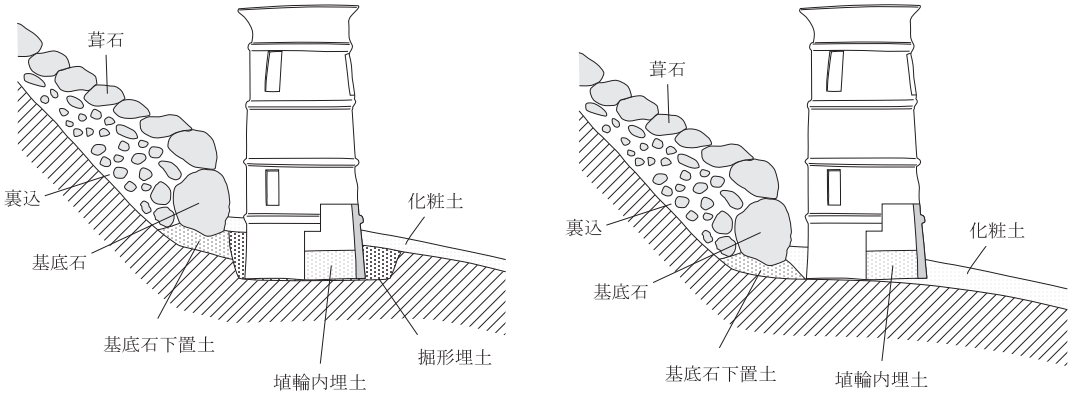



図34　墳丘裾断面模式図

次調査の後円部墳丘裾で検出された円筒埴輪５個体中２個体に比べれば、かなり高い割合であり、底部欠損個体の樹立頻度は樹立位置によって大きく異なっていたようである。

なお、当古墳の円筒埴輪には透孔が１段につき２孔あるいは３孔穿たれており（ごく少数４孔）、11次調査に限れば、３孔の個体は段間で互い違いに配置されていることが判明している（11H－１・２・８）。これら原位置を保ち、かつ透孔の位置・穿孔数がわかる個体によれば、墳丘裾ラインに対して垂直方向の位置に透孔が認められる。この透孔の位置は１段における穿孔数が不明な11H－４・６でも確認できる。つまり、墳丘を外側からみた場合、いずれかの段の透孔がおおむね正面を向くように据え付けられていたと復元される。

埴輪の樹立間隔については、これまでの発掘調査を通して埴輪列が各平坦面で検出されたことにより、ある程度明らかになっている。残存状態がよく、樹立間隔の詳細を把握できたところでは、いずれも埴輪心心間で、後円部墳丘裾平坦面で2.0～3.0ｍ（５・７・11次調査）、後円部第１段平坦面で約1.0ｍ（５次調査）、前方部前端墳丘裾平坦面で1.1～1.5ｍ（６・10次調査）を測る。各平坦面である程度まとまった数値を示すものの、平坦面間ではその差異は大きく、平坦面ごとに意識的に間隔を違えて埴輪が樹立されたと考えられる。

また、以前の調査で確認されているように、後円部墳丘裾平坦面の円筒埴輪は第１段斜面の基底石に近接して樹立されるのに対して、第１段・第２段平坦面のそれは平坦面と下段斜面の肩部付近に樹立される（５・７次調査）。こうした平坦面における埴輪樹立位置の違いは、後円部だけでなく、前方部でも確認されており（９・11次調査）、墳丘全体で貫徹されていた可能性が高い。

### ２　埴輪列の復元（表６、図35・36）

寺戸大塚古墳の墳丘裾平坦面の埴輪列は、後円部後端を調査した７次調査の成果を受けて、６基ごとに底部欠損の朝顔形埴輪が置かれ、その間に５基の底部残存の普通円筒埴輪が樹立され、器高の統一を図っていたと想定されている[17]。

11次調査によって後円部後端の墳丘裾平坦面に樹立された円筒埴輪がさらに５基検出され、７次調査と合わせて埴輪列が約33ｍ分、削平を受けて検出できなかった個体が３個体分あるものの計10基の円筒埴輪が検出され、各々約2.7～3.0ｍの樹立間隔であったことが明らかとなった（図35）。ここではさらなるデータの増加をみた後円部後端墳丘裾平坦面の埴輪列について再検討を試みる。ただし、円筒埴輪の全形や、全形における欠損段の位置など不確定要素も依然多く、推論に推論を重ねた部分も多い。

表６には、各個体の設置面レベルや残存する最下段突帯上辺レベル、墳丘裾平坦面検出レベル、底部の残存状態、掘形の有無などの各個体の属性を記載している。図36上段は表６の各項目に基づいて、各個体の樹立状況を復元したものである。透孔の穿孔段とその向きを模式的に加え、さらに底部欠損の個体については底部の残存範囲もおおむね忠実に表現している。これによれば、11次調査で検出した埴輪列（11H－１～５）のうち、11H－５以外は底部を欠いているため、６本ごとに底部欠損の朝顔形埴輪が樹立されていたという７次調査で導き出された想定は成り立ちそうにない。

図36下段は残存する透孔の痕跡やハケ目パターンの分析に基づいて推定した埴輪列の復元案である[18]。普通円筒埴輪は６次調査の復元案、二重口縁壷タイプの朝顔形埴輪は11次調査３トレンチの11H－８の復元案に基づいている。なお、朝顔形埴輪には６次調査出土の直口壷タイプもあるが、出土量からみて限定的な樹立であった可能性が高く、埴輪列の復元からは除外した。普通円筒埴輪の復元案は埴輪棺資料をもとに透孔の穿孔状況などから底部の位置が想定されているが、器高や胴部径からのバランスからみて妥当と考えている。

図36下段で示したように、H６－４、H５－１、11H－２、11H－４を朝顔形埴輪と想定する。これは、すでに確認されている朝顔形埴輪（ST602①、H４－１、11H－８）との製作技術上の共通性や類似性、ハケ目パターンの分析によったところが大きい。特に６次調査で得られた朝顔形埴輪（ST602①、H４－１）には、ハケ目ａとハケ目ｍが認められ、かつ器種ごとに密接な工人間関係で製作されたと推定されている[19]。

H６－４とH５－１は、器面調整方法や突帯間隔設定技法、ハケ目パターン（ハケ目ａ）が一致することから同工品の可能性がきわめて高いうえに、ST602①やH４－１ともハケ目パターンや外面二次調整が施される点が共通することから、朝顔形埴輪に復元できる蓋然性が高いとされている。

11H－２は11次調査３トレンチで出土した朝顔形埴輪11H－８と同工品と考えられることから、

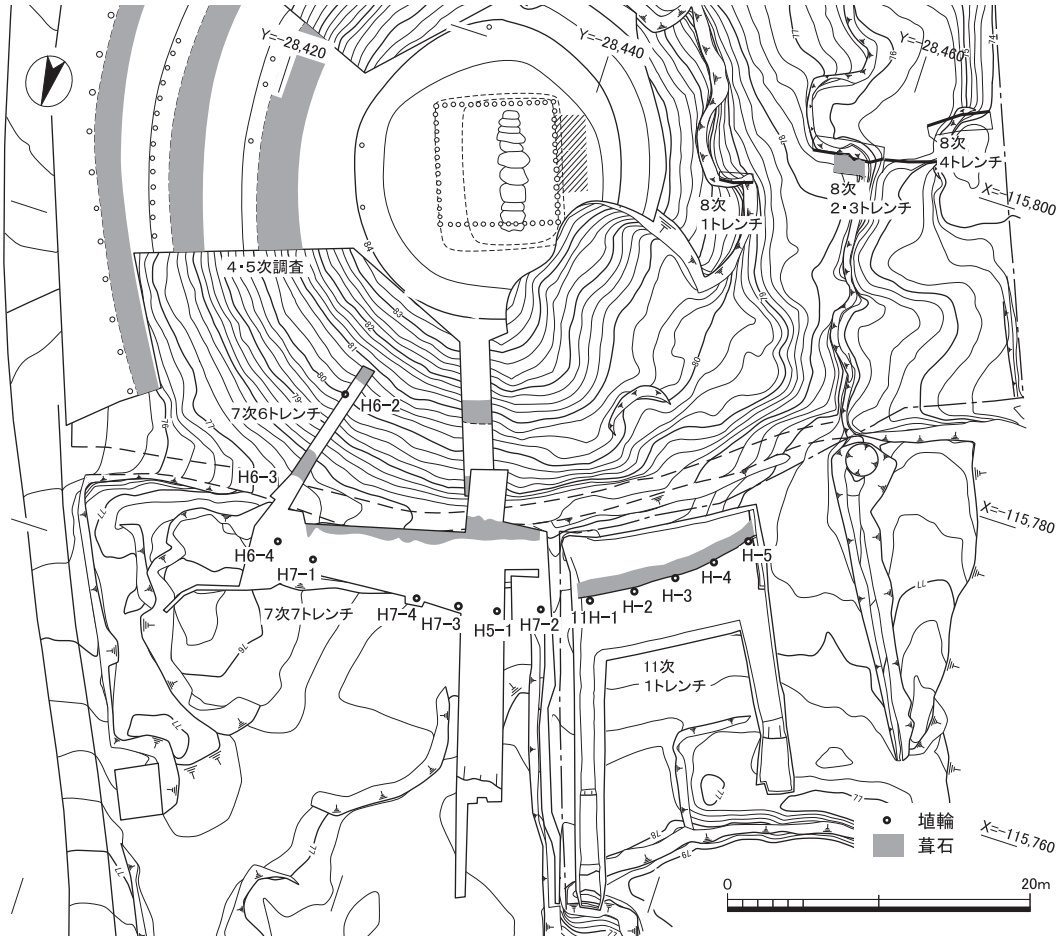



図35　後円部後端における埴輪列位置図（１：500）

表６　後円部後端における埴輪列検出データ一覧表

| 調査次数 | 7次 | 7次 | 7次 | 7次 | 7次 | 7次 | 7次 | 7次 | 11次 | 11次 | 11次 | 11次 | 11次 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 個体番号 | H6-4 | H7-1 | — | — | H7-4 | H7-3 | H5-1 | H7-2 | 11H-1 | 11H-2 | 11H-3 | 11H-4 | 11H-5 |
| 底部欠損 | ○ | | — | — | | — | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 設置面レベル(m) | 75.91 | 75.90 | — | — | 76.00 | — | 76.12 | 76.10 | 76.14 | 75.90 | 76.05 | 75.85 | 75.77 |
| 最下段突帯レベル(m) | 75.93 | 〔76.09〕 | — | — | (76.16) | — | 76.20 | 〔76.29〕 | 76.24 | 75.92 | 76.06 | 75.88 | 75.92 |
| 墳丘面検出レベル(m) | 76.03 | 76.03 | — | — | 76.08 | — | 76.20 | 76.17 | 76.20 | 76.10 | 76.05 | 76.00 | 75.90 |
| 埴輪掘形 | あり | あり | — | — | あり | — | なし | あり | なし | あり | なし | あり | なし |
| 備考 | ハケ目a | 底部高19.0cm | 検出されず | 検出されず | | 原位置とどめず | ハケ目a | 底部高19.0cm | | ハケ目p | | ハケ目m | |

(　):底部高16.0cmで算出　〔　〕:底部高19.0cmで算出

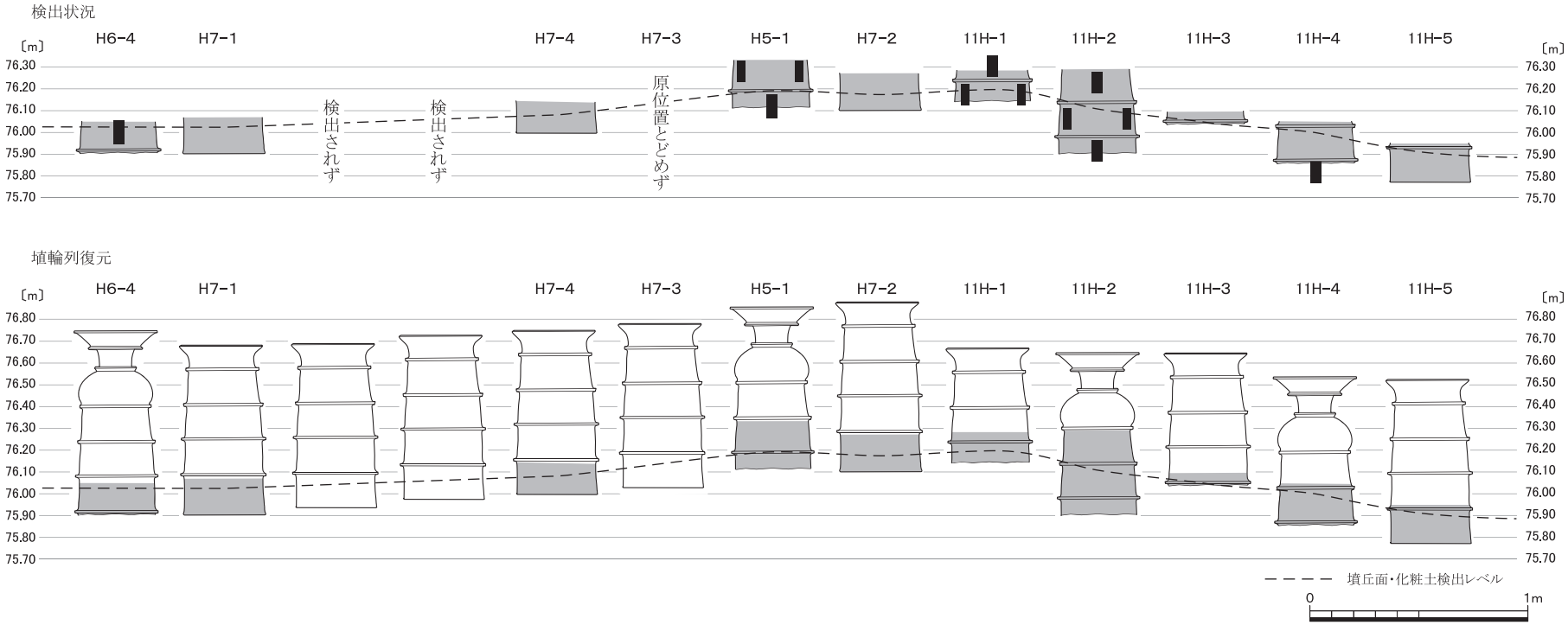



図36　後円部後端における埴輪列の復元（１：30）

朝顔形埴輪とした。突帯や透孔の形態、器面調整方法、さらにはハケ目パターンも一致する（ハケ目ｐ）。

11H－４は１段おきに透孔を穿孔する個体で、器面調整のハケが内外面ともに良好に残る。このハケがST602①やＨ４－１とも共通するハケ目ｍであることから、朝顔形埴輪と想定した。

以上のように上記４個体を朝顔形埴輪とすれば、普通円筒埴輪数個体ごとに朝顔形埴輪１個体が配列されるといった規則性のある配列とはならないが、復元した範囲で13個体中４個体が朝顔形埴輪となる。「墳頂部方形埴輪列においては、円筒形２～３本につき１本の割合で朝顔形が認められるのに対し、墳丘各平坦面の埴輪列にあっては、朝顔形の比率がより少ないことを指摘しうる程度である」（近藤・都出1971）とする５次調査概報の記述とも大きな矛盾はない。

埴輪列と墳丘面レベルの関係をみると、墳丘主軸近くのＨ５－１を最高レベルとして、東西両方向に向かって墳丘面の傾斜に沿って各個体の器高も緩やかに傾斜する。樹立間隔が約2.7～3.0ｍと広いために求められる施工精度がやや緩やかであったのかもしれないが、器高の統一をある程度意識して樹立されていたと考えられる。底部の欠損は器高の統一を図る措置として意識的におこなわれたと推定しておきたい。なお、11H－１にはこれまで出土している朝顔形埴輪と共通する要素が現状認められないため、普通円筒埴輪に復元したが、仮に11H－１も朝顔形埴輪として復元した場合、器高の統一性はさらに高まることになる。〔宇野〕

## （４）出土埴輪の検討

### １　寺戸大塚古墳出土埴輪の概要（図37・38、図版50～52）

京都市が実施した８～11次調査で出土した埴輪に全形をうかがえるものはなく、６次調査の埴輪棺資料が寺戸大塚古墳出土埴輪の基本資料となることに変更はない。各属性の特徴についても、これまでの調査で判明している内容から大きく逸脱するものは認められていない。そうしたなかで朝顔形埴輪に伴う受け口状突帯など、既知の資料に新たに付け加える資料を挙げることができた。これまでの調査を含めた図化資料のほかにも、図化しえなかった小破片資料の観察所見も合わせて、出土埴輪の概要をまとめておく。

**全形・法量**　底部径および胴部径は大半が30.0～40.0㎝にまとまり、なかでも多くの個体は35～36㎝前後におさまる（底部径40㎝を超える個体や50㎝前後の大型品もわずかに認められる）。底部の形態は、直立するものとスカート状にわずかに外側に踏ん張る形態のものに大別される。底部高は16.0～17.0㎝前後と19.0～20.0㎝前後に二分されるものの、突帯間隔は16.0㎝前後にほぼ統一されている。口縁部高は６次調査埴輪棺ST601①に基づけば、10㎝前後におさまる。口縁部は個体によって外反の度合いや端部の形状などの細部に違いが見受けられるが、確認できる口縁部形態はすべて最上段突帯付近から口縁端部に向かって外反する形態である。受け口状口縁や極狭口縁、直口縁などは確認されていない。これら法量と６次埴輪棺ST601①の復元資料に基づけば、器高75～80㎝前後を測る４条突帯５段構成の普通円筒埴輪が復元される（図38）。なお、全形のプロポーションは、残存状況に恵まれた個体が少ないなか、底部径より上段の径がいくぶん小さく、上方に

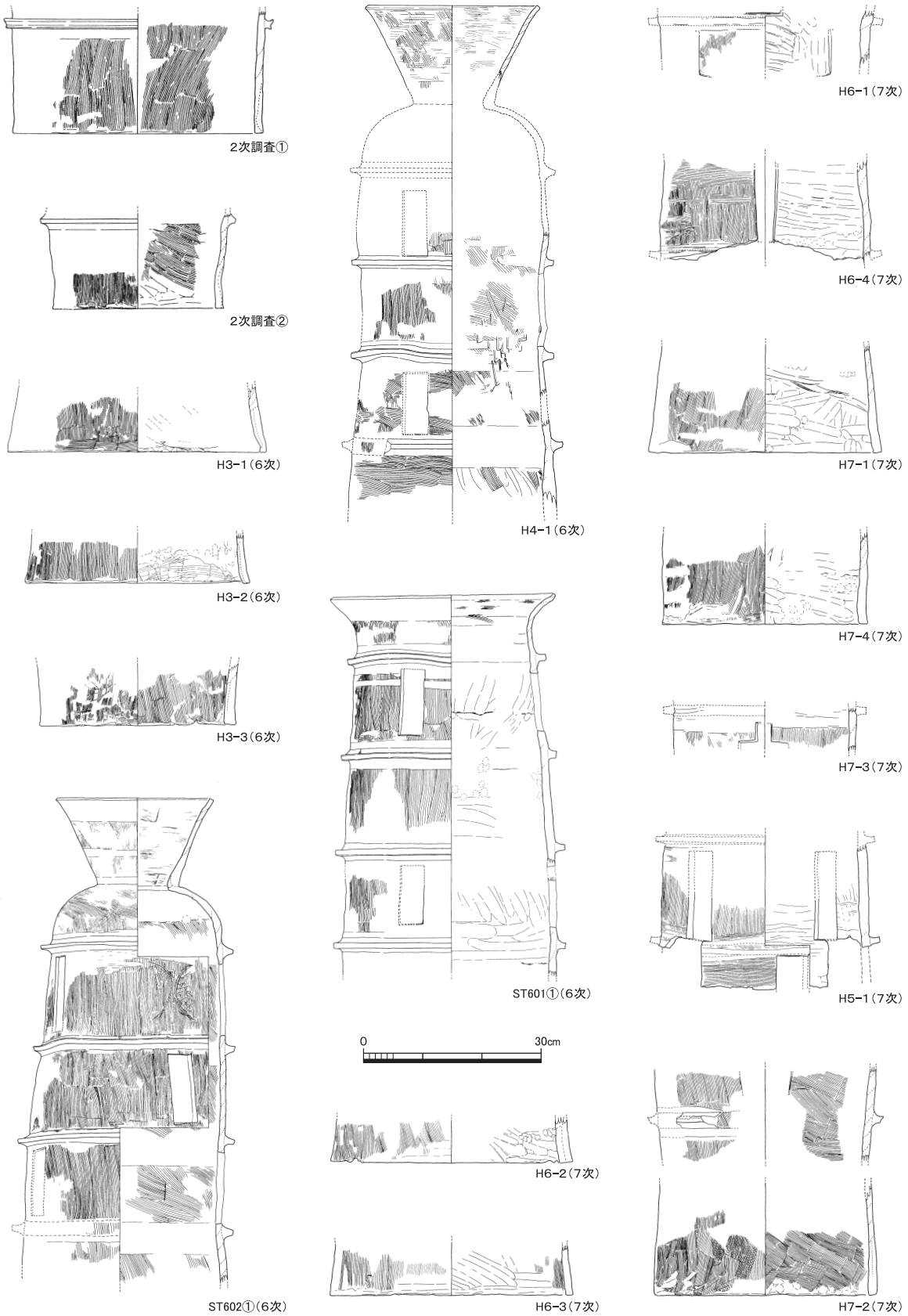



図37　寺戸大塚古墳２・６・７次調査出土円筒埴輪（１：10）

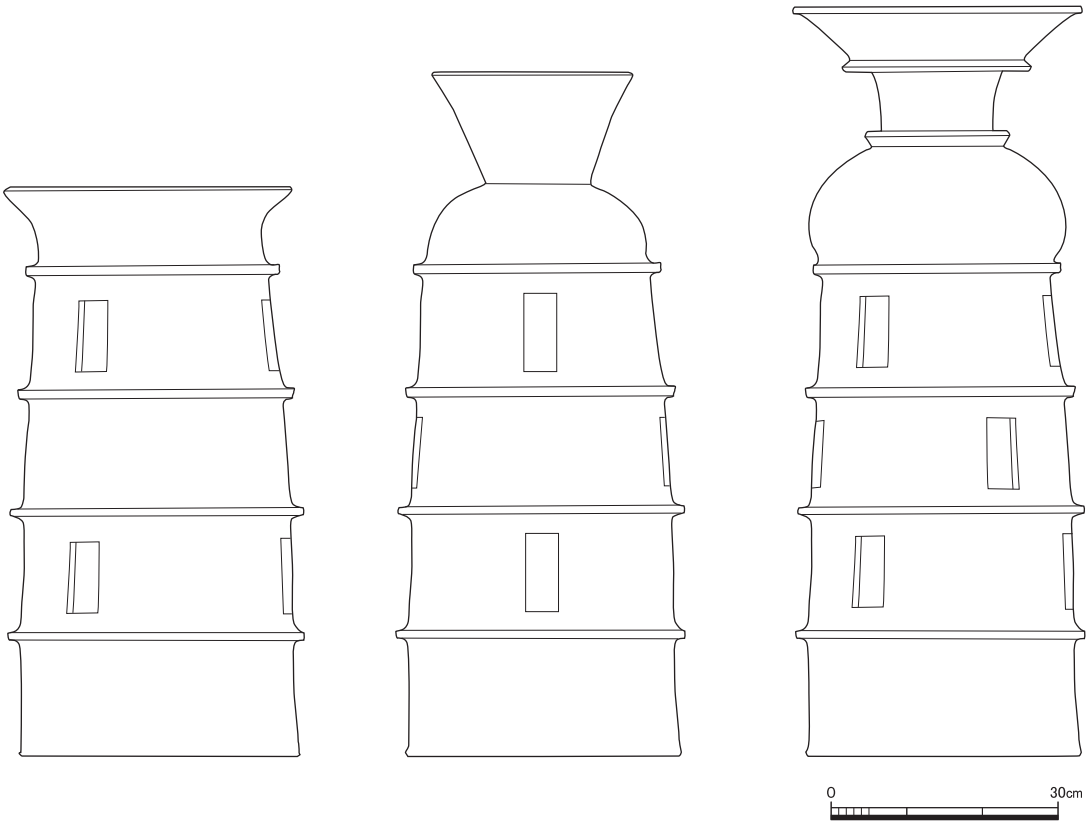



図38　寺戸大塚古墳円筒埴輪復元模式図（１：10）

向かってわずかにすぼまっていく形態の個体が目立つ。

朝顔形埴輪は直口壷タイプと二重口縁壷タイプが存在し、いずれも普通円筒埴輪の口縁部にあたる段より壷部が成形される。器高は、前者が90㎝前後、後者が100㎝前後に復元される（図38）。

**突帯**　突帯の断面形態はM字形や台形に大別され、突出度は大きいものが大半を占める。突帯の剥離面や突帯上面に残る圧痕から、器面への刺突あるいは横方向のナデによって突帯が割り付けられたと推定される。突帯の成形には補充技法[20]の痕跡を残すものも一定量含まれる（図版52－10）。

**透孔**　透孔の形は縦長方形を基本として、逆三角形や鉤形、円形（巴形の可能性あり）などが少量認められる。１段中の穿孔数は４孔（７次Ｈ６－１[21]）、３孔、２孔が確認される。現在、確認されている穿孔方式は、連続する段に３孔が互い違いに穿孔されるパターン（11Ｈ－１、11Ｈ－２、11Ｈ－８）、連続する段に２孔が互い違いに穿孔されるパターン（６次ST602①）に限られるが、６次ST601①や11Ｈ－４のように１段おきに穿孔されるパターンも確実に存在する（ただし、６次ST601①は３孔が１段おきに同列に穿孔されるパターンとして図化されているが、最下段の破片と上部破片に接合関係はなく、同列配置かどうかは定かでない）。複数段にわたって残存する例が非常に限られており、そのバリエーションは詳らかでない。

**器面調整**　器面調整のうち、外面調整は一次調整タテハケを基調とする。ただし、段間を全て埋めるものではないが、二次調整ヨコハケを施す個体も複数含まれる（６次Ｈ３－１、６次Ｈ４－１、７次Ｈ６－４、７次Ｈ５－１、11Ｈ－９など）。さらに、６次埴輪棺ST602①には二次調整タテハ

ケも認められる。現状で確認できる個体数からみて、一次調整タテハケのみの個体が大半を占めるなか、二次調整ヨコハケの個体は一定量、二次調整タテハケの個体はごく少数含まれると推測される。口縁部の外面では、一次調整タテハケののちに横方向のナデが丁寧に施される例が多い。内面調整は、外面調整に比べて個体差が大きく、タテハケやナナメハケ、ナデが認められる。これらは突帯貼り付けに伴って突帯部分に対応する内面に施された横方向のナデとの切り合い関係が顕著である。

このほか、胴部外面に鋸歯文や円弧と直線を組み合わせた幾何学文を施文した例、赤色顔料を塗布した例が一部で確認された。

**成形**　底部は底部高の半ば程度（高さ６～10㎝前後）の粘土帯を２枚つなぎ合わせることによって成形される。胴部は、２～３㎝前後の粘土紐を各段中位付近まで積み上げて、内外面調整、突帯貼り付けという工程を１段ごとに施工し、これを口縁部まで反復することによって成形される。これは内面の粘土紐接合痕に下方からのハケが入り込むことから想定できるほか、内面に残る突帯貼り付けに伴う横方向のナデと内面調整との切り合い関係、外面調整タテハケの起点の位置と内面にしばしば残るひときわ明瞭な粘土紐接合痕および器厚の変化の位置が、外面と内面で対応することなどからも裏付けられる。口縁部は、粘土紐を積み上げた後にヨコハケないしナナメハケの内面調整で器壁を外側に押し出すことによって、外反口縁が成形される。

**焼成・色調・胎土**　埴輪の焼成については、残存状態の比較的良好な個体の外面には対向する位置に帯状の黒斑が認められることから、野焼きによる焼成を想定することが可能である。いずれの個体も黄橙色～黄褐色を呈し、石英・長石・チャート・クサリ礫が含まれる均質的な胎土で、肉眼観察で分類できるような大きな差異は認められない。

### ２　外反口縁について（図39）

寺戸大塚古墳の普通円筒埴輪を特徴づける属性として、大きく外反する口縁部を挙げることができる。口縁部の判明する例はすべて外反口縁であり、口縁部の基本形態は古墳内で統一されていたと考えられる。特に古墳時代前期の円筒埴輪の場合、口縁部形態は古墳内あるいは古墳間でバラ

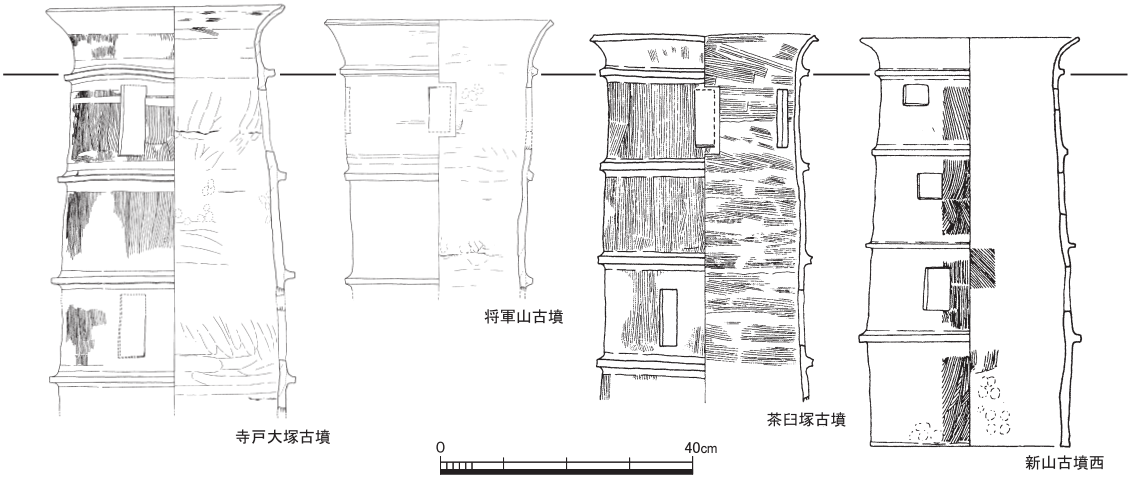



図39　外反口縁の普通円筒埴輪（１：12）

エティに富む場合が多く、他の属性に比べて埴輪の型式や系統を検討するうえで有効な属性となる場合が多い。

古墳時代前期に位置づけられる外反口縁の普通円筒埴輪には、寺戸大塚古墳のほかにも将軍山古墳[22]（大阪府茨木市）、茶臼塚古墳[23]（大阪府柏原市）、新山古墳西埴輪棺[24]（奈良県広陵町）などが挙げられる。口縁部だけをみれば、将軍塚古墳例が寺戸大塚古墳例に最も類似するが、口縁部高や外反度は将軍塚古墳例の方がわずかに小さい。一方、茶臼塚古墳例は一段おきの３孔透かしである点も含め、寺戸大塚古墳例に最も近い形態といえるが、口縁部の矮小化が顕著である。

これらの古墳は前期中葉頃に位置づけられる古墳が多いが[25]、口縁部高や外反度に差異がみられる。そのなかで、口縁部高が大きいものから小さいものへ、外反度が大きいものから小さいものへ、という型式変化の方向性はある程度想定可能と考えられる。これに従えば、寺戸大塚古墳の普通円筒埴輪は、外反口縁をもつ諸例の中でも古い型式に位置づけられる。

### ３　形態について

６次調査で出土した埴輪棺資料のほかにも、破片資料の中に胴部径が下段の胴部径あるいは底部径より下回るものが認められることから、寺戸大塚古墳の円筒埴輪に、上方に向かってすぼまる形態の個体が比較的高い割合で含まれることが明らかになった。

特殊器台を起源にもつ円筒埴輪の胴部は直立する円筒形を基本形態とするが、上方に向かってすぼまる形態をもつ円筒埴輪も古墳時代前期の円筒埴輪にしばしば認められる。その例として、東殿塚古墳[26]（奈良県天理市）、西山古墳[27]（奈良県天理市）、伝小半坊塚古墳[28]（奈良県天理市）といった大和東南部に所在する古墳が挙げられる。

ほかにも、上方に向かってすぼまる形態はやや裾広がりの底部形態とともに、丹後・山陰地域の器台形土器にも形態の類似性が見出される。寺戸大塚古墳の後円部墳頂平坦面の土器供献区画からは山陰系二重口縁壷が出土し、後円部石槨天井石は近隣で調達可能な砂岩、チャートのほか丹波産の可能性のある花崗岩が用いられている。さらに、周辺の集落遺跡では布留式期に山陰系搬入土器が増加するとの指摘もある[29]。山陰地域との直接的な交流の有無については他要素の検討も不可欠であるが、乙訓地域は山陰街道に近く、京都盆地から丹波、丹後を経て日本海沿岸に抜けるルート沿いに立地することから、地理的条件が備わっていたことは重要である[30]。

いずれにせよ、上方に向かってすぼまる形態は、古墳時代後期の埴輪にしばしばみられるような上方に向かって広がる形態とは大きく異なり、意識的にその形態を志向しなければ成形できないものであり、高度な製作技術も必要とされる。製作にあたっては、この形態を志向する強い意識のもと、一定水準の製作技術を有した製作者によって手がけられたと推察され、地域間で技術的あるいは人的交流を想定することが可能である。

### ４　朝顔形埴輪について（図40）

前方部西斜面の墳丘裾平坦面で検出された11H－８は、円筒部と壷部に接合関係はないものの、出土状況より同一個体と判断できる資料であり、寺戸大塚古墳に樹立された二重口縁タイプの朝顔形埴輪の基礎資料となる。円筒胴部の連続する段には３方向の透孔が互い違いに穿孔されるこ

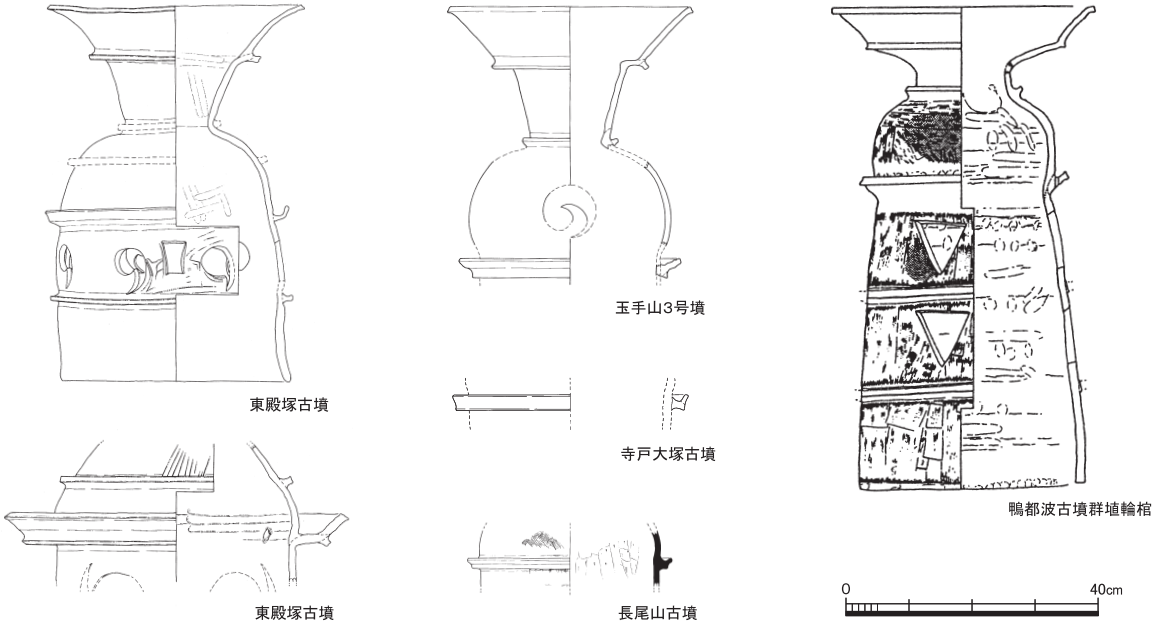



図40　受け口状突帯をもつ朝顔形埴輪（1：12）

とが明らかになり、6次調査出土の埴輪棺ST602①に加え、朝顔形埴輪の透孔穿孔方式に新たなバリエーションを追加することとなった。現状の類例では、透孔穿孔数が一段4孔配置である点が寺戸大塚古墳例と異なるものの、連続する段に方形透孔が穿孔される二重口縁壷タイプの朝顔形埴輪として、纒向遺跡坂田地区出土の朝顔形埴輪が形態的に最も近い個体といえる。[31)]

また、寺戸大塚古墳の朝顔形埴輪は、これまでの調査で通有の二重口縁壷タイプと直口壷タイプの2者が確認されているが、11H－8の出土により二重口縁壷タイプの壷部形態についてもより具体的となった。頸部はほぼ直立し、その上端は外側に強く屈曲して口縁部につながるもので、その形態は茶臼山型二重口縁壷にも類似性が見出される。他個体の破片資料をみると、頸部の傾きや口縁部の長さ、突帯の突出度などに個体差がみられるが、二重口縁壷タイプに属する破片が圧倒的に多く、直口壷タイプに属する確実な破片資料はほとんど見出せない。破片資料の出土量からみても、後者の樹立本数は前者のそれに比べれば限定的であったと考えられる。さらに、樹立位置が両者で明確に分けられていた可能性も含め、多様な形態の朝顔形埴輪が一古墳で共存することは朝顔形埴輪の成立や展開を考えるうえで重要である。

さらに10次調査では、朝顔形埴輪の円筒部と壷部の境界をめぐっていたと推定される受け口状突帯が出土した。断面L字形を呈し、朝顔形埴輪が器台と壷を一体化して製作されたことを示す痕跡器官と理解される。受け口状突帯は、東殿塚古墳[32)]（奈良県天理市）、玉手山3号墳[33)]（大阪府柏原市）、長尾山古墳[34)]（兵庫県宝塚市）、鴨都波古墳群埴輪棺[35)]（奈良県御所市）などに類例が求められる。これらは古墳時代の前期前半代に位置づけられる古墳であり、この突帯を伴う形態だけをみれば器台と壷が結合しているとはいえ、円筒部に器台的要素が残存していることから相対的に古い属性といえるが、各類例の個体差は大きく、比較検討は困難である。

## 5　埴輪製作組織について（図41）

寺戸大塚古墳の墳丘に樹立された円筒埴輪の数は、各平坦面の樹立間隔が一定でないため正確には算出できないが、おおよそ600～700本程度と推定される。これほどの数量の埴輪がどのような組織で製作されたのかという問題について、これまでにいくつかの検討が加えられている。

乙訓地域に相前後して築かれた同一系譜の前期古墳である元稲荷古墳と寺戸大塚古墳、妙見山古墳の出土埴輪に形態的および技術的特徴が異なっていることに着目した高橋克壽氏は、各古墳の造営ごとに埴輪製作者集団が組織され、終われば解体されるというような一回性の埴輪生産を読み取っている[36]。廣瀬覚氏は高橋氏の見解を受けて、元稲荷古墳、寺戸大塚古墳、妙見山古墳と古墳築造ごとに大和東南部からの影響を受けて埴輪生産がおこなわれた可能性を指摘する[37]。また、突帯の形態や突帯間隔設定技法、朝顔形埴輪の壺部成形などに差異がみられる個体間でハケ目パターンが共有されることから、単一的な工房から供給された可能性が高いと考えられている[38]。

新たな資料が加わった現状でも、上の先行研究で示された見解に対して特段の変更の必要はない。しかしながら、10・11次調査の出土埴輪にも埴輪製作・埴輪生産の問題に関する資料的位置づけをおこなっておく必要があるので、これら資料のハケ目パターンの抽出・照合を試みた。ただ

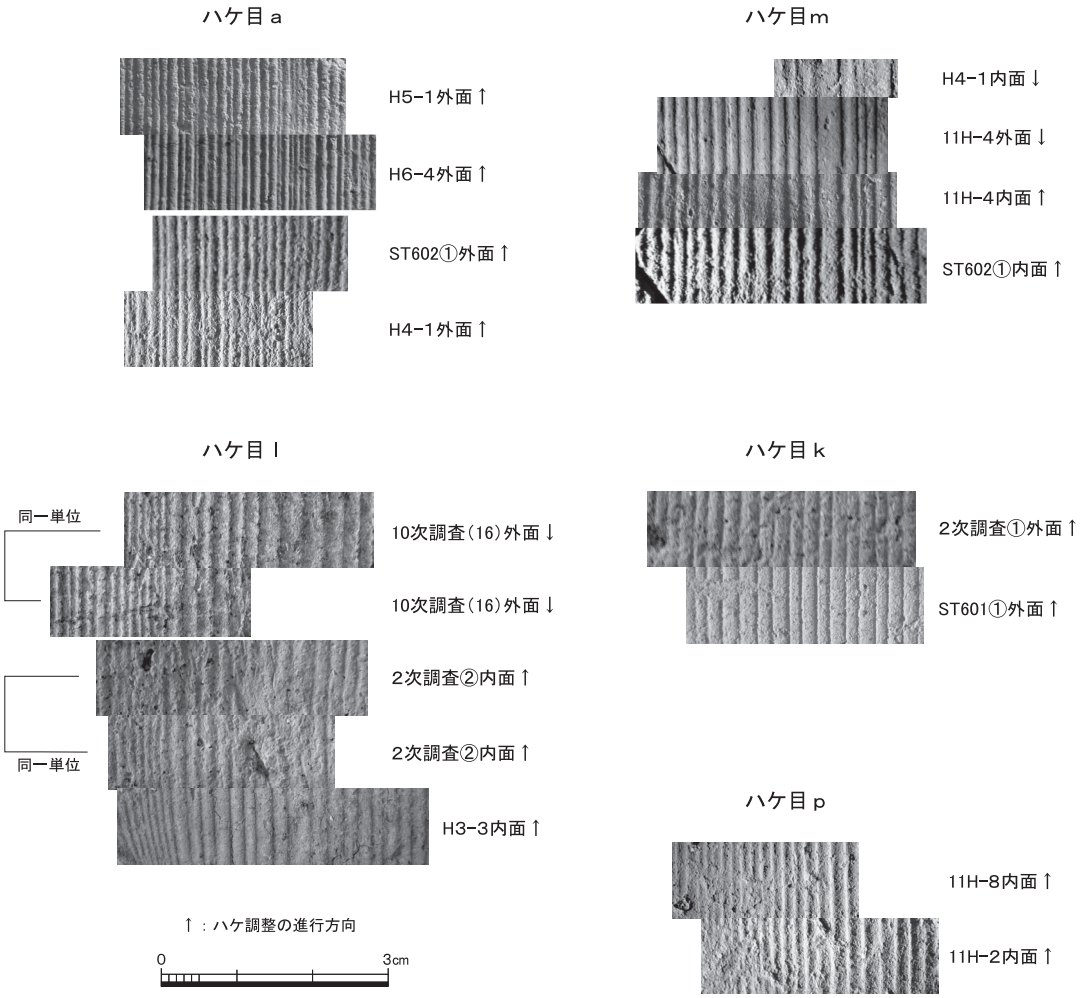



図41　個体間で共通するハケ目パターン（1：1）

し、こうした作業は資料の残存状態によるところが大きいため、その良好な資料を対象として６・７次調査の成果に付け加える形で検討をおこなった。すでに６・７次調査の埴輪でハケ目ａ～ｏの15に及ぶパターンが抽出され、そのうち４パターンが複数の個体間で共有されている（ハケ目ａ・ｍ・ｌ・ｋ）。今回、10・11次調査出土の埴輪から、新たにこれらに追加できる資料が確認できた（図41）。

ハケ目ａは、廣瀬氏も述べているように、Ｈ５－１とＨ６－４の間、ST602①とＨ４－１の間ではパターンが非常によく一致し、同一工具による可能性も十分に考えられるが、前者と後者は完全には一致しない。ただし、条線の凹凸や配列が類似するため、将来的な細分の可能性を残しつつ、ハケ目ａとして一括している。Ｈ５－１とＨ６－４は、器面調整方法や突帯間隔設定技法も共通することから同工品の可能性が高いが、ST602①およびＨ４－１とは二次調整を施す点で共通するものの、器面調整方法の細部や突帯間隔設定技法も異なるため、異なった製作者による製作と考えられる。

ハケ目ｍでは、ST602①とＨ４－１に加え、11H－４のハケ目パターンの一致も確認できた。幅３㎜程の太い条線と幅１㎜程の細い条線が近接する特徴的なハケ目パターンである。ST602①とＨ４－１ではハケ目ａとハケ目ｍの双方が確認され、ともに朝顔形埴輪に復元されること、ハケ目ａがST602①では主として二次調整用の工具として使用されている点などから、朝顔形埴輪の製作にあたって製作者間で工具が貸し借りされた可能性も指摘されている[39]。11H－４では外面、内面ともにハケ目ｍがみられたが、逆パターンであることが確認できた。両者の条線の配列はよく類似するが、条線一つ一つの幅や凹凸の深さ、断面形態にはわずかに違いが認められる。これはおそらくハケ工具各使用面の磨耗度の違いに起因するものと考えられ、工具の表裏が内外面の調整時に無意識に使い分けられた可能性が考えられる。

ハケ目ｌは、すでに提示されているように、ST602②や２次調査②、Ｈ３－３などで確認されているが、新たに10次調査出土の円筒胴部片（図25－16）でも認められた。やや太めの条線が並ぶなか、８㎜の範囲に７本の細かな条線が走る特徴的なパターンである。太い条線の部分に関して言えば、10次調査出土資料と２次調査②・Ｈ３－３は完全に一致しない。これは両者が逆パターンであるため、工具使用面の磨耗度の違いに起因するのかもしれない。

ハケ目ｋでは、ST601①と２次調査①のパターンが一致する。両者は底部径あるいは胴部径が大きく異なるうえ、突帯の形態の違いも顕著であり、同一製作者による製品とは到底考えられない。ハケ目パターンも条線の配列は類似するが、条線の凹凸の深さに違いがある。仮に一製品一工人とした場合、偶然同じ工具を共用した可能性もないわけではないが、同一木材から切り出された兄弟工具が使用されていたうえでの工具端部の磨耗度の違いが反映された蓋然性が高い。

さらに、11H－２と11H－８でパターンの一致を認めた。これを仮にハケ目ｐとする。突帯の形態や透孔の細部形態、器面調整方法といった属性も共通することから、両者は同工品である可能性が高い。したがって、11H－２も朝顔形埴輪となる可能性が考えられる。

以上のように、10次・11次調査で出土した埴輪にも、共通するハケ目パターンを持つ個体が複

数確認できた。しかし、あくまでハケ目の配列パターンが共通する、あるいは類似するというレベルであって、必ずしも同一工具による調整の結果としての共通のハケ目とは限らないことに留意する必要がある。さらに、一個体において、明らかに複数の調整工具を用いて製作されている例が散見された（２次調査②、６次Ｈ３－３、11Ｈ－５）。いずれも底部外面において粗いタテハケの上から細かいタテハケが施されている。工程ごとに分業されていたことによるものなのか、同一の製作者が複数の工具を使い分けていたのかは判別できないが、ハケ目パターンを用いた分析をおこなううえで注意すべき点である。

ハケ目パターンが複数の個体で共有される場合、これらが同工品か否か、さらにハケ工具が共用工具か専用工具かといった問題は、他の属性を含めたより詳細で精緻な分析を経て判断されるべきであるが、限られた出土資料の中でも一定の割合で共通するハケ目パターンが確認されることは重要である。つまり、突帯形態や器面調整方法などの各属性の違いにより、明らかに異なる製作者によって製作されたと判断できる個体間においてハケ目パターンが共通することは、工具の貸し借りあるいは兄弟工具を使用するような比較的まとまりのある製作者間距離で埴輪製作が実施されていたことを示している。

加えて、寺戸大塚古墳の埴輪には、透孔の形や穿孔方式、器面調整方法などの属性にいくつかのバリエーションがある一方で、突帯間隔が16㎝前後に統一されている、普通円筒埴輪の口縁部形態は外反口縁である、上方にすぼまる形態を呈する個体が高い割合で含まれる、各個体の胎土に大きな違いが認められない、といった大きな共通項もまた複数存在する。

以上をまとめると、寺戸大塚古墳の埴輪は、一部では調整工具に近しい関係性を有した製作者組織によって、形態に対する一定の共通認識を保持できるような密接した環境下で製作された、非常に規格性の高い埴輪群と評価することができる。

### ６　編年的位置づけと系統関係（図42）

寺戸大塚古墳の埴輪は、副葬品編年と整合できる古墳の資料として、すでに埴輪編年研究の俎上に上げられている[40]。そのなかで，山城地域の古墳から出土した円筒埴輪を基軸に構築された川西宏幸氏の円筒埴輪編年では、円筒埴輪の諸特徴からⅠ～Ⅴ群に分類し、これを時期差と理解してⅠ～Ⅴ期に区分しており、寺戸大塚古墳はⅠ期の指標古墳として挙げられている。

近年提示されている川西氏の埴輪編年Ⅰ群の細分案をみると、鐘方正樹氏および埴輪検討会共通編年では、特殊器台形埴輪を含めた、一段あたりの透孔の穿孔数が３孔以上の埴輪群をⅠ群とし、その存続時期をⅠ期としたうえで、Ⅰ期を１～５段階に細分し、寺戸大塚古墳の埴輪をその４段階に含めている[41]。廣瀬覚氏の編年案でも、一段中の透孔が３孔以上の埴輪群の存続時期をⅠ期と定め、普通円筒埴輪出現をⅠ期の上限として古相・中相・新相の３つの段階に区分して、寺戸大塚古墳の埴輪をⅠ期中相に当てている[42]。川西氏を含む３者の埴輪編年では、特殊器台形埴輪をⅠ群に含むか否かを除けば、埴輪群抽出の基準あるいは重視する属性は異なるものの、結果的に一段あたりの透孔の穿孔数が３孔以上の埴輪群という同様の埴輪群をⅠ群として抽出している。

これら従来の編年観に基づきつつ、上で示したように、寺戸大塚古墳の円筒埴輪を構成する属性

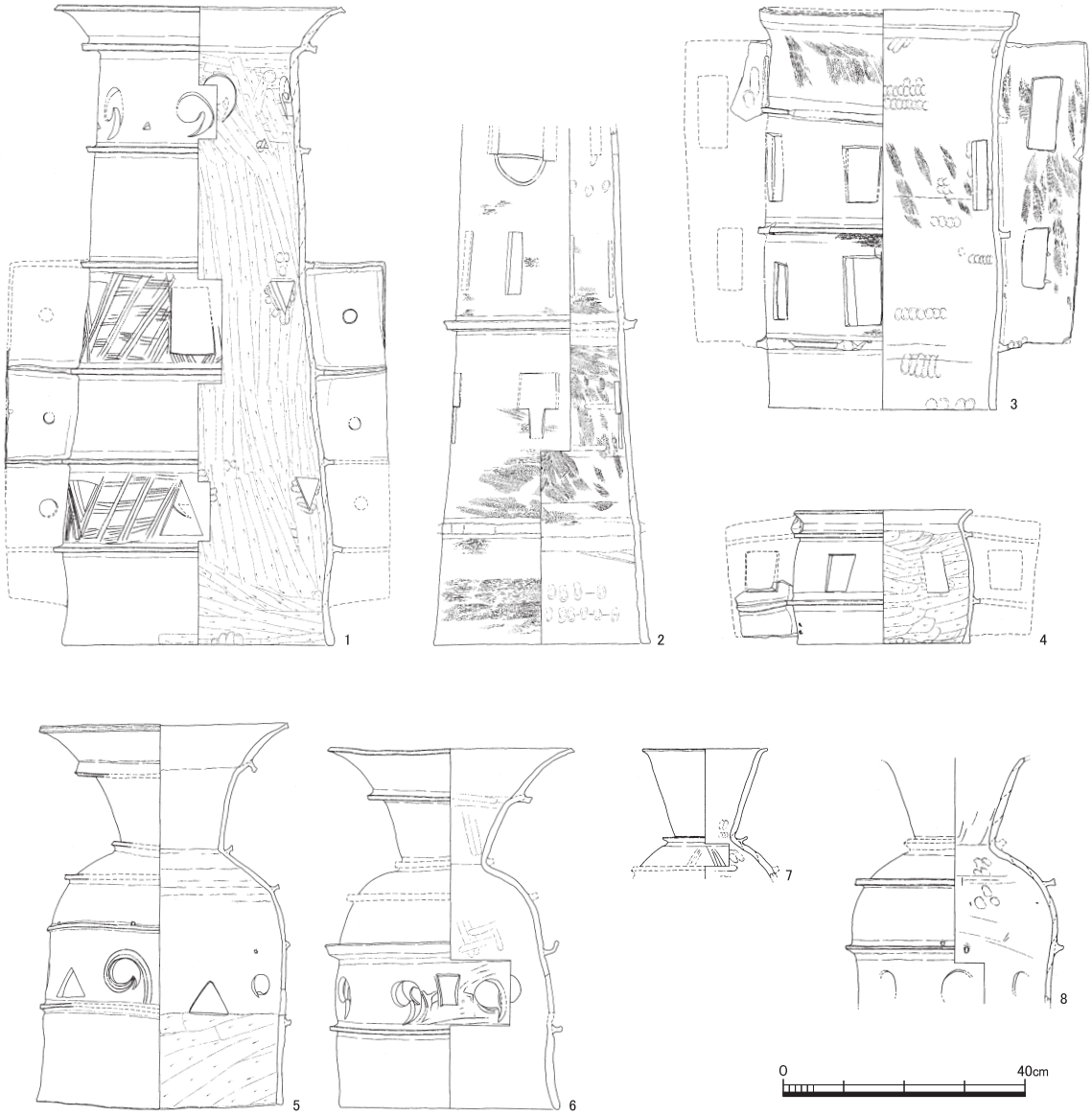



図42　東殿塚古墳出土円筒埴輪（1：12）

のうち、口縁部形態やプロポーションなどの特徴的な属性を類例にもつ古墳と比較検討を試みれば、寺戸大塚古墳の埴輪は各氏編年のおおむねⅠ期中頃、古墳時代前期中葉の前半段階におさまると想定される。

さらに、後円部、前方部ともに埋葬施設が調査されている寺戸大塚古墳では、腕輪形石製品や鉄製品とともに、銅鏡が後円部で２面、前方部で３面出土している。これらのうち三角縁神獣鏡は後円部で中国鏡２面、前方部では倭製鏡１面という出土構成であり、後円部埋葬施設は盗掘を受けており問題を残すが、副葬品編年においても古墳時代前期前半でも中頃に近い年代が与えられる[43]。今後は、副葬品編年と埴輪編年の擦り合わせを経て、古墳時代前期における詳細な時期比定が必要とされる[44]。

さて、寺戸大塚古墳は乙訓地域で初めて規格性の高い円筒埴輪の多量生産・多量配列を達成している点が重要で、かつ相前後する元稲荷古墳や妙見山古墳との間に製作技術のスムーズな継承

や系譜関係を見出しにくいことが特徴として挙げられる。こうした状況から、築造ごとに他地域からの影響があったとする先行研究の見解を追認できるが、そのなかで埴輪製作において影響関係にあったと推定できる資料として、現状ではやはり東殿塚古墳出土の円筒埴輪を挙げることができる[45]。

東殿塚古墳では墳丘各平坦面のほか、前方部西側墳丘裾平坦面の一角にある突出部にも、多様な形態の円筒埴輪がまとまって樹立されていた（図42）。これらは寺戸大塚古墳例と比べて、巴形や三角形の透孔を持ち、都月系文様が施されている点など、より古い属性を含んでいる一方で、上方に向かってすぼまる形態の円筒埴輪や方形透孔のみで構成される円筒埴輪、肩部直下に受け口状突帯をもつ朝顔形埴輪、直口壷タイプの朝顔形埴輪があるという点は寺戸大塚古墳との共通要素とみなしうる。

型式的なヒアタスが小さくなく、直接的な影響を見込むことは難しいが、こうした各属性の共通性から、寺戸大塚古墳では東殿塚古墳の系譜を引く円筒埴輪が統制のとれた体制下で多量に生産されたと評価できるだろう。〔宇野〕

## （5）課題と展望

### 1　調査成果と課題の整理

これまでに実施された寺戸大塚古墳の一連の調査で、後世の攪乱が及んでいる箇所を除き、竹の土入れに伴う分厚い盛土の下層において墳丘面が良好に残存していることが確認され、葺石や埴輪列などの遺構が検出された。

重要な成果として、まず墳丘形態が明らかになった点が挙げられよう。つまり、従来、現状の墳丘や測量図から柄鏡形の前方後円墳が読み取られていたが、発掘調査を経たことで、前方部両側面の平面形がわずかに内湾する撥形を呈することが判明した。この調査成果に基づき、平面的・立体的な墳丘形態復元案を提示したが、墳丘の残存状況から不確定要素の多い感が否めない。近年の前期古墳研究では、墳丘形態から古墳編年の構築や古墳間・地域間交流のあり方に迫るという墳丘形態の型式学的・系統的検討が精力的に進められている。こうした研究に寺戸大塚古墳の墳丘形態がどう位置づけられ、どう評価されるか、今後の課題である。

また、出土埴輪の位置づけや埴輪列の復元ついても、これまでの成果を踏まえつつ、検討可能な資料に基づいて検討を試みた。寺戸大塚古墳の埴輪群には、製作者個人に起因する微細な差異はもちろん内包されるものの、埴輪の形態や規格、基本的な技術水準などの大きなレベルでは、非常に統一性のある個体群として評価できる。これにより、製作する埴輪の情報を共有できるような、まとまりのある製作者集団によって製作されたと復元した。編年的な位置づけは、これまで同様、円筒埴輪編年のⅠ期中頃、古墳時代前期中葉の前半段階と推定される。埴輪列は、後円部後端墳丘裾平坦面から出土した資料の検出高や属性分析などに基づき、器高の統一を図ることを目的に、埴輪底部を欠損させたり、掘形を設けたりすることで高さを調整して、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪が樹立されたと復元した。

ただし、これらの検討結果は古墳全体からみればごく限られた量の資料によって求められたものであり、かつ遺構、遺物の遺存状況に左右されるところも大きい。今後は、概要のみの報告にとどまっている４次・５次調査の成果をも含めて再考し、膨大な情報量をもつ資料を整理したうえで、より普遍的な見解を導き出す必要があるだろう。埋葬施設や副葬品についても同様である。

周辺の古墳にも視野を広げれば、向日丘陵古墳群を構成し、同一系譜の首長墳とされる五塚原古墳、元稲荷古墳、妙見山古墳との墳墓要素の比較検討もまた重要課題の一つである。検討を通じて、同一系譜内の古墳間関係だけでなく、首長ごとの活動、交流といった周辺地域間との関連もまた明らかになることが期待される。さらに、近年、各古墳の調査が進展したことで、乙訓地域全体の古墳の動向についても再度、検討する時期を迎えている。各古墳の築造時期の再検討や首長系譜の抽出、新規発見された古墳の位置づけなど、集落遺跡の動向を踏まえたうえで、さらなる深化を目指したい。

### ２　寺戸大塚古墳の歴史的評価

寺戸大塚古墳は、五塚原古墳、元稲荷古墳とともに全長90ｍ代の同規模墳という強い紐帯で結ばれた首長墳系列を形成する一方で、古墳づくりに関する諸要素のうち墳丘形態や埋葬施設、埴輪など、先行する五塚原古墳や元稲荷古墳からの、さらには後続する妙見山古墳への、技術や情報の継承といった直接的な系譜関係を想定できない要素が多く、各古墳の築造にあたってはそれぞれ他地域から影響を受けたと推測される。そして、その第一候補としては、やはり古墳時代前期にあって大王墳を含む大型古墳の一大造営地であった大和東南部が挙げられる。

古墳時代前期は、当該期の政治的中心地と目される大和地域から、在地の首長層は従属や奉仕の引き換えに地域支配の承認を受ける形で地域運営をおこなっていたと考えられる時期であり[46]、首長墳系列内で墳墓要素の継承が希薄である状況は、古墳づくりに関わる情報が首長墳の築造ごとに大和地域から伝達されることによって更新されたという、中央と地方とのあり方の一形態を示しているにほかならない。向日丘陵古墳群は、こうした畿内の一地域における系列的な前期古墳の築造状況を端的に示す古墳群として理解されることが可能で、その一翼をなす寺戸大塚古墳は今後の古墳研究においても非常に重要な位置を占めると評価できよう。

### ３　今後の保存方針

これまでもみてきたように、寺戸大塚古墳が全国的にみても古墳時代前期を代表する前方後円墳で、かつ学史的にも著名な古墳であることに論をまたない。さらに、向日丘陵古墳群を構成する一首長墳として、乙訓の首長系譜論を語る上で欠くことのできない古墳でもある。今後、首長系譜研究の先駆けとなった古墳群として、寺戸大塚古墳だけでなく乙訓地域の首長墳群を構成する他古墳もまた群として後世に保存されることが望まれる。

現在、寺戸大塚古墳の墳丘のうち、京都市側の墳丘西半は公園用地として京都市が所有することで一定の保存が図られている一方、向日市側の墳丘東半のうち後円部を除く大半は竹林を営む個人所有地で、筍栽培の土入れ作業による墳丘の損壊が毎年積み重ねられており、早急な保存策を要す状況である。

向日市および京都市によって実施された６～11次調査によって、墳丘範囲を確認すると同時に古墳の保存に必要な範囲を把握することができた。今後、向日市と京都市の２市にまたがる古墳の保存に向けて、京都府ならびに２市の連携、保存施策の共有は不可欠である。まずは国史跡の指定を図ったうえで、公有地化を目指すことになる。その後の活用に向けた施策については、寺戸大塚古墳のこれまでの調査の歴史、現在まで古墳の保存に携われた諸氏ならびに諸機関の御尽力を念頭に置きつつ、寺戸大塚古墳が周辺住民のみならず、市民、国民に広く愛されるとともに、その活用が文化財に対する理解向上に資するよう、志していかなければならない。〔宇野〕

註

１）　寺戸大塚古墳を除く向日丘陵古墳群に関する調査文献・基本文献は以下のとおりである。

**[五塚原古墳]**

梅原末治「寺戸五塚原附近ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第五冊　京都府　1923年

和田晴吾「向日市五塚原古墳の測量調査より」『王陵の比較研究』　京都大学文学部考古学研究室　1981年

『五塚原古墳第1・2次発掘調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告第10冊　2003年

向日市教育委員会『五塚原古墳第３次調査現地説明会資料』　2013年

立命館大学文学部考古学・文化遺産学専攻『五塚原古墳第４次調査現地説明会資料』　2013年

**[元稲荷古墳]**

梅原末治「向日町向神社附近ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊　京都府　1920年

近藤喬一・都出比呂志「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号　史学研究会　1971年

西谷眞治『元稲荷古墳』　西谷眞治先生還暦祝賀会　1985年

向日市教育委員会「長岡宮跡第455次・元稲荷古墳第３次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第79集　2008年

向日市教育委員会「長岡宮跡第462次・元稲荷古墳第４次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第82集　2009年

向日市教育委員会「長岡宮跡第469次・元稲荷古墳第５次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第84集　2010年

向日市教育委員会「長岡宮跡第477次・元稲荷古墳第６次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第89集　2011年

向日市教育委員会「長岡宮跡第479次・元稲荷古墳第７次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第89集　2011年

向日市教育委員会「長岡宮跡第487次・元稲荷古墳第８次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第96集　2013年

向日市教育委員会「長岡宮跡第491次・元稲荷古墳第９次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第96集　2013年

向日市教育委員会「長岡宮跡第497次・元稲荷古墳第10次発掘調査略報」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第96集　2013年

[妙見山古墳]
梅原末治「大枝村妙見山古墳ノ調査」『京都府史蹟勝地調査会報告』第三冊　京都府　1922年
梅原末治「向日町妙見山古墳」『京都府文化財調査報告』第廿一冊　京都府教育委員会　1955年
近藤喬一・都出比呂志「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号　史学研究会　1971年
梅本康広「妙見山古墳の行方～向日丘陵古墳群とその周辺古墳の基礎研究（３）～」『年報　都城』財団法人向日市埋蔵文化財センター　2003年

２）　都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号史学篇　大阪大学文学部　1988年

３）　古川　匠「桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（１）～（５）」『京都府埋蔵文化財情報』第116～119・122号　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2011～2013年

４）　(a) 向日市文化資料館『向日丘陵の前期古墳』開館20周年記念特別展示図録　2004年
(b) 京都市文化財保護課『平安京以前－古墳が造られた時代－』京都市文化財ブックス第26集　2012年

５）　６次調査時に後円部頂上部に設置された４級基準点の４PT－３ポイント（旧日本測地系X=－116139.327、Y=－28166.146、標高83.949ｍ）。

６）　現地での作業や整理作業に際しては地元住民をはじめ、多くの方々から御協力並びに有益なご助言を頂いた。本来であればすべての方々の御芳名を記すべきところではあるが、紙幅の制限もあるため、主な方々を以下に記して感謝の意を表します。（五十音順、敬称略）
石崎善久、一瀬和夫、伊藤聖浩、梅本康広、河内一浩、岸岡貴英、北垣聰一郎、高 正 龍、古閑正浩、阪口英毅、佐々木憲一、笹栗　拓、澤田秀実、鈴木一有、高野陽子、高橋克壽、玉井　功、玉村登志夫、都出比呂志、中島皆夫、禰宜田佳男、原田昌浩、広瀬和雄、廣瀬　覚、藤井康隆、古川　登、松尾史子、宮原晋一、三好孝一、森岡秀人、森下章司、吉井秀夫、米田敏幸、渡辺　博、和田晴吾

７）　７次調査５ｂトレンチで検出された第２段斜面の裾部との位置関係から、第１段斜面の本来の墳丘傾斜角度は20°～23°と考えられる。７次調査の成果からは13～17°と考えられており、今回の調査成果からの復元値とやや開きがある。

８）　９次調査１トレンチで、墳丘裾から約５ｍ西の地点で検出された土坑２は、東西2.2ｍ、南北1.3ｍ、深さ0.7ｍを測り、転落した葺石がまとめて廃棄されていた。

９）　高橋美久二「宝菩提院廃寺」『長岡京古瓦集成』向日市埋蔵文化財調査報告書　第20集　向日市教育委員会1987年

10）　岸本直文「メスリ山古墳と政祭分離王政」『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第３冊　大阪市立大学日本史研究室　2008年

11）　後円部３段、前方部２段の段築については『向日市史　上巻』（都出1983）に記述されるが、これは前方部高が後円部高よりもかなり低いことに基づいたものと思われる。一方で、後円部３段、前方部３段の復元案も提出されている（豊岡卓之「奈良盆地の前期前方後円墳の墳形類型と山城盆地への波及」『考古学に学ぶ（Ⅲ）』同志社大学考古学シリーズⅨ　同刊行会　2007年）。豊岡氏による復元は墳丘各所で確認された平坦面の標高と傾斜に基づき、梅原氏の２次調査報告の記述を採用したうえで、推定される前方部頂のレベルが後円部第２段平坦面レベルより高いことから、前方部に３段目を設定している。

しかし、この想定されるレベル差は前方部埋葬施設付近で１ｍ前後であり、前方部頂平坦面が鞍部から前方部前端に向かってわずかにせり上がるとすれば、後円部第２段平坦面と同一面を形成する後円部３段、前方部２段の復元に矛盾はない。

加えて、古墳時代前期における大王墳の墳丘形態の変遷や出土埴輪に基づく編年的位置により、寺戸大塚古墳は後円部３段、前方部３段の定型化した前方後円墳の出現以前に築造されたと考えられる点や、前方部横断面図（図29）で復元される墳頂平坦面幅と墓坑幅の復元値との関係より、前方部３段では墳頂平坦面幅が著しく狭くなり、墓坑掘削や埋葬などに必要なスペースが十分に確保できないという問題が生じる点などを考慮に入れれば、後円部３段、前方部２段の墳丘復元案の方が妥当性は高いと考えられる。

12）岸本直文「畿内大型前方後円墳の築造規格の再検討」『人文研究』第52巻第２分冊　大阪市立大学文学部　2000年

13）７次調査報告では共通の基準点に基づき、５次調査成果のレベルを補正している（向日市教委2000 p.73）。

14）橋本清一「京都府乙訓地方における古墳の葺石石材」『長岡京古文化論叢１』 中山修一先生古希記念事業会　1986年

15）向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集　2000年

16）高橋克壽「古墳の葺石」『文化財論叢Ⅲ』 独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　2002年

17）（a）伝田郁夫「寺戸大塚古墳埴輪小考」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集　向日市教育委員会　2000年

（b）廣瀬　覚「寺戸大塚古墳における埴輪生産組織復原にむけての予察－第６・７次調査出土埴輪の総括にかえて－」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集　向日市教育委員会　2000年

18）ハケ目パターン分析の詳細については後述する。

19）前掲、註17（ｂ）に同じ。

20）赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』第90号　古代学研究会　1979年

21）７次調査で出土したＨ５－１も一段４孔配置の可能性が指摘されているが、実見した結果、やや不均等に穿孔された３孔配置と判断される。

22）茨木市『将軍山古墳群Ⅰ－考古学資料調査報告集１－』新修茨木市史史料集８　2005年

23）安村俊史「松岳山古墳群の埴輪」『柏原市立歴史資料館館報』第16号　柏原市立歴史資料館　2004年

24）長野市立博物館『はにわの世界』開館１周年記念特別企画展　1982年

25）ただし、特殊器台の宮山型が出土した中山大塚古墳（奈良県天理市）にも外反口縁があることを含めれば、前期前葉から存在していたといえる（奈良県立橿原考古学研究所『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊　1996年）。

26）天理市教育委員会『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第７集　2000年

27）竹谷俊夫・廣瀬　覚「天理西山古墳外堤出土の埴輪棺墓について」『天理参考館報』第13号　天理大学附属天理参考館　2000年

28）置田雅昭「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第３号　日本考古学会　1977年

29）國下多美樹「集落からみた寺戸大塚古墳」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集　向日市教育委員会　2000年

30）山陰地域からの影響の可能性については、高橋克壽氏よりご教示いただいた。

31）　桜井市教育委員会『纒向遺跡発掘調査報告書－巻野内坂田地区における調査報告－』桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書第28集　2007年
32）　前掲、註26に同じ。
33）　柏原市教育委員会『玉手山古墳群の研究Ⅰ－埴輪編－』　2001年
34）　大阪大学文学研究科考古学研究室『長尾山古墳発掘調査報告書』　2010年
35）　御所市教育委員会『鴨都波１号墳調査概報』　学生社　2001年
36）　高橋克壽「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会　1994年
37）　廣瀬　覚「寺戸大塚古墳出土の埴輪をめぐって」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第49集　向日市教育委員会　1999年
38）　前掲、註17（b）に同じ。
39）　前掲、註17（b）に同じ。
40）　（a）川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会　1978年
（b）都出比呂志「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室　1981年
41）　（a）鐘方正樹「前期古墳の円筒埴輪」『堅田直先生古希記念論文集』同刊行会　1997年
（b）鐘方正樹「古墳時代前期の円筒埴輪編年と玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究－埴輪編－』柏原市教育委員会　2001年
（c）埴輪検討会『埴輪論叢』第４・５号　2003年
42）　廣瀬　覚「前期古墳の埴輪」『前期古墳の変化と画期』関西例会160回シンポジウム　考古学研究会関西例会　2009年
43）　小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』1956年
44）　（a）森下章司「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第89巻第１号　日本考古学会　2005年
（b）考古学研究会関西例会『前期古墳の変化と画期』関西例会160回シンポジウム　2009年
（c）考古学研究会例会委員会『前期古墳の変化と画期・古墳時代集落研究の再検討』考古学研究会例会シンポジウム記録８　考古学研究会　2012年
45）　前掲、註26に同じ。
46）　和田晴吾「古墳文化論」『日本史講座』第１巻　東京大学出版会　2004年

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 西森正晃・高橋　潔・津々池惣一・柏田有香・東　洋一・南　孝雄・近藤奈央・布川豊治・宇野隆志 |
| 編集機関 | 公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 |
| 所在地 | 〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521 |
| 発行機関 | 京都市文化市民局 |
| 所在地 | 〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108 |
| 発行年月日 | 西暦2014年３月31日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平安宮大極殿院跡聚楽遺跡（へいあんきゅうだいごくでんいんあと じゅらくいせき） | 京都市上京区千本通下立売下る小山町908-51（きょうとしかみぎょうくせんぼんどおりしもたち うりさがるこやまちょう） | 26100 | 2<br>237 | 35度<br>01分<br>09秒 | 135度<br>44分<br>36秒 | 2013/４/１～<br>４/19 | 66㎡ | 個人住宅 |
| 平安宮朝堂院跡聚楽遺跡（へいあんきゅうちょうどういんあと じゅらくいせき） | 京都市中京区聚楽廻南町41-２（きょうとしなかぎょうくじゅらくまわりみなみまち） | 26100 | 2<br>237 | 35度<br>00分<br>53秒 | 135度<br>44分<br>34秒 | 2013/９/17～<br>９/25 | 35㎡ | 診療所 |
| 平安宮右近衛府跡鳳瑞遺跡（へいあんきゅうこんのえふあと ほうずいいせき） | 京都市上京区御前通下立売上る二丁目仲之町294（きょうとしかみぎょうくおんまえどおりしもたち うりあがるにちょうめなかのちょう） | 26100 | 2<br>236 | 35度<br>01分<br>19秒 | 135度<br>44分<br>11秒 | 2013/５/20～<br>５/31 | 51㎡ | 共同住宅 |
| 平安京右京六条四坊八町跡西京極遺跡（へいあんきょううきょうろくじょう しぼうはっちょうあと にしきょうごくいせき） | 京都市右京区西院月双町88-１（きょうとしうきょうくさいいんつきそうちょう） | 26100 | 1<br>931 | 34度<br>59分<br>53秒 | 135度<br>43分<br>18秒 | 2013/１/18～<br>３/19 | 252㎡ | 個人住宅 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安宮大極殿院跡聚楽遺跡 | 宮殿跡<br>集落跡 | 平安時代 | 土取穴、整地層、溝、土坑、ピット | 土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品 | 平安宮造営に伴う土取穴、平安時代前期から末期までの大庭整地層を確認。 |
| 平安宮朝堂院跡聚楽遺跡 | 宮殿跡<br>集落跡 | 江戸時代 | ― | 土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦 | 朝堂院の正門である応天門基壇推定地を調査したが遺構・遺物とも検出できなかった。 |
| 平安宮右近衛府跡鳳瑞遺跡 | 宮殿跡<br>集落跡 | 平安時代 | 築地基底部、土器溜り、溝 | 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦 | 宮西面築地の基底部を検出した。 |
| 平安京右京六条四坊八町跡<br>西京極遺跡 | 都城跡<br>集落跡 | 古墳時代<br>奈良時代<br>平安時代 | 竪穴建物、掘立柱建物、溝、ピット、柱列 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、玉類、素文鏡 | 古墳時代中～後期の竪穴建物を多数検出した。奈良時代の掘立柱建物を検出した。 |

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 西森正晃・高橋　潔・津々池惣一・柏田有香・東　洋一・南　孝雄・近藤奈央・布川豊治・宇野隆志 |
| 編集機関 | 公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 |
| 所在地 | 〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521 |
| 発行機関 | 京都市文化市民局 |
| 所在地 | 〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108 |
| 発行年月日 | 西暦2014年３月31日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡（へいあんきょうきょうくじょういちぼうじゅうにちょう・さいじあと） | 京都市南区唐橋花園町（きょうとしみなみくからはしはなぞのちょう）9－8、9－9、9－11 | 26100 | 1 | 34度58分49秒 | 135度44分21秒 | 2013/11/18～12/10 | 114㎡ | 事務所 |
| 中臣遺跡（なかとみいせき）（87次調査）中臣十三塚（なかとみじゅうさんつか） | 京都市山科区西野山中臣町（きょうとしやましなくにしのやまなかとみちょう）71－37 | 26100 | 632<br>632-2 | 34度58分14秒 | 135度48分15秒 | 2013/10/１～10/10 | 30㎡ | 個人住宅 |
| 岩倉中在地遺跡（いわくらなかざいちいせき） | 京都市左京区岩倉中在地町（きょうとしさきょうくいわくらなかざいちちょう）12、12－７ | 26100 | 355 | 35度05分11秒 | 135度47分08秒 | 2013/11/６～11/28 | 264㎡ | 共同住宅 |
| 方広寺跡（ほうこうじあと）六波羅政庁跡（ろくはらせいちょうあと）法住寺殿跡（ほうじゅうじどのあと） | 京都市東山区茶屋町地内（きょうとしひがしやまくちゃやちょうちない） | 26100 | 541<br>540<br>546 | 34度59分29秒 | 135度46分24秒 | 2013/10/１～11/21 | 237㎡ | 範囲確認 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡 | 都城跡 | 平安時代 | 築地基底部、犬行、溝、落込み、集石 | 土師器、須恵器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、凝灰岩 | 西寺の東築地基底部および内溝、皇嘉門大路西側溝などを検出した。 |
| 中臣遺跡（87次調査）中臣十三塚 | 集落跡<br>古墳 | － | － | － | 遺構・遺物とも検出できなかった。 |
| 岩倉中在地遺跡 | 散布地 | 平安時代～鎌倉時代 | 建物、柱列、土坑、溝 | 土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦 | 平安時代中期の掘立柱建物、鎌倉時代の溝、柱列を検出した。 |
| 方広寺跡<br>六波羅政庁跡<br>法住寺殿跡 | 寺院跡<br>都城跡・邸宅跡<br>寺院跡・離宮跡 | 安土桃山時代～江戸時代前期 | 方広寺大仏殿基壇、大仏殿壷地業 | 焼締陶器、瓦、銭貨 | 秀吉・秀頼２時期の大仏殿基壇東辺を確認。礎石据え付けのための壷地業と大仏殿建設時の足場ピットを検出。 |

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 西森正晃・高橋　潔・津々池惣一・柏田有香・東　洋一・南　孝雄・近藤奈央・布川豊治・宇野隆志 |
| 編集機関 | 公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 |
| 所在地 | 〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521 |
| 発行機関 | 京都市文化市民局 |
| 所在地 | 〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108 |
| 発行年月日 | 西暦2014年３月31日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 山科本願寺跡左義長町遺跡（やましなほんがんじあと さぎちょうちょういせき） | 京都市山科区東野舞台町20、20－４（きょうとしやましなくひがしのぶたいちょう） | 26100 | 626<br>628 | 34度<br>58分<br>44秒 | 135度<br>48分<br>32秒 | 2013/10/28～<br>11/25 | 150㎡ | 宅地造成 |
| 山科本願寺南殿跡（やましなほんがんじ なんでんあと） | 京都市科区音羽伊勢宿町26－３（きょうとしやましなくおとわいせじくちょう） | 26100 | 629 | 34度<br>59分<br>02秒 | 135度<br>49分<br>21秒 | 2013/９/24～<br>10/31 | 143㎡ | 範囲確認 |
| 寺戸大塚古墳（てらどおおつかこふん） | 京都市西京区大枝南福西町２丁目（きょうとしにしきょうくおおえみなみふくにしちょう） | 26100 | 1005 | 34度<br>57分<br>22秒 | 135度<br>41分<br>18秒 | 2012/７/30～<br>10/５ | 240㎡ | 範囲確認 |
| | | | | | | | | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 山科本願寺跡<br>左義長町遺跡 | 寺院跡<br>集落跡 | 平安時代 | 建物、溝、土坑 | 土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦質土器、石製品、鉄製品 | 11世紀後半の遺構が遺存していたことが判明した。鉄製品の製作工房跡を伴う。 |
| 山科本願寺<br>南殿跡 | 邸宅跡 | 室町時代後期 | ピット、柱穴、土坑 | 施釉陶器、瓦器、瓦 | 山科本願寺南殿跡の外郭にあたるが、顕著な遺構は検出できなかった。 |
| 寺戸大塚古墳 | 古墳 | 古墳時代 | 墳丘、墳丘平坦面、葺石、埴輪 | 円筒埴輪 | 後円部後端西半部・前方部西斜面の調査を行い葺石や埴輪列を検出し、墳丘裾を確認した。 |
| | | | | | |